大阪府埋蔵文化財調査報告2003－2

木の本遺跡

2004年3月

大阪府教育委員会

木の本遺跡

2004年3月

大阪府教育委員会

木の本遺跡から生駒山を望む

弥生時代前期遺構面

はじめに

河内平野の形成は新しいが、その地中には未だに知られていない数多くの遺跡が埋もれています。その実態が明らかになりだしたのは、1976年から10年あまりにわたって実施された近畿自動車道天理～吹田線の発掘調査以来のことです。

木の本遺跡は河内平野南端の八尾市に所在し、過去に行われた平野川改修に伴う発掘調査などによって、古墳時代前期を主体とする集落遺跡として知られてきました。

2000年以降、大阪府において、中部広域防災拠点整備事業計画が本格化することとなりました。事業地域は木の本遺跡でも東端にあたり、また、弥生時代前期の拠点的な集落として知られている田井中遺跡の隣接地にあたります。今回の調査対象地域においても、それと関連する遺構、遺物の発見が予想されていました。大阪府教育委員会は大阪府総務部と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、試掘調査を経て、2000～2001年にかけて発掘調査を実施しました。

その結果、弥生時代前期を主体とする集落の一部が発見され、過去に田井中遺跡で発見された集落と関連の深いことがわかりました。数多くの遺構や遺物が発見されましたが、その中でも流路などから出土した土器群、木器群は多量でかつ良好な一括資料です。多様な要素のものが含まれており、弥生時代前期の河内を考えるうえで、重要な手がかりになるものです。

調査に関しては、大阪府総務部、大阪防衛施設局をはじめとする関係機関はもとより、地元の皆様方にも多大なご協力をいただきました。衷心より感謝の意を表します。今後とも文化財の保護・活用について一層のご配慮、ご支援をお願いしたく存じます。

平成16年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長　向井正博

例　　言

1．本書は大阪府八尾市空港１丁目地内における木の本遺跡発掘調査報告書である。

2．調査は、中部広域防災拠点整備事業に伴う事前調査として実施した。

3．調査は大阪府総務部防災室より委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。

4．調査に要した経費は大阪府総務部が負担した。

5．調査の実施日程・担当・調査区は以下の通りである。

試掘調査　1998年11月17日～1998年11月26日
　　岩崎二郎

１次調査　2000年３月１日～2001年３月30日
　　岩崎二郎・横田　明　　Ａ調査区

２次調査　2001年３月６日～2001年12月21日
　　横田　明　　Ｂ―１～４調査区

6．作図は基本的に写真測量によったが、手実測による記録作成も随時行った。写真測量では１／20または１／50と１／100の縮尺で作図を行った。

7．写真測量については、１次調査については株式会社かんこう、２次調査については大阪測量株式会社に委託した。撮影フィルムについては上記のそれぞれの会社において保管している。調査現場での遺構や土層などの写真撮影については、調査担当者が行った。

8．本書に掲載した遺物写真の撮影については、有限会社阿南写真工房に委託した。

9．今回の調査で出土した木製品の保存処理については、（財）元興寺文化財研究所に委託した。

10．今回の調査で実施した花粉・珪藻分析については川崎地質株式会社に委託した。

11．溶滓状遺物の自然科学分析については、パリノサーヴェイ株式会社に委託した。

12．石器の石種と原石の採石推定地の分析については奥田尚氏にお願いした。

13．本書に掲載した石器実測図の一部は株式会社アルカに委託した。

14．遺物整理作業は、横田明、山田隆一、小浜成が担当した。

15．本書の執筆は岩崎二郎、横田明、山田隆一が分担して行った。執筆分担については目次に記している。また編集は担当者間の協議に基づき、横田、山田が行った。

16．出土遺物および図面・写真等は大阪府教育委員会文化財調査事務所において保管している。

17．この報告書は300部作成し、一部あたりの単価は7,280円である。

18．調査・整理にあたって次の方々にご協力、ご教示いただいた。記して謝意を表する。

田中清美（大阪市文化財協会）、田崎博之（愛媛大学）、福永信雄（東大阪市教育委員会）、別所秀高（東大阪市文化財協会）、三好孝一（財団法人 大阪府文化財センター）、出原恵三、久家隆芳（高知県埋蔵文化財センター）、信里芳紀、蔵本晋司、森下英治（香川県埋蔵文化財センター）、寺前直人（大阪大学）

凡　　例

1、本報告書のレベルは全てT.P.（東京湾平均海水面）で表示している。

2、方位は国土座標第Ⅵ座標系の座標北を示し、座標の数値は全て旧座標の数値である。ちなみに、旧座標と新座標との関係について、調査区内および調査区周辺に関する数値をいくつかあげておく。

旧座標（X＝-155500.0000 Y＝-36400.0000）

→新座標（X＝-155153.1734　Y＝-36661.2561）

旧座標（X＝-155300.0000 Y＝-36400.0000）

→新座標（X＝-154953.1736 Y＝-36661.2551）

旧座標（X＝-155600.0000 Y＝-36200.0000）

→新座標（X＝-155253.1735 Y＝-36461.2583）

3、土色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』を使用した。図・表・写真は報告書全体で通し番号とする。

目　　次

巻頭図版

はじめに

例言

凡例

第1章　調査に至る経緯と経過　（岩崎）　1

第2章　木の本遺跡周辺の歴史的環境　（横田）　2

第3章　調査の方法と既往の調査　（横田）　6

第1節　調査区の設定　6　6

第2節　木の本遺跡をめぐる既往の調査　8

第4章　A調査区の調査成果（遺構）　（横田）　13

第1節　基本層序　13

第2節　第1～3遺構面の調査概要　17

第3節　第4遺構面の調査概要　21

1.弥生時代前期　2.弥生時代中期　3.古墳時代　4.奈良時代以降

第5章　A調査区の調査成果（遺物）　（山田）　43

第1節　弥生時代前期　43　第2節　土製品　115

第3節　木器　120　第4節　石器　128

第5節　弥生時代中期　158　第6節　布留様式　164

第7節　古墳時代後期以降178

第6章　B－1～4調査区の調査成果（遺構）　（横田）　181

第1節　B－1、2調査区　181

第2節　B－3調査区　181

1.第1遺構面　2.第2遺構面　3.第3遺構面

第3節　B－4調査区　187

1.第1遺構面　2.第2遺構面

第7章　B－1～4調査区の調査成果（遺物）　（山田）　188

第8章　まとめ　197

第1節　木の本遺跡の遺構群について　（横田）　197

第2節　弥生前期の遺物から　（山田）　210

第9章　自然科学的分析の結果　215

第1節　木の本遺跡発掘調査に伴う花粉・珪藻分析委託　215

（川崎地質株式会社　関西支社）

第2節　木の本遺跡における弥生時代前期前半の溶滓状遺物の自然科学分析　229
（パリノサーヴェイ株式会社）
第3節　木の本遺跡出土土器内付着の炭化種実　（パリノサーヴェイ株式会社）　237
第4節　木の本遺跡の石器の石種と原石の採石推定地　（奥田尚氏）　240

図　版　目　次

付図1　Ｂ－3、Ａ、Ｂ－4調査区第4遺構面遺構配置図
付図2　木の本遺跡、田井中遺跡弥生時代前期遺構配置図
第１章
第１図　調査区位置図　1
第２章
第２図　木の本遺跡周辺の主要遺跡分布図　3
第３図　木の本遺跡周辺の地形　5
第３章
第４図　木の本遺跡の位置と地区割　7
第５図　木の本遺跡および周辺遺跡調査区位置図　9
第６図　木の本遺跡調査区位置図　12
第４章
第７図　Ａ調査区第1、2遺構面遺構配置図　14
第８図　Ｂ－3、Ａ、Ｂ－4調査区土層断面図　15～16
第９図　Ａ調査区第3遺構面遺構配置図　17
第10図　Ａ調査区谷状地形土層断面図　18
第11図　Ａ調査区流路0183土層断面図　19～20
第12図　Ａ調査区流路0183遺物出土状況　22
第13図　Ａ調査区土坑0133平面・断面図　24
第14図　Ａ調査区土坑0139、0140平面・断面図　25
第15図　Ａ調査区土坑0159、0160平面・断面図　26
第16図　Ａ調査区土坑0297平面・断面図　27
第17図　Ａ調査区土坑0302平面・断面図　28
第18図　Ａ調査区土坑0323平面・断面図　28
第19図　Ａ調査区土坑0320平面・断面図　28
第20図　Ａ調査区土坑0319平面・断面図　29
第21図　Ａ調査区弥生時代前期遺構土層断面図　30
第22図　Ａ調査区土坑0339、0340平面・断面図　32

第23図　Ａ調査区土坑0419、0427平面・断面図　33
第24図　Ａ調査区土器棺0179平面・断面図　34
第25図　Ａ調査区土坑0321、0422、0423、0450平面・断面図　35
第26図　Ａ調査区土器棺0345、杭列0438平面・断面図　36
第27図　Ａ調査区円形竪穴状遺構0348及び周辺遺構平面・断面図　37
第28図　Ａ調査区土坑0388平面・断面図　38
第29図　Ａ調査区土坑0398平面・断面図　38
第30図　Ａ調査区土坑0399、0400平面・断面図　38
第31図　Ａ調査区木棺墓0295平面・断面図　39
第32図　Ａ調査区溝0187、0301平面・断面図　39
第33図　Ａ調査区古墳時代遺構土層断面図　40
第34図　Ａ調査区土坑0426、0436平面・断面図　41
第35図　Ａ調査区井戸0431平面・断面図　42
第36図　Ａ調査区土坑0352断面図　42
第５章
第37図　流路0183中・下層出土遺物（1）　44
第38図　流路0183中・下層出土遺物（2）　45
第39図　流路0183中・下層出土遺物（3）　46
第40図　流路0183中・下層出土遺物（4）　47
第41図　流路0183中・下層出土遺物（5）　49
第42図　流路0183中・下層出土遺物（6）　50
第43図　流路0183中・下層出土遺物（7）　51
第44図　流路0183中・下層出土遺物（8）　53
第45図　流路0183中・下層出土遺物（9）　54
第46図　流路0183中・下層出土遺物（10）　56
第47図　流路0183中・下層出土遺物（11）　57
第48図　流路0183中・下層出土遺物（12）　59
第49図　流路0183中・下層出土遺物（13）　60
第50図　流路0183中・下層出土遺物（14）　61
第51図　流路0183中・下層出土遺物（15）　63
第52図　流路0183中・下層出土遺物（16）　64
第53図　流路0183中・下層出土遺物（17）　65
第54図　流路0183中・下層出土遺物（18）　66
第55図　流路0183中・下層出土遺物（19）　67

第56図　流路0183中・下層出土遺物（20）　68
第57図　流路0183中・下層出土遺物（21）　69
第58図　流路0183中・下層出土遺物（22）　70
第59図　流路0183中・下層出土遺物（23）　72
第60図　流路0183中・下層出土遺物（24）　73
第61図　流路0183中・下層出土遺物（25）　74
第62図　流路0183中・下層出土遺物（26）　75
第63図　流路0183中・下層出土遺物（27）　76
第64図　流路0183中・下層出土遺物（28）　77
第65図　流路0183中・下層出土遺物（29）　79
第66図　流路0183中・下層出土遺物（30）　80
第67図　流路0183中・下層出土遺物（31）　81
第68図　流路0183上層出土遺物（1）　82
第69図　流路0183上層出土遺物（2）　83
第70図　流路0183出土遺物（1）　85
第71図　流路018出土遺物（2）　86
第72図　溝0308・0317、土坑0127・0128・0131・0139出土遺物　89
第73図　土坑0133・0140・0159・0160出土遺物　90
第74図　土坑0179・0250出土遺物　92
第75図　土坑0255・0256・0259・0262出土遺物　94
第76図　土坑0263出土遺物（1）　95
第77図　土坑0263出土遺物（2）　96
第78図　土坑0266・0269・0272・0286・0302・0304出土遺物　97
第79図　土坑0297出土遺物（1）　99
第80図　土坑0297出土遺物（2）　100
第81図　土坑0297出土遺物（3）　101
第82図　土坑0320出土遺物　102
第83図　土坑0323・0325・0328・0334出土遺物　104
第84図　土坑0339出土遺物　105
第85図　土坑0340・0344・0345出土遺物　107
第86図　土坑0350・0371・0380・0381・0386・0409・0412出土遺物　109
第87図　土坑0419出土遺物　110
第88図　土坑0422・0427・0428・0432出土遺物　112
第89図　包含層他出土遺物　113

第90図　土錘他　116
第91図　紡錘車他（1）　117
第92図　紡錘車他（2）　118
第93図　流路0183出土木器（1）　122
第94図　流路0183出土木器（2）　123
第95図　流路0183出土木器（3）　124
第96図　流路0183出土木器（4）　125
第97図　流路0183出土木器（5）　126
第98図　その他出土木器　127
第99図　石器（1）　129
第100図　石器（2）　131
第101図　石器（3）　132
第102図　石器（4）　133
第103図　石器（5）　135
第104図　石器（6）　136
第105図　石器（7）　137
第106図　石器（8）　139
第107図　石器（9）　140
第108図　石器（10）　141
第109図　石器（11）　142
第110図　石器（12）　143
第111図　石器（13）　144
第112図　石器（14）　145
第113図　石器（15）　146
第114図　石器（16）　147
第115図　石器（17）　148
第116図　石器（18）　149
第117図　石器（19）　150
第118図　石器（20）　151
第119図　石器（21）　152
第120図　石器（22）　153
第121図　石器（23）　154
第122図　石器（24）　155
第123図　土坑0271・0298・0396・0398出土遺物　159

第124図　土坑0388出土遺物　160
第125図　土坑0399出土遺物　161
第126図　土坑0400出土遺物　162
第127図　溝0187出土遺物（1）　165
第128図　溝0187出土遺物（2）　166
第129図　溝0301出土遺物（1）　168
第130図　溝0301出土遺物（2）　169
第131図　溝0301出土遺物（3）　170
第132図　溝0301出土遺物（4）　171
第133図　布留期各種遺構出土遺物　175
第134図　井戸0431出土遺物　176
第135図　各種遺構出土遺物　178
第136図　9層・4面直上・8層出土遺物　179
第137図　7・6層出土遺物　180
第６章
第138図　Ｂ－2調査区溝1109平面、断面図　181
第139図　Ｂ－1、2調査区遺構配置図、土層断面図　182
第140図　Ｂ－3調査区第3、4a、4b遺構面遺構配置図　183
第141図　Ｂ－3調査区溝1002平面・断面図　184
第142図　Ｂ－3調査区遺構土層断面図（1）　185
第143図　Ｂ－3調査区遺構土層断面図（2）　185
第144図　Ｂ－4調査区第4a遺構面遺構配置図　186
第145図　Ｂ－4調査区第4a遺構面遺構土層断面図　186
第146図　Ｂ－4調査区第4b遺構面遺構配置図　187
第７章
第147図　溝1003出土遺物（1）　189
第148図　溝1003出土遺物（2）　190
第149図　溝1102・1103出土遺物　191
第150図　布留期以降各種遺構出土遺物　192
第151図　溝1002出土遺物　193～194
第152図　包含層出土遺物　195
第８章
第153図　木の本遺跡第4遺構面弥生時代前期遺構配置図　199
第154図　木の本遺跡第4遺構面弥生時代中期遺構配置図　200

第155図　木の本遺跡第4遺構面古墳時代遺構配置図　201
第156図　弥生時代前期集落域想定図　207
第９章
第157図　資料採集地点　215
第158図　No.1、2地点の花粉ダイアグラム　217
第159図　No.3地点の花粉ダイアグラム　218
第160図　No.1地点の珪藻ダイアグラム・珪藻総合ダイアグラム　220
第161図　No.2地点の珪藻ダイアグラム　221
第162図　No.2地点の珪藻総合ダイアグラム　222
第163図　No.3地点の珪藻ダイアグラム　223
第164図　No.3地点の珪藻総合ダイアグラム　224
第165図　木の本遺跡出土溶滓状遺物の分析測定Point位置（Point1～3）　229
第166図　木の本遺跡出土溶滓状遺物測定Point1のＸ線定性スペクトル　232
第167図　木の本遺跡出土溶滓状遺物測定Point2のＸ線定性スペクトル　233
第168図　木の本遺跡出土溶滓状遺物測定Point3のＸ線定性スペクトル　234
第169図　土器内付着の炭化種子　239

表目次

第1表　木の本遺跡・田井中遺跡・志紀遺跡調査地点一覧　10～11
第2-1表　土錘一覧　119
第2-2表　紡錘車一覧　119
第3表　石器重量、および出土遺構等一覧　156～157
第4表　遺構群の変遷　209
第5表　測定条件・定量条件　230
第6表　木の本遺跡出土溶滓状遺物の測定Point1～3の化学組成および平均値　231
第7表　木の本遺跡出土溶滓の既存化学組成との比較表　235

図版目次

図版　1　木の本遺跡全景　（西から）（南から）
図版　2　弥生前期遺構面遠景（西部）（東部）
図版　3　Ａ調査区　第1遺構面垂直写真（西部）（東部）
図版　4　Ａ調査区　第2遺構面垂直写真（西部）（東部）
図版　5　Ａ調査区　第3遺構面垂直写真（西部）（東部）
図版　6　Ａ調査区　第4遺構面垂直写真（西部）（東部）
図版　7　Ａ調査区　第1遺構面西部（南から）　第1遺構面東部（南から）
図版　8　Ａ調査区　第2遺構面西部（西から）　第2遺構面東部（南から）

図版 9　Ａ調査区　第3遺構面西部（西から）　第3遺構面東部（北から）
図版10　Ａ調査区　第4遺構面西部（西から）　第4遺構面西部（南から）
図版11　Ａ調査区　第4遺構面東部（北から）　第4遺構面東部（南から）
図版12　Ａ調査区　流路0183西側完掘状況（西から）　西端部分完掘状況（東から）
図版13　Ａ調査区　流路0183東側完掘状況（南から）　流路0183土層断面（Ａ～Ａ´）
図版14　Ａ調査区　流路0183遺物出土状況1　流路0183遺物出土状況2
図版15　Ａ調査区　流路0183遺物出土状況3　流路0183遺物出土状況4
図版16　Ａ調査区　土坑0159遺物出土状況　土坑0427遺物出土状況
図版17　Ａ調査区　土器棺0345出土状況1　土器棺0345出土状況2
図版18　Ａ調査区　土坑0319石包丁出土状況　土坑0450遺物出土状況
図版19　Ａ調査区　土坑0398遺物出土状況　土坑0399遺物出土状況
図版20　Ａ調査区　土坑0426遺物出土状況1　土坑0426遺物出土状況2
図版21　Ａ調査区　井戸0431遺物出土状況（側面から）　遺物出土状況（上から）
図版22　Ｂ－1調査区　東壁土層断面　Ｂ－2調査区全景（南から）
図版23　Ｂ－3調査区　溝1002遺物出土状況　溝1002馬鍬出土状況
図版24　Ｂ－3調査区　第2遺構面（東から）　土坑1012遺物出土状況
図版25　Ｂ－3調査区　第3遺構面（西から）　Ｂ－4調査区　第1遺構面（西から）
図版26　Ｂ－4調査区　土坑1104遺物出土状況　第2遺構面（西から）
図版27　遺物1
図版28　遺物2
図版29　遺物3
図版30　遺物4
図版31　遺物5
図版32　遺物6
図版33　遺物7
図版34　遺物8
図版35　遺物9
図版36　遺物10
図版37　遺物11
図版38　遺物12
図版39　遺物13
図版40　遺物14
図版41　遺物15
図版42　遺物16

図版43　遺物17
図版44　遺物18
図版45　遺物19
図版46　遺物20
図版47　遺物21
図版48　遺物22
図版49　遺物23
図版50　遺物24
図版51　遺物25
図版52　遺物26
図版53　遺物27
図版54　遺物28
図版55　遺物29
図版56　遺物30
図版57　遺物31
図版58　遺物32
図版59　遺物33
図版60　遺物34
図版61　遺物35
図版62　遺物36
図版63　遺物37
図版64　遺物38
図版65　遺物39
図版66　遺物40
図版67　遺物41
図版68　遺物42
図版69　遺物43
図版70　遺物44
図版71　遺物45
図版72　遺物46
図版73　遺物47
図版74　遺物48
図版75　遺物49
図版76　遺物50

図版77　遺物51
図版78　遺物52
図版79　遺物53
図版80　遺物54
図版81　遺物55

第１章　調査の経緯と経過

阪神大震災の発生により、大阪府としても防災対策を充実させることが、緊急の課題となった。

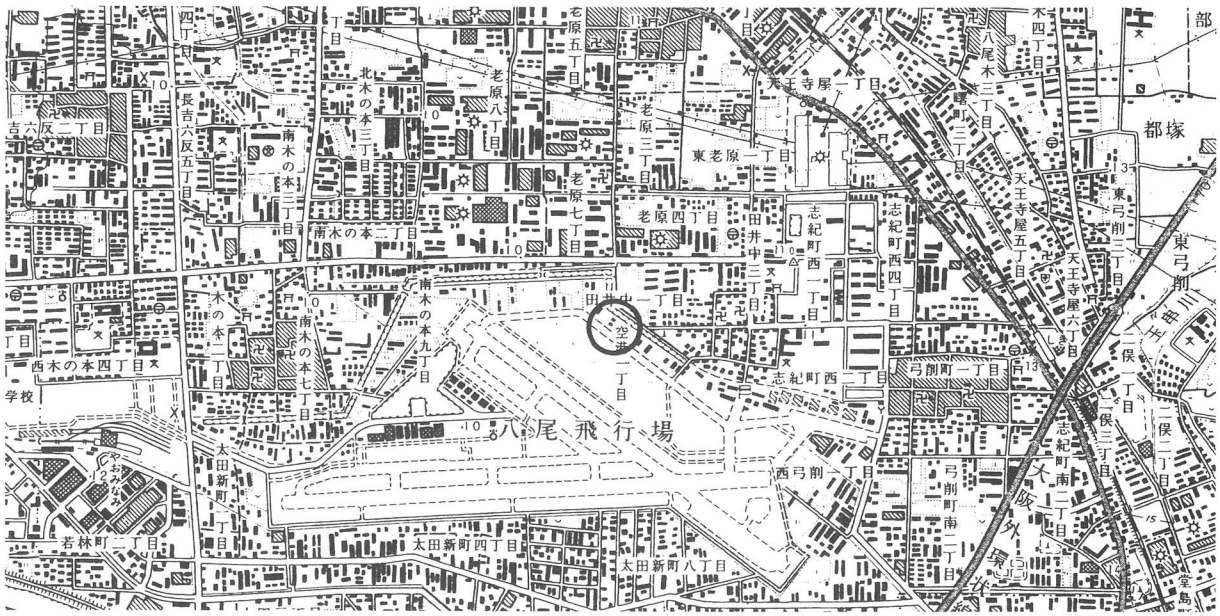
その一環として、大阪府総務部防災室は八尾空港に隣接する民有地、所謂「菱形地」に中部広域防災拠点を整備する計画を策定した。当該地は、木の本遺跡として周知されているために、防災室は埋蔵文化財の取り扱いについて大阪府教育委員会文化財保護課と協議した。

工事予定地周辺は、かつて八尾市教育委員会が八尾空港再整備に伴う試掘調査を行い、古代・中世の条里に伴う遺構が、ほぼ全域に存在することがわかっていた。また、隣接する田井中遺跡では弥生時代前期初頭から中期にかけての河内平野南部における拠点的集落が存在したことが明らかになっている。

このように、工事予定地には、各時代の遺構・遺物が存在する可能性が高いため、文化財保護課は事前に発掘調査が必要であると判断した。しかし、遺構面・遺物包含層の深さや厚さについてはデーターがないために、まず試掘調査を実施する必要があった。

試掘調査は平成10年11月17日から26日にかけて行った。その結果、中世の水田面、古墳時代、弥生時代の遺物包含層が確認された。湧水のために弥生時代の遺構は確認できなかったが、出土した土器は、試掘地点の東北約100ｍの平野川および空港北濠改修工事に伴う田井中遺跡の調査で検出された弥生時代前期前半の住居跡群と同時期のもので、集落が試掘地点にまで広がっていることが推定された。

第１次調査は備蓄倉庫本体部分を対象に、平成12年3月1日から13年3月30日まで、第２次調査はアクセス道路や防火水槽部分を対象として、平成13年3月6日から12月21日まで行った。引き続き遺物整理を実施し、平成15年3月31日にすべての作業を終了した。



第１図　調査区位置図

第２章　木の本遺跡の歴史的環境

木の本遺跡は八尾市木の本、南木の本、空港１丁目を中心に広がる遺跡であり、弥生時代前期、中期、古墳時代、古代、中世など、広い時代にわたる様々な種類の遺構が発見されている。中河内は大阪府下でも遺跡密度の高い地域であるが、八尾市域はその中でも特に遺跡が密集しているところである。木の本遺跡の周囲には田井中遺跡、志紀遺跡、八尾南遺跡などの諸遺跡が隣接しており、遺跡の密集地帯を形成している。これらの遺跡は互いに連関しており、内容的にも連続するものものが多い。遺跡群としてまとまりでとらえることが必要である。

河内平野は、周囲を生駒山地、上町台地、淀川、羽曳野丘陵などに取り囲まれている。現在の河内平野には、恩地川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川など、旧大和川に関連する河川が流下しており、河内平野はそれら河川の活動により形成された歴史的な産物なのである。

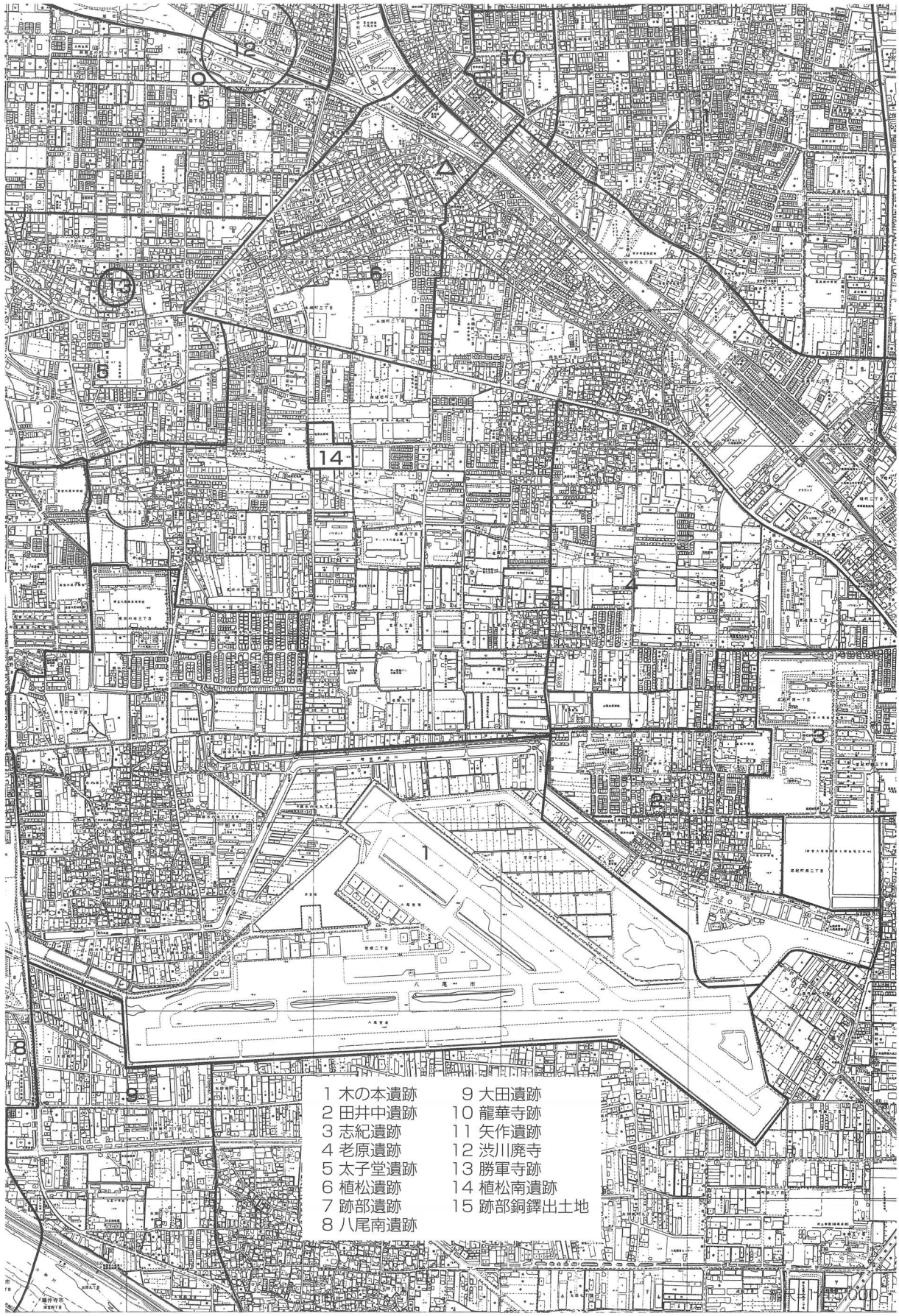
縄文時代までの河内地域は、上町台地を西の縁とするように潟が広がっていた。弥生時代以降には、上町台地の存在により海水の流入が遮られたこと、潟の水位の低下などの要因によって、潟から淡水湖へと大きな変貌をとげた。その上に、流入する河川による土砂堆積の進行などの要因も重なって、河内平野が形成されていったのである。これらの河川は、農耕などに多大な恵みをもたらす源泉であったが、同時に大水による被害をもたらす原因にもなった。しかし江戸時代になると、大和川が現在のルートに付け替えられたことにより、河内平野は洪水の影響が少なくなり安定した基盤に変貌を遂げた。

現在、木の本遺跡として包括される範囲は広範囲にわたる。従来、木の本遺跡というと、古墳時代前～中期を主体とする集落として知られているが、古墳時代を主体とする遺構群は木の本遺跡の範囲内でも西方に展開する遺構群である。今回報告するのは遺跡範囲の東方であり、弥生時代前期が主体となる。

今回の調査においても、弥生時代から近世に至るさまざまな性格の遺構・遺物が検出され、木の本遺跡が複雑な様相の複合遺跡であることを証明している。その中でも特筆すべきものは、弥生時代前期に属する遺構・遺物群である。弥生時代前期の遺構群は、今回の木の本遺跡の調査成果だけで収斂させられるものではなく、過去の調査で発見された田井中遺跡の遺構群と一連の性格のものとして考えなければならないものなのである。

弥生時代前期

田井中遺跡は木の本遺跡の東北に接する遺跡である。過去に実施された、自衛隊駐屯地関連の調査、平野川、空港北濠改修などに関連する調査によって、遺跡を東西に貫通するように調査されている。その過程で、弥生時代前期前半を主体にしながら、一部、縄文時代晩期の遺構群をも含む集落域が発見されている。この集落は田井中遺跡範囲内でも西方部分で成立し、新段階には自衛隊駐屯地を中心とする東方に移動し、継続して営まれたと考えられている。今回の木の本遺跡の調査成果は、田井中遺跡の遺構群と密接に関連するものであり、弥生時代の木の本遺跡につ



第 2 図　木の本遺跡周辺の主要遺跡分布図

いては、田井中遺跡との関連で考えるのが適当なのである。

弥生時代中期～後期

田井中遺跡でも自衛隊駐屯地を中心とした地域で、弥生時代中期を中心とする遺構・遺物が発見されており、当該期の居住域の中心地域だったと思われる。平野川・北濠調査区では、木棺が発見されている。今回の調査区でも、木棺の痕跡や土坑が発見されている。また志紀遺跡では中期初頭頃から本格的に水田造営が開始される。

後期の遺構・遺物は木の本・田井中遺跡では散在的に検出されるのみで、まとまりはない。周辺では八尾南遺跡や小阪合遺跡、中田遺跡・八尾南遺跡などで、遺構・遺物が発見されている。

古墳時代

A調査区で布留式を主体とする土坑や、須恵器を伴う溝などが発見されている。また、木の本遺跡西方の南木の本2丁目、3丁目を中心とする地域では、庄内期後半～布留式期を主体とする遺構群が発見されている。しかしながら散在的な様相であり、中期以降になるとさらに遺跡の縮小化の傾向が顕著である。

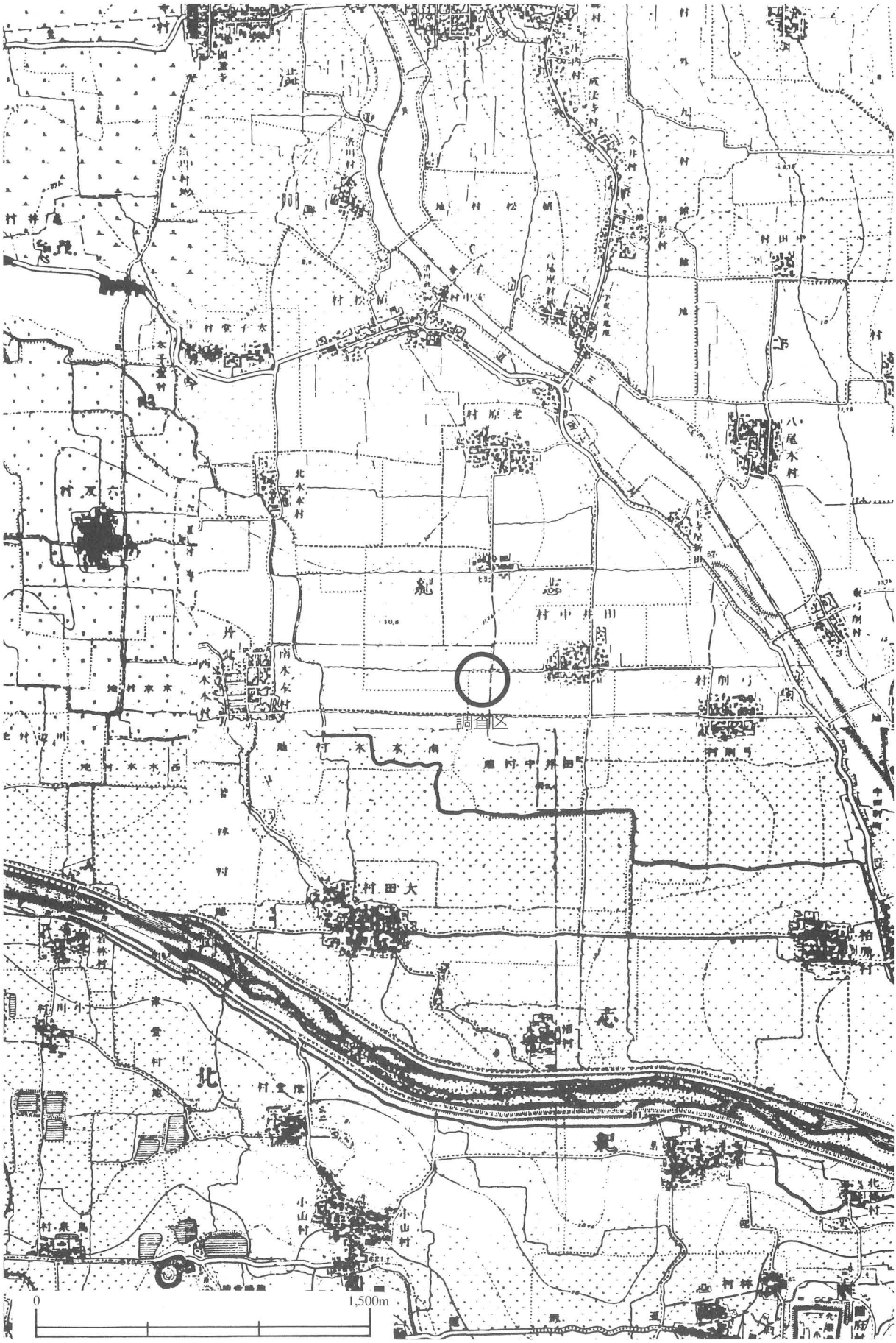
周辺では志紀遺跡、小阪合遺跡、中田遺跡、八尾南遺跡などで人間活動の痕跡が発見されている。木の本遺跡、田井中遺跡とは対照的に、志紀遺跡は中期以降も安定し、以後も耕作地の経営が続くようである。また、八尾南遺跡では初期須恵器や韓式系土器のみならず、古墳も発見されている。

奈良時代以降

律令制のもとでは河内国志紀郡の範囲に含まれるものと推測される。『和名抄』高山寺本によると、志紀郡には長野、拝志、志紀、田井、井於、邑智、新家、土師の八つの郷があるが、当地の所属がどのようであったかは不明である。平安時代以降は、条里型水田の施工による開発が進められ、志紀郡には志紀醍醐氏領であった志紀北庄や南庄などの荘園の存在が、当時の文献に散見する。以後、戦国時代にいたるまで、当地は周辺諸勢力の抗争のはざまの地域であり、たびたび戦乱にみまわれたようである。

また、今回の調査においても、堆積土層は基本的に粘土質の土層と砂層との互層からなっており、このような状況は周辺遺跡でもしばしば確認されるものである。このことは近世以前の大和川は河内平野を南東から北西に、ななめに横切るように流れており、たびたび氾濫を繰り返した産物なのである。

河内の人々に多大な脅威とともに大地の恩恵を与え続けた大和川は、宝永元（1704）年、今米村の庄屋中甚兵衛らの努力により付け替えられることが決定し、８ヶ月という驚異的な早さで付け替えられる。この結果、大和川の水は、生駒山系を越え、柏原にでると、そのまま西へ流れることとなり、洪水での被害が激減した。その上、旧大和川の河川敷は新たに耕作地として開発され、河内が木綿の産地として反映する下地をつくったのである。



陸地測量部仮製地図「國分村」「八尾」（1885年測量）

第 3 図　木の本遺跡周辺の地形

第３章　調査の方法と既往の調査

第１節　調査区の設定

木の本遺跡の位置

木の本遺跡として周知される範囲は、八尾市木の本１～3丁目、南木の本２～９丁目、空港１丁目などの広い範囲にわたる。その中でも、今回報告の調査区は遺跡の東部にあたり、行政区画上では八尾市空港一丁目にあたる。

調査区の呼称について

前述のように、今回報告の調査は平成12～13年度の2年度にかけて実施されたものである。平成12年度の調査区は防災倉庫建設予定地1箇所であり、これをＡ調査区とした。平成13年度の調査区は、防災倉庫への進入路予定地と、防災倉庫の東西両側に設置される防火水槽予定地2箇所で、進入路部分をＢ－１調査区（北側）およびＢ－２調査区（南側）、防火水槽予定地をＢ－３調査区（西側）、Ｂ－４調査区（東側）とした。

地区割

遺跡の位置については国土座標第Ⅵ座標系（旧座標）を利用して表示している。遺跡調査の地区割については、Ａ調査区の地区割設定を主眼にしながら、東西、南北の基準線を設定して４つの大区画を設定し、この大区画をさらに細分する形で小区画を組んで、遺物取り上げなどの基準とした。大区画ついては、Y＝—36,550kmラインおよび、X＝－155,440kmを基準ラインにして、周囲に４つの区画を設定し、東南の区画から反時計周りに１～４区と呼称する（１）。そして、この大区画を５ｍ四方の小区画に分けるのであるが、東西については西から順に１から30までの数字をつけ、南北については北から順にＡ～Ｚまでのアルファベッドを付した。最小区画である５ｍの小区画の呼称は、数字とアルファベットの組み合わせで、Ｊ10、Ｎ20などとする（２）。そして調査区の呼称と（２）の小区画の呼称をあわせて、最終的には１－Ｊ10とするのを原則とした。主として遺物取り上げの基準にこの区画割を採用している。

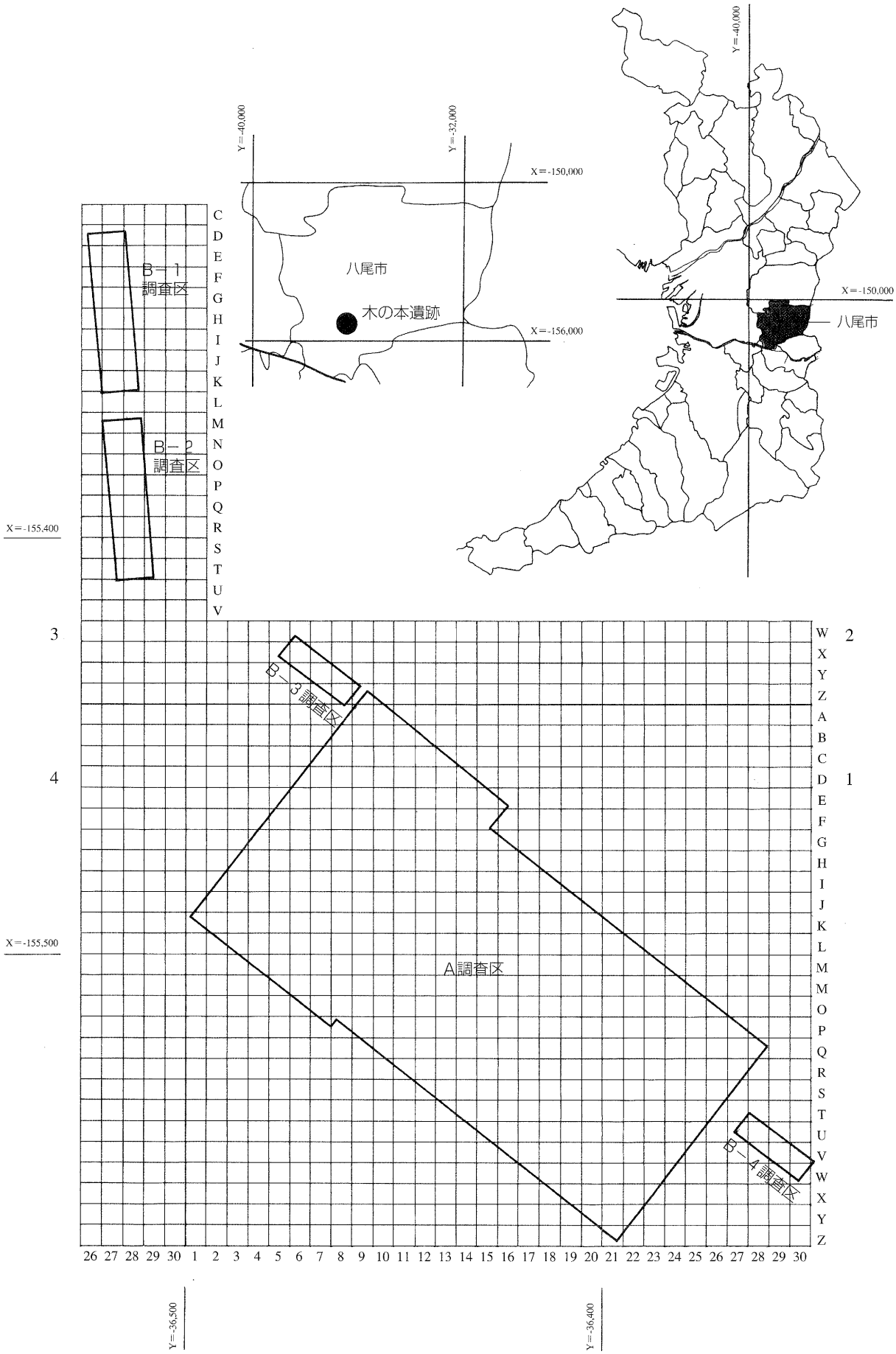
方位

地区割と同様に国土座標に則り、座標北で表示した。遺跡周辺の座標北はＢ－１、２区の調査時には磁北より東へ６°27′、真北よりも西へ13′振れていた。

遺構番号

調査区からはいろいろな性格の遺構が検出される。それで遺構番号については、遺構の種類に関わらず000１から順番に番号をふり、溝0001、土坑0344などのように遺構の属性＋４桁の数字で表記することとした。

また、Ａ調査区については、1000番までの表示、Ｂ—１～４調査区については1001番からの表示とした。遺構配置図における遺構の表示は、煩雑さをさけるために４桁の番号だけを記した部分もある。なお、混乱を防ぐために、調査の過程において生じた欠番については欠番のままとし、



第 4 図　木の本遺跡の位置と地区割

改めて遺構番号を組みなおすことは行わなかった。

遺構面

遺構面の呼称についてはＡ調査区については、第６層上面の遺構群を第１遺構面、第８層上面の遺構群を第２遺構面、第９層上面の遺構群を第３遺構面、第10層上面の遺構群を第４遺構面と呼称した。

第２節　木の本遺跡をめぐる既往の調査

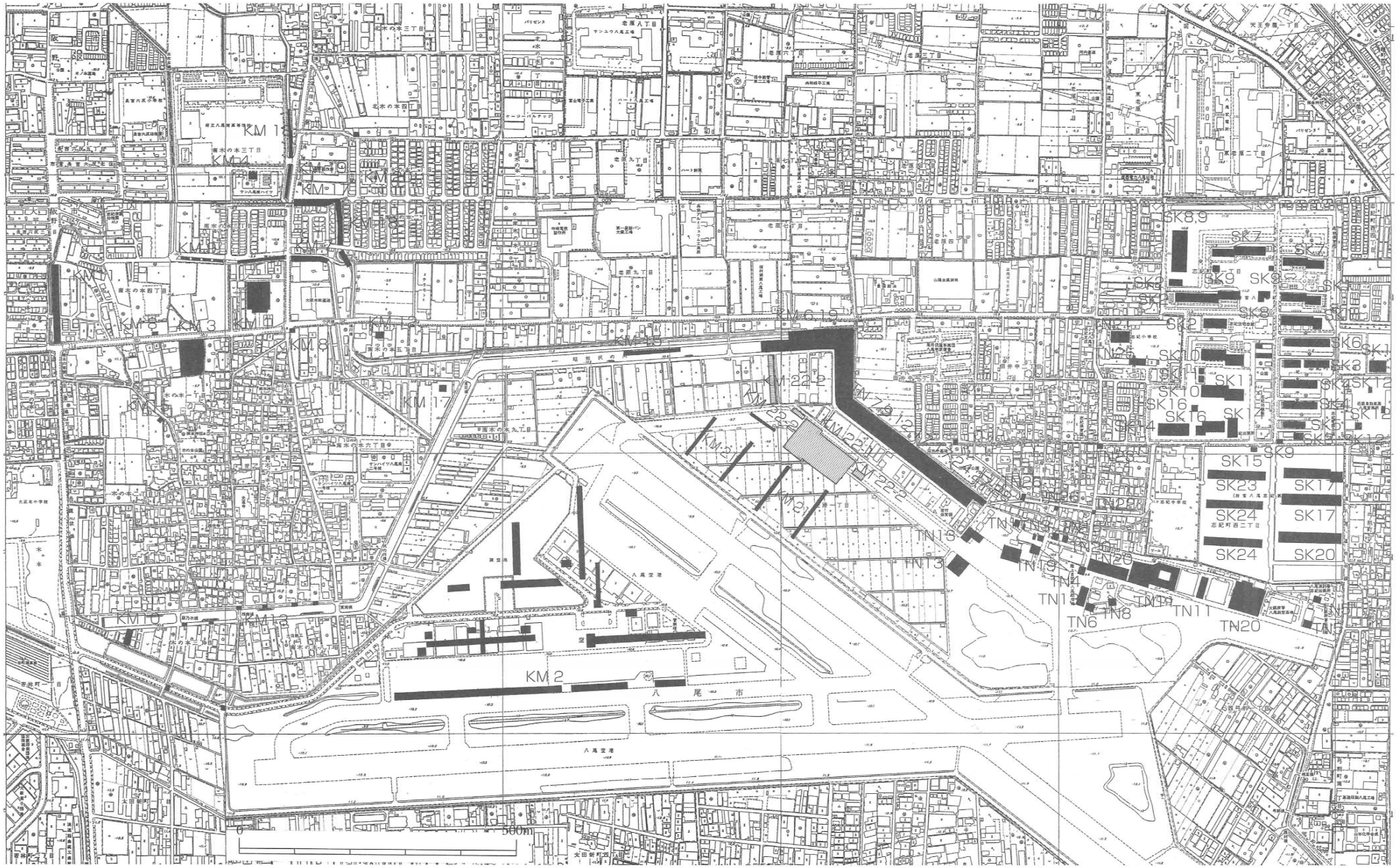
木の本遺跡の調査は1980年代以降、宅地や工場の開発、公共下水道工事、空港整備などに伴い相次いで実施されてきた。主として八尾市教育委員会や（財）八尾市文化財調査研究会により調査が行われ、現在も調査が継続中である。調査が本格化したのは、大阪府教育委員会による平野川改修工事に伴う発掘調査以降である。平野川は八尾市域南部を東南から北西に貫くように流れる川である。発掘調査は、河川改修工事に伴い、工事実施地点毎にトレンチを配置する形で行われたので、結果としては、木の本、南木の本、田井中などの地域に長いトレンチを延々と設けるような形になった。結果として遺跡を貫くように調査することとなったことから、遺跡の時期的な変遷などの様相が一定明らかとなったのである。

平野川改修に伴う調査は、木の本遺跡の実体のみならず、上流部での田井中遺跡の弥生時代前期集落の存在をも明らかにした。木の本遺跡の調査では、遺跡の西端の様相を明らかにすることとなり、古墳時代前～中期の遺構群の存在が確認されたのである。今回の調査成果と一層関連の深いのはむしろ、田井中遺跡の調査成果である。

田井中遺跡は、1970年に行われた陸上自衛隊八尾駐屯地内の下水道工事の際に発見された遺跡である。その後、自衛隊駐屯地内の施設整備に伴い、（財）八尾市文化財調査研究会や（財）大阪府文化財協会、（財）大阪府文化財調査研究センターによって調査が実施され、弥生時代中期を主体とする遺構群の様相が明らかになった。さらに駐屯地の西側では、八尾空港北濠改修工事や、平野川改修工事に伴う発掘調査によって、弥生時代前期集落の存在が明らかになった。これで、駐屯地地域に存在する弥生中期集落よりも古い、弥生前期集落の存在も確認されたのである。

さらに平成12年度以降、中部広域防災拠点整備事業が開始されることとなった。この事業は防災倉庫建設（総務部主管）や調整池築造（土木部主管）を目的としたもので、分布図上では木の本遺跡の範囲内である。しかし田井中遺跡で発見された弥生時代前期集落の南側にあたることから、関連遺構がひろがることが予想された。総務部防災室と文化財保護課は遺跡の取り扱いについて協議し、まず試掘調査を行い、遺構、遺物の有無を確認することとなった。1998年に防災倉庫予定地点において試掘調査を実施したところ、弥生時代前期の土器や包含層が確認され、遺跡のひろがりは確実なものとなった。

それを受けて2000年3月から防災倉庫地区（Ａ調査区）の調査を開始したのをてはじめに、2001年には進入路予定地区（Ｂ－１、２調査区）、貯水槽予定地区（Ｂ－３、４調査区）の発掘



第 5 図　木の本遺跡および周辺遺跡調査区位置図

第 1 表　木の本遺跡・田井中遺跡・志紀遺跡調査地点一覧

木の本遺跡		調査年	報告書名
KM 1	市教委1981	1981	『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報』(1980・81年度)　1983
KM 2	市研究会1次	1982	『木の本遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告4　1984
KM 3	市研究会2次	1982	『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査』　1983
KM 4	市研究会3次	1983	『昭和58年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告5　1984
KM 5	府教委1次	1987	『田井中遺跡発掘調査概要』III
KM 6	府教委2次	1988	『田井中遺跡発掘調査概要』III
KM 7	市教委90―176	1990	『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告26　1992
KM 8	市研究会4次	1990	『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告32　1991
KM 9	市研究会5次	1990	『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告34　1992
KM10	市教委91―468	1991	『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書 I』八尾市文化財調査報告27　1993
KM11	市教委92―70	1992	『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告28　1993
KM12	市教委94―54	1994	『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書 I』八尾市文化財調査報告31　1995
KM13	市研究会6次	1994	『(財)八尾市文化財調査研究会報告50』　1996
KM14	府教委北濠8次	1995	『木の本遺跡発掘調査概要』　1996
KM15	市研究会7次	1996	『(財)八尾市文化財調査研究会報告60』　1998
KM16	府教委3次	1996	『木の本遺跡発掘調査概要』III　1999
KM17	市教委97―515	1997	『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書 I』八尾市文化財調査報告40　1999
KM18	府教委4次	1998	『木の本遺跡発掘調査概要』IV　1999
KM19	府教委5次	1999	『木の本遺跡発掘調査概要』V　2001
KM20	市研究会8次	2002	『平成13年度文化財調査研究会事業報告』　2002
KM21	府教委調節池	2001	未報告
KM22-1	府教委防災1次	2000	本報告
KM22-2	府教委防災2次	2001	本報告

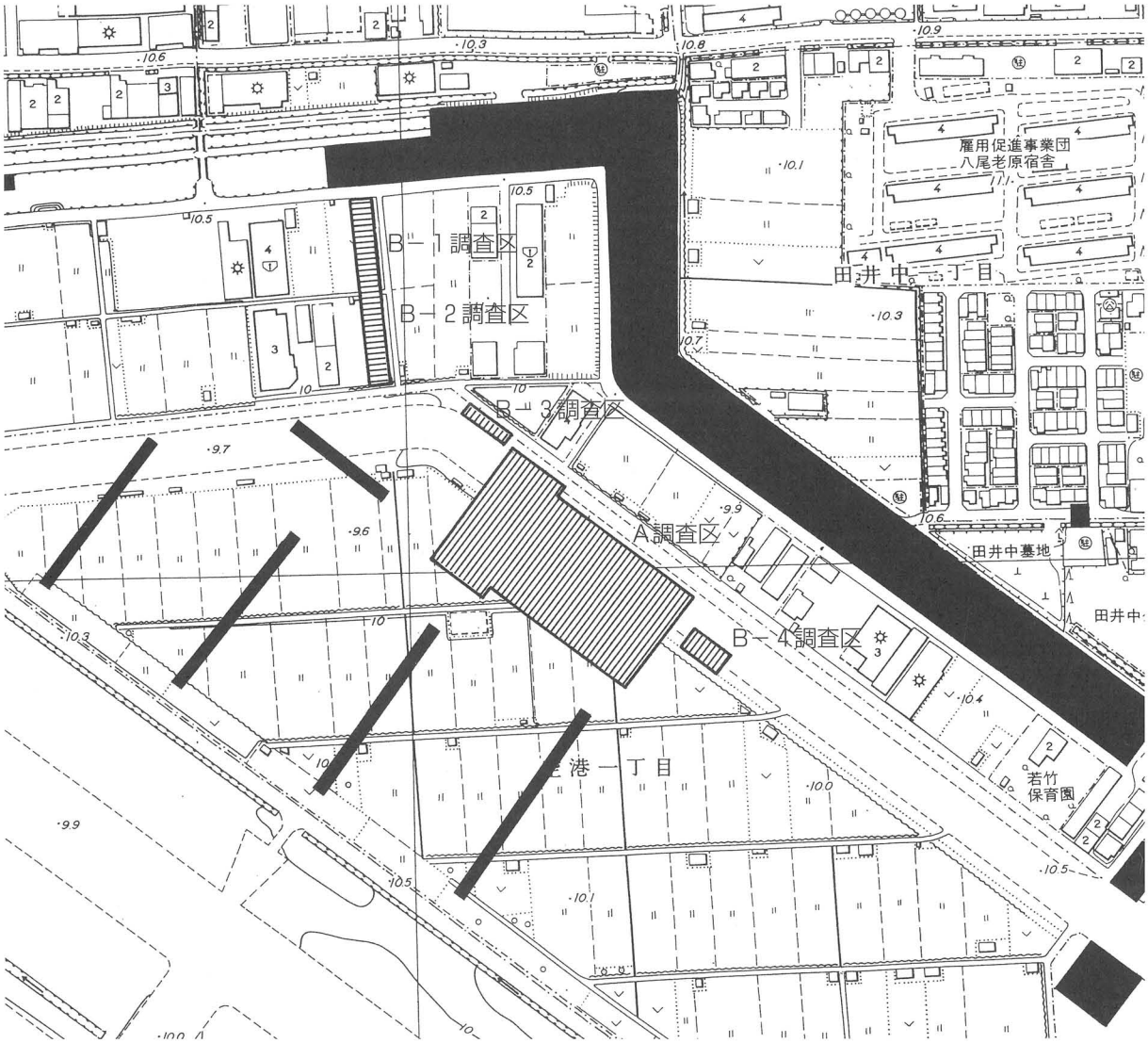
田井中遺跡		調査年	報告書名
TK 1	市研究会1次	1982	『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告昭和63年度』八尾市文化財調査研究会報告17　1989
TK 2	市研究会2次	1982	『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告昭和63年度』八尾市文化財調査研究会報告17　1989
TK 3	市研究会5次	1986	『田井中遺跡』八尾市文化財調査研究会報告46　1995
TK 4	市研究会7次	1986	『田井中遺跡』八尾市文化財調査研究会報告46　1995
TK 5	八尾市教委63―279	1988	『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告20　1989
TK 6	八尾市教委90―29―1	1988	『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告23　1991
TK 7	府教委1次	1990	『田井中遺跡発掘調査概要 I』　1991
TK 8	市教委90―29―2	1990	『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告26　1992
TK 9	府教委2次	1990	『田井中遺跡発掘調査概要II』　1992
TK10	府教委3次	1990	『田井中遺跡発掘調査概要III』　1993
TK11	市研究会10次	1986	『田井中遺跡』八尾市文化財調査研究会報告46　1995
TK12	府教委4次	1990	『田井中遺跡発掘調査概要IV』　1994
TK13	市研究会11次	1993	『平成5年度八尾市文化財調査研究会事業報告』　1994
TK14	市研究会12次	1993	『平成5年度八尾市文化財調査研究会事業報告』　1994

TK15	市研究会13次	1993	『八尾市文化財調査研究会報告42』　1994
TK16	府文セ（その1）	1995	『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集　1997
TK17	府教委5次	1990	『田井中遺跡発掘調査概要Ⅴ』　1996
TK18	府教委6次	1995	『田井中遺跡発掘調査概要Ⅵ』　1997
TK19	府文セ（その2）	1995	『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集　1997
TK20	府文セ（その3）	1996	『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集　1997
TK21	市研究会14次	1996	『平成8年度八尾市文化財調査研究会事業報告』　1997
TK22	市研究会15次	1996	『八尾市文化財調査研究会報告60』　1998
TK23	市研究会16次	1996	『八尾市文化財調査研究会報告62』　1999
TK24	府教委7次	1995	『田井中遺跡発掘調査概要Ⅶ』　1998
TK25	市研究会17次	1998	『平成10年度八尾市文化財調査研究会事業報告』　1999
TK26	市研究会18次	1998	『(財)八尾市文化財調査研究会報告65』2000
TK27	府教委8次	1995	『田井中遺跡発掘調査概要Ⅷ』　1999
TK28	府教委9次	1995	『田井中遺跡発掘調査概要Ⅸ』　2000

志紀遺跡		調査年	報告書名
SK 1	府教委1次	1983	未刊
SK 2	府教委2次	1985	『志紀遺跡発掘調査概要』1986
SK 3	市研究会田井中3次	1985	『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（1994）』八尾市文化財調査研究会報告40　1994
SK 4	市研究会田井中4次	1986	『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（1994）』八尾市文化財調査研究会報告40　1994
SK 5	市研究会田井中6次	1987	『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（1994）』八尾市文化財調査研究会報告40　1994
SK 6	市研究会田井中8次	1987	『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（1994）』八尾市文化財調査研究会報告40　1994
SK 7	府教委3次	1988	「八尾市志紀遺跡の水田遺構」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第21回）資料』　1990
SK 8	府教委4次	1989	未刊
SK 9	府教委5次	1990	『志紀遺跡発掘調査概要ⅠⅤ』　1995
SK10	府教委6次	1991	『志紀遺跡発掘調査概要Ⅱ』　1992
SK11	府教委7次	1991	『志紀遺跡発掘調査概要Ⅲ』　1993
SK12	市教委91－319	1991	『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書。』 八尾市文化財調査報告25　1992
SK13	市研究会9次	1988	『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（1993）』八尾市文化財調査研究会報告39　1993
SK14	府文協（その1）	1993	『志紀遺跡』大阪府埋蔵文化財協会報告書第91輯　1995
SK15	市研究会1次	1993	『八尾市文化財調査研究会報告42』　1994
SK16	府文協（その2）	1994	『志紀遺跡（その2・3・5・6）』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第73集　2002
SK17	府文協（その3）	1994	『志紀遺跡（その2・3・5・6）』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第73集　2002
SK18	市研究会2次	1995	『八尾市文化財調査研究会報告50』　1996
SK19	府文セ	1995	『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集　1997
SK20	府文セ（その4）	1996	『志紀遺跡(その4）』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第25集　1998
SK21	市研究会3次	1996	『八尾市文化財調査研究会報告60』　1998
SK22	市研究会5次	1998	『八尾市文化財調査研究会報告62』　1999
SK23	府文セ（その5）	1999	『志紀遺跡（その2・3・5・6）』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第73集　2002
SK24	府文セ（その6）	2000	『志紀遺跡（その2・3・5・6）』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第73集　2002

調査を順次行った。その結果、Ａ調査区を主体に弥生時代から中世におよぶ多彩な遺構、遺物が発見された。とくに弥生時代前期については、集落の縁辺部分の様相が明らかになるなど、大きな成果があった。

また土木部主管で行われる調節池設置工事箇所は、Ａ調査区の西～南にあたり、包含層のひろがりが推定される地域であった。2001年６～7月に実施した試掘調査で、Ａ調査区に隣接した部分で若干の遺物が確認された。結局、工事掘削が弥生時代包含層には達しないレベルでおさまることになったが。中世以降の耕作地、包含層にかかるため、2002年２～3月、工事掘削レベルまでのトレンチ調査を行った。この結果、遺構、包含層の分布については、Ａ～Ｂ－３調査区が付近が西南の限界で、それより外側は希薄になり、やがて消えていくことが判明している。



第６図　木の本遺跡調査区位置図

第４章　Ａ調査区の調査成果

Ａ調査区は、今回の報告のうちで、一番面積が大きく、かつ遺構の検出、遺物の出土が最も顕著だった地点である。防災倉庫建設予定地であり、面積は7,700㎡に達する。

調査での掘削作業については、地表面から１ｍのレベルまでを機械を使用し、それより下層については1層ずつ人力で土層の除去を進めた。弥生時代前期から近世初頭にいたる計４面の遺構面を確認した。第１遺構面から第３遺構面までは中世以降の耕作地にあたる。第４遺構面は砂層の上に堆積した粘土層の上に形成された遺構群で、弥生時代前期を中心にしながら、古墳時代の遺構も検出されている。

第1節　基本層序

第１層　現況のように造成される以前の耕作土である。層厚は約20ｃｍで、断続的ながらも調査区全域に広がりをみせている。

第２～４層　オリーブ色シルト～黒褐色粘質土を主体とする層で、層厚は20～40ｃｍである。瓦器に混じって近世の染付けなども見られる。近世以降の耕作に伴い形成された層と思われる。

第５層　調査区内でも北寄り部分を中心に広がっている層であり、北東部分で比較的厚く堆積する傾向がある。層厚は約10～30ｃｍで、第１遺構面の上を被覆している。近世初頭の洪水層と思われる。

第６層　オリーブ黒色粘土や暗灰黄色粘土層を主体とする。層厚10～30ｃｍで調査区全域に分布しており、酸化鉄の含浸がみられる。第６層の上面が第１遺構面にあたり、条里地割に沿う畦畔や溝が検出されている。概ね近世初頭の遺構群であろう。

第７層　暗オリーブ色砂を主体とする砂層である。調査区南側を中心に幅広く分布しており、第２遺構面を被覆している。

第８層　調査区全域で厚く堆積がみられる特徴的な土層で、微妙ながら暫移的な変化がみられる。間に砂がかんでいる部分もあり、大きく２層に分けられる。上層は酸化鉄の浸透が激しいものの、有機質はそれほど含んではいない。下層になるほど、特に調査区の北側において多くの有機質を含む傾向がある。湿地状況での堆積だったと推測される。遺物は特に下層から多く出土し、弥生土器や須恵器、瓦器など、いろいろな時期の遺物が出土している。新しいものとしては平安時代の遺物も含んでいる。第３遺構面の被覆層でもある。

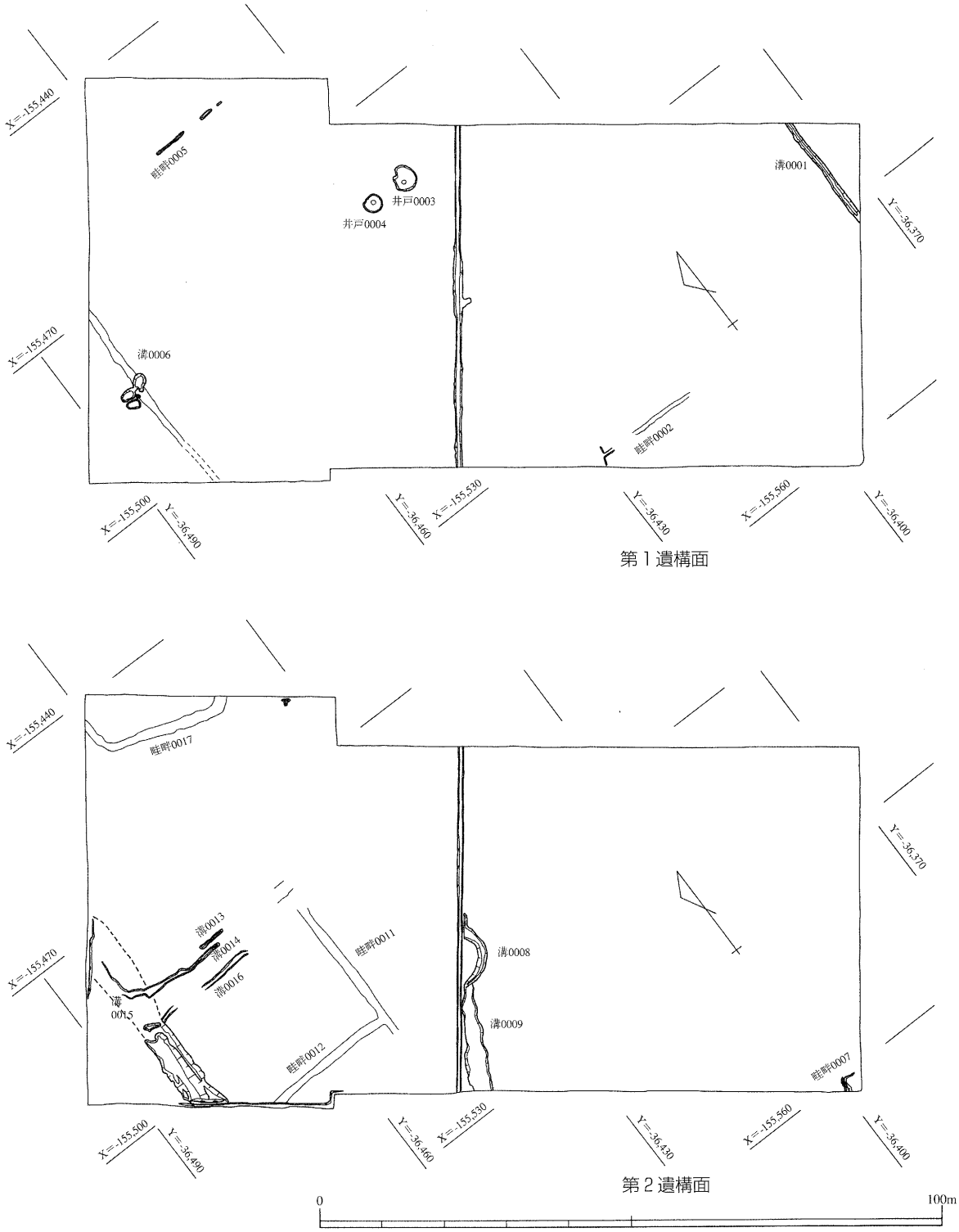
第９層　調査区内に広く分布する灰～オリーブ黒色系統の粘土層で、途切れながらも全体的にひろがる土層である。第７図に掲載した北壁土層断面ではあまりはっきりしないが、部分的には比較的厚く残っている部分もある。上面は第３遺構面に相当する。畦畔や溝などの遺構が主体であった。

第10層　基本的に黒～オリーブ系統のシルトや粘土で構成される土層であり、第４遺構面の基

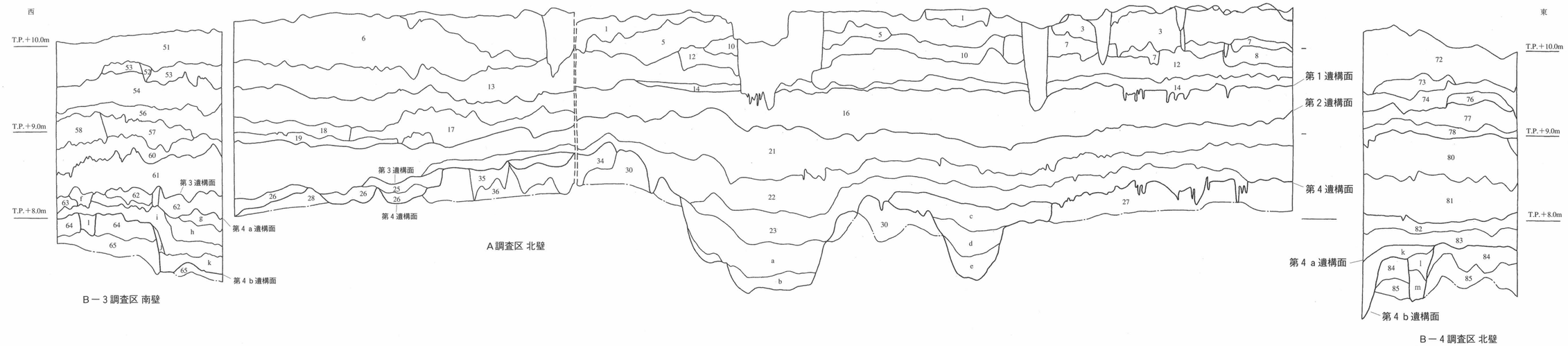
盤層でもある。第４遺構面からは、弥生時代前期を中心にしながら、弥生時代中期や古墳時代などの遺構も検出されている。

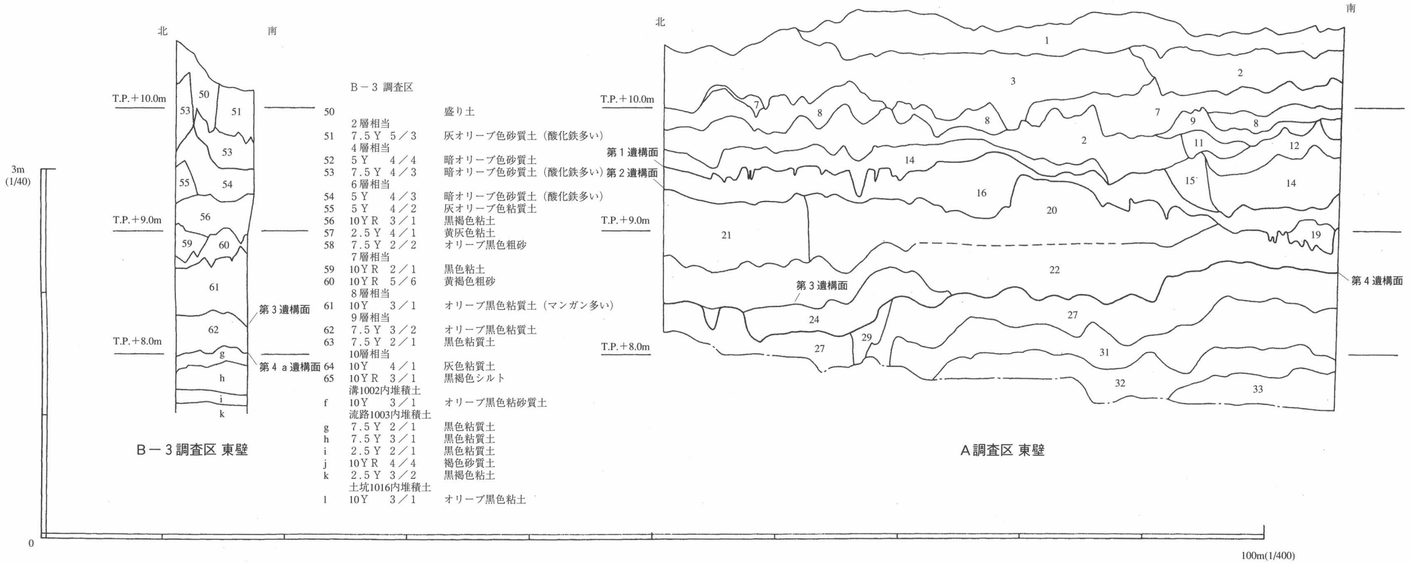
第11層　オリーブ黒色～緑灰色粘質土を主体とする土層である。調査区の東側と西側では第12層が沈み込んでおり、その上に堆積した粘土層である。

第12層　黒系統の粗砂を主体とする層で、調査区全体に厚く堆積している。調査区中央では層厚１ｍ以上に達する。調査区西側での隆起が激しく、第４遺構面にも露出している部分がある。



第７図　Ａ調査区第１、２遺構面遺構配置図





Ａ調査区

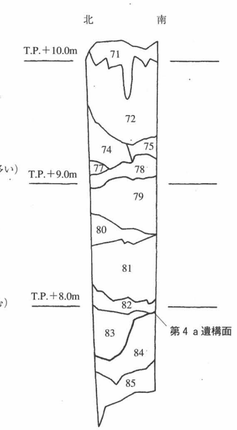
	１層相当		
1	5Ｙ	5／2	灰オリーブ色シルト
	２層相当		
2	5Ｙ	5／4	オリーブ色シルト
3	10ＹＲ	8／6	黄橙色砂質土
4	10ＹＲ	8／6	黄橙色砂質土
5	10ＹＲ	7／8	黄橙色シルト
6	10ＹＲ	4／2	灰黄褐色砂質土
	３層相当		
7	5ＰＢ	2／1	青黒色シルト
8	2.5Ｙ	5／2	黒灰黄色シルト
9	10ＹＲ	6／8	明黄褐色砂質土
10	7.5Ｙ	4／3	暗オリーブ色シルト
	４層相当		
11	2.5Ｙ	4／1	黄灰色粘土
12	10ＹＲ	3／2	黒褐色砂粘土
13	10ＹＲ	6／1	褐灰色粘質土
	５層相当		
14	10ＹＲ	7／6	明黄褐色粗砂
15	2.5Ｙ	4／1	黄灰色粘土
	６層相当		
16	2.5Ｙ	5／2	暗灰黄色粘土
17	5Ｙ	3／1	オリーブ黒色粘土
18	5Ｙ	4／3	暗オリーブ色粘土
	７層相当		
19	5Ｙ	4／3	暗オリーブ色砂
	８層相当		
20	2.5Ｙ	5／1	黄灰色粘質土
21	5Ｙ	3／1	オリーブ黒色粘土
22	5Ｙ	4／3	暗オリーブ色粘土
23	5Ｙ	4／4	暗オリーブ灰色粘土
	９層相当		
24	7.5Ｙ	4／1	灰色粘土
25	7.5Ｙ	3／2	オリーブ黒色粘土
26	7.5Ｙ	3／2	オリーブ黒色粘土
	10層相当		
27	7.5Ｙ	3／2	オリーブ黒色シルト
28	5Ｙ	4／2	灰オリーブ色シルト
29	10Ｙ	4／1	灰色粘土
30	7.5Ｙ	2／1	黒色粘土
	11層相当		
31	7.5Ｙ	2／2	オリーブ黒色粘土
32	2.5Ｇ	2／1	黒色粘土
33	10ＧＹ	6／1	緑灰色粘質土
	12層相当		
34	5ＹＲ	2／2	黒褐色粗砂
35	10ＹＲ	3／2	黒褐色粗砂
36	5ＹＲ	5／6	明赤褐色粗砂
	谷状落ち込み内堆積土		
a	5ＧＹ	2／1	暗オリーブ灰色粘土
b	5ＧＹ	2／1	暗オリーブ灰色粘土
	流路0183内堆積土		
c	7.5Ｙ	3／2	オリーブ黒色粘土
d	5　Ｙ	3／2	オリーブ黒色粘質土
e	5　Ｙ	4／3	暗オリーブ色粘質土

Ｂ－３ 調査区

50			盛り土
	２層相当		
51	7.5Ｙ	5／3	灰オリーブ色砂質土（酸化鉄多い）
	４層相当		
52	5Ｙ	4／4	暗オリーブ色砂質土
53	7.5Ｙ	4／3	暗オリーブ色砂質土（酸化鉄多い）
	６層相当		
54	5Ｙ	4／3	暗オリーブ色砂質土（酸化鉄多い）
55	5Ｙ	4／2	灰オリーブ色粘質土
56	10ＹＲ	3／1	黒褐色粘土
57	2.5Ｙ	4／1	黄灰色粘土
58	7.5Ｙ	2／2	オリーブ黒色粗砂
	７層相当		
59	10ＹＲ	2／1	黒色粘土
60	10ＹＲ	5／6	黄褐色粗砂
	８層相当		
61	10Ｙ	3／1	オリーブ黒色粘質土（マンガン多い）
	９層相当		
62	7.5Ｙ	3／2	オリーブ黒色粘質土
63	7.5Ｙ	2／1	黒色粘質土
	10層相当		
64	10Ｙ	4／1	灰色粘質土
65	10ＹＲ	3／1	黒褐色シルト
	溝1002内堆積土		
f	10Ｙ	3／1	オリーブ黒色粘砂質土
	流路1003内堆積土		
g	7.5Ｙ	2／1	黒色粘質土
h	7.5Ｙ	3／1	黒色粘質土
i	2.5Ｙ	2／1	黒色粘質土
j	10ＹＲ	4／4	褐色砂質土
k	2.5Ｙ	3／2	黒褐色粘土
	土坑1016内堆積土		
l	10Ｙ	3／1	オリーブ黒色粘土

Ｂ－４ 調査区

71			盛り土
	２層相当		
72	2.5Ｙ	4／6	オリーブ褐色砂質土
73	5Ｙ	4／3	暗オリーブ色砂質土
	５層相当		
74	2.5Ｙ	4／3	オリーブ褐色砂質土（底面に酸化鉄多い）
75	2.5Ｙ	6／1	黄灰色砂質土
76	5Ｙ	4／2	灰オリーブ色シルト
	６層相当		
77	2.5Ｙ	5／1	黄褐色粘土
	７層相当		
78	2.5Ｙ	4／1	黄灰色砂
	８層相当		
79	5Ｙ	4／1	灰色粘土（底面は砂多く含む）
	８層相当		
80	5Ｙ	2／2	オリーブ黒色粘質土（酸化鉄多い）
81	5Ｙ	3／2	オリーブ黒色粘質土（有機質多く含む）
	９層相当		
82	5Ｙ	2／1	黒色粘土
83	5ＹＲ	2／1	黒褐色砂質土
	10層相当		
84	7.5Ｙ	4／1	灰色砂質土
85	10Ｙ	5／1	灰色砂
	溝1108内堆積土		
k	7.5Ｙ	4／1	灰色粘質砂質土
l	10Ｙ	2／1	黒色粘土
m	10Ｙ	3／1	オリーブ黒色粘土



第８図　Ｂ－３，Ａ，Ｂ－４ 調査区 土層断面図

第2節　第１～３遺構面の調査概要

第１遺構面

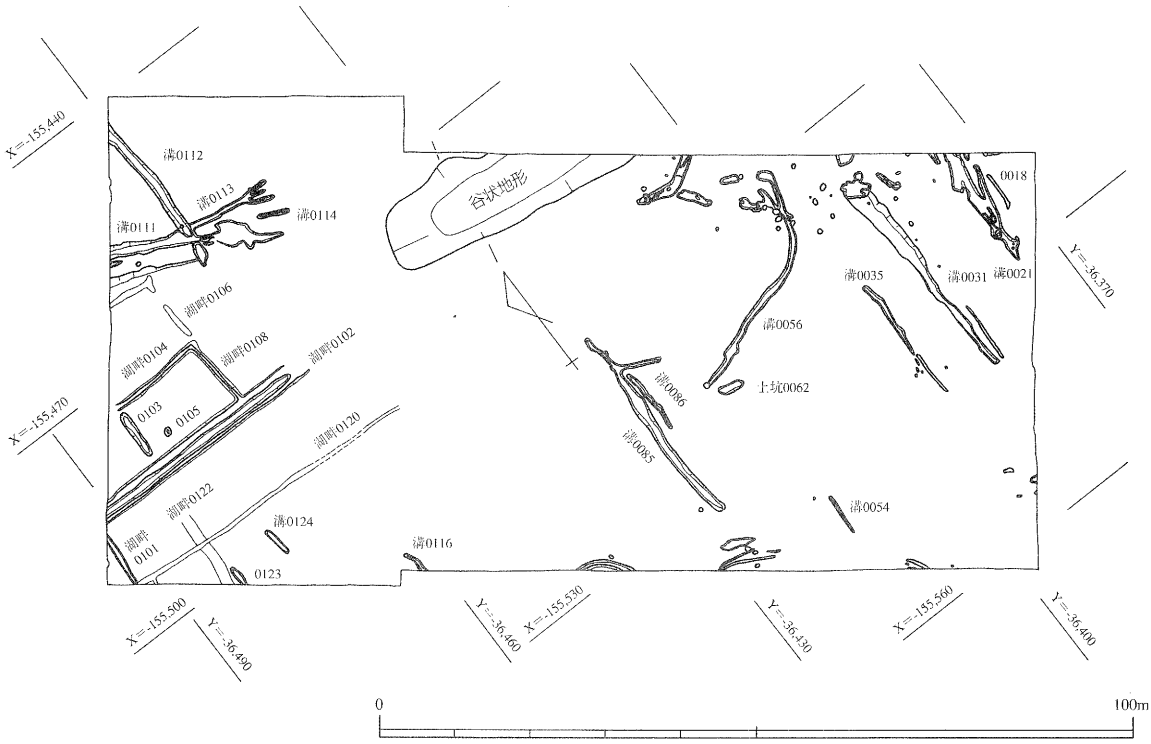
第５層の砂層に被覆される遺構面であり、地表面より約1.5mのレベルで検出されている。５層の砂層を除去することによって遺構面があらわれた。第１遺構面の検出遺構は溝と畦畔が主体であり、東西・南北方向を示している。何らかの理由で流失しているのか、遺構は調査区の端に偏って検出された。東端の溝と西端の溝の間隔は約110mである。遺物に染付が含まれることから、17世紀以降の水田面と考えられる。

第２遺構面

地表下約1.7mのレベルで検出された遺構面である。上面は第７層の砂で覆われており、第７層の砂を除去した下から溝、畦畔などの遺構が検出された。足跡などは全域から検出されているが、遺構の検出されたのは調査区内でも西側に限られる。調査区西南端で畦畔や溝が互いに直行する状態で検出されており、東西30m×南北20mの区画が想定できる部分がある。時期的には15世紀を前後するものと考えられる。

第３遺構面

厚く堆積した第８層直下に形成された遺構面で、第９層の上面を基盤としている。この遺構面で検出された遺構は、溝と畦畔が主体である。しかしながら、調査区の中でも西側と東側とでは遺構の様相が若干異なっている。東側は南北方向の溝が主体であり、耕作溝の痕跡のようにも見えるが、間隔はバラバラである。対して調査区の西側では、畦畔と溝が縦横に直行するように検出されている。溝や畦畔の間隔も東西方向で20数mである。また、畦畔の残る地域では、多数の足跡が発見されている。時期的にはA調査区では９～10世紀を中心とする時期の遺構が発見されている。



第９図　A調査区第３遺構面遺構配置図

遺構

溝

溝0056　１－M21～Ｐ17地区に所在する溝であり、北から西へ弓状に伸びている。幅70～100ｃｍ、深さ10ｃｍで、内部には5Y4/4暗オリーブ色砂質土が堆積している。

溝0085　１－M15～Ｓ15地区に所在する南北方向の溝である。幅は約1.2m、深さは10～20ｃｍで、内部には5Y4/4暗オリーブ色砂質土が堆積している。

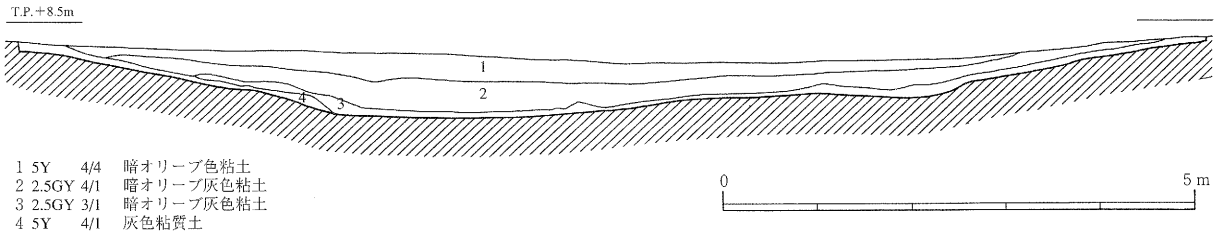
溝0102　１－Ｉ２～Ｉ９地区で検出された東西方向の溝である。最大幅1.3m、深さ20ｃｍで、内部には10YR2/3黒褐色砂質土が堆積している。畦畔状の盛り上がりの上に設けられており、周囲よりも若干高い位置にある。この溝の基盤となる畦畔状の盛り上がりは、下幅4.5m、高さ30ｃｍである。第４遺構面でも、この遺構のあった位置は周囲よりも高くなっていた。また第２面においても同じ位置に畦畔が踏襲されており、区割りの基準であった可能性もある。

溝0111　１－Ｄ６～Ｆ10地区付近に広がる東西方向の溝で、途中で溝0112が斜めに取りつく形である。幅は1～1.5mであるが、途中のふくらんだところでは幅２ｍにもなる。深さは10～20ｃｍ程度であり、内部には10YR2/2黒褐色砂質土が堆積していた。

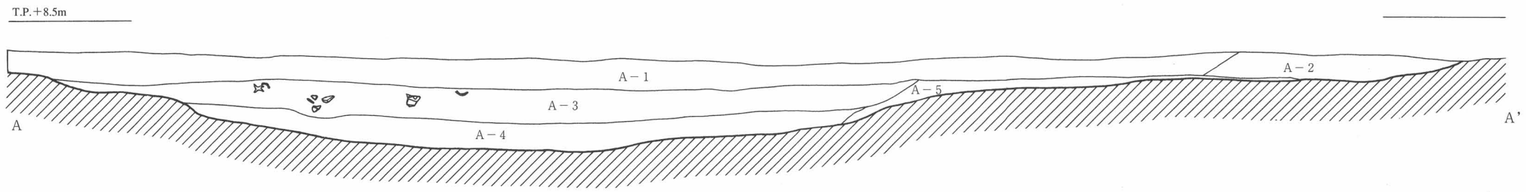
溝0112　１－Ａ８～Ｄ８地区に所在する溝である。南北方向の溝で、幅約1.5m、深さ20ｃｍであり、内部には10YR2/2黒褐色砂質土が堆積していた。

谷状地形

谷状地形　調査区の中央部にあたる１－Ｉ12～Ｈ16、Ｊ19地区付近に所在しており、下層の砂層（12層）を基盤に形成された谷状の地形である。検出部分で、幅11.5m、深さ１ｍをはかる。内部の堆積土は均質で黒っぽい粘土層が主体であり、大きく３層に分けられる。上層は5Y4/4暗オリーブ色粘土、中層は2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土、下層は2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土である。植物質が腐敗したような臭気がしており、淀みで堆積したような環境と思われる。この谷状地形の上を第８層が覆っており、谷状地形の形成時期以降、周辺一帯が湿地化していたの時期があったのではないかと思われる。遺物は瓦器など中世遺物を主体とする。弥生中期の土器も出土するが、周囲にあった古い時期の遺構から崩落したものである。

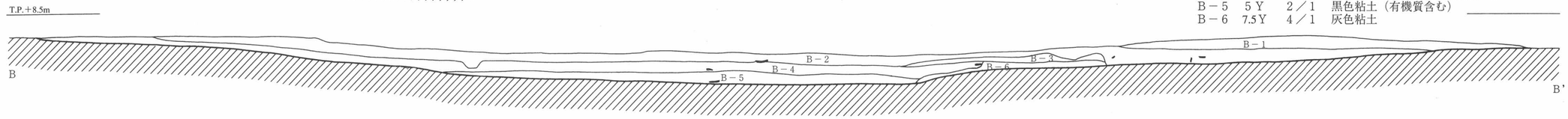


第 10 図　A調査区中世谷状地形土層断面図



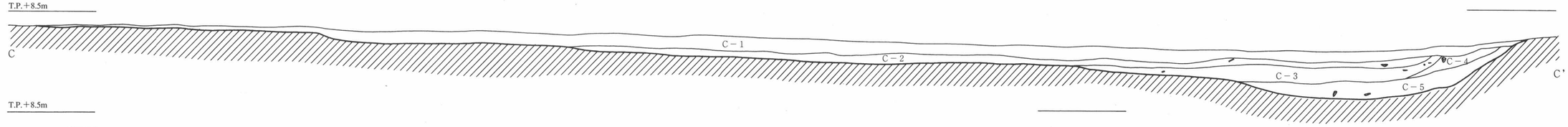
A断面

A－1	7.5Y	3／2	オリーブ黒色粘土	A－4	5Y	4／3	暗オリーブ色粘質土
A－2	7.5Y	3／2	オリーブ黒色粘質土	A－5	5Y	4／1	灰色粘質土
A－3	5Y	3／2	オリーブ黒色粘質土				



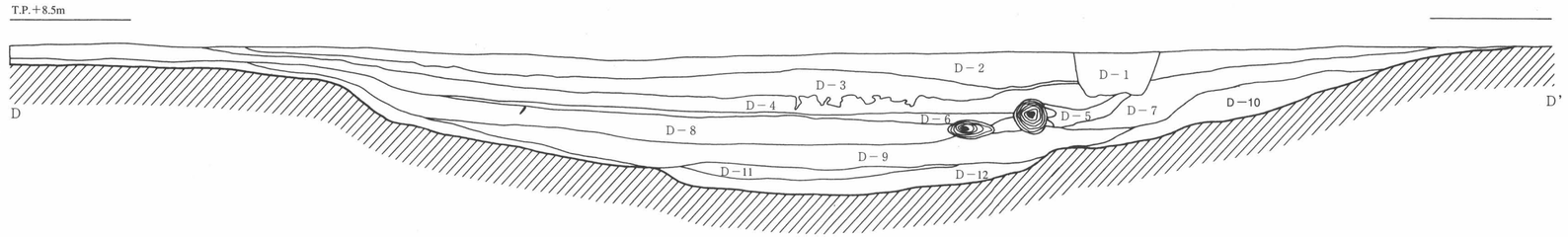
B断面

B－1	5Y	3／2	オリーブ黒色粘土（炭含む）
B－2	2.5GY	4／1	暗オリーブ灰色粘土（炭含む）
B－3	5GY	4／1	暗オリーブ灰色粘土（有機物含む）
B－4	5Y	3／1	オリーブ黒色粘土（有機質含む）
B－5	5Y	2／1	黒色粘土（有機質含む）
B－6	7.5Y	4／1	灰色粘土



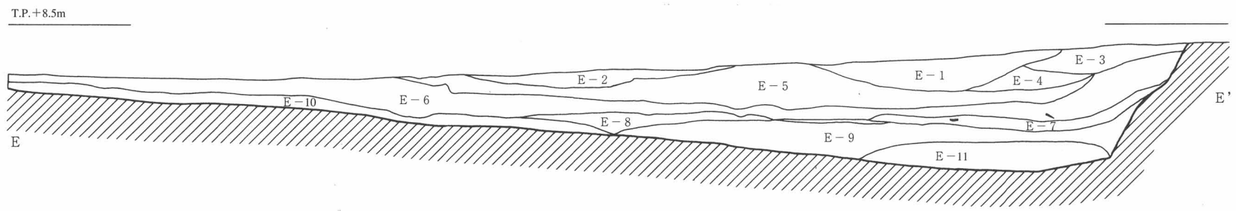
C断面

C－1	7.5Y	3／2	オリーブ黒色粘土
C－2	5Y	3／1	オリーブ黒色粘土
C－3	5Y	3／2	オリーブ黒色粘質土
C－4	10GY	6／1	緑灰色シルト
C－5	5Y	4／2	灰オリーブ色砂質土（有機物含む）



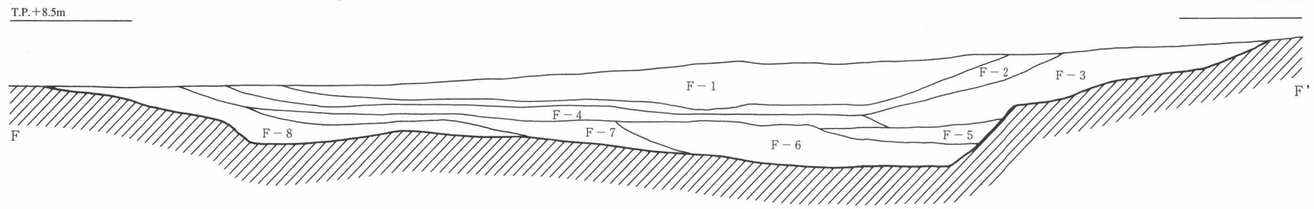
D断面

D－1	5Y	5／1	灰色粘土
D－2	5Y	4／1	灰色砂質土
D－3	5Y	4／1	灰色シルト
D－4	5Y	3／2	オリーブ黒色粘質土
D－5	5Y	3／2	オリーブ黒色砂質土
D－6	5Y	4／2	灰オリーブ色粘質土
D－7	5Y	3／2	オリーブ黒色粘土
D－8	5Y	4／3	暗オリーブ色粘質土
D－9	5Y	3／2	オリーブ黒色粘質土
D－10	5Y	4／3	暗オリーブ色粘土
D－11	5Y	5／1	灰色粗砂
D－12	5Y	4／1	灰色砂質土



E断面

E－1	7.5Y	4／3	暗オリーブ色砂質土
E－2	5Y	4／1	灰色粘質土
E－3	10Y	4／1	灰色粘土
E－4	10Y	4／1	灰色粘質土
E－5	5Y	3／2	オリーブ黒色粘質土（炭含む）
E－6	5Y	3／1	黒褐色粘質土
E－7	5Y	4／3	暗オリーブ色粘質土
E－8	5Y	4／3	暗オリーブ色粘土
E－9	10YR	2／3	黒褐色粘質土（有機質含む）
E－10	5Y	4／3	暗オリーブ色シルト
E－11	10YR	4／3	にぶい黄褐色粘土

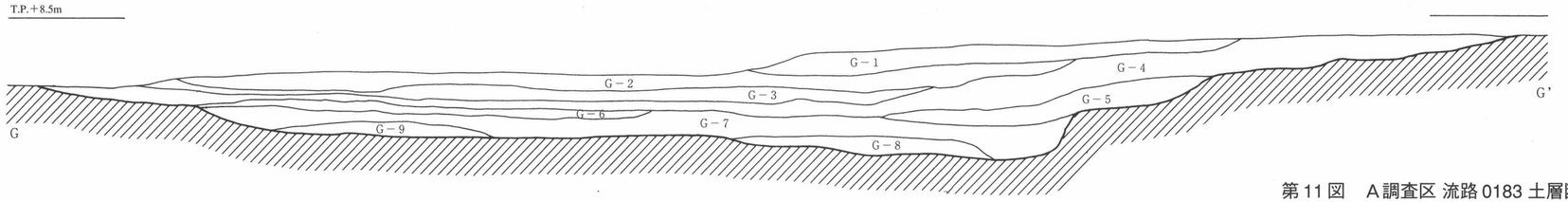


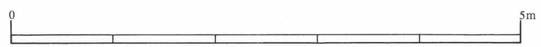
F断面

F－1	5Y	4／1	灰色粘質土（砂含む）
F－2	5Y	3／2	オリーブ黒色粘土（炭含む）
F－3	2.5Y	3／1	黒褐色粘質土（炭含む）
F－4	5Y	4／1	灰色シルト（炭含む）
F－5	2.5Y	2／1	黒色粘質土
F－6	5Y	2／1	黒色粘質土（有機質含む）
F－7	5Y	3／1	オリーブ黒色粘質土
F－8	5Y	5／1	灰色粘質土

G断面

G－1	5Y	4／1	灰色粘質土（酸化鉄含む）
G－2	5Y	3／2	オリーブ黒色粘質土（炭含む）
G－3	5Y	4／1	灰色シルト（炭含む）
G－4	2.5Y	3／1	黒褐色粘質土（有機物含む）
G－5	10YR	2／2	黒褐色粘質土（炭含む）
G－6	5Y	3／2	オリーブ黒色粘土
G－7	10YR	2／3	黒褐色粘質土（有機物含む）
G－8	5Y	4／1	灰色シルト
G－9	5Y	4／3	暗オリーブ色粗砂





第11図　A調査区 流路0183 土層断面図

第３節　第４遺構面の調査概要

第４遺構面は第10層の上面に形成された遺構面である。第４遺構面でも西側の地区では12層の砂層が隆起、露出している。第４遺構面を構成するものとして、流路、溝、土坑などがあり、掘立柱建物は確認していない。時期的には弥生時代前期を主体にしており、特に顕著な遺構として流路0183があり、流路0183を中心に、弥生時代前期の土器を主体にした多量の遺物群が発見されている。弥生時代中期、古墳時代の遺構も第４遺構面上において検出しているが、本来は上層からの掘り込みであった可能性もある。

１．弥生時代前期

流路

流路0183（遺物：第37図１～第71図638）　この流路は、調査区東側の１－M21～23地区付近から北東より南西の方向へと進んで、南端の１－Ｓ13～16地区付近で方向を変え、さらに西の方向へとすすんで、調査区西端の１－Ｇ４～６地区付近に達する。途中で方位を変えながらも、Ａ調査区を横断するように流れる流路である。断面の形もきっちりそろえられたような形ではなく、場所によってまちまちである。

北端の１－M21～23地区付近（Ａ～Ａ´断面）では深さは80ｃｍ前後、幅は15ｍ前後で、幅は広いながらも深度は比較的浅い。東側の立ち上がりは徐々にレベルを上げながらもだらだら浅く続く様子である。それより25ｍほど南へ下がったＯ17～Ｑ20地区付近（Ｃ～Ｃ´断面）では、深さはさほど変わりないが、幅は19ｍをはかり、西の方へ大きく広がるようにたちあがる。これから南に行くと、深度は若干ながら深くなり、調査区南端で西へ向きを変える。さらに、１－Ｍ７～Ｎ６地区付近（Ｅ～Ｅ´断面）よりも西に行くと、深さは120ｃｍ、幅は12～15ｍをはかり、北側へ向かって大きくひろがるように立ち上がる。

内部堆積土は一番北側の断面（Ａ～Ａ´断面）では大きく３層に分かれる、上層は7.5Ｙ3/2オリーブ黒色粘土、中層は5Y3/2オリーブ黒色粘質土、下層は5Y4/3暗オリーブ色粘質土である。全体的に黒っぽい色合いで、水が澱んでいたような環境を思わせる。上層のオリーブ黒色粘土は、流路0183を覆い込むように堆積している。中層は層厚約40ｃｍで細かい砂を含んでいる。下層は木屑や植物遺体を中心にしながら、多量の有機物を含む傾向がみられる。下流ほど、深度が深くなり、土層の単位も細かくなるように観察された。粘土と粘土の間に砂が入り込み、砂と粘土の互層の状態になる。しかしながら、オリーブ黒色粘土主体の層が中ほどにあり、下層に植物遺体の堆積が集中するという基本的な傾向には変化がない。

遺物の出土状況については、流路0183の埋没後に生じた窪みには、若干ながら弥生時代中期の遺物が含まれていた。周囲にある当該時期の遺構から流れ込んだものであろう。しかしそれ以外は、流路の埋没過程で投棄された、よりも古い時期の遺物しか出土しておらず、全て前期中段階のものである。

第 12 図　A調査区流路0183遺物出土状況

レベル的に遺物が集中するのは、流路0183内でも、中層から下層にかけての部分である。弥生時代前期の遺物が多量に出土しており、その数量はコンテナ百数十箱に及ぶ。遺物同士が互いに重なり合うように出土しており、堆積土も砂と粘土が細かく層をなして堆積しているような状況であった。必ずしも層位毎に分別できるような遺物の出土状況ではなかったが、一応、上、中、下層とわけて取り上げた。平面的には全域から満遍なく出土するが、屈曲部よりも東側からの出土が多い。長期間にわたって少しずつ投棄されたような状態ではなく、短期間にまとめて投棄されたように見受けられる。遺物は時期的には弥生時代前期に収斂する。圧倒的に多いのは壷、甕などの土器であるが、木器類もかなりの数量を占める。

土器は摩滅が進んだものは少なく、残存状況のいいものが多い。木器も鍬などの農具を主体にしながら、椀状の容器もあり、未製品も多く含んでいる。木器も流路の全域から出土するものの、特に集中して出土する部分もある。流路0183の遺物出土状況（第12図）は、第11図のＣ―Ｃ´断面のすぐ南の部分である。この地点の流路の底は周囲よりも若干落ち込んでおり、ここからは鍬などの未製品が比較的まとまって出土している。流路内に杭を打つなど特別な貯留施設を設けた痕跡は発見できなかったが、流路内の深くなったところに製作途中の木器を貯め置いた可能性は充分に考えられる。

溝

溝0252　調査区の東南隅１－Ｘ20～21地区に所在する溝で、２段になっており、幅は３ｍ以上で、深さは40ｃｍである。内部堆積土は大きく２層に分かれており、上層は5Y3/1オリーブ黒色粘土で酸化鉄が沈着しており、下層は5BG4/1暗青灰色粘土が主体となっている。西側の溝0187と連続する遺構である可能性もある。

溝0308（遺物：第72図640～643）　１－Ｄ９～Ｆ９地区に所在する溝状遺構である。南北方向の溝で、検出長12m、幅70～160ｃｍ、深さ25ｃｍである。内部堆積土は上下２層にわかれており、上層は5Y4/4暗オリーブ色砂、下層は5ＢＧ3/1暗青灰色砂が主体である。

溝0317（遺物：第72図644・645）　１－Ｈ７～Ｉ10地区に所在する東西方向の溝で、検出長17ｍ、幅55ｃｍ、深さは20ｃｍ、内部堆積土は5Y2/2オリーブ黒色砂が主体である。溝0378に続くような位置関係に見えるが、時期的には別のものである。

土坑

土坑0127（遺物：第72図646・647）　調査区の東隅１－Ｐ27～Ｑ27地区に所在する不定形土坑である。深さ20～30ｃｍで、内部には5Y2/2オリーブ黒色粘土が堆積している。ミニチュアの壷が出土している。

土坑0128（遺物：第72図648）　１－Ｒ25地区に所在する土坑で、南北1.5m、東西80ｃｍ、深さ30ｃｍである。内部には5Y2/2オリーブ黒色粘土が堆積している。

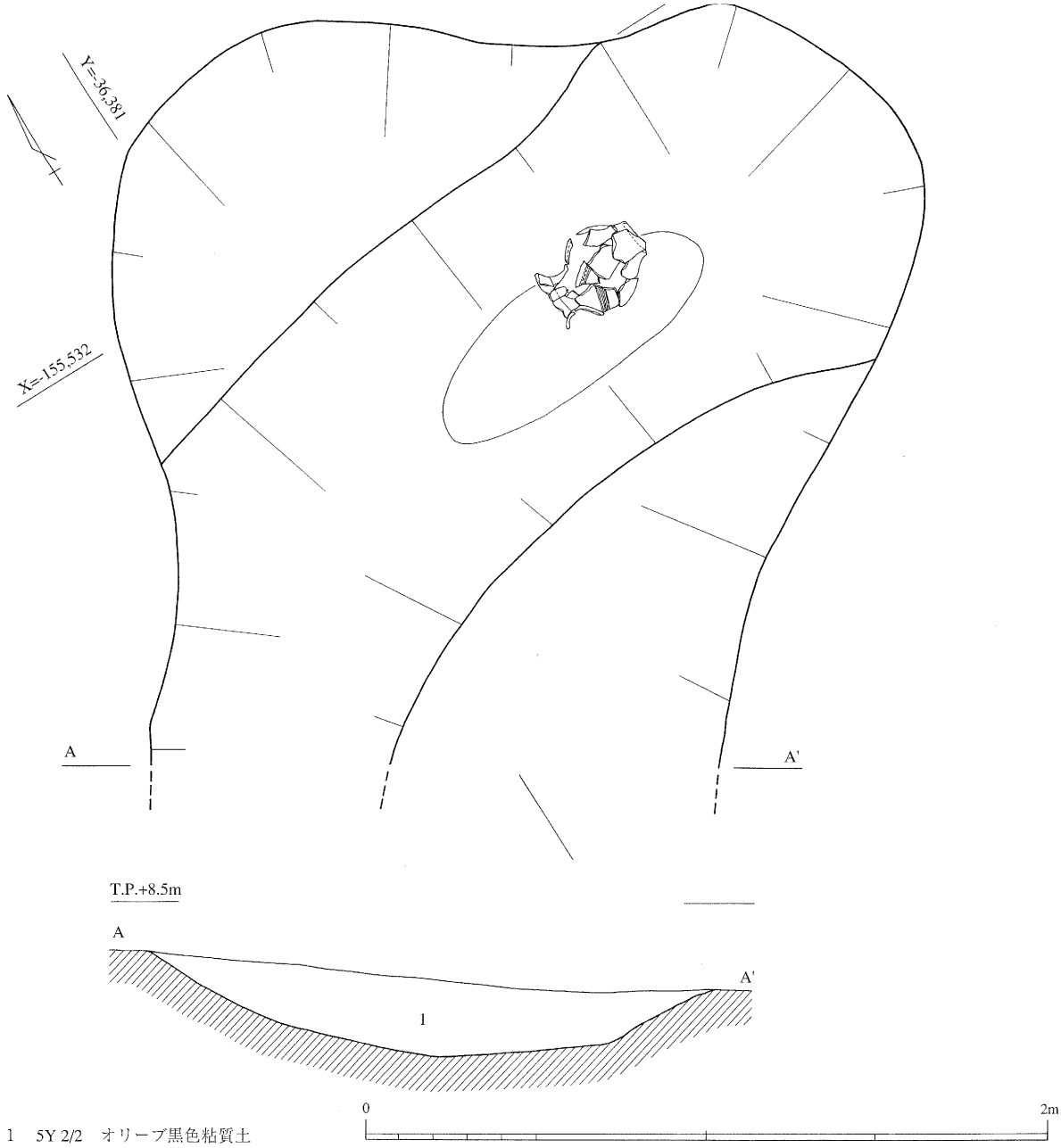
土坑0130　１－Ｕ23～24地区に所在する土坑で、東西1.2m、南北80ｃｍ、深さ30ｃｍである。内部は5Y2/1黒色粘質土が堆積しており、上面では酸化鉄の沈着が激しく観察される。

土坑0131（遺物：第72図649）　1－P25～26地区に所在する土坑である。東西3.9m、南北1.4m、深さ15ｃｍで、内部には5Y2/1黒色粘質土が堆積しており、埋土中には点々と炭が含まれているのが観察された。。

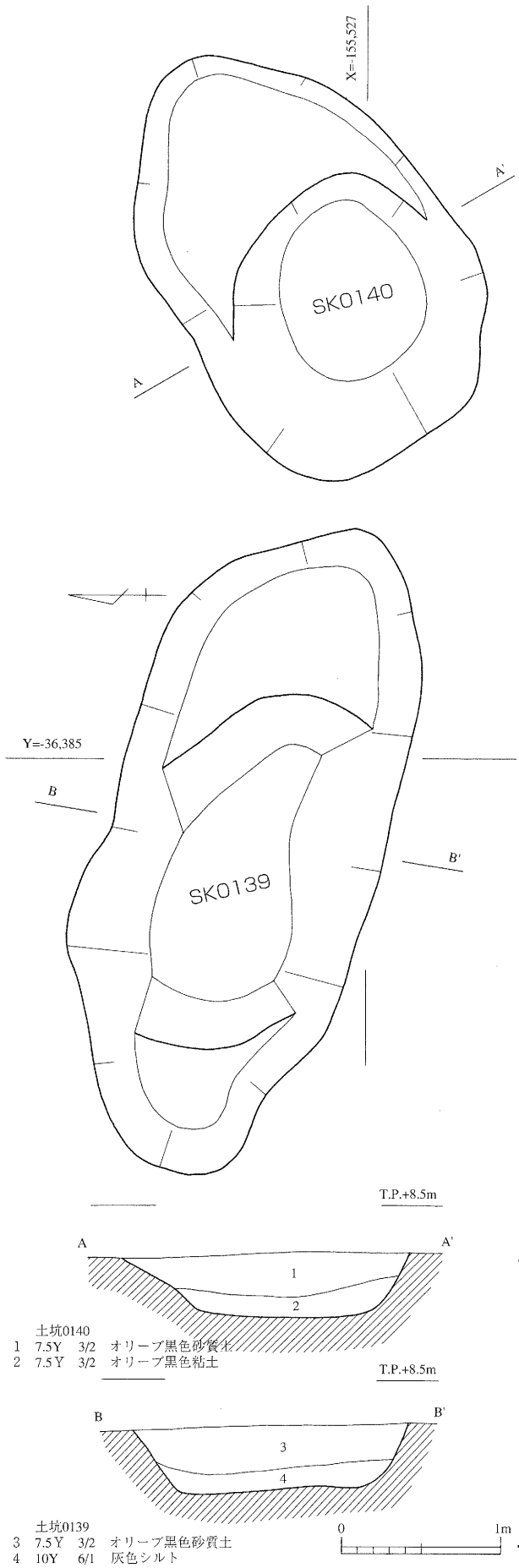
土坑0133（遺物：第73図661～664）　1－S23～25地区に所在する不定形土坑で、南北８ｍ、東西３ｍ、深さ20ｃｍで、底面は西側が若干深くなっている。内部には5Y2/2オリーブ黒色粘質土が堆積しており、酸化鉄の浸透が激しい。壷が横向きの状態で出土している。

土坑0139（遺物：第72図650～660）　1－R23～24地区に所在する不定形土坑で、東西４ｍ、南北1.6m、深さ50ｃｍである。内部堆積土は上下２層にわけられる。上層は7.5Ｙ３/2オリーブ黒色砂質土で炭を多く含んでおり、下層は10Y6/1灰色シルトになっている。

土坑0140（遺物：第73図665～667）　1－R24地区に所在する不定形土坑で、東西2.7m、南北



第 13 図　A調査区土坑0133平面・断面図



第14図　A調査区土坑0139、0140平面・断面図

1、8m、深さ40ｃｍである。内部堆積土は上下２層にわけられる。上層は7.5Y3/2オリーブ黒色砂質土で炭を多く含んでおり、下層は7.5Ｙ3/2オリーブ黒色粘土である。

土坑0144　１－Ｐ25地区に所在する土坑である。南北方向に細長く、東西90ｃｍ、南北2.2m、深さ10ｃｍである。内部には10Y4/2オリーブ灰色粘質土が堆積、炭も含んでいる。

土坑0149　１－Ｕ19地区に所在する。楕円形に近い土坑で、東西1.3m、南北１ｍ、深さ25ｃｍである。内部には5Y2/1黒色粘質土が堆積しており、酸化鉄の浸透がみられる。

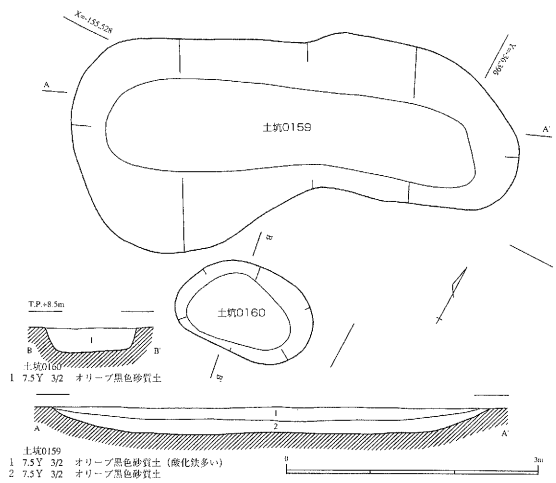
土坑0150　１－Ｕ19地区に所在する。長方形に近い、丸みをもった土坑であり、東西3m、南北85ｃｍ、深さは20ｃｍである。内部には2.5GY 3/1暗オリーブ灰色粘質土が堆積しており、酸化鉄の浸透もみられる。

土坑0151　１－Ｔ19～20地区に所在する。円形に近い土坑で、径2.3m、深さ40ｃｍである。内部堆積土は上下２層にわかれ、上層は5Y3/2オリーブ黒色粘質土で酸化鉄の浸透があり、下層は5Y4/1灰色粘土である。

土坑0152　１－Ｔ19～20地区を中心に広がる円形の土坑である。径２ｍ、深さ30ｃｍをはかり、土坑内部には基本的に5Y3/1オリーブ黒色粘質土が堆積している。

土坑0159（遺物：第73図668～672）１－Ｒ21地区に所在する。東西に細長い不定形の土坑であり、幅は南北2.5m、東西5.3m、深さは35ｃｍである。内部には7.5Ｙ3/2オリーブ黒色砂質土が堆積しており、上部は酸化鉄の沈着が激しい。内部からミニチュアの壷が出土している。

土坑0160（遺物：第73図673）　１－Ｒ21～Ｓ21地区に所在する。東西1.6m、南北１ｍ、深さ



第15図　A調査区土坑0159、0160平面・断面図

25ｃｍで、内部には7.5Ｙ3/2オリーブ黒色砂質土が堆積している。

土坑0175　１－Ｒ19地区に所在する円形に近い不定形土坑で、東西1.7ｍ、南北1.9ｍ、深さ15ｃｍである。内部には5G2/1緑黒色粘土が堆積しており、酸化鉄の沈着がみられる。

土坑0181　１－Ｔ19地区に所在する円形土坑で、径１ｍ、深さ30ｃｍである。、内部には5Y3/1 オリーブ黒色粘質土が堆積しており、上面では酸化鉄の浸透がみられる。

土坑0182　１－Ｔ18地区に所在する細長い土坑である。東西2.55ｍ、南北1.05ｍ、深さ25ｃｍで、内部には2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘質土が堆積している。

土坑0189　１－Ｔ17地区に所在する南北に細長い土坑で、東西1.5ｍ、南北4.5ｍ、深さ30ｃｍである。内部には7.5Y4/1灰色粘土が堆積し、炭を含んでおり、酸化鉄の浸透もみられる。

土坑0228　Ｓ19～Ｔ19地区付近に所在する。浅い不定形土坑であり、東西2.5ｍ、南北８ｍ、深さ15ｃｍで、内部には5Y3/1オリーブ黒色粘質土が堆積している。

土坑0250（遺物：第74図687～689）　Ｒ25～Ｓ25付近に所在する大きな落ち込み状の遺構である。調査区東端に接しており、一部分しか検出されていないが、隅丸方形状のようにもみえる。深さは30～50ｃｍ、内部には5Y3/2オリーブ黒色粘土が堆積している。

土坑0251　調査区東壁に接するように１－Ｕ24～W22地区で検出された円形の落ち込みである。検出長で南北14.5ｍ、深さ20ｃｍで、内部には5Ｙ3/2オリーブ黒色粘土が堆積しており、上面には酸化鉄の沈着がみられる。底部にも小さな落ち込み状の土坑が見られる。

土坑0253　１－Ｑ25地区に所在する。浅くて大きな不定形土坑である。東西2.5ｍ、南北3.3ｍ、深さ16ｃｍで、内部には10GY4/1暗緑灰色シルトが堆積している。

土坑0255（遺物：第75図690～694）　１－W22～Ｘ22地区にある不定形土坑で、東西２ｍ、南北３ｍ、深さ20ｃｍである。内部には10Y2/1黒色粘質土が堆積している。

土坑0256（遺物：第75図695・696）　１－Ｘ21地区に所在する土坑であり、溝0252と土坑0255の間の地点に所在している。長さは東西２ｍ、南北１ｍで、深さは25ｃｍをはかる。内部堆積土は上下２層にわけられる。上層は5Y3/1オリーブ黒色粘土で、下層は5BG4/1暗青灰色粘土となっている。

土坑0258　１－Ｖ20地区にある方形状の土坑で、東西1.7ｍ、南北2.1ｍ、深さ35ｃｍである。内部堆積土は２層で、上層は5Y3/1オリーブ黒色粘土、下層は5BG4/1暗青灰色粘土が主体で、上層は酸化鉄の沈着がみられる。

土坑0259（遺物：第75図697）　１－Ｕ20地区にあり、土坑0266と重複している。東西1.7ｍ、南

北1.4m、深さ40ｃｍである。内部には5Y4/1灰色粘土が堆積している。炭を含んでおり、酸化鉄の沈着もみられる。

土坑0261　１－Ｔ23地区に所在する細長い土坑である。東西2.4m、南北１ｍ、深さ30ｃｍで、内部には5Y3/1オリーブ黒色粘土が堆積している。酸化鉄の浸透がみられる。

土坑0262（遺物：第75図698～700）　１－Ｋ19地区に所在する土坑で、他遺構と切り合っており、全形は不明である。深さ10ｃｍで、5Y3/2オリーブ黒色粘土が堆積している。

土坑0263（遺物：第76図701～第77図724）１－Ｌ20地区に所在する。東西に広がる不定形状土坑で、東西４ｍ、南北２ｍ、深さ10ｃｍで、内部には10YR3/2黒褐色砂質土が堆積している。

土坑0266（遺物：第78図730）　１－Ｕ20～Ｖ20地区に所在する円形に近い土坑で、径1.4m、深さ40ｃｍである。内部には10YR3/2黒褐色砂質土が堆積している。

土坑0267　１－Ｌ19地区に所在する土坑で、東西1.40m、南北3.16m、深さ26ｃｍである。内部には2.5Ｙ3/2黒褐色粘質土が堆積しており、粗い砂層をも含んでいる。

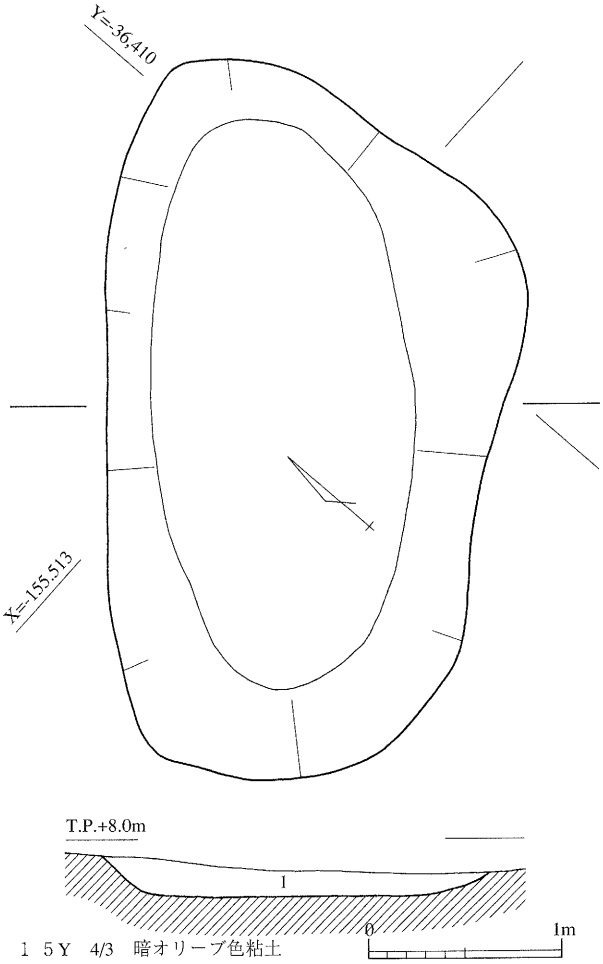
土坑0269（遺物：第78図734・735）　１－M19地区に所在する不定形の土坑であり、東西1.8m、南北1.05m、深さ20ｃｍで、内部には10YR2/1黒色砂質土が堆積している。

土坑0270　１－Ｎ20地区に所在する。自然流路0183の西側の肩にあたる部分に所在する。円形に近い形の土坑であり、東西80ｃｍ、南北１ｍ、深さ30ｃｍで、内部には10Y3/2黒褐色粘土が堆積している。

土坑0272（遺物：第78図725～729）１－Ｎ14～15地区所在、東西４ｍ、南北1.9m、深さ15ｃｍで、10YR2/1黒色砂質土が堆積している。

土坑0286（遺物：第78図731～733）１－M19～Ｎ19地区に所在する。東西方向にひろがる土坑である。東西1.3m、南北20ｃｍ、深さ20ｃｍで、土坑内部には基本的に10YR2/1黒色砂質土が堆積している。

土坑0297（遺物：第79図747～第81図784）流路0183の西側の肩部に当たる１－Ｏ18地区に所在する。東西2.2m、南北3.8mで、深さ10～20ｃｍである。内部には5Y4/3暗オリーブ色粘土が堆積しており、弥生時代前期の遺物が投棄されたような状況で検出されている。基本的には流路0183から出土した遺物と基本的には同じ性格のものと推測される。



第16図　A調査区土坑0297平面・断面図

土坑0302（遺物：第78図736～739）　１－Ｃ11

～12地区に所在する土坑で、東西１ｍ、南北1.6ｍ、深さ20ｃｍ、内部には2.5Ｙ3/2黒褐色砂質土が堆積している。

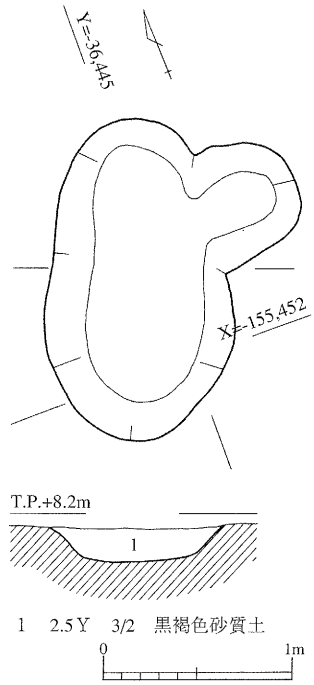
土坑0304（遺物：第78図740～746）　１－Ｂ10地区に所在する土坑で、東西3.2ｍ、南北1.5ｍ、深さ30ｃｍで、内部には2.5Ｙ3/2黒褐色砂質土が堆積している。

土坑0307　１－Ｃ10～Ｄ10地区に所在する土坑であり、東西1.6ｍ、南北1.8ｍ、深さ15ｃｍである。内部には5Y 3/2オリーブ黒色粘質土が主体に堆積しており、底面には酸化鉄の沈着が激しい。

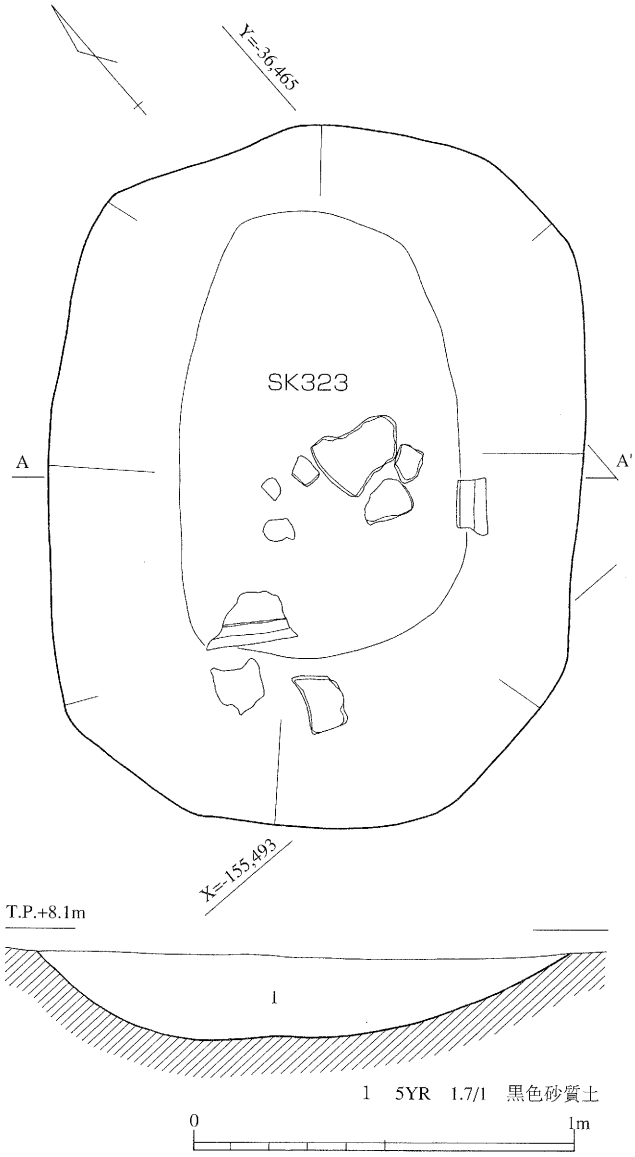
土坑0311　１－Ｅ９地区に所在する土坑である。隅丸三角形に近い形で、東西2.7ｍ、南北2.3ｍ、深さ10ｃｍで、内部には5Y4/2灰オリーブ色砂質土が堆積している。

土坑0316　１－Ｇ８地区に所在する土坑である。東西2.5ｍ、南北1.9ｍ、深さ30ｃｍで、内部には2.5Y2/1黒色粘土が堆積している。底面には11層（砂層）が露出している。

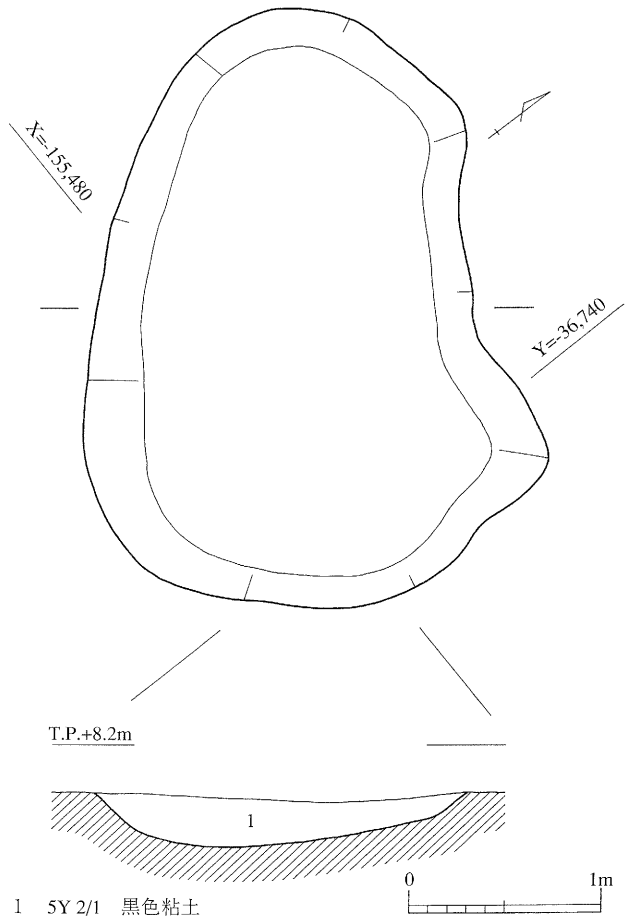
土坑0319（遺物：第99図）　１－Ｈ８地区に所在する円形土坑で、径50ｃｍ、深さ10ｃｍ、内部には5Y2/1黒色粘土が堆積している。この土坑からは石包丁が４



第17図　A調査区土坑0302平面・断面図



第18図　A調査区土坑0323平面・断面図

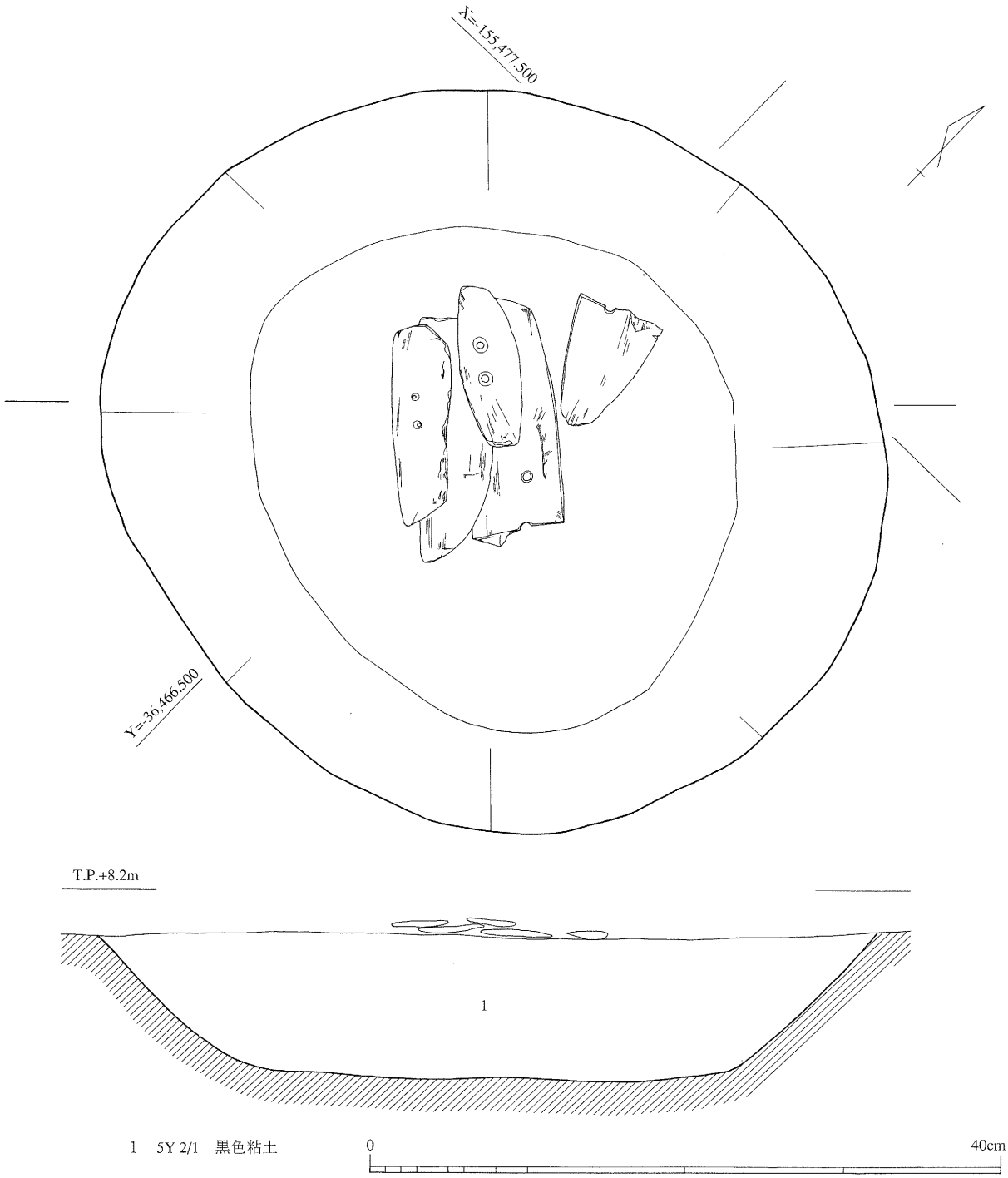


第19図　A調査区土坑0320平面・断面図

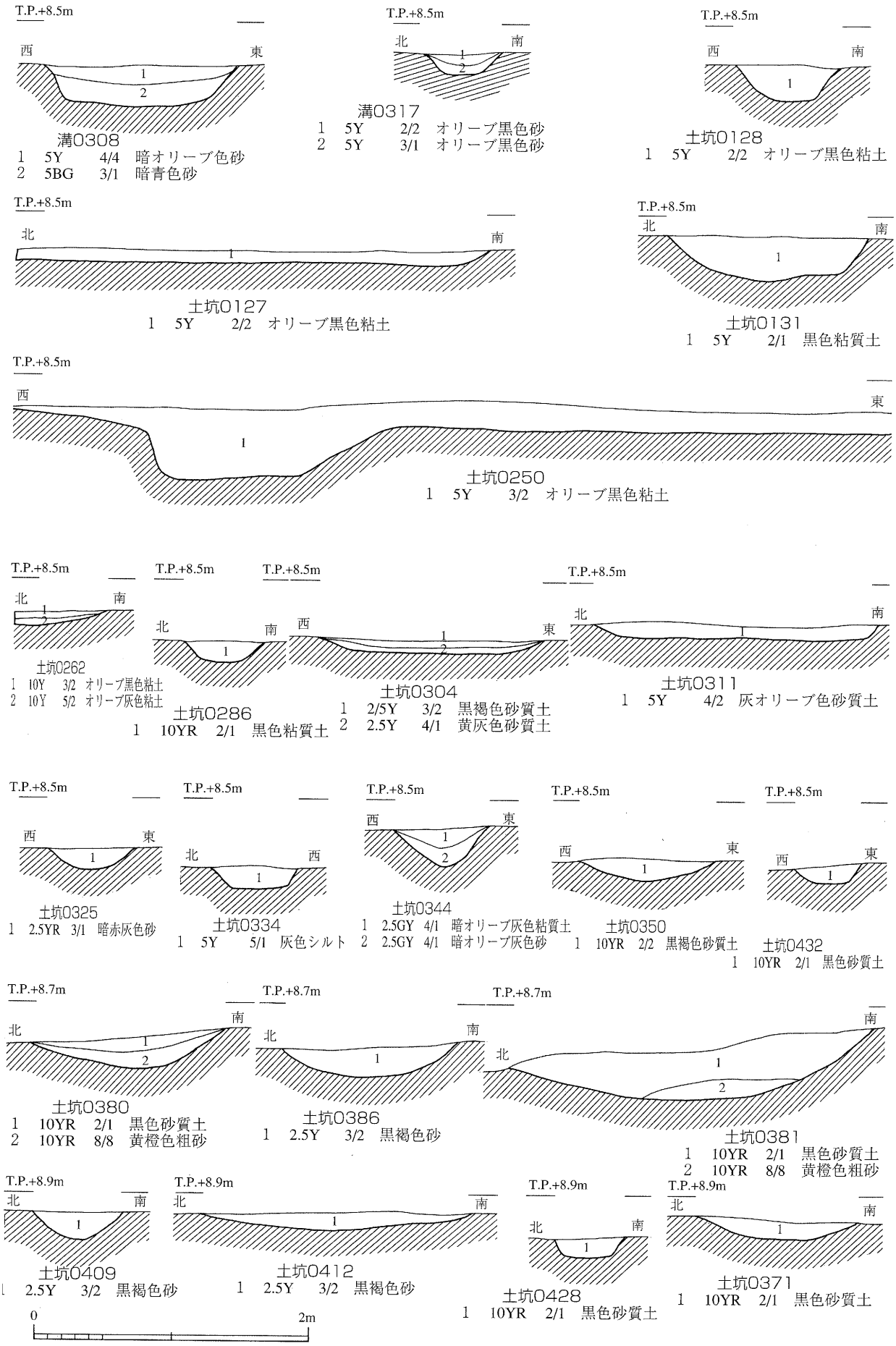
本分出土している。その内の１本はふたつに割れていたが、刃部を東北方向に向け、互いに重ね合わせたような状態で出土している。土坑の内部におさめられていたものと推測される。

土坑0320（遺物：第82図785～799）　１－Ｈ６～Ｉ６地区に所在する土坑である。東西3.1ｍ、南北2.4ｍ、深さ30ｃｍ、内部には5Y 2/1黒色粘土が堆積している。

土坑0321　１－Ｊ８地区に所在する細長い土坑である。東西１ｍ、南北３ｍ、深さ20ｃｍで、内部には10YR 2/1黒色砂質土が堆積している。



第 20 図　A調査区土坑0319平面・断面図



第 21 図　A調査区弥生時代前期遺構土層断面図

土坑0323（遺物：第83図800～803）　１－Ｌ７～Ｌ８地区に所在する土坑であり、東西1.4m、南北1.8m、深さ20ｃｍ、内部には5YR1.7/1黒色砂質土が堆積しており、底部からは土器片が散乱するような状態で出土している。

土坑0325（遺物：第83図804）　１－Ｌ９地区に所在する土坑である。東西70ｃｍ、南北1.2m、深さ20ｃｍである。内部には2.5YR3/1暗赤灰色砂が堆積している。土坑底面には、壺の底部などの土器片が若干散らばっていた。

土坑0326　１－Ｌ９地区に所在する土坑である。東西1.9m、南北1.6m、深さ20ｃｍで、底面は平坦である。内部には5Y3/2オリーブ黒色粘土が堆積している。

土坑0327　１－M10地区に所在する。半月形の土坑で、東西約５ｍ、南北1.6m、深さ15ｃｍで、内部には5Y3/2オリーブ黒色粘土が堆積している。

土坑0328（遺物：第83図805）　１－Ｎ10地区に所在する。東西1.6m、南北1.8m、深さ30ｃｍの土坑で、内部には5Y3/2オリーブ黒色粘土が堆積している。

土坑0332　１－Ｎ９地区に所在する土坑で、東西１ｍ、南北1.2m、深さ20ｃｍ、内部には2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂質土が堆積している。

土坑0333　１－Ｏ９地区に所在する土坑である。東西1.7m、南北１ｍ、深さ10ｃｍの土坑で、内部には5Y5/1灰色シルトが堆積している。

土坑0334（遺物：第83図806）　１－Ｏ９地区に所在する土坑である。東西60ｃｍ、南北1.3m、深さ15ｃｍで、内部には5Y5/1灰色シルトが堆積している。

土坑0339（遺物：第84図807～829）　１－Ｎ11～Ｏ11地区に所在する。南北方向に長く延びる土坑である。東西1.6m、南北3.3m、深さ10～20ｃｍ、内部堆積土は上下２層にわかれ、上層は10YR3/1黒褐色砂質土、下層は10YR4/1褐灰色砂質土である。土坑底面には壺や甕などの破片が散乱しており、口縁部を東の方に向けた完形の壺なども含まれている。

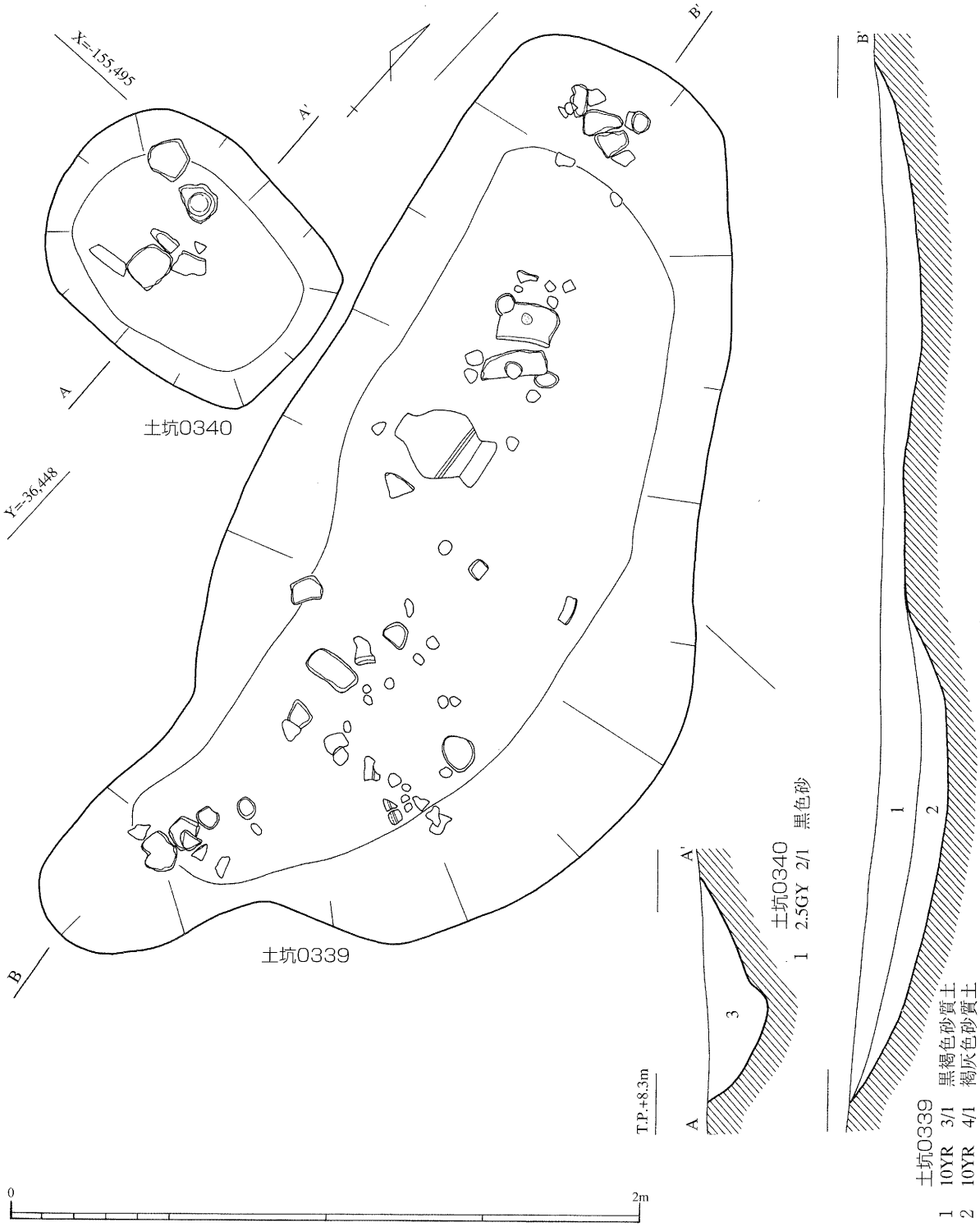
土坑0340（遺物：第85図830・831）　１－Ｏ11地区に所在する土坑で、東西95ｃｍ、南北70ｃｍ、深さ20ｃｍである。内部には2.5GY2/1黒色砂が堆積しており、底面には土器片が散乱していた。

土坑0344（遺物：第85図832）　１－M11地区に所在する土坑である。東西70ｃｍ、南北90ｃｍ、深さ20ｃｍであり、内部堆積土は上下２層にわけられる。上層は2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土で、下層は2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂である。

土坑0349　１－Ｍ８～９地区に所在する土坑である。東西1.1m、南北90ｃｍ、深さ10ｃｍで、内部には5Y3/2オリーブ黒色粘土が堆積している。

土坑0350（遺物：第86図834～836）　１－Ｍ８地区に所在する土坑で、東西1.1m、南北3.5m、深さ20ｃｍ、内部には10YR2/2黒褐色砂質土が堆積しており、土坑南端から土器片が出土している。

土坑0371（遺物：第86図837）　１－Ｌ14地区に所在する土坑で、砂層（12層）上の遺構である。東西２ｍ、南北1.2m、内部には10YR2/1黒色砂質土が堆積している。

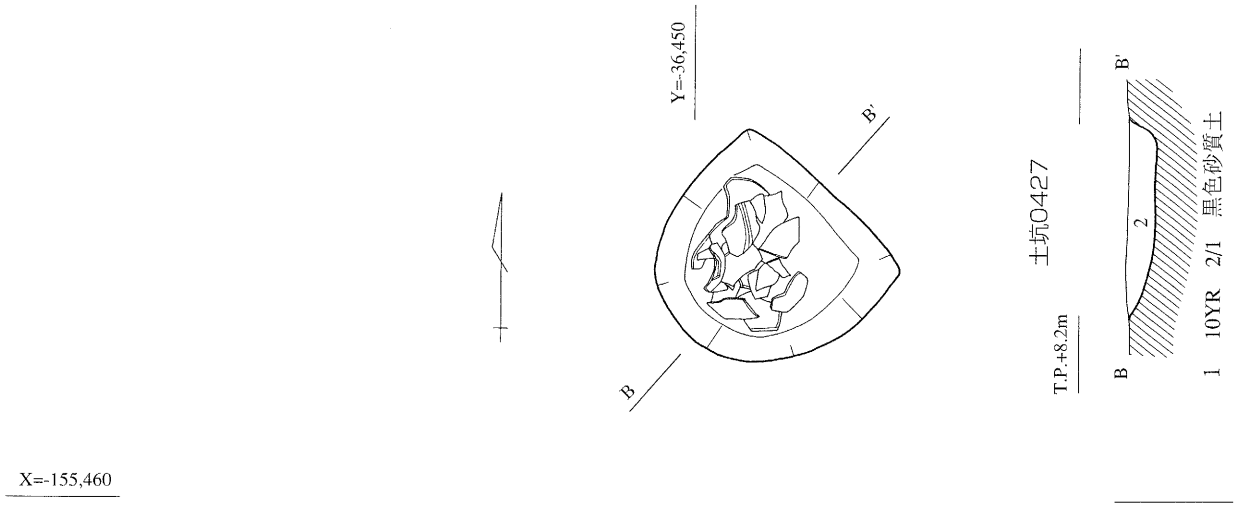


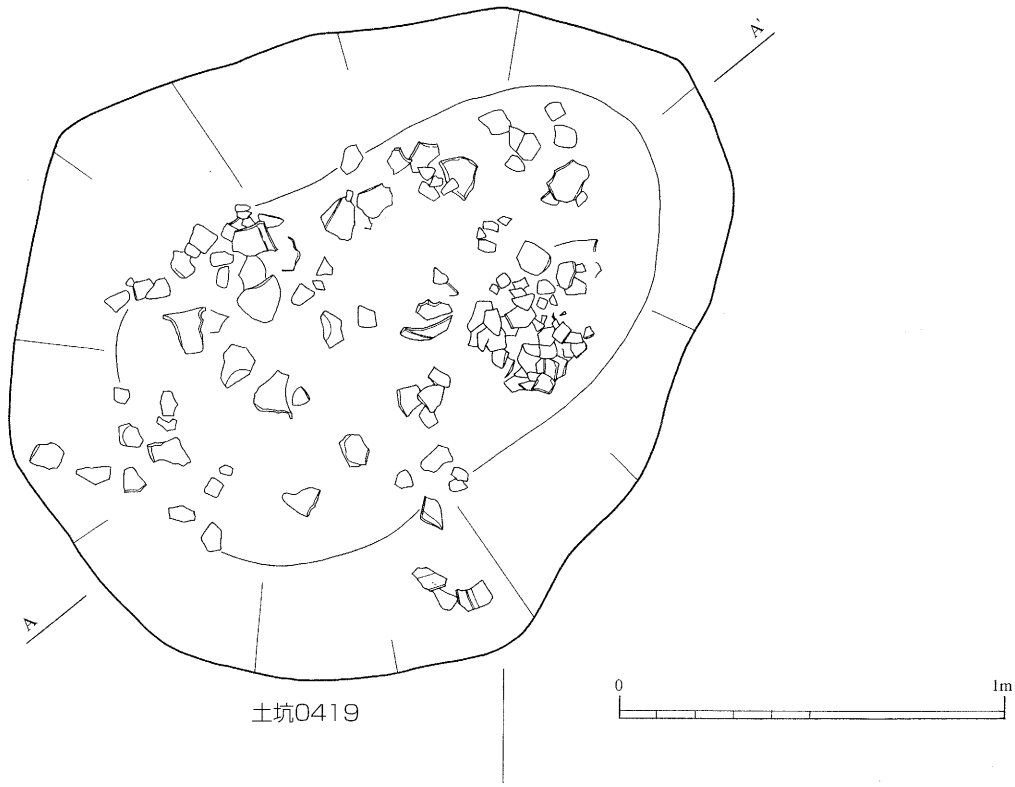
第 22 図　A調査区土坑0339、0340平面・断面図

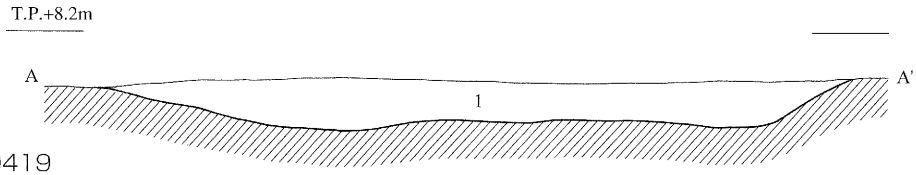
土坑0380（遺物：第86図838）　1－J15地区に所在する土坑である。東西1.8m、南北1.5m、深さ20ｃｍである。上層には10YR2/1黒色砂質土が堆積している。

土坑0381（遺物：第86図839・840）　1－J16地区に所在する砂層上の土坑である。南北径2.5m、深さ40ｃｍで、内部には10YR 2/1黒色砂質土が堆積している。

土坑0386（遺物：第86図841～847）　1－G10～11地区に所在する土坑で、砂層（12層）上の土坑である。東西1.5m、南北1.2m、深さ20ｃｍで、内部には2.5Y3/2黒褐色砂が堆積している。







土坑0419
1　5Y　4/2　灰オリーブ色砂質土

第 23 図　A調査区土坑0419、0427平面・断面図

土坑0409（遺物：第86図848・849）　1－E14地区に所在する略円形の土坑で、径約70ｃｍ、深さ10ｃｍ、内部には2.5Y3/2黒褐色砂が堆積している。砂層（12層）上の遺構である。

土坑0412（遺物：第86図850～855）　１－Ｅ12地区に所在、砂層（12層）上に掘り込まれている。東西2.2m、南北3.5m、深さ10ｃｍで、内部には2.5Y3/2黒褐色砂が堆積している。

土坑0419（遺物：第87図856～873）　１－Ｅ10地点にある土坑で、東西２ｍ、南北1.8m、深さ35ｃｍで、内部には5Y4/2灰オリーブ色砂質土が堆積している。底部には細片ばかりながら、土器が散乱したような状況で出土している。

土坑0422（遺物：第88図874～876）　１－Ｉ８～Ｊ８地区にある土坑で、東西1.1m、南北1.5m、深さ25ｃｍである。内部には10YR2/1黒色砂質土が堆積している。

土坑0423　１－Ｉ８地区に所在する土坑で、東西65ｃｍ、南北1.1m、深さ10ｃｍ、底部には12層相当の砂層が露出している。10YR2/1黒色砂質土が堆積している。

土坑0427（遺物：第88図877・878）　１－Ｄ11地点にある土坑で、東西60ｃｍ、南北50ｃｍ、深さ約10ｃｍ、内部には10YR 2/1黒色砂質土が堆積している。壺が割れた状態で出土しており、口を南に向けた状況で検出されている。

土坑0428（遺物：第88図879）　１－Ｇ10～Ｈ10地点にある土坑で、東西40ｃｍ、南北55ｃｍ、深さは20ｃｍ、内部には10YR2/1黒色砂質土が堆積している。底面からは甕の底部が検出されている。

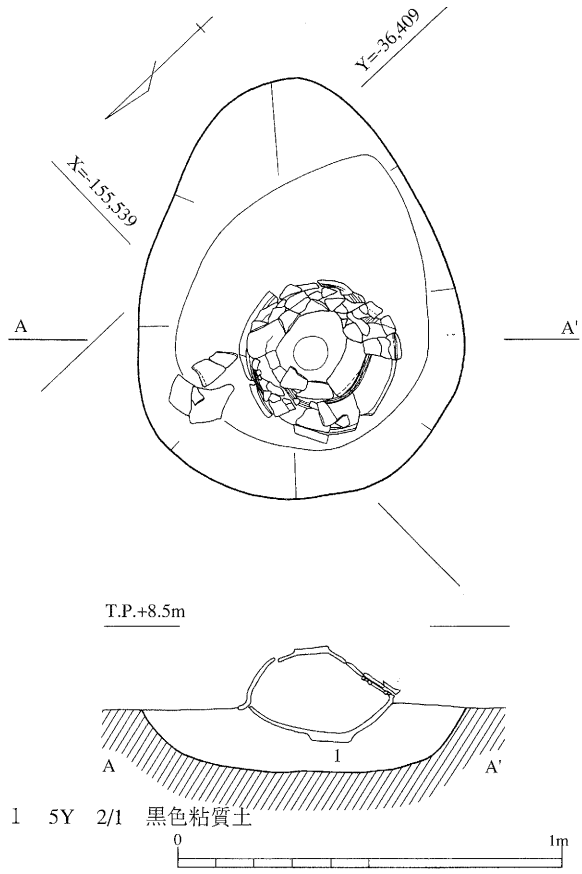
土坑0432（遺物：第88図880）　１－Ｂ９地区に所在する土坑で、東西1.7m、南北50ｃｍ、深さ10～15ｃｍ、内部には10YR 2/1黒色砂質土が堆積している。

土坑0450　１－Ｉ８地点にある土坑で、南北、東西70ｃｍ、深さは約10ｃｍである。内部には10YR2/1黒色砂質土が堆積し、打製石斧が単独で出土している。

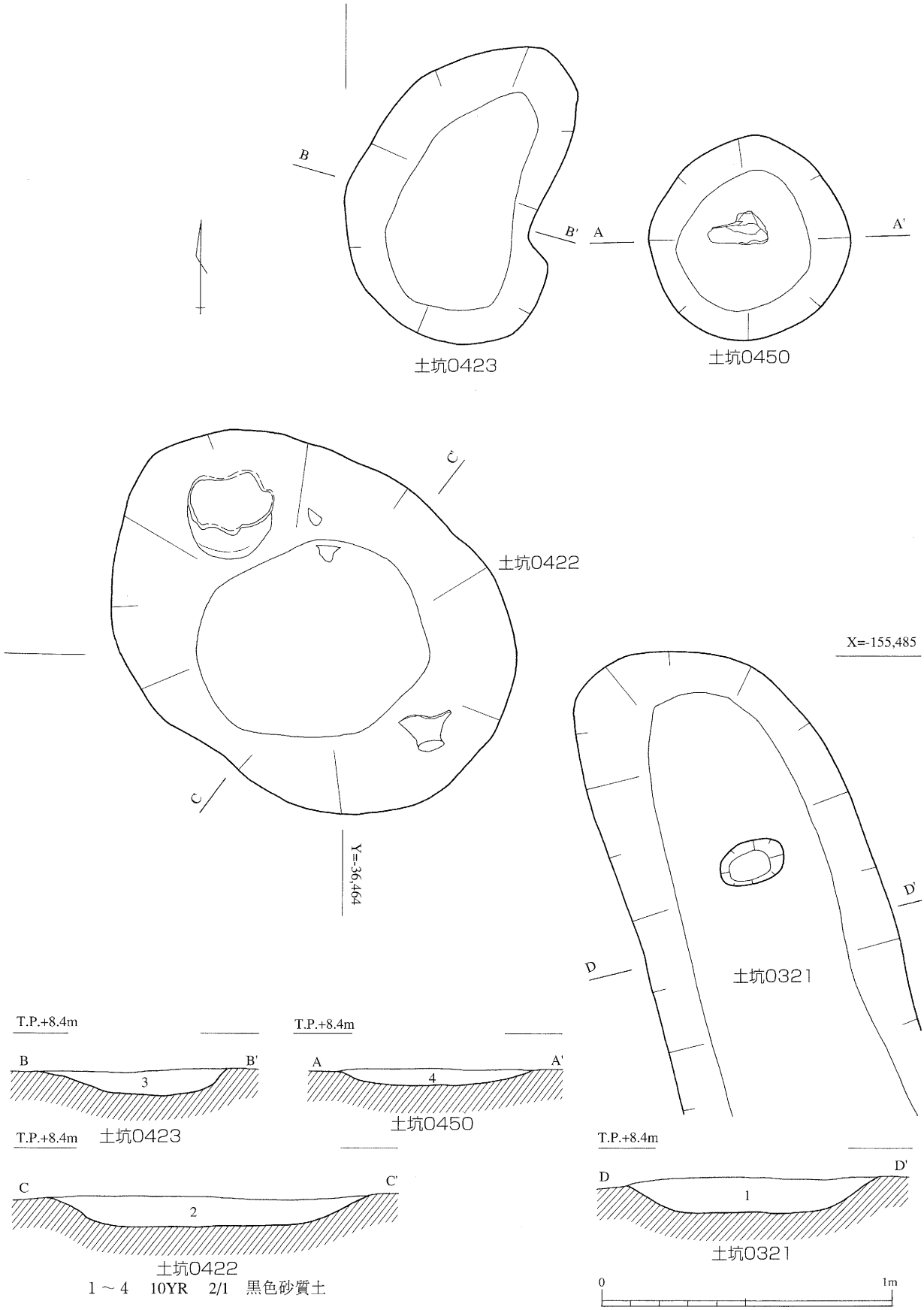
土器棺

土器棺0179（遺物：第74図687～689）　１－Ｔ19地区に所在する卵のような形をした土坑である。掘り方は東西90ｃｍ、南北1.2mで、深さは20ｃｍ。その土坑の内部に土器が置かれている。棺に利用されたものと思われる土器は、掘り方の西の方に寄せるようにおかれていた。棺は壺を利用して身にし、鉢を蓋の代わりしてかぶせている。内部には5Y 2/1黒色粘質土がつまっていた。

土器棺0345（第85図833）　１－Ｐ10地区にある土坑で、自然流路0183の肩部にあたる。東西１ｍ、南北1.2m、深さ40ｃｍをはかる。内部には10YR 8/8 黄橙色粗砂が堆積している。上面には、

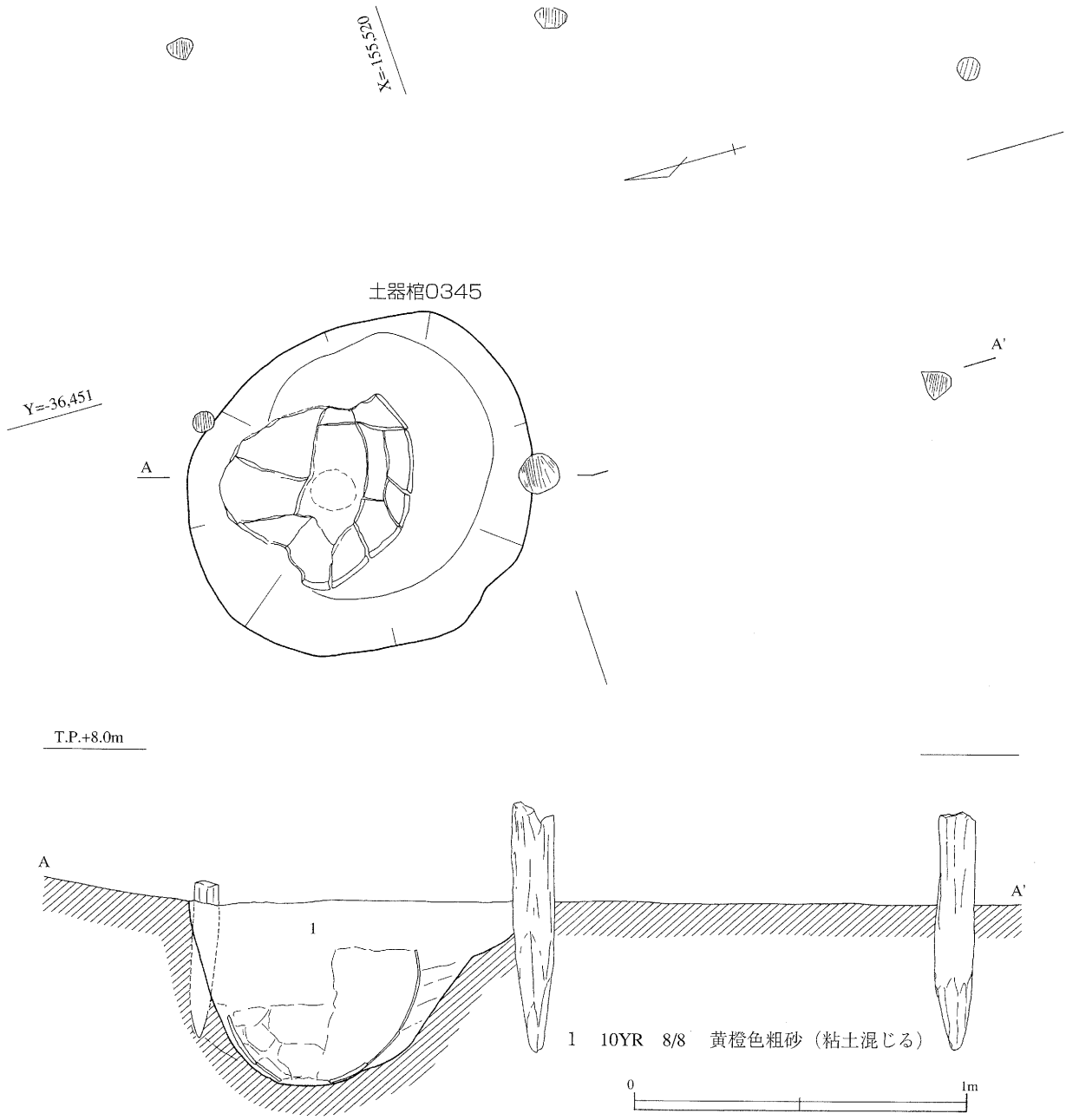


第24図　A調査区土器棺0179平面・断面図



第 25 図　A調査区土坑0321、0422、0423、0450平面・断面図

こわれた口縁部付近の土器片が散乱していた。散乱した土器片を除去すると、大壺の底部があらわれた。弥生時代前期の大型壺棺と推測される。



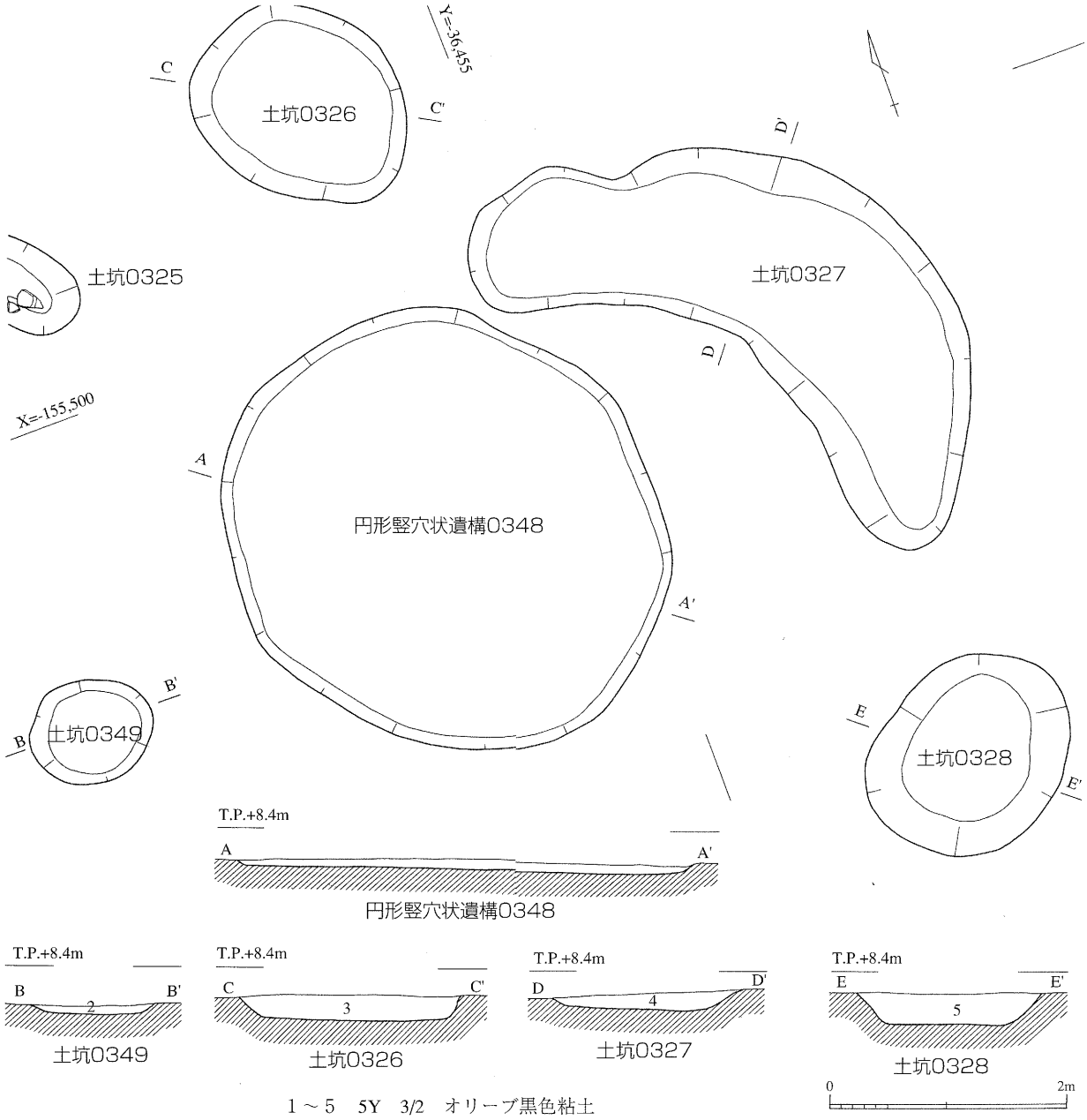
第 26 図　A調査区土器棺0345、杭列0438平面・断面図

竪穴状遺構

円形竪穴状遺構0348　1－M９地区に所在する。径は東西3.6m、南北3.9mで、深さは５ｃm内外の極めて浅い円形に近い形の竪穴状遺構である。床面は比較的平坦であったけれど、床面からは柱穴や土坑などの付属施設らしき遺構は発見されていない。遺物は細片ばかりで図示できないものばかりであるが、弥生時代前期の土器が出土している。断定はできないが、竪穴住居の可能性もあり、住居跡であるならば、今報告では唯一のものである。

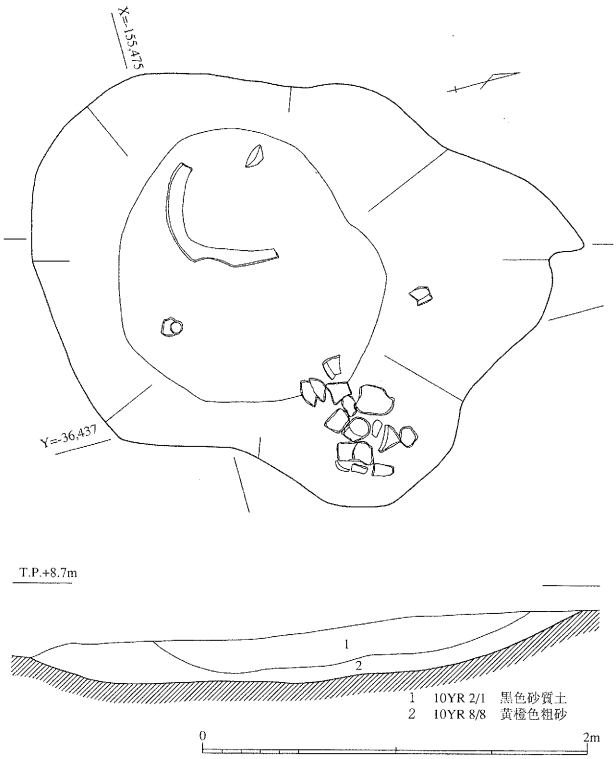
杭列

杭列0438　1－P10～Q10地区に所在しており、自然流路0183をまたぐような形で検出されている。土器棺0345を間にはさむような形で、南北方向に３本ずつ打たれた杭列が２列分発見され

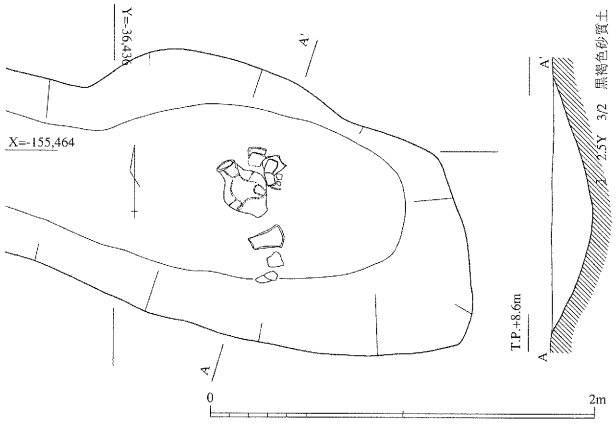


第 27 図　A調査区円形竪穴状遺構0348及び周辺遺構平面・断面図

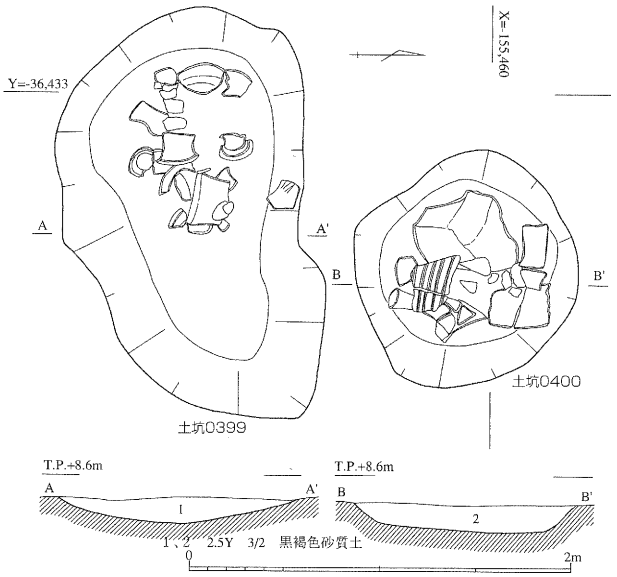
た。3本分よりも南側については、調査区の外になるので、それより南に続くかどうかはわからないが、少なくとも自然流路0183に直行するかのような形で打設されていたものと考えられる。周囲の遺構との重複関係からすると、自然流路0183が流路として機能している期間、あるいは埋没が完了しないまでの間に土器棺墓0345がつくられ、それから杭列0438が打設されたものと考えられる。自然流路0183上に仮設された、小橋や足場のようなものの基礎だった可能性がある。



第28図 A調査区土坑0388平面・断面図



第29図 A調査区土坑0398平面・断面図



第30図 A調査区土坑0399、0400平面・断面図

2．弥生時代中期

土坑

土坑0271（遺物：第123図901～905） 1－K17地区に所在する。東西1.7m、南北88ｃｍ、深さ10ｃｍで、堆積土は10YR3/4暗褐色砂質土が堆積している。

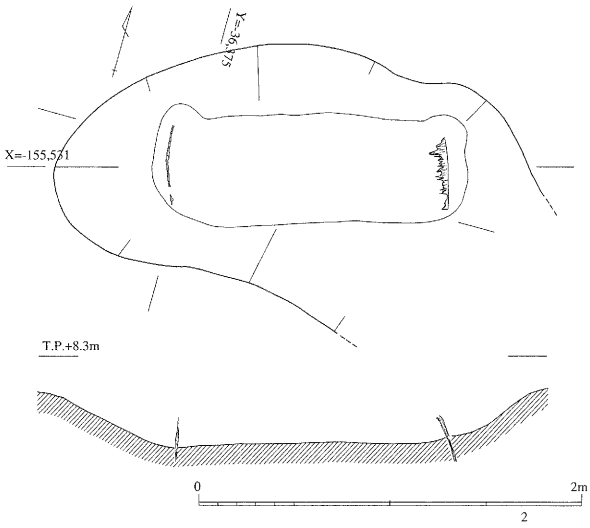
土坑0298（第123図906） 1－C10地区に所在する土坑で、東西１ｍ、南北80ｃｍ、深さ５ｃｍ内外である。内部には2.5GY3/1暗オリーブ灰色砂質土が堆積している。弥生時代中期に属する遺物が若干出土している。

土坑0388（遺物：第124図911～918） 1－G13～H13地区に所在しており、砂層（12層）上に掘り込まれている。東西2.7m、南北2.3m、深さ30ｃｍで、内部には10YR 2/1黒色砂質土が堆積している。土坑内部でも西寄り部分において、壺の底部が出土している。時期は弥生時代中期後半に相当する。

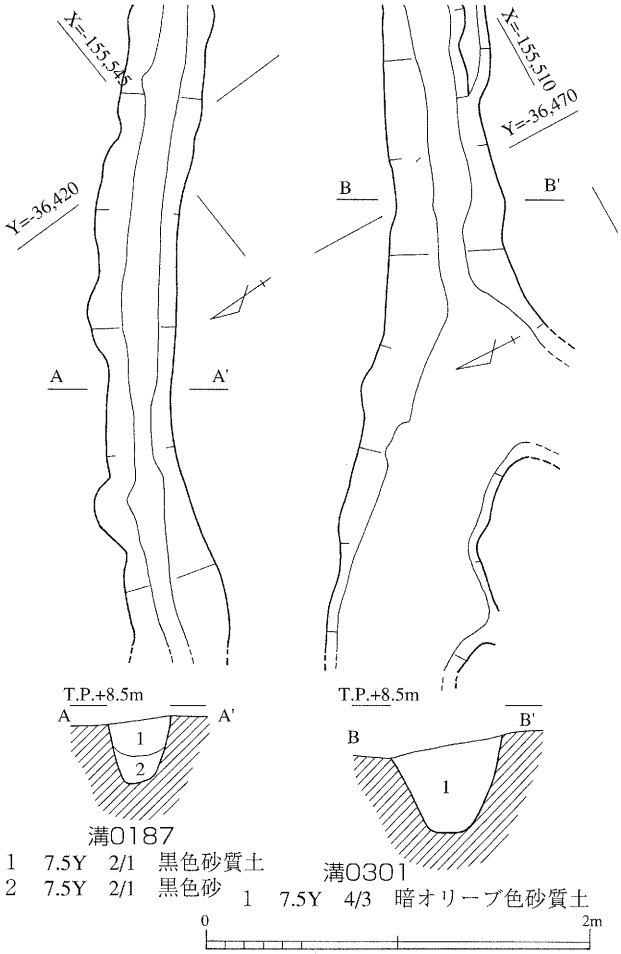
土坑0396（遺物：第123図907） 1－E13地区に所在する土坑で、東西1.3m、南北55ｃｍ、深さ10ｃｍ、内部には2.5Y 3/2黒褐色砂が堆積している。

土坑0398（第123図908～910） 1－E13～14地点に所在する土坑で、12層の砂層が盛り上がった上に掘り込まれている。東西５ｍ、南北1.4m、深さ20ｃｍ、内部には2.5Y3/2黒褐色砂質土が堆積している。土坑内の東寄りの部分で土器が出土している。口縁部を北西側に向けるように完形の壺があり、その周囲からも土器破片が出土している。

土坑0399（遺物；第125図918～928） 1－E13地点に所在する土坑で、砂層（12層）上に掘り込まれている。東西2.2m、南北1.3m、深さ15ｃｍで、内部には2.5Ｙ3/2黒褐色砂質土が堆



第31図　A調査区木棺墓0295平面・断面図



第32図　A調査区溝0187、0301平面・断面図

積している。弥生時代中期に属する壺の破片が散乱した状況で出土している。

土坑0400（遺物：第126図929～931）　1－E13地点に所在する土坑、砂層（12層）上に掘り込まれている。幅1.2m、深さ15ｃｍで、内部には2.5Ｙ3/2黒褐色砂質土が堆積している。弥生時代中期の壺が安置されており、壺棺だった可能性がある。

木棺墓

木棺墓0295　調査区の東端、1－S26地区に所在する。東西2.5ｍ、南北1.3ｍの細長い土坑の両端に、ごく粗く仕上げられた板材が打ち込まれたような形で残っていた。木棺の痕跡の可能性がある。木棺であるとすると、小口板だけが打ち込まれた状態で残っていたことになり、他の部材は失われている。小口と思われる板材同士の間隔は約145ｃｍ、幅は約40ｃｍで、木棺としても小型のものである。

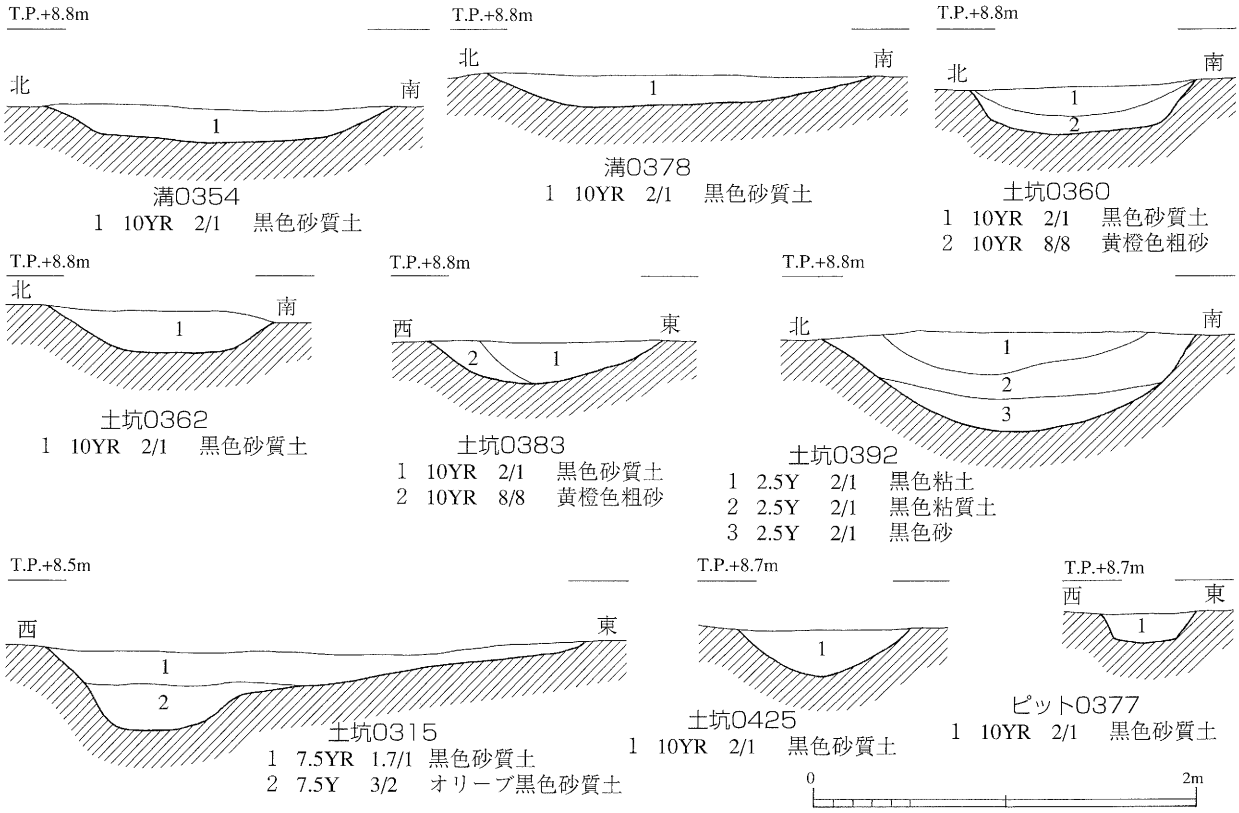
3．古墳時代

溝

溝0187（遺物：第127図932～第128図988）

調査区南端の東側1－R11～X19地区で検出された溝状遺構である。幅2ｍ、深さ40ｃｍであり、調査区南端において東西方向に20m分程度確認されたが、両端は調査区をこえて、さらに南にのびるようである。遺構内堆積土は大きく2層に分かれる。上層は7.5Y 2/1黒色砂質土で、下層は7.5Ｙ2/1黒色砂である。出土遺物としては布留式の新相の土師器甕などもあるが、須恵器も含んでおり、埋没は6世紀以降と思われる。現況でも、溝の北側より南側の方が地盤が高くなっていた。方形の溝状遺構だった可能性もある。

溝0301（遺物：第129図991～第132図1093）　調査区西側の南端1－K2からP9地区にまで伸びる溝である。一部、流路0183と重複する部分もある。遺構内堆積土は7.5Y4/3暗オリーブ色砂質土が主体で、底に砂がたまっているところもある。布留式の新相段階の土師器のみならず、須



第 33 図　A調査区古墳時代遺構土層断面図

恵器も含んでいる。溝0187と同様、方形にめぐる溝状遺構だった可能性もある。

溝0354（遺物：第133図1094～1096）　1－J12～L12地区に所在する南北溝で、溝0378と接している。検出長12m、幅1.8m、深さ20ｃｍで、内部堆積土は10YR2/1黒色砂質土である。遺物としては布留式甕の破片が出土している。

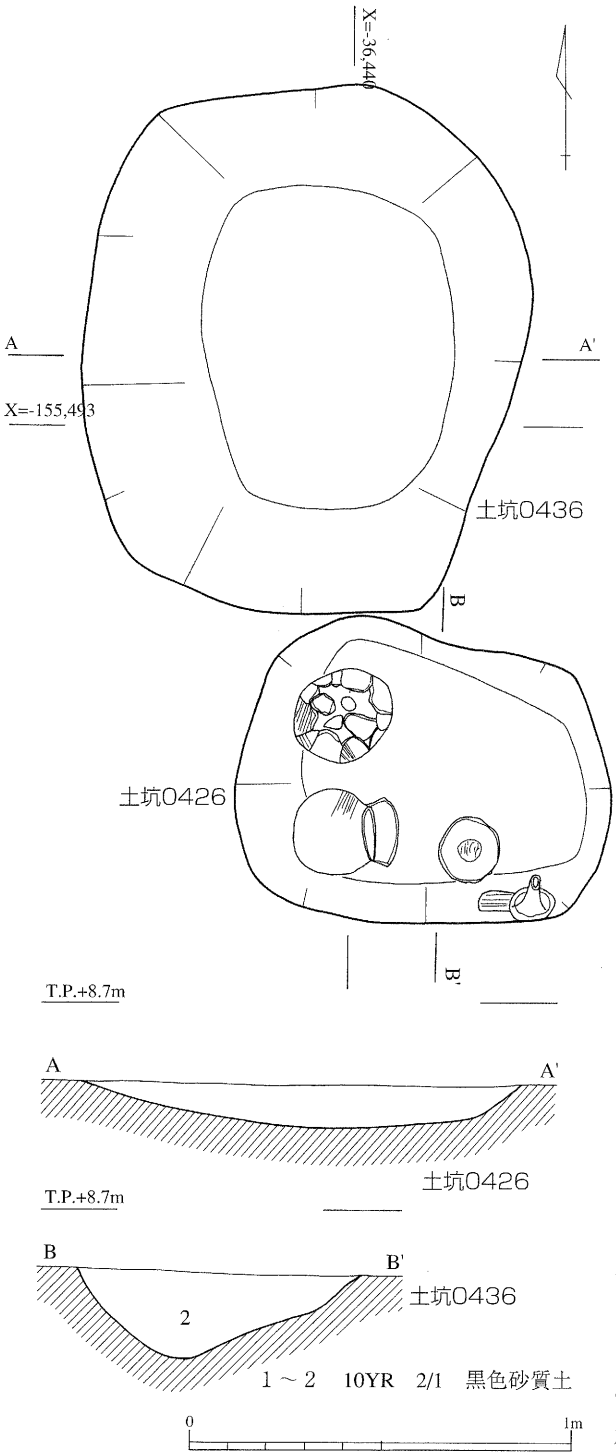
溝0378（遺物：第133図1097）　調査区西側中央部1－I11～K19地区付近にひろがる東西方向の溝状遺構で、砂層（12層）の露出した部分に立地している。検出長は46mで、幅は1.5～2.5m、内部の堆積土は10YR2/1黒色砂質土が主体となっている。

土坑

土坑0315　1－F８地区に所在する半月形の土坑で、東西３m、南北1.8m、深さは西側がより低くなっており10～40ｃｍである。内部には深いところに7.5Y3/2オリーブ黒色砂質土が堆積しており、その上に7.5YR 1.7/1黒色砂質土が堆積している。床面には砂層（12層）が露出している。

土坑0360（遺物：第133図1098・1099）　1－L13地区に所在する土坑である。東西1.4m、南北1.3m、深さ20ｃｍで、内部の堆積土は２層にわかれる。上層は10ＹＲ2/1黒色砂質土で、下層は10ＹＲ8/8黄橙色粗砂が堆積している。

土坑0362（遺物：第133図1100～1105）　1－M14地区に所在する土坑である。東西2.2m、南北1.2m、深さ25ｃｍで、内部には10YR2/1黒色砂質土が堆積している。



第34図　A調査区土坑0426、0436平面・断面図

土坑0383（遺物：第133図1106～1108）　1－Ⅰ11地区に所在する。溝0378と切り合っており、東西1.4m、南北1.2m、深さ10ｃｍ前後である。内部には10YR2/1黒色砂質土が堆積している。

土坑0392（遺物：第133図1110）　1－F13～G13に所在する不定形土坑で、砂層（12層）上に掘り込まれている。東西3.2m、南北２ｍ、深さ50ｃｍである。内部堆積土は2.5Y2/1黒色粘土を主体としているが、上層には粘土が混じり、中層には砂が混じっており、下層は砂になっている。

土坑0425（遺物：第133図1111）　1－Ｌ５地区にある小さな土坑で、溝0301と切り合っている。東西70ｃｍ、南北1.2m、深さ25ｃｍである。

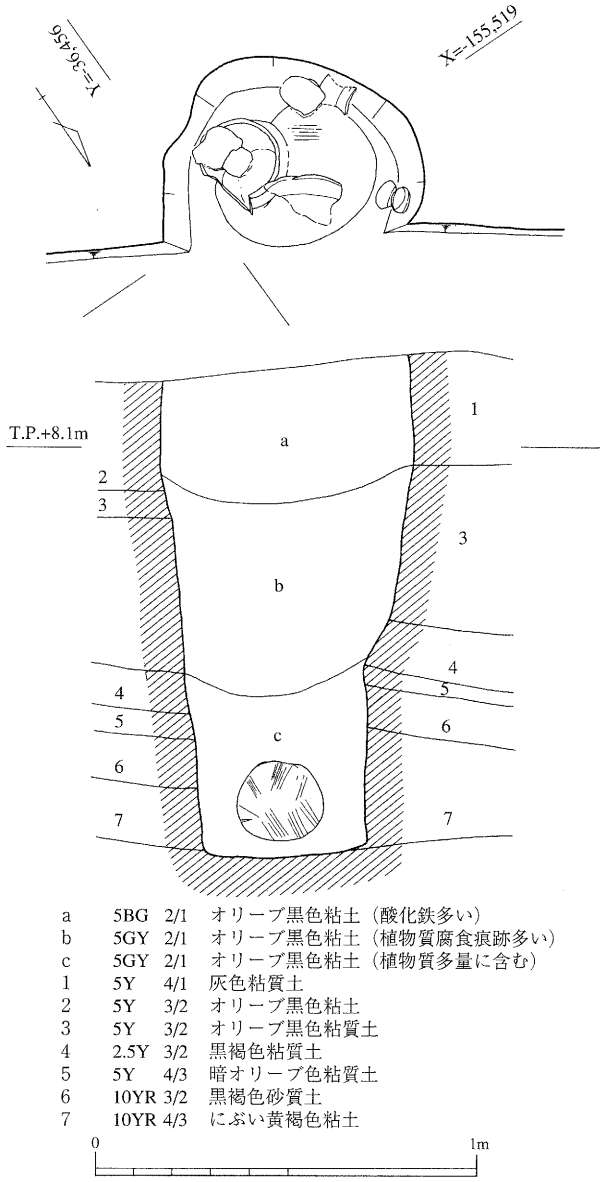
土坑0426（遺物：第133図1112～1115）　1－K12～13地点に所在する土坑で、砂層上に掘り込まれている。東西１ｍ、南北80ｃｍ、深さ25ｃｍ、内部には10YR2/1黒色砂質土が堆積している。底部からは布留式段階の完形の甕２個体と、高坏１個体が出土している。

土坑0429（遺物：第133図1116～1118）　1－Ｊ11地区にある土坑である。円形の土坑であり、径は60ｃｍ、深さは15ｃｍである。内部には10YR 2/1黒色砂質土が堆積している。

土坑0436　1－K12地区に所在する土坑で、砂層（12層）上の土坑である。東西1m、南北1.4m、深さは10ｃｍである。内部には10YR2/1黒色砂質土が堆積している。

井戸

井戸0431（遺物：第134図1119～1122）　調査区の西側南端１－Ｏ８地点で半分土層セクションにかかるような形で検出された素掘りの井戸遺構である。上端幅85ｃｍ、下端幅45ｃｍ、深さ1.3mをはかる。内部の堆積土は５GY2/1オリーブ黒色粘土を主体としながらも、大きく３層に分けられる。上層は酸化鉄の含浸がみられ、中層は植物の腐食痕らしき白い痕跡が点々と残っており、下層は植物遺体を多く含んでいる。底部からは布留式段階の壺完形品や甕破片などが出土し



第35図　A調査区井戸0431平面・断面図

ている。

ピット

ピット0377（遺物：第133図1109）　調査区中央近く、1－K16地区に所在しており、溝0378の南側と接している。径約50ｃｍのピットで、深さ15ｃｍ、内部には10YR 2/1黒色砂質土が堆積している。

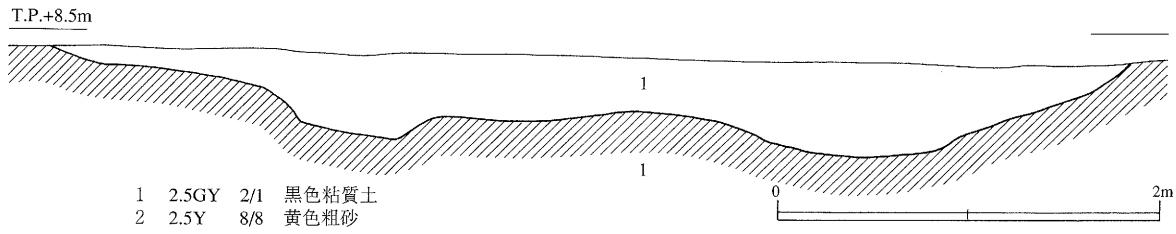
4．奈良時代以降の遺構

土坑

土坑0315（遺物：第135図1127・1128）　1－F８地区に所在する平面半月形の土坑である。東西３ｍ、南北1.8ｍ、深さ40ｃｍで、内部堆積土は上下２層にわけられる。上層は7.5ＹＲ1.7/1黒色砂質土、下層は7.5Ｙ3/2オリーブ黒色砂質土である。底面には11層（砂層）が露出している。出土遺物には６世紀後半頃の須恵器の杯蓋や、土師器碗で内面に２段の放射状ミガキを施すものなどが出土している。

土坑0352（遺物：第135図1129）　1－M12～N14地区を中心に広がる不定形な落ち込み状の遺構で、底部には11層（砂層）が露出している。東西13ｍ、南北７ｍ、深さ50ｃｍである。落ち込みとしては規模の大きなものである。埋土は比較的均質な状態であり、2.5GY 2/1 黒色粘質土が堆積している。遺物は少ないが、平安時代を中心とした土師器などが出土している。

土坑0359（遺物：第135図1130）　1－K14地区に所在する土坑で、砂層（11層）上に掘り込まれている。東西２ｍ、南北1.6ｍ、深さ20ｃｍで、埋土は10YR2/1黒色砂質土が主体である。



第36図　A調査区土坑0352断面図

第５章　Ａ調査区の調査成果（遺物）

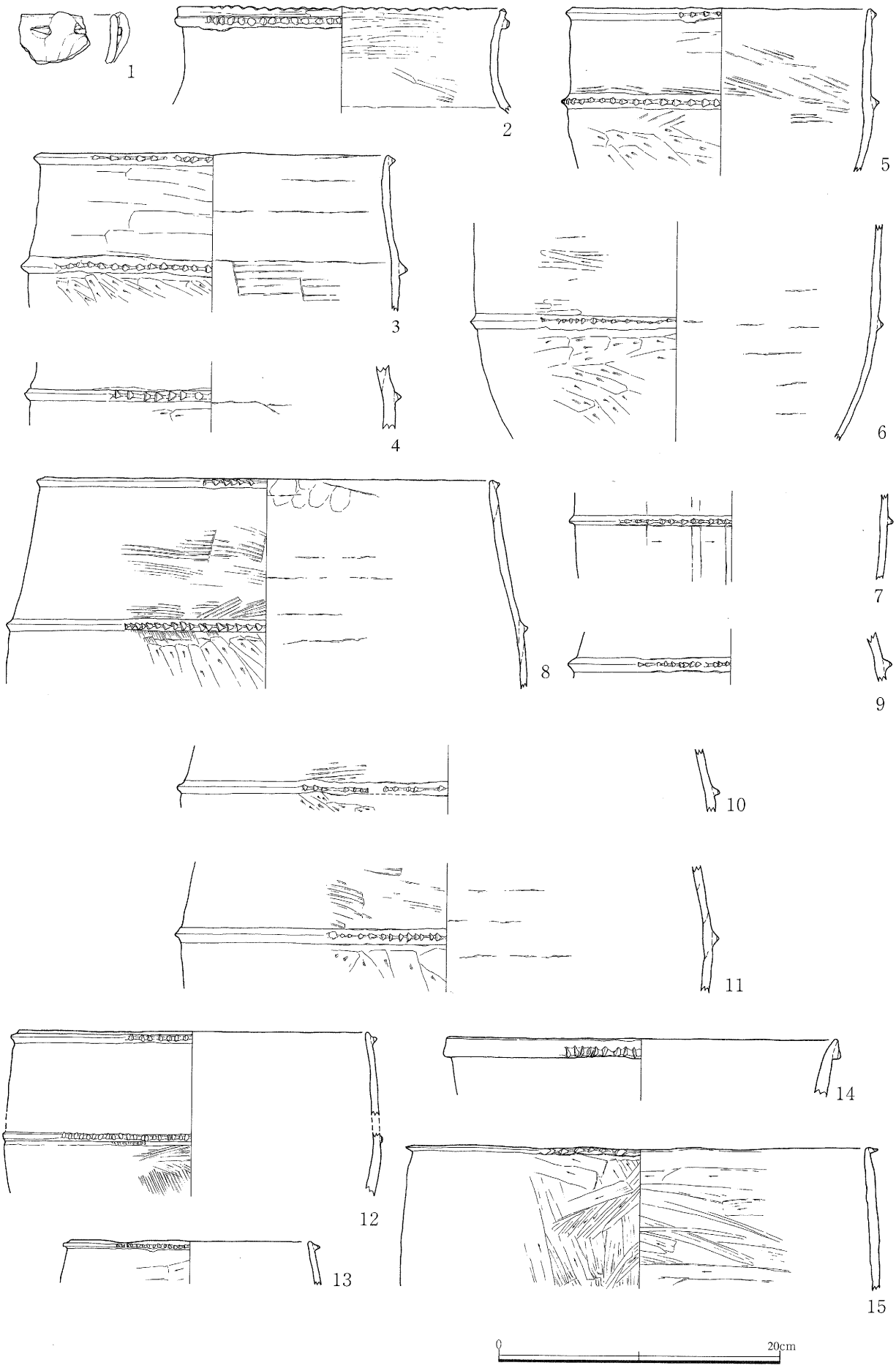
第１節　弥生時代前期

膨大な遺物量が出土しており、図化しえなかった資料もまた多量である。縄文系、彩紋、線刻は細片でも図化に努め、他地域系と考えられるものや生駒西麓産胎土は地域内外との時期的関連を知るのに重要と考えて報告した以外、抽出においては全体的な傾向を示し、恣意的にならないように努めた。ただし、底部は多量にあったがそのほとんどを図化していない。その中には焼成後に穿孔したもの（例えば第75図696・697）が多量に含まれており、今回の報告ではその実状が全く示されていない。整理期間が確保できず統計処理を行いえなかったことと合わせてご了解ください。

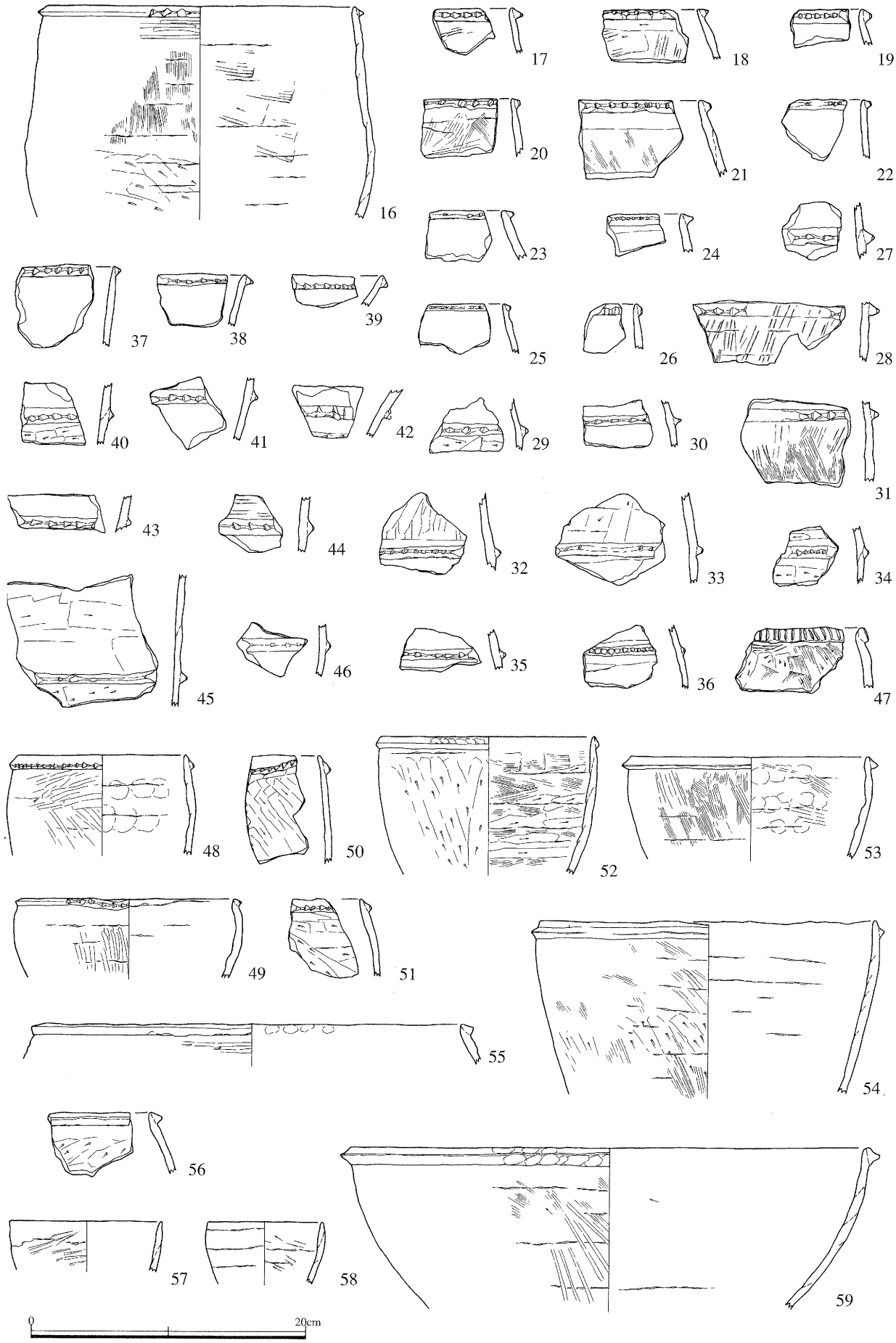
時期は従来の中段階前半に主体がある。胎土は石英、長石を主体にして若干のチャートを含むものが一般的であることから、それが在地産と考えられた。胎土が異なり、形態もあわせて搬入品の可能性があるものは記載することに努めたが肉眼観察では限度があることも事実である。河内湖沿岸の若江北遺跡、山賀遺跡等の前期に生駒西麓産胎土が目立つに対して、田井中・木の本遺跡には生駒西麓産胎土のものが少ないことが特徴的で、報告では生駒西麓産胎土とそうでない物を明示した。今回の資料は段と削出突帯を主体にするが個々に個性が強く、図面のみでは表現しきれないと考えられ、その部分の記載には注意をはらった。甕に関わらず、煤の付着するものについては記載した。よって、甕であっても煤の記載のないものは付着しないか、残存しないものである。

流路0183（第37図1～第71図638）　第37図1～第39図74は縄文系であり、長原式が主体であるが、1・2のみ若干様相が異なり古い。3・5～8・10・13・16～33・35・37～46・48～51・54～62・65～67・69～71・74は生駒西麓産胎土である。流路0183出土遺物は当初100数コンテナに収納されていたが、選別段階で縄文系は1コンテナに収まった。統計処理を行っていないが、それを根拠に今回の縄文系は1%程度としておきたい。

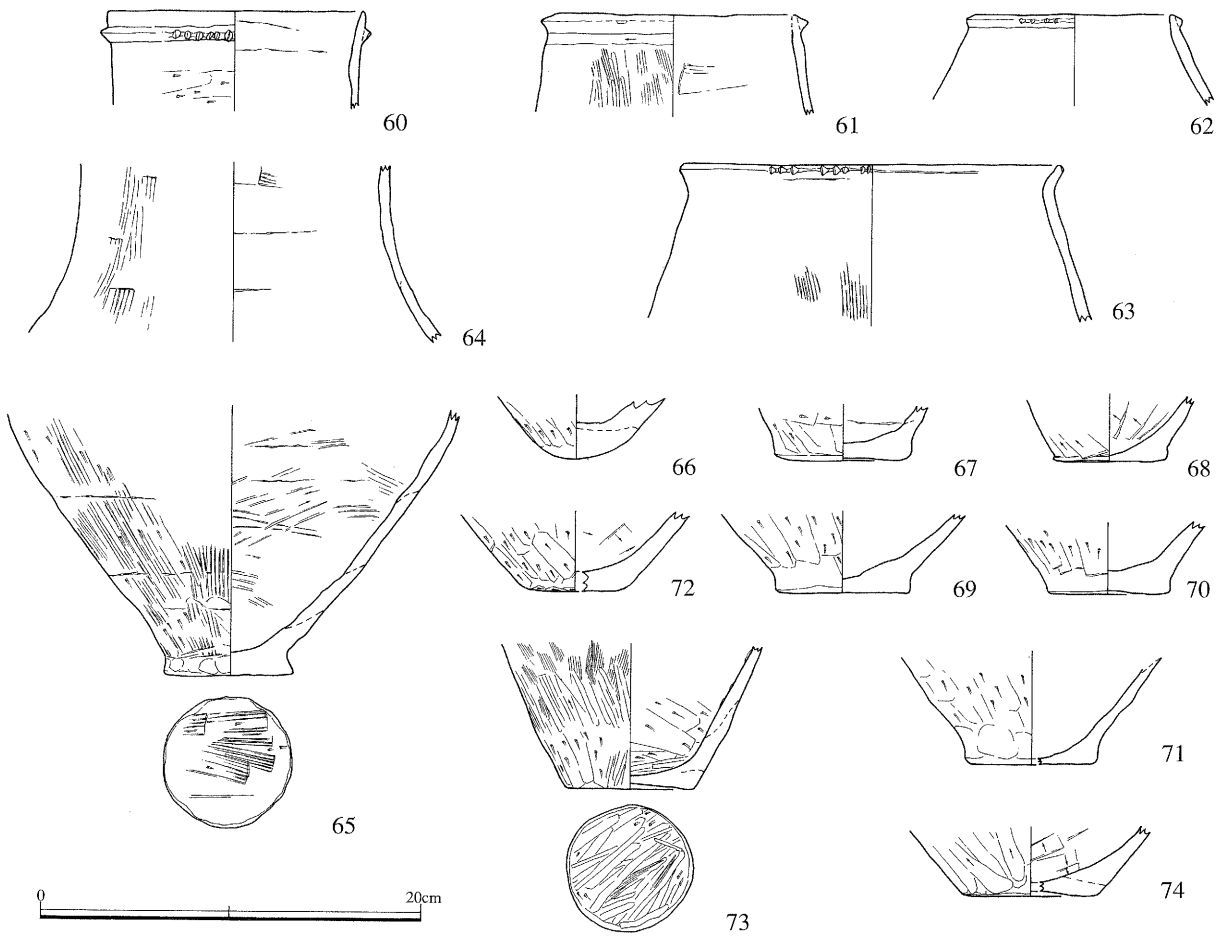
1は後・晩期と考えられる。粗砂を多量に含む。外面は摩滅著しい。2は滋賀里Ⅵ式の深鉢。貼付け突帯の刻み目は左方向である。チャートが目立ち、灰白色を呈する。3～11は二条突帯を有するもので、頸部が若干外反傾向を持ちながら内傾するもの3・4、直立するもの5～7、直線的に内傾するもの8～11がある。図化し得ていない細片も多いが、頸部に外反傾向のあるものは少ない。外面は頸部板ナデあるいはナデ、体部ケズリ仕上げ、内面は板ナデあるいはナデ仕上げである。刻み目は右方向。12は内湾する頸部を有する異質品。頸部と体部の位置関係は接合せず不正確。石英、長石、チャートを含み在地産と考えられる。体部外面は植物繊維束のような工具？ナデ、他はナデ仕上げ。外面煤付着。13は12と同様の形態で生駒西麓産胎土。刻み目は右方向。14は鋭く切り刻んだような刻み目。内面板ナデ。外面煤付着。15は黒色を呈する。数種類の板・工具を使用したナデ仕上げ。16は一条突帯深鉢。外面は口縁部工具ナデ、頸部板ナデ、体部ケズリ、



第37図　流路0183中・下層出土遺物（1）



第38図　流路0183中・下層出土遺物（2）

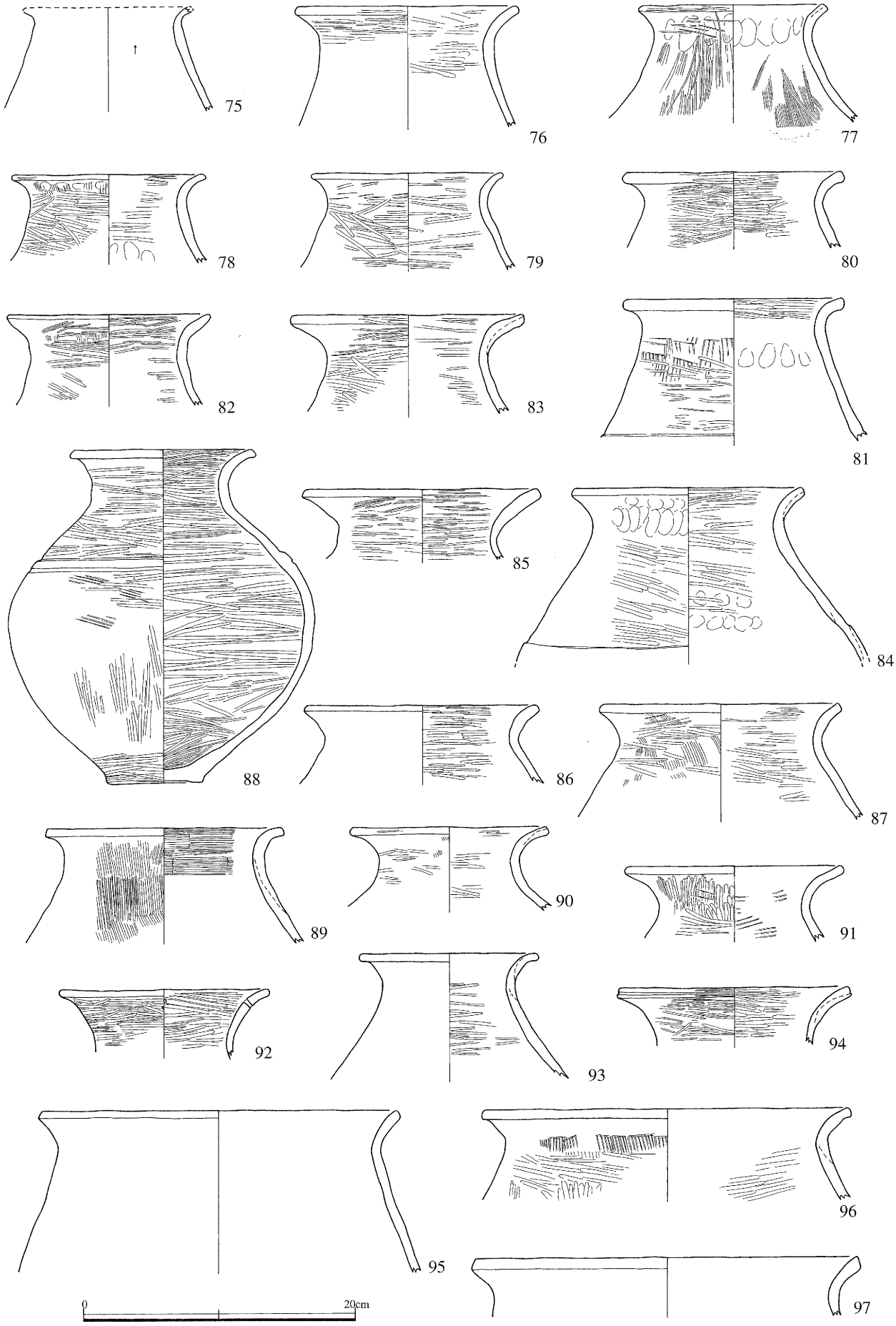


第39図　流路0183中・下層出土遺物（3）

内面板ナデ。外面煤付着。17～26は内傾する深鉢口縁部の破片で、壷が混じる可能性もある。すべて生駒西麓産胎土。27～36は二条突帯深鉢の頸胴部突帯。34・36は非生駒西麓産胎土。34は黒色、36は灰白色（2.5Y 7/1）を呈する。37～39は外傾する深鉢口縁部の破片で、壷が混じる可能性もある。すべて生駒西麓産胎土。40～46は外傾、あるいは直立する二条突帯深鉢の頸胴部突帯。すべて生駒西麓産胎土。47は生駒西麓産胎土の可能性もある。端部に粘土帯を貼付け、鋭く切り刻んだような刻み目を巡らせる。外面は強い工具ナデ、内面板ナデ。

48～51は砲弾形の深鉢で刻み目突帯を巡らせる。すべて生駒西麓産胎土。48・49の外面はミガキ。48・50・51の外面煤付着。52～56は砲弾形の深鉢で刻み目のない突帯を巡らせる。54～56生駒西麓産胎土。56内面は板ナデ。いずれも外面煤付着。57・58は椀形鉢で生駒西麓産胎土。57は板状工具によるカキトリ気味の調整。58は大型鉢で生駒西麓産胎土。外面はカキトリ気味の工具ナデ、内面は丁寧なナデ仕上げ。突帯に指頭痕が顕著に残る。外面に非常に薄く煤付着。

60～62は壷口縁部で生駒西麓産胎土。刻み目は61にはなく、62は非常に弱い。63は壷と考えるが、深鉢の影響を受けた甕の可能性もある。異形品。口縁部は屈曲させ、端部に右方向の刻み目をめぐらせる。胎土は石英、長石主体で若干のチャートからなる粗砂を多量に含む。外面に板ナデがみられる。64・65は壷の頸部と体部であり、65は生駒西麓産胎土。外面と底面は板状工具に



第40図　流路0183中・下層出土遺物（4）

よるカキトリ気味の調整、内面板ナデ。66～74は縄文系底部と考えられる。67・69～71・74は生駒西麓産胎土。底面調整は67～71がナデ、72・73がケズリ、66が不明。68・71・73は外面煤付着。

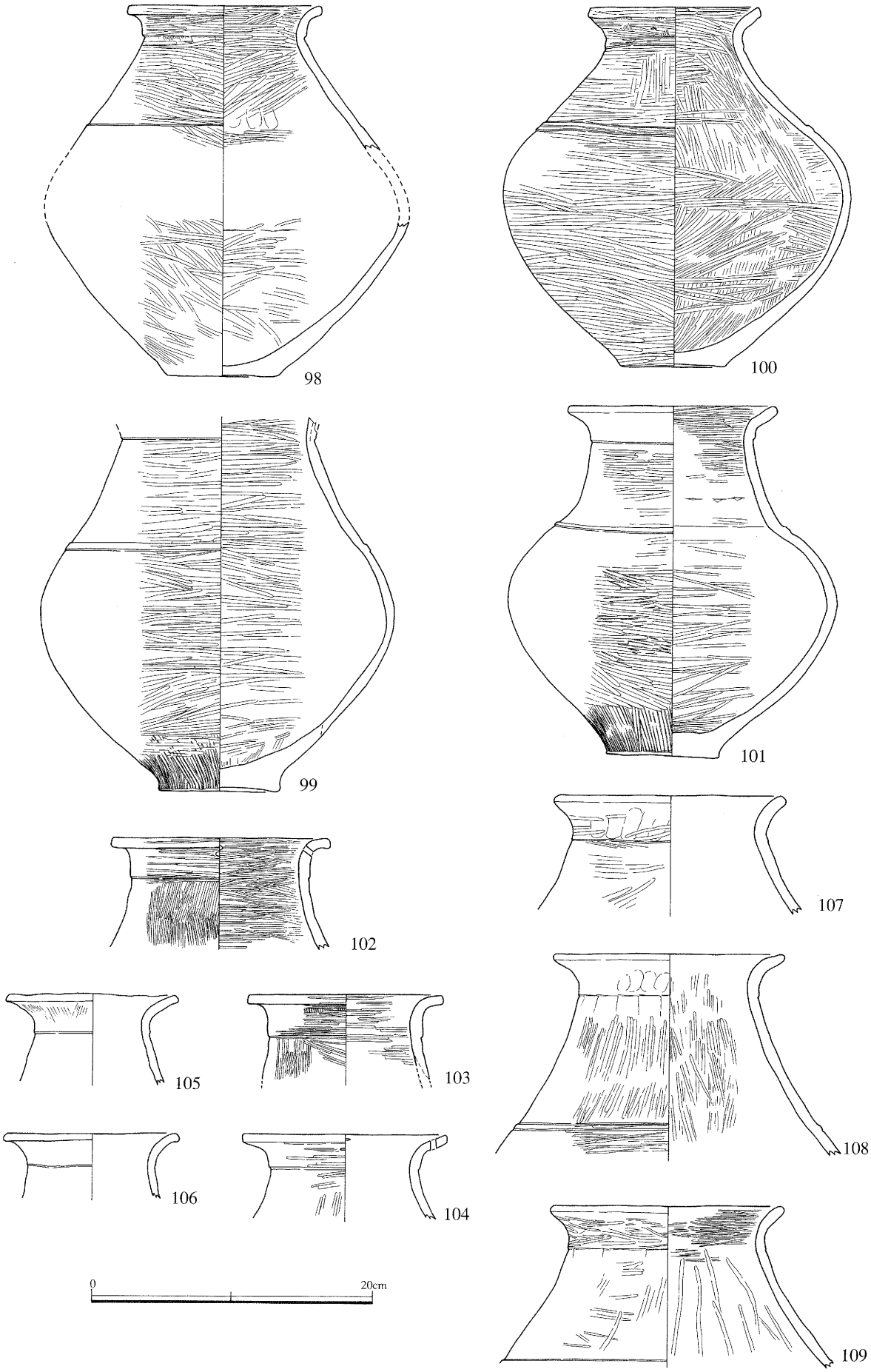
第40図75～97は口頸部間に段をもたないもので、すべて非生駒西麓産胎土である。75は直線的な頸部から口縁部を短く折り返す形態で、未報告資料も含めて今回調査では唯一。内面はナデと考えられる。他は不明。77は頸部外面に板ナデの後、部分的にヘラミガキを施す。78・80は外面に黒色塗布する。81は口頸部間にハケメの始点があるが、削出していない。頸胴部間は段。84の頸胴部間は低い段を巡らせる。86外面は摩滅で図示し得ないが、部分的に縦方向板ナデと横方向ヘラミガキが認められる。88は頸胴部間は段と下方を削出した削出突帯で、断面カマボコ形を呈する。内外面ヘラミガキ、底面不明。92は外面に黒色塗布とみられる。口径の約半分が残存しており、1孔1対と考えられる。93の外面頸部は工具（束状？）で斜上方ナデか。94は内外面に黒色塗布とみられる。口縁端部にヘラ描き沈線を巡らせる。95・97は摩滅で調整不明。96は81と同様に口頸部間にハケメの始点がある。下部はヘラミガキ。

第41図98～第43図144は口頸部間に段を有する壷で、非生駒西麓産胎土である。98は口頸部部間に接合による明確な段、頸胴部間に削出しによる低い段を巡らせる。底面摩滅。99は口頸部部間に明確な段、頸胴部間に段とその下方の削出しによる削出突帯を巡らせる。底面ヘラミガキ。100は、口頸部間に削出によると考えられる低い段、頸胴部間にややカマボコ状の削出突帯を巡らせる。内外面、底面ヘラミガキ。101は口頸部間に段、頸胴部間に削出突帯を巡らせる。口縁部外面ヨコナデ、低部外面ハケメ後ナデ、それ以外は底面も含めてヘラミガキ。内面全面黒色。

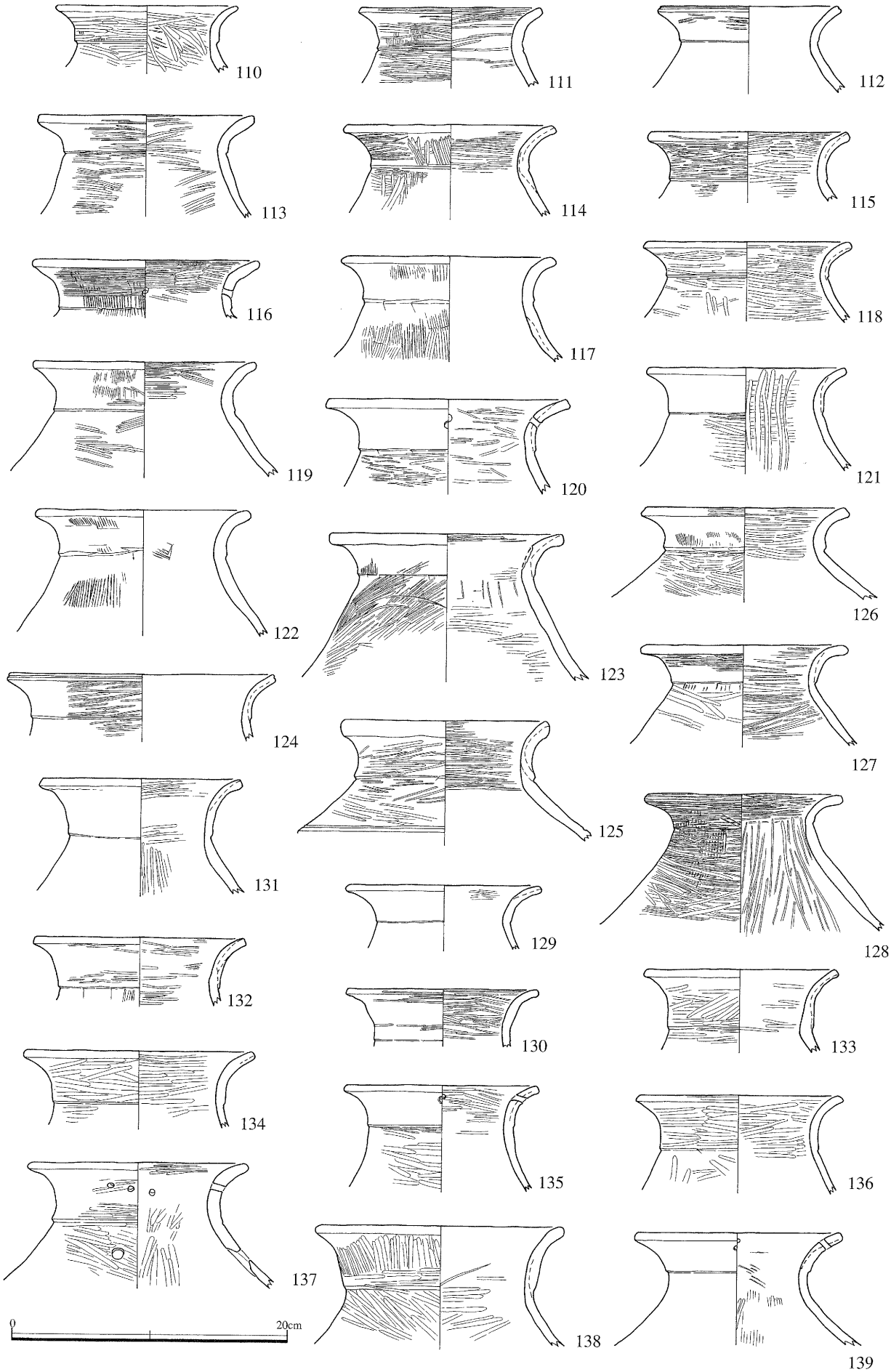
102～105は急激に立上る頸部から二段の屈曲する口縁部を有する。102・103の口頸部部間は明瞭な段で、直下に1.5～2.0mmの縁取り沈線を巡らせる。同一個体かもしれない。104も接合時の明瞭な段で、1孔が残る。105は口縁部に板ナデが残る以外は摩滅で調整不明。106は低い段。摩滅で調整不明。

107～109はいずれも口頸部間は削出しによる低い段を形成する。108は頸胴部間に段と下方にヘラ描き沈線、109は頸胴部間に段を巡らせる。

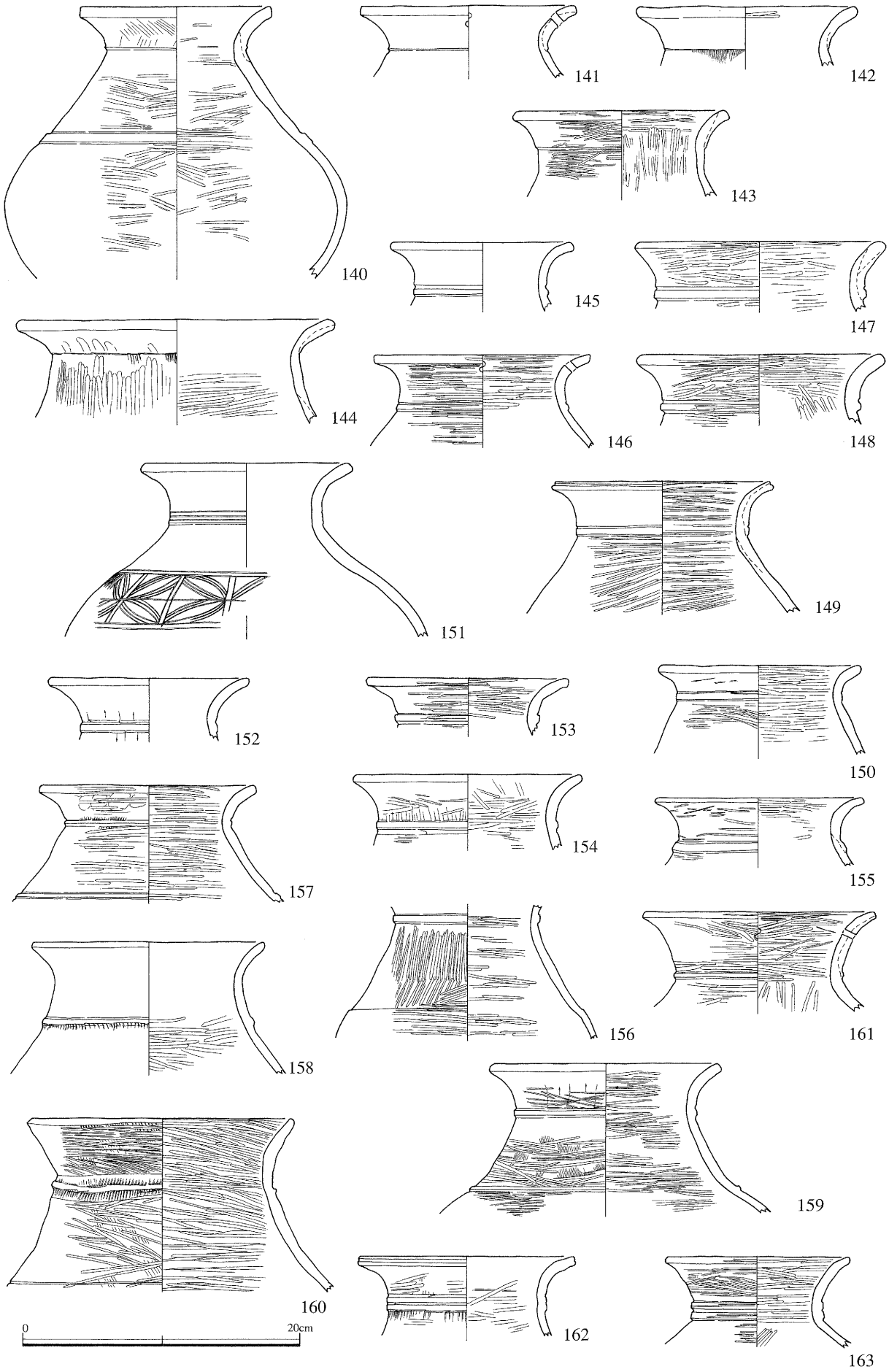
第42・43図の110・112・115・120・123・124～127・131～135・137～140・144は明瞭な段、111・113・114・116～119・121・122・128～130・136・141～143は低い段を形成する。前者の場合、頸部断面ラインはスムーズに外反、あるいは直線的に内傾することになるが、一方後者の段の場合、断面において頸部外面上方にふくらみがみられる。なお後者には段部分を削出しにより強調するもの、削出しのみによる場合がある。111・112は口縁端部にヘラ描き沈線を巡らせており、前者沈線内には赤色顔料が残存する。112はハケメが残存する以外、摩滅で調整不明。114は外面および口縁部内面に黒色塗布。116・120は紐孔1が残る。120～123の口縁部外面はヨコナデ仕上げ。122の段は非常に雑で、工具で削出した状況をそのままに残す。123・126は黒色塗布か？　124は口縁端部の接合部分にヘラ描き沈線を巡らせる。今回の資料には、同様の接合部調整によって生じたと考えられる口縁端部ヘラ描き沈線は多い。125の段は接合時に生じた段差を



第41図　流路0183中・下層出土遺物（5）



第42図　流路0183中・下層出土遺物（6）



第43図　流路0183中・下層出土遺物（7）

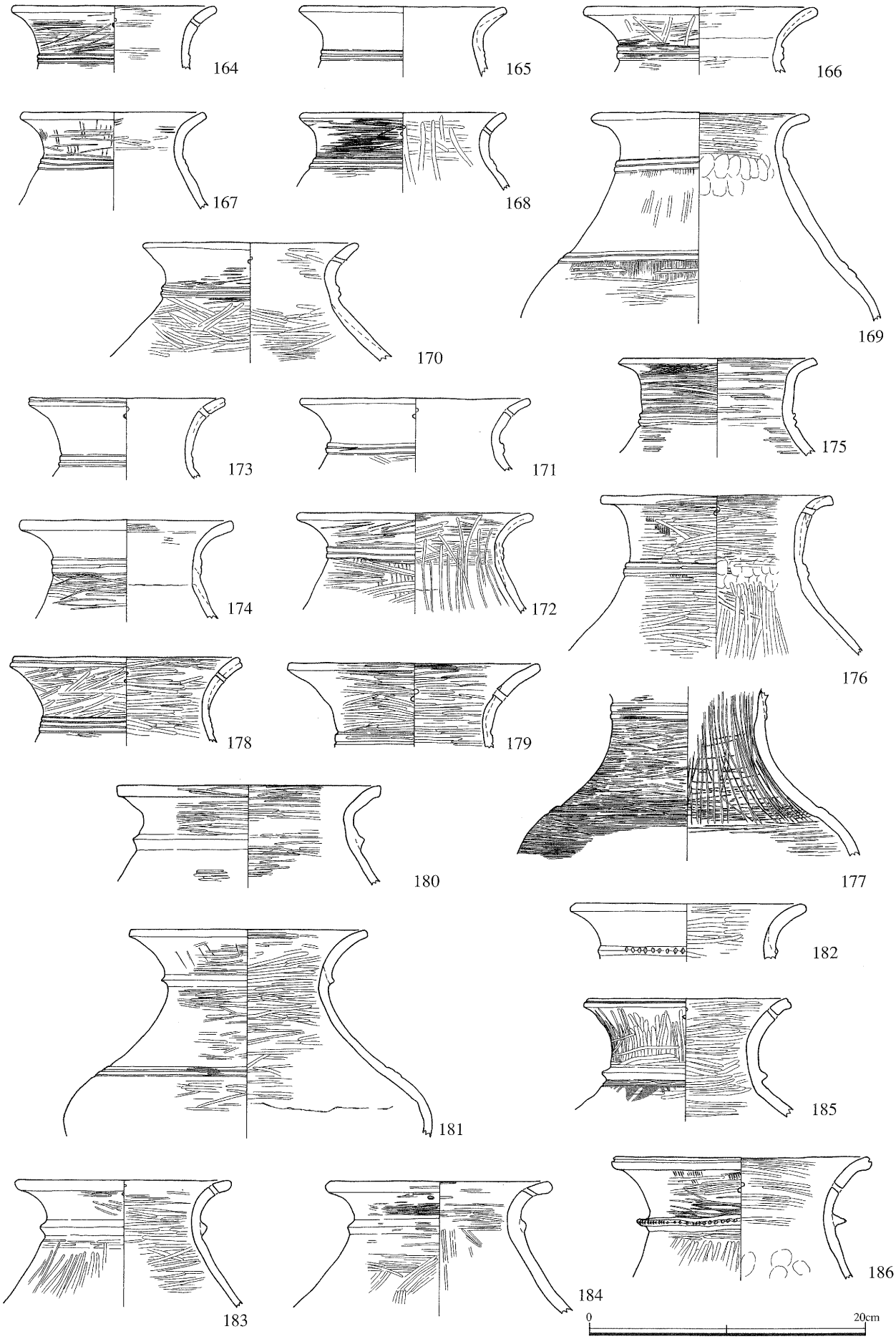
そのままに残し、頸胴部間にヘラ描き沈線1条を巡らせる。135は紐孔1が残る。137は2孔一対の紐孔を有する。また、頸部に外方から穿孔する。138は段部分を丁寧にヘラミガキし、丸く仕上げる。140の頸胴部間はやや幅広の削出突帯で、上面は丁寧なヘラミガキである。141は1孔一対の紐孔を有する。143は段は接合部を削出しにより強調した低いものである。黒色塗布か。

第43図145～151は口頸部間に段とその上方にヘラ描き沈線を有する壷で、すべて非生駒西麓産胎土である。145～149は明瞭な段、150・151は削出しによる低い段を形成する。145・150は調整不明。147・148は同一個体の可能性が高い。149は口縁端部にヘラ描き沈線を巡らせる。150のヘラ描き沈線は細く（幅1㎜程度）浅い。151のみ橙色（2.5YR 6/8）の明るい色調を呈する。浅い段の上方に細く（幅0.5㎜程度）浅いヘラ描き沈線3条をめぐらせる。胴部文様もやはり同様のヘラ描き沈線である。

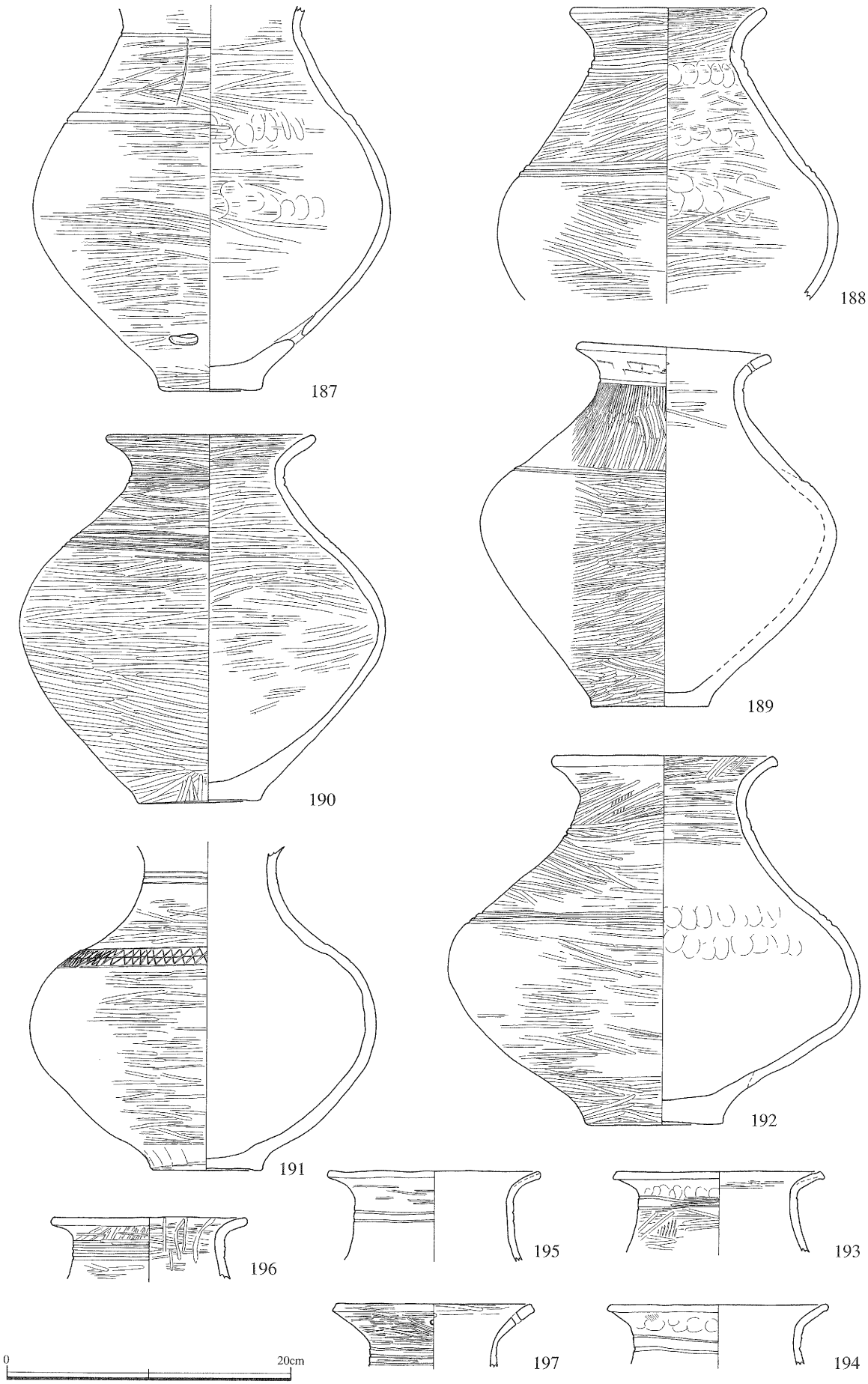
第43図152～161は口頸部間に無文の削出突帯を巡らせる壷で、すべて非生駒西麓産胎土である。155は段と上方を削出したもので、密なヘラミガキによって断面カマボコ形にする。156は口頸部間に段と上方を削出した削出突帯、頸胴部間に段を有する。157の頸胴部間は段とその下方にヘラ描き沈線を巡らすようである。158は体部内面以外、剥離で調整不明。158・160は大変粗いハケ状工具で削出しており、特徴的である。160の頸胴部間にヘラ描き沈線が残る。161は紐孔1が残る。

第43図162～第44図179は口頸部間に上面にヘラ描き沈線を有する削出突帯を巡らせるもので、163のみ生駒西麓産胎土である。162は段の上方にヘラ描き沈線2条を巡らせるが、削出突帯のようにみえる。164は2孔が残り、紐孔1を四方に配する。165は摩滅で調整不明。166は黒色物塗布と考えられ、頸部に赤色顔料が僅かに残存する。169は口頸部間削出突帯は最終的にヘラミガキを施すことでヘラ描き沈線は部分的に消える。外面から口縁部内面に黒色塗布。172と同一個体の可能性が強い。173は1孔が残り、紐孔1を二方に配する。174と177は、にぶい黄橙色（10YR 7/2）を呈する特徴的なもので、同一個体の可能性が強い。いずれも黒色塗布する。口頸部部間の削出突帯はヘラミガキで断面カマボコ形を呈す。頸胴部間は段とその下方に削出を行う。175・176は黒色塗布し、176は1孔一対の紐孔を有する。178・179は黒色塗布し、いずれも1孔が残る。

第44図180～186は口頸部間に断面三角形の突帯を巡らせる壷で、いずれも非生駒西麓産胎土である。突帯については段を利用したもの（181・182）と、貼付けによるもの（183・184・186）がある。180は段の可能性があるが断定しがたい。185はわからない。180は突帯下裾より上部に黒色塗布。181の口頸部間の段はつまみ出したような形態であり、ヨコナデ仕上げである。頸胴部間は削出突帯で上面にヘラ描き沈線を巡らせる。182は突帯上に深く鋭い刺突文を巡らせる。黒色塗布。5cm程度の破片のため口径は不正確。183・184はいずれも1孔一対の紐孔を有する。後者は黒色塗布。185は口縁端部、突帯裾とその下にヘラ描き沈線を巡らせる。黒色塗布の後、口縁端部沈線と頸部に赤色顔料で文様を巡らせる。186は口縁端部にヘラ描き沈線、突帯上に刺



第44図　流路0183中・下層出土遺物（8）



第45図　流路0183中・下層出土遺物（9）

突文を巡らせる。1孔一対の紐孔を有する。

第45図187～191は、いずれも非生駒西麓産胎土。壷187は口頸部間にヘラ描き沈線、頸胴部間に段とヘラ描き沈線を巡らせる。頸部にヘラ描き文。体部下に外側から焼成後の穿孔1を有する。壷188は口頸部間、頸胴部間に太いヘラ描き沈線3条を巡らせる。壷189は口縁端部の一部を欠損するのみ。口頸部間に太いヘラ描き沈線１条、頸胴部間に段とヘラ描き沈線１条を巡らせる。なお段上裾に鋭い沈線で縁取る。口縁部ヨコナデ、外面頸部は縦方向ハケメ後ヘラミガキ、胴部横方向ヘラミガキ、底面ヘラミガキ。内面は図示し得ないがヘラミガキを主とする。壷190は口頸部間に２条、頸胴部間4条（部分的に5条）のヘラ描き沈線を巡らせる。内外面、底面ヘラミガキ。壷191は口縁部を欠損する。口頸部間に極細のヘラ描き沈線３条、頸胴部間に段と下方にやや細いヘラ描き沈線２条を巡らせ、その間に斜格子文を施す。なお段上裾に沈線で縁取る。外面ヘラミガキ、底面と内面は調整不明。

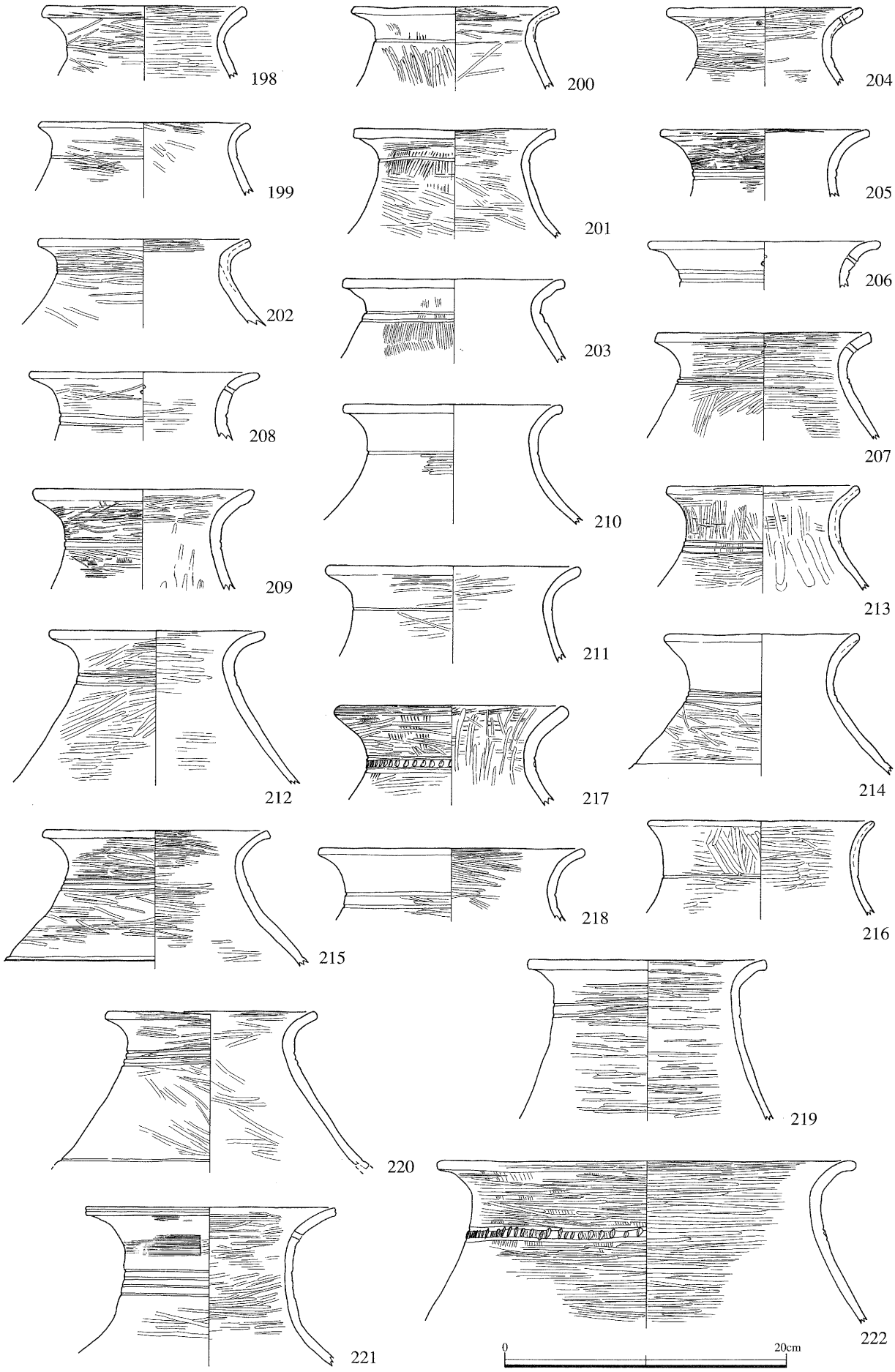
第45図の壷192は生駒西麓産胎土。口頸部間に2条、頸胴部間3条の太いヘラ描き沈線を巡らせる。体部外面、底面および口縁内面はヘラミガキ、体部内面は調整不明。

第45図の壷193～197は非生駒西麓産胎土。口頸部間にヘラ描き沈線を巡らせる。197は紐孔1が残存する。

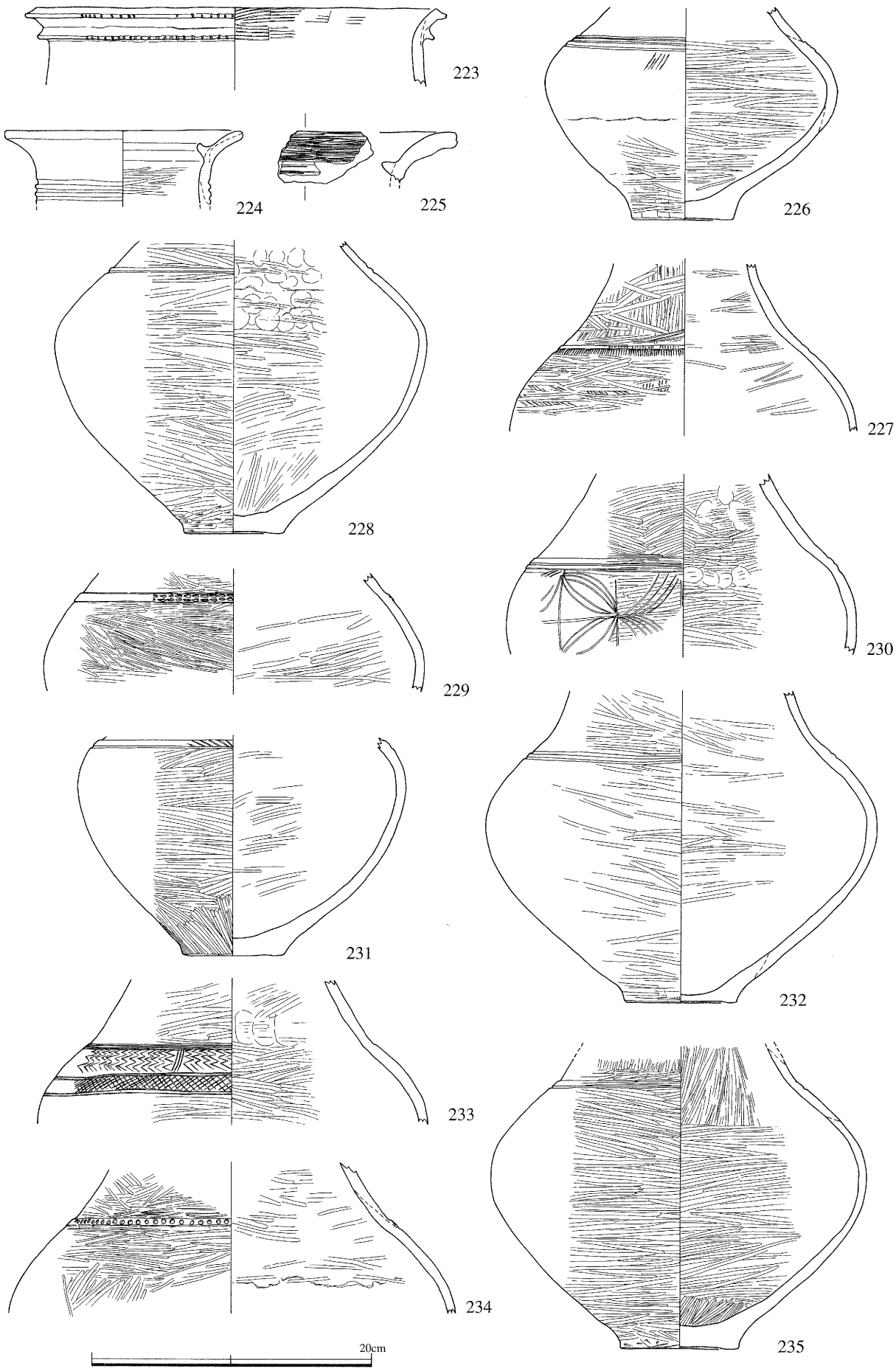
第46図の壷198～220は口頸部間にヘラ描き沈線1～3条を巡らせるもので、すべて非生駒西麓産胎土。215の頸胴部間は削出と下方に非常に細く浅いヘラ描き沈線を巡らせる。220の頸胴部間は僅かに残存するのみだが、削出した後に上裾に縁取り沈線を巡らせたと考えられる。

第46図の壷221は非生駒西麓産胎土。低い段の裾に縁取り沈線、さらに下方にヘラ描き沈線3条を巡らせる特異例で唯一である。1孔一対の紐孔を有する。口縁部外面はナデ仕上げ。中型壷222は、非生駒西麓産胎土。口頸部間にヘラ描き沈線2条とその間に刺突文を巡らせる。

第47図の壷はすべて非生駒西麓産胎土。壷223は貼付け突帯であり、口縁端部と突帯上にキザミメを巡らせる。外面調整は不明。壷224・225は、内面に貼付け突帯を巡らせる。224の口頸部にヘラ描き沈線3条が巡るが、最下の沈線は低い段の縁取り沈線である。図示し得ていないが、口縁端部の接合痕上に極微細なヘラ描き沈線を巡らせる。225は細片のため口頸は不明であるが、大型品である。口頸部は段、口縁端部にヘラ描き沈線を巡らせる。壷226は、頸胴部の接合が明瞭に観察できる。頸胴部は段とその下にヘラ描き沈線3条を巡らせる。また、極微細なヘラ描き文が残存する。壷227は頸胴部間の削出突帯は、上が細かな工具で右斜上方へ、下が粗いハケメを下方へ施し形成する。壷228は、頸胴部間に削出突帯を巡らせる。底面ヘラミガキ。壷229は頸胴部間に段と削出しによる削出突帯、上面に刺突文を巡らせる。壷230は頸胴部間に段と削出しによる削出突帯、上面にヘラ描き沈線を巡らせる。段裾に縁取り沈線。丁寧なヘラミガキであり、外面黒色塗布。壷231は頸胴部間は段とヘラ描き沈線であり、その間に部分的に刺突を施す。底面ヘラミガキ。壷232は、頸胴部間はヘラ描き沈線２条。内外面ヘラミガキ、底面不明。壷233は頸胴部間に段、下方に極微細なヘラ描き沈線3条、2条、2条とその間にキザミ紋を配する。壷234



第46図　流路0183中・下層出土遺物（１０）



第47図　流路0183中・下層出土遺物（１１）

は頸胴部間は削出突帯であり、上面に竹管刺突を巡らせる。壷235は、頸胴部間は段と下方にヘラ描き沈線を巡らせる。内外面、底面ヘラミガキを密に施す。外面黒色塗布。

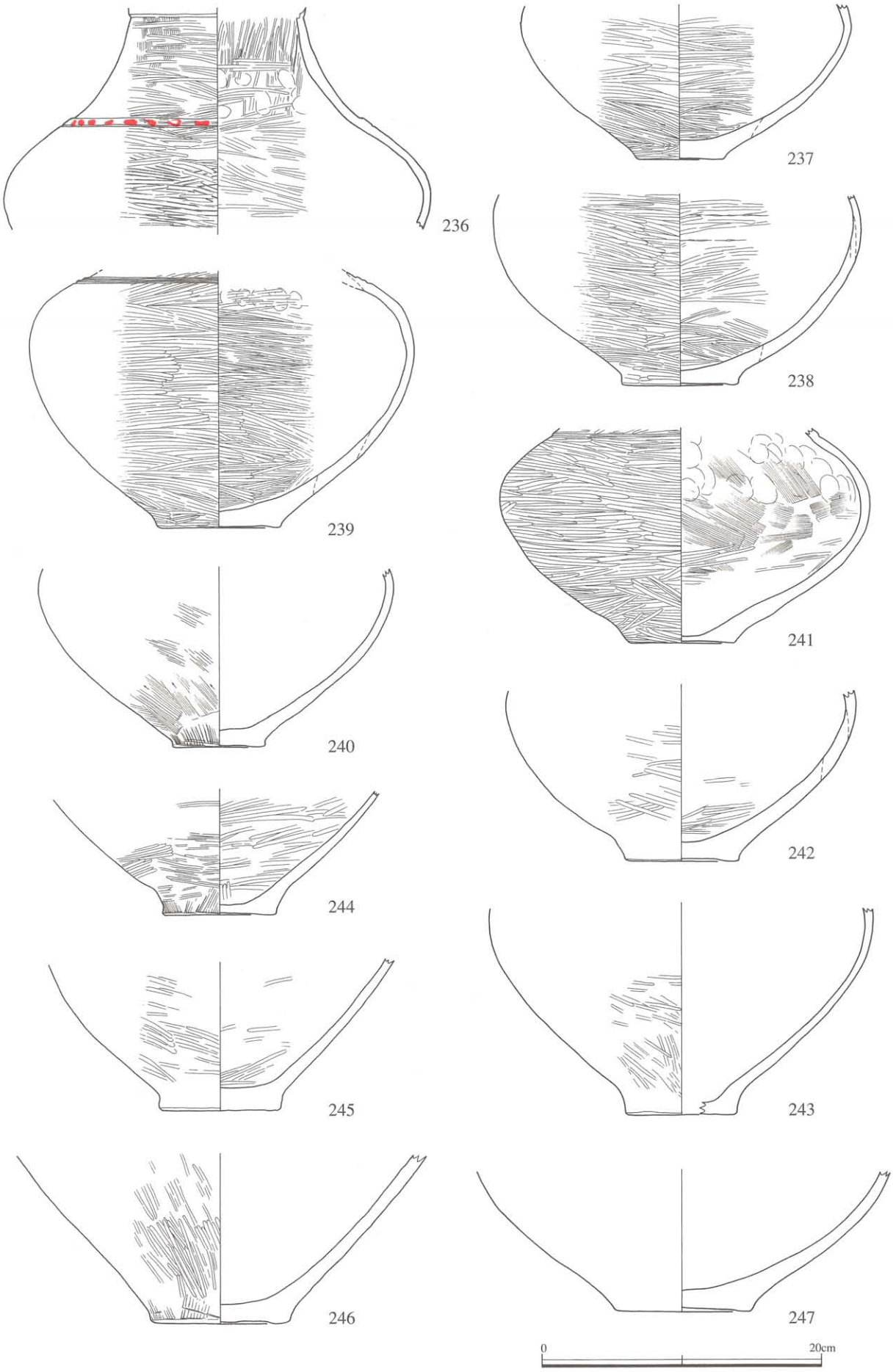
第48図は241のみ生駒西麓産胎土、他は非生駒。壷236の口頸部間は段と考えられる。頸胴部間は段と下方にヘラ描き沈線、その間に赤色顔料斑点を巡らせる。外面は頸部に縦方向、胴部に横方向ハケメの後ヘラミガキ。外面黒色塗布か？　壷237・238は内外面、底面ヘラミガキ。外面黒色塗布か？　壷239の頸胴部間はヘラ描き沈線３条。最上部は削出し気味である。内外面、底面ヘラミガキ。内面黒化。壷240は外面低部はハケメか？　体部は部分的にヘラミガキ残存。底面ヘラミガキ、内面ナデ。壷241は頸胴部間削出突帯。底部が薄い。外面と底面ヘラミガキ、内面板ナデ、ヘラミガキ。壷242は外面と底面ヘラミガキ、内面板ナデの後ヘラミガキ。壷243は低部穿孔の可能性がある。外面ヘラミガキ、底面不明、内面ナデと部分的にヘラミガキ。壷244は低部ハケメ、内面底部ナデ、体部内外面と底面ヘラミガキ。壷245は内外面、底面ヘラミガキ。壷246は低部外面ハケメ、体部下半ヘラミガキ、底面ナデ、内面不明。壷24７は摩滅で調整不明。内面黒色。

第49図の壷、あるいは鉢底部248～253は、いずれも非生駒西麓産胎土。248は底面ヘラミガキ。体部外面、底面ともに黒色塗布。250・251は底面にヘラミガキの後、文様を刻む。253の底面は無調整。

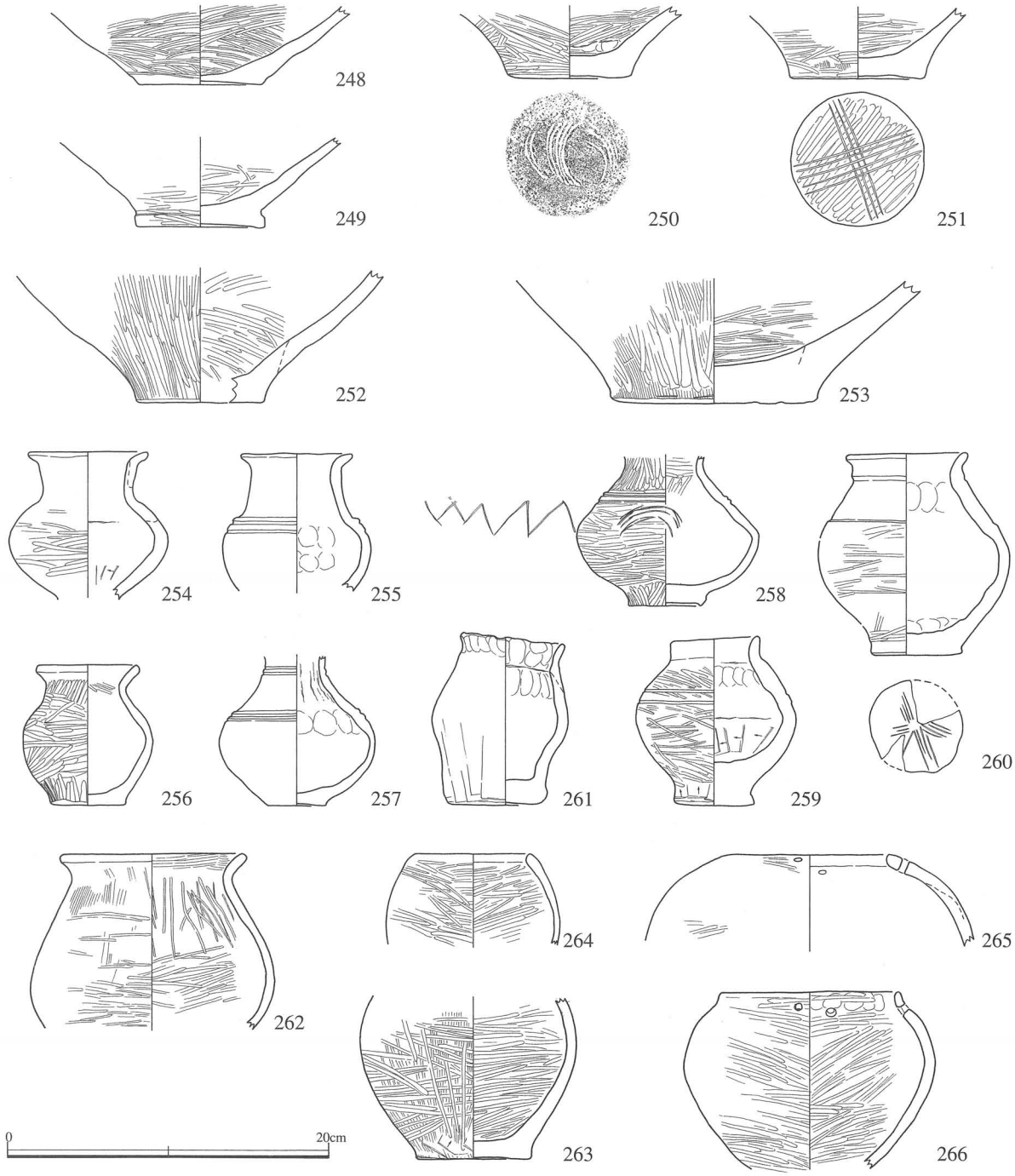
第49図の小型壷254～263は、いずれも非生駒西麓産胎土。254は口頸部調整不明、内面ナデ。255は段の下方にヘラ描き沈線2条を巡らせる。摩滅のため調整不明。256は口縁部ヨコナデ、底面無調整、内面ナデ仕上げ。257は口頸部間にヘラ描き沈線2条、頸胴部間に段と下方にヘラ描き沈線2条を巡らせる。内面ナデ、外面は摩滅で調整不明。258は頸胴部間に低い段と下方に削出による削出突帯で、上面にヘラ描き沈線を巡らせる。また、段上裾に強い縁取り沈線を巡らせる。削出突帯部分に赤色顔料が僅かに残る。体部上半に表裏の関係で重弧文と鋸歯文を配する。259は非常に雑なヘラ描き沈線2条を巡らせる。体部最大径以上に赤色顔料が僅かに残る。260は口頸部間、頸胴部間ともに段である。底面はヘラミガキの後にヘラ描き文。261は口縁部に成形時の指頭痕を残す粗雑な仕上げである。体部上半は摩滅で調整不明。底面ヘラミガキ。

第49図の無頸壷264～266は、いずれも非生駒西麓産胎土。264は1/4程度の破片のため、紐孔の有無は不明。265は紐孔1のみ残る。外面に僅かにヘラミガキ痕が残るが、他は摩滅のため調整不明。266は紐孔2が残り2孔一対と考えられる。外面黒色塗布か？

第50図の壷蓋267～290は、すべて非生駒西麓産胎土。扁平なもの（267・268）、扁平な体部に中央が突出するもの（269）、山形を呈するもの（270～288）、頂部を突出させてつまみ状を呈するもの（289・290）がある。なお後2者にはヘラ描き、あるいは赤色顔料で文様を施すものが多い。頂部穿孔のないものには裾部穿孔があり、275・277は1孔一対、271・273・280・284・289は2孔一対である。裏面調整は267がヘラミガキのようであり、267は製作台の痕跡をそのままに残す。表裏の別があったことがわかる。269・270は裏面もヘラミガキ。283・284・286・287は表面



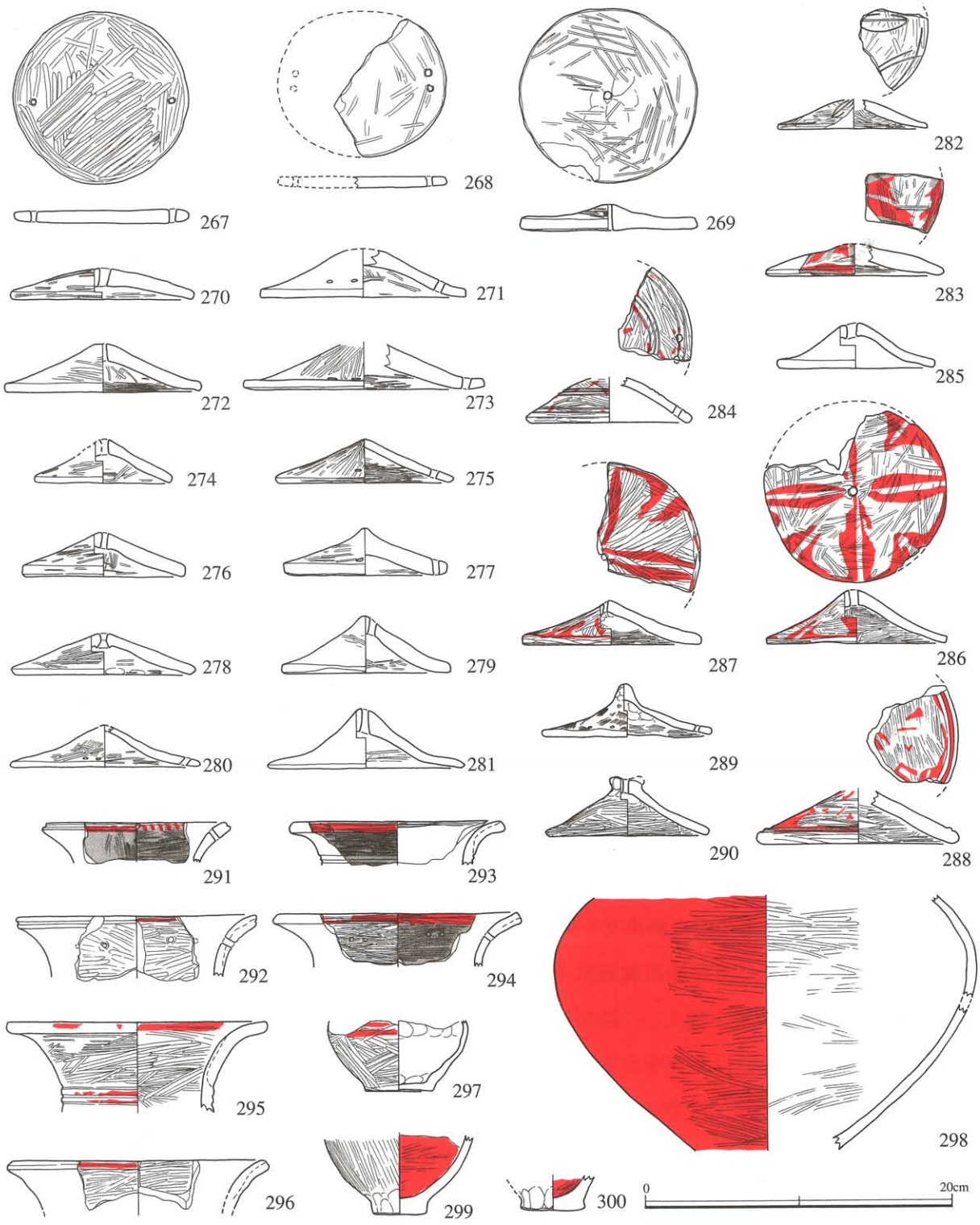
第48図　流路0183中・下層出土遺物（１２）



第49図　流路0183中・下層出土遺物（１３）

のみに黒色塗布の後、赤色顔料で文様を施す。288は摩滅のため黒色塗布の有無は不明。288の裾は削出とその下部にヘラ描き沈線を巡らせる。289は外面と内面裾がハケメ仕上げであり、歪みがあり、紐孔も対称的でない粗製品。

第50図の壷291～296は、黒色塗布の後に赤色顔料で文様を施すもので、非生駒西麓産胎土。291・292・296は4cm程度の破片で、口径は不正確。292・294は2孔一対の紐孔を有する。293は



第50図　流路0183中・下層出土遺物（１４）

ヘラ描き沈線、295はヘラ描き沈線を有する削出突帯を巡らせる。

第50図の小型壷297は、体部黒色塗布の後に赤色顔料で文様を施す。非生駒西麓産胎土。底面ヘラミガキ。壷298は外面全面に赤色顔料塗布。非生駒西麓産胎土。内面黒色。

第50図の299・300は内面に赤色顔料が付着するもので、肉眼観察によるが朱と考えられる。いわゆる「内面朱付着土器」である。非生駒西麓産胎土。299の朱は赤色（10R 4/8）を呈する。内

面ヘラミガキ、外面はハケメの粗製品で煤の付着は確認できない。300の朱は赤橙色（10R 5/8）を呈する。外面煤付着。

第51図の大型壷301～308は、303のみが生駒西麓産胎土、他は非生駒。301は低い段であり、削出して強調する。302は明確な段で丁寧なヘラミガキで仕上げる。口縁端部もヘラミガキを施すが、接合部分がヘラ描き沈線状にみえる。303は大型壷で、唯一生駒西麓産胎土。口頸部は接合による段をナデにより丸くする。口縁部は内外面ヨコナデ。304は削出しによる低い段。13cm程度の資料なので口径はやや不正確。305は接合による段を軽くナデを施す。黒色を呈して、異質。10.5cm程度の資料なので口頸はやや不正確。306の段は粗いハケで削出したもの。口縁部はヨコナデ、頸部はヘラミガキ仕上げ。307の段は板状工具で削出したもので、非常に低い。口縁端部はヨコナデ仕上げだが、接合部分がくぼんでヘラ描き沈線状にみえる。10cm程度の資料なので口径はやや不正確。308の頸胴部間は低い段であり、その上裾をナデつけている。

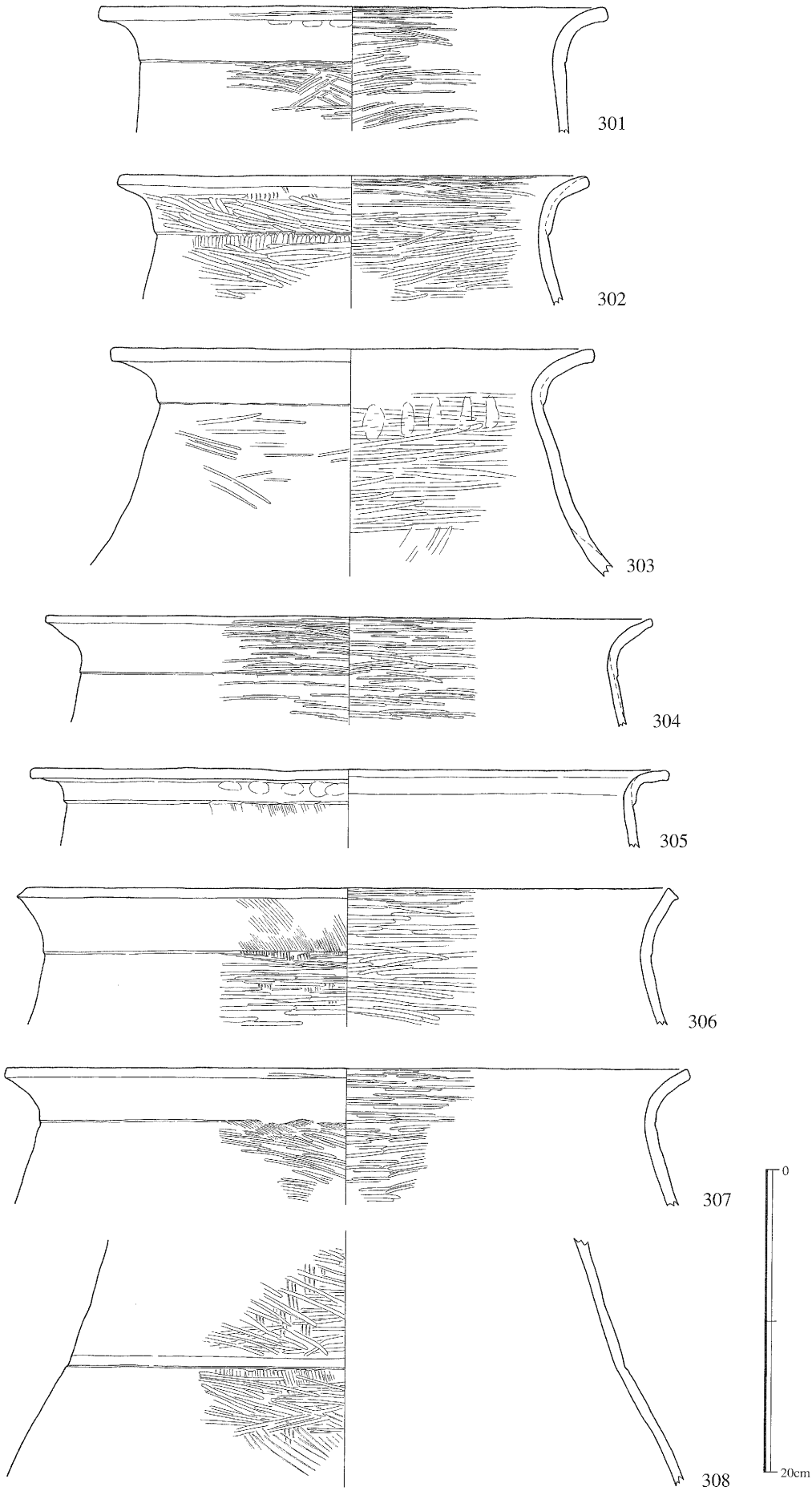
第52図の大型壷309～315は、いずれも非生駒西麓産胎土。309はやや幅広の削出突帯。310・311は削出突帯の上面に弱いヘラ描き沈線を巡らせる。312は接合による段と上方を削出した削出突帯である。313は削出突帯の上面にヘラ描き沈線を巡らせる。314・315は口頸部間にヘラ描き沈線2条を巡らせる。

第53図の大型壷316～321は、いずれも非生駒西麓産胎土。316は口頸部間に太いヘラ描き沈線2条を巡らせる。317は口頸部間にヘラ描き沈線2条とその間に竹管文、口縁端部にヘラ描き沈線を巡らせる。318は口頸部間にヘラ描き沈線2条とその間に刺突文、口縁端部にヘラ描き沈線、端部の上下にキザミメを巡らせる。15cm程度の資料なので口径はやや不正確。319・320は口頸部間にヘラ描き沈線を巡らせる。いずれも15cm程度の資料なので口径はやや不正確。321は口頸部間にヘラ描き沈線2条とその間に刺突文を巡らせる。

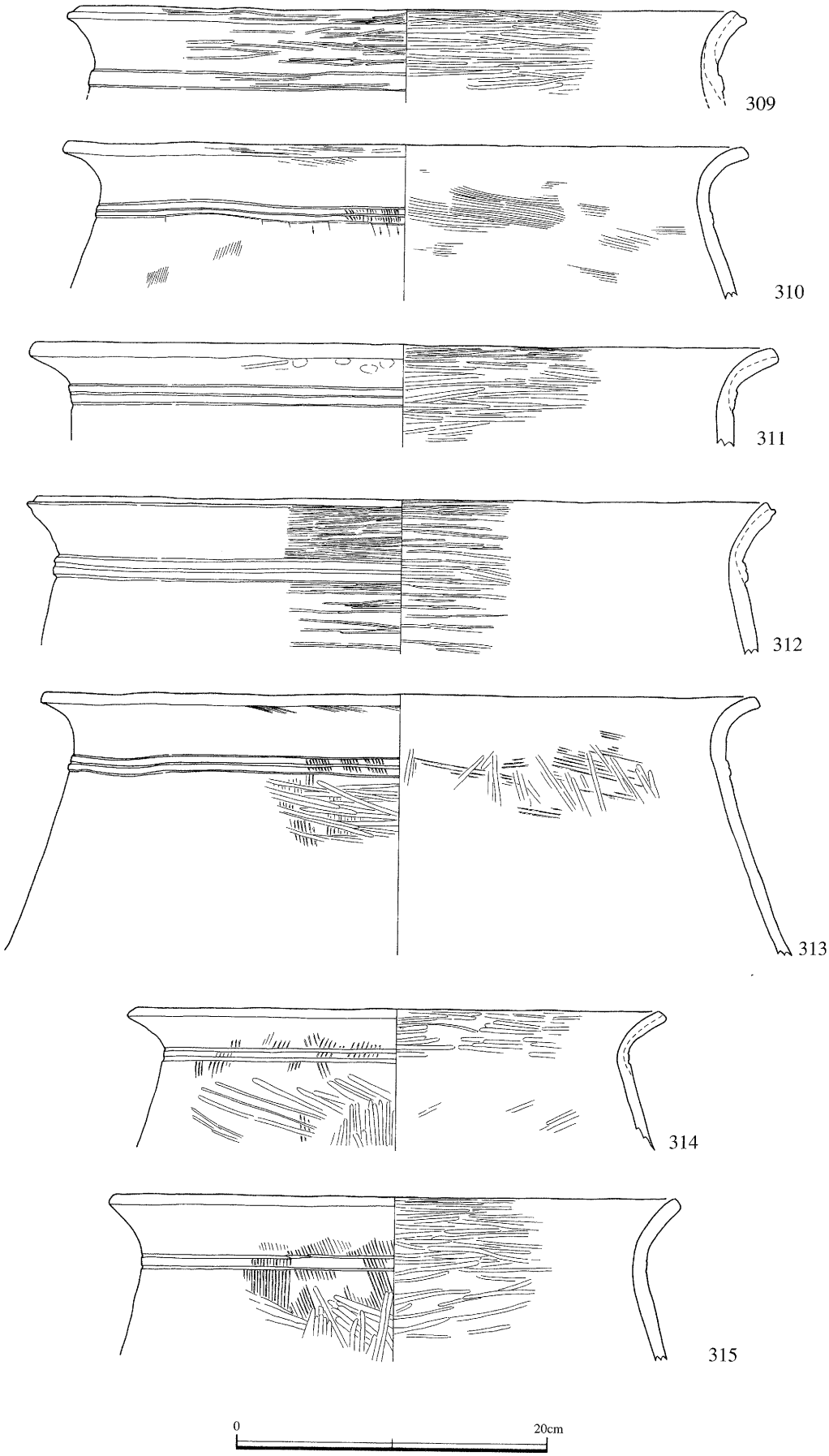
第54図の大型壷322は非生駒西麓産胎土。口頸部間１条、頸胴部間３条のヘラ描き沈線を巡らせ、その後にヘラミガキを施す。口縁部外面にヨコナデ、体部内面下半に板ナデが残存する以外、横方向ヘラミガキ。323は大型壷頸胴部か？　非生駒西麓産胎土。突出した貼付け突帯を巡らせる。外面は細かなヘラミガキ状を呈する。内面は縦方向板ナデの後に横方向ヘラミガキ。大型壷324は非生駒西麓産胎土。口頸部間に２条のヘラ描き沈線と線刻を巡らせる。調整不明。大型壷325は非生駒西麓産胎土。口頸部間に２条のヘラ描き沈線とその間に刺突文を巡らせる。内外面横方向のヘラミガキ。

第55図の甕326～341は、無文で口縁端部にキザミメも施さないもの。いずれも非生駒西麓産胎土であり、外面に煤付着。様々の形態がある。外面はハケメ、板ナデ、ナデ、内面は板ナデ、ナデが基本である。328のみにヘラミガキが見られる。339と340は同一個体の可能性がある。

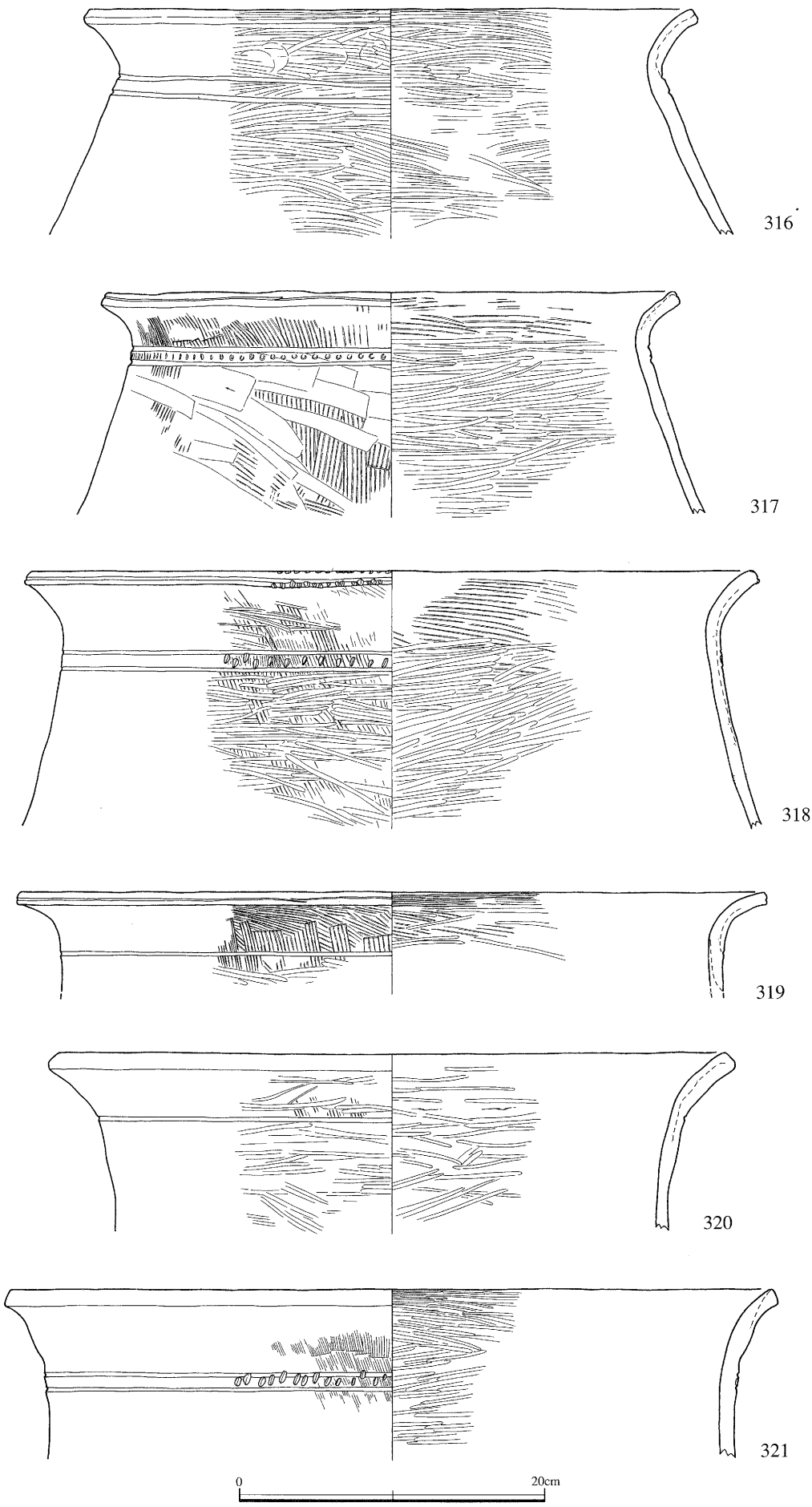
第55～58図の甕342～390は、無文で口縁端部にキザミメも施すもの。いずれも非生駒西麓産胎土。370・372・376・386・389以外は、外面に煤付着する。やはり外面はハケメ、板ナデ、ナデ、内面は板ナデ、ナデが基本である。口縁端部全面にキザミメを施すもの（342～345・356・368）



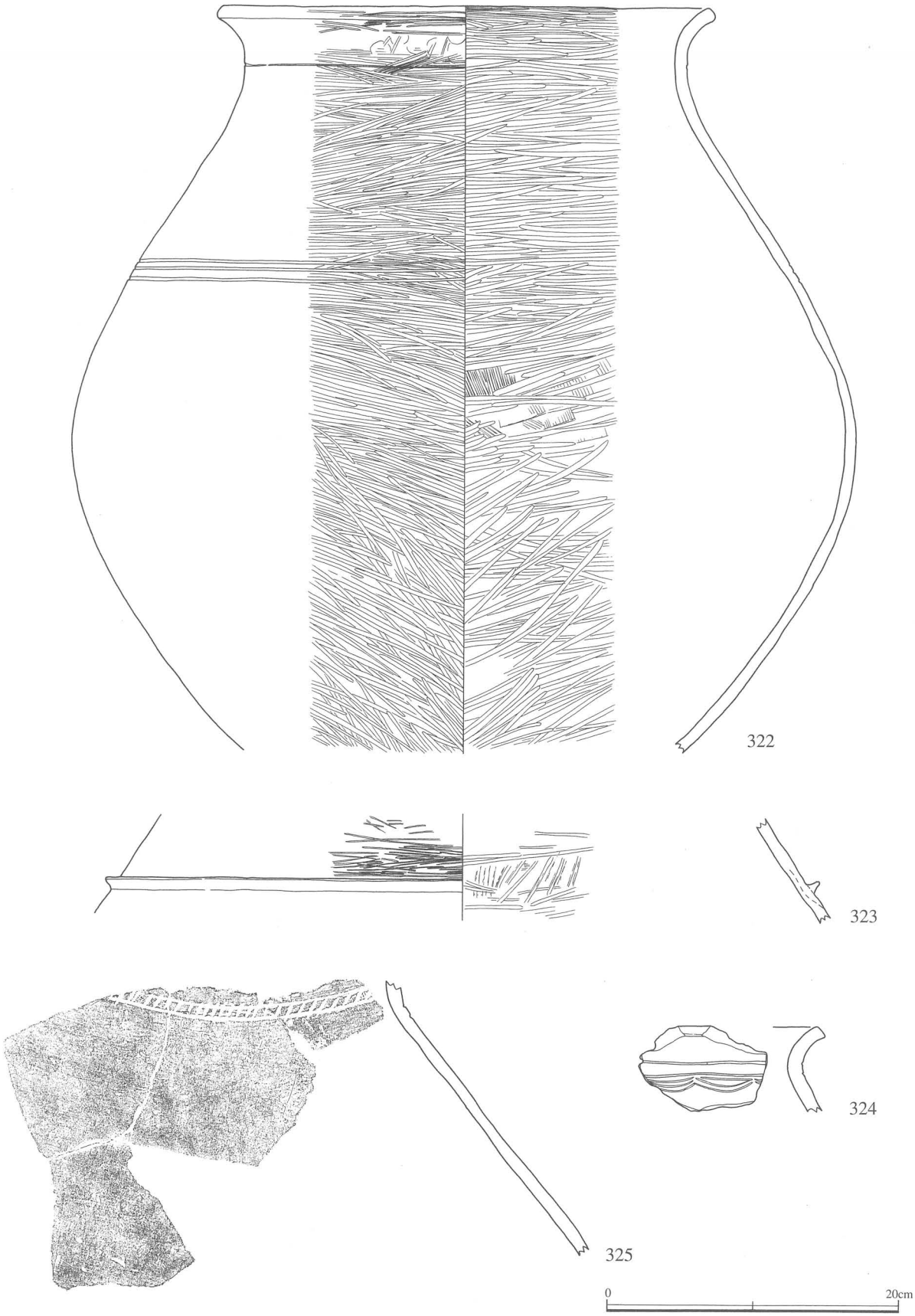
第51図　流路0183中・下層出土遺物（１５）



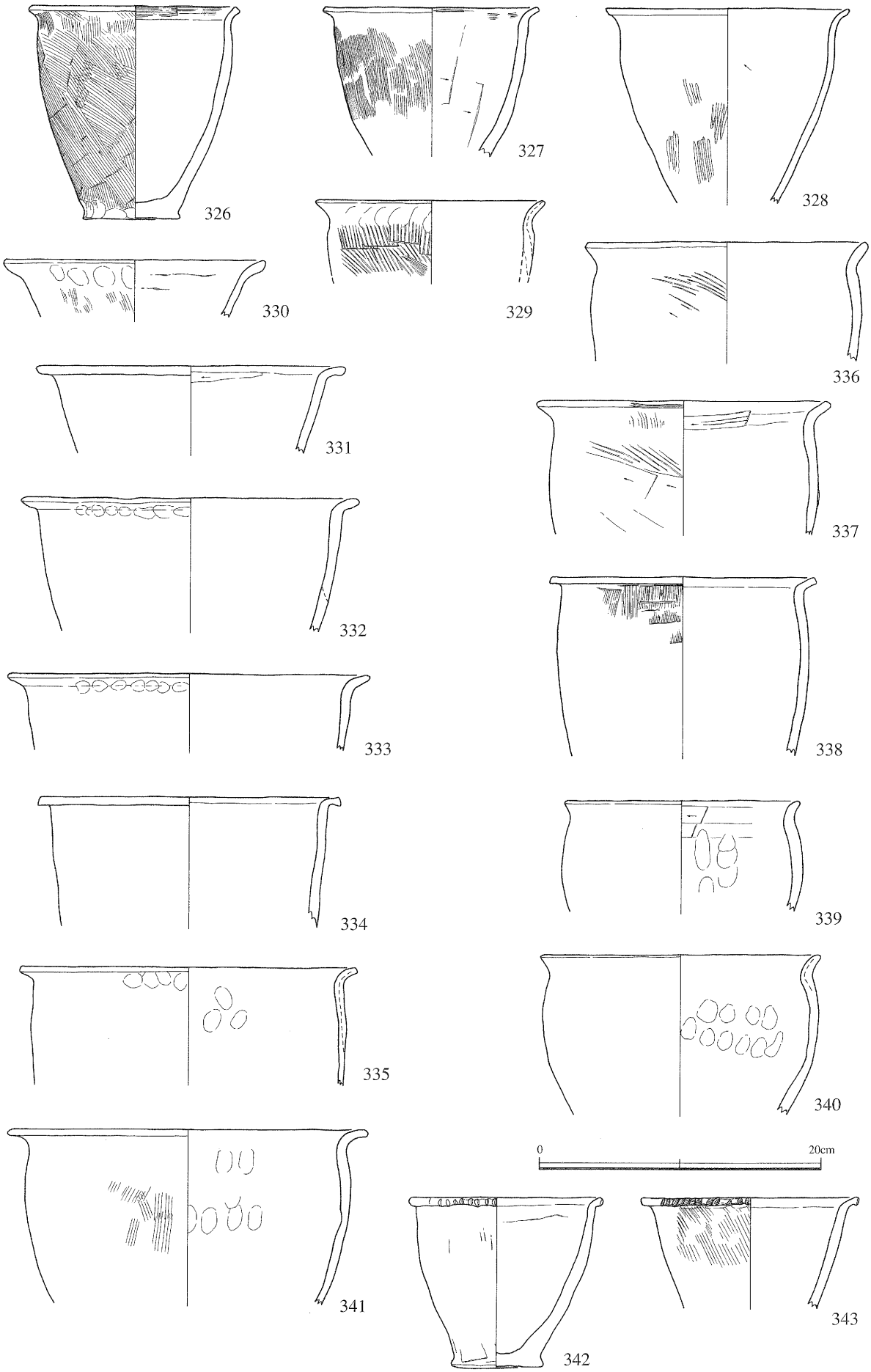
第52図　流路0183中・下層出土遺物（１６）



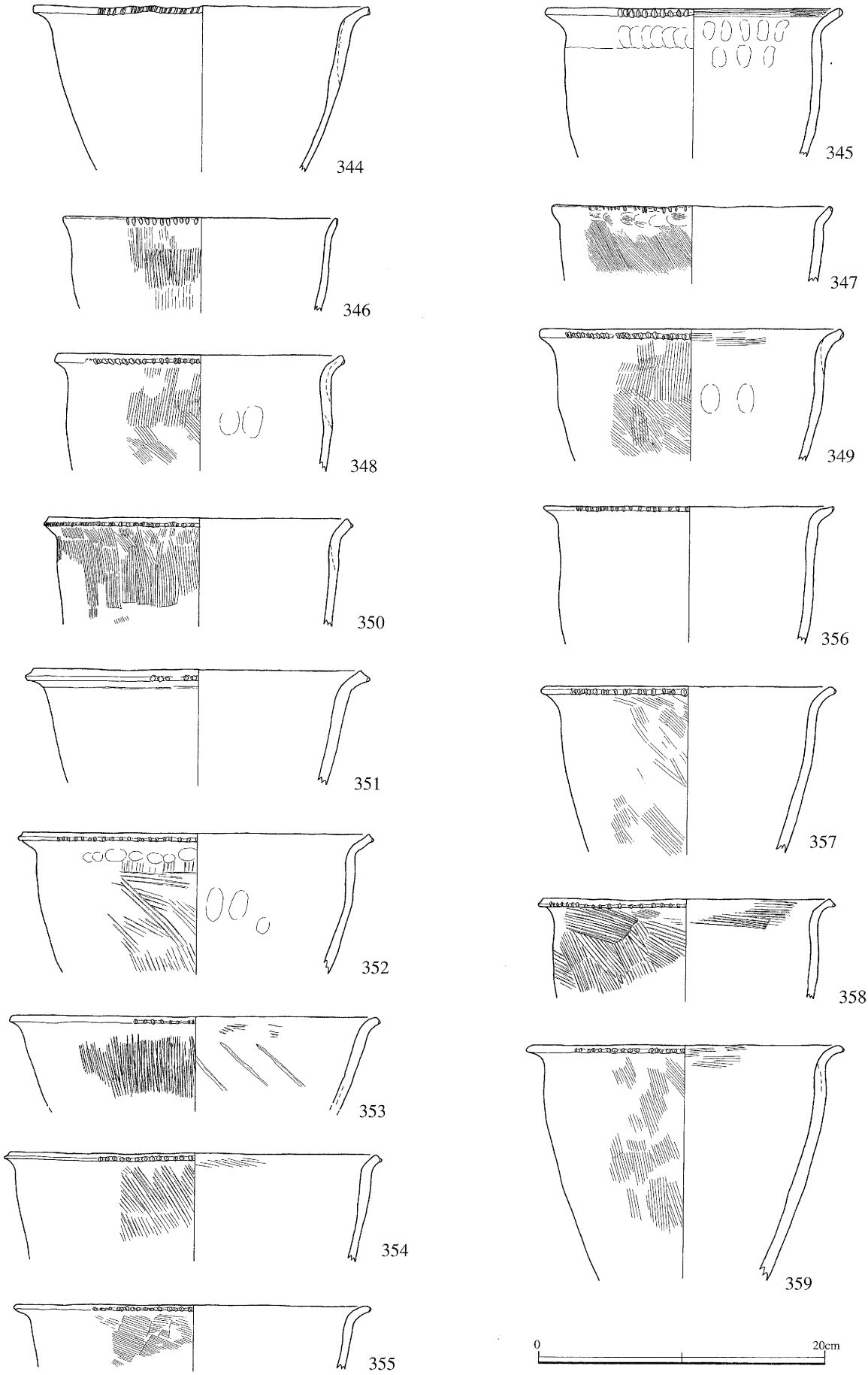
第53図　流路0183中・下層出土遺物（１７）



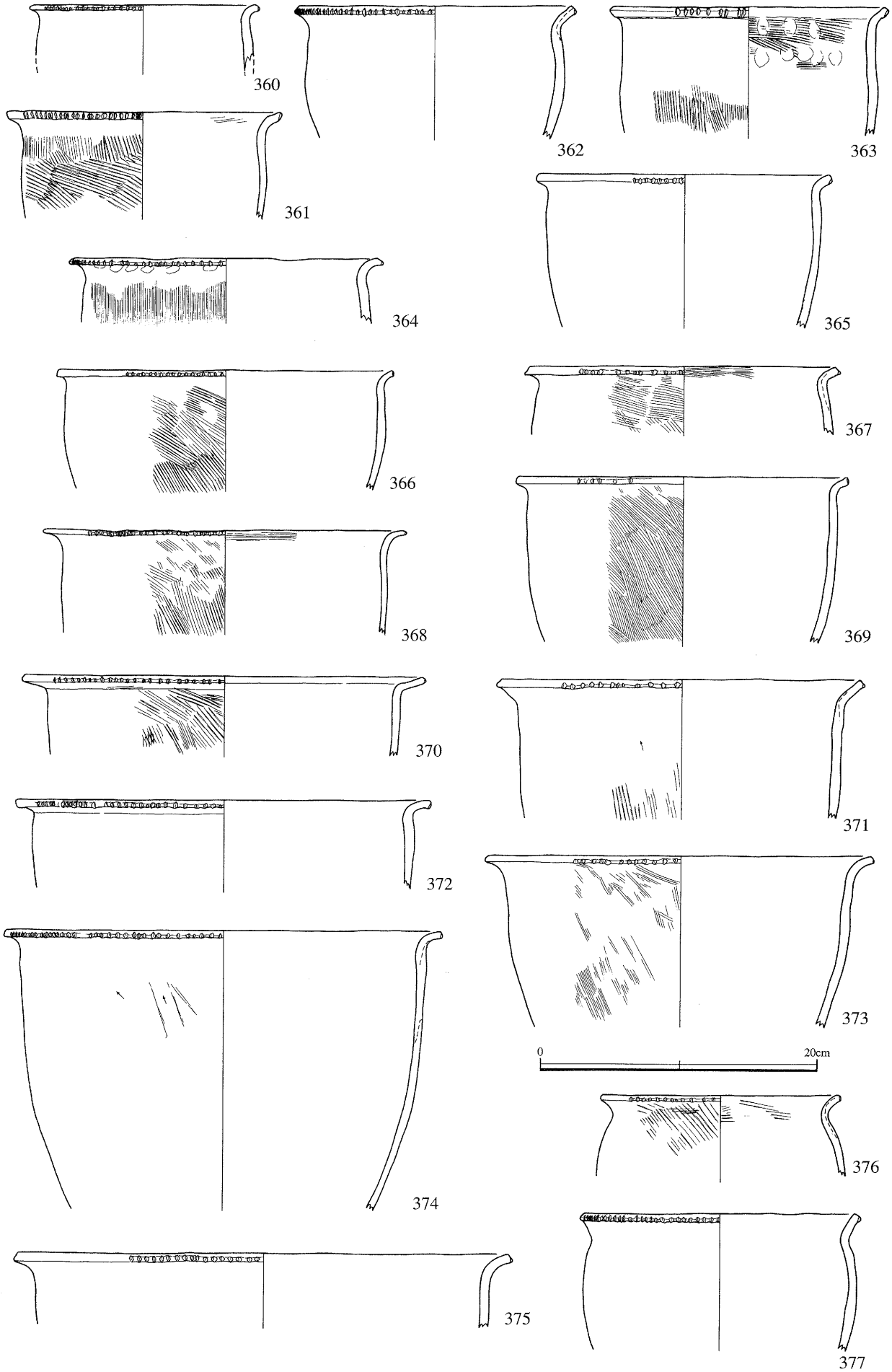
第54図　流路0183中・下層出土遺物（１８）



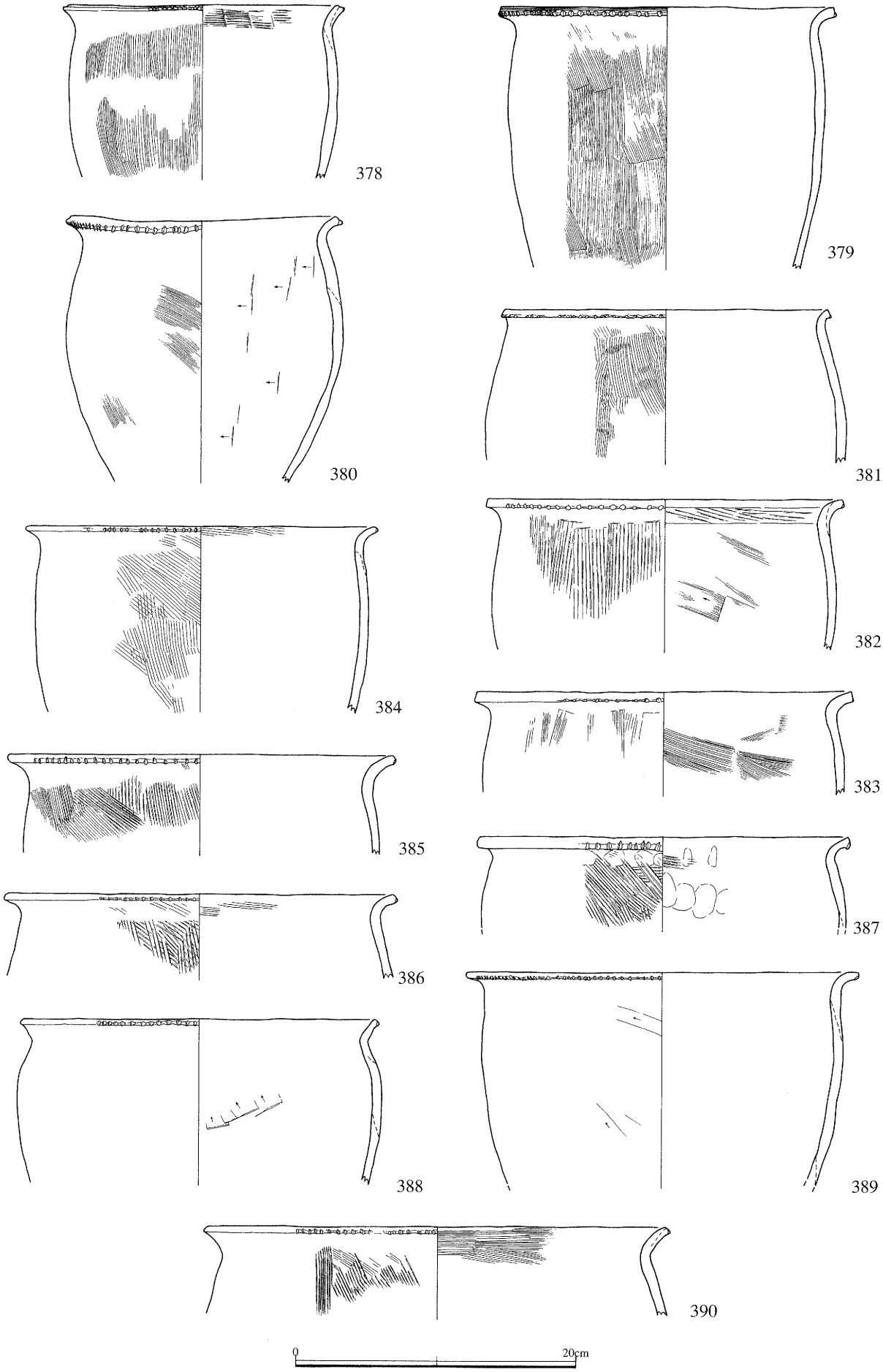
第55図　流路0183中・下層出土遺物（１９）



第56図　流路0183中・下層出土遺物（２０）



第57図　流路0183中・下層出土遺物（２１）



第58図　流路0183中・下層出土遺物（２２）

もあるが、他はすべて端部下端に施しており主体的である。346は、端部で若干外反させる形態で唯一である。351は屈曲部に板状工具で削出気味にする。353の内面は、工具先端のアタリと考えられるが詳細は不明。381は口縁端部近くで折り曲げる形態で唯一である。

第59図の甕391～398は段を有するもので、いずれも非生駒西麓産胎土。口縁端部全面にキザミメを施すもの（394・398）、他は端部下端に施す。398以外は外面に煤付着する。391はハケメ工具で削出した低い段。392は板状工具で削出した段と考えられる。393は段裾を板状工具で強調する。394～397は接合による段。398は板状工具で強く削出した段。

第59図の甕399～403は、段とその上方にヘラ描き沈線1～2条を有するもので、いずれも非生駒西麓産胎土。口縁下端部にキザミメを施し、外面に煤付着する。接合による段は皆無で、すべて板状工具で削出した段である。外面はハケメ、板ナデ、ナデ、内面は板ナデ、ナデである。399・400は板状工具で削出した極めて雑な低い段を形成する。402はヘラ描き沈線によって下方への削出しを二段巡らせたような状況を呈しており、その間に刺突文を施す。

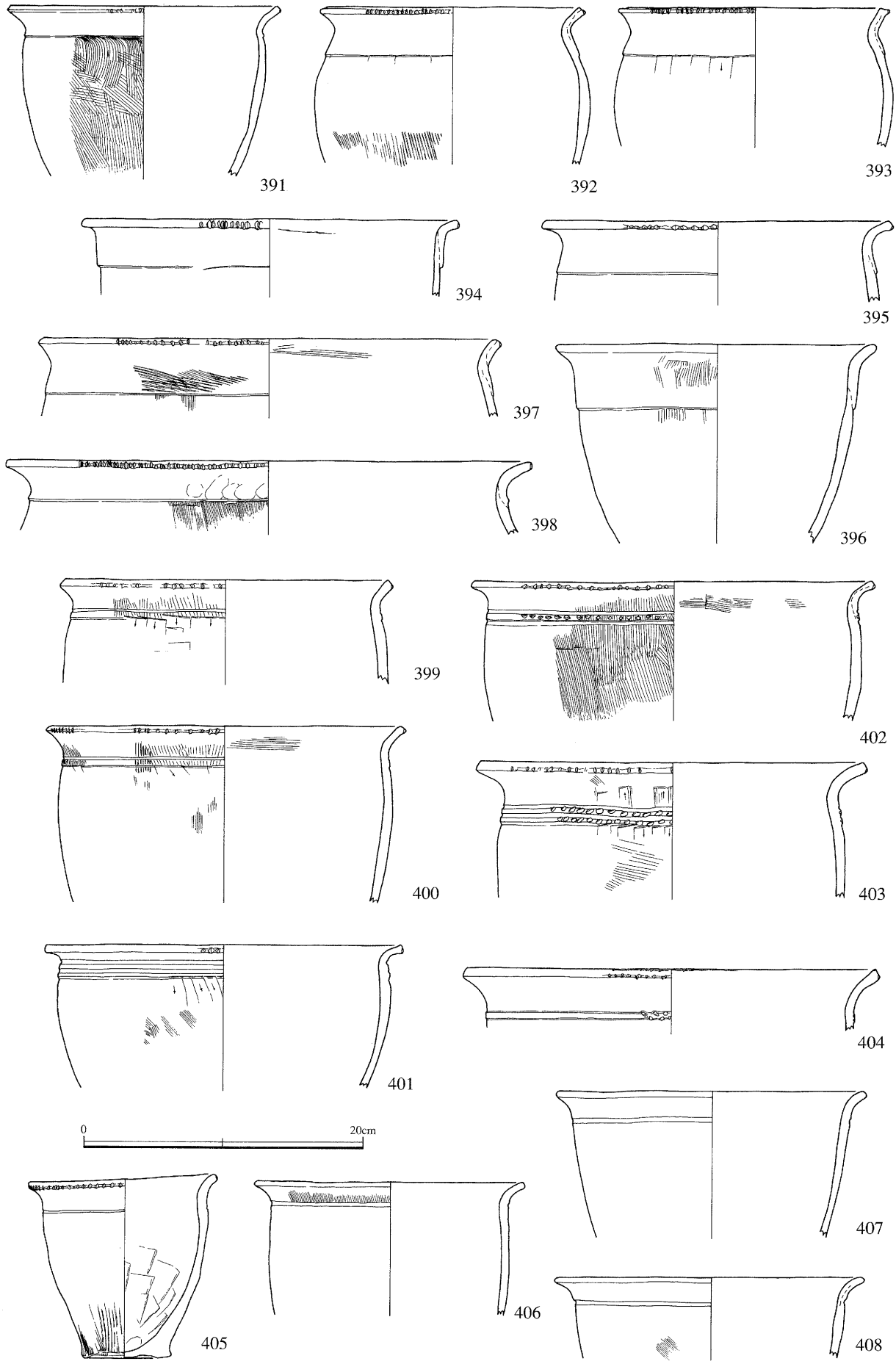
第59図の甕404は、非生駒西麓産胎土。細い削出突帯とその上面に刺突文を巡らせるもので、刺突は上下交互に施す。口縁上下両端部にキザミメを施す。5cm程度の破片で口径は不正確。外面煤付着。

第59～61図の甕405～424は、ヘラ描き沈線1条を巡らせるもので、414が生駒西麓産胎土で、他は非生駒。口縁下端部にキザミメを施すものが主体だが、無文のもの（406～408・415）もある。大部分が外面に煤付着し、残存しないものも赤変する。外面はハケメ、板ナデ、ナデ、内面は板ナデ、ナデが主体で、例外的にヘラミガキを施すもの（411）がある。420は体部板ナデの工具縁辺のあたりがヘラ描き沈線のようにみえるもの。421は5cm程度の破片で口頸は不正確。424の口縁部内面は竹管文である。

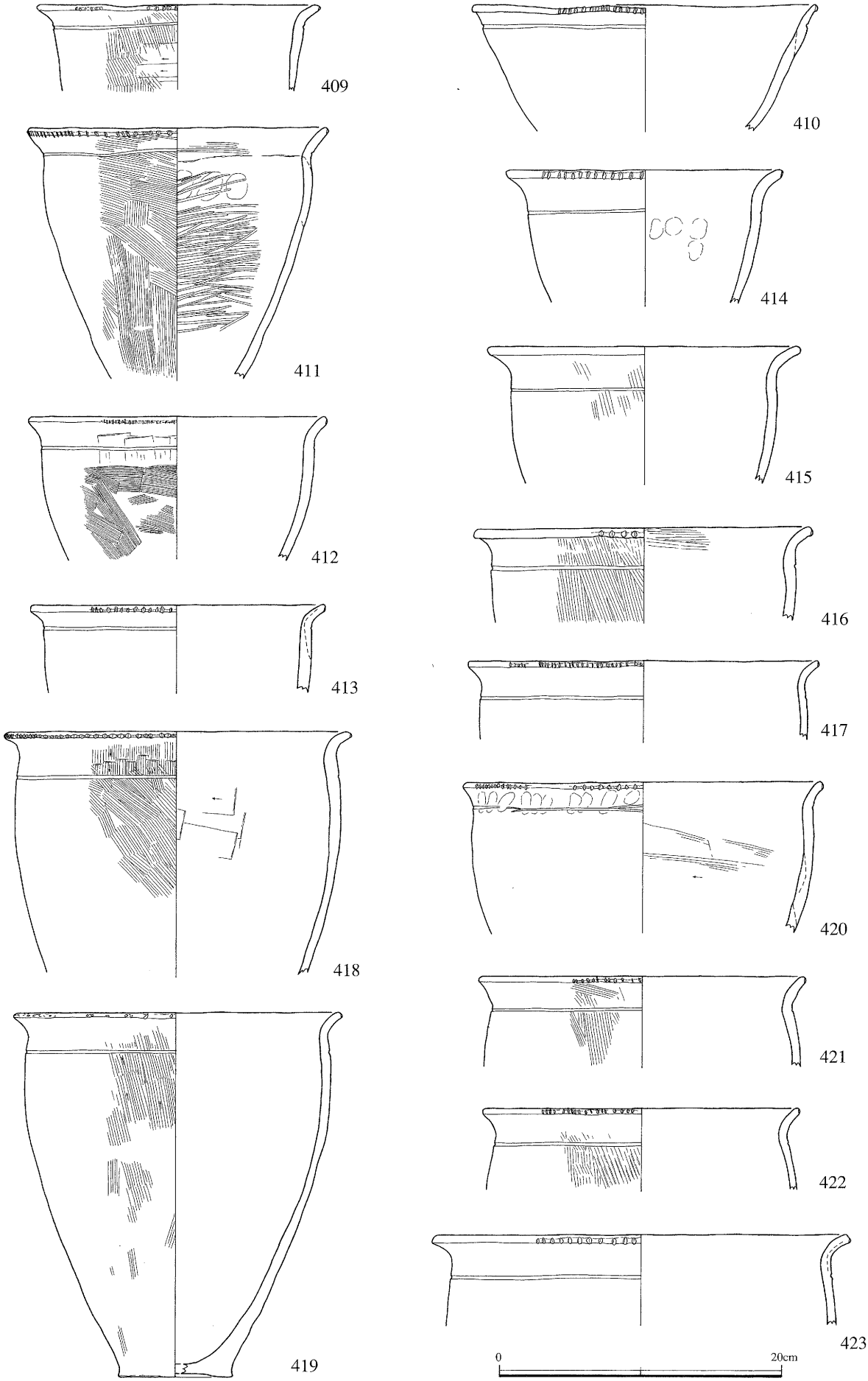
第61・62図の甕425～445は、ヘラ描き沈線2条を巡らせるもので、いずれも非生駒西麓産胎土。口縁下端部にキザミメを施すものが主体だが、無文のもの（440）が1点ある。426以外は外面に煤付着。外面はハケメ、板ナデ、ナデ、内面は板ナデ、ナデによる。442は体部外面ハケメで後に上半は丁寧にナデ消す。底面は成形時の台痕跡が残る。外面高さ7.5cm以上に煤付着、内面黒化。445は器壁が非常に厚い。外面の高さ13cm以上に煤の付着する明瞭なラインがあり、甑的な使用がなされたことがわかる。現状では底部に孔があるが、破損か人為的かの区別がつかないが、後者の可能性を想定したい。内面の高さ11cm以下黒化。

第62・63図の甕446～457は、ヘラ描き沈線2条とその間に刺突文を巡らせるもので、いずれも非生駒西麓産胎土。口縁部下端にキザミメを施す。447・454以外は外面に煤付着。外面はハケメ、板ナデ、ナデ、内面は板ナデ、ナデによる。446の刺突は非常に深く施す。

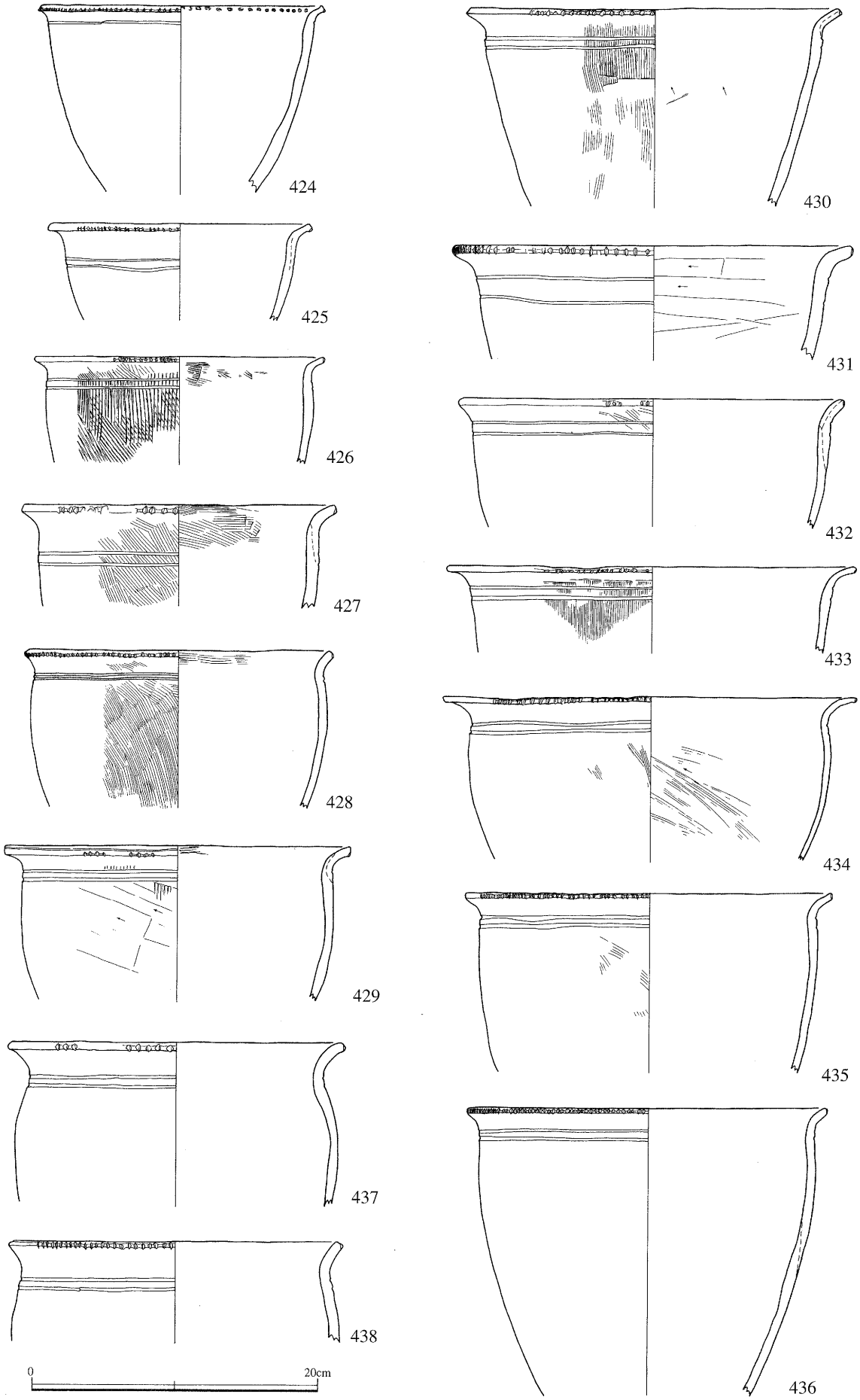
第63図の甕458～461は、ヘラ描き沈線3条を巡らせるもので、いずれも非生駒西麓産胎土。未報告資料を含めても3条沈線は少ない。すべて口縁部下端にキザミメを施し、外面に煤付着。外面はハケメ、板ナデ、ナデ、内面は板ナデ、ナデによる。



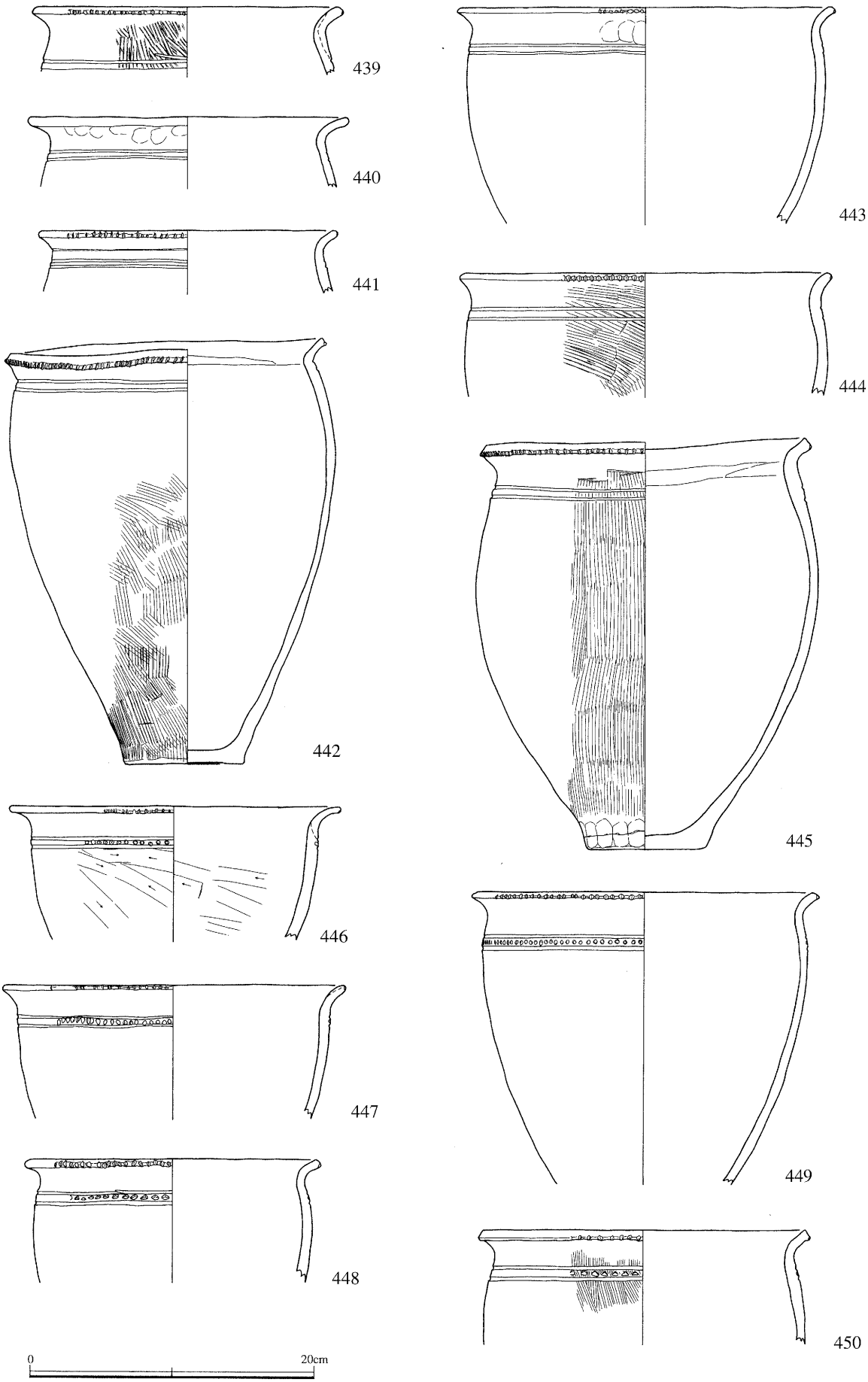
第59図　流路0183中・下層出土遺物（２３）



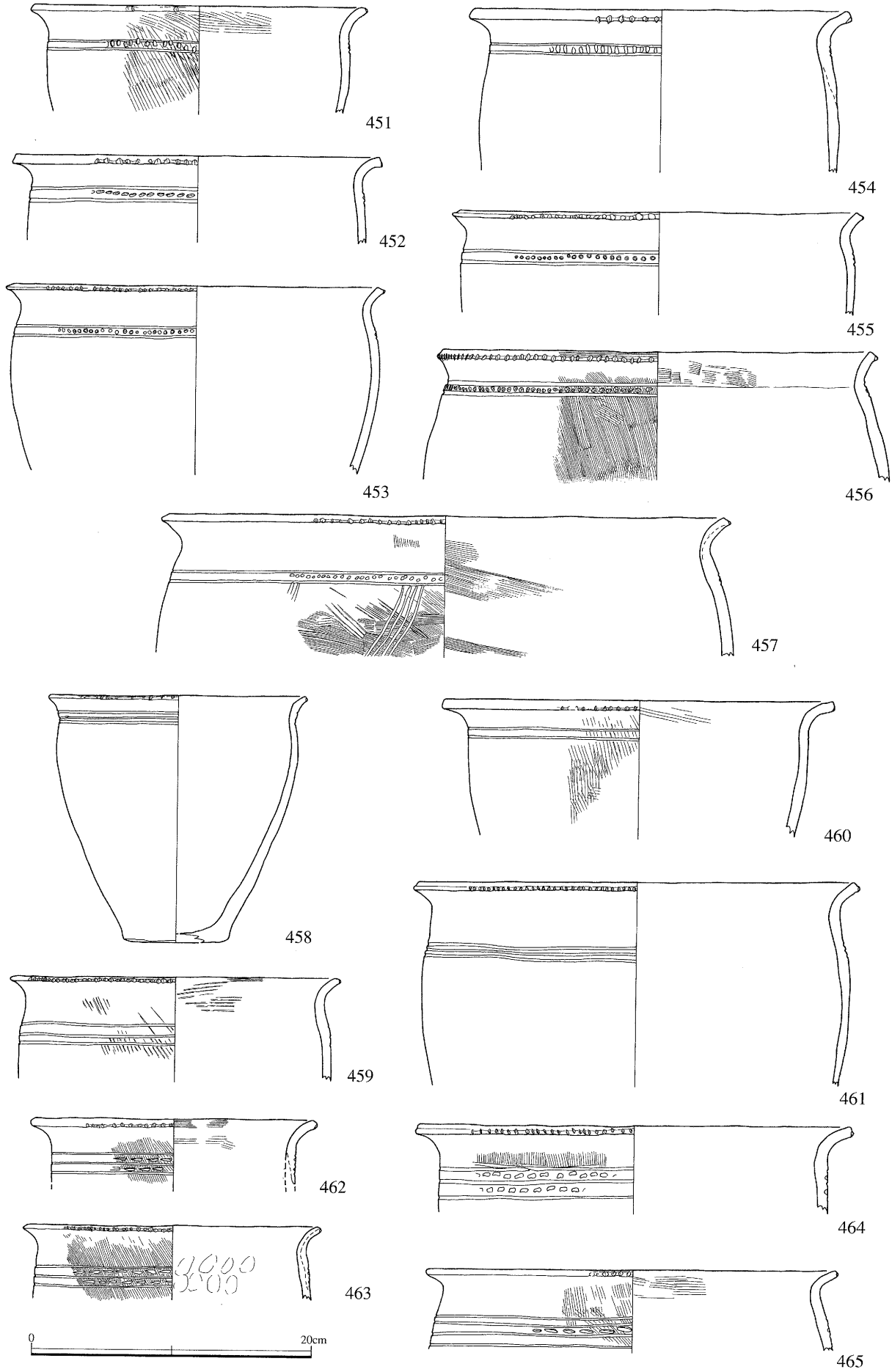
第60図　流路0183中・下層出土遺物（２４）



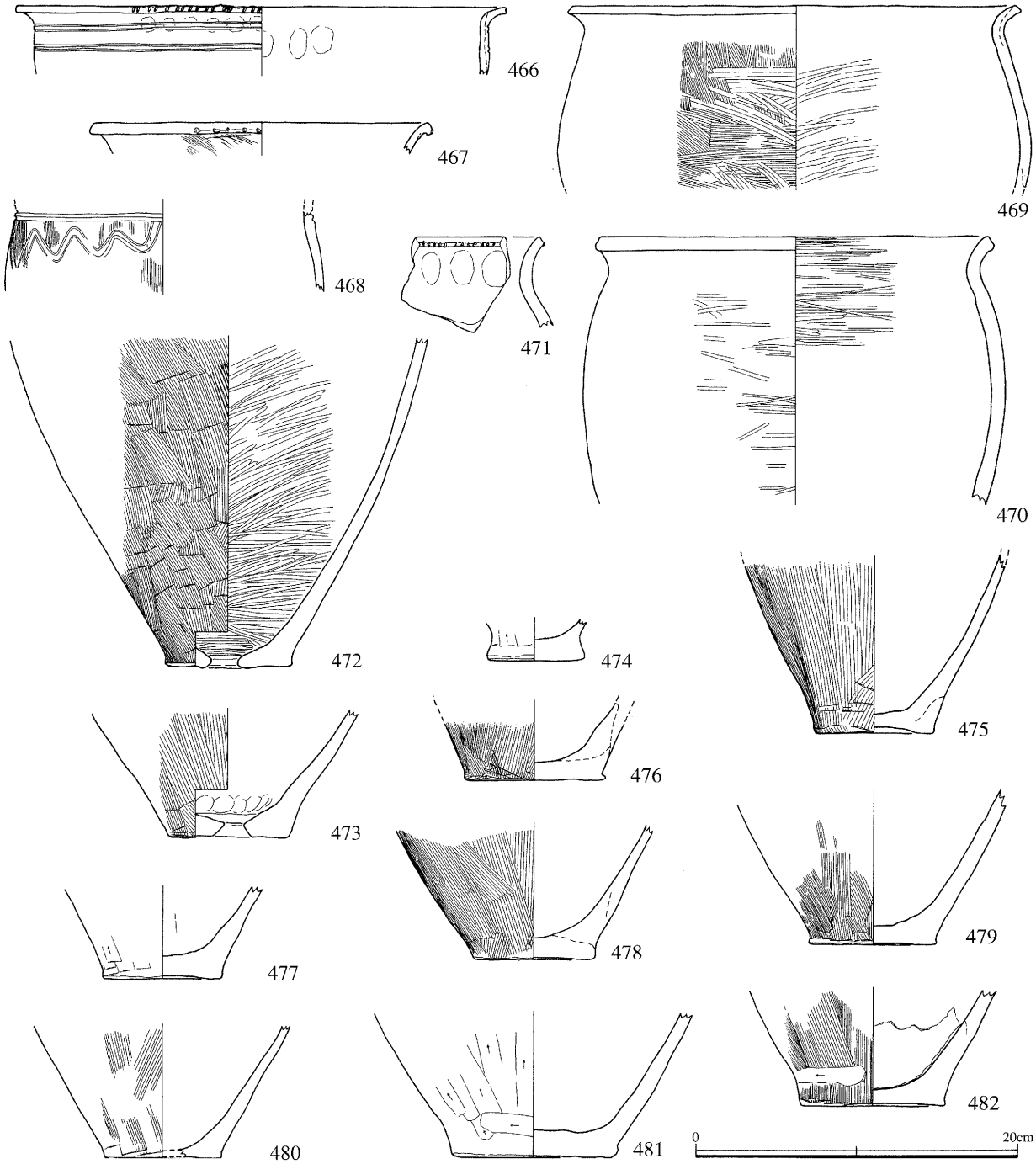
第61図　流路0183中・下層出土遺物（２５）



第62図　流路0183中・下層出土遺物（２６）



第63図　流路0183中・下層出土遺物（２７）



第64図　流路0183中・下層出土遺物（２８）

第63図の甕462～465は、ヘラ描き沈線3～4条とその間に刺突文を巡らせるもので、いずれも非生駒西麓産胎土。すべて口縁部下端にキザミメを施し、外面に煤付着。外面はハケメ、板ナデ、内面はナデによる。

第64図の甕466～468は、非生駒西麓産胎土。466は内外面ナデ仕上げ。口縁端部キザミメは全面に巡らせる。先端が二股の工具で沈線を巡らせる。467は内面ヨコナデ仕上げ。口縁端部キザミメは右への方向性があり、縄文系か？　468は外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。先端が二股の工具で施文する。口縁部下のヘラ描き沈線も同じ工具の可能性が強い。外面煤付着。

第64図の甕469・470は、いずれも非生駒西麓産胎土。甕の形態であるがヘラミガキ仕上げで、

赤変や煤の付着なし。471は非生駒西麓産胎土。大型の甕あるいは鉢と考えられる。

第64図の低部472～482は474のみが生駒西麓産胎土、他は非生駒。472は低部穿孔する。底面無調整。外面高さ7.5cm以上に煤付着。474は内面ナデ、底面無調整。482は内面に炭化した穀物粒が層状に付着したもので、分析結果を報告した。外面高さ6.0cm以上に煤付着。

第65図の甕蓋483～491は、いずれも非生駒西麓産胎土。483の内面裾に僅かに煤付着するが、使用した甕口径は明らかにし得ない。484は内外面摩滅著しい。485は頂部はヘラミガキ。内面裾に煤付着するが、甕口径は明らかにし得ない。486の頂部はヘラミガキ。内面裾に煤が付着しており、甕口径は19cm程度である。487の頂部はケズリ後ヘラミガキ。488は頂部ヘラミガキ。489の頂部はナデか。内面裾に煤が付着しており、甕口径は18cm程度である。490は内面ナデ、他は摩滅のため調整不明。内面裾に若干煤付着するが、甕口径は明らかにし得ない。491は頂部未調整。内面裾に煤付着し、甕口径は20cm程度である。

第65図の直口鉢492・493はいずれも非生駒西麓産胎土。492の底面も含めて全面ヘラミガキ。492は図化し得ないが外傾接合。

第65図の外反口縁の鉢494～496はいずれも非生駒西麓産胎土。494は1～3㎜程度の粗砂を極めて多量に含み、後二者とは全く異なる。外面ハケメ仕上げ。底面無調整。495は精緻なヘラ描き沈線3条二段を巡らせる。底面無調整。中型鉢497は非生駒西麓産胎土。口縁部の指頭痕が明瞭で、外面ナデ仕上げ。

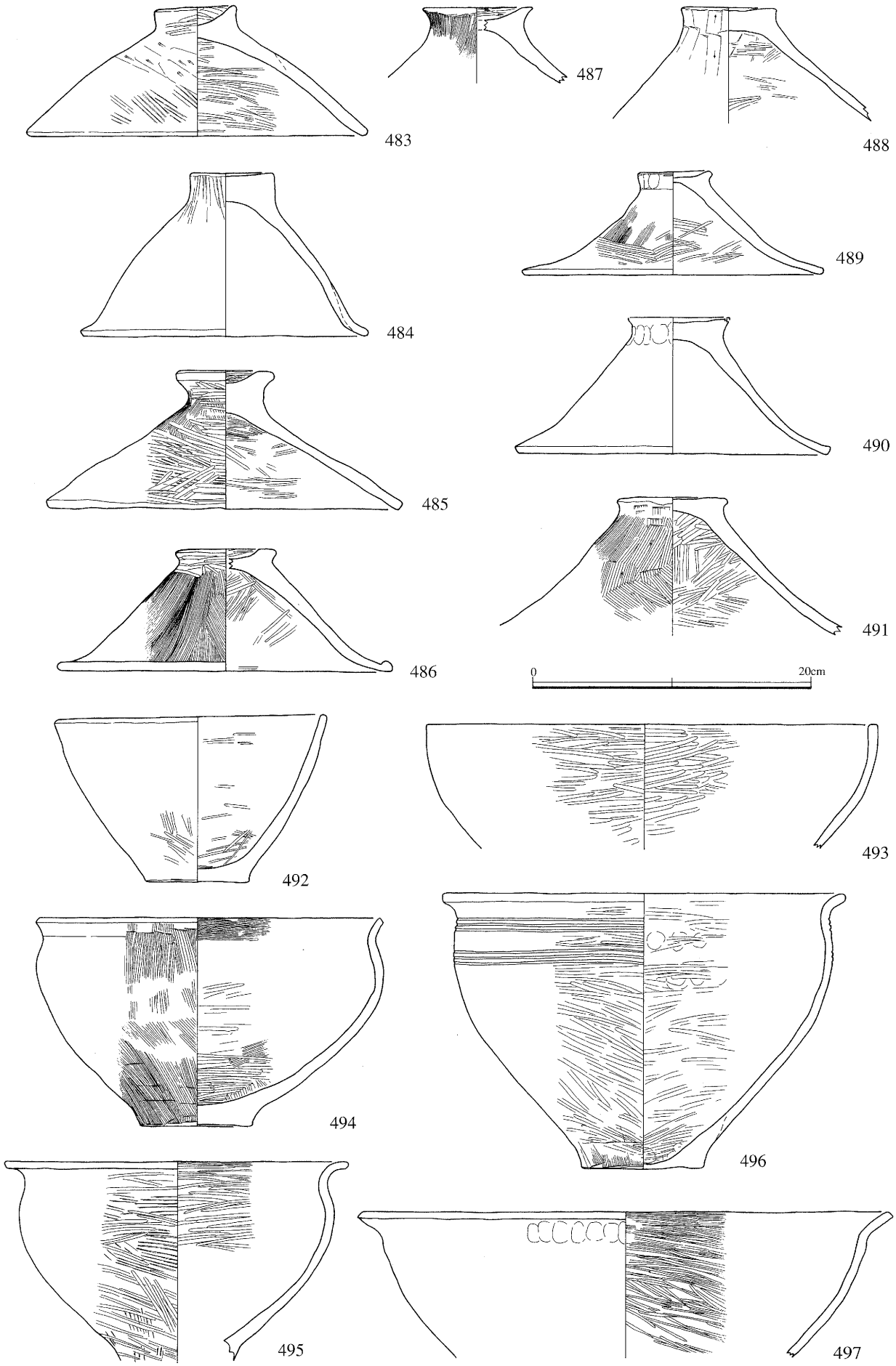
第66図の中・大型鉢498～505は、いずれも非生駒西麓産胎土。498は無文、499・500はヘラ描き沈線である。501は削出しによる低い段である。502～505は無文。

第67図の506～508は、いずれも非生駒西麓産胎土。506は甕あるいは鉢。ヘラ描き沈線2条とその間に刺突文を巡らせる。507・508は大型鉢か。507は削出による低い段である。

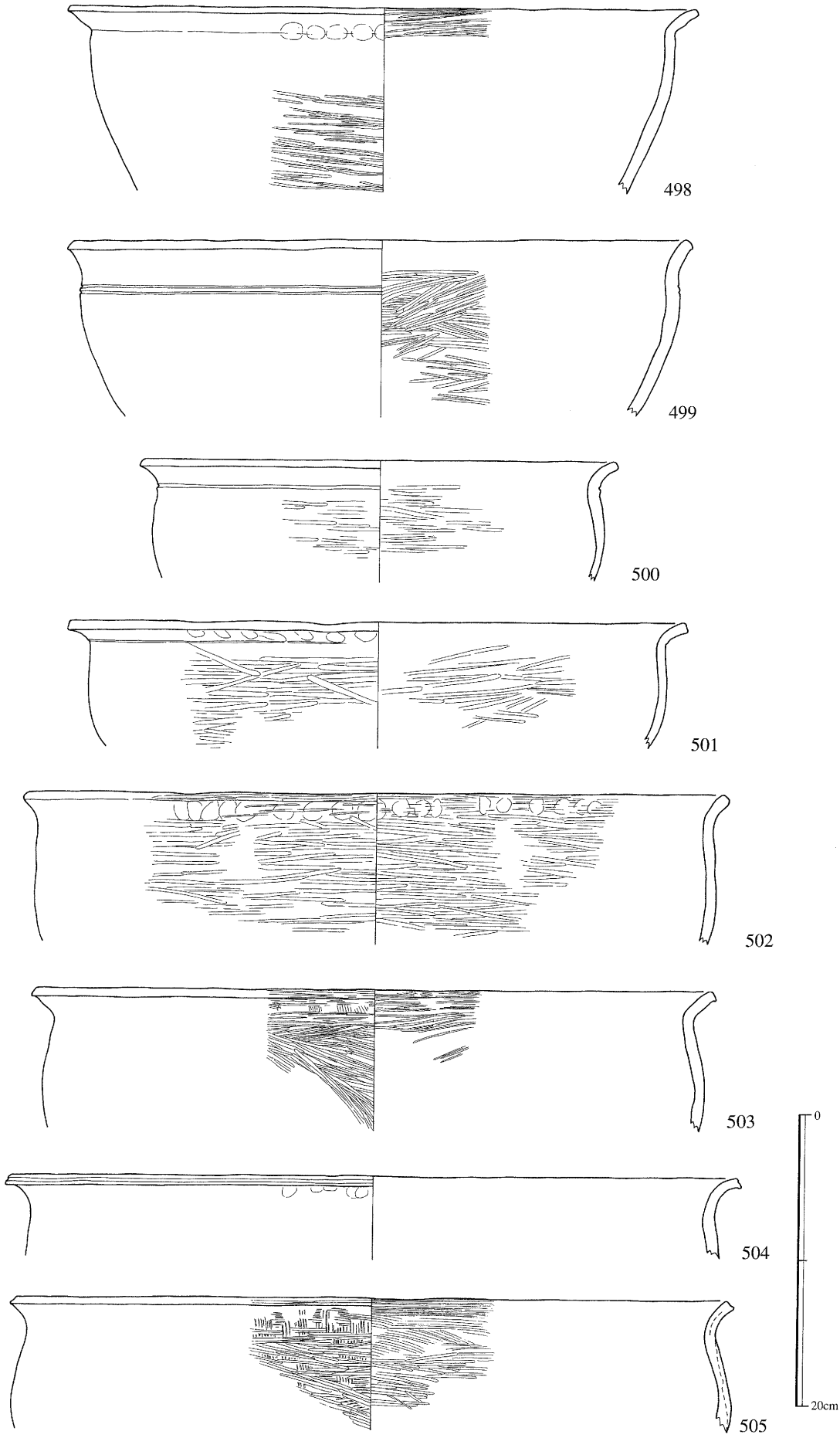
第67図の把手付き鉢509～511は、いずれも非生駒西麓産胎土。509・510は外面煤付着。510の底面ナデ仕上げ。

第67図の512～522は各種の鉢で、いずれも非生駒西麓産胎土。512は注口が一方に残る。513・514は底面も含めて指頭ナデ仕上げ。515は底面もヘラミガキで丁寧な仕上げである。517・518は粗製品であり、前者の口縁の歪みは著しい。519は端面に細く鋭いキザミメを巡らせる。外面煤付着。521は丁寧なヘラミガキ仕上げで、やや細いヘラ描き沈線4条と重弧文を巡らせる。522は簡単なナデ仕上げで接合痕が残る粗製品。外面煤付着。

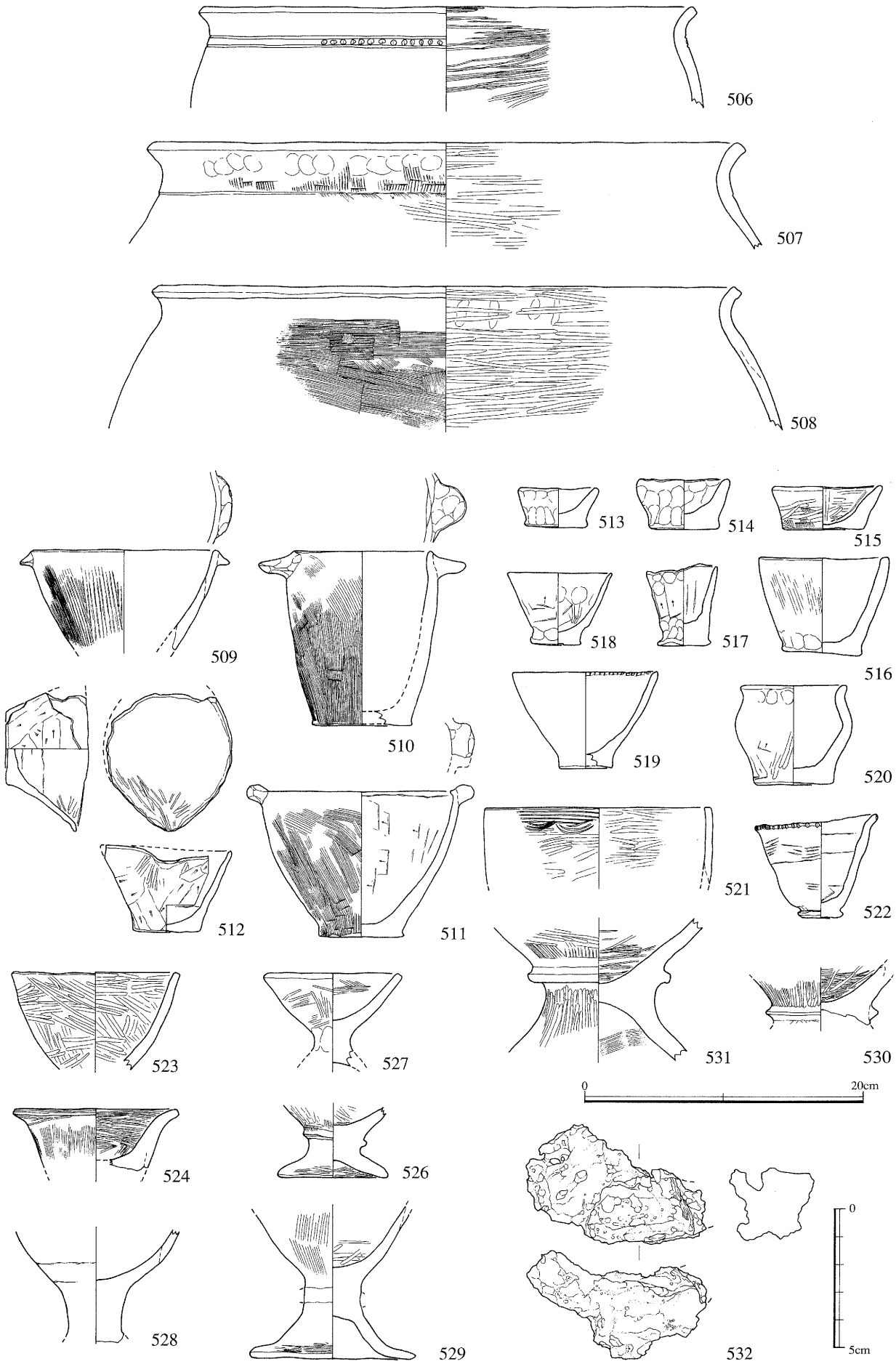
第67図の523～531は高杯およびその可能性のあるもので、いずれも非生駒西麓産胎土。523は鉢の可能性もある。524は外面がハケの後部分的なヘラミガキ、内面は丁寧なヘラミガキである。非常に重量感がある。527は杯部内面に煤付着。528は内面ヘラミガキのようである。外面は摩滅で調整不明。529は粗砂を著しく含む粗製品で、柱部に剥離痕があり貼付突帯が巡っていたと考えられる。杯部内面ヘラミガキに対して外面板ナデ、外面裾に分割のヘラミガキ、内面は非常に雑なナデ仕上げである。530の屈曲部にはハケメの後、貼付突帯を巡らせ、ヘラミガキ仕上げ。



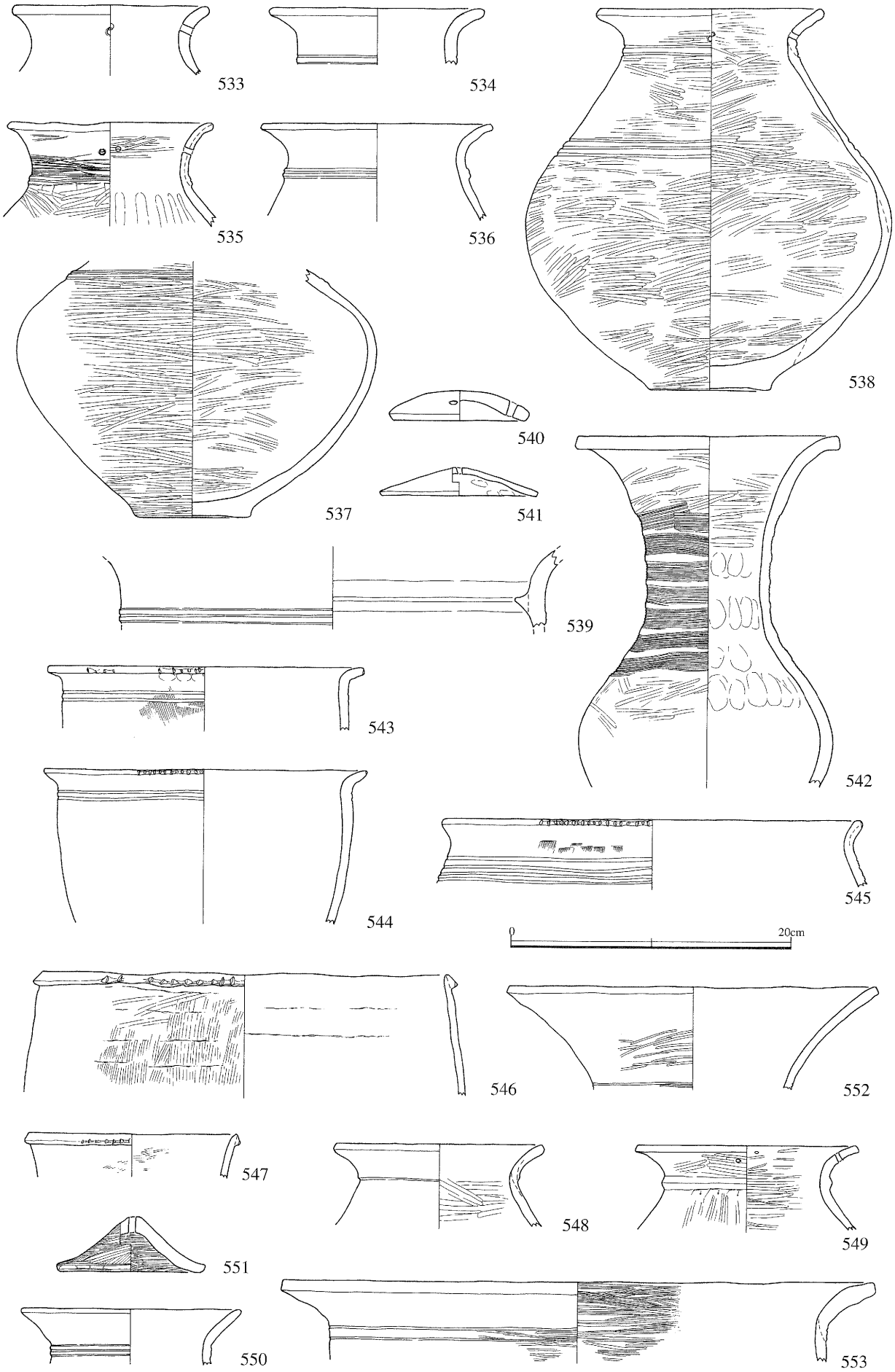
第65図　流路0183中・下層出土遺物（２９）



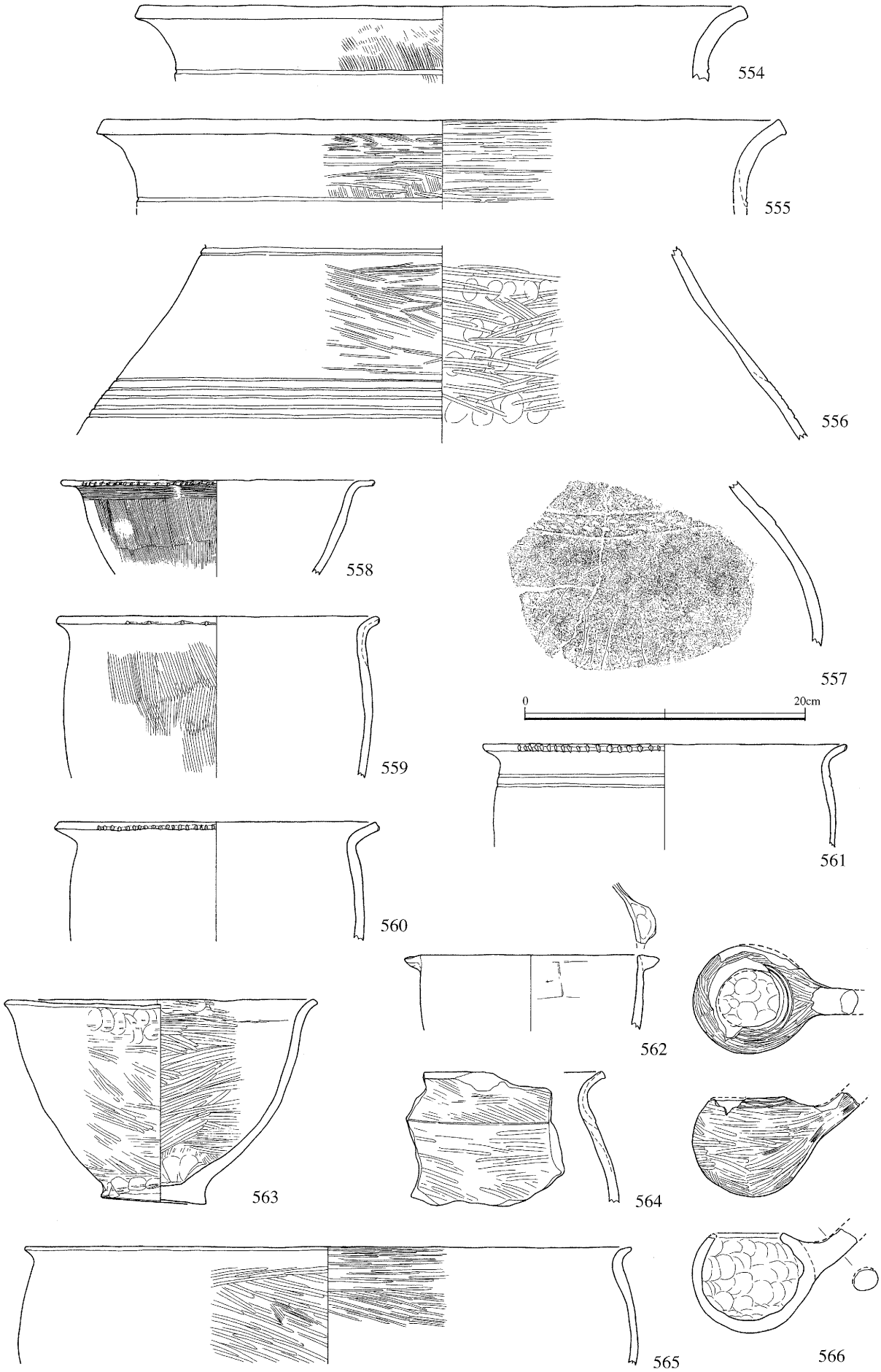
第66図　流路0183中・下層出土遺物（３０）



第67図　流路0183中・下層出土遺物（３１）



第68図　流路0183上層出土遺物（1）



第69図　流路0183上層出土遺物（2）

内面は非常に丁寧なヘラミガキである。531は大型品で重量感がある。突帯は貼付と考えられる。粗砂を著しく含み、脆い胎土で搬入品と考えられる。

第67図の532は中層出土の不明品。ガラス滓の可能性があるので成分分析を行い、第９章第２節に報告したものである。部分的に破損する。微細～1㎜未満の白色粒を多量に巻き込んだ多孔質なもので、緑灰色（10GY 6/1）を呈し光沢のあるガラス化したものが表面を覆う。

第68図の533～545は、流路0183の東北部分上層で集中して出土したものである。

壷533～539は、534が生駒西麓産胎土、他は非生駒。533は無段で紐孔1が残る。摩滅のため調整不明。534は低い段と考えられ上方にヘラ描き沈線を巡らせる。摩滅のため調整不明。535・536はヘラ描き沈線を有する削出突帯を巡らせるもので、前者は2孔一対の紐孔を有する。後者は、摩滅のため調整不明。537は頸胴部間にヘラ描き沈線を有する削出突帯を巡らせる。底面の調整不明。538は口頸部間にヘラ描き沈線2条、頸胴部間に同3条を巡らせる。紐孔1が残り、残存状況から1孔一対である。底面ナデ仕上げ。539は、内面に貼付け突帯を有する。口頸部間はヘラ描き沈線を有する削出突帯。内面の突帯より下がヨコナデ、他は摩滅のため調整不明。大型品であるが、7cm程度の破片のため口径は不正確。

壷蓋540・541は、非生駒西麓産胎土。540は紐孔1が残り、残存状況から1孔一対、あるいは2孔一対である。内外面ともに僅かにヘラミガキが残る。541は頂部に1孔を有する。摩滅のため調整不明。

壷542は生駒西麓産胎土。頸部にクシ描き直線文（8条／14㎜）７条を巡らせる。外面と口縁部内面にヘラミガキが認められる。今回調査では唯一の中期初頭資料である。

甕543・544は、ヘラ描き沈線2条を巡らせるもので、非生駒西麓産胎土。外面煤付着。甕545はヘラ描き沈線4条が残存するもので、非生駒西麓産胎土。煤は付着しない。

第67・68図の546～566は、流路0183上層で出土したものである。

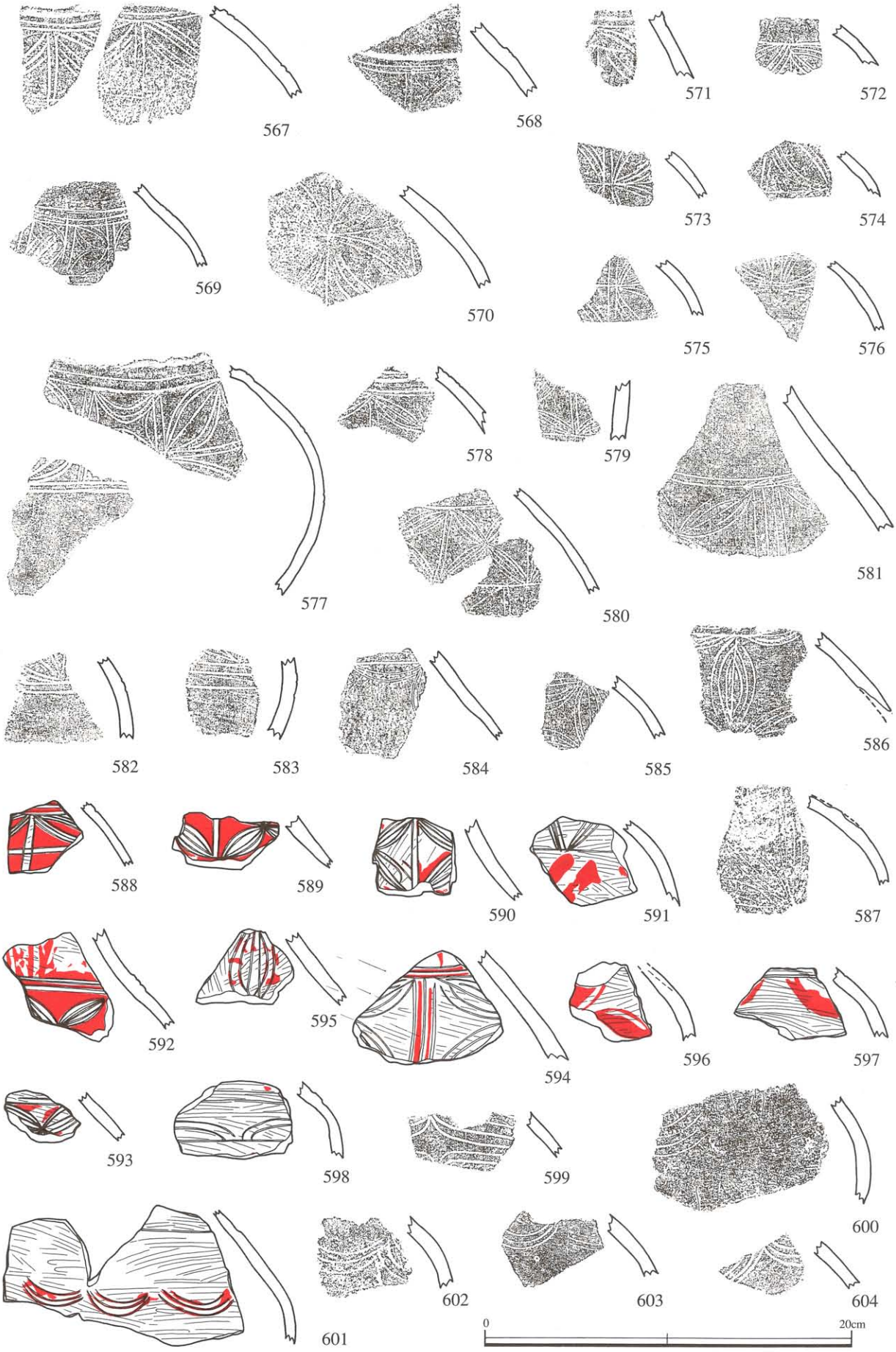
縄文晩期深鉢546と同壷547は生駒西麓産胎土。546は外面板ナデあるいは繊維束状の工具ナデと考えられる。内面横方向のナデ。外面煤付着。547は工具ナデ痕が僅かに残る。

壷548～550は非生駒西麓産胎土。548の口頸部間は段部分を板状工具で削出して強調する。549は口頸部間に突帯を巡らせる。突帯下裾を板状工具で削出して強調する。突帯は段によるのか貼付けかは不明。2孔一対の紐孔を有する。550はヘラ描き沈線を有する削出突帯を巡らせる。摩滅のため調整不明。

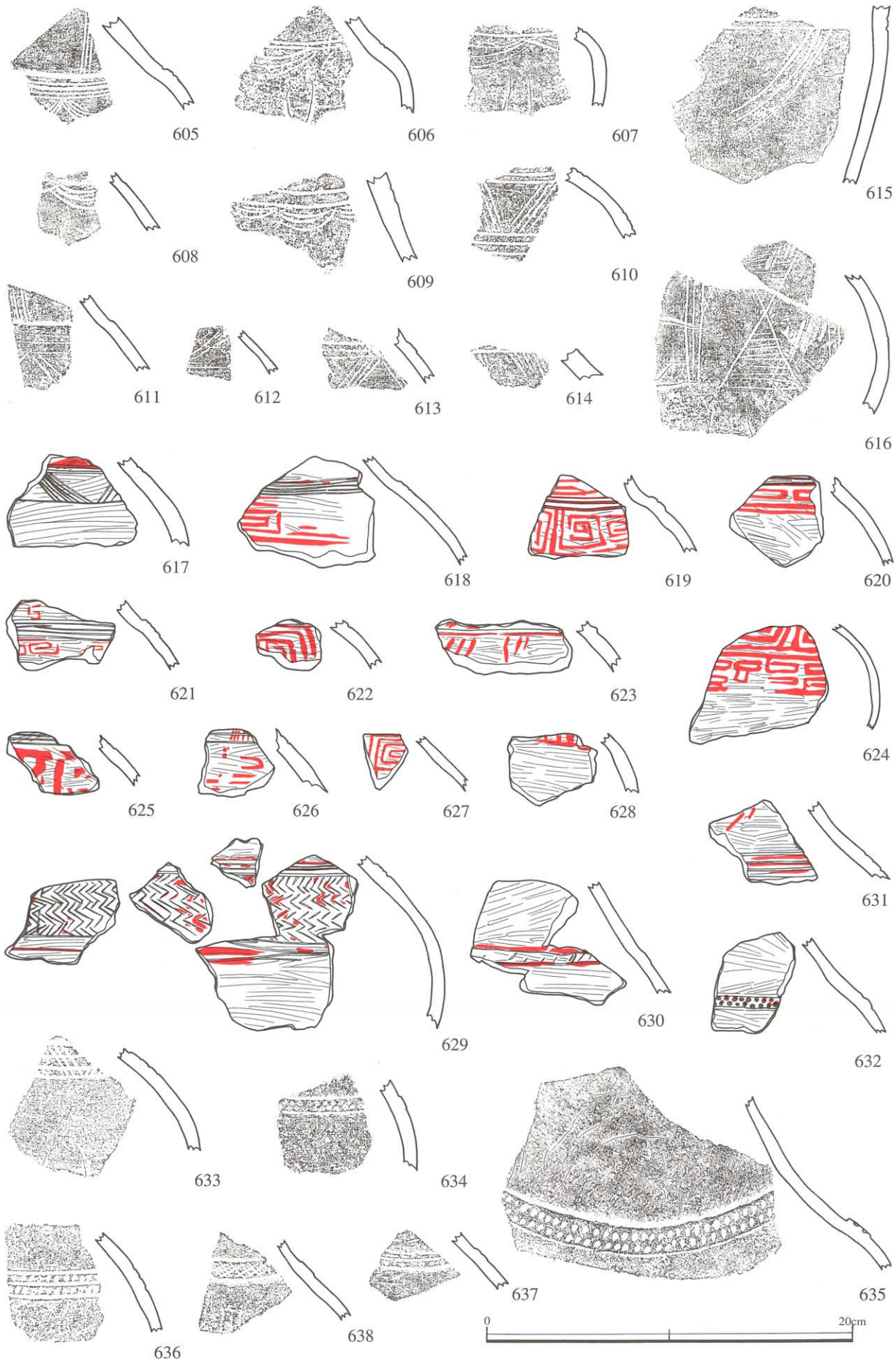
壷蓋551は、非生駒西麓産胎土。外面に赤色顔料が付着するも、文様は不明。頂部に1孔を有する。

壷552はヘラ描き沈線2条が残存するもので、非生駒西麓産胎土。内面調整不明。

大型壷553～557は非生駒西麓産胎土。553は口頸部間に削出による低い段とその上方にヘラ描き沈線を巡らせる。554・555は口頸部間にヘラ描き沈線を巡らせる。前者の内面調整不明。556は口頸部間に削出し、頸胴部間にヘラ描き沈線5条を巡らせる。557は低い段と削出しによる削出



第70図　流路0183出土遺物（1）



第71図　流路0183出土遺物（2）

突帯で、上面に刺突文を巡らせる。内外面ヘラミガキ。

甕558～561は非生駒西麓産胎土。559以外の外面に煤付着。

把手付鉢562は非生駒西麓産胎土。外面に煤付着しており、甕として使用。内面ナデ、外面摩滅で調整不明。鉢563は非生駒西麓産胎土。底面もヘラミガキ。大型鉢564・565は非生駒西麓産胎土。底面もヘラミガキ。564は低い段を有する。内面の調整は不明。565は12cm程度の破片であり、口径は不正確。

ヒョウタン形土製品566は非生駒西麓産で、在地産と考えられる。口縁部に細いヘラ描き沈線2条を巡らせる。外面はハケメの後、密にヘラミガキ、内面は指頭ナデ。山賀遺跡では、同時期のヒョウタン製容器が出土している。両者は把手が上方に湾曲する状況が全く同じであり、本例は極めて写実的な土製品である。

567～587は線刻木葉文であり、いずれも非生駒西麓産胎土。567・568は頸胴部の段、577は段とその下方を削出して突帯としたものである。

588～596は線刻木葉文と赤彩、あるいは赤彩のみで木葉文を表現するもので、いずれも非生駒西麓産胎土。すべて黒色塗布の後に赤彩する。592は段とその下方を削出して突帯としたもので、上面にヘラ描き沈線2条を巡らせる。

597～617はその他文様を線刻、赤彩、あるいは線刻と赤彩で表現するものであり、613のみが生駒西麓産胎土。601・608・611は段、598・613は削出突帯である。605は段上裾に縁取り沈線、下方にヘラ描き沈線4条を巡らせる。なおヘラ描き沈線2条目を太くすることで、沈線を巡らせる削出突帯と線刻に伴うヘラ描き沈線の区別をしている。

618～628は赤彩で流水文を描くもので、いずれも非生駒西麓産胎土。流水文の線刻表現は未報告を含めても皆無。618・621は段、619・620・623は削出突帯である。

629～632は刺突と赤彩、あるいは赤彩のみでその他文様を表現するものであり、いずれも非生駒西麓産胎土。629は段の下方に細いヘラ描き沈線2条と細いヘラ描き沈線1条をめぐらせる。630・632は削出突帯である。

633～638は刺突、あるいは線刻でその他文様を表現するものであり、いずれも非生駒西麓産胎土。633は段、635・637は段とその下方を削出して突帯とし、634・638は削出突帯である。

溝0308（第72図640～643）　いずれも非生駒西麓産胎土。甕640は明瞭な段を有し、器壁は厚く、重量感がある。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。外面煤付着。甕641は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面は摩滅で不明。外面煤付着。低部642は、壷あるいは鉢。摩滅で調整不明だが、外面は左斜上方へのヘラミガキ痕跡がある。甕低部643は、焼成後穿孔。内外面に板状工具痕が認められる。外面は被熱により赤変する。

溝0317（第72図644・645）　644は生駒西麓産胎土の縄文系壷と考えられる。流路0183の63と類似するが刻目は施さない。器壁は薄く、内外面ヨコナデ。壷645は頸部下半から胴部の破片で、頸胴部間は低い削出突帯で、上下裾を細くヘラで縁取る。削出突帯上のヘラ描き沈線も幅１㎜と

細く浅い。ヘラミガキ後の線刻文も幅0.5㎜前後と細く浅い。内面調整不明。

土坑0127（第72図646･647）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷646は頸部下半から胴部の破片で、頸胴部間は上面にヘラ描き沈線１条を有する削出突帯を巡らせる。外面は突帯に沿ってヘラミガキ、内面はナデ仕上げ。甕647はヘラ描き沈線3条を巡らせる。口縁ヨコナデ、外面ハケメ、内面は強い工具ナデ仕上げ。外面は使用による剥離著しく煤付着。

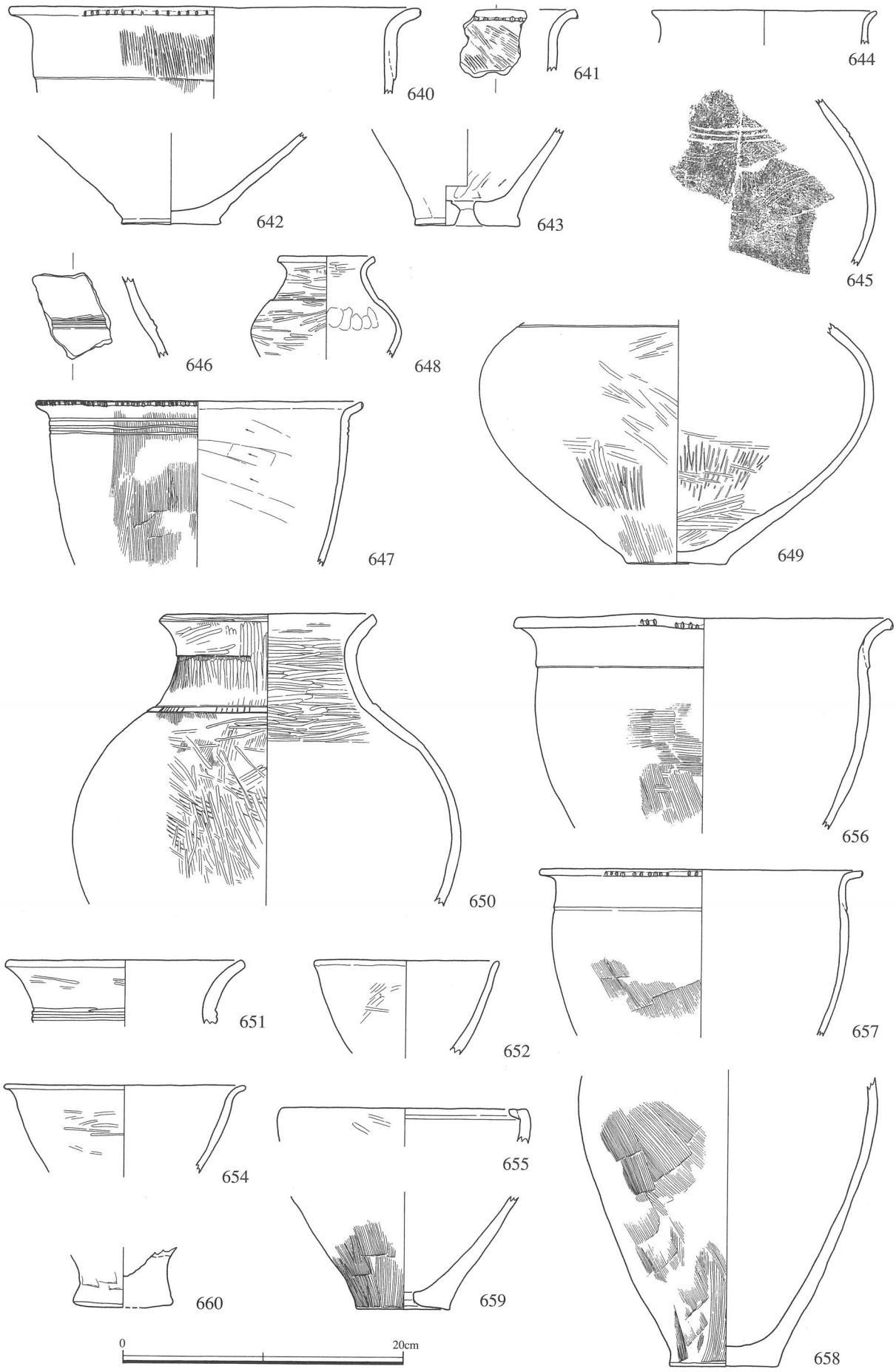
土坑0128（第72図648）　小型壷648は、頸胴部間に段を有する。非生駒西麓産胎土で通常の在地産と考えられる。外面は屈曲部にハケメが残り、その後ヘラミガキ、内面は頸部上半にヘラミガキ、以下はナデ仕上げ。内面黒色。

土坑0131（第72図649）　壷649は頸胴部間にヘラ描き沈線１条が残存する。外面の下半ハケメ、上半横方向のヘラミガキ、底面ナデ、内面ヘラミガキを施す。非生駒西麓産胎土。

土坑0139（第72図650～660）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷650は、口頸部間は低い段で、下方へのハケメで強調する。頸胴部間の上辺は本来は低い段で、その下にハケで削出して削出突帯を作る。その後のヘラミガキによって突帯は低い断面カマボコ形となり、次に削出突帯の上下を細くヘラで縁取り強調し、最終的に突帯上に７～９単位のキザミ文を巡らせる。外面は全面ハケメの後、ヘラミガキ。内面は頸部より上がヘラミガキ、体部がナデ仕上げ。壷651は削出突帯の上面にヘラ描き直線文１条を巡らせる。鉢652・653は、外面ヘラミガキ、内面もヘラミガキの可能性が強い。鉢655は、口縁内面に粘土帯を貼付けた細片で、外面にヘラミガキが残存する。甕656は明瞭な段を有する。口縁ヨコナデ、外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。外面煤付着。甕657は低い段を有し、下方への板状工具によって強調する。口縁ヨコナデ、外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。外面煤付着。甕658は、外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。底面は無調整で、稲籾痕等が認められる。外面煤付着し、下半は赤変する。有孔低部659は外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。残存する上１cm程に煤が若干付着する以外、被熱の痕跡はない。低部660は、形態、およびチャートの粗砂を著しく含む胎土で他と全く異なる。外面は上方への板ナデ仕上げである。

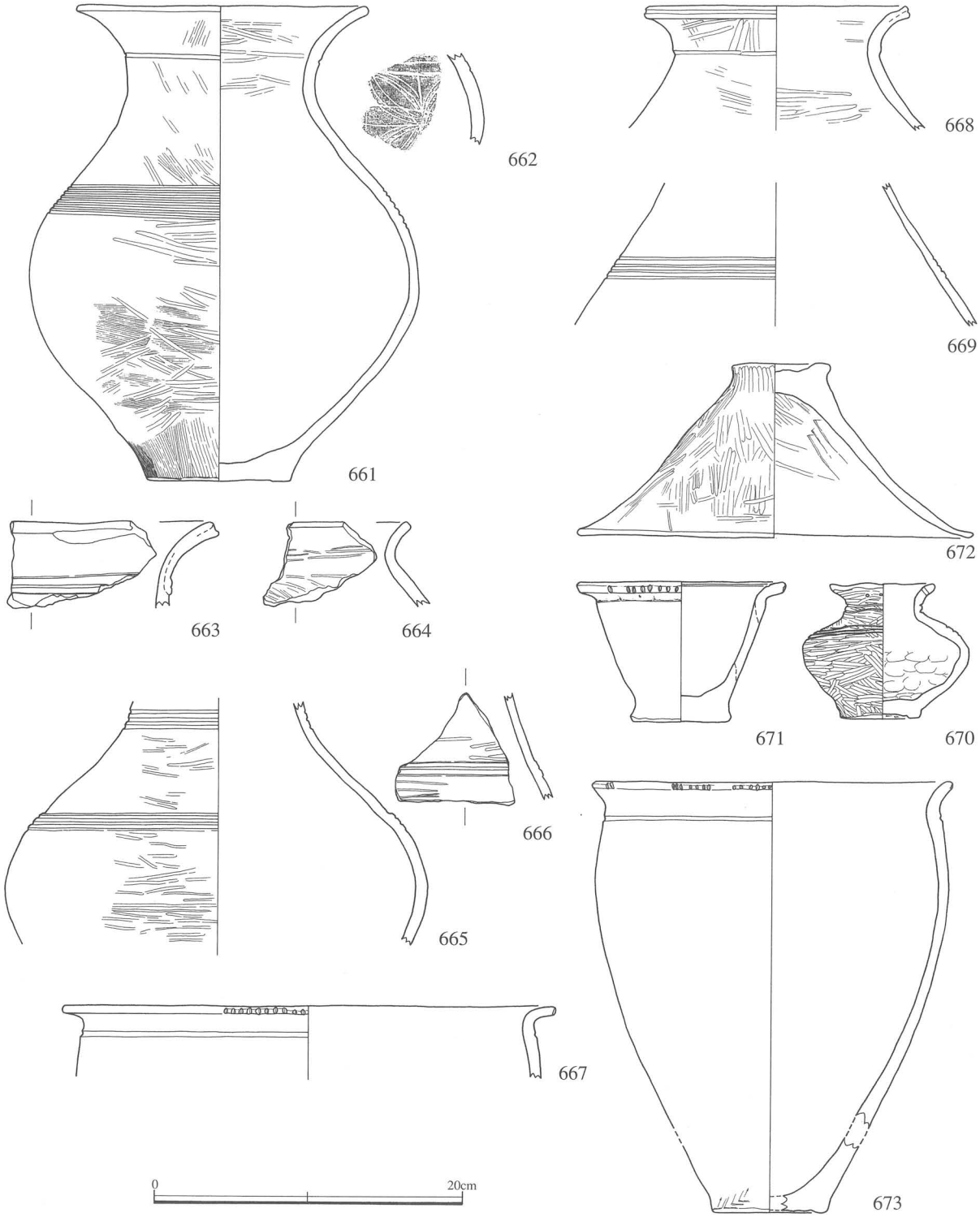
土坑0133（第73図661～664）　いずれも非生駒西麓産胎土。広口壷661は、口頸部間1条、頸胴部間７条のヘラ描き沈線を巡らせる。体部外面はハケメの後、ヘラミガキを施す。底面未調整。内面は口縁部にヘラミガキを施すが体部は工具ナデ仕上げ。662は壷体部の線刻木葉文。ヘラミガキ→頸胴部沈線・最大径部沈線→縦方向沈線→木葉文の順。内面ヘラミガキ。大型壷663は、削出突帯の上面にヘラ描き沈線１条を巡らせる。削出突帯下端は接合時の段である。大型鉢664は、無文であり内外面ヘラミガキ仕上げ。

土坑0140（第73図665～667）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷665は口頸部間にヘラ描き沈線3条、頸胴部間は段の下部を削出し上面にヘラ描き沈線２条を巡らせる。外面ヘラミガキ、内面は黒色、摩滅で調整不明。壷666は頸胴部細片。削出突帯の上面に幅１㎜程度の細いヘラ描き沈線１条を巡らせる。外面ヘラミガキ、内面ナデ仕上げ。甕667はヘラ描き沈線１条、口縁端部全面に刻み目を巡らせる。なお、図化し得なかったがヘラ描き沈線2条の甕細片が2点ある。いずれも



第72図　溝0308・0317、土坑0127・0128・0131・0139出土遺物

溝0308（640～643）、溝0317（644·645）、土坑0127（646・647）、
土坑0128（648）土坑0131（649）、土坑0139（650～660）



第73図　土坑0133・0140・0159・0160出土遺物

土坑0133（661～664）、土坑0140（665～667）
土坑0159（668～672）、土坑0160（673）

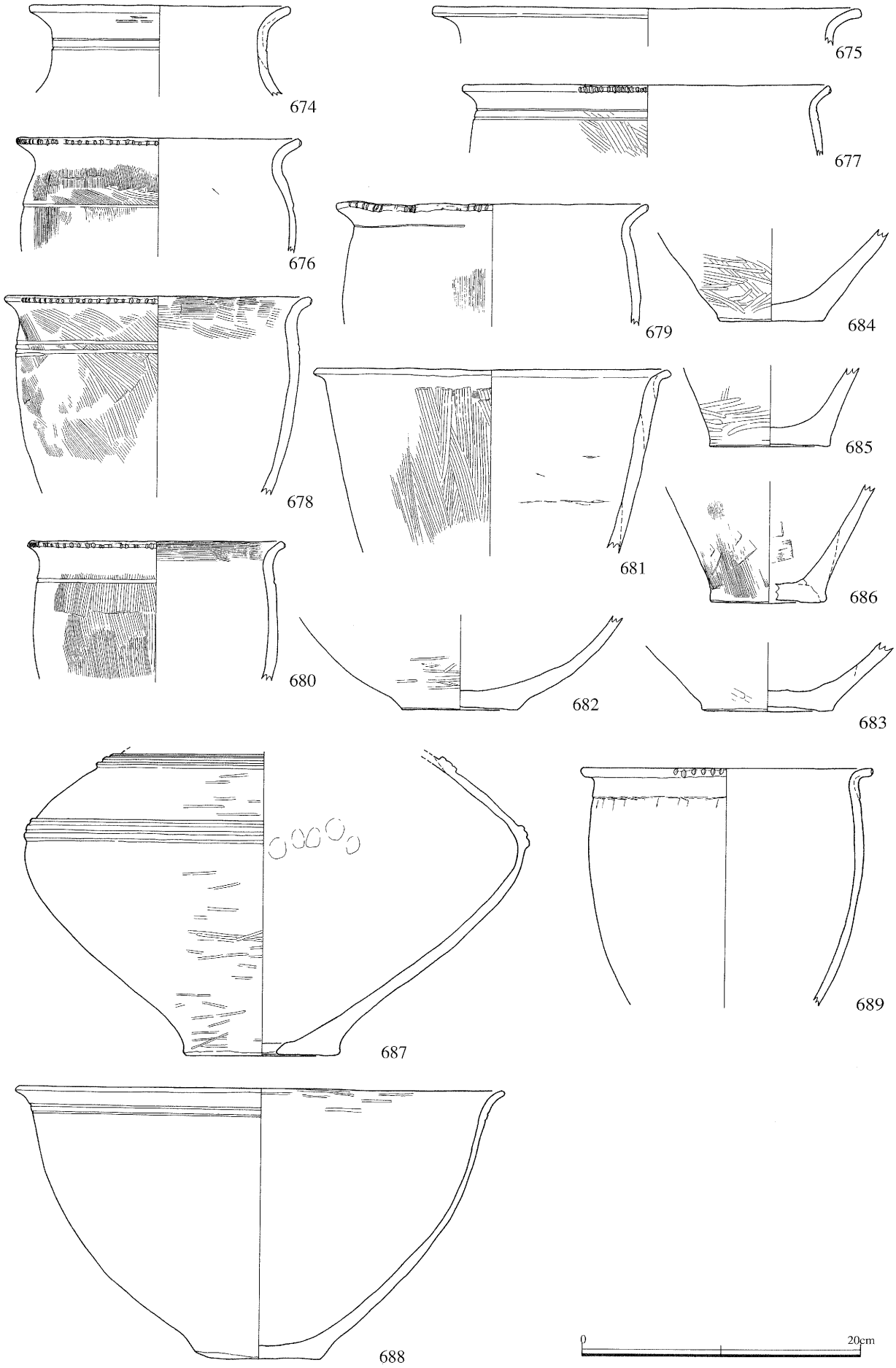
煤付着。

土坑0159（第73図668～672）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷668は口縁端部にヘラ描き沈線を巡らせ、低い段を有するもので、内外面ともに丁寧にミガキ仕上げる。壷669は頸胴部の破片であり、ヘラ描き沈線４条を巡らせる。摩滅のため調整不明。橙色（7.5YR 7/6）を呈し、他より明るい発色をする。胎土は他と同じ。小型壷670はいびつな形態を呈し、ヘラ描き沈線も雑である。外面ヘラミガキ、底面はケズリの後、ヘラミガキ、内面ナデ。小型甕671は口縁部を強くおりまげるもので、内面に太く雑なヘラ描き沈線１条を巡らせる。口縁端部全面に非常に弱い刻み目を巡らせるが、刻み目のおよばない部分もある。外面屈曲部には板状工具の当り痕が残る。外面と底面工具ナデ、内面ナデ仕上げ。上記通常胎土ながら、粗砂を極めて多量に含む。外面は赤変し煤付着。甕蓋672は内外面とも工具ナデ、ヘラミガキで丁寧に仕上げる。上面は指頭ナデ。内面裾に煤が付着しており、口径19cm程度の甕に使用したことがわかる。

土坑0160（第73図673）　甕673は口縁端部下端に刻み目、外面屈曲部に太いヘラ描き沈線１条を巡らせる。非生駒西麓産胎土。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。外面煤付着。

土器棺0179（第74図687～689）　土器棺であり、棺身の壷、棺蓋の鉢と伴出した甕がある。いずれも非生駒西麓産胎土。壷687の頸部以上は人為的な打ち欠き、低部は外方向からの焼成後穿孔を施す。大きく張った体部最大径部と頸部下端に高い突帯を巡らせる異質な形態。体部外面は横方向ヘラミガキ、底面不明、内面は摩滅のため残存状況はよくないが丁寧なナデか。頸部下端の突帯は剥離状況からは貼付けではなく、削出突帯と考えられる。橙色（7.5YR 7/6）を呈し、石英、長石からなる粗砂をやや多く含む。鉢688は完形品で欠損部分はない。摩滅のため残存状況は悪いが、口縁部内面にヘラミガキが部分的に残存する。甕689は接合部付近を削出して低い段を形成する。口縁端部全面に刻み目を巡らせる。体部外面縦方向工具ナデ、内面ナデ上げ、口縁部ヨコナデ。外面煤付着。

土坑0250（第74図674～686）　壷674のみが生駒西麓産胎土、他は非生駒。壷674は、2条ヘラ描き沈線。口縁部外面にヨコナデと横方向ヘラミガキ痕が認められる以外は、摩滅で調整不明。壷675は6cm程の細片のため、口径は不確実。図示しえていないが外傾接合が認められる。摩滅のため調整不明。甕676は削出して段を形成する。口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、段上部のみに左斜上方ハケメ、内面は左斜上方工具ナデ。甕677・678は、ヘラ描き沈線2条。両者とも煤付着。外面ハケメ、内面は678が口縁にハケメ、体部ナデ仕上げ。677は摩滅で調整不明。端部刻み目は677が左方向、678が右方向に巡らせる。甕679は、屈曲部分に細いヘラ描き沈線1条を巡らせる。口縁部ヨコナデ。体部外面板ナデ、内面ナデ仕上げ。甕680はヘラ描き沈線、煤付着。端部刻み目は非常に弱い。口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。甕681は、器壁が厚く重量感があり異質。煤付着。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面板ナデ仕上げ。低部682・683は大きく開くもので、壷か鉢。摩滅が著しく、外面に一部ヘラミガキが残存する。低部686は、外面ハケメ後、ナデ。内面ナデ仕上げ。



第74図　土坑0179・0250出土遺物

土坑0250（674～686）、土器棺0179（687～689）

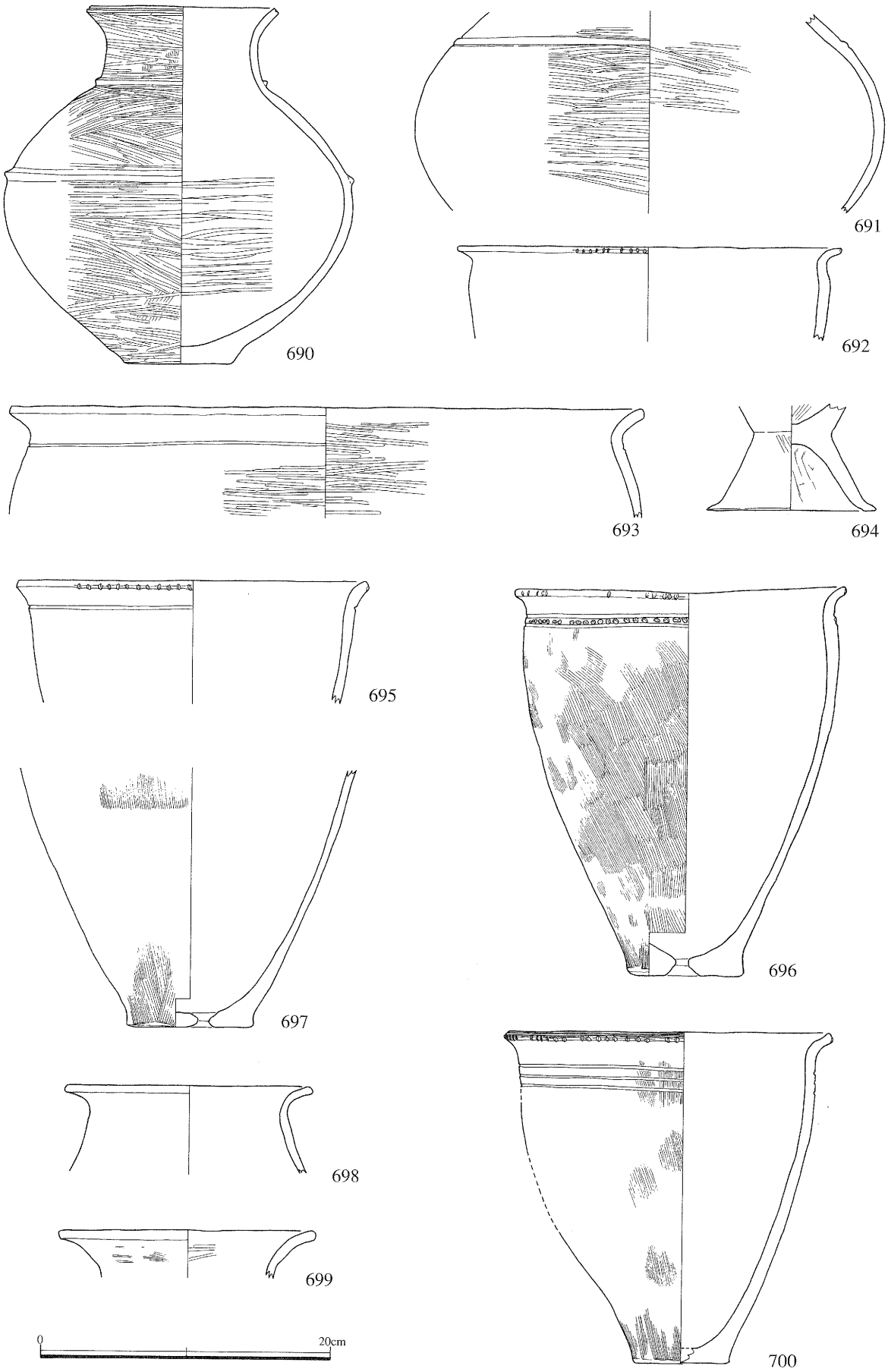
土坑0255（第75図690～694）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷690は生駒西麓産胎土に類似する。暗褐色（10YR 3/3）を呈し、胎土に雲母、角閃石、長石を含む点は生駒西麓産胎土的だが、少量のチャートを含み、長石が極めて多量である。口縁端部にヘラ描き沈線、口頸部間と頸胴部間に断面三角形の貼付け突帯を巡らせる。壷691は頸胴部間の上辺は本来は低い段で、その下に削出して突帯を作り、その後のヘラミガキで低い断面カマボコ形にする。甕692の口縁端部下端のキザミメは細く浅い。大型鉢693は12cm程度の破片であり、口径は不正確である。口頸部間はヘラ描き沈線であり、内外面ヘラミガキ仕上げ。高杯694は摩滅著しいが、杯部内面、裾部外面、裾接地面にヘラミガキを施す。

土坑0256（第75図695・696）　いずれも非生駒西麓産胎土。甕695は、口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向板ナデ、内面ナデ仕上げ。煤付着。有孔甕696は、ヘラ描き沈線2条間に刺突文を巡らせる。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。外面体部上半に煤付着するも、低から上方10～12cmは被熱の痕跡がない。さらにその部分の内面は低部を除いて黒変している。この状況は有孔甕の使用方法のヒントになる、と考えられる。

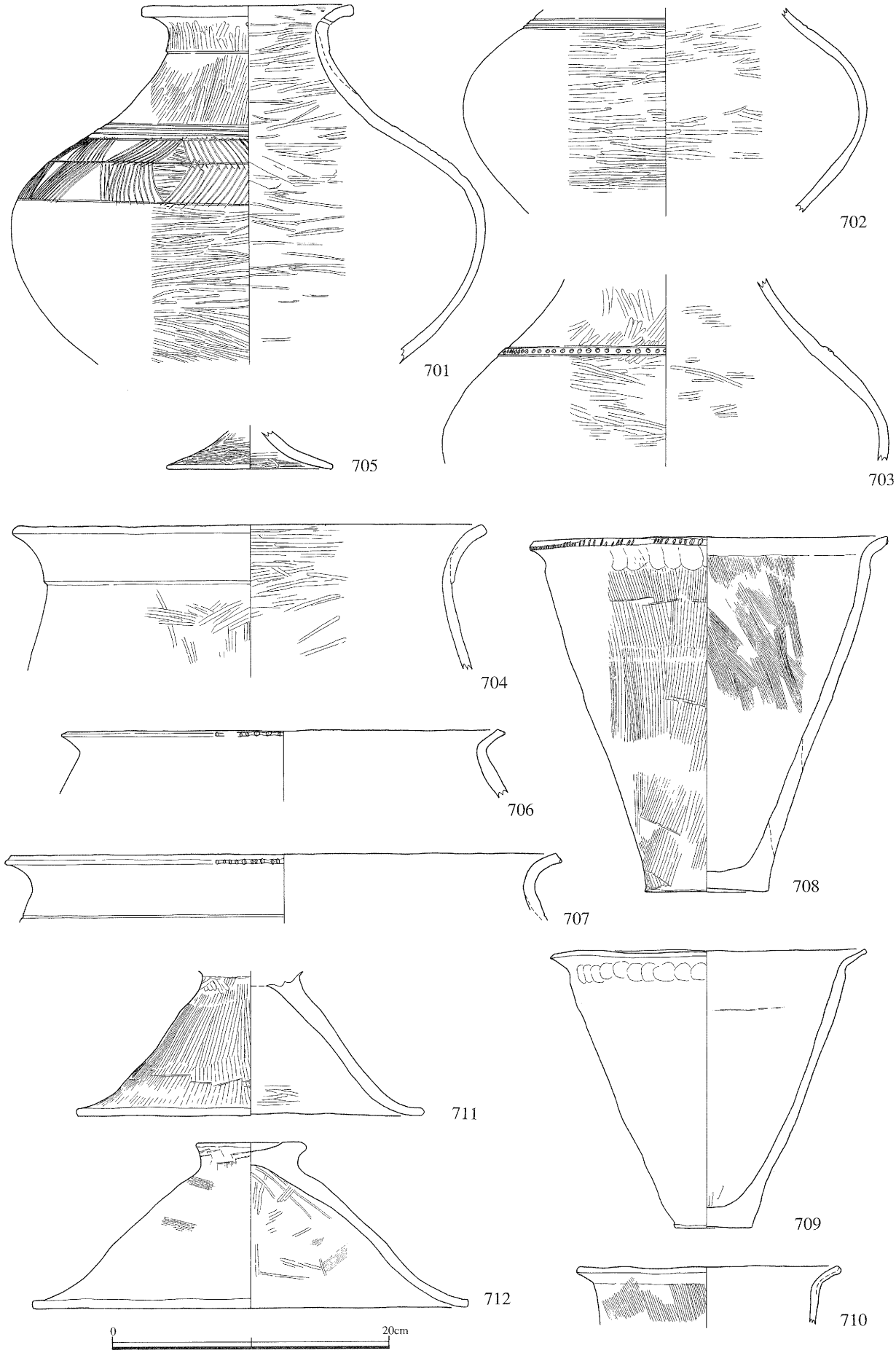
土坑0259（第75図697）　甕697は、低部に径8㎜の小孔を外面から穿つ。非生駒西麓産胎土で煤付着。

土坑0262（第75図698～700）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷698は無文で、口縁部ヨコナデ、頸部外面は単位は見えないがヘラミガキである。内面不明。壷699は内外面に部分的にヘラミガキが残存する。甕700は、頸部に間隔が広く浅いヘラ描き沈線3条、口縁端部にハケメを巡らせる。煤付着。

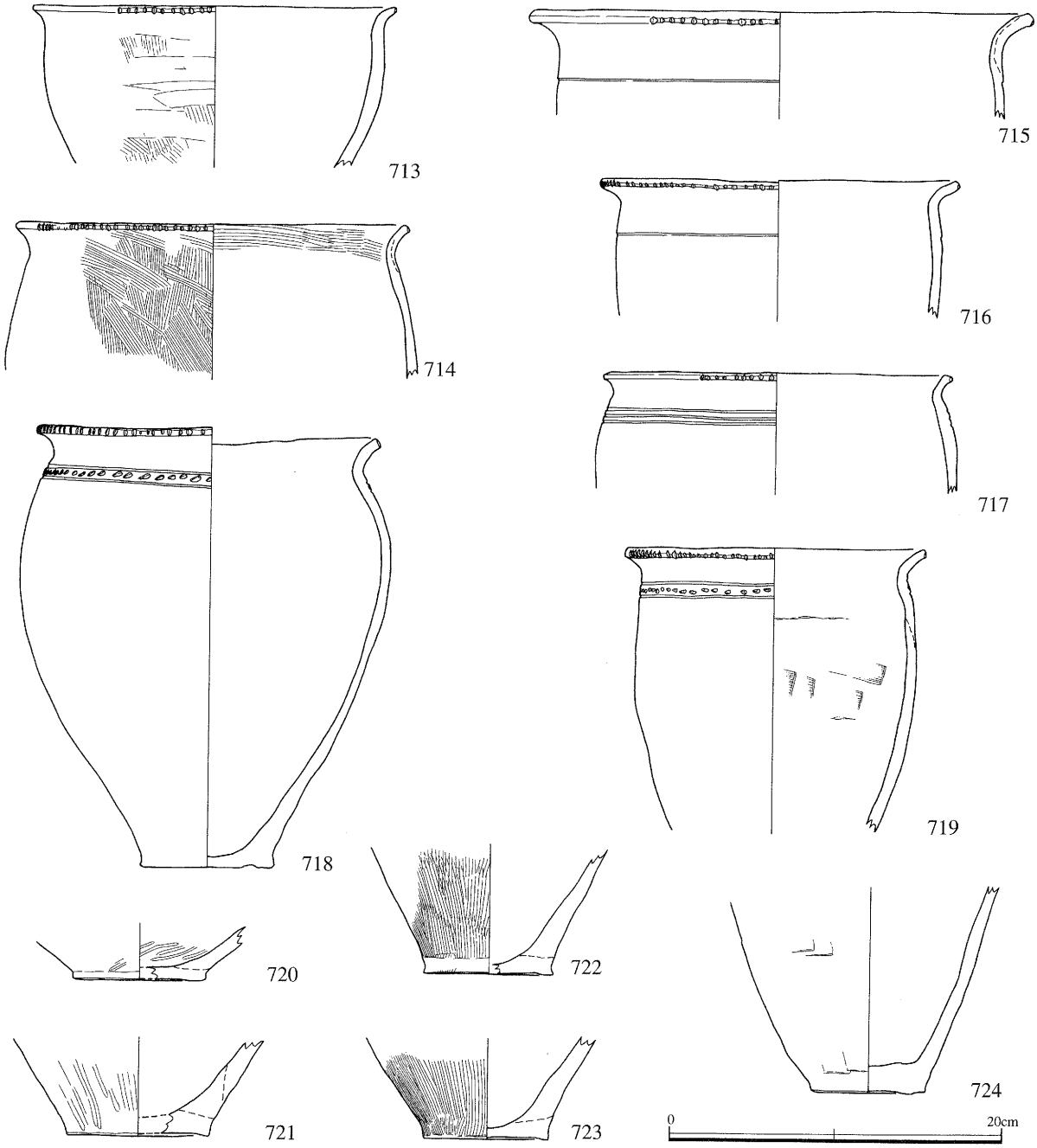
土坑0263（第76図701～第77図724）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷701は、1孔が残存する。口頸部と頸胴部間はやや低い段で、後者段の下方にヘラ描き沈線3条を巡らせる。その後、体部上半にヘラ描き沈線2条、次にその間を斜行ヘラ描き沈線文で上から下の順に埋める。壷702は、頸胴部間に削出突帯と上部にヘラ描き沈線１条を巡らせる。なお、削出突帯の上下はヘラで縁取る。壷703は、頸胴部の段とその下方を削出して突帯にしたもので、その上面に刺突文を巡らせる。大型壷704は接合による段の下を板状工具で下方に強調する。壷蓋705は細片であり、頭部形、孔の有無は不明。706・707はやや大型の鉢と考えられるが、細片のため口径はやや不正確である。707の肩部はヘラ描き沈線である。いずれもヨコナデ仕上げで、煤の付着なし。甕708～710は直線的に外傾する体部と、短く屈曲させる口縁部を有する特異なものである。708にのみ口縁端部に細かく鋭いキザミメを巡らせる。いずれも板ナデ、あるいはナデ仕上げで、煤が付着する。甕蓋711・712は外面ハケメ、あるいは板ナデ、内面はヘラミガキである。711の内面裾2～4cmには煤が付着するが、712には付着せず、これは使用した甕の口径の差によると考えられる。甕713・714は、口縁部ヨコナデ、体部外面はハケメで後者は上半に横方向に板ナデを施す。いずれも煤付着。甕715・716は板状工具で削り出した低い段を有する。内外面ナデ仕上げで、煤が付着する。甕717はヘラ描き沈線3条を巡らせる。外面ナデ、内面は摩滅。煤付着。718・719はヘラ描き沈線



第75図　土坑0255・0256・0259・0262出土遺物
土坑0255（690～694）、土坑0256（695・696）
土坑0259（697）、土坑0262（698～700）



第76図　土坑0263出土遺物（1）

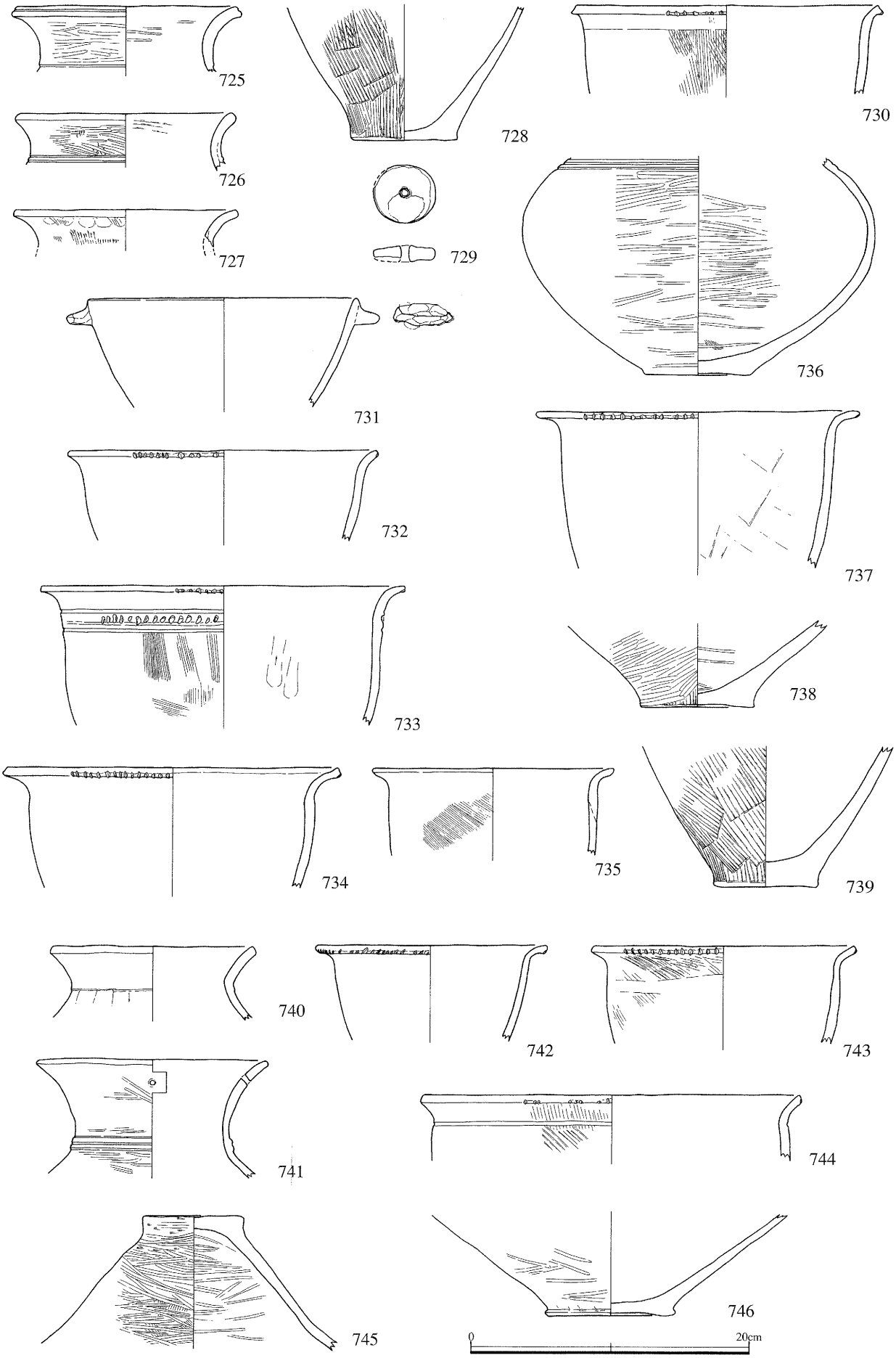


第77図　土坑0263出土遺物（2）

2条とその間に刺突文を左方向に巡らせる。いずれも内外面ともに板状工具ナデ、煤付着。低部にはヘラミガキを施す720・721、ハケメ仕上げの722・723、ナデ仕上げの724がある。後二者には煤が付着する。

土坑0266（第78図730）　非生駒西麓産胎土。直線的に外傾する体部から口縁部を僅かに外反する形態で、今回調査の出土では極めて少ないタイプ。口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ハケメ、内面ナデ仕上げ。外面煤付着。

土坑0269（第78図734・735）　いずれも非生駒西麓産胎土。両者ともに口縁部ヨコナデ、内外



第78図　土坑0266・0269・0272・0286・0302・0304出土遺物

土坑0266（730）、土坑0269（734・735）、土坑0272（725～729）
土坑0286（731～733）、土坑0302（736～739）、土坑0304（740～746）

面工具ナデ仕上げ。甕734の口縁部ヨコナデは強く、内面と端面がくぼむ。いずれにも煤付着。

土坑0272（第78図725～729）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷725は口頸部間に非常に低い段を有する。口縁端面にヘラ描き沈線を巡らせる。内外面ヘラミガキ。壷726は口頸部間に細いヘラ描き沈線2条が残存する。内外面ハケメの後、ヘラミガキ。壷727は石英、長石主体でチャートが混じる通常の胎土ながら、橙色（5YR 7/8）を呈し明るい。外面に指頭痕とハケメが残る。内面調整不明。外面煤付着。甕底部728は外面粗いハケメ、底面無調整、内面ナデ仕上げ。土製紡垂車729は直径4.4cm、厚さ0.9cmと今回調査で多数出土した紡垂車の中では小型に属する。内外面剥離のため重量は不明。手づくね、ナデ仕上げ。

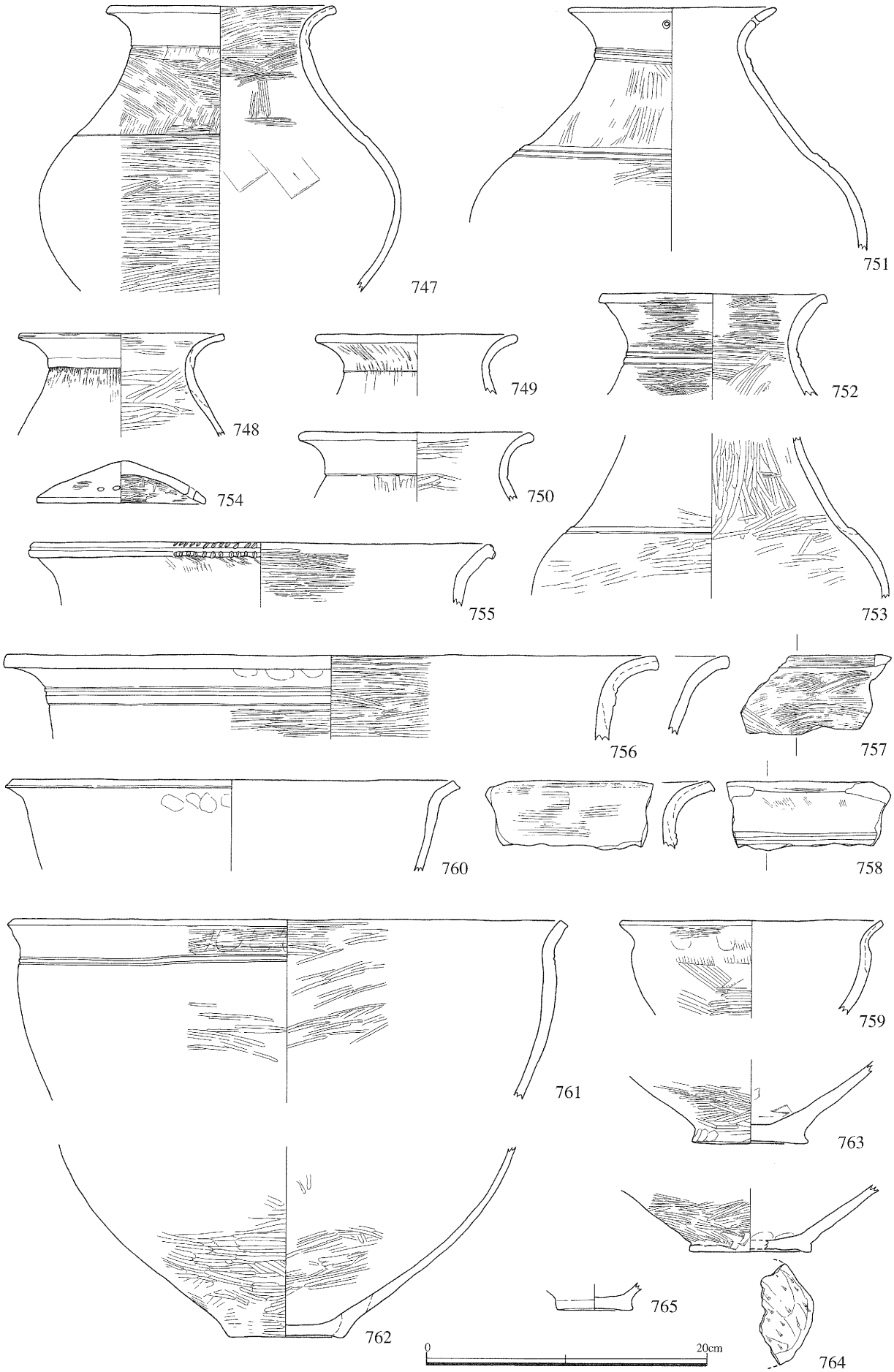
土坑0286（第78図731～733）　いずれも非生駒西麓産胎土。鉢731は瘤状の把手を有する。外面は摩滅で調整不明、内面横方向ナデ仕上げ。甕732は口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。甕733は、ヘラ描き沈線2条と刺突文を巡らせる。刺突文下に非常に弱い沈線があり、刺突文の目印として巡らせたようである。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。

土坑0302（第78図736～739）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷736は低い削出突帯を有し、上面にヘラ描き沈線を巡らせる。ただし削出突帯部の残存がわずかで、上端がヘラ描き沈線になって２条以上になるのか、削出部なのか不明。内外面ヘラミガキ、底面不明。甕737は口縁部ヨコナデ、内外面工具ナデ。外面煤付着。低部738は壷、あるいは鉢で、外面に粗いハケメの後、内外面、底面ともにヘラミガキ。甕低部739は、外面に粗いハケメ、底面無調整、内面ナデ。外面上部に煤付着。

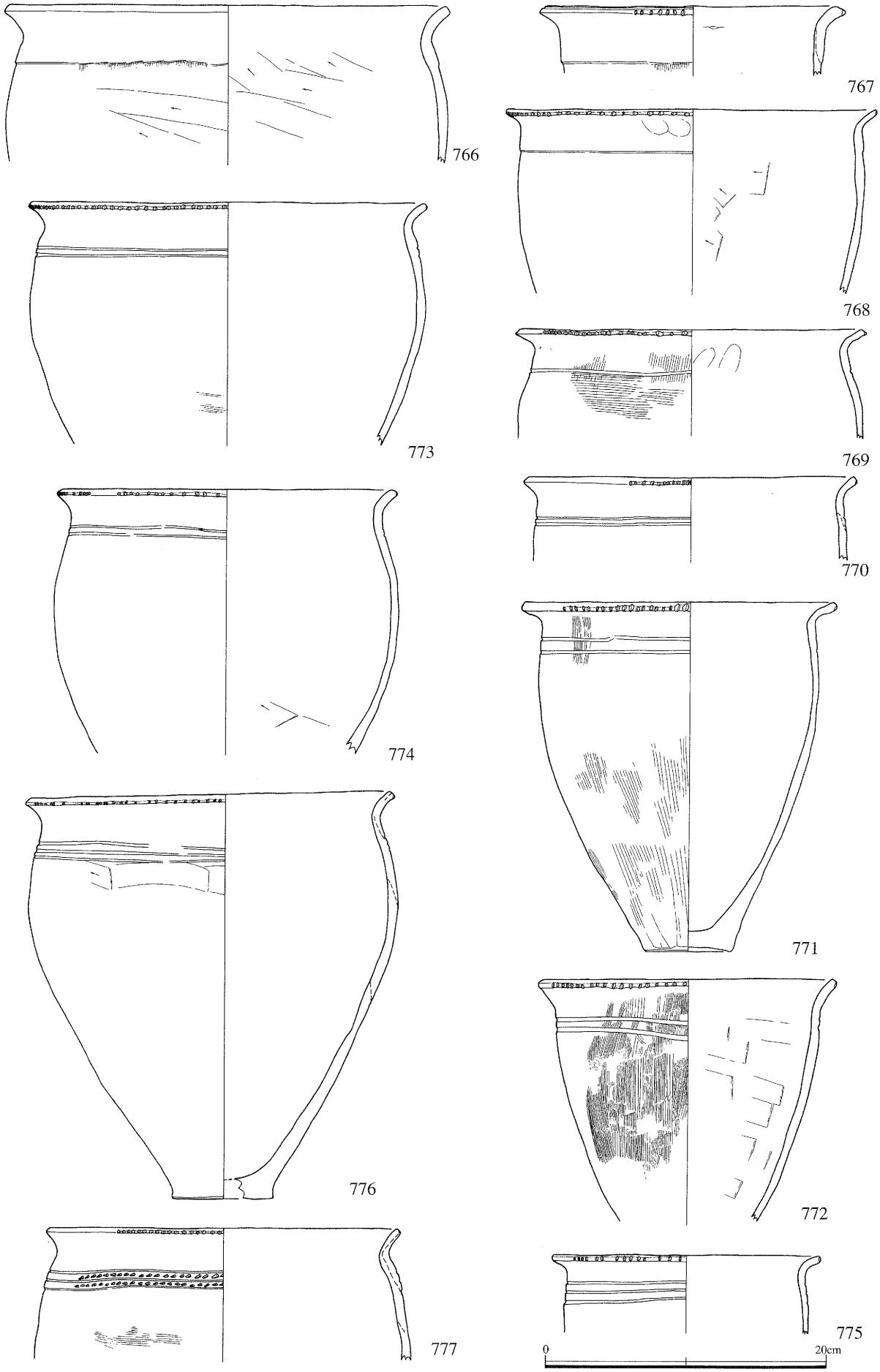
土坑0304（第78図740～746）　いずれも非生駒西麓産胎土。図示し得ないが生駒西麓産胎土の突帯文深鉢細片１点がある。壷740は板状工具による非常に低い段を有する。摩滅のため調整不明。壷741は、断面カマボコ形の削出突帯を有する。３孔が残存しており、本来は４方に穿孔したことがわかる。外面ヘラミガキ、内面は摩滅のため不明。甕742は、口縁部ヨコナデ、内面ナデ。外面は使用による剥離、煤付着のため不明。甕743は、口縁部ヨコナデ、外面ハケメの後、ナデ、内面ナデ。甕744は、７cm程度の細片のため口径は不正確。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ。甕蓋745は、内面裾部に付着した煤から甕の口径は１９cm程度である。頂部上面、および周囲はケズリ、体部は板ナデの後、ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。低部746は、板状工具によって横方向に突出させた底部で薄く仕上げている。胎土に赤褐色のチャートを含んでおり、搬入品と考えられる。明確には図示し得ないが外傾接合である。外面ヘラミガキ、底面および内面はナデ仕上げ。

土坑0297（第79図747～第81図784）　低部19のみ生駒西麓産胎土、他は非生駒。

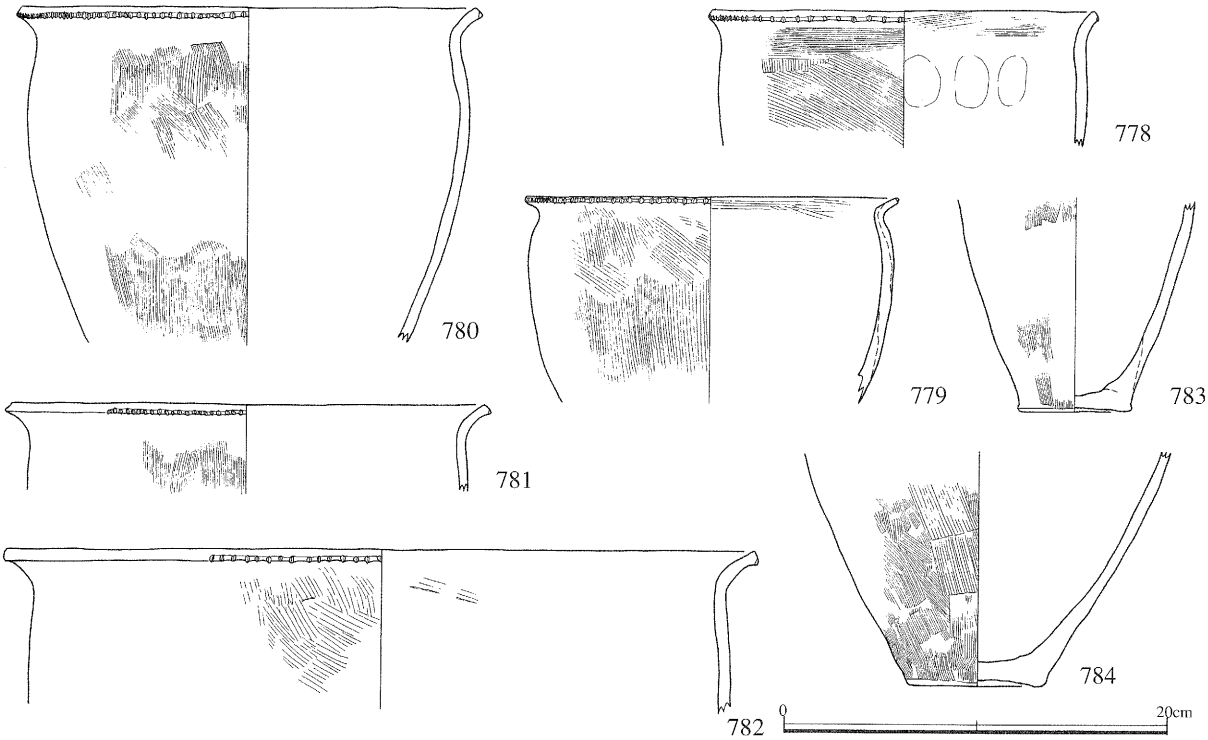
第79図の壷747は口頸部間と頸胴部間に段を有する。口頸部段は接合により生じた低い段に縦方向の板状工具で強調する。なお、頸胴部段裾に赤色顔料が微量に残存する。壷748～750は、口頸部に各種の段を有する。748は接合により生じた明確な段部に縦方向ハケメで明確にし、749は縦方向ハケメで強調し、750は接合による低い段部に縦方向の板状工具で強調したもの。なお、



第79図　土坑0297出土遺物（1）

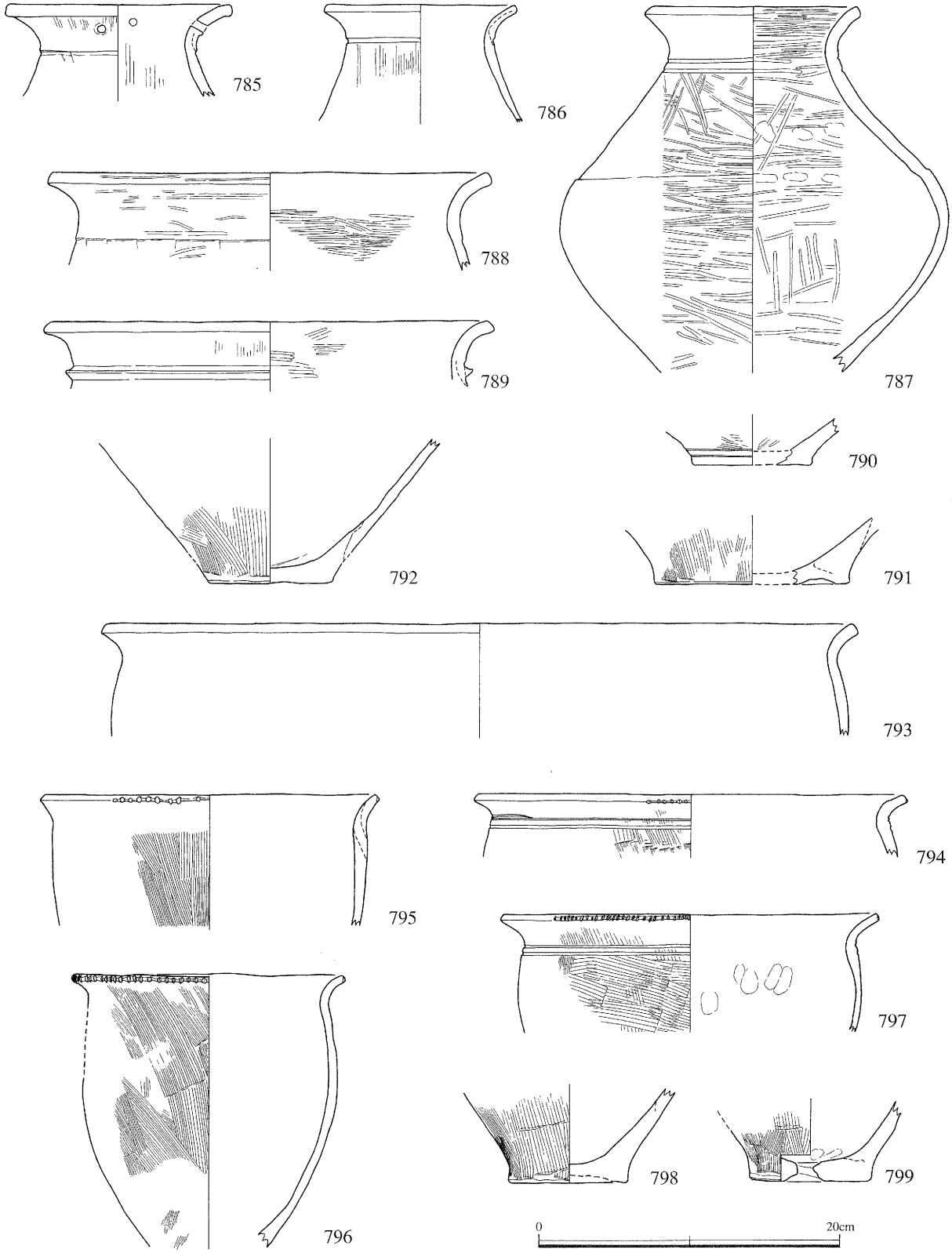


第80図　土坑0297出土遺物（2）



第81図　土坑0297出土遺物（3）

749の内面は摩滅のため調整不明。壷751は口頸部間と頸胴部間に削出突帯を有し、上面にヘラ描き沈線１条を巡らせる。口頸部突帯は断面カマボコ形で上方はヨコナデ、下方は縦方向の板状工具が残存する。頸胴部突帯は上が段、下方が板状工具で削り出したものである。なお、一孔が残存するが残存状況から本来は１孔１対になる。内面は摩滅が著しいが、部分的にヘラミガキが残る。壷752は口頸部間に削出突帯を有するもので、上面にヘラ描き沈線１条を巡らせる。なお、ヘラ描き沈線は最終的に施されるヘラミガキによって細くなる。壷753は頸胴部間に明確な段を有し、下方に非常に浅いヘラ描き沈線１条を巡らせる。壷蓋754は２孔が残存するが、状況から本来は2孔一対になる。内外面ヘラミガキ仕上げ。大型壷755は、8.5cm程度の細片のため口径は不正確である。口縁端面にヘラ描き沈線の後、上・下端部にキザミメを巡らせる。外面はハケメの後ヨコナデ、内面はヘラミガキ仕上げ。大型壷756も11cm程度の細片のため口径は不正確。器壁が著しく厚い。屈曲部は削出突帯で、面上にヘラ描き沈線1条を巡らせる。大型壷757は外面ヘラミガキ、内面摩滅で調整不明。他と全く異なり、明赤褐色（2.5YR 5/8）を呈する。大型壷758は器壁が厚く、かなりの大型になる。屈曲部は削出突帯で、面上にヘラ描き沈線１条を巡らせる。外面はハケメ後ナデ、内面はハケメ仕上げ。759は形態から鉢として扱ったが、全面に煤が付着しており甕として使用する。口縁部ヨコナデ、外面板ナデ、内面ナデ仕上げ。760は土坑0263出土の直線的に外傾する体部の甕と同形態の可能性が高い。口縁部ヨコナデ、内外面板ナデ仕上げ。鉢761はヘラ描き沈線2条を巡らせる。内外面ヘラミガキ仕上げ。低部762はやはり高さ2cmあたりの接合が明確である。底面もヘラミガキ。低部763は指で突出底にする。体部外面と底面はヘラミガキ、内面はナデ。低部764は工具で強く押さえて突出させる。体部外面はヘラミガキ、内



第82図　土坑0320出土遺物

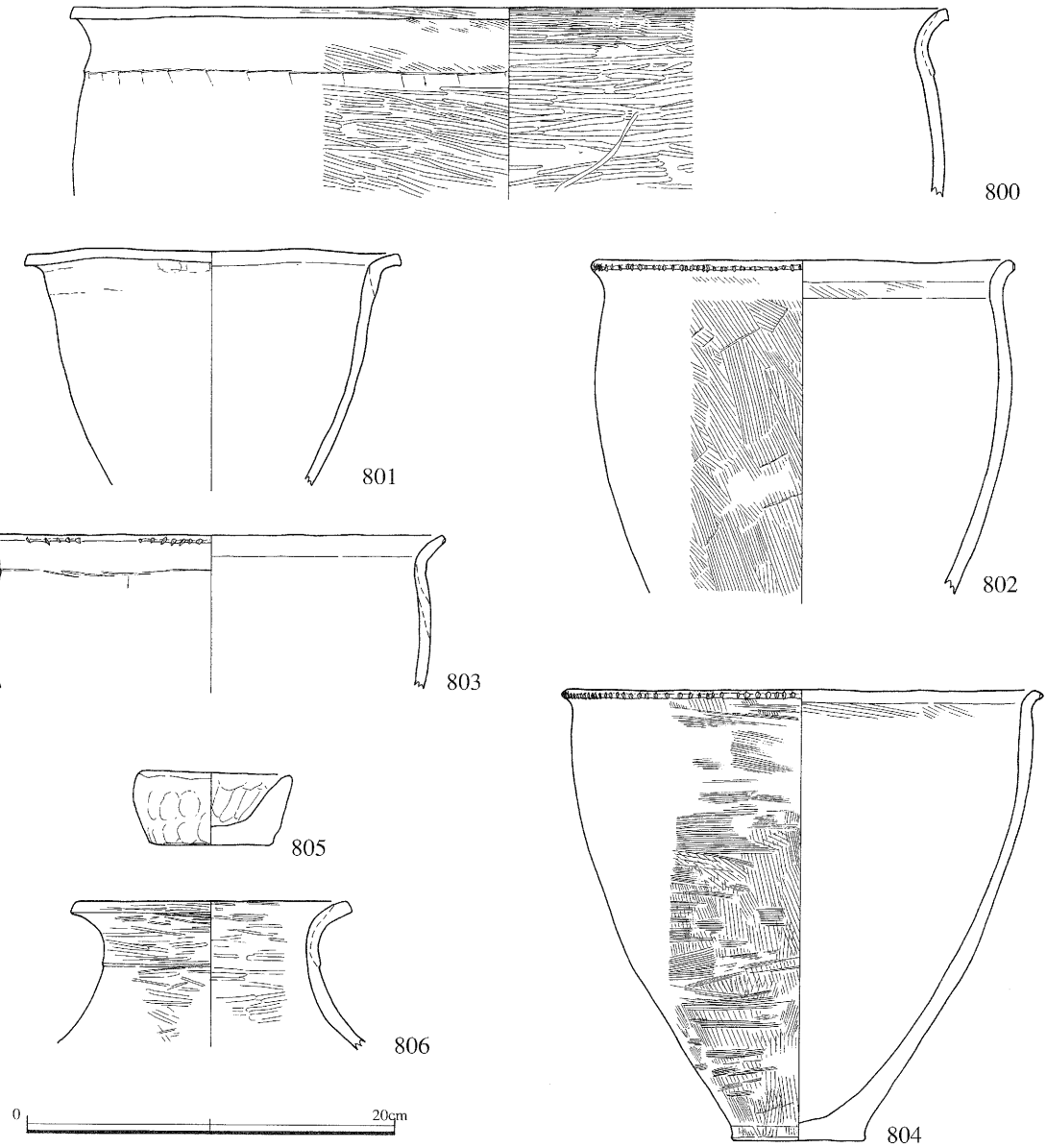
面はナデか。底面は掻き取った状況を示す。低部765は内外面、および底面ナデ仕上げ。突帯文土器の可能性が強い。

第80図の甕766・768はやや低い段を有する。いずれも段は板状工具で削り出して強調する。内外面板ナデ仕上げ。甕767は段を有するもので、板状工具で段を強調する。口縁部ヨコナデ、煤付着。甕769は1条、770～774は2条、775・776は3条のヘラ描き沈線を巡らせるもので、4条以上はない。以上の甕は外面ハケメあるいは板ナデ、内面板ナデあるいはナデ仕上げである。なお、図示しにくいが3条沈線の776の口縁端部キザミメ文は極端に浅く弱い。771～776は煤付着。甕777は段を板状工具で強調し、その上方にヘラ描き沈線2条とその間に刺突文を左方向に巡らせる。

第81図の甕778～782は口縁端部にキザミメ文を巡らせるもので、粗いハケメが特徴的で、煤の付着が著しい。内面はナデ仕上げで、それ以前のハケメの残る場合がある。なお口縁端部キザミメは端部下端が一般的だが、779のみは深く全面に施す。低部782・784は煤付着。

土坑0320（第82図785～799）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷785は、口頸部間に段を有し板状工具で強調する。口縁外面にハケメ、内面にヘラミガキ痕が認められる。内面から穿孔した2孔が残り、一対になると考えられる。壷786は、口頸部間にヘラ描き沈線を有する。この沈線は下方に長く傾斜する面をなしており、段を意識したものであると考えられるが、削出してはいない。明赤褐色（2.5YR 5/8）を呈する。外面は縦方向のハケメが残存し、後に口縁部ヨコナデ。他は摩滅で調整不明。壷787は、口頸部間にヘラ描き沈線2条、頸胴部間に段を有する。内外面にヘラミガキ、口縁部外面のみはヨコナデ仕上げ。大型壷788は、口頸部間に低い段を有し、板状工具で強調する。大型壷789は7cm程度の破片であり、口径は不正確。口頸部間に断面三角形の貼付け突帯を有する。外面は縦方向ハケメの後、ナデ仕上げ。内面は横方向のハケメの後、ヘラミガキ。低部790は内外面ヘラミガキ、その後ヘラ描き沈線2条を巡らせる。低部791・792は明確な外傾接合部で剥離しており、製作時の断絶を示す。791は外面ハケメ、内面は摩滅のため調整不明。792は外面ハケメ、内面は板ナデ痕が認められ、その後にヘラミガキを施している。大型鉢793は11cm程度の破片であり、口径は不正確。口縁部外面ヨコナデ、内面は不明。体部外面横方向の板ナデだが、内面はヘラミガキの可能性が強い。甕794は6cm程度の破片であり、口径は不正確。口縁部ヨコナデ、体部外面はハケメの後、下方へ板ナデ。内面ナデ。甕795・796は口縁部ヨコナデ、体部外面はハケメ、内面ナデ仕上げ。いずれも煤付着。甕797は、外面に縦方向ハケメ、横方向ハケメ、口縁部ヨコナデの順に調整後、端部キザミメとヘラ描き沈線を巡らす。体部内面ナデ。煤付着。低部798・799は外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。前者の底面はケズリ、後者は穿孔しており内面低部以上の部位に炭化物付着。

土坑0323（第83図800～803）　いずれも非生駒西麓産胎土。大型鉢800は、接合によって生じた段差部分を板状工具で強調する。外面および口縁部内面にハケメを施した後、ヘラミガキ仕上げ。口縁端面はハケメのみ。甕801は口縁端部を強く屈曲させる。口縁部ヨコナデ、内外面ナデ仕上げ。外面の上半煤付着、下半赤変剥離。甕802は口縁端部を僅かに外反させる。外面と口縁部内



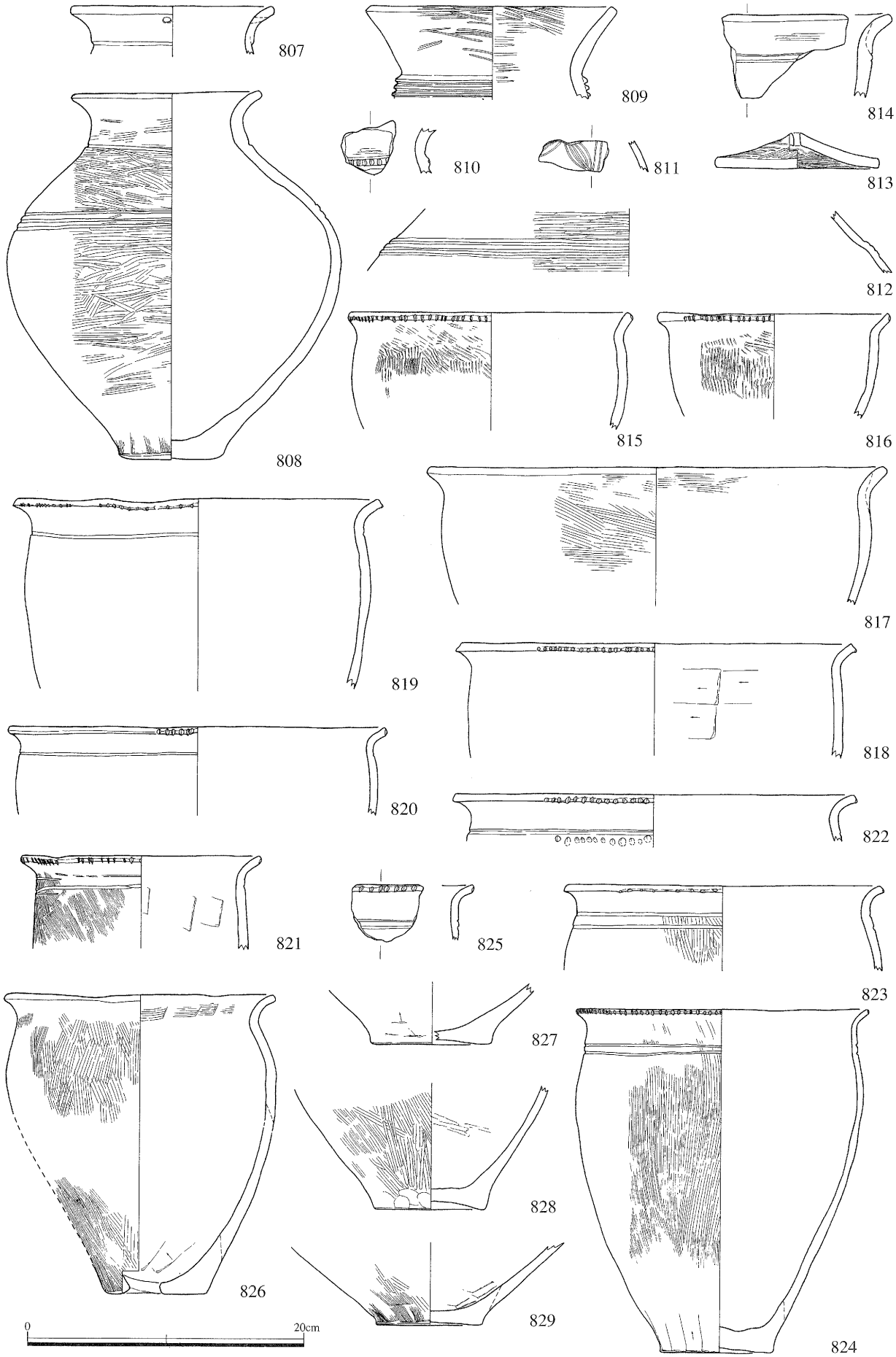
第83図　土坑0323・0325・0328・0334出土遺物
土坑0323（800～803）、土坑0325（804）
土坑0328（805）、土坑0334（806）

面にハケメの後、口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ。外面部分的に煤付着。甕803は板状工具で削出して段を形成する。接合による段差部分ではない。口縁部ヨコナデ、内外面ナデ。外面煤付着。

土坑0325（第83図804）　非生駒西麓産胎土。ほぼ完存。体部外面粗い縦方向ハケメの後、上半には密な、下半には疎な細かな横方向ハケメを施す。内面は口縁部ハケメ、体部ナデ仕上げ。底面は雑なナデ。外面は5cm前後より上位に煤付着、内面下半に炭化物が僅かに残存。

土坑0328（第83図805）　非生駒西麓産胎土。小型鉢で、内外面は成形時の指頭痕が残り、軽くナデただけの仕上げ。底面ナデ。器壁厚く、重量感がある。石英、長石、チャートを含み、灰黄色（2.5Y 7/2）を呈する在地のもの。内面に僅かながら赤色顔料が付着。被熱の痕跡はない。

土坑0334（第83図806）　非生駒西麓産胎土。段を有する広口壷で黒褐色（2.5Y 3/1）を呈する。内外面ヘラミガキ、内面頸部下半ナデ仕上げ。



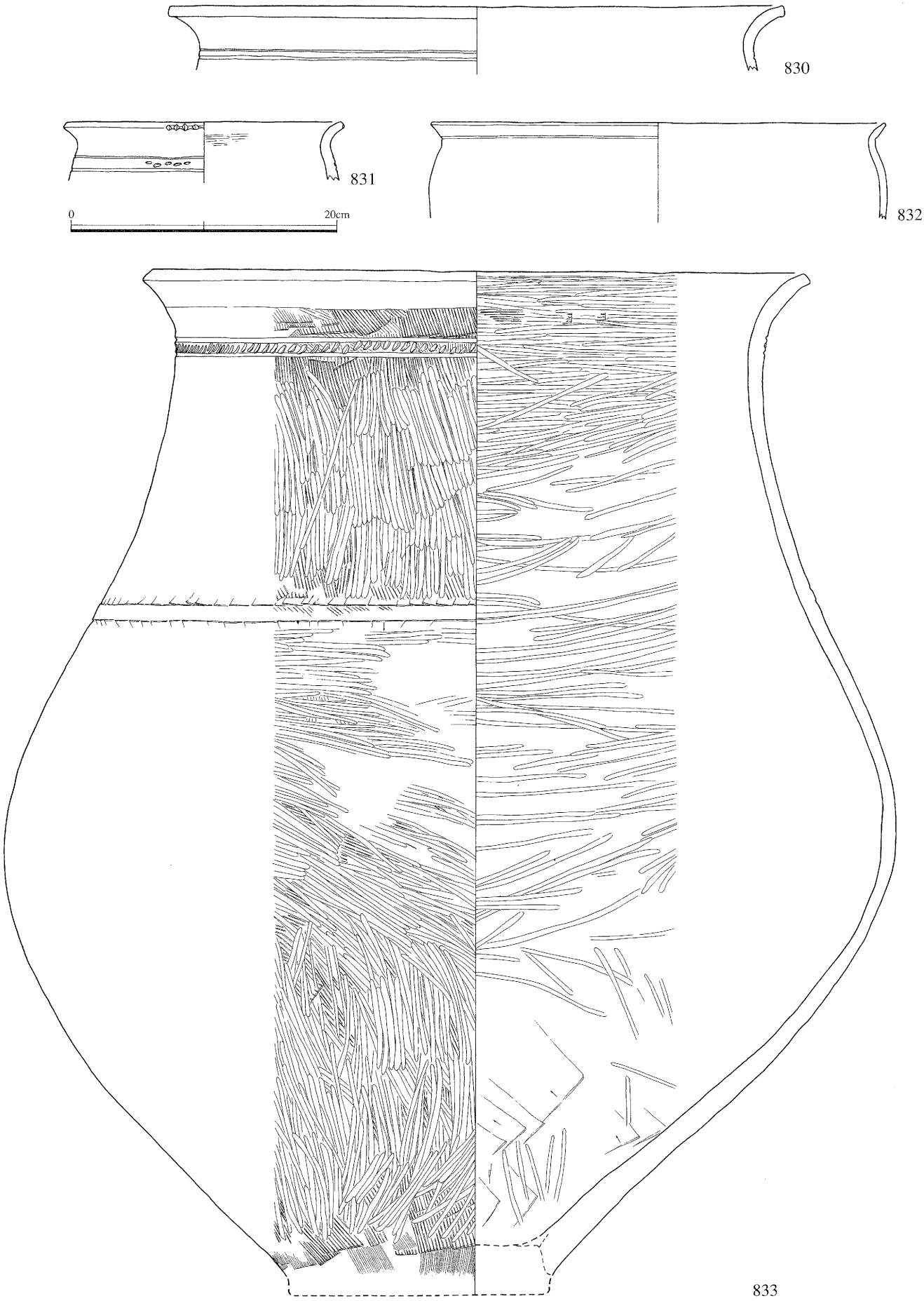
第84図 土坑0339出土遺物

土坑0339（第84図807～829）　壷808のみ生駒西麓産胎土、他は非生駒。壷807は段を有する。摩滅で調整不明。壷808は完存する。口頸部間に1条、頸胴部間に3条のヘラ描き沈線を巡らせる。口頸部間沈線を介して、頸部を高くする。外面ヘラミガキ、内面板ナデ。壷809は口頸部間の突帯は貼り付けと考えられる。高い突帯上面に深く鋭いヘラ描き沈線を巡らせる特異なものであり、687のみが類似資料である。壷810は口頸部間の削出突帯に弱いキザミ文を巡らせる。外面ヘラミガキ、内面不明。壷811は体部上半の有軸木葉文細片。表面に若干の赤色顔料が残存する。壷812は頸胴部間段の下方を削出し、上面にヘラ描き沈線2条を巡らせる。内外面ヘラミガキ。壷蓋813は内外面共に井桁状にヘラミガキを施す。大型鉢814は細いヘラ描き沈線2条を巡らせる。器壁が厚い。外面に部分的にヘラミガキが残存するが、他は不明。甕815・816は同一個体の可能性もある。その場合、前者の形態と寸法が実態に近い。口縁部ヨコナデ、外面粗いハケメ、内面ナデ仕上げ。外面は被熱剥離著しく、煤付着。甕818は口縁部ヨコナデ、体部外面縦、内面横方向の板ナデ。外面煤付着。甕819はヘラ描き沈線1条を巡らせる。口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面摩滅で調整不明。外面煤付着。甕820は６cm程度の破片であり、口径やや不正確。弱いヘラ描き沈線1条を巡らせる。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ。甕821はヘラ描き沈線1条を巡らせる。屈曲部で沈線状に図示したものは板状工具先端のアタリである。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面板ナデ。外面煤付着。甕822は9cm程度の破片であり、口径やや不正確。ヘラ描き沈線1条と刺突文を巡らせる。口縁部ヨコナデ。甕823はヘラ描き沈線2条を巡らせる。口縁端部キザミメは大変弱い。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ。外面煤付着。甕824はヘラ描き沈線2条を巡らせる。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、低部板ナデ、底面無調整、内面板ナデ。外面煤付着。甕825はヘラ描き沈線2条を巡らせる。口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ仕上げ。甕826は無文で、低部に穿孔する。口唇部から口縁部外面ヨコナデ、体部外面ハケメ、底面無調整、内面は口縁部ハケメ、体部ナデ仕上げ。外面煤付着。低部827は壷と考えられる。摩滅で調整不明。やや上げ底の低部828は壷と考えられる。内外面ヘラミガキ。低部829は壷と考えられる。外面板ナデと部分的にヘラミガキ、底面ヘラミガキ、内面板ナデ。

土坑0340（第85図830・831）　いずれも非生駒西麓産胎土。大型壷830は10.5cm程度の破片であり、口径は不正確。ヘラ描き沈線2条を巡らせる。口縁部ヨコナデ。甕831も5.5cm程度の破片のため、口径は不正確。ヘラ描き沈線2条とその間に刺突文を巡らせる。内面にハケメ痕が残る。口縁部ヨコナデ。

土坑0344（第85図832）　非生駒西麓産胎土。図示し得ないが生駒西麓産胎土の縄文晩期深鉢片１点がある。鉢832の屈曲部は段にもみえるが、その部分の残りが少なく不正確。外面肩部と内面はヨコナデ、体部縦方向ナデ。

土器棺0345（第85図833）　非生駒西麓産胎土の大型壷。底部のみ欠損。口頸部間にヘラ描き沈線2条とその間に刺突文、頸胴部間に削出突帯を巡らせる。後者の板状工具痕跡は明瞭である。なお、口縁端部は図示し得ていないが、弱い沈線が認められる。外面はハケメ後、ヘラミガキ。



第85図　土坑0340・0344・0345出土遺物

土坑0340（830・831）、土坑0344（832）、土坑0345（833）

土坑0350（第86図834～836）　いずれも非生駒西麓産胎土。鉢834は段を有する。石英、長石、チャートを含む在地の胎土であるが、橙色（5YR 6/6）を呈し他と異なる。口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ、内面は不明。低部835は、内外面、底面ヘラミガキ。甕低部836は、焼成後に穿孔する。外面ハケメ、底面および内面ナデ仕上げ。体部内面に炭化物付着。

土坑0371（第86図837）　非生駒西麓産胎土。屈曲部から下がった位置にヘラ描き沈線2条を巡らせる。口縁部ヨコナデ、外面縦方向ハケメ、内面口縁部付近に横方向ハケメ、体部ナデ。

土坑0380（第86図838）　非生駒西麓産胎土。低部に成形時の細かな単位の指頭痕が残る。体部外面は縦方向ケズリの後、ナデ仕上げ。内面ナデ。縄文系土器底部か。

土坑0381（第86図839・840）　いずれも非生駒西麓産胎土。なお、図示し得ないが生駒西麓産胎土の縄文晩期深鉢片１点がある。壷839はヘラ描き沈線2条とその間に竹管文を巡らせる。口縁部外面ヨコナデ、頸部ヘラミガキ、内面はナデの後に疎なヘラミガキを施す。低部840は、壷あるいは鉢。内外面、底面ヘラミガキ。

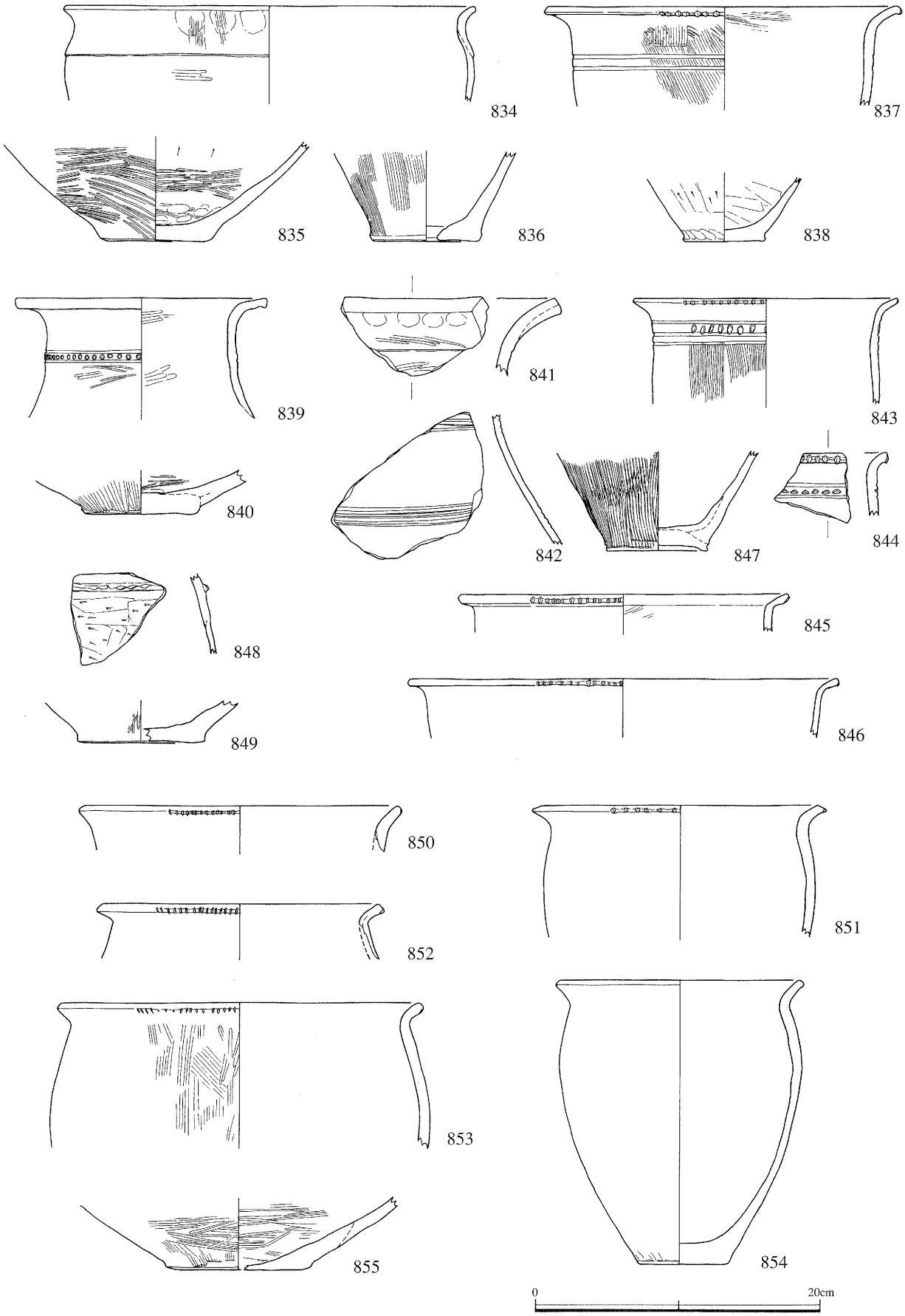
土坑0386（第86図841～847）　いずれも非生駒西麓産胎土。大型壷841は板状工具で強調した低い段を有する。内外面ヘラミガキ。壷842の口頸部間の下端は低い削出であり、上の2条はヘラ描き沈線である。頸胴部間は複雑である。ヘラで縁取った段（3条目）の上下にそれぞれ上面にヘラ描き沈線１条を有する削出突帯を巡らせる。内外面ヘラミガキ。甕843は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。甕844は口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。甕845・846はいずれも7cm程度の細片で口径は不正確。口縁部ヨコナデ仕上げ。845は口縁部に煤付着。甕低部847は外面ハケメ、底面ナデ、内面板ナデ。外面は赤変する。

土坑0409（第86図848・849）　縄文系深鉢848は生駒西麓産胎土。突帯上のキザミは、例えば丸い棒状工具の腹部を斜めに押付けた状況を示す。内傾接合。外面の突帯より下部は横方向ケズリ、上部はナデ、内面ナデ。外面の突帯より下に煤付着。低部849は非生駒西麓産胎土。内外面、底面ナデ仕上げ。

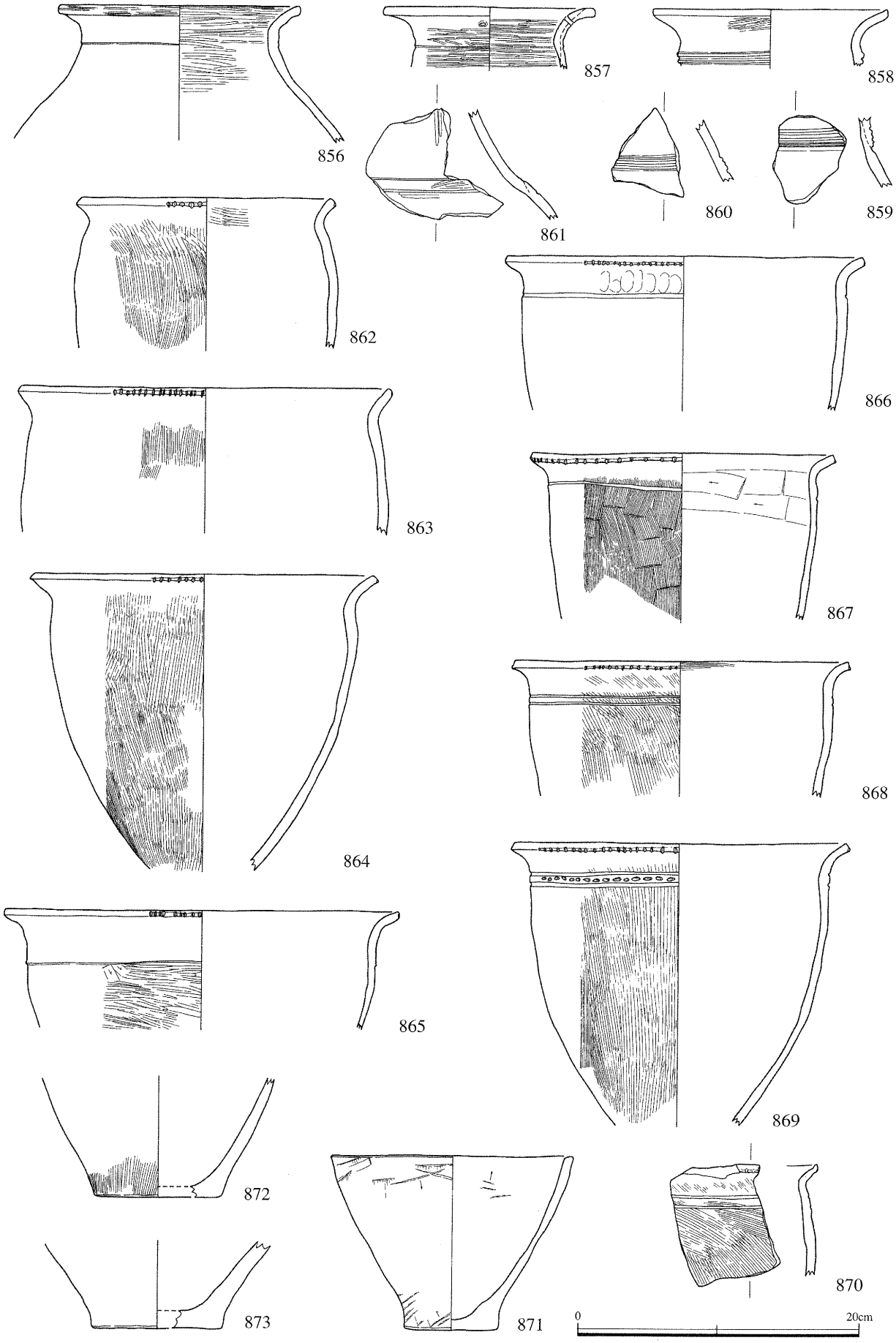
土坑0412（第86図850～855）　いずれも非生駒西麓産胎土。甕850は口縁部ヨコナデ。甕851は摩滅のため調整不明。甕852は口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ。甕853は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメの後、ナデあるいは部分的にヘラミガキを施す。体部内面ナデ。甕854は口縁部ヨコナデ、内面ナデ仕上げ。体部外面は底部に板状工具痕が残存する以外、摩滅で調整不明。外面下半赤変。

土坑0419（第87図856～873）　壷857のみが生駒西麓産胎土、他は非生駒。

壷856は、頸部にやや退化した段を有する。外面は頸部はヘラミガキ痕が認められる以外は調整不明。生駒西麓産胎土の壷857は細片で、一孔が残存する。頸部段は削出しており、ヘラミガキで仕上げる。壷858は、高く突出する幅広の削出突帯上にヘラ描き沈線を巡らせる。部分的にヘラミガキが残存する以外、摩滅のため調整不明。壷859は口頸部間の段であり、その上方に深い沈線で突帯を表現するも削り出していない。突帯上に浅いヘラ描き沈線3条を巡らせる。段下は



第86図　土坑0350・0371・0380・0381・0386・0409・0412出土遺物
土坑0350（834～836）、土坑0371（837）、土坑0380（838）、土坑0381（839・840）、土坑0386（841～847）、土坑0409（848・849）、土坑0412（850～855）



第87図　土坑0419出土遺物

ヘラで縁取る。内面ヘラミガキ。壷860は頸胴の幅広の削出突帯であり、その上方にヘラ描き沈線2条を巡らせる。壷861は頸胴部間の段であり、その下方にヘラ描き沈線を巡らせる。外面頸部に縦方向、段以下に横方向のヘラミガキ、段上はヘラで縁取る。内面ヘラミガキ。

甕862～864は、口縁端部にキザミメを巡らすのみ。口縁部ヨコナデ、体部外面はいずれも粗雑なハケメで類似する。内面は862がナデ仕上げ、他は摩滅のため調整不明。いずれも煤付着。甕865は低い段を有する。段の一部が削り出されず沈線のまま残る部分がある。外面は段より下が粗いヘラミガキ、内面ナデ仕上げである。煤は付着しない。甕866・867はヘラ描き沈線1条、868～870はヘラ描き沈線2条を巡らす。869のみ沈線間に刺突文を左方向に巡らせる。866の外面は縦方向の板ナデとするか、ハケメとするか微妙である。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向のハケメ、内面ナデ仕上げが基本である。いずれも煤付着。鉢871は全面に煤が付着する。外面は板状工具痕が多数認められ、内面はナデ仕上げ。他と同じく低部やや上方に外傾接合が確認できる。低部872・873は、前者外面ハケメが確認できる以外、摩滅のため調整不明。

土坑0422（第88図874～876）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷874は頸胴部間に上面にヘラ描き沈線を有する削出突帯を巡らせる。削出突帯の上は段であり、突帯の上下は太いヘラ描き沈線で縁取る。内外面ヘラミガキ。甕875は8cm程度の破片であり口径は不正確。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。外面煤付着。低部876は器壁が薄く、接地部が横に突出した形態を示し、内傾接合である等が特徴的で、縄文系と考えられる。石英、長石、チャートを主体に雲母が混じる粗砂を多く含み、にぶい褐色（7.5YR 5/3）を呈する。外面ハケメ、低部に板ナデ痕、底面と内面ナデ。高さ8cm以上に煤付着。

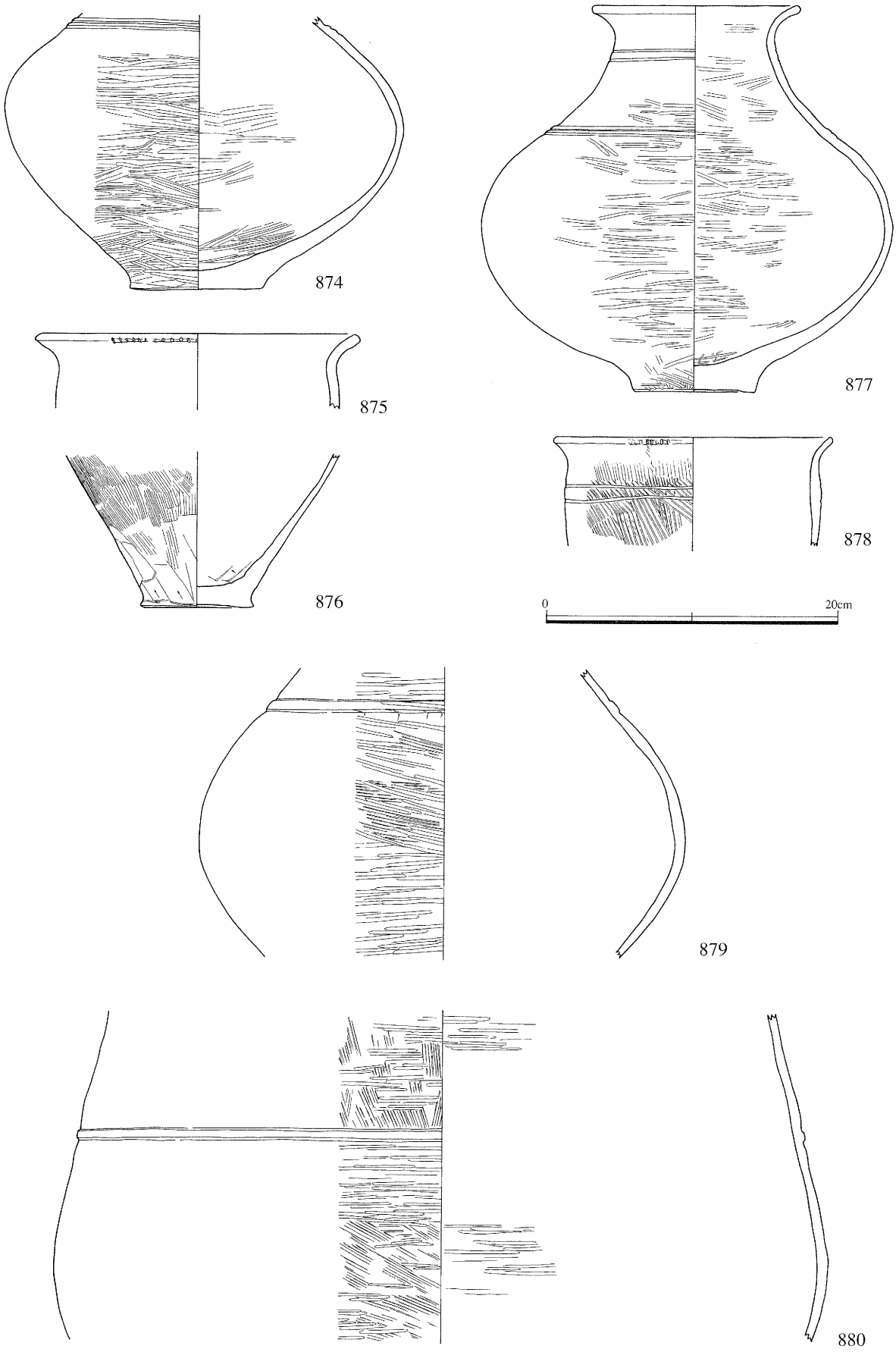
土坑0427（第88図877・878）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷877の口頸部間は幅１㎜程度で浅いヘラ描き沈線2条、頸胴部間は上面にヘラ描き沈線を有する削出突帯。なお削出突帯の上下はヘラ描き沈線で縁取る。外面は口縁部ヨコナデ、頸部と胴部がヘラミガキ。内面はヘラミガキである。甕878は雑なヘラ描き沈線2条を巡らせる。口縁部ヨコナデ、外面ハケメ、内面摩滅で調整不明。

土坑0428（第88図879）　非生駒西麓産胎土。頸胴部間にやや幅広の削出突帯を有する。突帯下裾は板状工具による削出し。外面は体部にハケメを施した後、ヘラミガキ、内面ナデ仕上げ。

土坑0432（第88図880）　非生駒西麓産胎土。頸胴部間に断面カマボコ形の削出突帯を有する。外面はハケメを施した後、疎なヘラミガキ、内面は摩滅著しいが部分的にヘラミガキ残存。

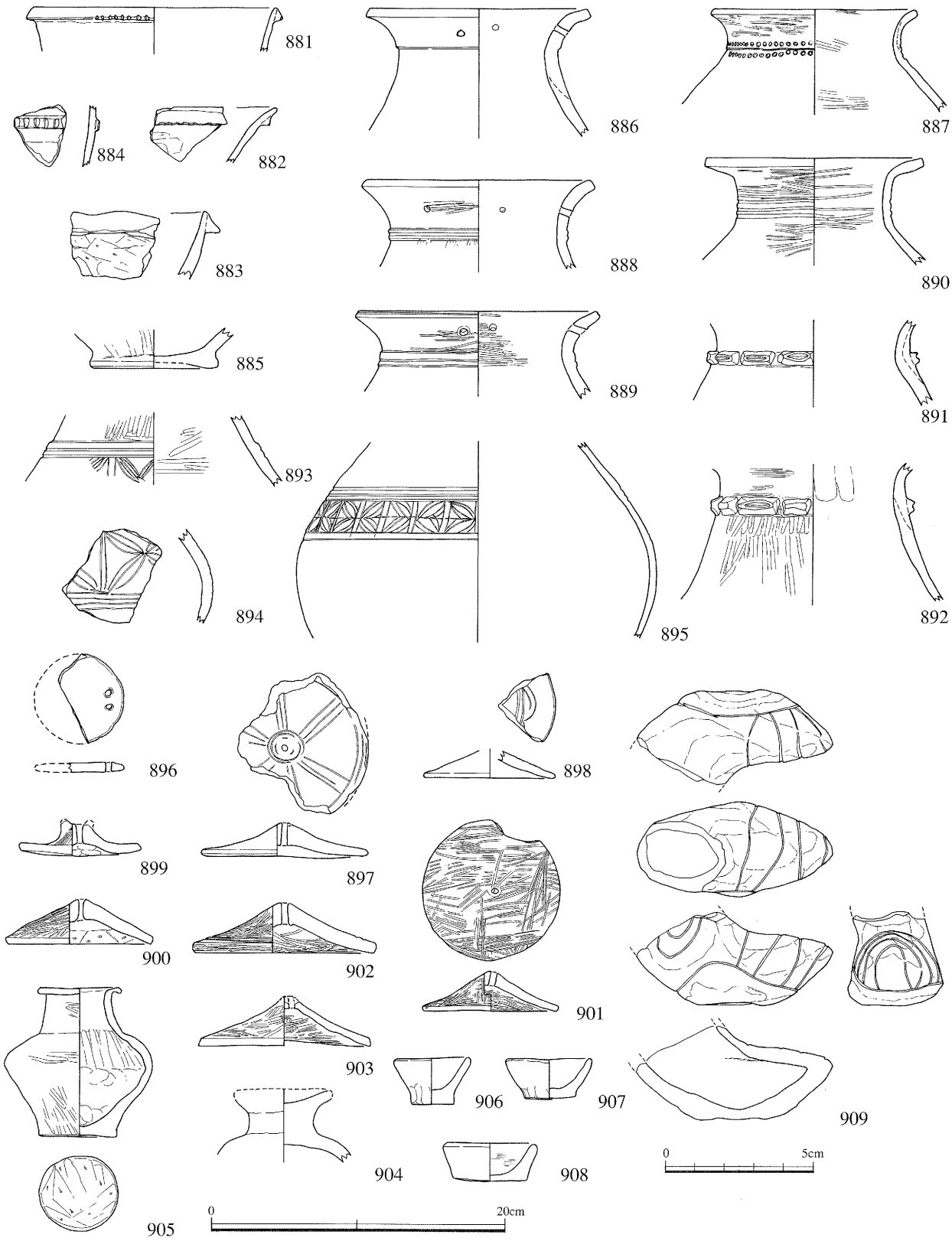
４面直上・９層（第89図881～909）　881～885の縄文系と異型土製品909は生駒西麓産胎土、他は非生駒。

壷881は摩滅のため調整不明。鉢882は口縁部ヨコナデ、頸部内外面工具ナデ。内面の接合痕から内傾接合とわかる。外面煤付着。鉢883は流路0183の59のような大型鉢になると考えられる。突帯部ヨコナデ、外面ケズリ気味、内面ハケ状痕が残る。深鉢884は突帯部ヨコナデ、内面ナデ仕上げ。低部885は横方向へ突出した形態で、側面はミガキ気味に仕上げる。体部外面板ナデ、



第88図　土坑0422・0427・0428・0432出土遺物

土坑0422（874～876）、土坑0427（877・878）
土坑0428（879）、土坑0432（880）



第89図　包含層他出土遺物

内面不明。

壷886は2孔が残る。摩滅のため調整不明。壷887は低い段の下裾を細いヘラで縁取ることでシャープに仕上げる。段の上下に竹管文を巡らせる。図化できないが、「竹管」は先端面を細かく鋸歯状に尖らせた工具である。内外面ヘラミガキ。壷888は上面にヘラ描き沈線を有する削出突帯を巡らせる。完周するもので、4孔を不規則な間隔で穿つ。口縁部外面ヘラミガキ、他は不明。

壷889は口縁端部にヘラ描き沈線１条、上面にヘラ描き沈線を有する削出突帯を巡らせる。2孔が残る。口縁部内外面ヘラミガキ、頸部内面ナデ。壷890は口頸部管にヘラ描き沈線3条を巡らせる。頸部内面ナデ、それ以外の部位はヘラミガキ。壷891・892は口頸部間に特異な貼付け突帯を有する。今回の出土資料では、この2点のみである。断面三角形の貼付け突帯を細かい単位に分断し、頂部に「丸のみ」状の工具で紡錘形の刺突を巡らせる。なお892は小型の単位には刺突を施さない。胎土に石英・長石を主体とする多量の粗砂と微量の角閃石を含み、橙色（5YR 6/6）を呈する。892は外面ヘラミガキ、内面に指頭痕を残しナデ仕上げ。外面に黒色物が残存する。891は調整不明。壷893は頸胴部細片。段の下に鋭いヘラ描き沈線２条と細く弱いヘラ描き沈線による有軸木葉文を線刻する。外面は頸部に縦方向、胴部に横方向ヘラミガキを施す。内面ヘラミガキ。壷894は腹部細片。ヘラ描き沈線4条と有軸木葉文を線刻する。外面ヘラミガキ、内面ナデ。壷895は頸胴部間に太いヘラ描き沈線3条とその下に細く弱いヘラ描き沈線による有軸木葉文を線刻する。丁寧に仕上げており、調整不明。

壷蓋896は小型品。部分的にヘラミガキが残る。壷蓋897・898は外面に弱いヘラ描きの線刻を有する。壷蓋899は両面に成形時の指頭痕が著しく残る。外面ハケメの後ナデ、内面弱いナデ仕上げ。壷蓋900～903は笠形で頂部に1孔を有する。902のみ裾部にヘラ描き沈線2条を巡らせる。900が内面ヘラケズリを施す以外、ヘラミガキ仕上げ。904は甕蓋か？　内面ヘラミガキ、他は摩滅のため調整不明。

ミニチュア壷905は、外面に部分的にヘラミガキが残存する。底面はケズリ。内面は頸部ナデ、体部は成形時の指頭痕。ミニチュア鉢906～908はいずれも丁寧にナデ仕上げる。

異型土製品909は成形方法不明。底部は意識しており、正置できる。外面にヘラ描き沈線による線刻を施す。指頭成形時のナデ仕上げである。いわゆる「鳥形土製品」であるが、皮袋等の模倣品であろうか。生駒西麓産胎土でもあり、この種遺物の縄文からの系譜が想定したい。

第２節　土製品

多数の土錘、紡錘車が出土している。図化しうるものについてはその大部分を報告した。ただし、大きく欠損して本来の重量がわからない資料や、層位が不明な資料は除外したが、それらも報告資料と同様に手ずくね品の範疇におさまるものである。なお、紡錘車は前期後半以降にみられる土器体部の再利用品は皆無である。

（１）土錘等（第90図1～25）　流路0183出土品は確実に弥生前期の資料であり、4面直上、9層出土資料もその可能性が強い。以下に述べる1～3類のいずれにも弥生前期と認定できるものがあり、これらは同時存在したものであることがわかる。なお22・23は形態および胎土が異なり、8層出土でもあることから時期不明としておきたい。

形態は１～４類と5類の異形品に分離できる。これらは、最大径、重量、孔径においても明確なまとまりが看取できる。なお、1～5類にわたって生駒西麓産胎土は皆無である。

1類；円筒状で両端部に面を有するもの（1・２）

胎土は多くの石英、長石からなる砂、粗砂を主体に若干のチャートを含むもので、在地産が主体を占める。これは１～３類に共通する状況で、弥生前期の土器と同様である。成形時に指で軽くナデる程度で仕上げる。重量は1が49.0ｇ、2が38.8ｇで2類の34～55ｇの範囲におさまる。孔径は5～6mmで2・3類より小さい。今回調査の弥生前期において、1類は少数で、主体は2・3類である。下條氏分類の管状土錘Ⅱｂ中型に属する。

2類；胴部中程で最大径となり端部が急速に狭くなり紡錘形を呈するもの（3～9）

胎土は1類と同じ。重量は34～55ｇで1類とは同じ範囲で、3類とは明確に分離できる。孔径は8～10mmで最も大きい。下條氏分類の管状土錘Ⅱｃ類中型に属する。

3類；胴部中程で最大径となり端部が丸くなり楕円形を呈するもの（10～21）

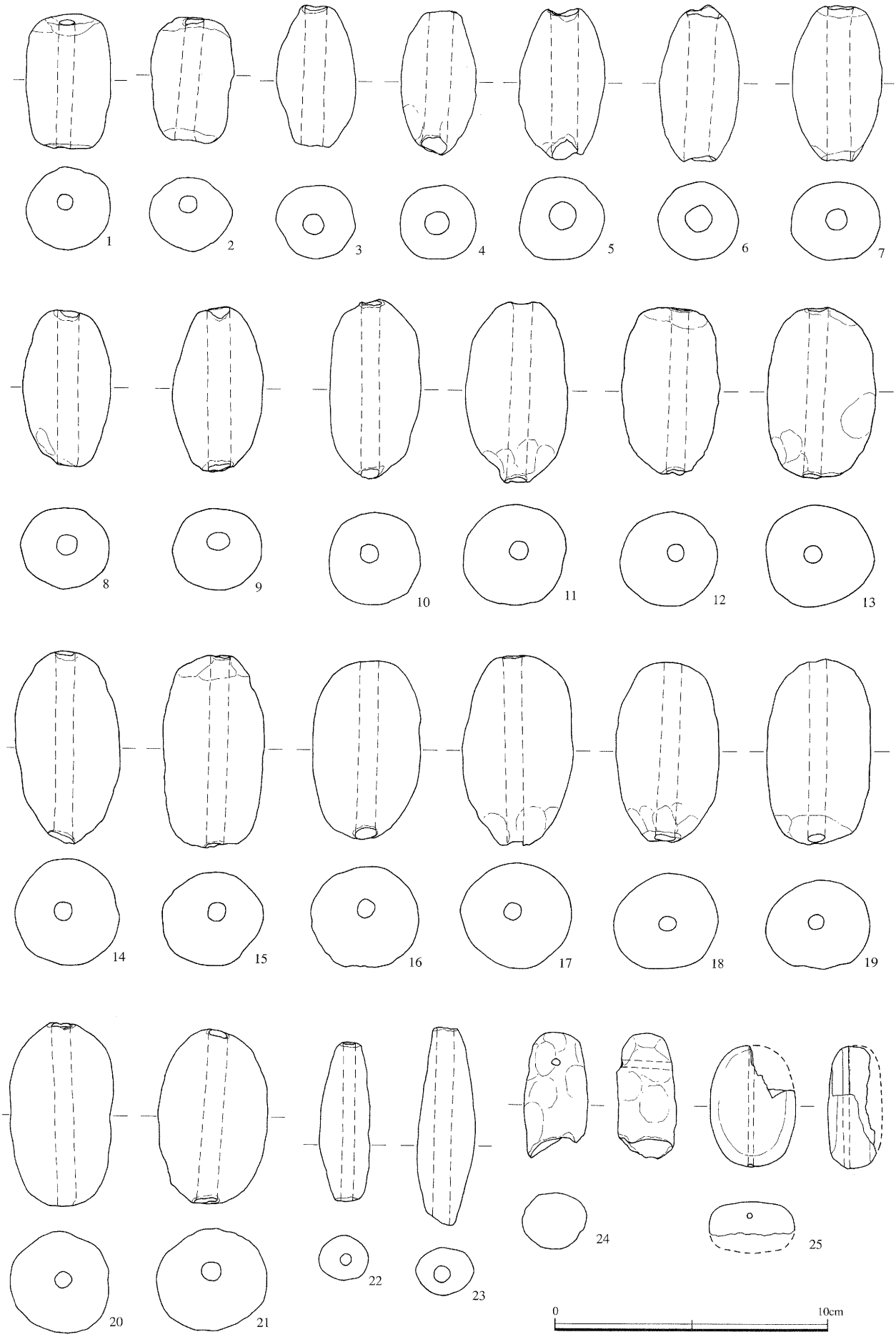
棒に粘土を巻き付け、引き抜いて作るのであるが、棒を抜かれた方の粘土がのびるため、指頭で整える。以上の成形によって、一方が丸く、もう一方がやや突出した形態になる。特別な調整は行わず、指で軽くナデる程度で仕上げる。重量は10が74ｇである以外は、81～105ｇで2類との間に56～80ｇがほとんどみられず、明確に分離されることになる。孔径は6～7mmで3類より小さい。下條氏分類の管状土錘Ⅱｃ類大型に属する。

4類；胴部中程で最大径となり端部が狭くなる細管状を呈するもの（22・23）

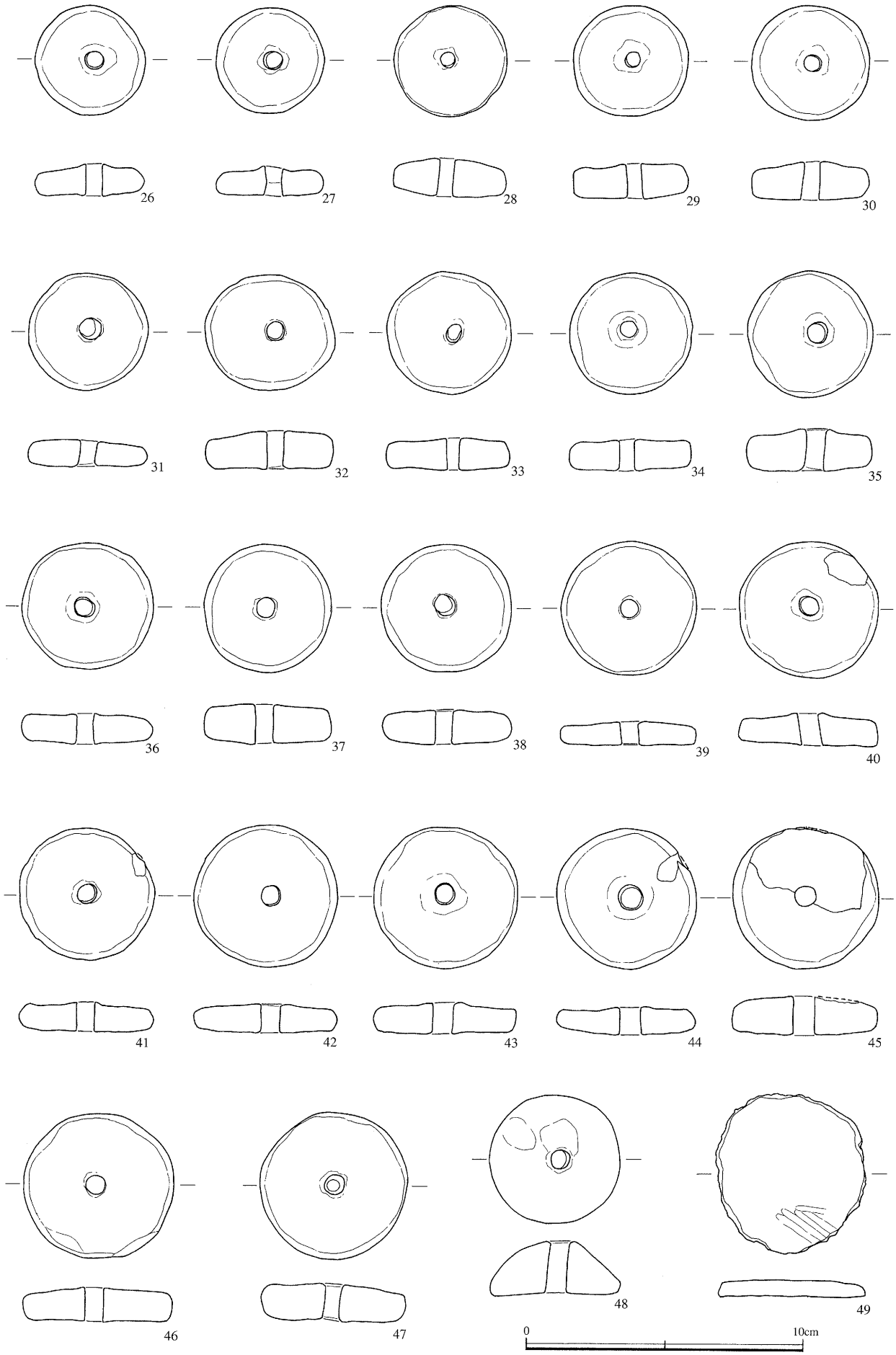
胎土は微量の粗砂を含むが、微細砂粒を主体とするもので、色調も褐灰～灰褐色を呈しており、1～3・5類とやや異なる。23下端は若干欠損する。下條氏分類の細管状土錘Ⅰａ類に属する。

5類；異形品（24・25）

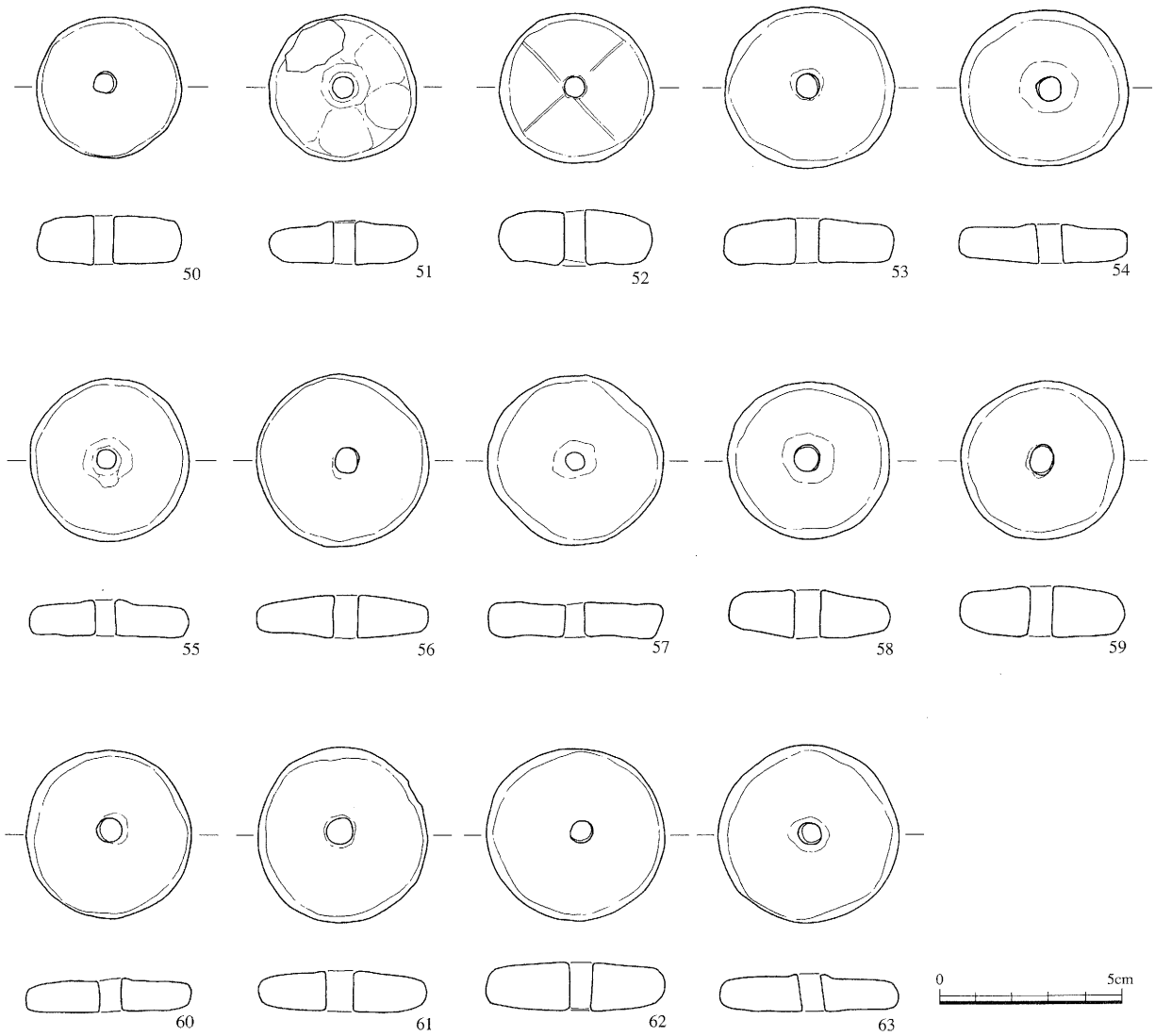
土錘でない可能性もある。24は手づくねにより棒状にしたもので、粗砂を著しく含む。2mm程度の孔を有する。下方は指頭でくぼませており、本来の形状を残すと考えられる。調整は摩滅のため不明。25は扁平な楕円形を呈し、1mm強の孔を有する。孔はかたよった位置に穿孔する。丁寧なナデ仕上げ。



第90図　土錘他


26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
10cm

第91図　紡錘車他（1）



第92図　紡錘車他（2）

（2）紡錘車等（第91図26～第92図63）　第91図は流路。0183出土品であり、弥生前期の資料である。第92図の4面直上、9層出土資料もその可能性が強い。胎土は多くの石英、長石からなる砂、粗砂を主体に若干のチャートを含むもので、在地産が主体である。やはり、土錘と同様に生駒西麓産胎土は皆無。

孔を穿つために棒を引き抜くのであるが、棒を抜かれた面の粘土がのびる場合が大半で、その面を上面として図示した。上面には指頭による成形・調整が面上の凹凸としてよく残る。下面は多くの場合、作業台上で成形したことによるのか平坦である。図化すれば不明瞭な場合も、実物をみれば上下面の識別は比較的容易である。特別な調整は行わず、指で軽くナデる程度で仕上げることが一般的である。直径は3.9～5.4cmにおさまり、48・49を除外して、36点中3cm代１点、4cm代27点、5cm以上8点である。

例外的な資料は以下のとおり。28は上下の区別がなく、両面・側面ともに丁寧なナデ仕上げ。32は上下面、側面ともヘラミガキ仕上げである。48は異形で今回調査で唯一の形態。上面が突出して山形を呈する。指で軽くナデる程度で仕上げる。49は土製円盤とすべきもので、甕体部の再

利用品。外面はナデで部分的にヘラミガキ、内面ナデ。外面煤付着し、周囲には付着しない。未報告中に数点の類似資料があるが、やはり穿孔はなされていない。52は上下の区別がつかない程度にナデ仕上げており、「×」状に線刻する。

第2-1表　土錘一覧

番　号	長さ(cm)	最大径(cm)	重量(g)	地　区	出土遺構	備　考
1	4.9	3.1	49.0	1ー O-22	流路0183	列1
2	4.6	3.0	38.8	1ー Q- 9	流路0183	
3	5.2	2.9	34.4	1ー I- 9	4面直上	
4	5.3	2.7	36.8	1ー Q- 9	流路0183	
5	5.6	3.1	43.1	1ー Q-19	流路0183	
6	5.8	3.5	39.4	1ー L-12	4面直上	
7	5.7	3.2	48.6	1ー H-10	4面直上	
8	5.7	3.2	54.7	1ー G-10	9層	
9	6.1	3.2	53.3	1ー G- 6	9層	
10	6.6	3.3	74.0	1ー I- 6	流路0183	
11	6.7	3.7	85.5	1ー O-20	流路0183	
12	6.2	3.6	81.6	1ー L-22	流路0183	
13	6.3	3.9	100.1	1ー P-10	流路0183	
14	7.1	3.9	104.4	1ー O-20	流路0183	
15	7.1	3.6	90.4	1ー N-22	流路0183	
16	6.6	3.9	99.7	1	流路0183	
17	7.0	4.0	102.6	1ー O-19	流路0183	
18	6.6	3.8	82.1	1ー O-18	流路0183	
19	6.8	3.7	91.7	1ー G-11	4面直上	
20	6.8	3.9	90.9	1ー I- 6	4面直上	
21	6.4	3.9	88.1	1ー L-13	8層	
22	5.9	1.8	16.8	1ー D-11	8層	
23	7.3	2.1	22.4	1ー Q-24	8層	先端欠損
24	4.6	2.3	20.8	1ー C- 9	9層	
25	4.5	3.1	18.8	1ー D-11	流路0183	欠損

第2-2表　紡錘車一覧

番　号	直径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	地　区	出土遺構	備　考
26	4.0	1.0	19.5	1ー S-13	流路0183	
27	3.9	0.9	17.9	1ー Q-18	流路0183	
28	4.1	1.3	25.4	1	流路0183上層	丁寧なナデ仕上げ
29	4.1	1.1	26.3	1ー 東区	流路0183	
30	4.2	1.2	28.8	1ー T-17	流路0183	
31	4.3	0.9	21.8	1ー N-22	流路0183	
32	4.6	1.3	33.6	1ー R-13	流路0183上層	「井」状ヘラミガキ
33	4.5	1.1	28.5	1ー L-21	流路0183	
34	4.4	1.0	27.6	1ー R-17	流路0183	
35	4.5	1.3	35.4	1ー Q-17	流路0183	
36	4.7	1.0	27.7	1ー S-13	流路0183	
37	4.6	1.3	36.6	1ー O-18	流路0183	
38	4.7	1.2	32.7	1ー O-20	流路0183	
39	4.9	0.9	23.5	1ー P-17	流路0183上層	
40	5.0	1.0	32.0	1ー S-17	流路0183	
41	4.8	0.9	27.7	1ー T-17	流路0183	
42	5.2	1.0	32.2	1ー 東区	流路0183	
43	5.2	1.0	32.4	1ー 東区	流路0183	
44	5.1	1.1	28.4	1ー 東区	流路0183	
45	5.3	1.4	39.0	1ー P-10	流路0183上層	表面剥離
46	5.4	1.1	40.4	1ー O-21	流路0183	
47	5.3	1.3	44.7	1ー N-21	流路0183	
48	4.6	2.0	37.6	1ー P-14	流路0183	
49	5.3～5.7	0.5	24.0	1ー L-21	流路0183	再利用、煤付着
50	4.0	1.3	27.5	1		
51	4.1	1.0	21.5	1ー R-12	溝0187上層	やや剥離
52	4.2	1.5	33.9	1ー Q-10	4面直上	「×」状ヘラ描き
53	4.8	1.2	32.1	1ー M-10	4面直上	
54	4.6	0.9	26.5	1ー N-12	4面直上	
55	4.5	0.9	23.1	1ー Q-16	4面直上	
56	4.8	1.1	30.0	1ー I- 6	4面直上	
57	4.8	0.9	26.5	1ー K-11	4面直上	
58	4.5	1.1	28.7	1ー F-15	9層	
59	4.5	1.3	34.6	1ー B-11	8～9層	
60	4.7	0.8	22.7	1ー M-17	8層	
61	4.9	1.1	30.8	1ー L-21	8～9層	
62	4.9	1.3	38.3	1ー E- 9	溝0308	
63	5.0	0.9	28.8	1ー N-14	土坑0272	

第3節　木器

多数の木器が出土しており、図化しうるものについては大部分を報告した。1～34（第93～97図）は流路0183出土で弥生前期に属する。樹種については、（財）元興寺文化財研究所による。木取りについては、断面図に示した。

鍬（第93図1～第94図10）　1は狭鍬未製品。他の広鍬よりも厚手である。両端が部分的に欠損。アカガシ亜属で、アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等（以下、同じ）である。2は1と同様に隆起側に内湾し、広鍬よりも厚手であることから狭鍬と考えられる。柄孔は垂直である。アカガシ亜属。3は広鍬未製品。隆起側に外湾する。アカガシ亜属。4～6は鍬隆起部分。柄孔は斜方向である。5は広鍬。いずれもアカガシ亜属。7は又鍬か？　隆起部が他の鍬よりも幅広である。破損が激しく、形態が判然としない。右側に三角形の突起がみられる。アカガシ亜属。8は広鍬。破損、磨耗が激しい。アカガシ亜属。9は広鍬。隆起の横に三角形の孔を有する。アカガシ亜属。10は広鍬の破損品の再利用と考えられる。三角形の孔を有し、側縁に頭部を意識したと考えられる段を有しキザミ3を入れる。アカガシ亜属。

鋤（第94図11～13）　11は組合せ鋤。頭部側側縁に突帯を削り出す。アカガシ亜属。12は鋤の破損品か？　アカガシ亜属。13は鋤未製品と考えられる。アカガシ亜属。

不明品（第94図14～第95図15）　14は横鍬、あるいは泥除未製品。表面は丁寧に仕上げられているが、裏面はくぼめてある。クスノキ。15は杵搗き部破片と考えられる。先端は丸く磨耗する。クヌギ節で、クヌギ、アベマキ等（以下、同じ）である。

斧柄（第95図16～19）　16・17は膝柄であり完存する。斧台部は幹部で芯持ちであり、握り部は枝部である。16の斧台先端は明確に二股に削り出しており特徴的であり、17も不明瞭ながら同様に二股に削り出していると考えられる。類例を知らない。16はイヌガヤ、17はヒノキ。18は斧台部は幹部で芯は除去しており、握り部は枝部である。握り部下部は欠損。握り部上部に突帯を削出しており、それに接して三角形の孔を穿つ。斧台先端に紐懸けを有する。クヌギ節。19は直柄未製品。装着孔の穿孔を残すのみであり、石斧は握りに対して斜方向に装着されると考えられる。アカガシ亜属。

椀（第95図20）　外面を仕上げ、内面を僅かにくぼめた段階の未製品。低部はややくぼめて安定させる。クスノキ。

高杯（第95図21）　表面の摩滅が著しい未製品。ヤマグワ。

椀（第96図22・23）　22は斧で全面成形した段階の未製品で、最終的な仕上げを残す。クスノキ。23は約半分を欠損する。脚部を有する。ヤマグワ。

容器（第96図24）　破損の著しい容器で、23と同形態の脚部を有すると考えられる。タラノキ。

横杓子（第96図25・26）　25は柄部を大きく欠損する。身部は厚みがあり、未製品の可能性も有る。ヤマグワ。26は柄部先端を若干欠損する。芯持ち材である。イヌガヤ。

弓（第96図29）　一木で枝部を丁寧に除去したもので、11ヵ所に桜皮巻きが残り、黒漆を塗る。

図の上から5番目の桜皮のみ幅が広い。弭部は湾曲した円錐形であり、内湾面には漆が付着するに対して、外湾面には付着しておらず弦の装着によると考えられる。イヌガヤ。

腰掛（第97図30・31）　いずれも表面の摩滅が著しい。形態の類似のみならず、脚部下で芯を除去する用材方法も同じ。クスノキ。

不明品（第97図32～34）　32は芯持ち材の両端を加工する。スダジイ。33は小口面に鋸歯状のキザミを入れる。クスノキ。34はアカガシ亜属。

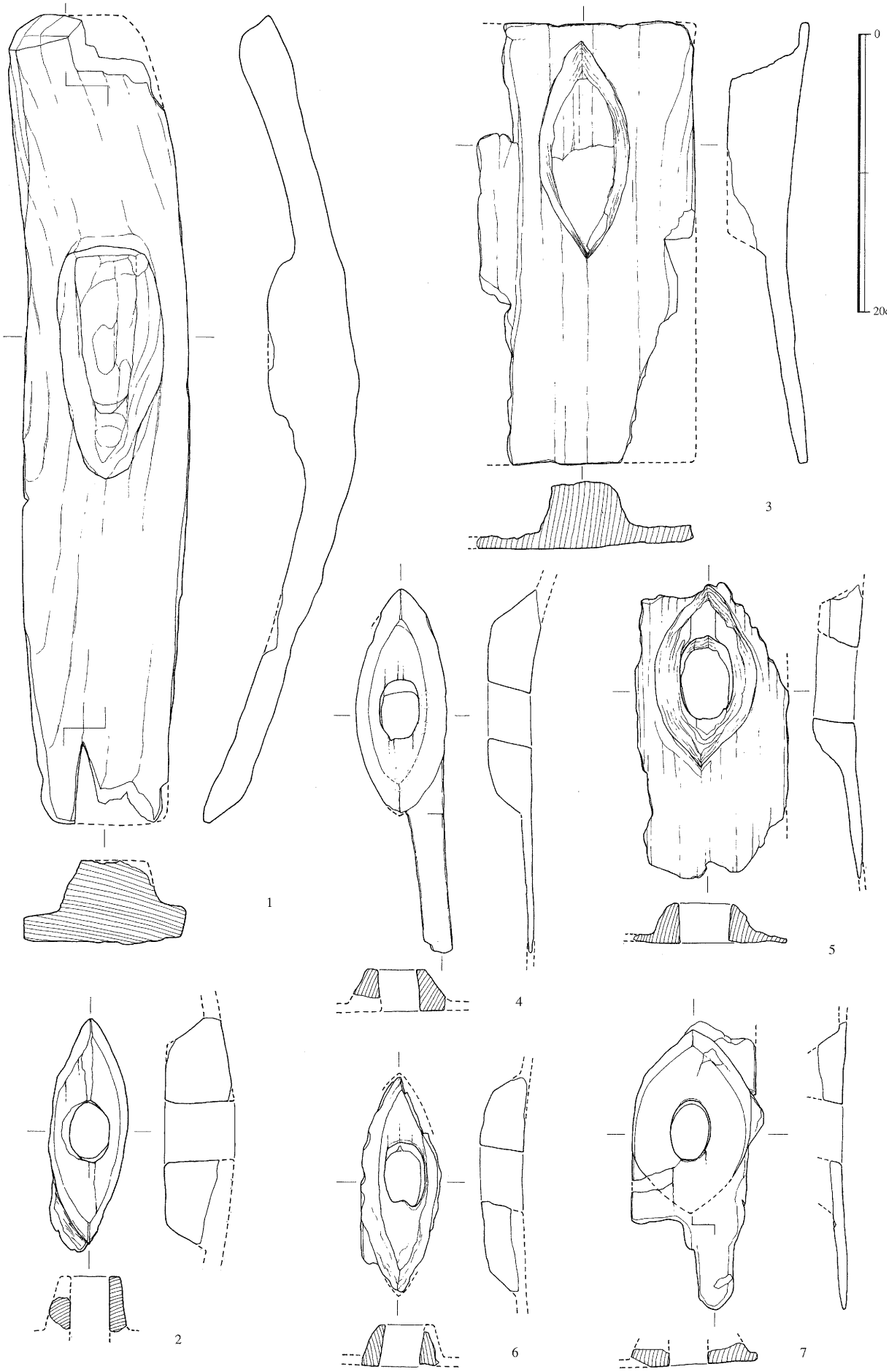
不明品（第98図35）　15は横鍬、あるいは泥除未製品。摩滅、破損が著しい。裏面はややくぼめてある。4面出土。クスノキ。

小型臼状木器（第98図36・37）　いずれも芯持ち材で摩滅、破損が著しく、形態は不明。36は4面ピット345出土、37は8層出土。いずれもクスノキ。

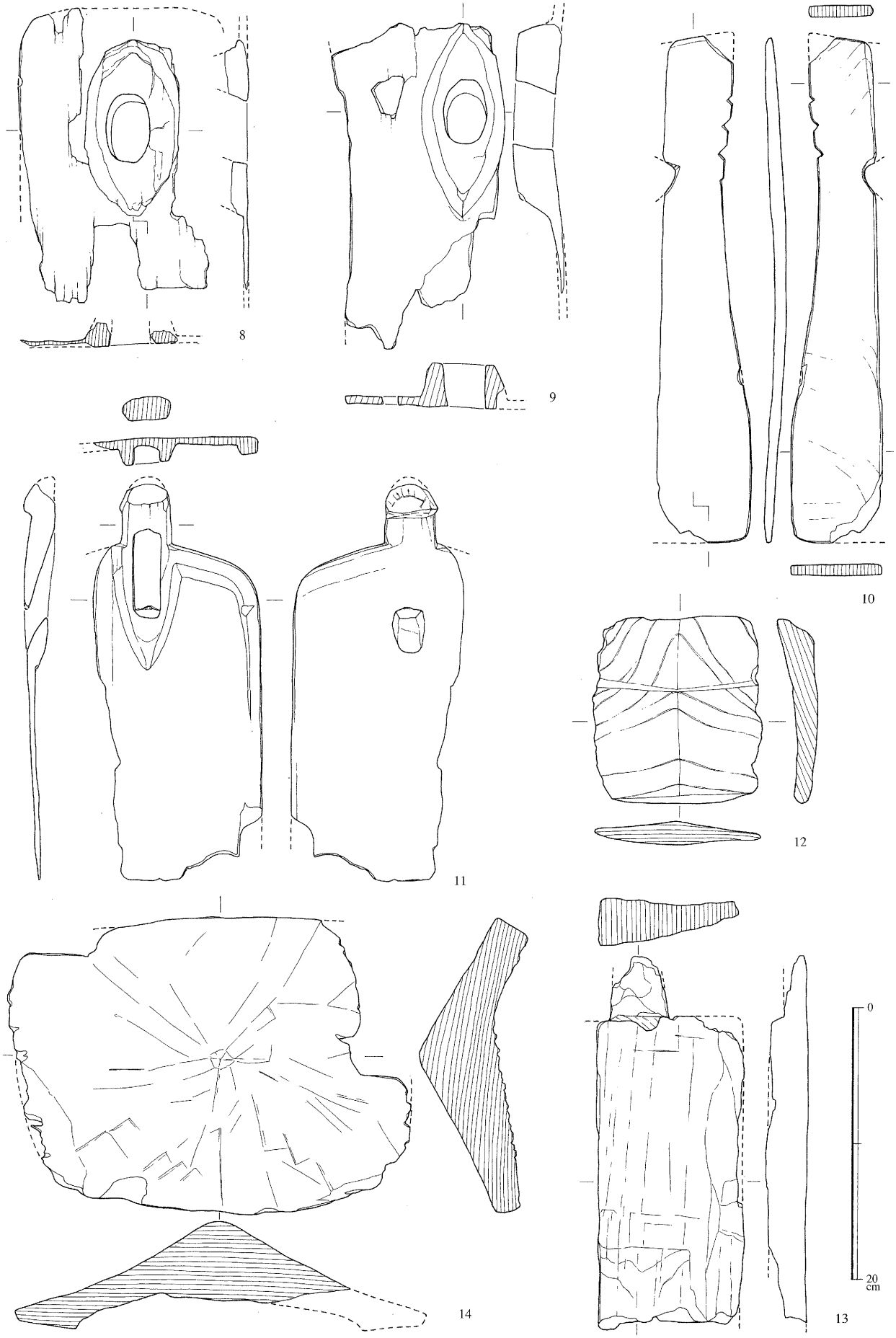
不明品（第98図38～43）　38がほぼ全形を残す。一端を丸くし、一端を断面方形に削出す。断面はレンズ状を呈する。4面直上出土。いずれもヒノキ。

不明品（第98図44・45）　44は一端両側縁にエグリを有し、一端を欠損する。4面直上出土。ヒノキ科であり、ヒノキ、アスナロ、サワラ、ネズコ等である。45は側縁にエグリを有す。布留期後半のＳＤ301出土。ヒノキ。

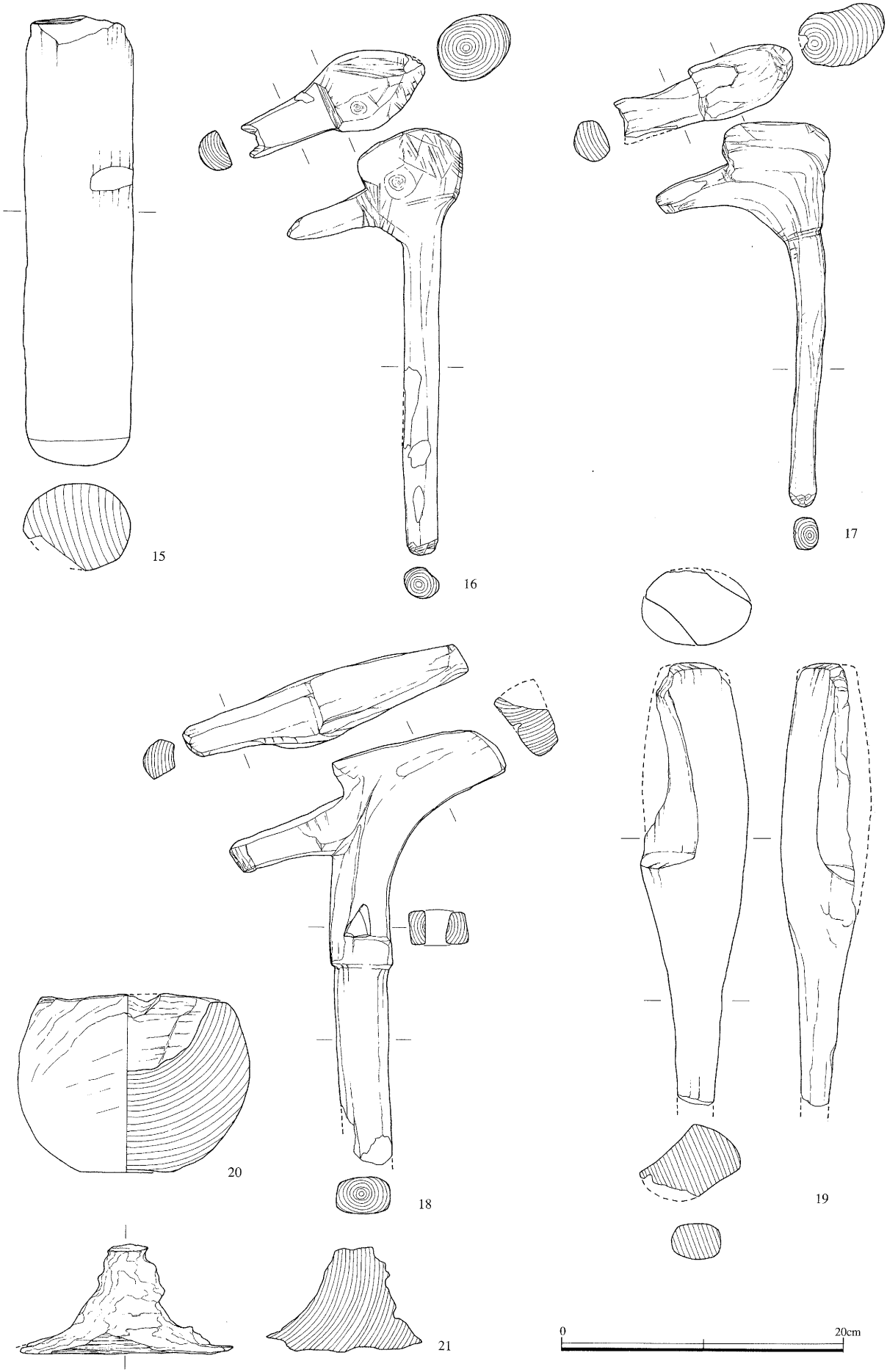
田下駄枠（第98図46）　一端を欠損する。方形の孔9が残存する。9層出土。樹種はあて材のため不明。あて材は樹木の日陰側、または山地斜面のもので根本が湾曲している部分などで、正常材と比べて構造が著しく異なる。



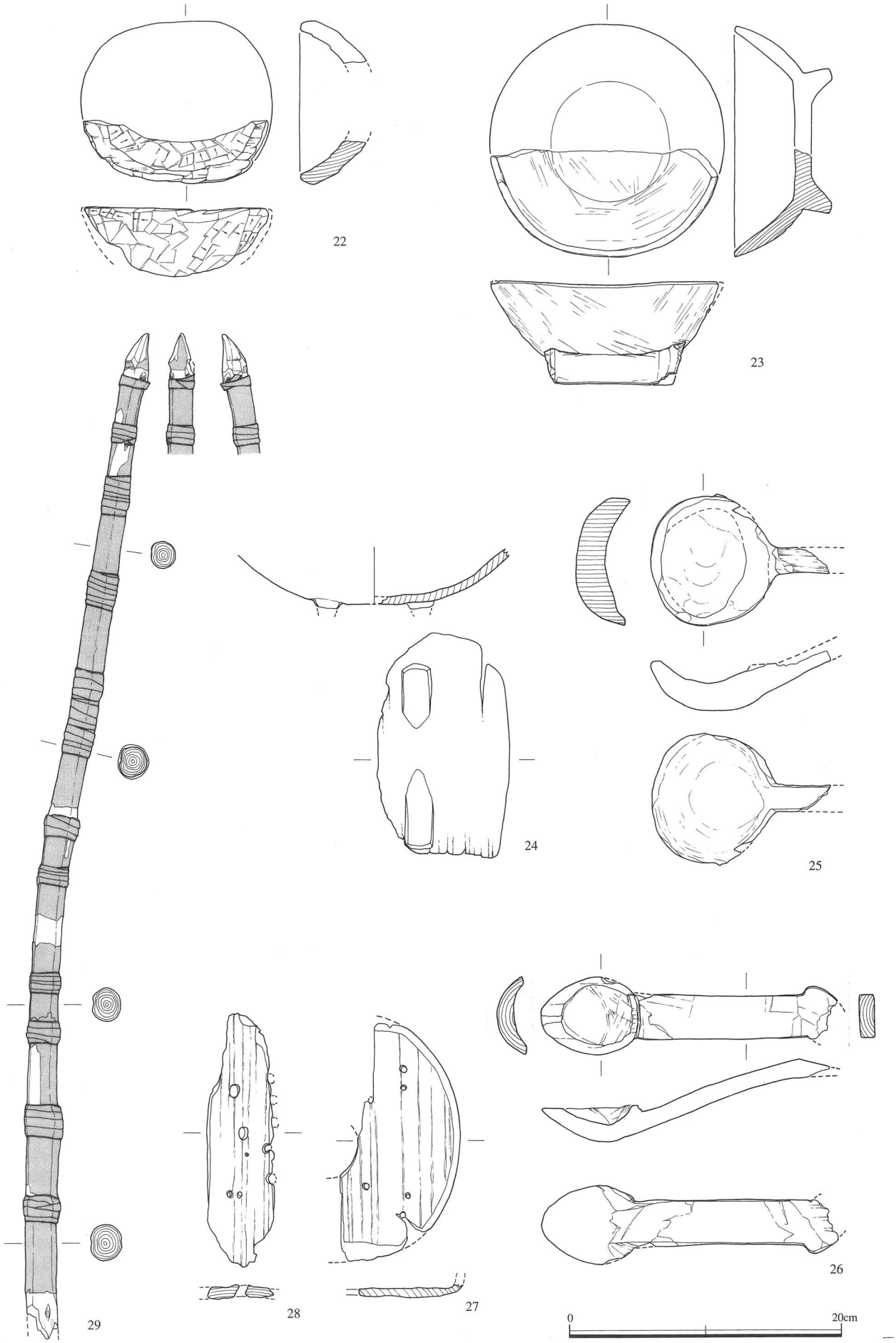
第93図　流路0183出土木器（1）



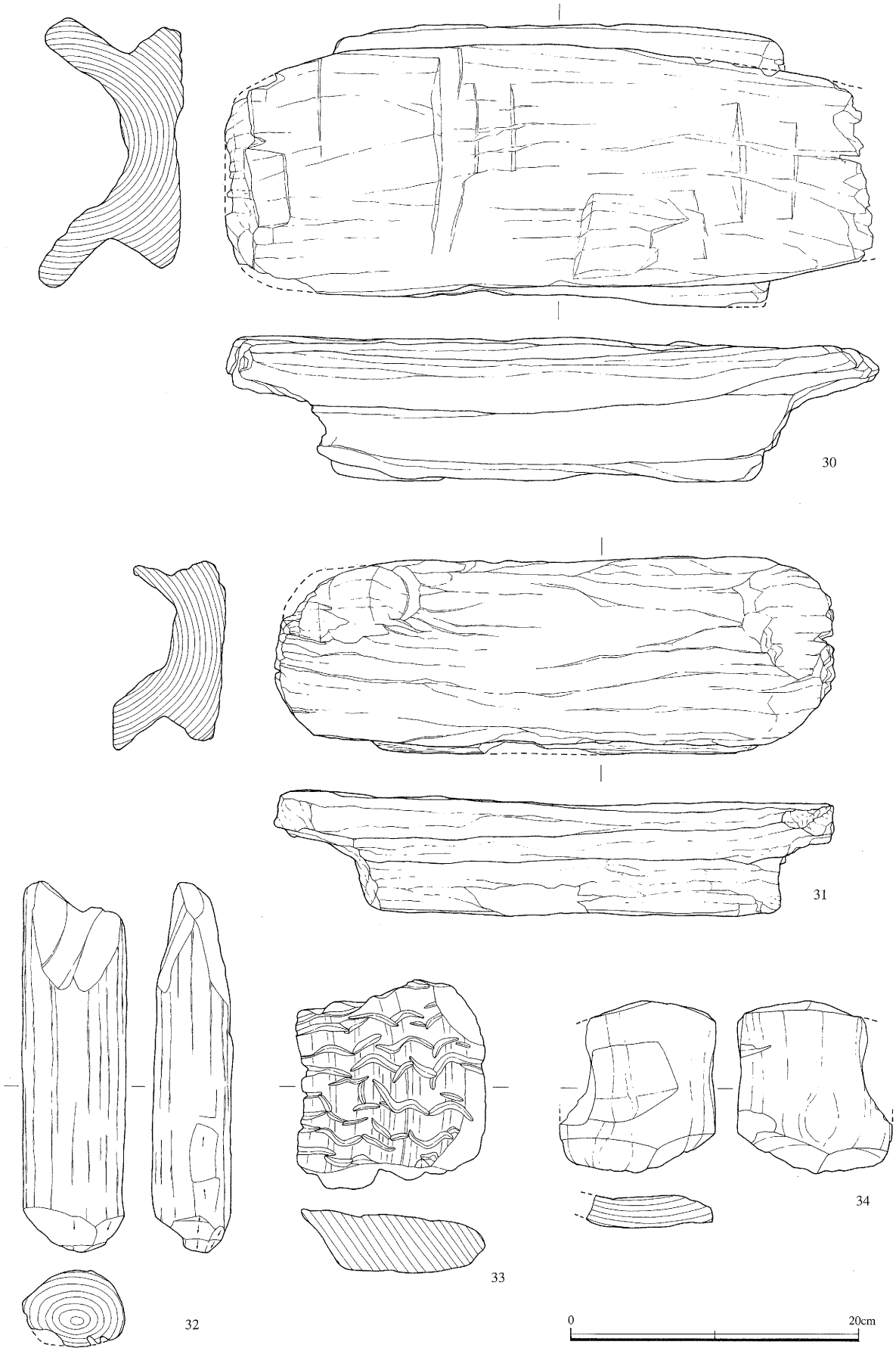
第94図 流路0183出土木器（2）



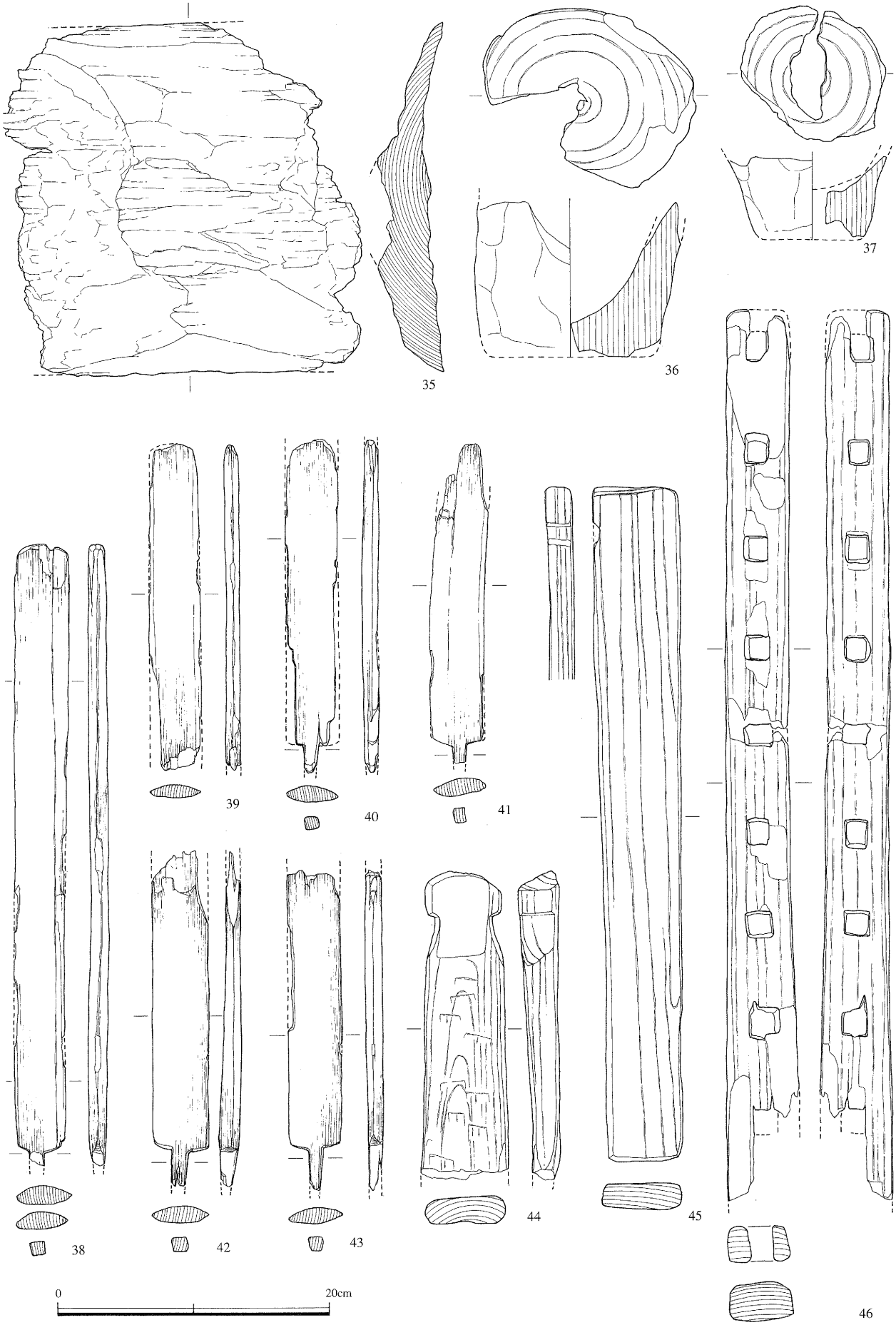
第95図　流路0183出土木器（3）



第96図　流路0183出土木器（4）



第97図　流路0183出土木器（5）



第98図　その他出土木器

第４節　石器

多数の石器が出土しており石庖丁、打製大型石庖丁、打製石鏃、石斧類は大部分を、叩き石、砥石は半数以上を図化した。いわゆる「サヌカイト」については、石鏃、石錐は大部分を図化し得たが削器、くさび形石器は一部に止まり、二次加工ある剥片、使用痕ある剥片石材については報告しえていない。また、多量であることと時期の認定が難しいことの理由から、統計処理は全く行っていない。

今回出土した土器は弥生前期と中期中頃に限定できる。石器の時期も石庖丁、打製大型石庖丁、打製石鏃、石斧類および一部の叩き石については、石材と形態から区別が比較的容易である。すなわち、石材では灰白色系を呈する安山岩、流紋岩石材の資料は弥生前期と認定できると考えられる。しかし「サヌカイト」については、弥生中期遺構に前期土器が混入する場合があるので、弥生前期の遺構からの出土品であるか、金山産石材である場合以外は時期の特定が難しい。なお石材については、第8章に報告した奥田尚氏の分析による。

石庖丁（第99図1～5）　石庖丁、素材およびそれらの可能性のある資料は25点である。弥生前期と中期のものがある。図面の左あるいは上にA面、右あるいは下にB面を示し記述した。片刃の場合、刃鎬のある方をA面、その裏をB面。両刃の場合は明確な基準はないが、片刃の場合にB面に光沢や紐穴上方への紐擦れ痕の著しい場合が多いことから、それに合わせた。

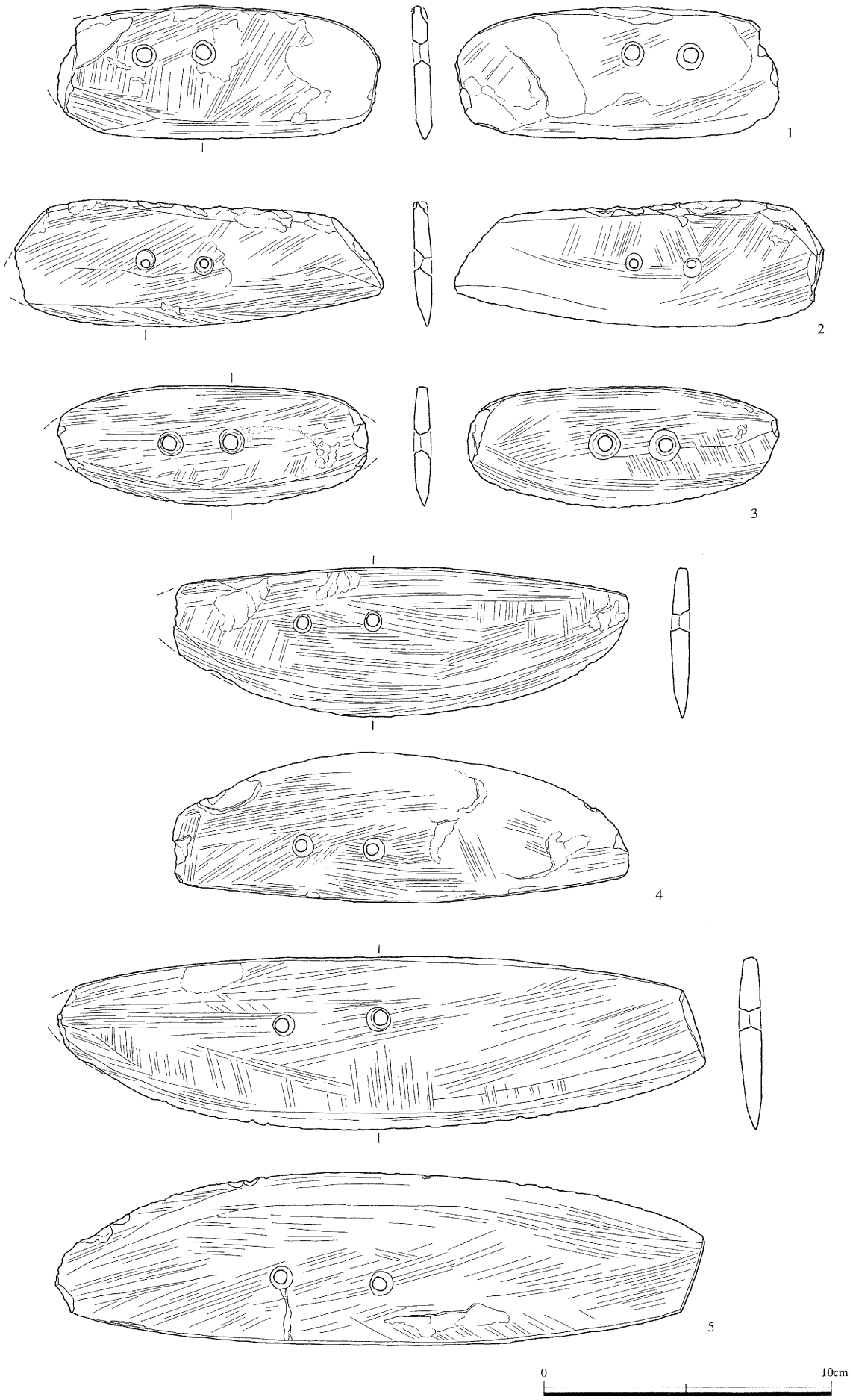
１は８層出土、２～５は４面検出の土坑0319に重ね置かれて出土した。いずれも輝石安山岩Aで灰白色系を呈する。1は両刃。体部右半（A面の場合）が薄くなり、その部分では研磨が疎で、両面の研磨面下には剥離面が残存し、素材本来の厚みがわかる。紐穴は素材の厚い部分に穿孔する。研磨痕はA面が明瞭、B面は磨耗でほとんど残らず光沢を帯びる。2～5は片刃。いずれの紐穴もほとんど磨耗しておらず、使用されたにしてもごく僅かで、本来の寸法・形態に極めて近いと考えられる。2は背部に成形時の打撃痕が鋸歯状に残り、直行する背潰れ痕、最終的に横方向の研磨を施す。研磨痕はA面が明瞭、B面の殊に刃部にはほとんど残らない。3は研磨痕はA面が明瞭、B面の刃部にはほとんど残らない。紐穴内に穿孔時のドリル条痕が明瞭に残るも、B面紐穴上方の条痕はやや磨耗しており、若干の使用はなされたことがわかる。4・5は研磨痕はA面が明瞭、B面の殊に刃部にはほとんど残らない。紐穴内に使用による摩滅は認められない。

石庖丁（第100図6）　９層出土。輝石安山岩Bで灰白色系を呈する。片刃として図化したが、部分的に両刃となり、本来の刃部形態は摩滅のために不明。側縁は刃部の一部を残すのみで、破損と磨耗が著しい。

石庖丁（第100図7・8）　７は９層、８は４面直上出土。流紋岩Aで灰白色系を呈する。７は両刃。非常に粗い研磨痕であり、A面側に示した面には二次的な研磨が認められる。８は両刃。研磨痕は体部が非常に粗く、刃部は細かい。

石庖丁（第100図9）　８層出土。輝石安山岩Cで灰色系を呈する。片刃。B面は研磨でツルツル。

石庖丁（第100図10～14）　10は８層、11～14は９層出土。玄武岩質凝灰岩質点紋片岩で青灰緑



第99図　石器（1）

色を呈する。三波川帯からの搬入。10は両面の一部と上側縁に研磨が残る。11は片刃。紐穴周辺に敲打痕、両面と上側縁に研磨が残る。B面刃部に左斜上方への使用による条痕が残る。12は両刃。両面と上側縁に研磨が残る。13は片刃。側縁付近の細片。14は片刃。A面右は折れの後に側縁に研磨。

石庖丁（第100図15～17）　15は布留期の溝0187に混入、16は８層、17は３面直上出土。玄武岩質凝灰岩質片岩A（15・16）、同B（17）で灰緑色を呈する。三波川帯からの搬入。15は両刃気味片刃。A面は条痕の残る粗い研磨、B面は刃部と体部一連の細かな研磨。上側縁は横方向研磨。16は両刃。厚みがある。上側縁は横方向研磨。17は両刃。刃部は両面とも横方向に研磨する。上側縁は横方向研磨。

石庖丁（第100図18）　Q12区出土。泥質ホルンフェルスで黒灰色を呈する。両刃。石鎌の可能性もある。表面は大部分剥離するが、一部残存する部位は黒色で緻密な研磨である。

打製石庖丁（第101図19）　弥生前期の土坑0320出土。輝石安山岩Dで、肉眼観察では金山産と考えられる。A面右は折れ。刃部に両面から連続した二次加工がみられる。上側縁には研磨を施す。

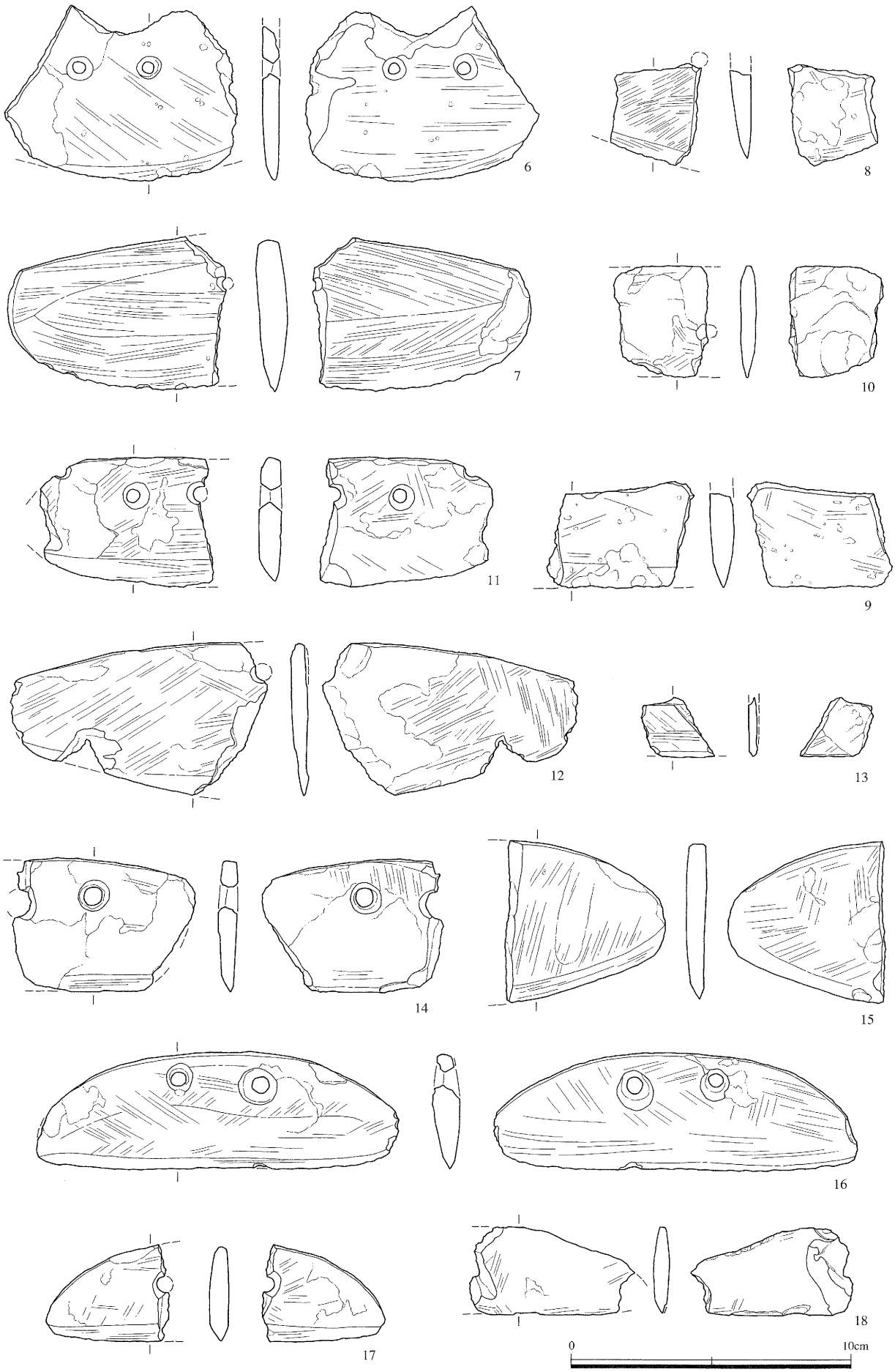
石庖丁（第101図20～23）　20は9層、21は8層、22は4面直上、23は弥生前期の流路0183下層出土。20・21が輝石安山岩E、22が同F、23が同Aであり、いずれも灰白色系を呈する。20は外湾刃石庖丁の未製品と考えられる。A面左は折れ。上側縁に直交する背潰れ痕がみられる。21は外湾刃石庖丁の可能性がある。全面磨耗が著しい。22は石庖丁未製品か？　A面は自然面、B面は剥離面である。刃部と左上側縁に両面から加工を施し、後に両面を部分的に研磨したもの。右上側縁に直交する背潰れ痕がみられ、それと対応するように右刃部側面が磨耗する。23は石庖丁素材か？扁平な自然礫で、若干の研磨がみられる。左側縁はやや欠損。

不明品（第101図24）　4面直上出土。泥質点紋片岩。右は欠損。石庖丁未製品、あるいは石棒の砕片の可能性が想定できる。

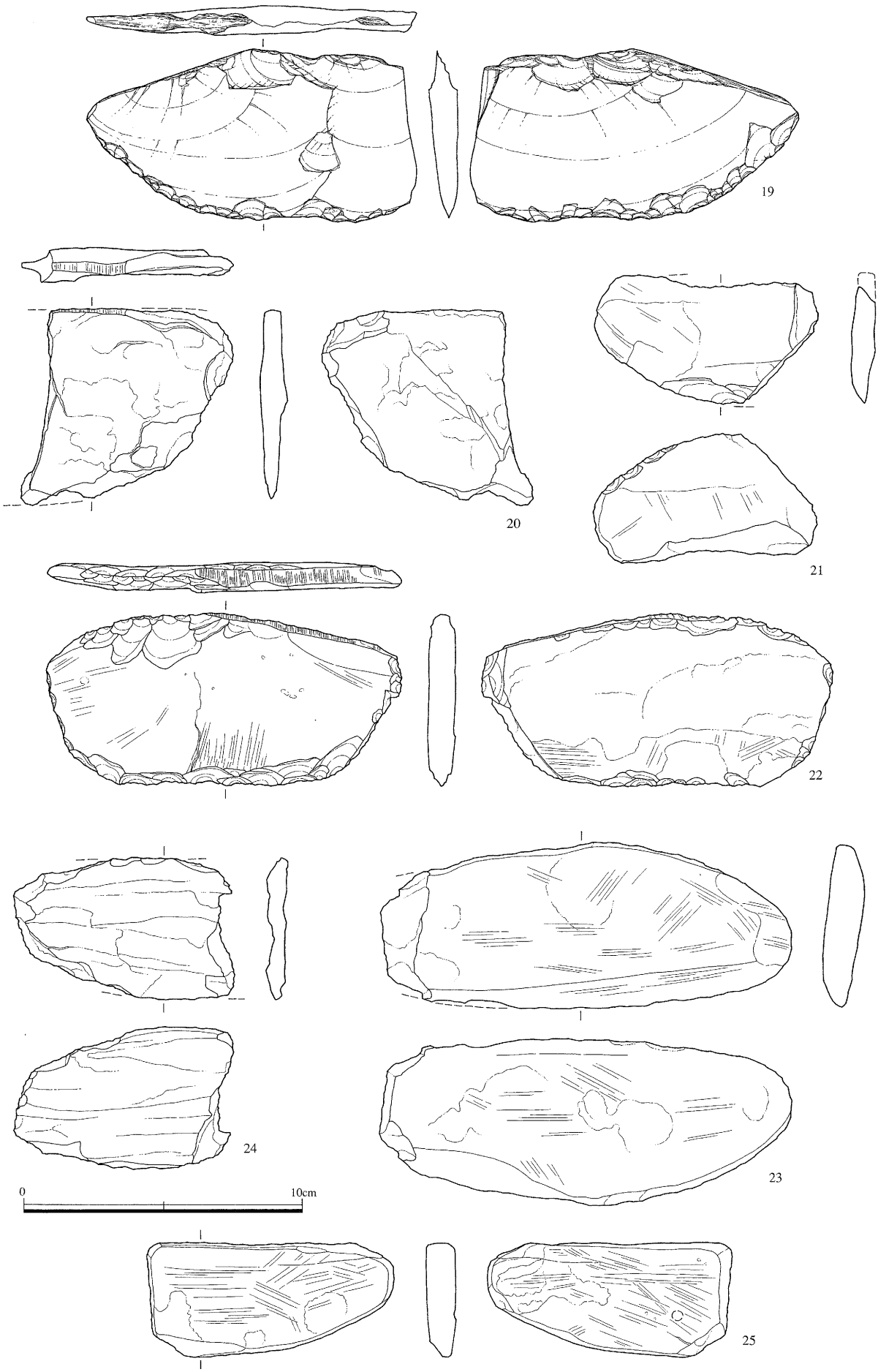
不明品（第101図25）　9層出土。扁平な自然礫で、研磨がみられる。

大型打製石庖丁（第102図26・27）　26は土坑0400、27は9層出土。輝石安山岩A、同Fで灰白色系を呈する。斎野氏の「大型直縁刃石器」であり、上側縁に肩部を有する。26はＡ面（背面）中央は自然面。刃部に両面から連続した二次加工がみられる。上側縁にも加工を施し、肩部を整える。なお、Ａ面では刃部周辺、B面では刃部周辺から体部中ほどにかけて、使用による著しい光沢面が認められる。27はＡ面中央は自然面。刃部に連続した二次加工がみられる。周囲にも部分的に加工を施し、形を整える。肩部上側縁には石庖丁と同様の直交する背潰れ痕がみられ、その部分が特に磨耗している。なお、26ほどではないが両面の刃部周辺に使用による光沢面が認められる。

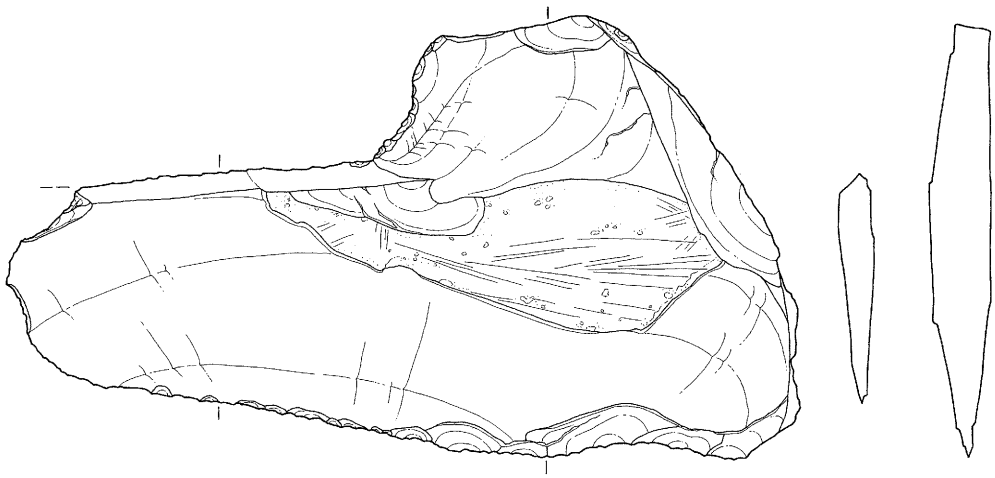
大型打製石庖丁（第103図28・29）　両者とも弥生前期の流路0183出土。輝石安山岩B、同Eで灰色、灰白色系を呈する。斎野氏の「大型直縁刃石器」である。28はＡ面に自然面を残す。刃部に



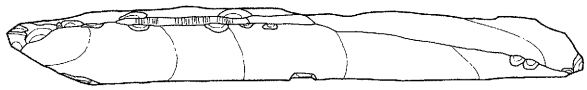
第100図　石器（2）

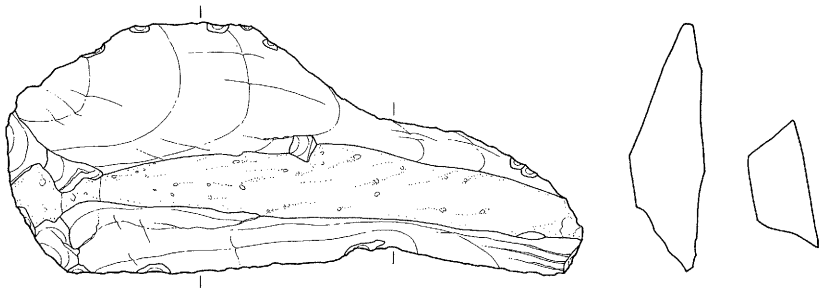


第101図　石器（3）



26





27

0 10cm

第102図　石器（4）

両面から連続した二次加工、右側縁にA面からの二次加工がみられる。刃部中央から右半は使用によって著しく摩滅しており、断面は丸くなる。26・27にみられたような光沢面の形成は認められない。29はA面右半と左側縁は自然面。刃部右半はB面から、左半はA面からの二次加工がみられる。頂部にも加工を施し、形を整える。B面刃部付近がやや摩滅するようにもみえるが、やはり26・27ほどではない。

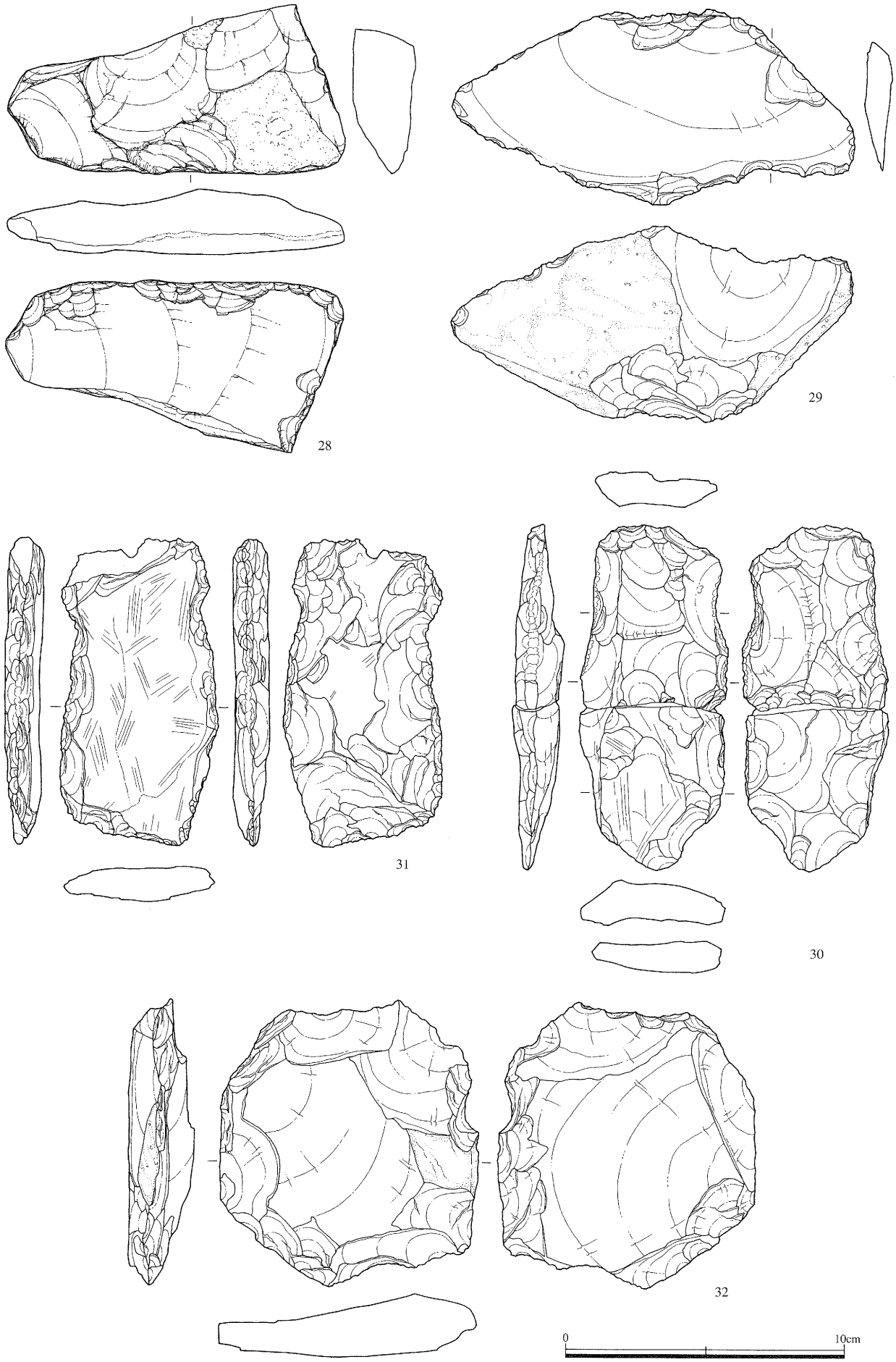
打製石鍬（第103図30～第104図36）　明確に打製石鍬と認定できるものの他に、可能性のあるものを含んでいる。32・36が流路0183出土で弥生前期と認定できる以外は、30・34が9層、31・35が8層、33が布留期の土坑0426出土である。30・33・34・36が輝石安山岩A、31・32が同E、35が同Gでいずれも灰色～灰白色系を呈する。

30は基部がP12区、刃部側がM15区で出土し接合した。基部側破損面に破損後の打撃が若干観察できる以外に再利用はなされておらず、ほぼ完存する。基部側両側縁に敲打調整を施して抉り状になり、磨耗も著しい。刃部側は磨耗によりトロトロの状況で、表面側には使用による縦方向の顕著な条痕がみられる。31の基部側は破損する。表面は自然面。基部側両側縁に敲打調整を施して抉り状になるも、磨耗はしていない。使用を示す刃部側の磨耗や条痕もみられない。32は左右側縁と右表面に自然面を残し、裏面中央は主要剥離面である。使用を示す磨耗や条痕はみられないが、石材から石鍬破損品の可能性を想定して掲載した。33は基部側両側縁に敲打調整を施した部分で基部、刃部は欠損する。30と比較してかなり大型になる。表面上半は自然面。自然面およびその下の剥離面に使用による縦方向の細かな条痕がみられる。34は基部。板状節理の著しい素材で、表裏面ともに節理面を大きく残す。上側縁は自然面。両側縁は両面から二次加工を施し、敲打調整はみられない。表面に縦方向の細かな条痕がみられる。35は表面下方に自然面を残す。表面に縦方向の細かな条痕がみられるとともに、石材から石鍬表面側の破損品と想定した。36は基部と想定した。上側縁は自然面で、右側の両面からの二次加工を側縁の敲打調整と考える。板状節理の著しい素材で、表裏面ともに自然面を残す。使用を示す磨耗や条痕はみられないが、石材から石鍬破損品の可能性を想定した。

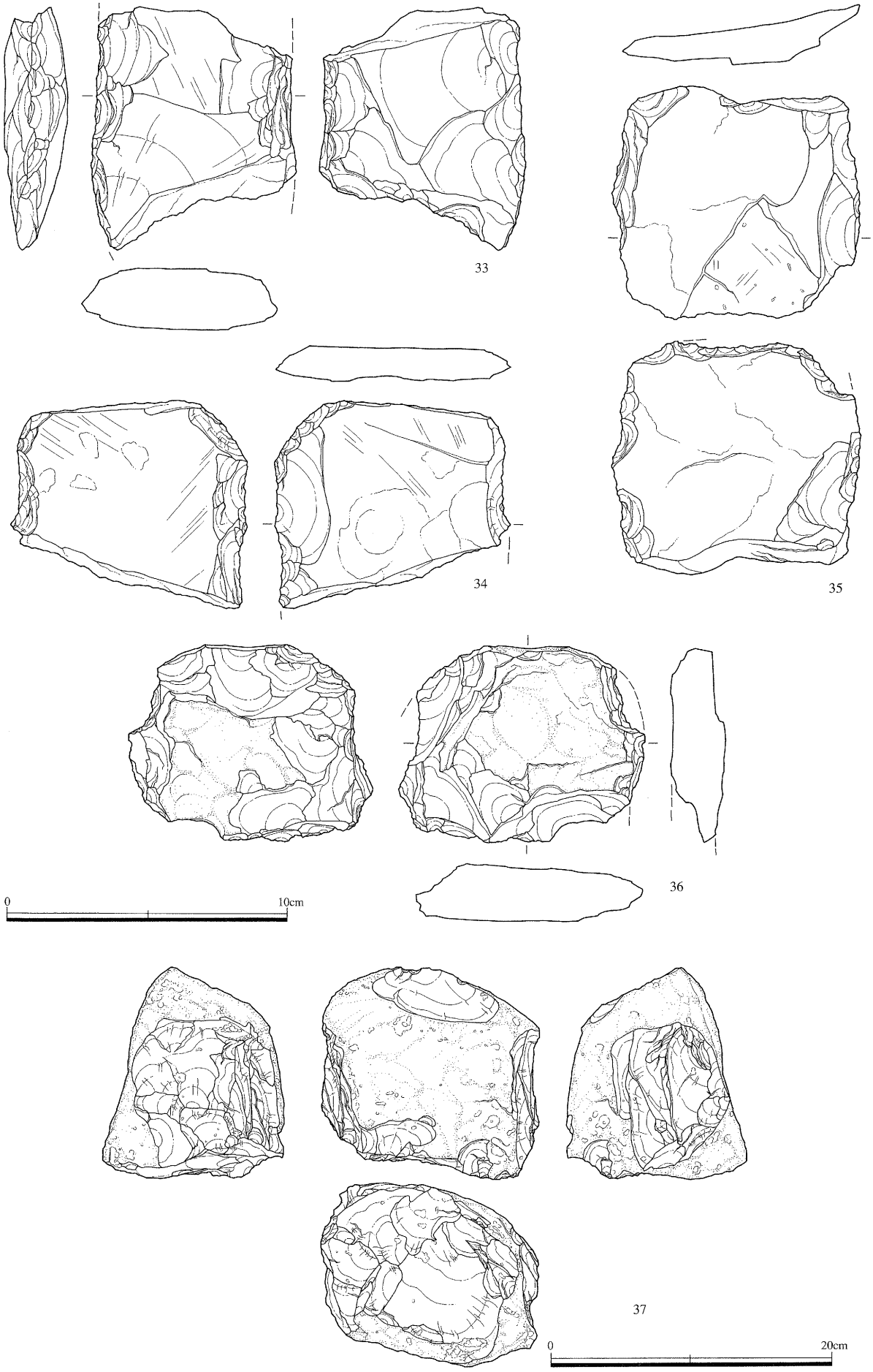
石核（第104図37）　布留期の溝0187出土。石英安山岩Aで灰白色系を呈する。人頭大の自然礫であり、剥片剥離作業前の打面調整がみられる。

伐採斧（第105図38～40）　38は弥生前期流路0183の中層、40は同下層、39がC12～F15地区出土。38が輝緑岩B、39が玄武岩質火山礫凝灰岩、40がひん岩Aである。38は刃部が欠損する。また、欠損部周囲がやや摩滅し、若干の再利用がなされたことがわかる。39は縄文的な刃部破損品。40は基部と刃部が欠損。外面煤付着。破面はシャープ。

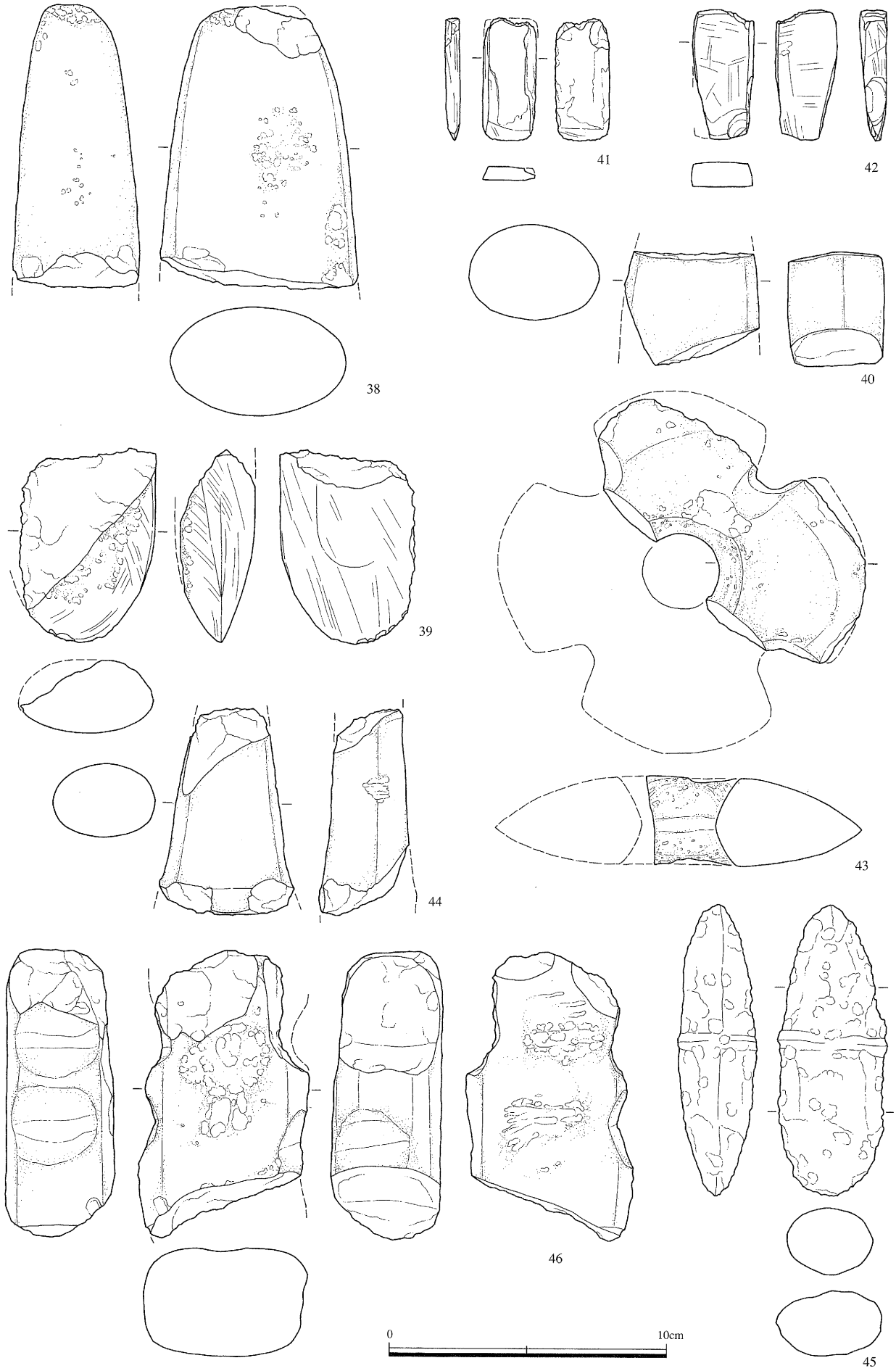
加工斧（第105図41・42）　41が8・9層、42がP13区10層出土。41が泥質ホルンフェルスB、42が石英安山岩質溶結凝灰岩。41は両刃気味片刃。部分的に破損するも全形はわかる。B面（前主面）のみ自然面、A面（後主面）と側面は研磨。42は片刃ながら、先端部に1mm程度の面を有する。表面は灰白色縞状、破面は黒色の特徴的な素材。A面左刃部が欠損する。



第103図　石器（5）



第104図　石器（6）



第105図　石器（7）

多頭石斧（第105図43）　土坑0228出土。蛇紋岩あるいは輝緑岩。約1/2の破損品で、突出部4を復元できる。抉りは明瞭。表面研磨で使用に関わる痕跡は確認できない。円孔内面稜部分が磨耗しており、柄に装着されたと考えられる。断面形態での刃部を結ぶラインは偏っており、前後が意識されて装着がなされたのであろうが、明らかにし難い。

独鈷石？（第105図44）　弥生前期の流路0183出土。細粒砂岩A。縦方向に図示したが、下部側面で屈曲が変化しており、平坦面を形成する。

石斧？（第105図45）　弥生前期の流路0183中層出土。輝緑岩A。全面敲打のみで、研磨はみられない。中央部を巡る突帯は石理であるが、これが偶発的か、意図的なのか不明。

異形石斧（第105図46・第106図47）　46は4面直上、47は弥生前期の土坑0340出土。46は中粒砂岩A、47は流紋岩B。46は上下欠損。側面３ヶ所に抉りが残る。表裏面の窪みは敲打によるもので、本来は47と同様に二段の抉りを意図したと考えられる。47は下部欠損。両側面、表裏面に二段の抉りを入れる。抉り部分は軽い研磨を施す。

石斧（第106図48）　弥生前期の流路0183出土。斑糲岩。伐採斧の刃部側欠損。破損部側を叩き石として再利用する。

敲石（第106図49～第107図54）　棒状自然礫の両端に敲打痕のある敲石。49・52が弥生前期の流路0183下層、54が弥生前期の土坑0339、他が8～9層出土である。49はアプライト質黒雲母花崗岩、50・51・53・54が中粒砂岩B、52は粗粒砂岩。石材は、いずれも遺跡周辺で採取可能。50は体部稜線上2ヶ所に、51は1ヶ所にも敲打痕がみられる。

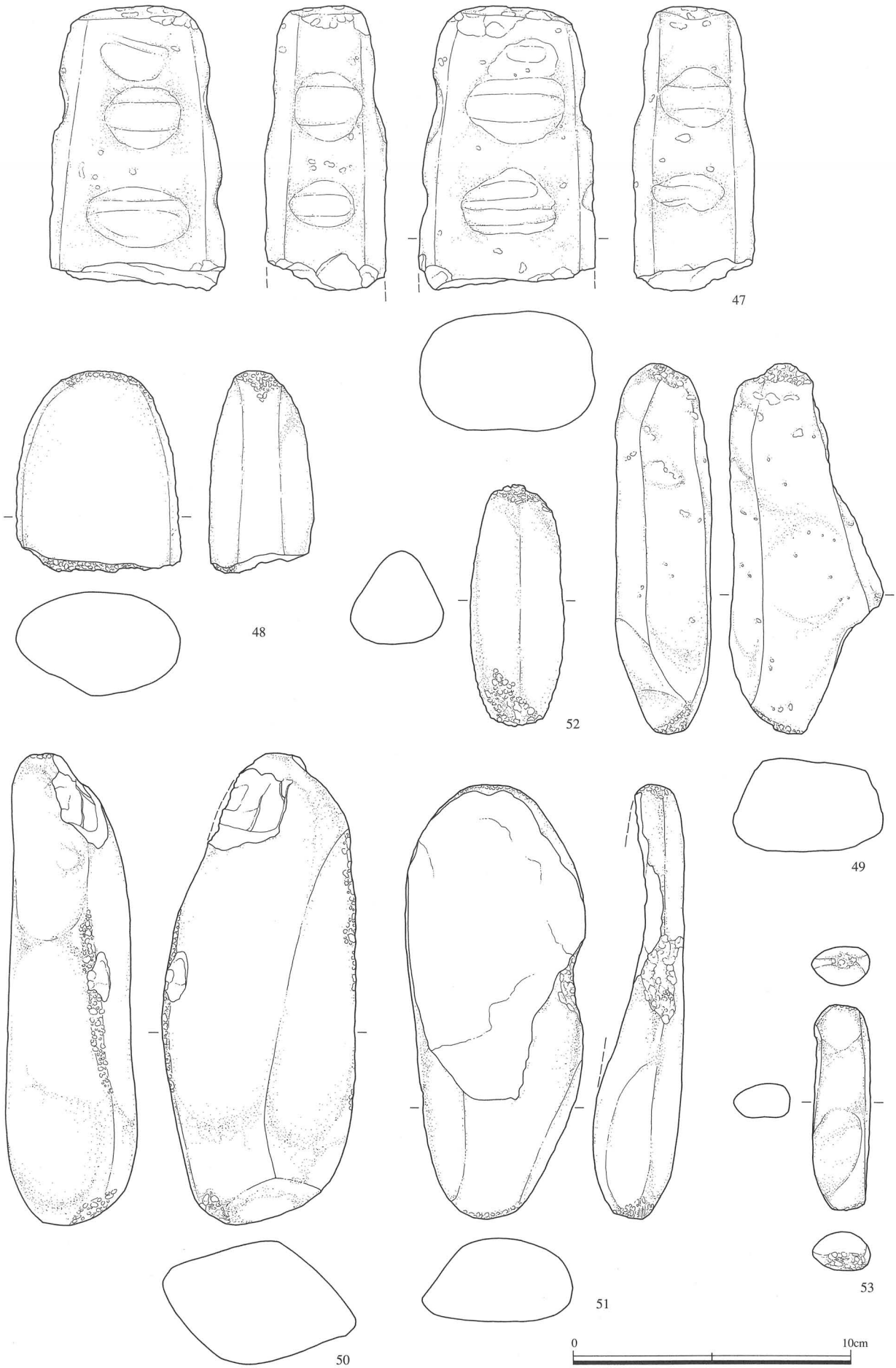
敲石（第107図55～59）　棒状自然礫の下端等に敲打痕のある敲石。55が弥生前期の流路0183下層、58が布留期の溝0301上層、56・57が8層、59が4面直上出土である。55～57・59が中粒砂岩B、58はひん岩B。58以外は遺跡周辺で採取可能である。55・56は体部稜線上にも敲打痕がみられる。59は上下が破損し、周囲4ヶ所に敲打痕がみられる。

敲石（第107図60）　自然礫の敲石。弥生前期の流路0183中層出土。流紋岩C。強い敲打に使用され、使用中に破損して廃棄されたと考えられる。

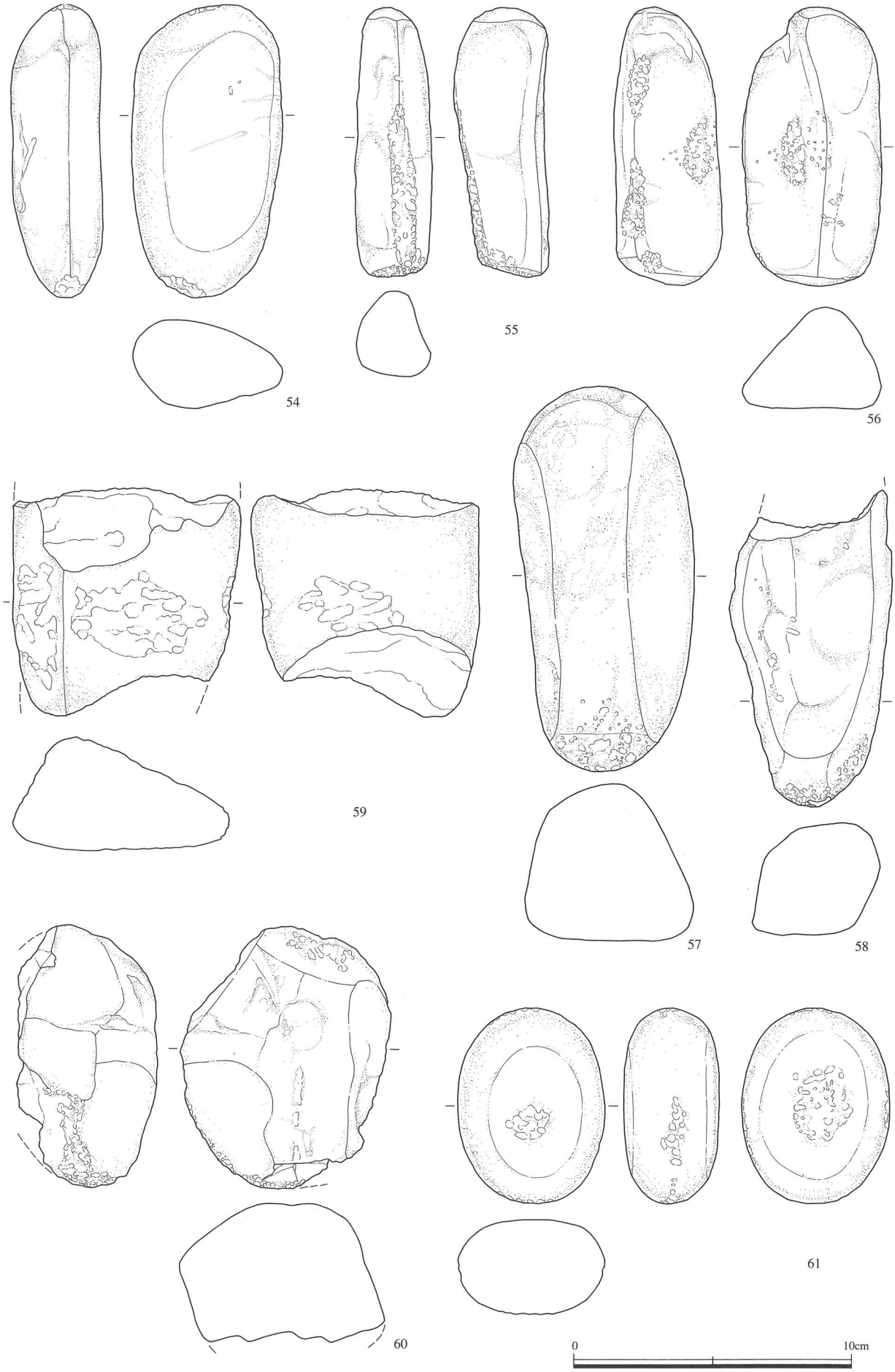
敲石（第107図61～第108図66）　扁平な楕円形、あるいは球形の敲石。61・62・65・66が弥生前期の流路0183、63・64が4面直上出土である。61・62が中粒砂岩A、63が流紋岩C、64が流紋岩D、65が輝石安山岩H、66が流紋岩質溶結凝灰岩。61は扁平面が僅かにくぼむ。62・66は扁平面が僅かにくぼみ、周囲も敲打痕が残る。いずれも周囲も敲打痕は長軸部分が著しい。63は球形であり、満遍なく敲打痕が残る。64はやや扁平で、周囲に敲打痕が残る。65はやや球形で、部分的に敲打痕が残る。

敲石（第109図67）　9層出土。石英安山岩Bで灰白色系を呈する。扁平な自然礫の側縁に両面から連続した二次加工を施し刃部にする。刃部は敲打によって潰れている。

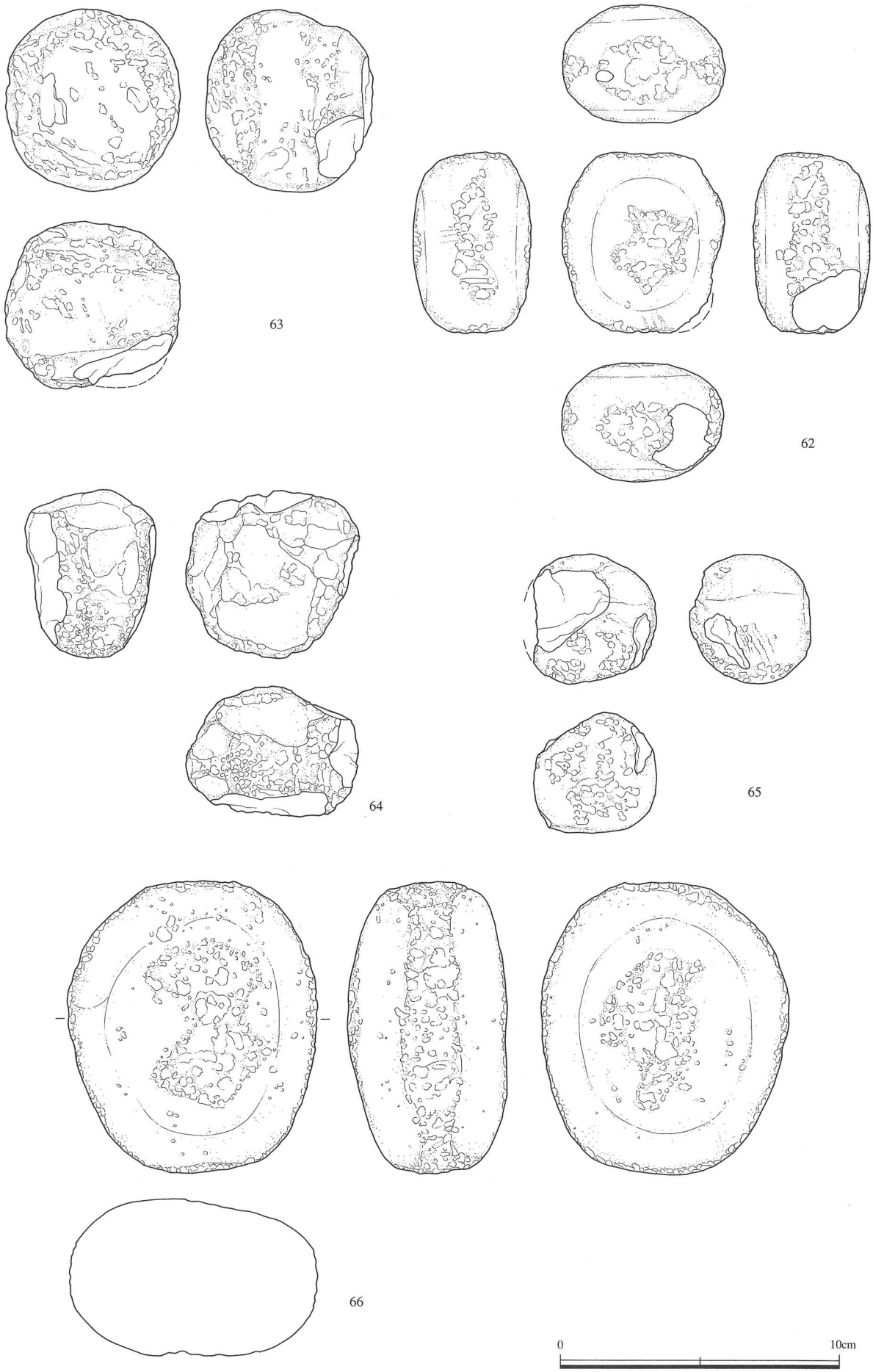
敲石（第109図68～71）　加工により敲石としたもの。68が弥生前期の流路0183、69が4面直上、70・71が9層出土。68が輝石安山岩I、69・70が輝石安山岩J、71が流紋岩D。68と69・70はいわゆ



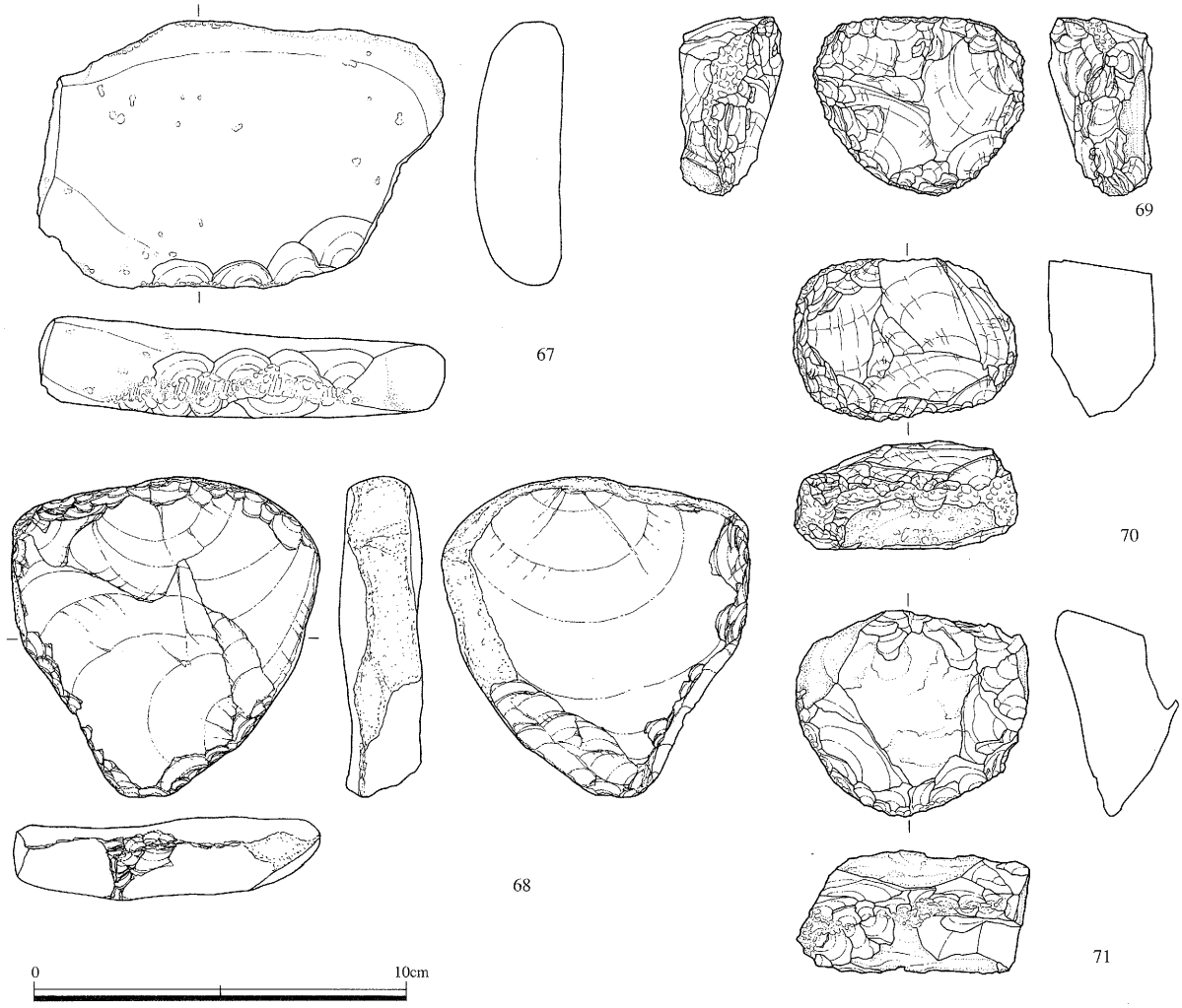
第106図　石器（8）



第107図　石器（9）



第108図　石器（１０）



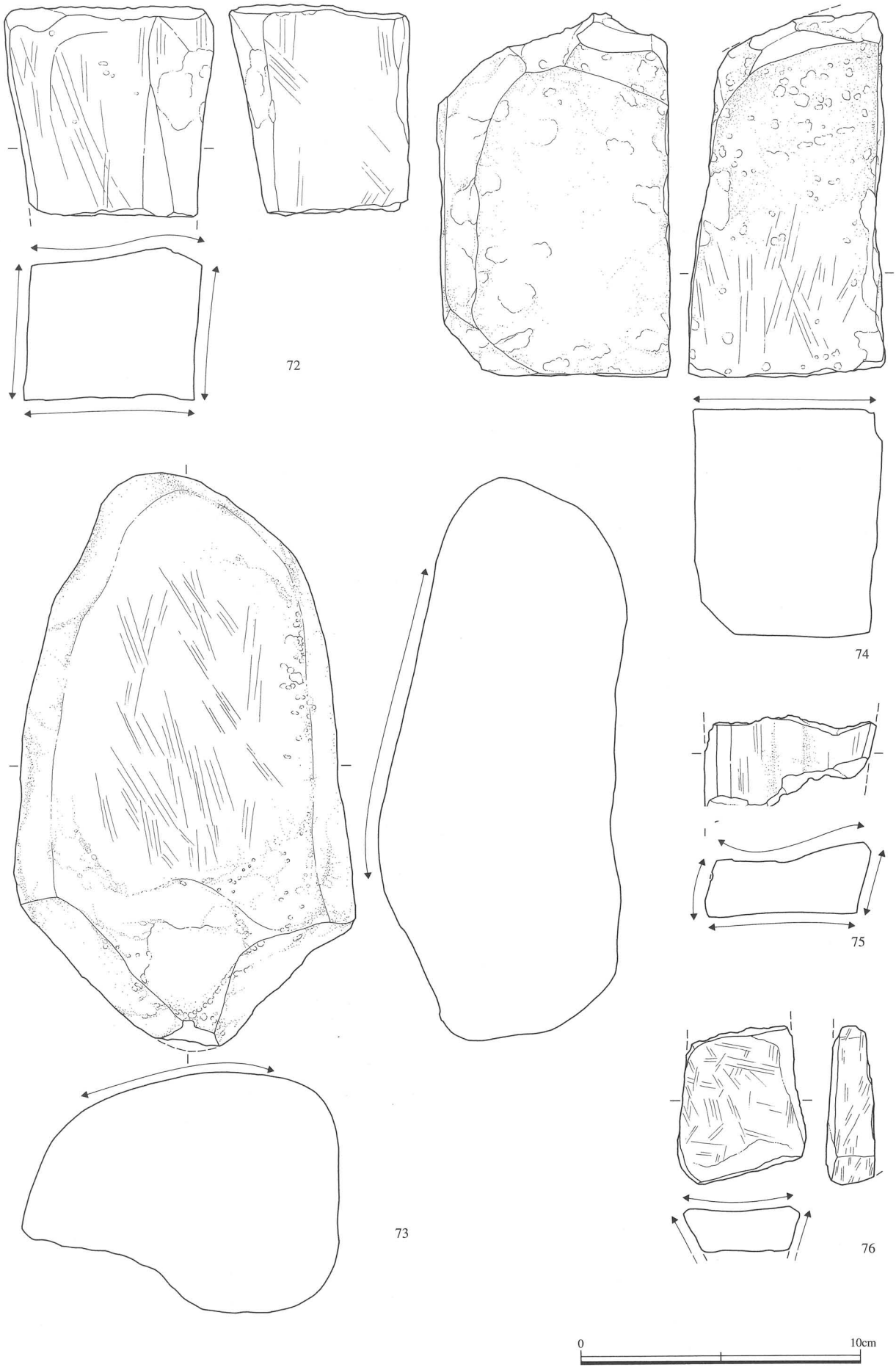
第109図　石器（１１）

るサヌカイトであり、前者が金山産、後者が二上山産と考えられる。68は石核の転用の可能性がある。周囲に二次加工を施し、下端は使用により潰れる。69～71は頂部に平坦面を有し、断面クサビ形の刃部を形成したもの。

砥石（第110図72～第112図87）　弥生前期の遺構から出土したのは、73・74が流路0183、76は土坑0339で、それ以外の所属時期は確定できない。なお86が溝0187、87は溝0301下層で布留期の遺構である。73・78・79・83・87は、ほとんど加工することなく自然礫の一部を砥石として使用する。76は被熱している。77の上面は非常に細かい砥ぎ面だが、両側面は極めて粗い条痕がみられる。79～84の石材は流紋岩で、きめの細かい砥石である。

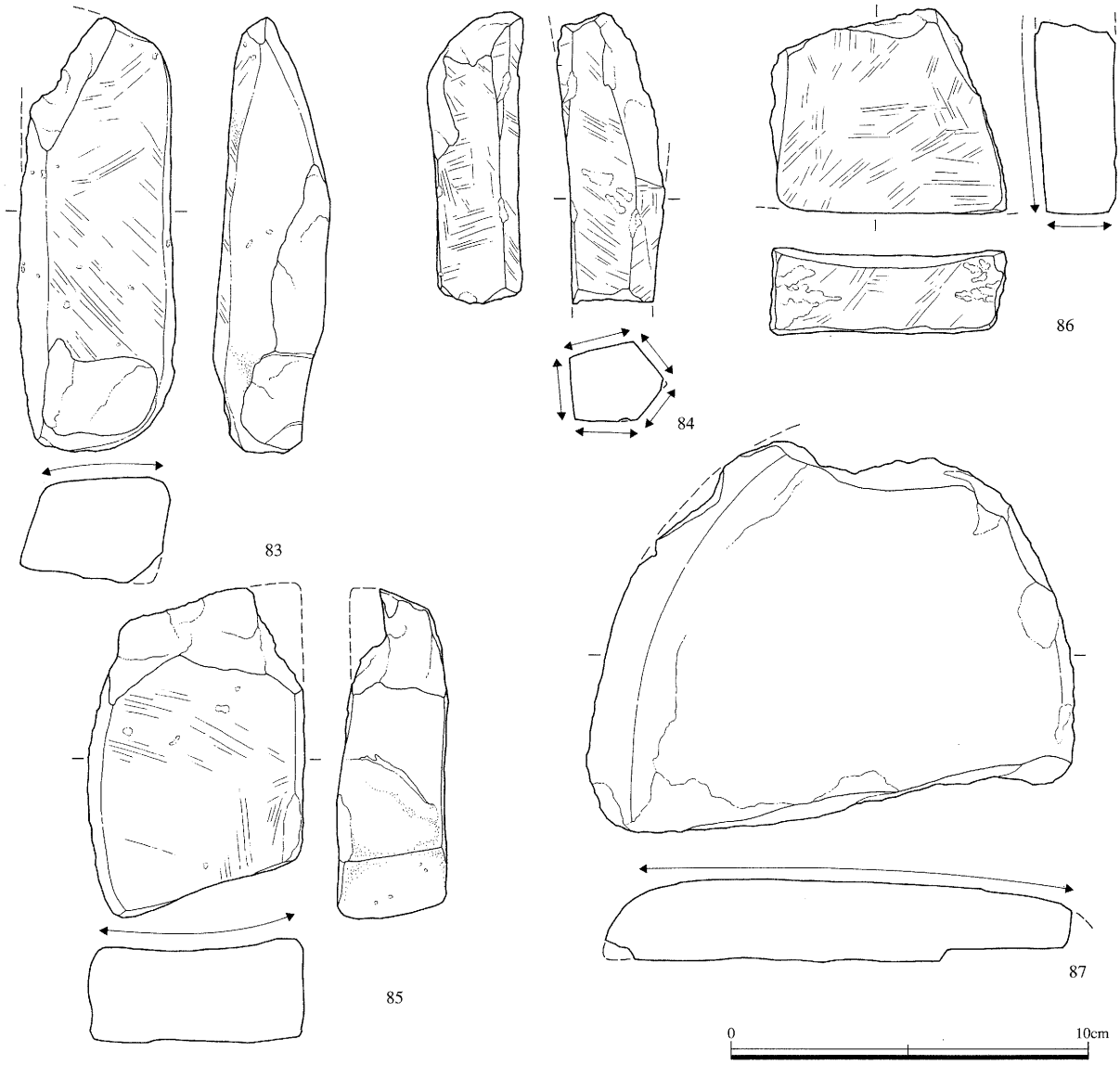
石鏃（第113図88～102）　いわゆるサヌカイト製であり、肉眼観察によるが88・90・99が金山産と考えるが、それ以外は不明。小型凹基式（88～91）、有茎式（92～101）のほか、尖頭器（102）がある。

石鏃未製品（第113図103～第114図110）　いわゆるサヌカイト製であり、肉眼観察によるが104・109は金山産と考える。103が凹基式あるいは平基式、他は有茎式と考えられる。



第110図　石器（12）

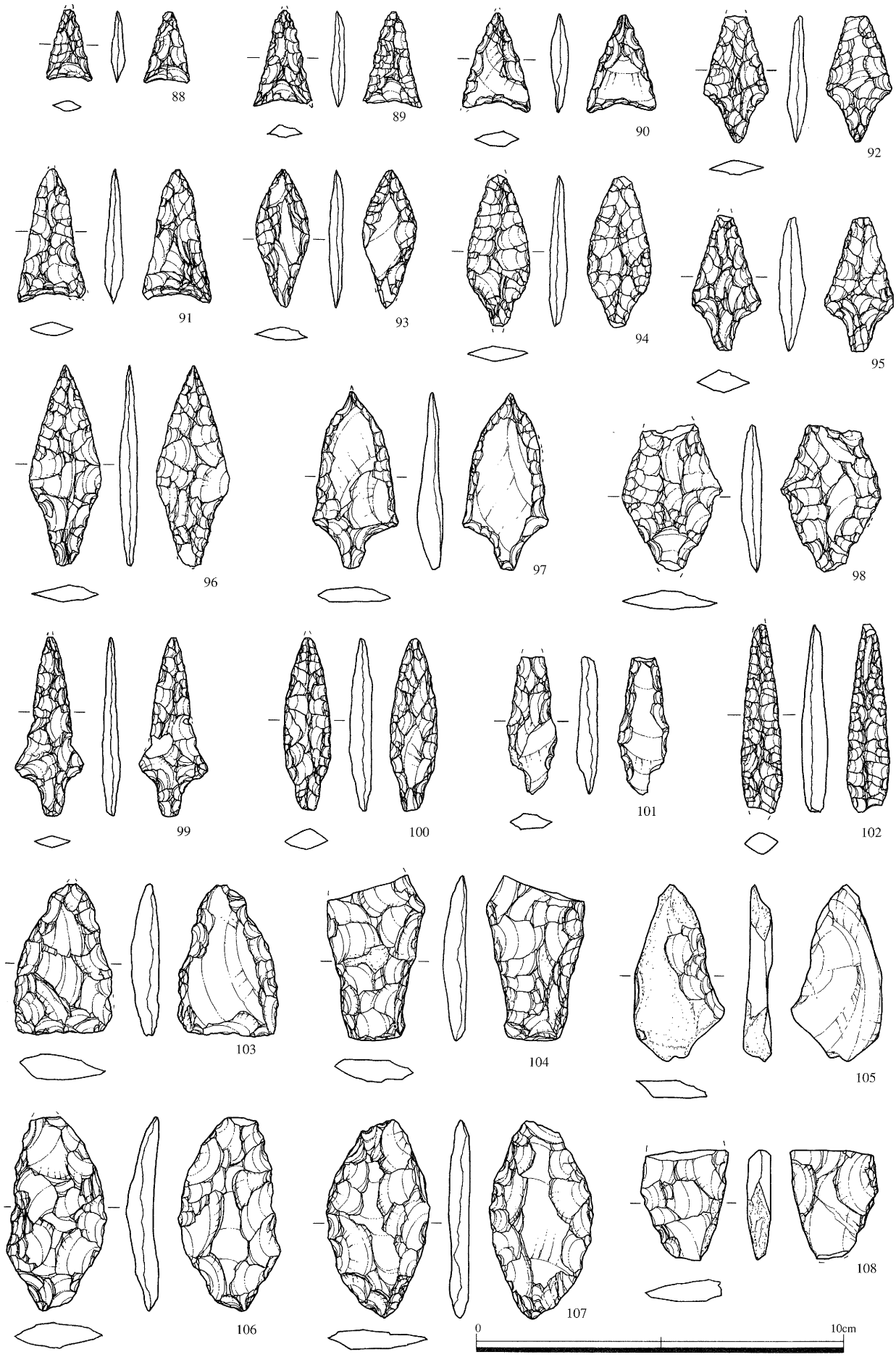
第111図　石器（13）



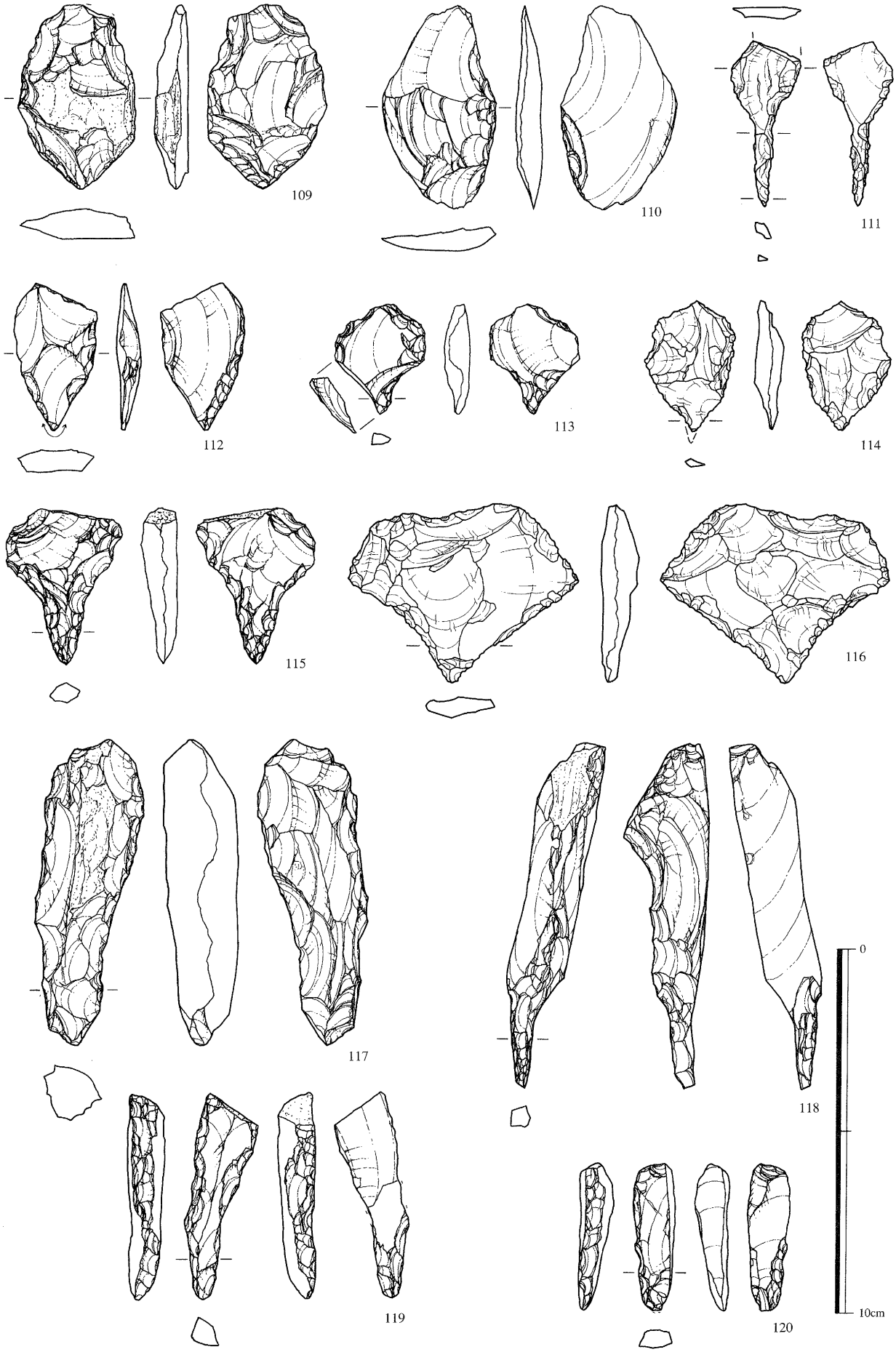
第112図　石器（14）

石錐（第114図111～第115図123）　いわゆるサヌカイト製であり、肉眼観察によるが111は金山産と考えられる。111は前期遺構の土坑0254出土である。118・121・123の先端は欠損。119の頂部は自然面。なお、123の周囲は磨耗が著しい。

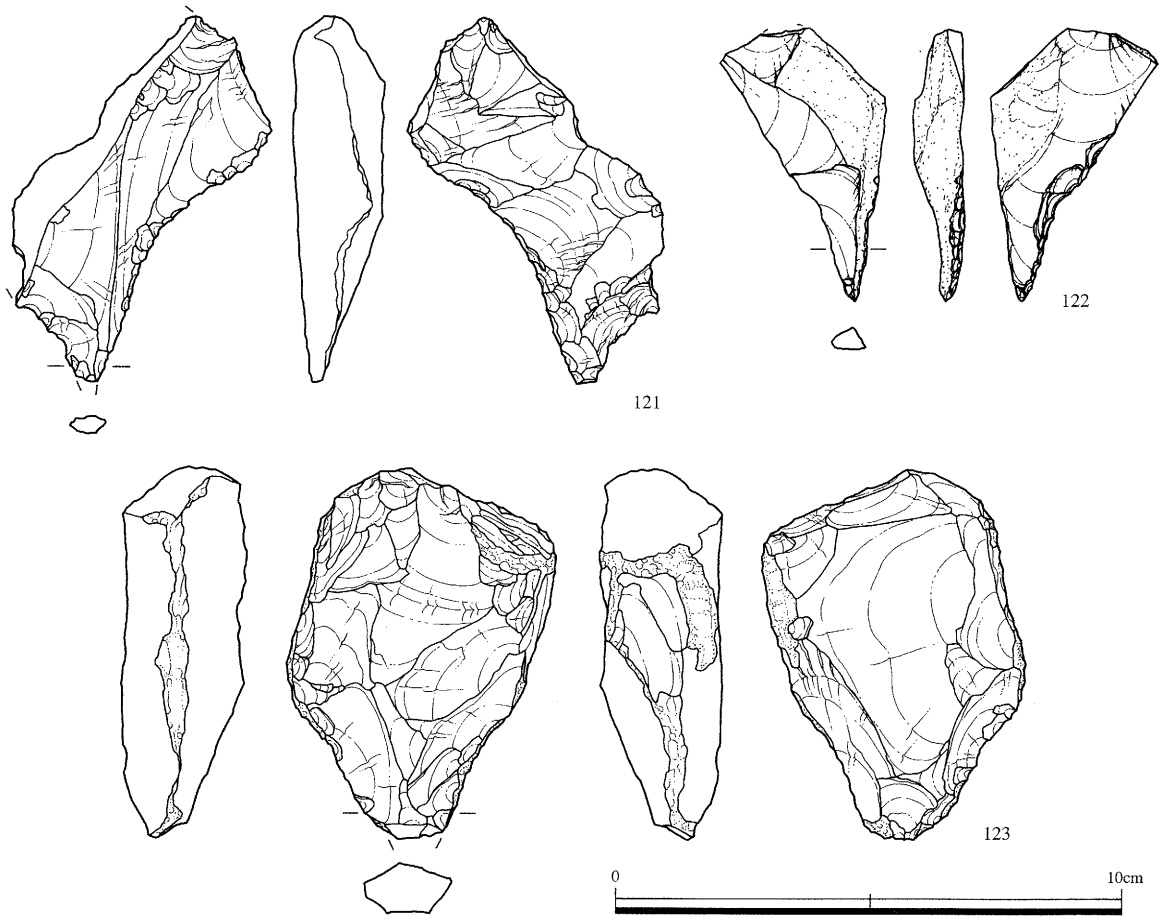
削器（第116図124～第119図160）　125は奥田観察を経ていないが輝石安山岩Fと考えられ、他はいわゆるサヌカイト製である。また、肉眼観察によるが124・129・132・141・143・155は金山産と考えられる。124は土坑0267、125は流路0183出土。124は金山産であり、同様の形態のものが香川県鴨部・川田遺跡等にみられることからすれば打製石鎌とすべきかもしれない。125の刃部は使用により摩滅する。126は微細剥離痕の残る剥片。130は土坑0257出土。130・131は類似した削器。132は弥生前期の土坑0323出土。135は弥生前期の土坑0412出土。138は使用痕のある剥片。149は刃部上半と先端が著しく摩滅している。152は両側縁に抉りをつくる。157～159は布留期の溝0187、160は布留期の溝0301下層出土である。159は研磨の後、自然面方向からの打撃で刃部を形成する。


88
89
90
92
91
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
0
10cm

第113図　石器（15）



第114図　石器（16）



第115図　石器（１７）

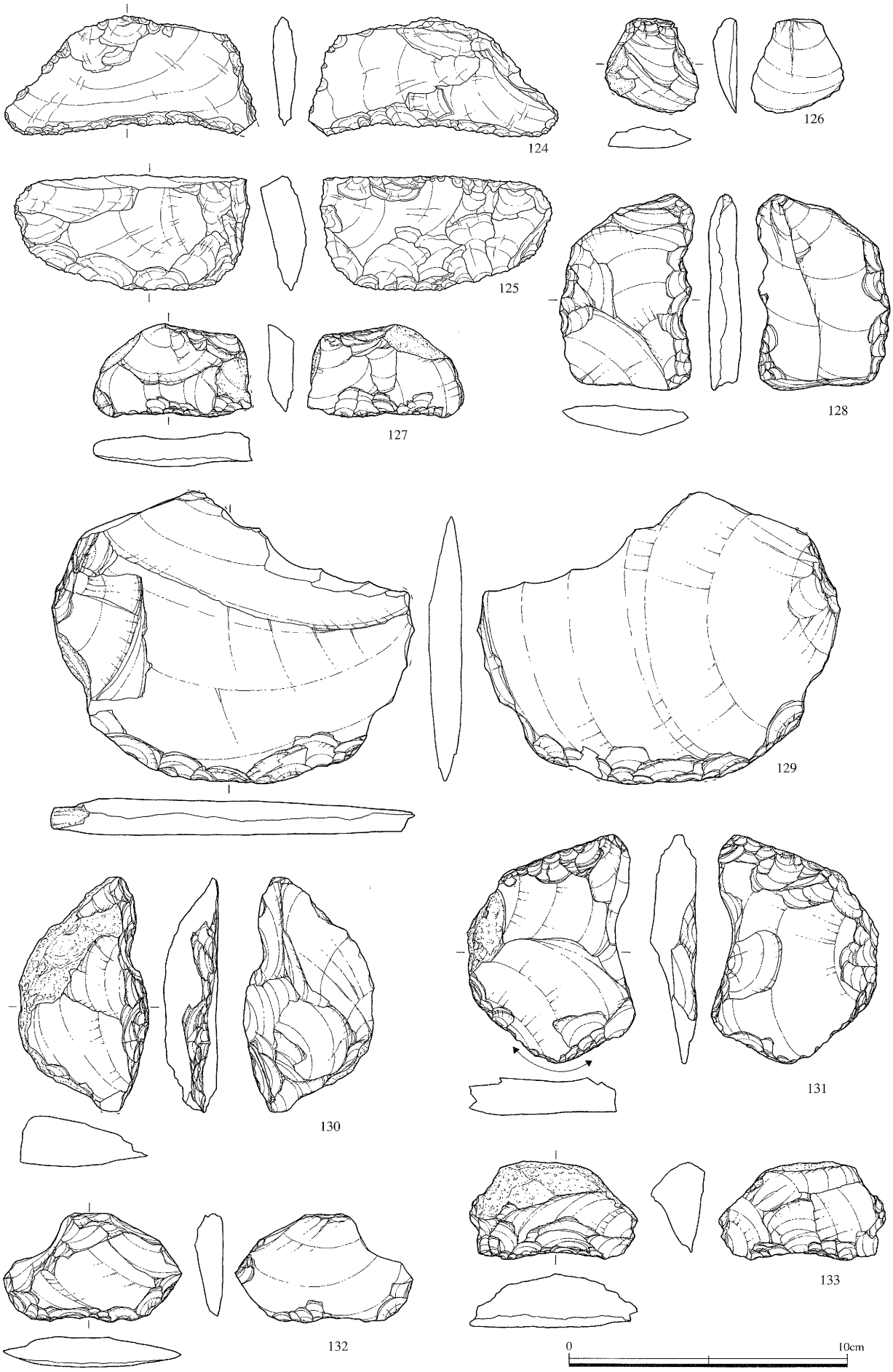
石匙（第119図161・162）　いわゆるサヌカイト製であり、肉眼観察によるが161は金山産と考えられる。161は横形石匙。162は縦形石匙。

くさび形石器（第120図163～177）　163と164は奥田観察を経ていない。163はチャートか？164は42の石英安山岩質溶結凝灰岩と類似する。他はいわゆるサヌカイト製であり、肉眼観察によるが168・174・177は金山産と考えられる。163は上下、左右に著しく潰れた階段状剥離がある。168は両極打撃で剥離された剥片。176・177は布留期の溝0187出土である。

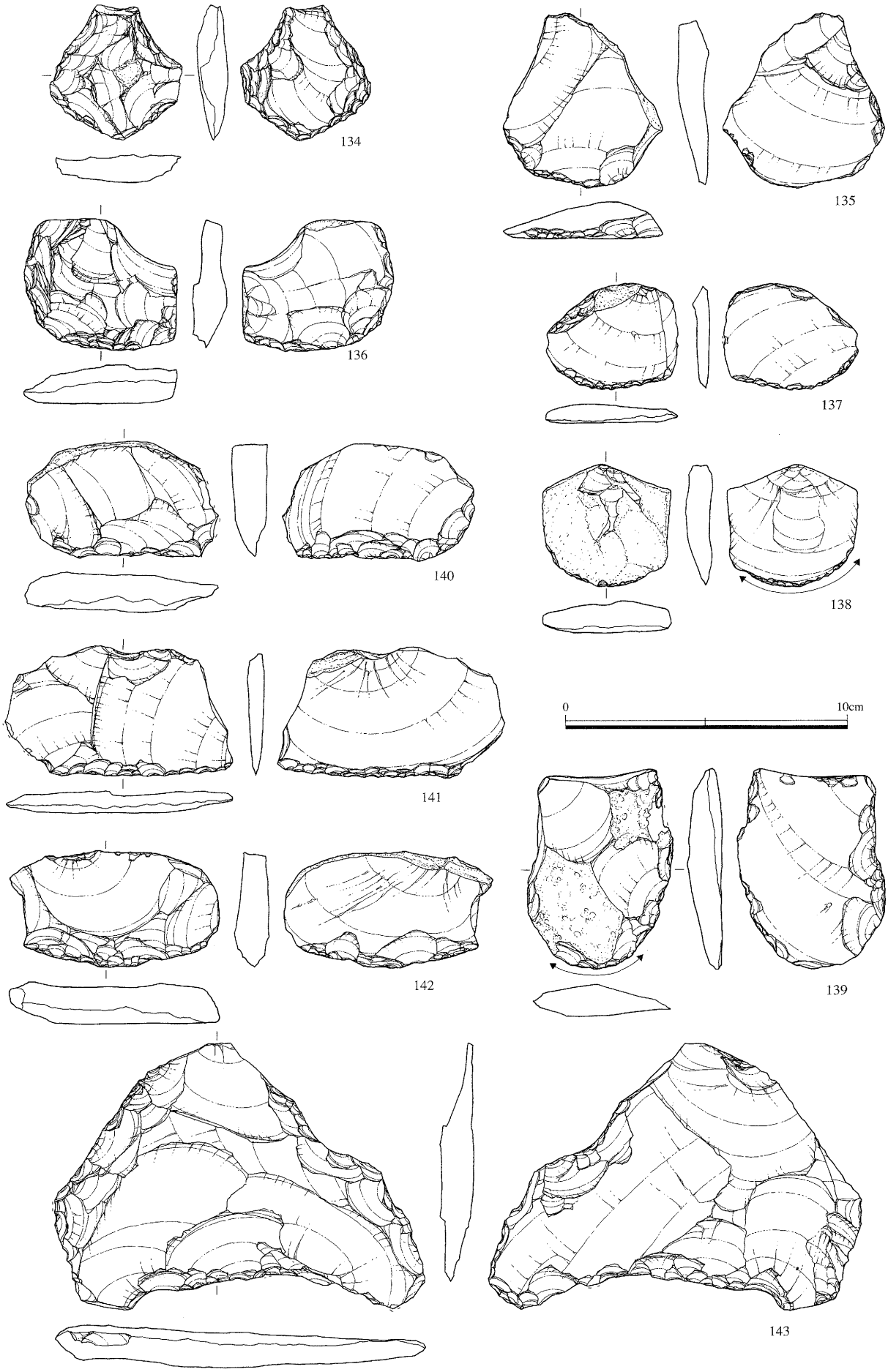
尖頭器（第121図178～184）　いずれもサヌカイト製。178は流路0183上層出土。側縁は最終的に丁寧な押圧剥離による。基部側は埋没段階、先端側は新しい折れ。179は4面直上出土。未製品。横長剥片素材で、先端と基部に自然面が残る。180は9層出土。横長剥片素材で、右側縁は潰れている。181は谷部埋土出土。横長剥片素材。182～184は布留期の溝0187出土。182は未製品で、左側縁は潰れている。183は未製品、あるいは石小刀。184は側縁は最終的に丁寧な押圧剥離による。基部は自然面。

石戈（第121図185）　サヌカイト製。8層出土。両側縁は階段状剥離である。

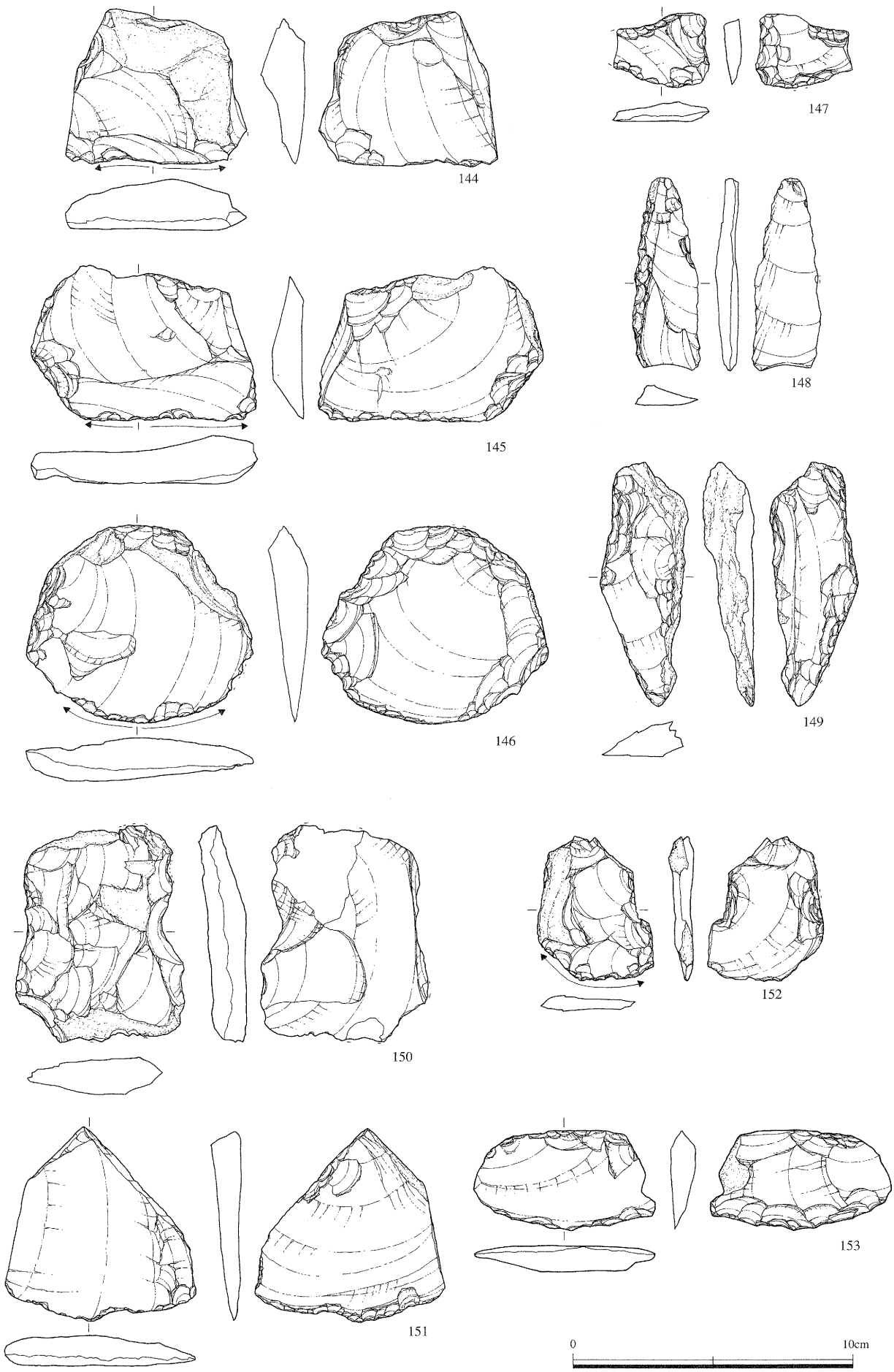
石核（第121図186～第122図188）　サヌカイト製。186は弥生前期の流路0183出土。187は弥生前期の土坑0339出土。188は9層出土。



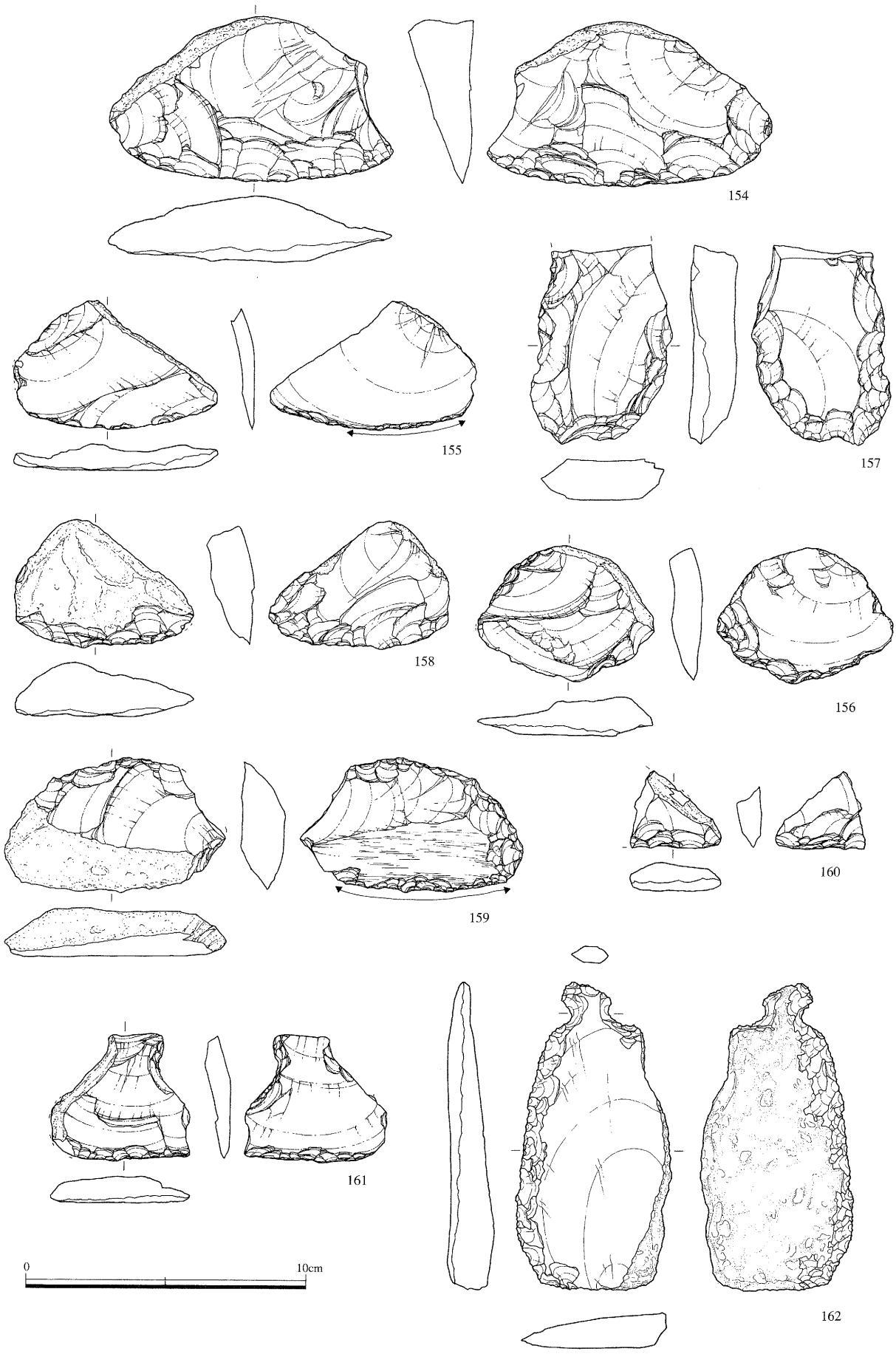
第116図　石器（１８）



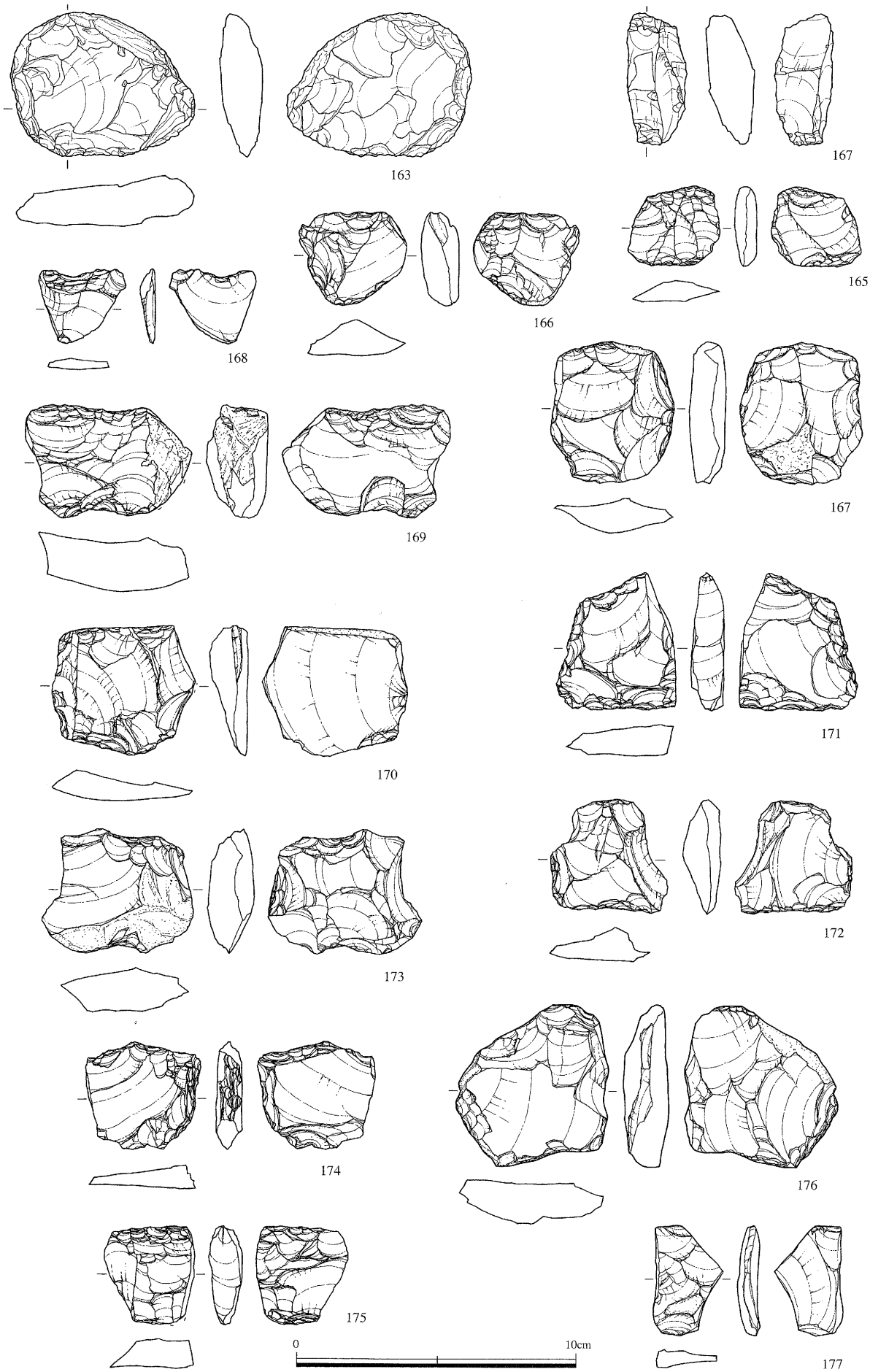
第117図　石器（１９）



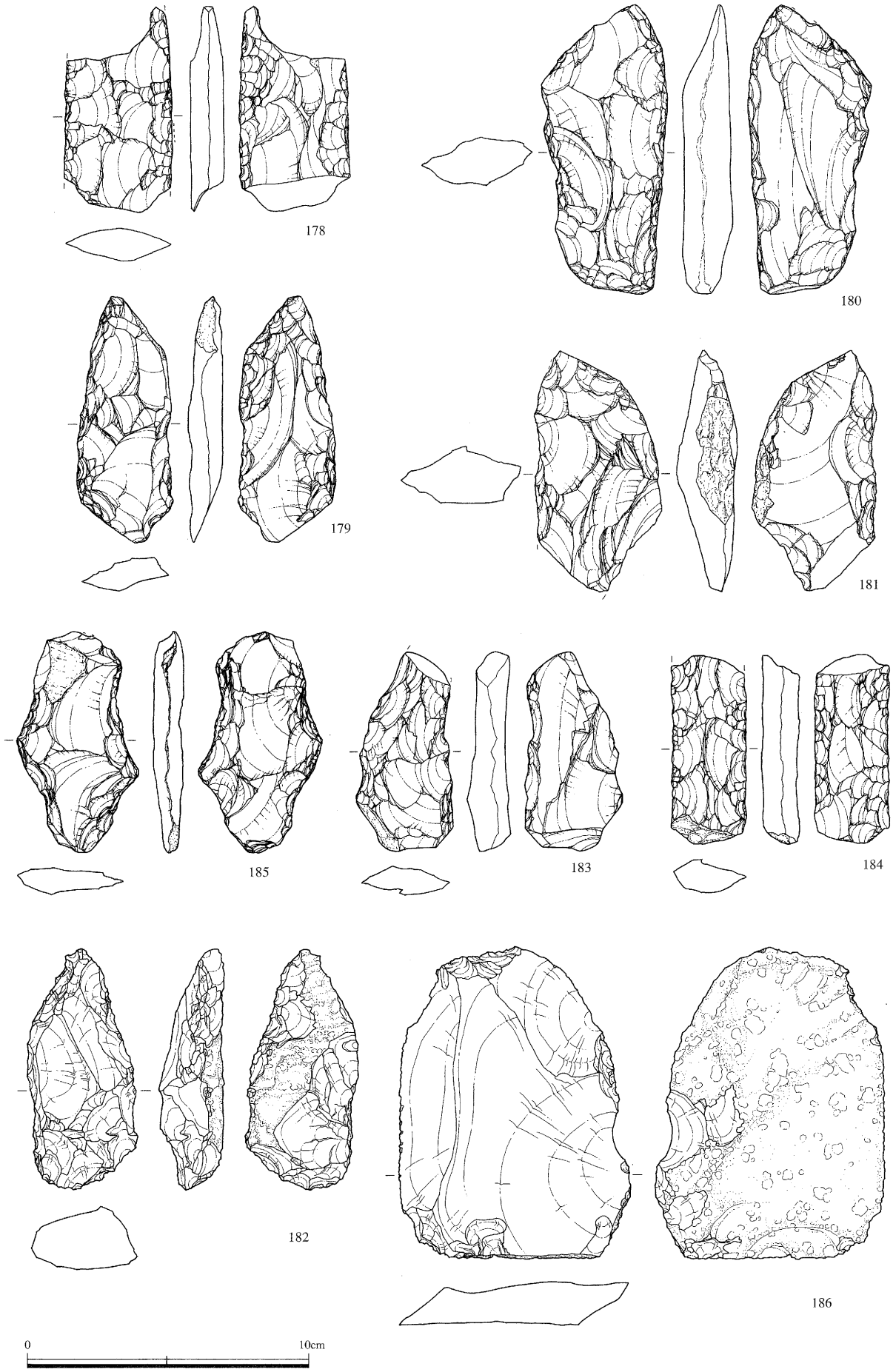
第118図　石器（２０）



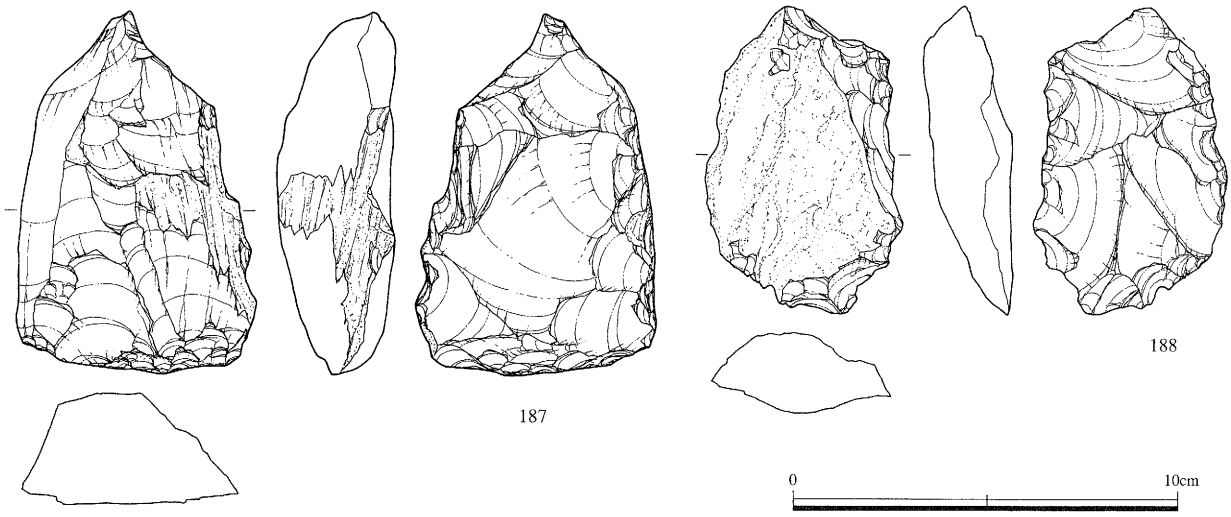
第119図　石器（２１）


163
167
165
166
168
167
169
170
171
172
173
174
176
175
177
0
10cm

第120図　石器（２２）



第121図　石器（２３）



第122図　石器（２４）

第3表　石器重量、および出土遺構等一覧（1）

番号	重量(g)	地　区	面・層位	遺　構	備　考
1	50.5	1ーP-24	8層		
2	53.2	1ーI- 8	4面	土坑0319	
3	42.0	1ーI- 8	4面	土坑0319	
4	79.0	1ーI- 8	4面	土坑0319	
5	146.9	1ーI- 8	4面	土坑0319	
6	45.8	1ーP-12	9層		
7	50.6	1ーG- 9	9層		
8	9.6	1ーQ-10	4面		
9	22.4	1ーK-19	8層		
10	12.9	1ーO-24	8層		
11	41.6	1ーQ-13	9層		
12	40.2	1ーX-22	9層		
13	2.3	1ーT-20	9層		
14	34.4	1ーP-11	9層		
15	34.8	1ーT-14	4面	溝0187	
16	78.0	1	8層	南側溝	
17	14.2	1	3面		
18	13.7	1ーQ-12		南壁	
19	84.0	1ーH- 6	4面	土坑0320	金山
20	57.1	1ーG-10	9層		
21	35.6	1ーG-15	8層		
22	113.8	1ーI- 9	4面		
23	158.4	1ーP-20	4面	流路0183	
24	45.0	1ーM- 8	4面		
25	65.1	1ーK-12	9層		
26	345.9	1ーI- 8	4面	土坑0450	
27	180.1	1ーK-19	9層		
28	177.0	1ーQ-12	4面	溝0187	
29	120.8	1ーL-21	4面	流路0183	
30	120.9	1ーP-12	9層		
31	101.6	1ーT-22	8層		
32	230.5	1ーL- 5	4面	流路0183	
33	161.6	1ーK-12	4面	土坑0426	
34	118.4	1	9層		
35	149.8	1ーK-13	8層		
36	140.8	1ーR-15		流路0183	
37	3680.0	1ーU-17	4面	溝0187	
38	470.8	1	4面	流路0183	
39	112.7	1ーC-12~F-15			
40	122.6	1	4面	流路0183	
41	9.1	1ー東区	8・9層	東側側溝	
42	17.1	1ーP-13	10層		
43	250.0	1ーS-20	4面	土坑0228	
44	120.5	1ーK- 5	4面	流路0183	
45	166.2	1ーO- 8	4面	流路0183	
46	348.4	1ー西区	4面		
47	482.6	1ー西区	4面	土坑0340	
48	256.2	1ーO-18	4面	流路0183	
49	301.7	1ーC-21	4面	流路0183	
50	714.8	1ーS-13	8・9層		
51	313.8	1ー東区			
52	127.0	1ーL- 5	4面	流路0183	
53	27.5	1ーQ-21	8層		
54	261.1	1ー西区		土坑0339	
55	125.9	1ーM-21		流路0183	
56	252.8	1ーH-10	8層		
57	696.4	1ーL-17	8層		
58	336.7	1ーN- 8		溝0301上層	
59	306.8	1ーI-10	4面		
60	439.5	1ーG- 5	4面	流路0183	
61	187.0	1ー東区	4面	流路0183	
62	230.1	1ーN- 7	4面	流路0183	
63	337.0	1ーQ-23	4面		
64	216.6	1ーQ- 9	4面		
65	122.8	1ーQ-17	4面	流路0183	
66	784.4	1	4面	流路0183	
67	289.0	1ーQ-26	9層		
68	202.6	1ーR-12	4面	流路0183	二上山
69	91.0	1ーC-11	4面		
70	109.7	1ーG- 9	9層		
71	119.8	1ーV-22	9層		
72	539.5	1ーI-11	4面		
73	2856.4	1ーS-14		流路0183上層	
74	1358.4	1ー G- 51	4面	流路0183	
75	57.6	ーF- 5	9層		
76	47.7	1ー西区		土坑0339	
77	2418.2	1ーI-11	4面		
78	551.8	1ーN-17	8層		
79	120.2	1ーF-14	8層		
80	81.5	1ーR-21	8層		
81	173.6	1ーH- 8	9層		
82	45.8	1ーO- 9	8層		
83	209.6	1ーQ-10	南壁		
84	69.4	1ー西区	南側側溝		
85	234.5	1ーH- 4	西壁		
86	142.7	1ーS-13	4面	溝0187	
87	486.3	1ーJ- 2	下層	溝0301下層	
88	0.7	1ーO-17	4面		金山
89	1.2	1ーJ-12	3面		二上山
90	1.7	1ーL-12	4面		金山
91	2.5	1ーX-21	9層		二上山
92	2.5	1ーL-16	8層		二上山
93	2.1	1ーS-18	9層		二上山
94	3.2	1ーM- 7	8層		二上山
95	3.7	1ーN- 7	8層		二上山
96	4.2	1ーU-19	8層		二上山
97	5.7	1ーF- 5	9層		二上山
98	5.7	1ーR-17	9層		二上山
99	2.6	1ーH-15	9層		二上山
100	3.7	1ーN-12	5面		二上山

第３表　石器重量、および出土遺構等一覧（2）

番号	重量(g)	地　区	面・層位	遺　構	備　考
101	3.0	1－F- 8	3面		二上山
102	3.9	1－S-13	4面		二上山
103	9.4	1－S-23	8層		二上山
104	7.1	1－E-10	9層		二上山
105	7.5	1－東区	4面	流路0183	二上山
106	10.3	1－J-12	8層		二上山
107	9.8	1－西区		谷部埋土	二上山
108	5.3	1－S-20	9層		二上山
109	15.3	1－K- 8	4面		二上山
110	10.4	1－U-16	9層		二上山
111	2.3	1－東区	4面	土坑0254	
112	5.7	1－S-22	9層		二上山
113	5.0	1－V-19	9層		二上山
114	5.2	1－H-19	4面		
115	10.8	1－G- 9	9層		二上山
116	23.9	1－E-12	9層		
117	42.9	1－R-13	9層		二上山
118	25.3	1－C-11	9層		二上山
119	9.0	1－L-10	4面		二上山
120	4.6	1－L-12	4面		二上山
121	40.4	1－B-11	9層		
122	11.7	1－W-22	9層		二上山
123	105.6	1－L-12	谷埋土上層		
124	32.0	1－L-19	4面	土坑0267	
125	69.9	1－P-17		流路0183	
126	9.4	1－O-22	4面	流路0183	二上山
127	22.7	1	4面	流路0183	二上山
128	42.0	1－M- 6	4面	流路0183	二上山
129	196.0	1－E- 9	4面	溝0308	金山
130	75.9	1－なし	4面	土坑0257	二上山
131	79.6	1－H- 9	4面		二上山
132	24.1	1－L- 7	4面	土坑0323	金山
133	39.2	1－G- 6	4面		二上山
134	22.4	1－J-12	4面		二上山
135	37.2	1－E-12	4面		二上山
136	38.0	1－H-13	4面		二上山
137	13.4	1－東区	4面		二上山
138	25.0	1－E-11	4面		二上山
139	51.6	1－K-14	9層		二上山
140	47.4	1－東区	4面		二上山
141	29.3	1－J- 9	4面		金山
142	58.2	1－F-10	9層		二上山
143	146.1	1－なし	9層		金山
144	67.3	1－C- 9	9層		二上山
145	69.1	1－B-11	9層		二上山
146	78.9	1－Q-23	4面		二上山
147	7.0	1－F-15	9層		二上山
148	13.0	1－東区	9層		二上山
149	37.8	1－G-13	8層		二上山
150	73.0	1	8層		二上山
151	45.7	1－F-13	8層		二上山
152	16.6	1－O-24	8層		二上山
153	25.5	1－R-10	8層		二上山
154	106.7	1－S-20	8層		二上山
155	23.5	1－H-13	なし	中世谷上層	金山
156	36.8	1－K-19	なし	中世谷	二上山
157	75.1	1－U-17	4面	溝0187	二上山
158	48.7	1－T-14	4面	溝0187	二上山
159	65.4	1－S-13	4面	溝0187	二上山
160	7.8	1－M- 5	4面	溝0301下層	二上山
161	19.9	1－東区	4面		金山
162	98.7	1－R-25	9層		
163	76.9	1－東区		土坑0291	
164	19.0	1－Q-17	9層		
165	7.9	1－O-18	4面	土坑0297	二上山
166	16.9	1－C- 7	4面		二上山
167	32.2	1－西区	4面		二上山
168	4.5	1－P-14	4面		不明
169	54.0	1－F- 9	4面		二上山
170	26.7	1－H- 9	4面		二上山
171	28.0	1－N-14	9層		二上山
172	18.0	1－H-15	9層		二上山
173	41.6	1－S-23	9層		二上山
174	15.1	1－C-11	9層		金山
175	15.7	1－S-22	9層		二上山
176	53.7	1－Q-12	4面	溝0187	二上山
177	7.2	1－Q-12	4面	溝0187	金山
178	35.8	1－P-10	4面	流路0183	二上山
179	36.1	1－M- 7	4面		二上山
180	90.9	1－Q-19	9層		二上山
181	75.4	1－西区		中世谷	二上山
183	34.9	1－W-19	4面	溝0187	二上山
184	33.9	1－T-14	4面	溝0187	二上山
185	76.3	1	4面	溝0187	
185	37.2	1－E-14	8層		二上山
186	190.1	1－O-20		流路0183	
187	180.6	1－O-11		土坑0339	二上山
188	70.2	1－H- 4	9層		二上山

第５節　弥生時代中期

今回の調査で出土した弥生時代中期土器は、以下に報告するように第Ⅲ様式でも古相に属するものが主体である。なお、谷状落込みからは同時期の多量の資料が出土しているが報告し得なかった。第Ⅱ様式は前期の遺構である溝0183上層から壷542の1点があるのみ。また、中期後半段階の資料は皆無である。

土坑0271出土遺物（第123図901～905）　壷901のみが生駒西麓産胎土。体部外面に部分的に板ナデ痕が残存する。甕902は、口縁部ヨコナデ、体部外面は摩滅で不明、内面は斜上方への工具ナデ。外面煤付着。甕903は、口縁部ヨコナデ、体部内面は横方向ナデ、外面は丁寧にナデ仕上げる。外面煤付着。甕904は、口縁部に成形時の指頭痕が残りヨコナデ、体部外面はヘラケズリの後工具ナデ、内面は丁寧にナデ仕上げる。外面煤付着。大型甕905は９cm程度の細片のため口径は不正確。口縁部は内面ハケメの後ヨコナデ、体部外面は縦方向ハケメの後ヘラミガキ、内面は不明。第Ⅲ様式に属する。

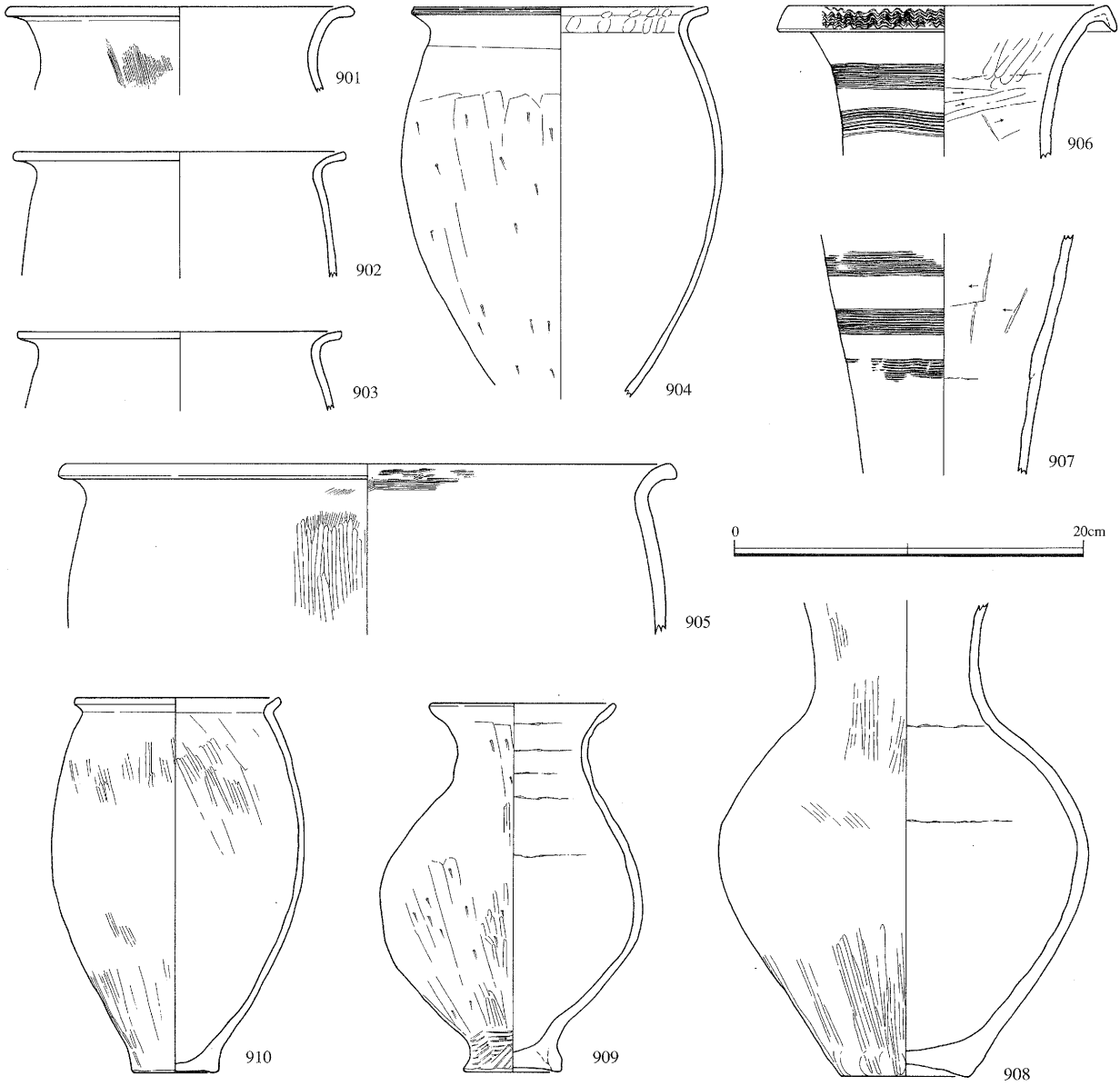
土坑0298出土遺物（第123図906）　広口壷906は生駒西麓産胎土。口縁部ヨコナデ、頸部外面調整は不明、内面は工具でナデ付ける状況。第Ⅲ様式に属する。

土坑0396出土遺物（第123図907）　広口壷907は生駒西麓産胎土。頸部外面調整は不明、内面は工具ナデ。頸部にクシ描き直線文３条が残存する。

土坑0398出土遺物（第123図908～910）　壷908は、赤色（10R 6/8）を呈し、胎土は粗砂を多く含み、小礫も目立つ。剥離が著しいが、外面にかろうじて縦方向のヘラミガキが残存する。壷909は、褐灰色（10YR 5/1）を呈し、胎土は粗砂を多く含む。口縁部はヨコナデ、体部外面は下方からのヘラケズリの後、部分的に縦方向のヘラミガキを施す。内面は粗雑なナデ仕上げで接合痕が残る。低部はハケ状工具で強くナデ付け、底面はケズリ仕上げ。甕910は、口縁部から体部上端にかけてヨコナデ、体部外面と内面上半に縦方向のヘラミガキを施す。体部内面下半と底面はナデ仕上げ。いわゆる「河内型甕」であり、生駒西麓産胎土である。第Ⅲ様式に属する。

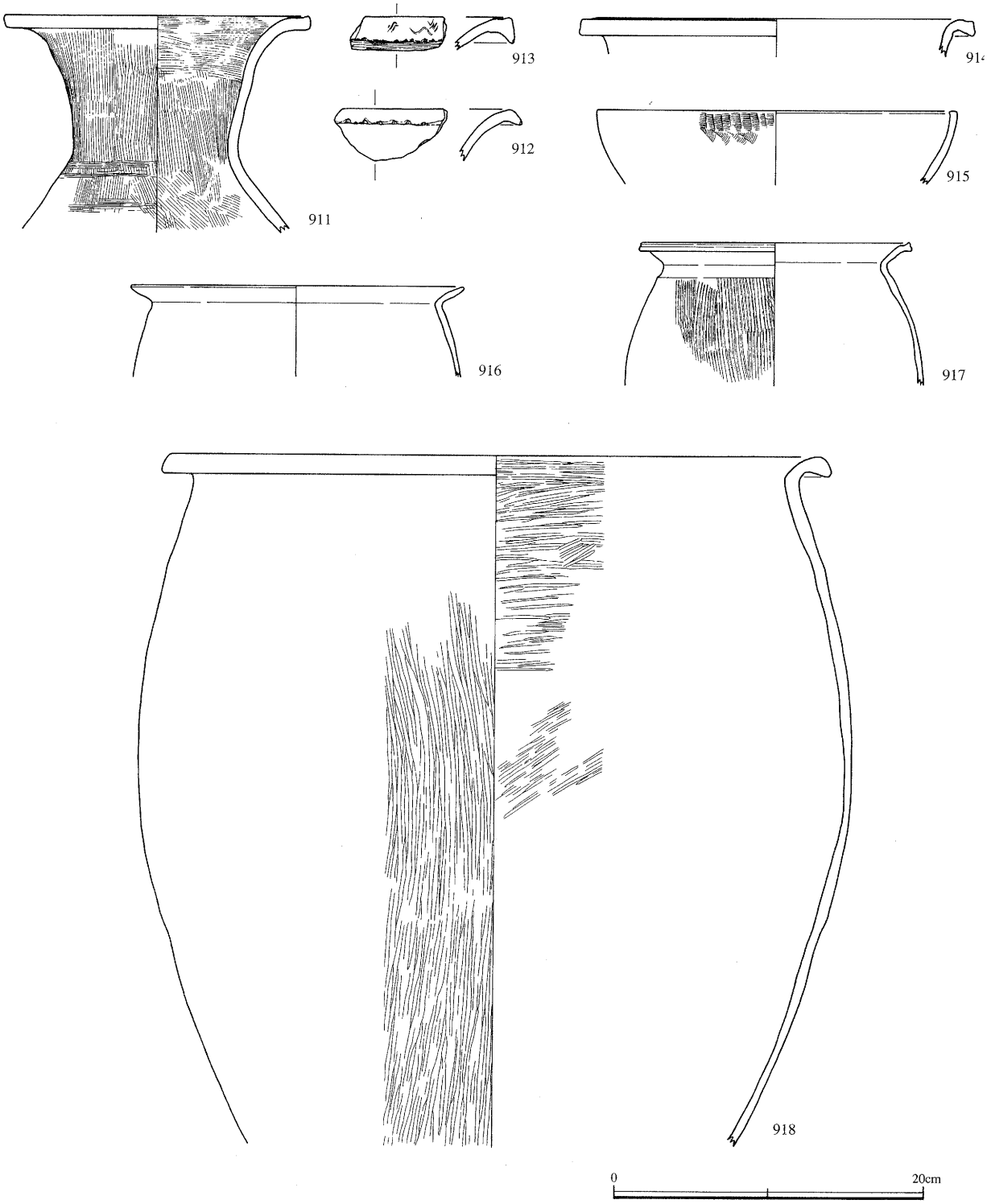
土坑0388出土遺物（第124図911～918）　広口壷911は、内外面ともにハケメ調整であり、口縁部にヨコナデ、外面肩部にヨコハケで仕上げる。広口壷912・913は、生駒西麓産胎土である。口縁拡張部下端にキザミ目を巡らせ、拡張面は912が無文、913がクシ描き波状文である。913の頸部外面に横方向ヘラミガキを施す以外は、摩滅のため調整不明。鉢915は、口縁部にクシ描き簾状文と扇形文を巡らせる。内外面ともに剥離するが、内面は横方向のヘラミガキの痕跡がある。甕916は、口縁部ヨコナデ、体部外面に下方からの縦方向の粗いハケメ、内面に斜上方への板ナデを施す。甕917は内外面ともに剥離し図示しえないが、外面には縦方向のハケメの痕跡がある。大型甕918は生駒西麓産胎土であり、体部外面下半に煤が付着し赤変している。口縁部ヨコナデ、体部外面に縦方向ヘラミガキ、内面上半に横方向、下半に斜上方へのヘラミガキを施す。第Ⅲ様式前半に属する。

土坑0399出土遺物（第125図919～928）　壷には広口壷、拡張部を有する広口壷、無頸壷がある。



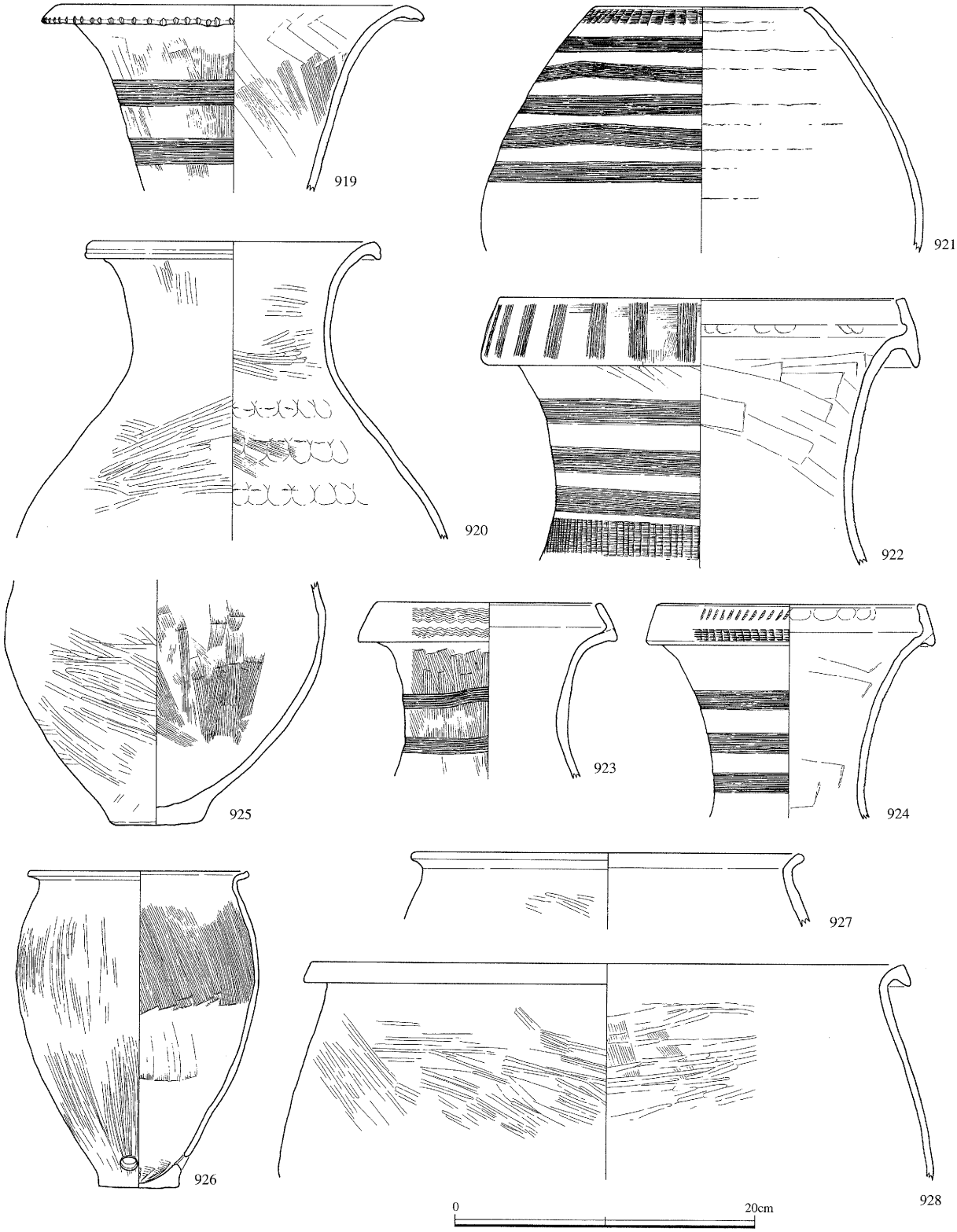
第123図　土坑0271・0298・0396・0398出土遺物
土坑0271（901～905）、土坑0298（906）
土坑0396（907）、土坑0398（908～910）

広口壷919は、口縁部ヨコナデ、外面縦方向のハケメ、内面に斜上方へのハケメを施す。口縁端部にキザミ目文、頸部に粗雑なクシ描き直線文２条を巡らせる。いずれも正面から見て右方向へ施文する。壷においては本資料のみが非河内胎土で、石英、長石を主体にする粗砂を多くふくみ、５㎜程度の小礫も多い。広口壷920は、生駒西麓産胎土。頸部外面に縦方向ヘラミガキ、内面に横方向のヘラミガキを施す。体部外面は横方向の分割ヘラミガキ、内面にハケメを施す。無頸壷921は、生駒西麓産胎土。剥離著しく、調整は不明。クシ描き簾状文１条、クシ描き直線文５条を巡らせる。拡張部を有する広口壷922～924は、生駒西麓産胎土。大型品922は、拡張部ヨコナデ、頸部に部分的にヘラミガキが確認できるが、他は不明。内面は細かなハケ状工具でナデ上げる。拡張部外面に縦方向クシ描き文（9条/11㎜）、頸部にクシ描き直線文（10条/18㎜）３条、同



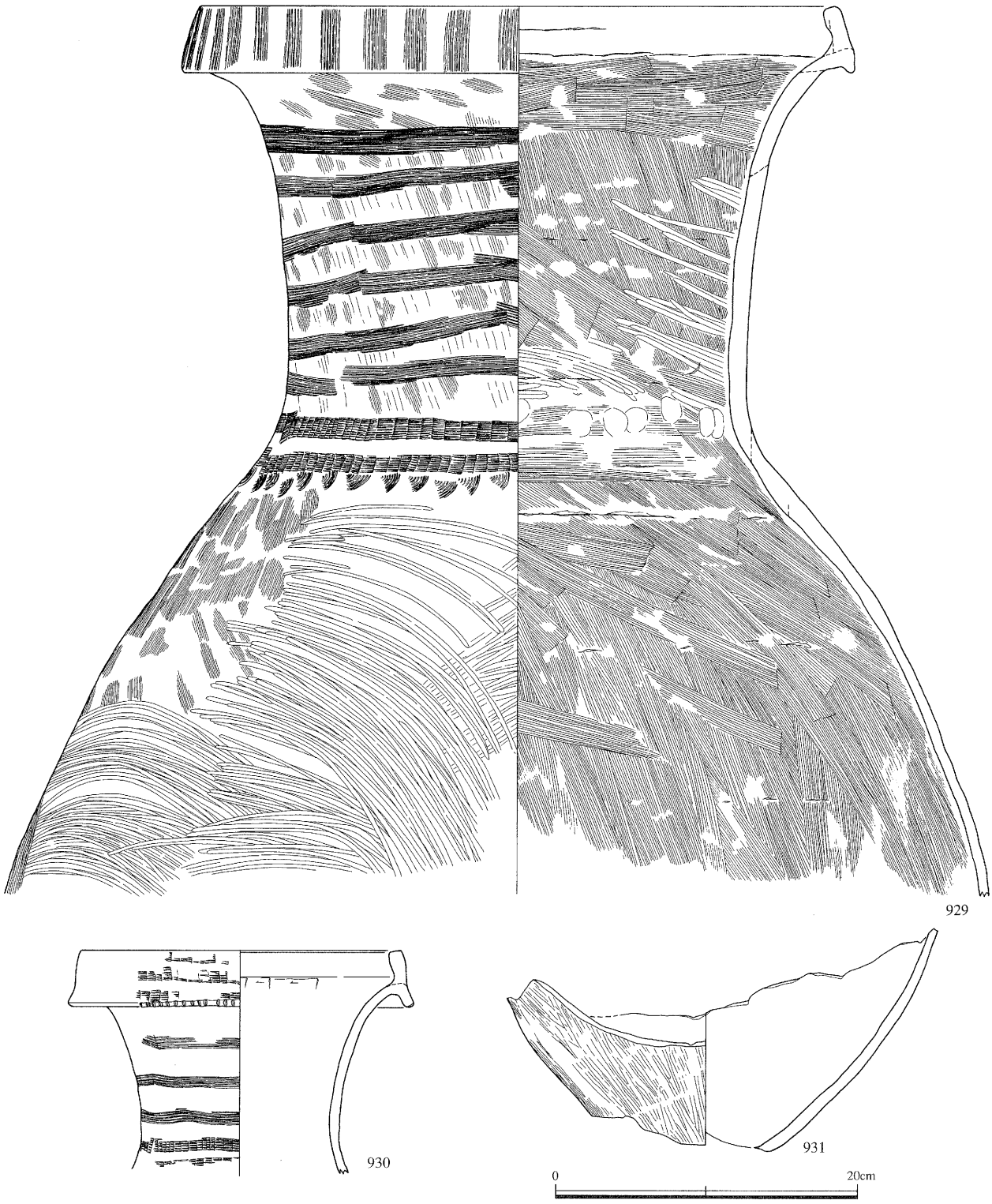
第124図 土坑0388出土遺物

簾状文を巡らせる。頸部のクシ状工具は同じ者で、部位によって施文工具を使い分けている。923は、広口壷の口縁端部上面に拡張部を貼り付ける。口縁部ヨコナデ、頸部外面に下方からの縦ハケメ、内面上半は工具による横方向ナデ、下半はナデ仕上げ。拡張部にクシ描き波状文２条、頸部にクシ描き直線文２条を巡らせる。拡張部下段の波状文のみ狭い工具（4条/6㎜）、他は広いクシ状工具（7条/10㎜）を使用する。924は口縁部ヨコナデ、内面は工具による横方向ナデ仕上げ。頸部外面はナデか。拡張部上段に右方向のクシ状工具による刺突文、下段に左方向のクシ描



第125図 土坑0399出土遺物

き簾状文、頸部に4条以上のクシ描き直線文を巡らせる。壷体部925は、生駒西麓産胎土。外面ヘラミガキ、内面ハケメ仕上げである。甕926は、生駒西麓産胎土。低部近くに丁寧な焼成後の穿孔がある。体部下半には煤が付着するが、穿孔断面部分には煤の付着は認められない。甕本来の使用後の穿孔である。口縁部ヨコナデ、体部外面縦方向ヘラミガキ、内面ハケメ仕上げ。中型甕927のみ非河内産。微細砂を含むモロモロの胎土で、浅黄橙色（10YR 8/4）を呈する。外面に



第126図 土坑0400出土遺物

ヘラミガキの痕跡が認められるが、他は不明。大型甕928は、生駒西麓産胎土。口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ、内面ハケメ後、横方向のヘラミガキを施す。第Ⅲ様式前半に属する。

土坑0400出土遺物（第126図929～931）　壷929は、生駒西麓産胎土。頸部のクシ描き直線文、簾状文はいずれも左方向に施す。肩部には８分割のヘラミガキを左方向に施しているが、図示した最上段左は最終段階で省略、あるいは忘却された部分である。壷930も生駒西麓産胎土。拡張

部に３段のクシ描き簾状文とキザミ文、頸部にクシ描き直線文３条、簾状文２条を巡らせるが、いずれも歪みが激しく雑な施文である。甕931のみ非生駒西麓産胎土で、壷の体部下半である。体部上半と底部は打ち欠かれたと考えられる。浅黄橙色（10YR 8/3）を呈する。外面ヘラミガキ、内面は丁寧なナデ仕上げである。なお、内面の砂粒クボミに赤色顔料が嵌入しており、低部付近ほど多くなる。第Ⅲ様式前半に属する。

第6節　布留様式

若干の庄内新相段階を含むものの、多量の布留式の資料が出土している。布留式の全期間におよぶが、初期須恵器の出現する布留4式新相は含まない。

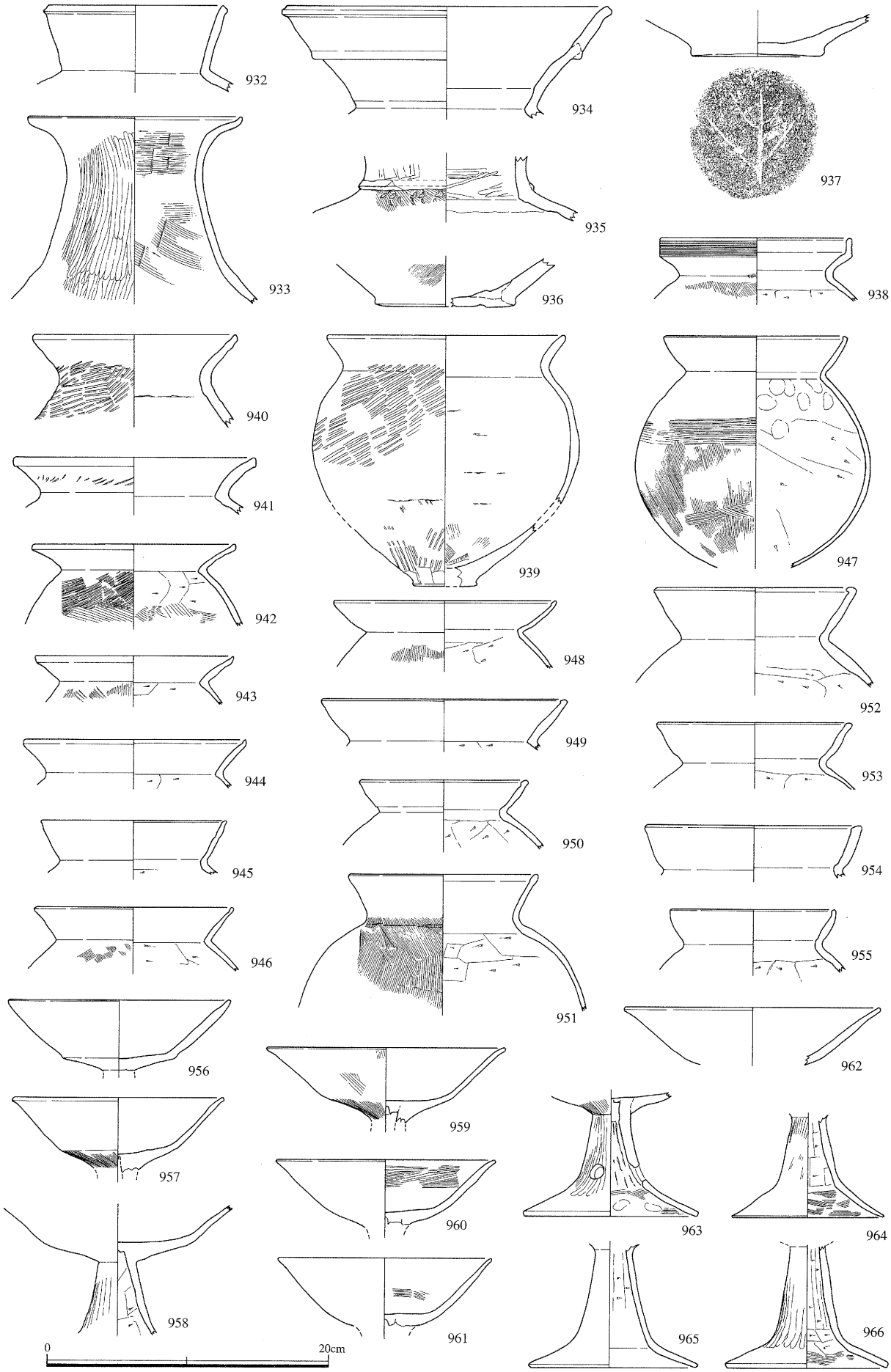
溝0187出土遺物（第127図932～第128図988）　壷にはバラエティーがある。短頸直口壷932は、粗砂を多く含む。口縁部ヨコナデ、体部ナデ仕上げ。広口長頸壷933は、口縁部は強いヨコナデの後、外面縦方向ヘラミガキ、内面ハケメである。二重口縁壷934は、強いヨコナデ仕上げ。壷頸部935は、生駒西麓産胎土の可能性が強い。頸部下端に貼付け突帯、体部上端に竹管端部で刺突文を巡らせる。頸部ヘラミガキ、体部外面ハケメ、内面ナデ仕上げである。図示した底部はいづれにも底面に木葉痕が残る。936は外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。937は外面ナデと考えられる。1～2㎜の粗い石英、長石を主体にし、低部内面の周縁を指頭で押して薄くなる伊勢型二重口縁壷のつくりに類似しており、東海地域からの搬入品と考えられる。

甕には、弥生時代後期からの叩き甕（939～941）と、古墳時代初頭以降の庄内甕（942～944）、布留甕（945～955）の三者がある。叩き甕939・940は口縁部を叩き出し技法による。完形に復元できる939は、明確な平底を残すもので、体部下半1／3で分割成形を行う。941は屈曲部を強いヨコナデによっており、叩きは残らない。口縁部外面に板状工具のアタリがあるが、意味不明。生駒西麓産胎土である。なお、叩き甕の体部内面はいずれもナデ仕上げである。本遺構の叩き甕では時期の詳細は不明で、弥生後期後半から庄内末程度の幅がある。庄内甕はいずれも雲母、角閃石、石英を含み暗褐色を呈する生駒西麓産胎土で、右上がり叩きの河内型庄内甕である。叩きの残る942はやや細筋（6条/cm）の米田分類のC類、943は全面の叩きをハケ目で消す同D類、944は不明。これらの庄内甕は庄内後半～布留初頭におさまる資料である。吉備系甕938は、形態、胎土から搬入品とわかる。やはり、庄内後半～布留初頭におさまる資料である。

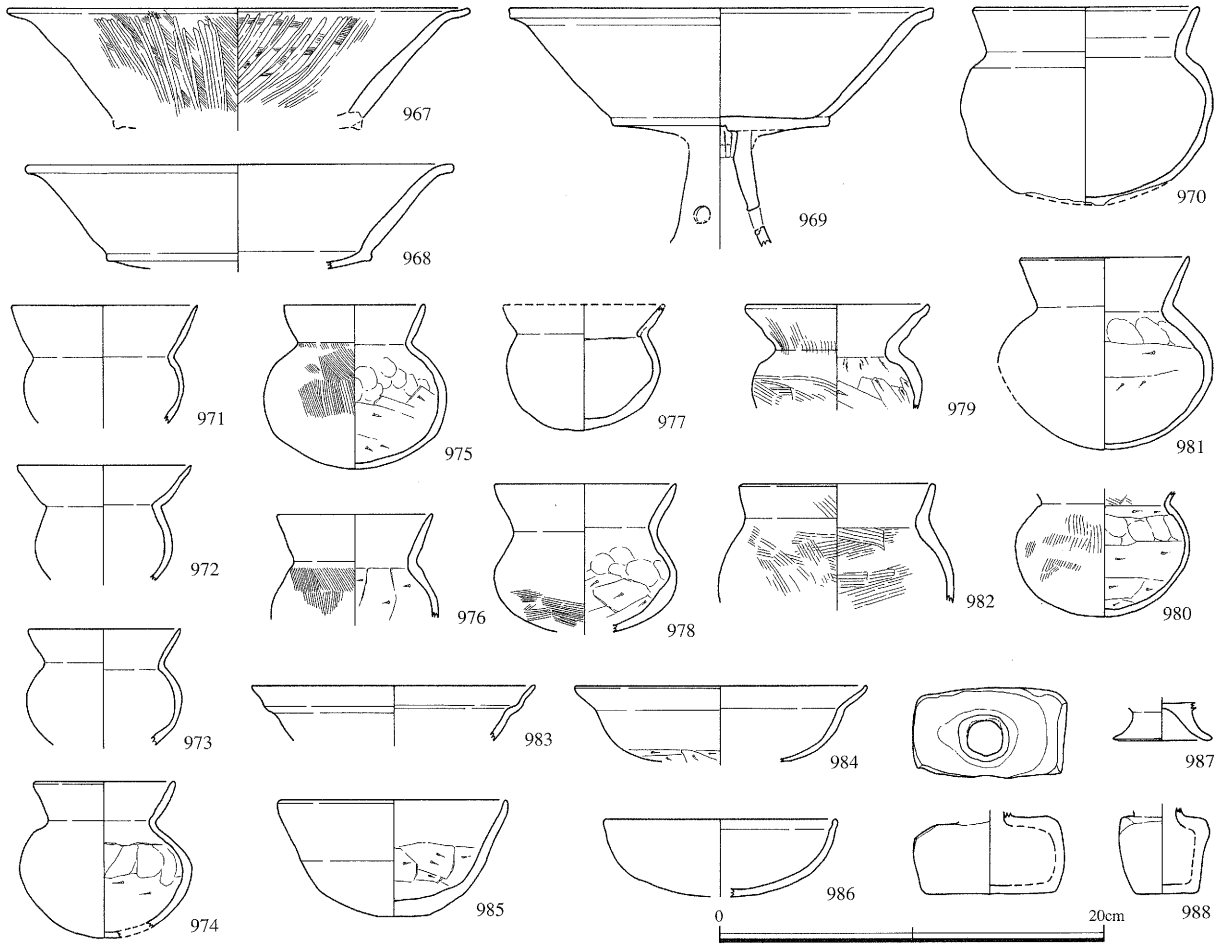
高杯には弥生時代後期からの系譜上にあるもの（956～962）と布留3式から出現する厚手大型品（967～969）がある。図示した脚部（963～966）は前者に対応する。

口縁部と体部間にあまい稜を形成するもの（956）と、丸くなるもの（957～962）の二者があり、型式的には前者から後者に移行するがその変化は漸移的である。いずれも通常胎土。956以外で脚部との接合部分が残るものは、いずれにもいわゆる「棒突き痕」が残る。956・958・962は内外面ともヨコナデ仕上げ。957は体部外面にケズリ気味のハケメ、それ以外はヨコナデ仕上げ。959は外面ハケメ、内面不明。960は内面ハケメ、外面ヨコナデ仕上げ。961は内外面ともにハケメの後、ヨコナデ仕上げ。以上のように、調整はハケメとヨコナデに限られており、ヘラミガキは施さない。脚部には、三方スカシで内面に成形時のシボリ痕跡を残すもの963と、スカシ孔がなく内面ヘラケズリを施す964～966の二者がある。963には「棒突き痕」が残る。外面調整は963・966が縦方向の粗いヘラミガキ、964・965がナデ仕上げである。

大型品は、須恵器出現以降にみられるものほどに重量感はなく厚くもない。いずれも通常胎土。967は内外面共にハケの後ヘラミガキ、968も摩滅のため図示しえないがヘラミガキを施し、丁寧



第127図　溝0187出土遺物（1）



第128図　溝0187出土遺物（2）

に仕上げる。969はナデ仕上げ。「棒突き痕」が残る。

中型壷970は、口縁部ヨコナデ、体部外面雑なナデ、内面ナデ仕上げ。砂粒を含まない精良胎土である。体部外面に煤が付着し、加熱による剥離が著しい。

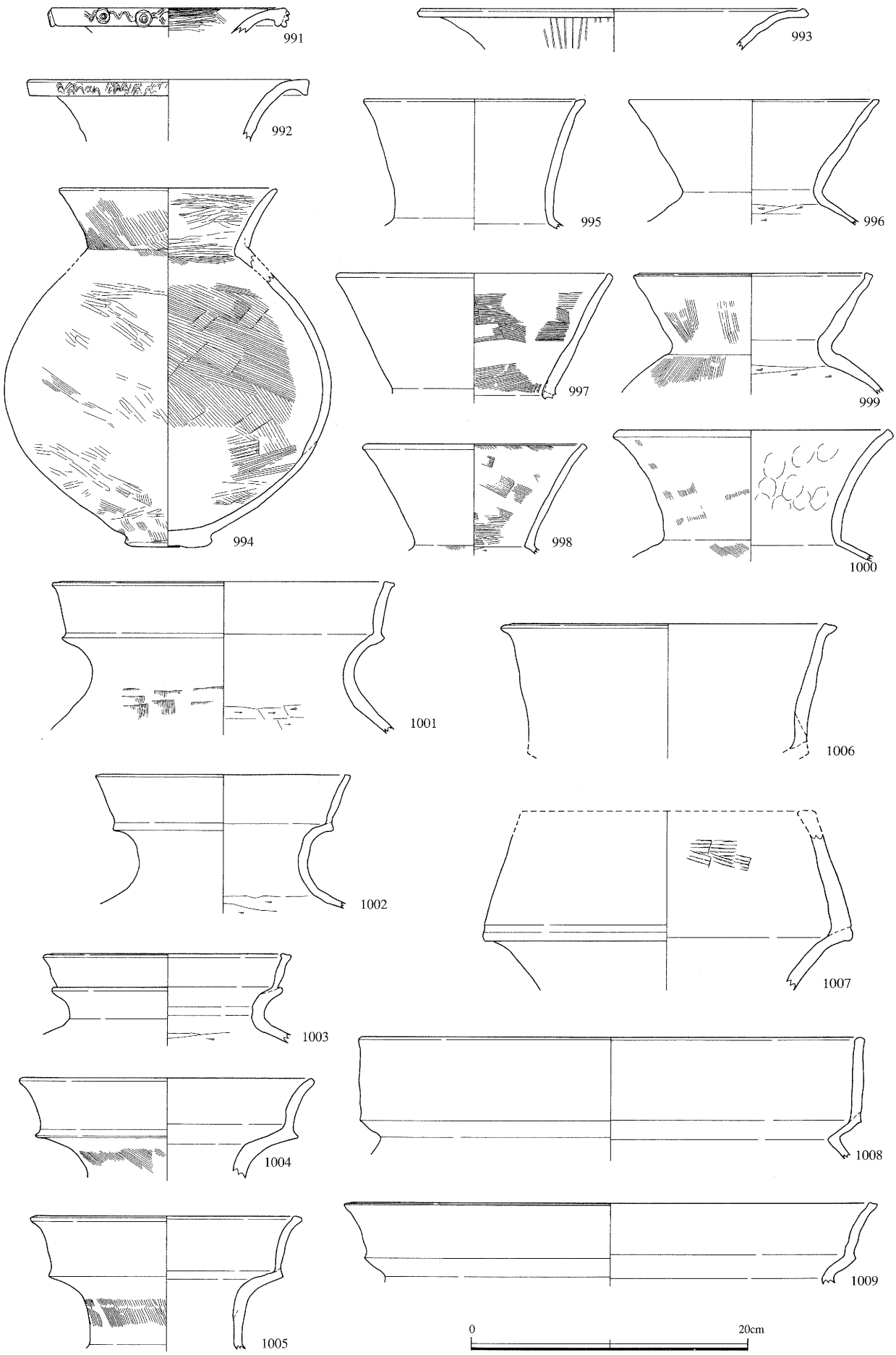
小型丸底壷971～982は、図示した以外にも多数が出土している。971のみ精良胎土で、器壁も薄い。色調はにぶい橙色（2.5YR 6/4）を示す。摩滅のため調整不明。それ以外の小型丸底壷は、砂粒を多く含む通常胎土の粗製品で、色調も褐色系の暗いものが一般的である。972は微細～1㎜の砂粒を多く含む通常胎土ながら、シャープにつくる。摩滅のため調整不明。973はナデ仕上げ。974は口縁部ヨコナデ、体部外面なで仕上げ、内面は成形時の指頭痕と下半にヘラケズリ。975は口縁部ヨコナデ、体部外面上半ハケメ、下半ナデ仕上げ。内面は成形時の指頭痕と下半にヘラケズリを施す。976は口縁部ヨコナデ、体部外面上半ハケメ、内面はヘラケズリを施す。977は口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。体部外面に煤が付着する。978は口縁部ヨコナデ、体部外面上半ナデ、下半ハケメ、内面は成形時の指頭痕と下半にヘラケズリを施す。979は外面に粗いハケメの後、口縁部ヨコナデ、内面は指頭痕と下半にヘラケズリを施す。器壁は厚く、粗製品である。980は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面は指頭痕と下半にヘラケズリを施す。981は口縁部ヨコナデ、体部外面摩滅のため調整不明、内面は指頭痕と下半にヘラケズリを施す。982

は口縁部ヨコナデ、体部内外面ハケメ仕上げ。体部外面に煤が付着する。

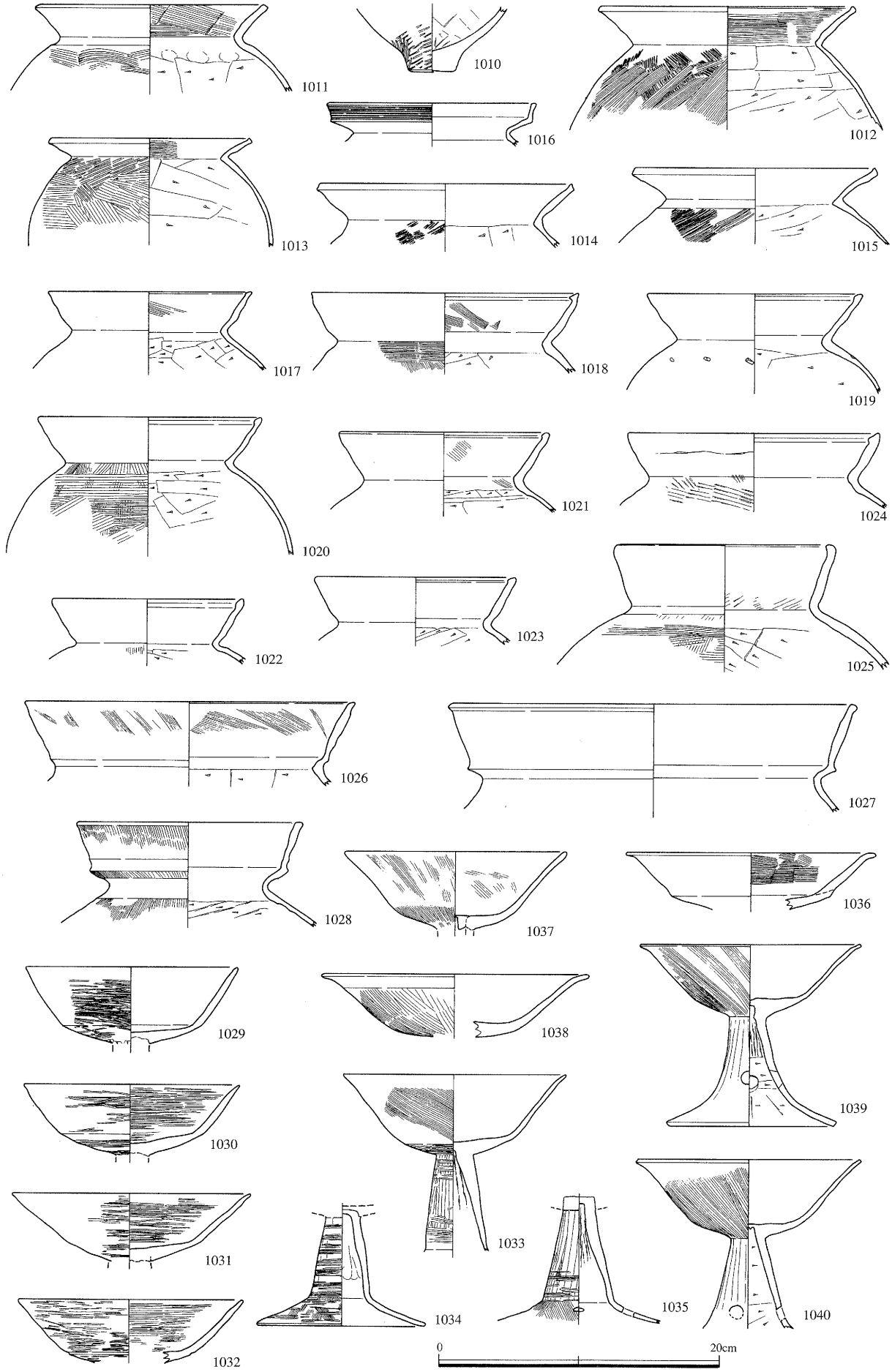
二段屈曲鉢983は精良胎土で、器壁は薄い。色調は橙色（2.5YR 6/8）を示す。摩滅のため調整不明。小型丸底鉢984は微細～1㎜の砂粒を著しく含む通常胎土ながら、シャープにつくる。体部外面下半にヘラケズリを施すが、他は摩滅のため調整不明。小型丸底鉢985は通常胎土、厚手の粗製品である。口縁部ヨコナデ、体部外面は雑なナデ、内面はヘラケズリと粗雑なナデで仕上げる。椀形鉢986はやや精良な胎土である。口縁部に条線の入るヨコナデ、他はナデ仕上げ。口縁部内面1～2cm部分に煤が付着しており、灯明皿の状況に類似する。あるいは、蓋として使用したのかもしれない。987は山陰系の低脚杯の脚部である。脚部はナデ仕上げ、体部内面は不明。色調は灰黄褐色（10YR 6/2）で、粗砂を含む、山陰からの搬入品である。988は側面が長方形、断面が逆台形を呈する異型土器。口縁部は欠損する。ナデ仕上げ。

溝0301出土遺物（第129図991～第132図1093）　本遺構では、埋土は大部分が灰色（10Y 4/1）粘土であるが、部分的に深くなってオリーブ黒色（10Y 3/1）粘土が確認された。前者を上層、後者を下層として遺物は取上げており、991～1083が上層、1084～1093が下層である。

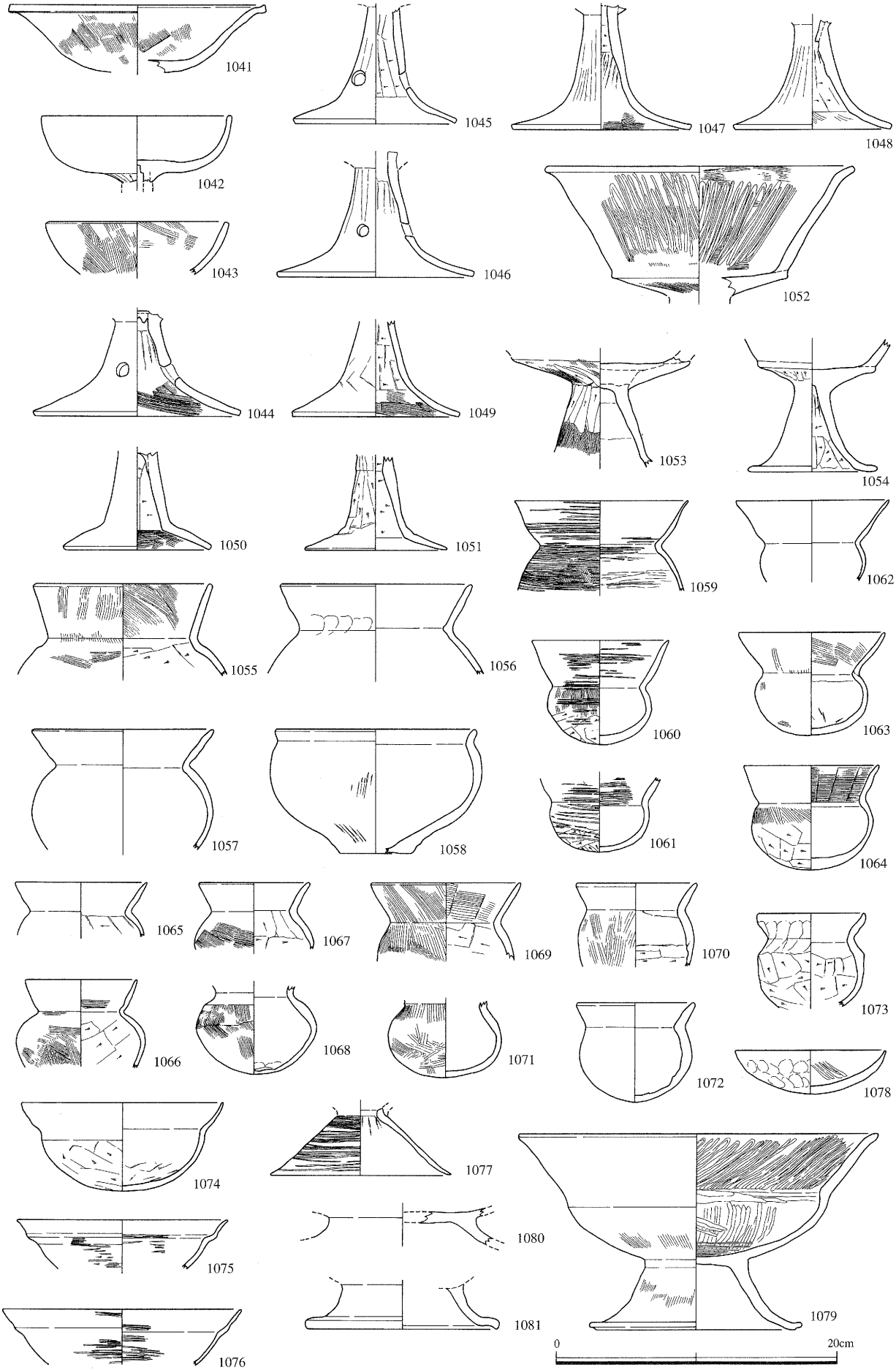
広口壷991は生駒西麓産胎土。内面ヘラミガキ、端部と外面はヨコナデ仕上げ。雑なクシ描き波状文と竹管円形浮文を巡らせる。混入の可能性。広口壷992は、口縁端部ヨコナデ、内外面ナデ仕上げである。端部にクシ描き波状文を巡らせる。混入の可能性。広口壷993は讃岐系と考えられる。内外面ヨコナデ仕上げで、外面に暗文的な縦ヘラミガキを巡らせる。灰黄褐色（10YR 6/2）を呈する。短頸壷994は微細～１㎜程度のクサリ礫の目立つ胎土で、搬入品である。995～1000は短頸直口壷であり、997・998が生駒西麓産胎土、他は非河内胎土である。非河内産は、口縁部内外面ともにヨコナデ仕上げである。999・1000の外面に縦方向のハケメ痕、995の内面に横方向のハケメ痕が確認できる。996・999の体部内面はヘラケズリ。中河内産は直線的な口縁部と内面の屈曲が鋭いことが特徴的。内面に横方向のハケメの後に軽くナデ仕上げる。外面は縦方向のハケメの後に丁寧なヨコナデによってほぼ完全にナデ消す。1001～1003は二重口縁壷である。1001は口縁部ヨコナデ、頸部内面はヨコハケの後、ヨコナデ。体部外面は縦方向ハケメの後、ヨコナデ、内面ヘラケズリ仕上げ。灰黄色（2.5Y 7/2）を呈す。山陰系。1002は口縁部ヨコナデ、頸部外面は縦方向ハケメの後ヨコナデ、内面はヨコナデ。体部外面はヨコナデ、内面ヘラケズリ仕上げ。にぶい黄橙色（10YR 7/3）を呈する。山陰系。1003は口縁部、頸部はヨコナデ。体部外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ仕上げ。にぶい黄橙色（10YR 7/3）を呈する。山陰系か。1004・1005は東阿波型の二重口縁壷である。両者ともに東阿波型特有の頸部内面の接合が確認できる。頸部外面に左斜上方への後、全面ヨコナデ仕上げ。肉眼観察によるが1004は結晶片岩、クサリ礫が確認できるが、1005には認められない。両者を比較すると、1004は口縁端部を丸く終わらせるに対して、1005は口縁端部を内面肥厚させ、頸部ハケメも鋭さが失われている点が異なり、前者よりも新しい傾向を示す。二重口縁壷1006は、クサリ礫が目立つ。内外面とも剥離著しく調整不明。二重口縁壷1007は、いわゆる下川津B類胎土の讃岐系二重口縁壷である。口縁部外面は縦方



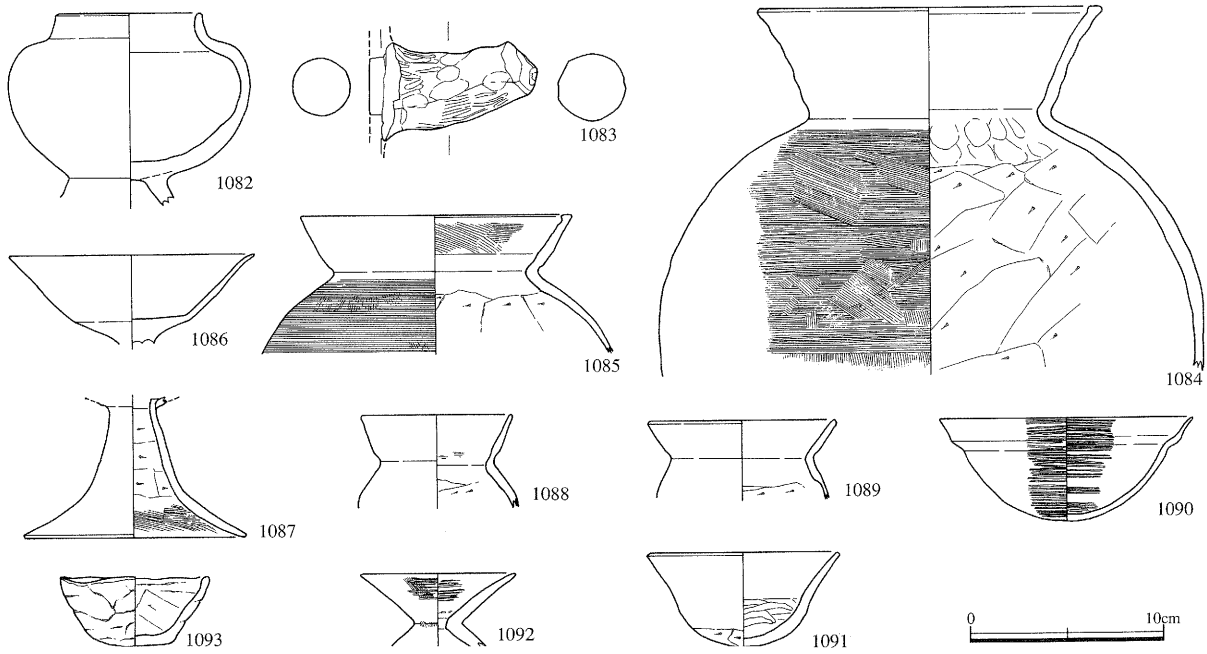
第129図　溝0301出土遺物（1）



第130図　溝0301出土遺物（2）



第131図　溝0301出土遺物（3）



第132図　溝0301出土遺物（4）

向ハケメの後、丁寧なヨコナデ仕上げ、内面はハケメの後、雑なナデ仕上げ。頸部は内外面ヨコナデ。1008は、大型鉢と考えられる。生駒西麓産胎土、あるいは讃岐下川津B類胎土。器壁の薄い点が特徴的。口縁部は摩滅著しいが、ヨコナデが認められる。体部外面不明、内面ヨコナデ仕上げ。船橋遺跡にもあるが、類例は少ない。1009は山陰系の大型鉢、あるいは甕。多量の石英、長石、角閃石、金雲母の微粒を含み、色調は褐灰色（10YR 5/1）を呈する。内外面ヨコナデ仕上げ。

1010は伝統的な叩き甕。内面はクモの巣状の板ナデ。ハケ甕1011は、橙色（2.5YR 7/8）を呈する。

1012～1015は庄内型甕であるが、バラエティーがある。1012は非河内産の大和型庄内甕で、黄灰色（2.5Y 6/1）を呈する。左上がりの細筋叩き（7条／cm）の後、右上がりの鋭いハケメを施す。内面は左方向へラケズリで、屈曲部におよばない。1013は生駒西麓産胎土ながら角閃石が少なく、黄灰色（2.5Y 5/1）を呈する。叩きはやや太筋（3条／cm）で、体部上半までハケメを施す。口縁部は短く、内面は左斜上方へのヘラケズリ。1014・1015は、通常の暗褐色（10YR 3/3）を呈する生駒西麓産胎土。叩き単位は1cmに7条と6条でやや細筋であり、内面は右斜上方へラケズリ。

吉備系甕1016の拡張部ハケメはあまい。にぶい橙色（7.5YR 7/4）を呈する。

1017～1025は布留型甕であり、すべてが非河内胎土である。体部器壁の薄い1017～1023が主体で、やや厚い1024、厚手で長胴化すると考えられる1025がある。体部器壁の薄いものは、口縁部ヨコナデ、体部内面に右方向へのヘラケズリ。体部外面はタテハケ後、ヨコハケであり、図示されていないものはすべて表面摩滅による。なお、1019の肩部に棒状工具の先端による米粒大の刺突文3点が残る。1024は口縁部も明らかに厚手化が進行する。肩部ハケメも粗い工具で断続的に

施す。1025は肩部のタテハケ後、ヨコハケは鋭いものであり、長胴化する系譜上では初期のものと考えられる。なお、内面ヘラケズリは唯一左斜上方へ施す。1026～1028は山陰系の中型甕。1026は口縁部ハケメ後、ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。褐色（10YR 4/4）を呈す。1027はヨコナデ、体部内面ヘラケズリ。にぶい黄橙色（10YR 7/3）を呈す。1028は外面ハケメの後、口縁部下半と屈曲部に強いヨコナデ。内面はヨコナデ、体部はヘラケズリを施す。にぶい黄橙色（10YR 7/2）を呈す。

高杯1029～1035はやや精良な胎土を使用し、回転による幅１ 以下程度の極細ヘラミガキを施す。中でも、1029～1032は製作技法も極めて類似した一群である。体部外面はヘラケズリを施すようであり、その後に体部内外面と口縁部内面に回転による極細ヘラミガキを螺旋状に施す。口縁部外面の極細ヘラミガキは螺旋状にはならず、分割しつつミガキを施す。1029～1031から、脚柱部との接合は別造りした脚柱部の接合面に放射状に刻みを入れておこなうことが確認できる。1033は上記一群の粗雑化したもの。体部外面にヘラケズリを施した後、螺旋状の極細ヘラミガキを施すが、口縁部外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。脚部は縦方向に細かな面取りの後、部分的に螺旋状の極細ヘラミガキを施す。内面はシボリをナデ消す。1034・1035は外面に縦方向の細かな面取りとハケメ、部分的に螺旋状の極細ヘラミガキを施す。内面はシボリをナデ消し、裾部内面もナデを施す程度である。1036は、やや精良な胎土である。口縁端部ヨコナデと内面ハケメ以外は摩滅のため調整不明。

1037～1041の高杯には形態的にはさきの精良な一群に類似するが、調整の手抜きと新たな技法が確認できる。すなわち、体部外面ヘラケズリと螺旋状の極細ヘラミガキは施さず、脚柱部との接合において棒突き痕のある小型円盤充填が確認できる。いずれも外面は体部から口縁部にかけて放射状のハケメを施し、内外面はナデ仕上げ。脚部の残る1039・1040は外面に面取りして軽いナデ、内面はヘラケズリを施す。なお、1039は２方、1040は三方スカシ。1038・1041は、粗砂を多く含む粗雑な胎土である。

1042・1043は椀形高杯である。1042は口縁部と内面ヨコナデ、外面ナデ仕上げ。別作りの脚部を挿入する。棒突き痕が確認できる。1043はハケメの後、内面のみナデ仕上げる。

1044～1046は３方スカシを有する。外面は、1045・1046に縦方向の面取り痕が認められる。脚部内面はシボリをナデ消す1044・1046と、ヘラケズリ1045の二者がある。1044には棒突き痕のある小型円盤充填が残存し、1046も同技法と考えられる。

1047～1051はスカシのないもの。いずれにも脚部内面に横方向ヘラケズリを施すことが特徴的である。

1052・1053は大型高杯である。1052は精良な胎土。内外面ハケメの後、口縁部ヨコナデの後、暗文的なヘラミガキを施す。内面は燻していると考えられ、黒色を呈する。1053は外面ハケメの後、ケズリを施す。内面は体部、脚部ともナデ仕上げ。体部、脚部は別造りで、脚部頂部に放射状に刻みを入れて体部と接合する。

1054は粗砂とともに、若干の５ 程度の小礫も含む粗い胎土である。口縁部ヨコナデ、体部外面と脚部内面はヘラケズリ、他の部位はナデ仕上げである。

1055～1058は丸底壷、あるいは鉢。1055・1056は通常胎土。前者の口縁部外面には煤が付着する。1057はやや精良な胎土の精製品。体部外面下半はヘラケズリ。1058は鉢か手焙形土器である。粗砂、小礫を多量に含み、外面にハケメが部分的に残存する。内面は黒色化する。

小型丸底壷1059～1061はいずれも精良胎土で、体部内面以外に横方向の極細ヘラミガキを施す精製品である。1059は体部内面を丁寧なヘラケズリの後、ヘラミガキを施す。1060・1061は明るい橙色（5YR 6/8）を呈することが特徴で、他の粗製小型丸底壷には見られない。体部外面下半のベースは丁寧なヘラケズリである。なお1062は摩滅が著しいが、精良胎土で薄く仕上げられており、同様の精製品と考えられる。

1063～1066は精製品と同形態・同技法で薄く仕上げられるが、極細ヘラミガキは用いず、通常胎土で色調は灰黄褐色系の暗いものである。1067～1073はさらに粗製化したもの。やはり通常胎土で色調は暗い。形態は崩れ、部分的に見られるヘラケズリも極めて雑で、器壁も厚い。

浅鉢1074はやや精良な胎土で、体部外面を丁寧にヘラケズリし、薄く仕上げた精製品。二段屈曲鉢1075・1076は精良胎土で、横方向の極細ヘラミガキを蜜に施す。なお1075の体部外面のベースは丁寧なヘラケズリである。小型器台1077は砂粒を含まない精良胎土で、外面に横方向の極細ヘラミガキを蜜に施す。内面は丁寧なナデ仕上げ。小皿1078は、山陰系。外面は口縁部にヨコナデを施すのみで、指頭痕が残る。内面はヘラミガキ。

1079は異形の台付鉢。爐形土器との関連を想定できる。形態と体部に別造りの脚部を貼りつけることから、1080・1081も同形態と考える。土師質で、三者ともに胎土は異なる。1079は口縁部に条痕の残る粗いヨコナデの後、内面のみにヘラミガキ。体部外面はハケメ（5条/cm）の後ナデ仕上げ、内面は分割ヘラミガキ。脚部外面にハケメ（8条/cm）の後、内外面に条痕の残る粗いヨコナデ仕上げ。体部と脚部のハケは別工具である。石英・長石からなる微細砂を多量に含み、にぶい黄橙色（10YR 7/3）を呈す。1080は脚部内外面ヨコナデ。体部内面ナデか。石英・長石・チャートからなる粗砂を多く含み、にぶい黄橙色（10YR 7/3）を呈す。1081は条痕の残る粗いヨコナデ仕上げ。石英・長石・チャートからなる微細砂を含み、にぶい橙色（5YR 7/4）を呈す。

1082は陶質の脚台付き短頸壷で、厚手で重量感がある。体部との接合は別造りの脚台を貼りつけるが、その際に生じた脚台内面頂部の同心円文あて具痕が認められる。口縁部と体部内面上半、脚台との接合部分にヨコナデ。体部外面ナデ、内面下半は粗雑な工具ナデ仕上げ。断面は赤色（10R 5/8）を呈す。甑把手1083は、円形に切出した基部を体部に挿入するもの。手捏ねで部分的にヘラミガキを施す。

短頸直口壷1084は非河内胎土である。口縁部ヨコナデ、体部外面は鋭い先端のハケメ、内面はヘラケズリ仕上げ。布留甕1085は非河内胎土。体部器壁は薄く、肩部に明確な横方向ハケメを施す。高杯1086・1087は通常胎土。1086は全面ナデ仕上げ。1087は外面ナデ仕上げ。残存しないが、

小型円盤充填によるものである。小型丸底壷1088・1089は、通常胎土で色調は灰黄褐色系の粗製化したものである。体部内面ヘラケズリ、他はヨコナデ仕上げ。二段屈曲鉢1090は精良胎土で、横方向の極細ヘラミガキを蜜に施す。明るい橙色（5YR 6/8）を呈する精製品である。小型鉢1091は、粗砂を多量に含む。口縁端部はカットしており面を有す。口縁部と体部外面上半ナデ、体部外面下半ヘラケズリ、内面ヘラミガキである。小型器台1092は通常胎土で器壁は厚い。口縁部には部分的に横方向の極細ヘラミガキが認められる。手捏ね土器1093は粗雑なつくりで、内面を粗くナデるのみで、外面は粘土紐痕を残す。

溝0354出土遺物（第133図1094～1096）　布留甕1094は非河内胎土で、口縁部ヨコナデ仕上げ。小型丸底壷1095・1096はいずれも精良胎土で砂粒を含まない。口縁部内外面に横方向の極細ヘラミガキを施す。細片のため図化しえていないが、他にも生駒西麓産胎土の庄内甕、東阿波型甕等を含んでおり、布留初頭に属する。

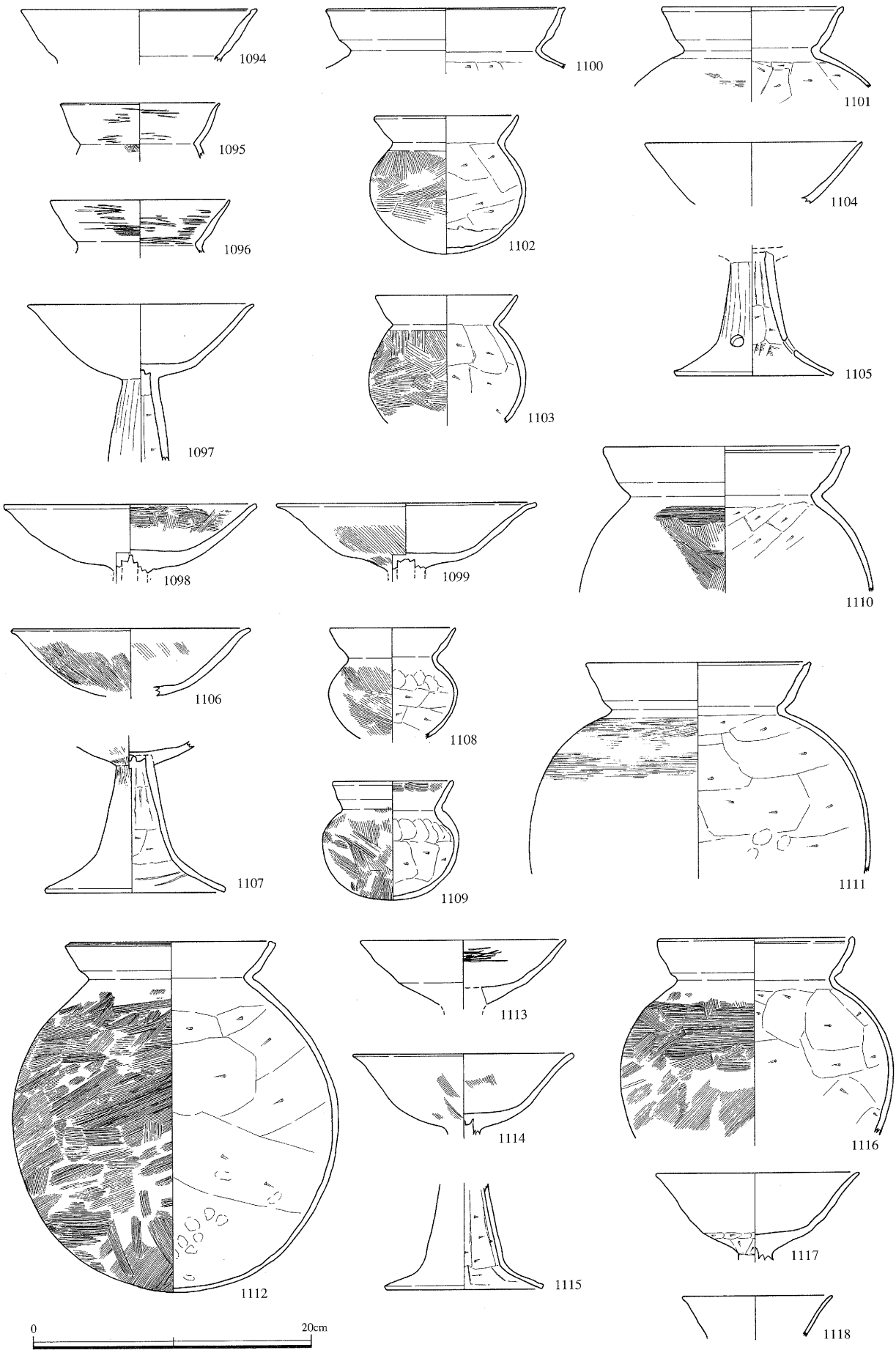
溝0378出土遺物（第133図1097）　高杯1097は口縁部内外面ヨコナデ、体部外面は摩滅のため調整不明。脚部外面は立て方向の面取り痕、内面はヘラケズリである。脚部との接合時の「棒突き痕」が確認できる。布留新相に属する。

土坑0360出土遺物（第133図1098・1099）　いずれも通常胎土であり、外面の稜線は消失した段階のものである。また、脚部との接合時の「棒突き痕」も認められる。高杯1098の外面には僅かにハケメが残存するも、成形時の指頭痕とその後のナデが主体である。口縁部ヨコナデ、体部内面はハケメ後ナデ仕上げ。高杯1099は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ後ナデ、内面丁寧なナデ仕上げ。布留新相に属する。

土坑0362出土遺物（第133図1100～1105）　布留甕1100・1101は非河内胎土。前者は口縁端部に平坦面を形成し、後者は丸く肥厚する。いずれも口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ。小型丸底壷1102・1103はいずれも通常胎土で、色調もにぶい黄褐色を呈する暗いものである。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメの後、下半をスリナデ。内面はヘラケズリである。両者は胎土、色調、調整ばかりでなく、煤が付着するなど極めて類似する個体である。高杯1104・1105はやや精良な胎土を使用する。1104は摩滅で調整不明。1105は三方スカシで、脚部内面に部分的なヘラケズリを施す。布留新相に属する。

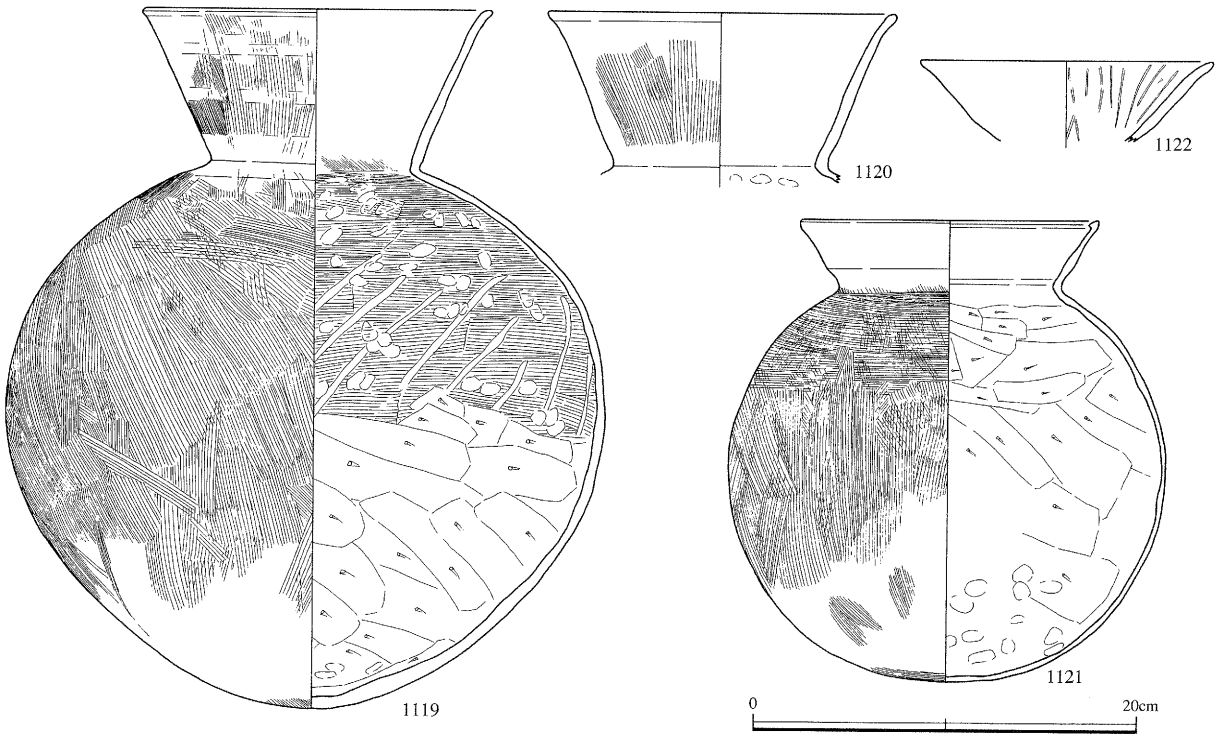
土坑0383出土遺物（第133図1106～1108）　高杯はいずれも通常胎土。高杯1106は口縁部ヨコナデ、内外面ハケメの後、内面のみ丁寧にナデ仕上げる。高杯1107は、「棒突き痕」を有する小型円盤充填である。外面は、体部と脚部接合部分にハケメが残る以外はナデ仕上げである。脚部内面はシボリ痕をナデ消すが下半はヘラケズリ、裾部ナデ仕上げ。なお裾内面に２条ヘラ描き沈線がある。小型丸底壷1108は通常胎土で、色調はにぶい黄褐色を呈する暗いもの。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面下半はヘラケズリで器壁は薄く仕上げる。布留新相に属する。

ピット0377出土遺物（第133図1109）　小型丸底壷1109は、粗製胎土でにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面下半はヘラケズリ。



第133図　布留期各種遺構出土遺物

溝0354（1094～1096）、溝0378（1097）、土坑0360（1098・1099）、土坑0362（1100～1105）、土坑0383（1106～1108）、SP377（1109）、土坑0392（1110）、土坑0425（1111）、土坑0426（1112～1115）、土坑0429（1116～1118）



第134図　井戸0431出土遺物

土坑0392出土遺物（第133図1110）　布留甕は非河内胎土。体部器壁はやや薄く、肩部に横方向ハケメは施す。

土坑0425出土遺物（第133図1111）　布留甕は非河内胎土でにぶい黄橙色（10YR 7/4）を呈す。体部器壁は薄く、肩部に横方向ハケメは施す。外面は全面煤付着。

土坑0426出土遺物（第133図1112～1115）　布留甕と高杯が出土した。布留甕1112は非河内胎土でにぶい黄橙色（10YR 7/3）を呈す。体部器壁は薄くするが、肩部に明確な横方向ハケメは施さず、体部球形を脱し、長胴化傾向を示しつつある。高杯1113は精良な胎土を使用し、内面に分割による極細ヘラミガキを施す。外面は摩滅のため調整不明。橙色（2.5YR 6/8）を呈す。高杯1114は粗砂を多く含む粗製品。内外面ともハケメ後、ナデ仕上げである。脚柱部との接合において棒突き痕のある小型円盤充填が確認できる。高杯1115は外面ナデ仕上げ、内面ヘラケズリ、裾部板ナデ仕上げである。布留３式古相に属する。

土坑0429出土遺物（第133図1116～1118）　布留甕1116は非河内胎土。肩部に明確な横方向ハケメを施す。高杯1117は通常胎土を使用し、体部外面にヘラケズリ、他はヨコナデ仕上げである。脚頂部を体部に挿入する。1118は小型丸底壷、あるいは器台。胎土はやや精良で、暗褐色（10YR 3/3）を呈する。ヨコナデ仕上げで、ヘラミガキは施さない。布留２式に属する。

井戸0431出土遺物（第134図1119～1122）　短頸直口壷1119・1120は、後者の頸部径が若干大きく復元できる以外、胎土、色調、調整が全く同じで、頸部のハケ工具（6条/cm）も同一の可能性がある。ちなみに前者の頸部は完存する。灰白色（2.5Y 7/1）を呈し、石英、長石の細砂を主体に若干のチャートを含むガサガサの胎土は山陰系の質感に類似する。口縁部内面ヨコナデ、外面

はハケメの後、部分的なヨコナデで条痕が生じる。体部外面ハケメで、低部付近はスリナデによってハケメを消す。内面はハケメの後、局部的に指頭をすり上げ、下半をヘラケズリで仕上げる。布留甕1121は非河内胎土。球形の体部で薄く仕上げており、肩部に明確な横方向ハケメを施す。高杯1122はやや精良な胎土を使用し、橙色（5YR 6/8）を呈する精製品である。外面は摩滅で調整不明。内面はヨコナデの後、暗文的なヘラミガキを巡らせる。布留２式に属する。

第７節　古墳時代後期以降

若干の遺構と包含層から遺物が出土している。

溝0021出土遺物（第135図1123～1125）　土師器椀1124・1125は、いずれも精良胎土で橙色（7.5YR 6/6）を呈する。口縁部ヨコナデ、体部外面は丁寧なナデ仕上げ。1125の内面に放射状暗文が残存する。

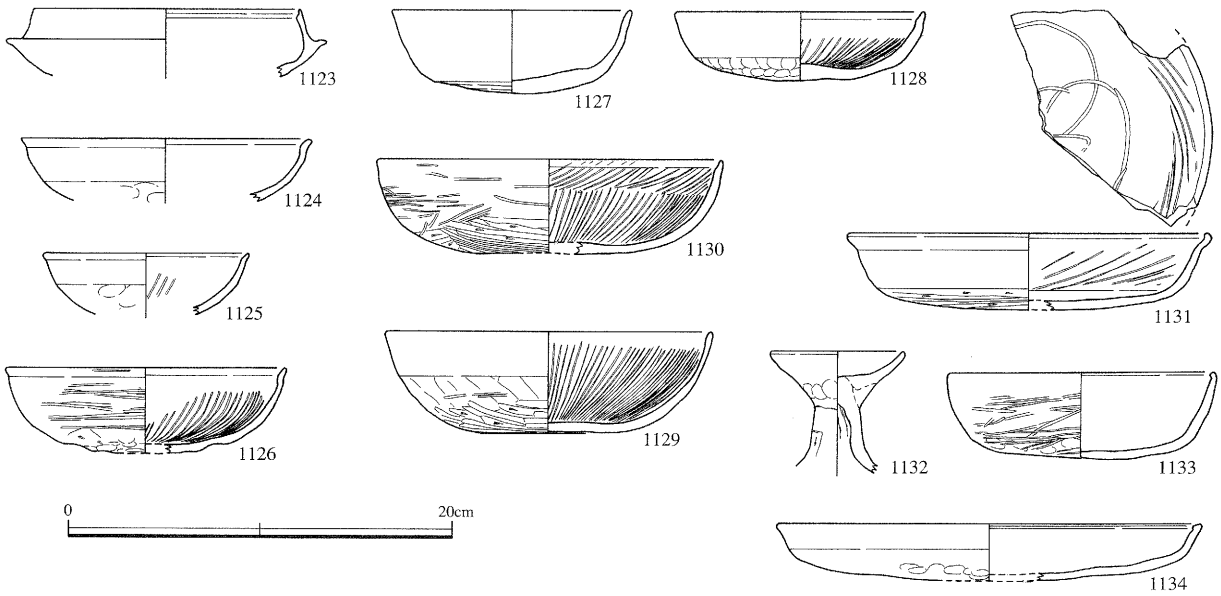
溝0056出土遺物（第135図1126）　土師器椀1126は、精良胎土で灰白色（5Y 7/2）を呈する。外面は口縁部ヨコナデの後、ヘラミガキ。体部は成形時の指頭痕が著しく、指頭に重複して型造りによって生じた下駄歯状圧痕が確認できる。内面は横方向ナデの後、放射状暗文、最後に見込み部に螺旋状暗文。

土坑0315出土遺物（第135図1127・1128）　須恵器杯身1127は、内面と外面の口縁部にかけて回転ナデ、体部外面ナデ仕上げ。内面土師器椀1128は、精良胎土で灰白色（5Y 7/2）を呈する。外面は口縁部ヨコナデ、体部ナデ仕上げ。内面は横方向ナデの後、放射状暗文。

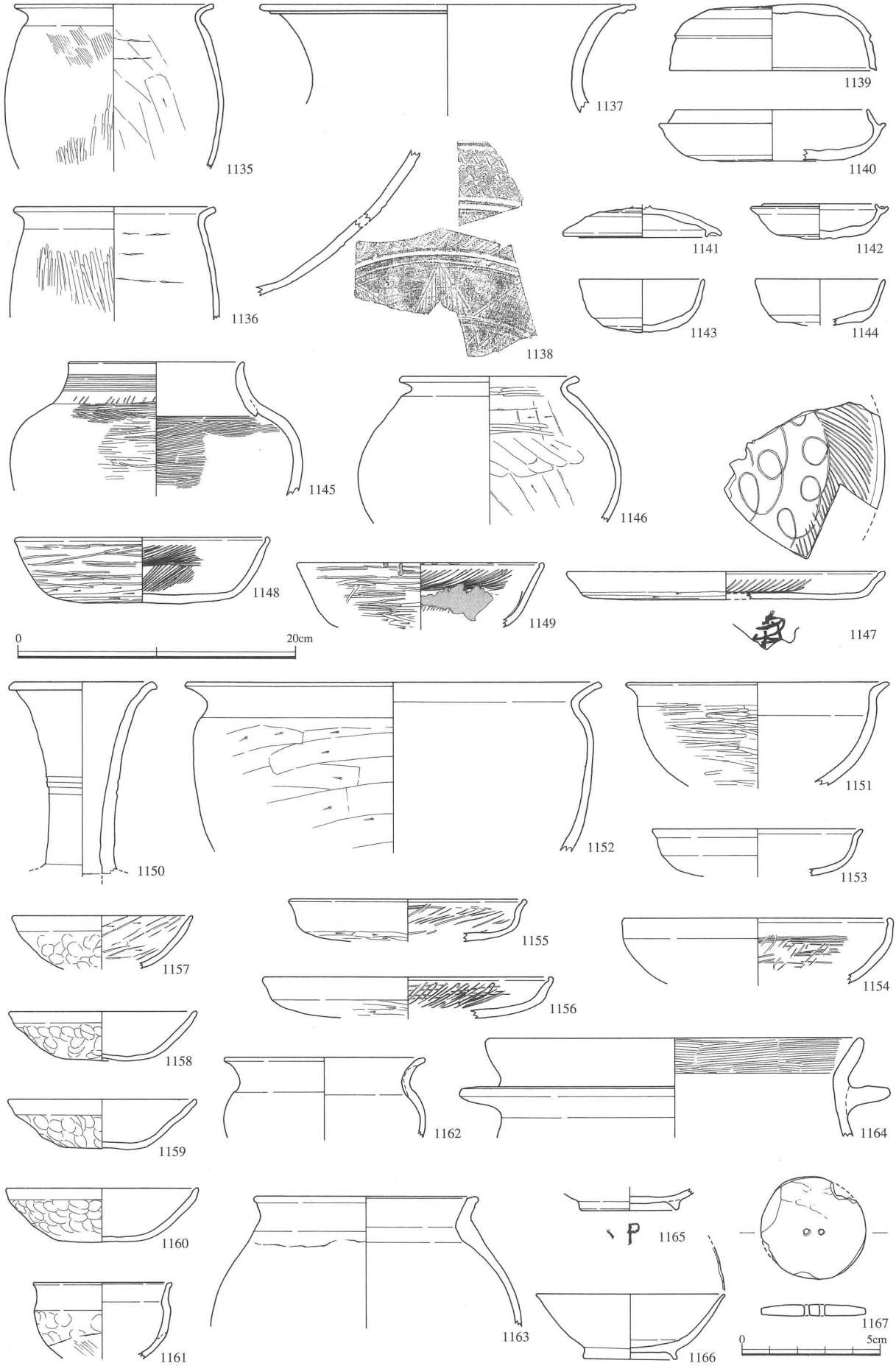
土坑0352出土遺物（第135図1129）土師器椀1129は、精良胎土で灰白色を呈する。外面は口縁部ヨコナデの後、ヘラミガキ。体部はヘラケズリののちヘラミガキ。内面は横方向ナデの後、放射状暗文。

土坑0359出土遺物（第135図1130）上記の土師器椀1129とほぼ同様である。

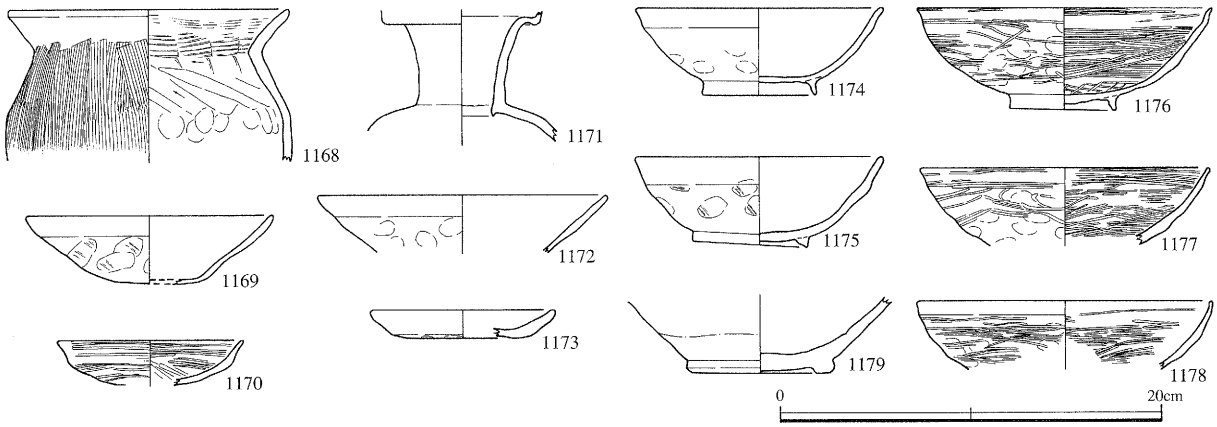
３面直上出土遺物（第135図1132～1134）　土師器高杯1132は、小型の粗製品。やや精良胎土。工具ナデおよび指頭ナデで仕上げる。土師器椀1133は、精良胎土で灰白色（5Y 7/2）を呈する。外面は口縁部ヨコナデの後、疎なヘラミガキ。体部は成形時の指頭痕残るが、ナデとミガキを施して平滑にしようとしている。なお、指頭に重複して型造りによって生じた下駄歯状圧痕が確認



第135図　各種遺構出土遺物
溝0021（1123～1125）、溝0056（1126）、土坑0315（1127・1128）、土坑0352（1129）、土坑0359（1130）、谷埋土（1131）、3面直上（1132～1134）



第136図　9層・4面直上・8層出土遺物
9層（1135～1147）、4面直上（1148・1149）、8層（1150～1167）



第137図　7・6層出土遺物
7層（1168～1170）、6層（1171～1179）

できる。内面は横方向ナデ。土師器皿1134は、やや精良胎土でやはり灰白色（5Y 7/2）を呈する。口縁部と体部内面はヨコナデ。体部外面は丁寧にナデ仕上げるが、成形時の型造りによって生じた下駄歯状圧痕が多数確認できる。

9層出土遺物（第136図1135～1147）　弥生中期甕1135・1136はいずれも生駒西麓産胎土。甕1137、器台1138は初期須恵器であり、後者は鋭利な工具先端で施文する。他に須恵器には6世紀後半（1139・1140）、7世紀（1141～1144）がある。1145は異形の土師器壷。砂粒を含まない精良胎土である。口縁部外面はハケ工具によるヨコナデ。甕1146は生駒西麓産胎土。皿1147は砂粒を含まない精良胎土。外底面に墨書がある。

4面直上出土遺物（第136図1148・1149）　いずれも砂粒を含まない精良胎土。1149は口縁端部外面から内面全面にかけて漆膜が付着する。

8層出土遺物（第136図1150～1167）　須恵器1150、土師器1151～1165、緑釉陶器椀1166、石製双孔円盤1167が出土している。椀1165は砂粒を含まない精良胎土。外底面に墨書がある。

7層出土遺物（第137図1167～1170）　土師器1168・1169、瓦器1170が出土している。椀1169は、内面を丁寧にナデ仕上げるに対して、外面は凹凸が著しく成形時の型造りによって生じたと考えられる下駄歯状圧痕が多数確認できる。

6層出土遺物（第137図1171～1179）　須恵器1171、土師器1172～1175、瓦器1176～1178、白磁椀1179が出土している。椀1175は、口縁部ヨコナデ、内面は丁寧なナデ、外面は凹凸が著しく成形時の型造りによって生じたと考えられる下駄歯状圧痕が多数確認できる。

第６章　Ｂ―１～４調査区の調査成果

第１節　Ｂ－１、２調査区の調査成果

Ｂ－１、２調査区は防災倉庫への進入路用地である。土置き場の確保、里道の保全などのため、北側のＢ―１調査区と南側のＢ―２調査区（各々349㎡）とに分割して調査した。

基本層序は基本的にＡ調査区と同様の様相である。２区については近年の撹乱を受けておらず、かつての耕作地の土壌がほぼそのまま残っていたものの、１区については地表面から１ｍくらいまで大きく撹乱されていた。掘削にあたっては、撹乱層や近世以降の堆積層は機械力によって除去し、それ以下の土層については一層ずつ人力によって掘削を進めた。全体的に遺構、遺物は希薄である。また、Ａ調査区での第１～３遺構面に相当する層位上では、特別な遺構、遺物は発見できなかった。

第４遺構面

第10層を基盤とする遺構面である。Ａ調査区の第４遺構面と同様に、９層相当の粘土層によって被覆されているが、被覆粘土層からは遺物らしいものはわずかしか出土していない。検出遺構も、Ｂ－２調査区北端で溝が、南端で土坑が検出されているのみである。

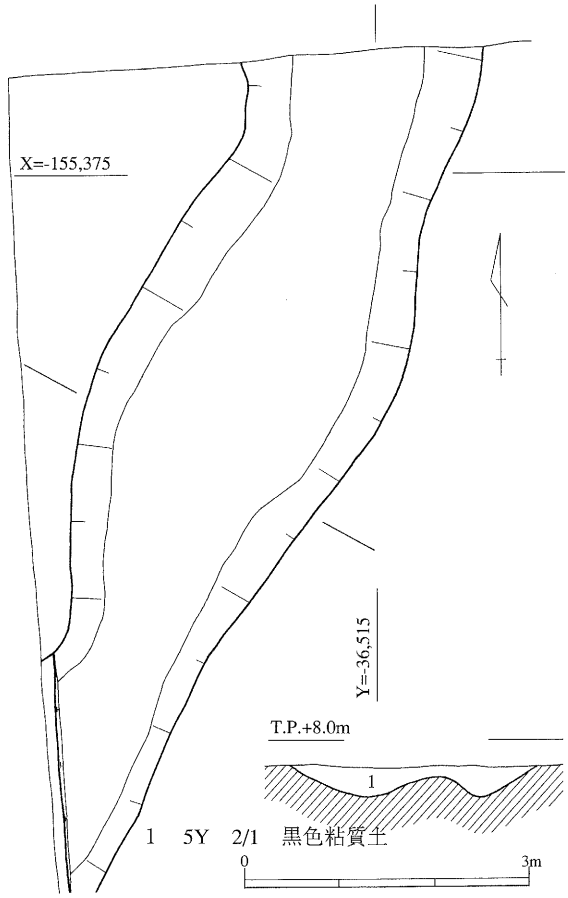
溝1109　Ｂ－2調査区の西北隅３－M27～N27地区で検出された溝で、北北東方向から南南西方向にのびる。幅2.5m、深さ25ｃｍ、検出長10m、内部堆積土は5Y2/1黒色粘質土である。

第２節　Ｂ－３調査区の調査成果

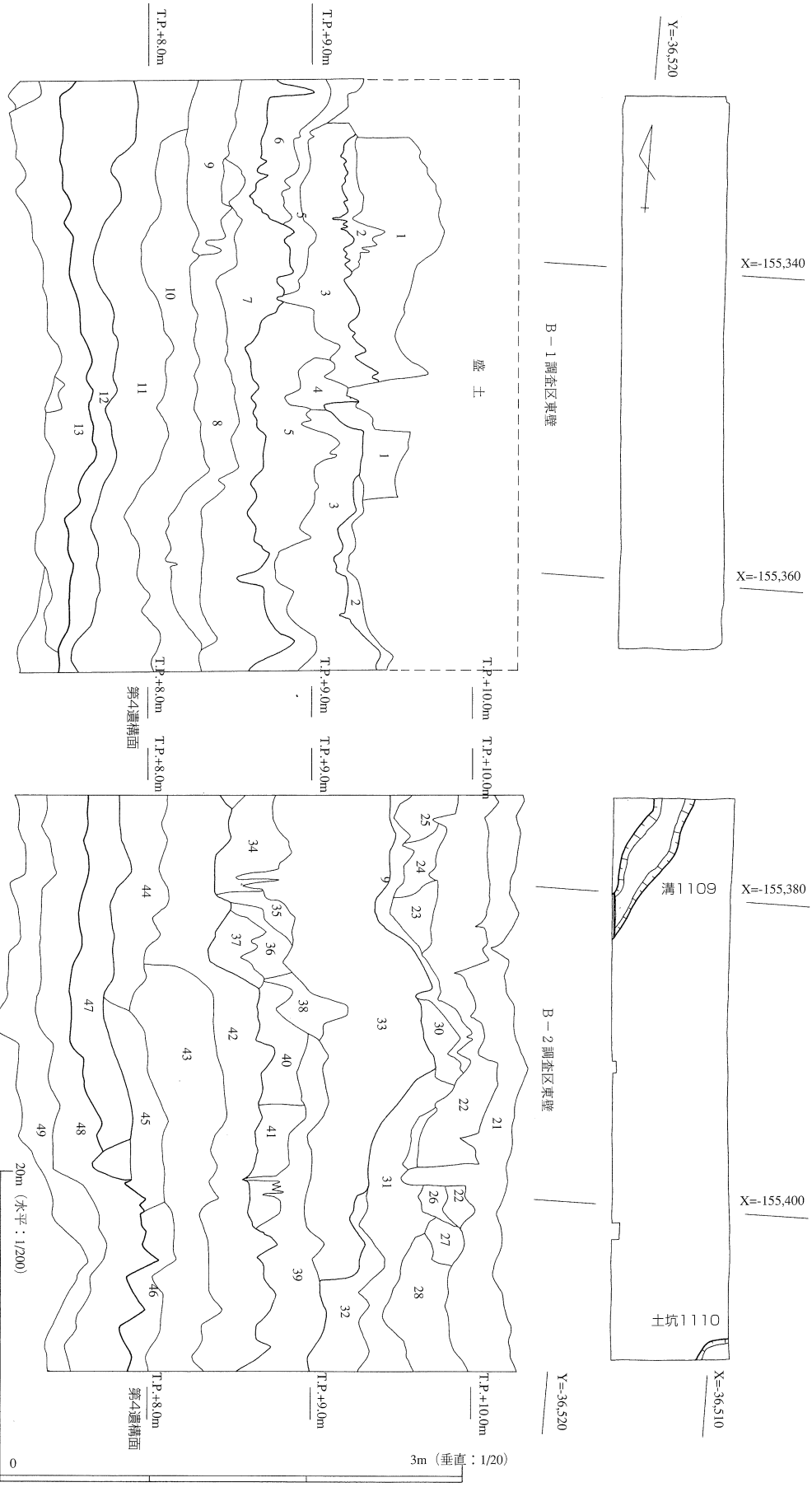
Ａ調査区の西側、貯水槽の設置予定区にあたり、調査面積は146㎡の規模である。掘削にあたっては、地表面から１ｍの深度までを機械力によって除去し、それ以下の土層については一層ずつ人力によって除去した。基本的には砂と粘土の互層からなっており、Ａ調査区とほぼ同様の堆積状況を示してはいるものの、レベル的にはＡ調査区よりも全体的に低くなる傾向がある。特に８層以下ではその傾向が顕著である。遺構面は合計で３面分確認できた。（第８図）

第３遺構面

布留式包含層を基盤に形成された遺構群である。被覆層はＡ調査区での８層に類似するが、遺物は被覆層中でも上部から若干出土するのみであまり多くはない。主要遺構は溝1002であり、



第138図　Ｂ－２調査区溝1109平面、断面図

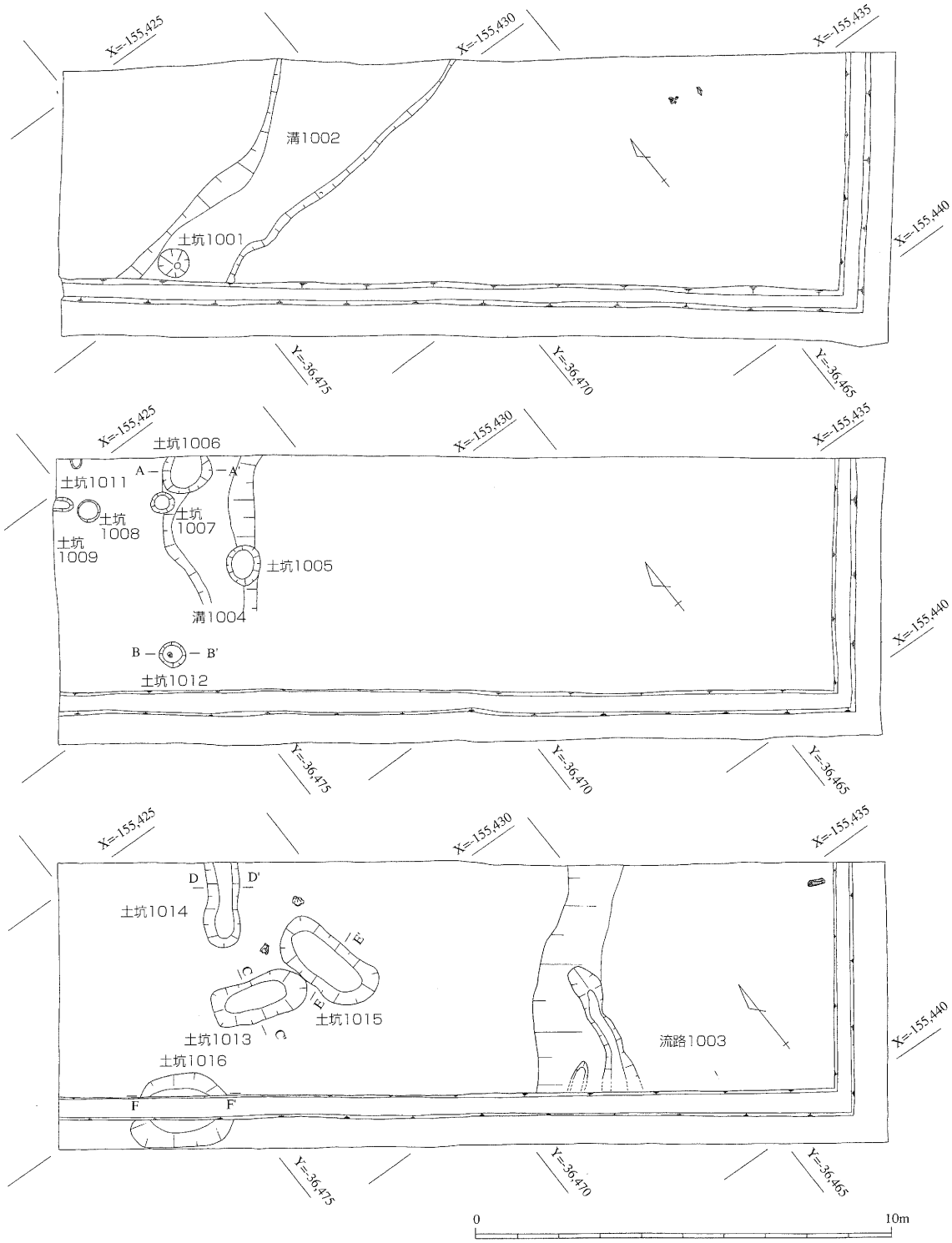


第139図　B－1－2調査区遺構配置図・土層断面図

溝1002内部からは馬鍬の本体部分が良好な状態で出土している。

溝1002（遺物：第150図39～43）　２－Ｙ５～Ｘ６地区で検出された、東西方向に伸びる溝で、幅は２～3.2m、深さは20～40ｃｍ、延長で６ｍ分が検出されている。内部堆積土はシルト層が主体となっており、上下２層にわけられる。上層は10GY3/1暗緑灰色シルトで、下層はN6/灰色シルトである。浅い溝であるが、溝の底からは馬鍬本体が放棄されたような形で検出された。遺物は馬鍬以外に、土師器類が出土している。

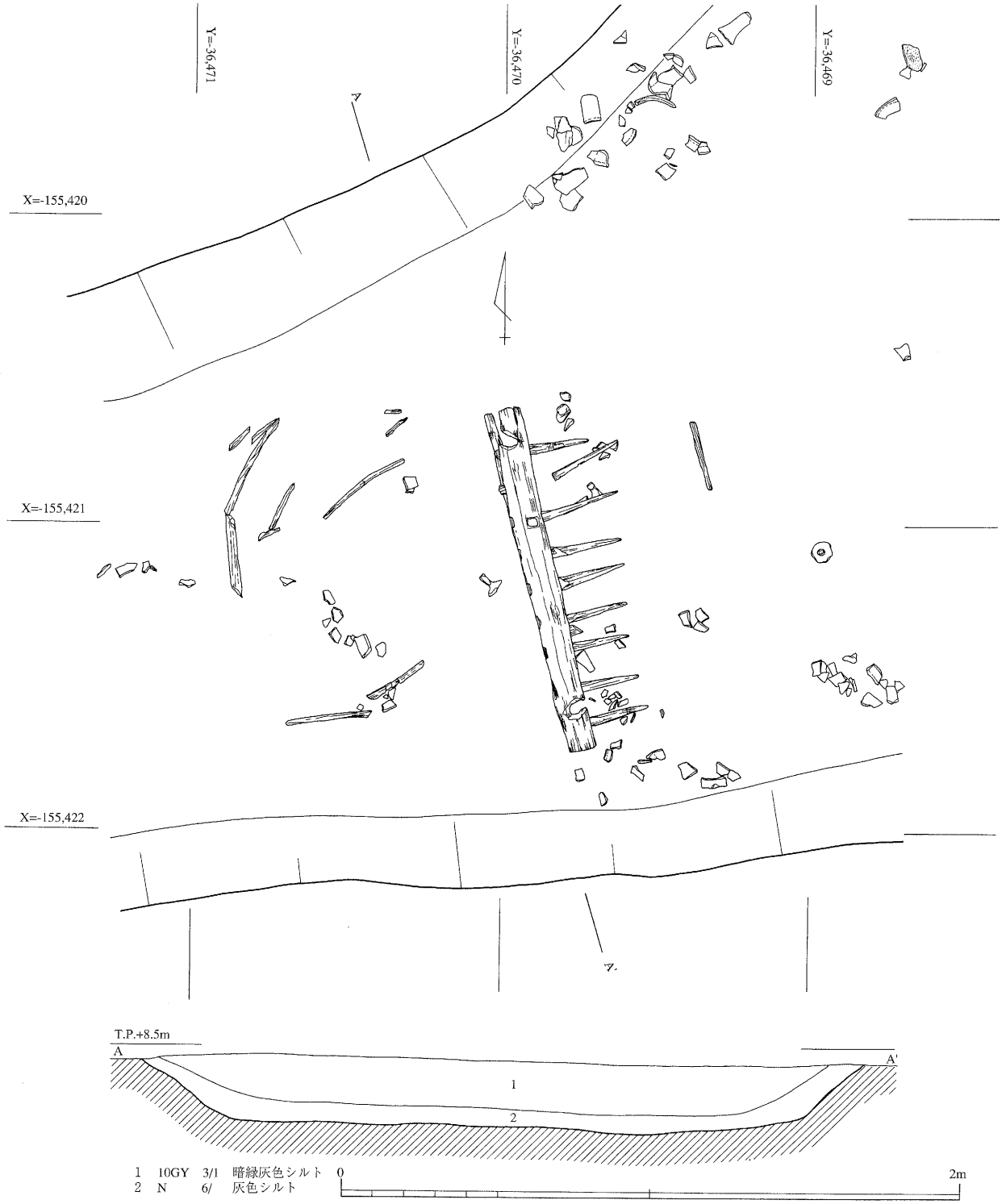
馬鍬出土状況　調査区中央部を東西方向に流れる溝1002の底部で、まるで放置されたような状況



第 140図　Ｂ－３調査区第３、４ａ・４b遺構面遺構配置図

で出土している。横木は南北方向を指しており長さは約112ｃｍ、刃部は東の方向を向いており長さは20～25ｃｍくらいであった。柄も引棒も欠失しており、調査では発見できなかった。横木には10箇所のほぞ穴があけられて、刃が差し込まれていたが、刃の間隔は均等ではなく、不揃いである。しかしながら、全体的に残存状況は良好であり、当初の状況を良く残す良好な資料と思われる。

土坑1001 ２－Ｘ６地区で検出された円形の土坑で、溝1002の埋土に切り込むように掘られており、径70ｃｍ、深さ約30ｃｍである。内部にはN6/灰色砂質土の堆積がみられた。



第 141図　Ｂ－３調査区溝1002平面・断面図

第４ａ遺構面

この遺構面よりも下層には第10層上面を基盤にする流路1013がある。この遺構面は流路1013が埋没した後に、流路1013の堆積土の上面を基盤にして形成された遺構面である。この遺構面を第２遺構面とし、下の遺構面を流路1013のある遺構面を第３遺構面と呼称した。溝と土坑を主体に構成される遺構群であり、およそ布留式段階の遺構群である。

溝

溝1004（遺物：第150図44・45）　２－Ｘ６～Ｙ６地区に所在する。北東から南西を向いている溝で、幅1.2～2.2m、深さ10ｃｍである。埋土は5Y3/1 オリーブ黒色粘質土である。

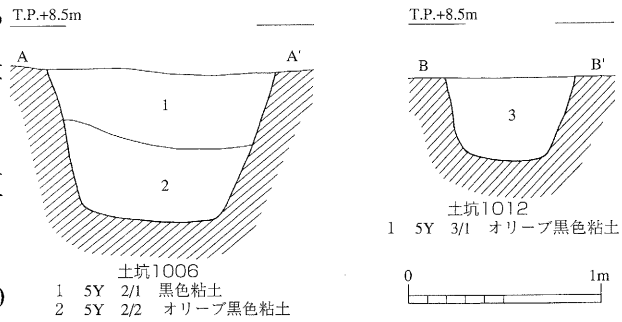
土坑

土坑1005　２－Ｙ６地区に所在し、溝1004と切りあう形の土坑である。東西80ｃｍ、南北１ｍ、深さ20ｃｍである。埋土は5Y 3/1オリーブ黒色粘土である。

土坑1006（遺物：第150図46～48）　２－Ｘ６地区に所在する。調査区北壁沿いで溝1004と切りあっている。東西1.2m、南北１ｍ以上をはかり、深さは70ｃｍである。土坑内部の堆積内は土は大きく上下2層にわかれる。上層は5Y2/1 黒色粘土であり、下層は5Y 2/2オリーブ黒色粘土である。

土坑1008　２－Ｘ６地区に所在する土坑である。東西50ｃｍ、南北60ｃｍで、内部には5Y3/1 オリーブ黒色粘土が堆積している。

土坑1012（遺物：第150図51）　２－Ｘ６地区に所在しており、溝1004より南の方にある小さな土坑で、東西60ｃｍ、南北60ｃｍ、深さは40ｃｍである。内部には5Y3/1 オリーブ黒色粘土が堆積しており、土坑の底部には小型丸底壺が置かれたような状態で出土している。



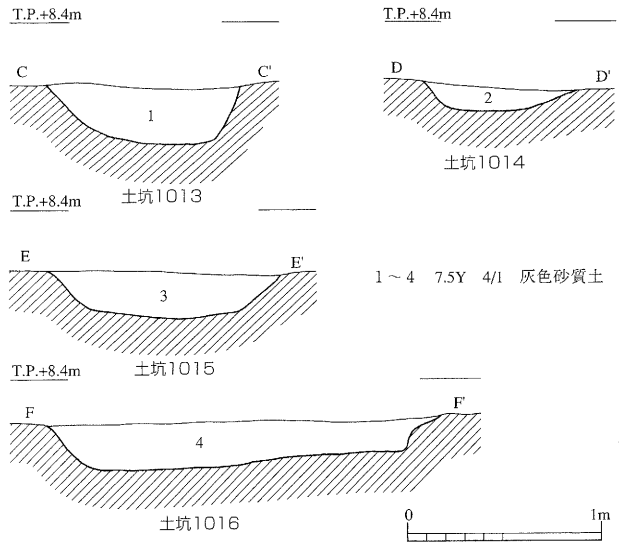
第142図　Ｂ－３調査区遺構土層断面図（1）

第４ｂ遺構面

10層上面を基盤とし、土坑、溝と自然流路などを主要な遺構とする。弥生前期に属する遺構群である。この面の被覆土は、流路1003内部でも厚く堆積している。

流路

流路1003（遺物：第147図1～第148図32）２－Ｙ８～Ｚ７地区に所在しており、調査区の東端を南北方向にのびる流路である。西側の立ち上がり部分は検出したものの、東側の立ち上



第143図　Ｂ－３調査区遺構土層断面図（2）

がり部は調査区の外にまで広がるのか検出されなかった。検出幅8.5m、深さは60ｃｍであり、流路の内部には黒色粘質土が堆積している。遺物としてはやはり弥生時代前期の土器が出土している。流路0183などと並存していたものであろうか。

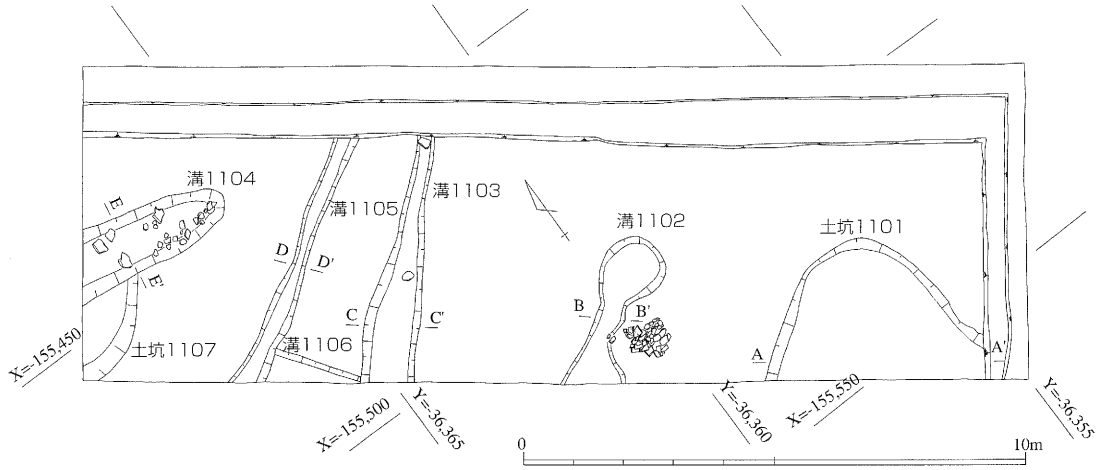
土坑

土坑1013　２－Ｘ６地区に所在する。東西2.5m、南北1.1mの細長い土坑で、深さ35ｃｍ、内部には7.5Y4/1 灰色砂質土が堆積している。

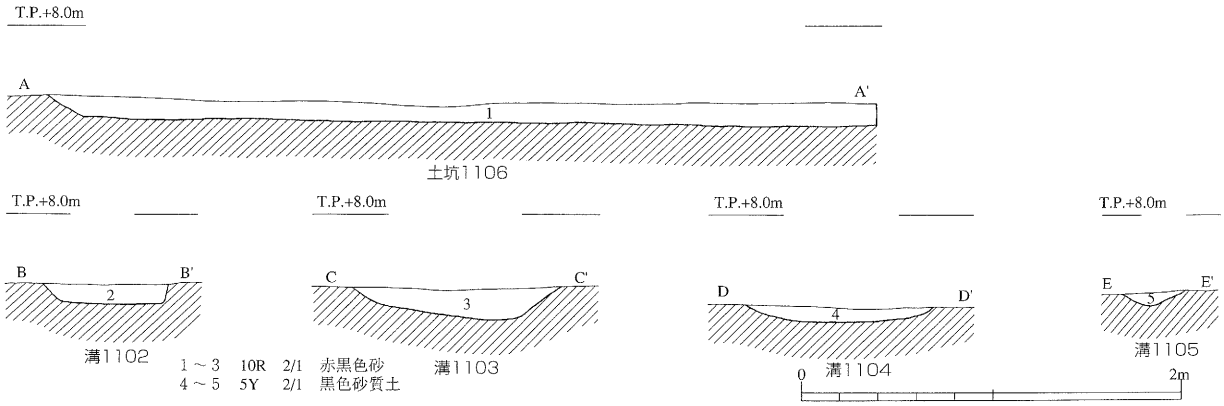
土坑1014　２－Ｘ６地区に所在する南北方向の溝状遺構である。幅90ｃｍ、検出長２ｍ、深さ20ｃｍで、内部には7.5Y4/1 灰色砂質土が堆積している。

土坑1015　２－Ｘ６地区に所在する。東西1.3m、南北2.7mの細長い土坑であり、深さは25ｃｍ、内部には7.5Y4/1 灰色砂質土が堆積している。

土坑1016　２－Ｙ５地区に所在する。調査区南西にある細長い土坑である。幅は、東西2.4m、南北1.8mで、深さは25cmである。土坑の内部には7.5Y4/1 灰色砂質土が堆積している。



第 144図　Ｂ－４調査区第４ａ遺構面遺構配置図



第145図　Ｂ－４調査区第４ａ遺構面遺構土層断面図

第３節　Ｂ―４調査区の調査成果

A調査区の東側にある調査区である。貯水槽設置の予定区である。面積は125㎡である。

第４ａ遺構面

調査区内でも東側は９層上面を基盤とするが、、西側は下層の溝1108などを被覆した埋没土の上面が基盤である。浅い落ち込みと溝を主体にする遺構群である。性格のはっきりした遺構はないものの、遺構面上にはいくつかの土器の集積がみられた。全て弥生時代前期に属するものである。

溝

溝1102（遺物：第149図33・34）　１－V28地区に所在する。幅60～120ｃｍ、検出長３ｍ、深さ10～20ｃｍである。内部には10R２/１　赤黒色砂が堆積している。

溝1103（遺物：第149図35～38）　１－U28地区に所在する南北方向の溝である。幅は0.4ｍ～1.1ｍ、検出長は５ｍ、深さは15ｃｍ、内部には10R2/1 赤黒色砂が堆積している。

溝1104　１－T27地区で検出された東西溝で、幅1.2ｍ、検出長3.5ｍ、深さ10ｃｍ、内部には5Y2/1 黒色砂質土が堆積している。溝底では破片ながら弥生土器が散乱していた。

溝1105　１－U27に所在する南北方向の溝である。幅40～55ｃｍ、検出長5､5ｍ、深さは10ｃｍ、内部には5Y2/1 黒色砂質土が堆積している。

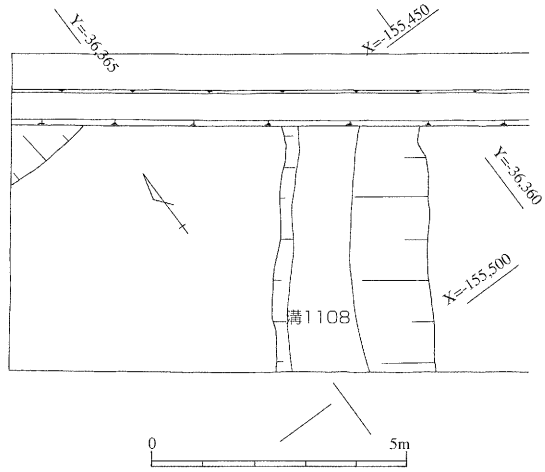
土坑

土坑1101　１－V29地区に所在する。調査区の南東隅で検出された浅い落ち込みである。東西4.5ｍ、南北2.8ｍを検出しているが、全長は不明で、深さは深いところでも20ｃｍ程度である。内部には10R2/1 赤黒色砂が堆積している。

第４ｂ遺構面

10層上面の遺構面である。第１面の西側の堆積土を10ｃｍ程度除去すると、第２面があらわれた。緩やかながら西方向へ傾斜する面である。

溝1108　１－Ｖ28地区に所在する南北方向の溝で、緩やかな斜面の途中で形成されている。幅約３ｍ、検出長５ｍ、深さ10ｃｍで、埋土は7.5Y4/1 灰色粘質土である。



第146図　Ｂ－４調査区第４ｂ遺構面遺構配置図

第７章　Ｂ―１～４調査区の調査成果（遺物）

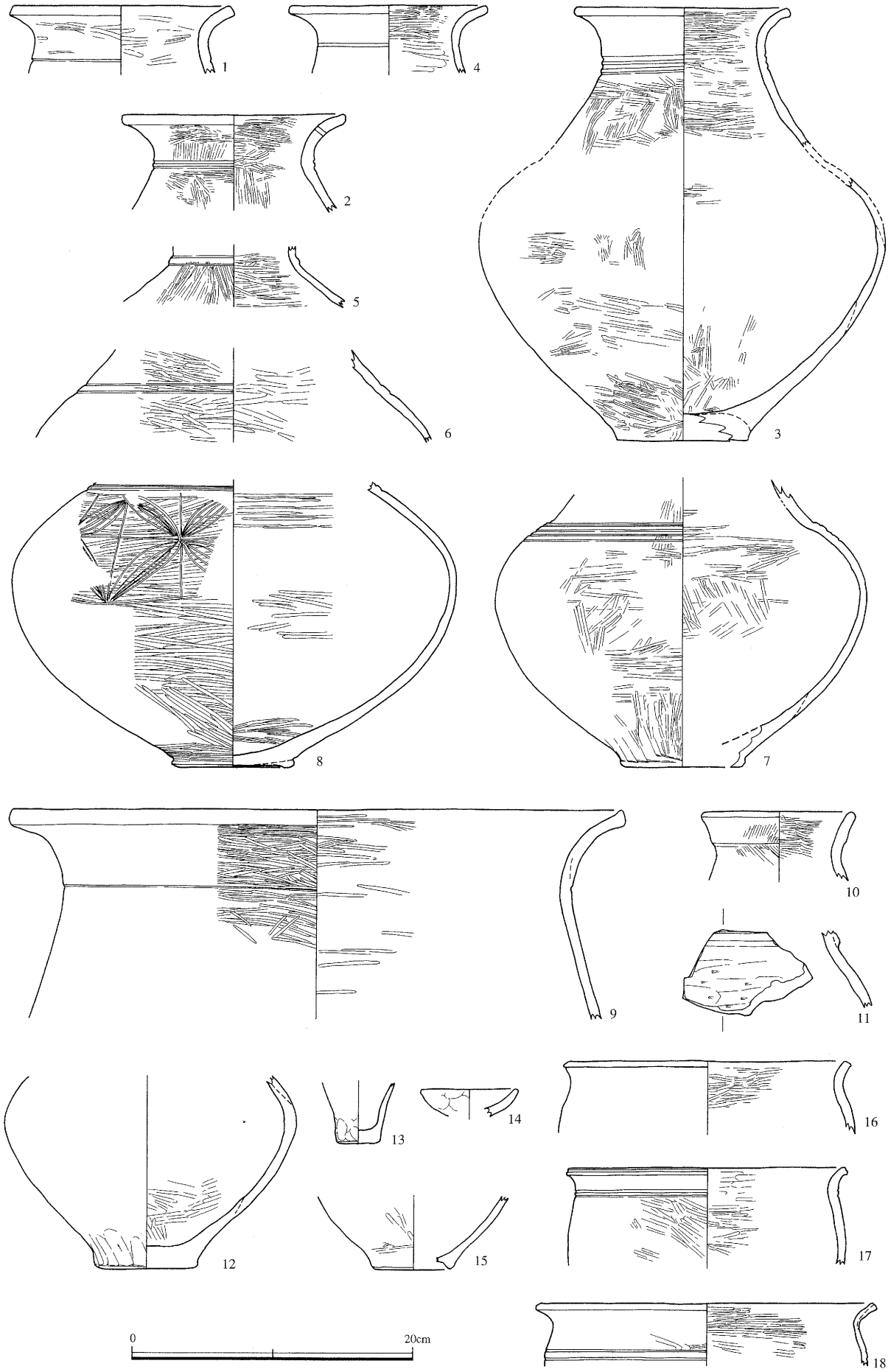
Ａ調査区の隣接地の調査区であり、同様の時期の遺物が出土している。

流路1003（第147図1～第148図32）　壷・鉢・甕の他、ミニチュア土器、縄文晩期突帯文深鉢等があり、壷4と不明11が生駒西麓産胎土である。

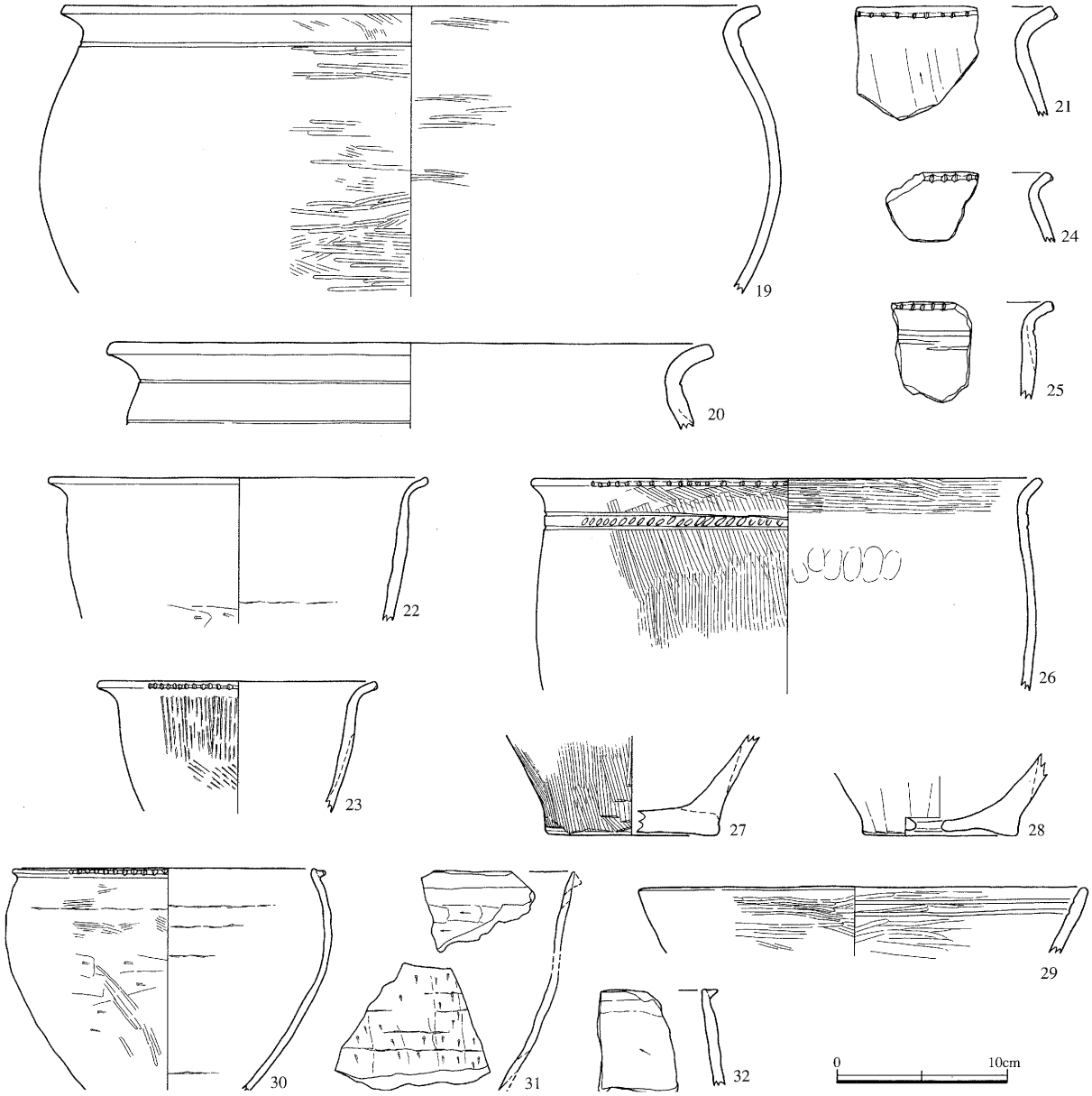
壷1は低い段であり、段裾を細くヘラで縁取る。内外面ヘラミガキ。壷2も低い段で、上方にヘラ描き沈線１条を巡らせる。口縁部外面はハケメの後、ヨコナデ、部分的にヘラミガキ。他はヘラミガキ仕上げである。１孔が残存し、本来１孔１対である。壷3の口頸部間はやはり板状工具で削り出した低い段であり、上方にヘラ描き沈線２条を巡らせる。口縁部外面は完存するが、ヘラミガキはおよばずヨコナデ仕上げである。外面段以下と内面はヘラミガキ仕上げ。なお、頸部外面の下地は縦方向ハケメである。生駒西麓産胎土の壷4のみが、ヘラ描き沈線である。外面摩滅で調整不明、内面ヘラミガキ仕上げ。壷5は口頸部間の突出する削出突帯で、断面カマボコ形を呈す。外面は口縁部横方向、頸部縦方向のヘラミガキで、最終的に削出突帯の上下を細くヘラで縁取る。壷6は頸胴部間の削出突帯で、ヘラミガキによって断面は低いカマボコ形を呈す。内外面ヨコナデ。壷7の頸胴部間は１cm幅の削出突帯で、その上面にヘラ描き沈線１条、削出突帯下方にヘラ描き沈線２条を巡らせたものである。なお削出突帯上縁は段であり、最終的に上下をヘラで縁取る。壷8は頸胴部間の削出突帯がわずかに残存するもので、その上面にヘラ描き沈線１条以上を巡らせたものである。外面はヘラミガキ調整の後、ヘラ描き沈線で横・縦の順序で区画し、その間を有軸木葉文で埋める。なお、区画および木葉文の沈線内に部分的ながらも赤色顔料が残存する。内面、および底面までも丁寧なヘラミガキ仕上げ。大型壷9の口頸部間は段であり、板状工具で強調する。内外面ヨコナデ。小型壷10は口頸部間に段を有するもので、板状工具で強調する。内外面ヨコナデ。生駒西麓産胎土の11の器種は不明。突帯は貼付けであり、断面カマボコ形を呈する。突帯の周囲はヨコナデ、体部外面は左方向のケズリあるいは強い板ナデ調整で、縄文晩期土器の調整に類似することから壷の可能性があるも断定しえない。内面は強い板ナデ。壷12は外面摩滅で調整不明、内面は部分的にヘラミガキが残る。

ミニチュア土器13は指でナデた程度で仕上げる。小型鉢14は外面ナデ、内面ヘラミガキ。内面の全面に赤色顔料が付着するが、外面には煤の付着は見られず、狭義の朱精製に関わる「内面朱付着土器」ではない。あげ底の低部15は鉢と考えられ、内外面ヘラミガキである。

鉢16は口縁部外面ヨコナデ、体部はヘラミガキのようである。内面ヘラミガキ。鉢17は、低い段とその上方にヘラ描き沈線、口縁部端面にもヘラ描き沈線を巡らせる。鉢18は、ヘラ描き沈線２条が残存するが、その下は残存状況から削り出しである可能性が強い。大型鉢19は、ヘラ描き沈線１条を巡らせる。外面は斜上方へのハケメの後、体部に横方向ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ仕上げである。内面は口縁部以下全面ヘラミガキ。大型鉢20は段と屈曲部にヘラ描き沈線１条を巡らせる。10cm程度の破片のため口径は不正確。口縁部はヨコナデ。煤付着。大型鉢21は、



第147図　流路1003出土遺物（1）



第148図　流路1003出土遺物（2）

口縁部外面ヨコナデ、内面ハケメ。体部外面板ナデ、内面ナデ仕上げ。

甕22は口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ仕上げであるが、外面の最大径以下にヘラケズリを施し他と異なる。口縁端部キザミメを巡らさず、色調もにぶい橙色（5YR 7/4）を呈し異質である。甕23は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。煤付着。甕24・25は口縁部ヨコナデ。煤付着。甕26は、ヘラ描き沈線２条とその間に刺突文を巡らせる。外面と口縁内面ハケメの後、口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ仕上げ。煤付着。

低部27・28は、他の資料と同様に高さ５cm程度の部分に明確な外傾接合が確認でき、製作における断絶を示す。外面ハケメ、あるいは工具ナデ。底面と内面はナデ。28は底面から穿孔する。

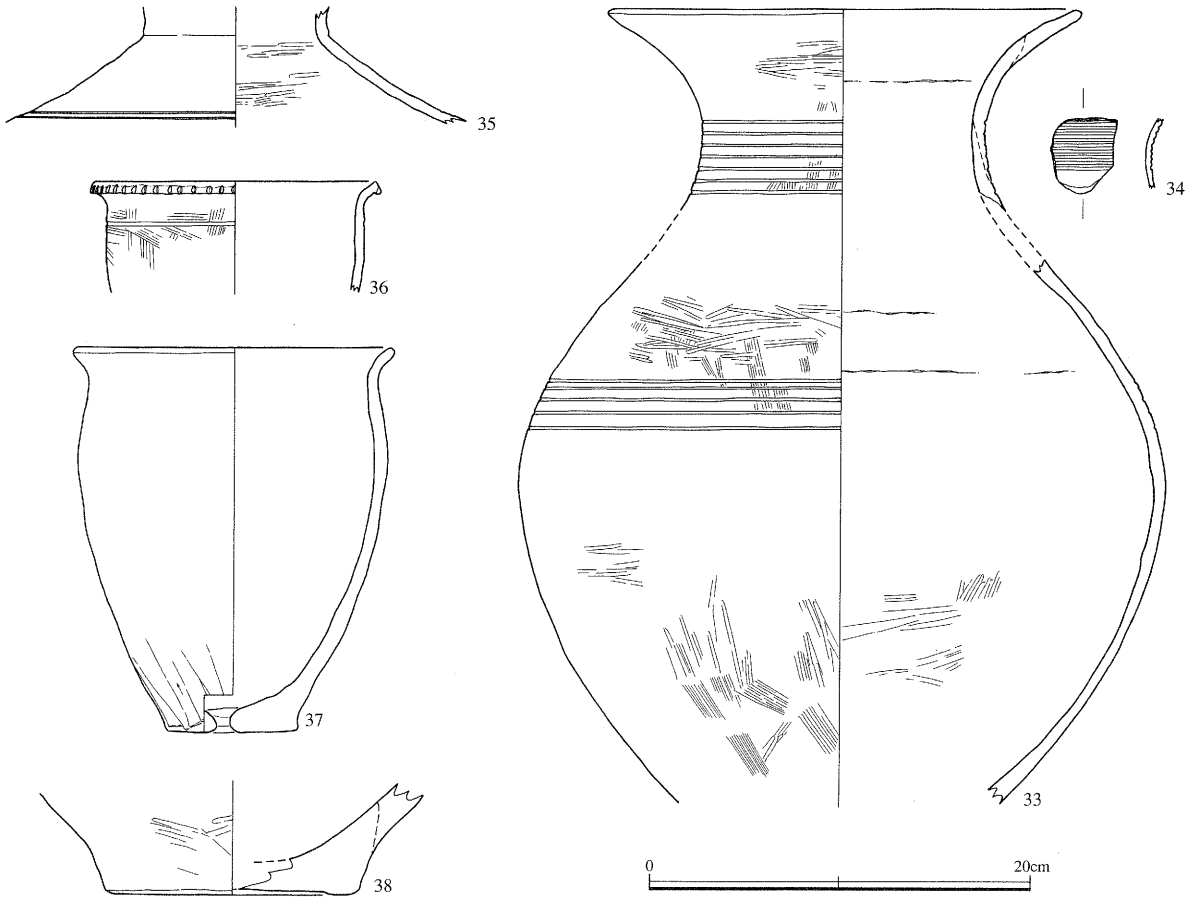
縄文系浅鉢29は、口縁部内面にヘラ描き沈線２条を巡らせ、全面に横方向ヘラミガキを施す。以下の深鉢より古く、混入であろう。縄文系深鉢30は、端部突帯キザミメはV字形、右方向へ巡らせる。外面体部上半板ナデ、下半ケズリの後、部分的にミガキ痕が残る。内面横方向ナデ。灰

黄褐色（10YR 4/2）を呈し、胎土も生駒西麓産に類似するもチャートを含む。煤付着。縄文系深鉢31の端部突帯は剥落。外面体部上半ナデ、下半ケズリ。内面横方向の粗い板ナデ。煤付着。縄文系深鉢32は、端部突帯は鋭く無文。内外面ナデ仕上げ。煤付着。

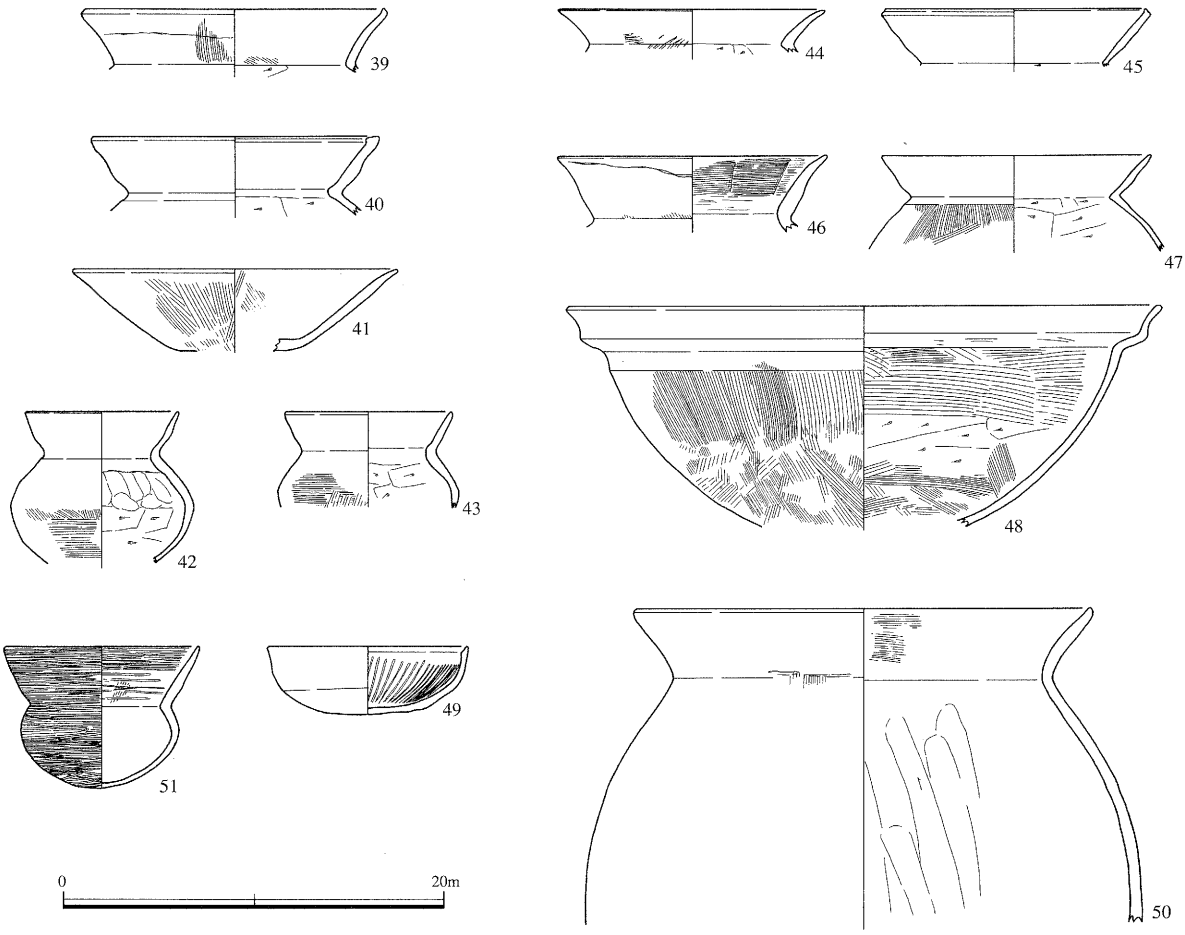
溝1102（第149図33・34）　壷33は外面ハケメの後、口頸部間７条、頸胴部間５条のヘラ描き直線文を巡らせる。摩滅の著しい資料ながら、内外面とも部分的にヘラミガキが残存する。外傾接合である。壷34は口頸部間の細片で８条以上のヘラ描き直線文を巡らせる。両者ともに極めて新しい傾向を示し、他資料とは全く異なり明赤褐色（2.5YR 5/8）を呈し、１～３㎜程度の粗砂を著しく含む。非生駒西麓産胎土。また器壁は薄い。

溝1103（第149図35～38）　いずれも非生駒西麓産胎土。壷35は異形で、直立しつつ外反する口縁部を有すると考えられる。頸胴部間に削出突帯が部分的に残存するが、最終的に細いヘラ描き沈線を巡らせる。下はヘラ描き直線文である。内面ヘラミガキ、外面は不明。甕36は口縁部ヨコナデ、外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。甕37は口縁部ヨコナデ、内外面ナデ仕上げ、低部に板状工具痕が認められる。低部孔に外面から穿つ。外面の底１cm程度以上には煤が付着する。低部38は大型壷と考えられる。外面ヘラミガキ。

溝1002（第150図39～43・第151図）　庄内甕39は生駒西麓産胎土か。口縁部外面に接合痕が認められ、内面屈曲部にヘラケズリによる鋭い稜線を有する。布留甕40は、体部内面にヘラケズリを施す以外、ヨコナデ仕上げ。にぶい橙色（7.5YR 7/4）を呈す。高杯41は、細片のため口径は



第149図　溝1102・1103出土遺物
溝1102（33・34）、溝1103（35-38）

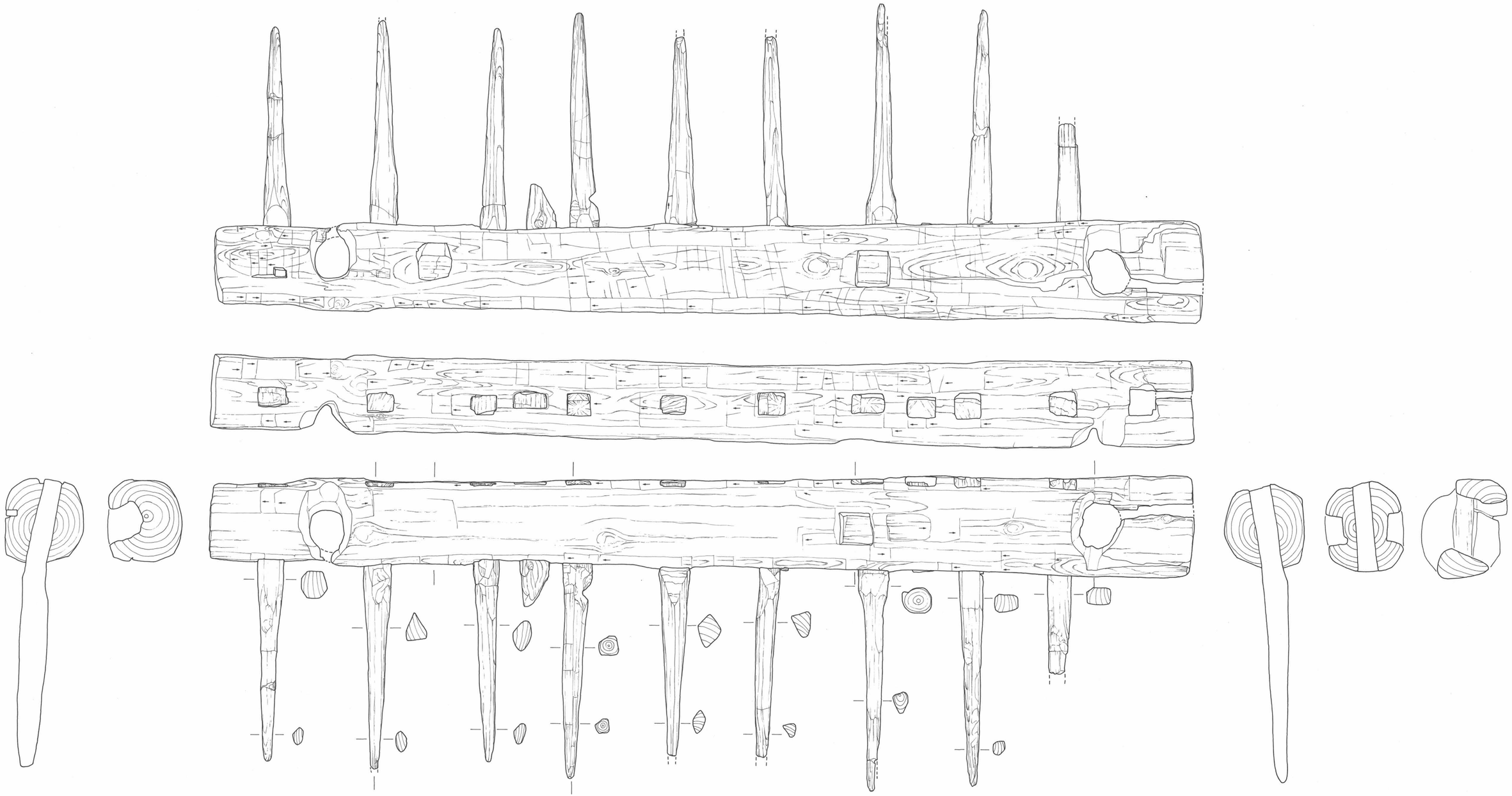


第150図　布留期以降各種遺構出土遺物
溝1002（39~43）、溝1004（44・45）土杭1006（46~48）、土杭1012（51）
土杭1001（49）、土杭1008（50）

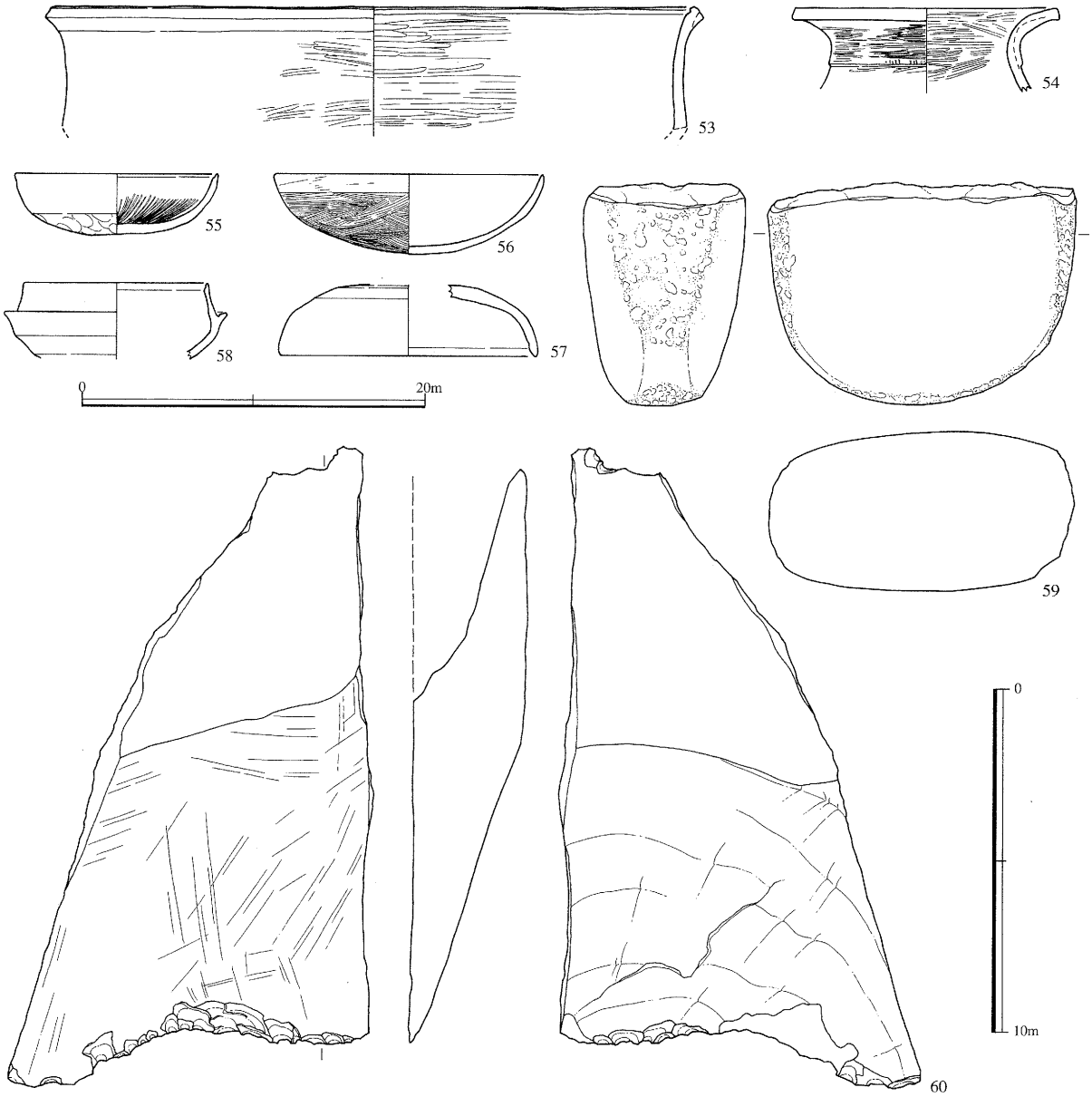
不正確。外面稜線は消失している。内外面ハケメの後、ヨコナデ仕上げ。にぶい橙色（5YR 7/4）を呈す。小型丸底壷42・43は通常胎土で色調は灰黄褐色系の暗いもので、精製品にみられる極細ヘラミガキを施すこともない。いずれも体部中位で突出しており、器壁は薄い。口縁から体部上半ヨコナデ、外面下半ハケメ後ナデ、内面は雑なヘラケズリである。

最上層からは馬鍬が出土している。112.1cmの台木に9本の歯を装着した状況で出土した。なお右端の1本は抜け落ちており、本来の歯は10本である。歯の間隔は台木上面でみると心々で11cmを基本とするが、両端から1本目と2本目の間が12.5cmと9cmである。引棒を装着する孔は、使用によって表面が著しく磨耗する。引棒は強く台木に固定されたのではなく、一定の可動性があったと想定できる。把手は欠損するが、その柄の基部が台木に残存する。両端から3本目と4本目の歯の間に長方形の穿孔がなされたものである。なお台木の両側面には1ヶ所と2ヶ所の抉り込みがみられるが、それらは歯、引棒、把手との関連がみられず、再利用品と考えられる。コウヤマキ。

溝1004（第150図44・45）　叩き甕44は、5cm程度の細片のため口径は不正確。口縁部は叩き出しの後ナデ、体部内面ヘラケズリによる。庄内甕45は、生駒西麓産胎土であり、頸部がしまる。体部外面調整不明、内面ヘラケズリによる。



第151図　溝1002出土遺物



第152図　包含層出土遺物

土坑1006（第150図46～48）　甕46は口縁部外面ハケメの後、ヨコナデ。体部は不明。甕47は、口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ヘラケズリで屈曲部に稜線が生じる。中型鉢48は口縁部ヨコナデ、体部内外面ハケメで、内面に部分的なヘラケズリが認められる。灰白色（2.5Y 8/2）を呈し、山陰的である。胎土に石英、長石、チャート、クサリ礫を含む。

土坑1001（第150図49）　丸底鉢49は、精良な胎土でにぶい黄橙色（10YR 6/4）を呈する。口縁部ヨコナデ、体部外面ナデであり、内面に放射状ヘラミガキを巡らせる。

土坑1008（第150図50）　甕50は、長胴になると考えられる。外面は口縁部から体部にかけて縦方向の工具ナデ。内面は口縁部ヨコハケ、体部縦方向のナデ上げである。にぶい黄橙色（10YR 7/4）を呈し、石英、長石の細砂を多量に含むガサガサの胎土である。なお、残存する下方3cm以下に煤が水平直線的に付着する。

土坑1012（第150図51）　小型丸底壷51は、若干の粗砂を含むもやや精良な胎土。色調はにぶい

黄橙色（10YR 7/2）で暗い。体部外面肩部以下にヘラケズリの後、口縁部と体部外面に横方向の極細ヘラミガキ仕上げ。体部内面ナデ。

包含層出土遺物（第152図53～60）　縄文晩期浅鉢53は、９層出土。口縁端部外面に無文の断面三角形突帯、内面に沈線を巡らせる。内外面横方向のヘラミガキ。沈線と口縁端部に面を形成し船橋段階と考えられる。生駒西麓産胎土。弥生前期壷54は、９層出土。口縁部外面に縦方向ハケメが僅かに残存し、内外面ヘラミガキ仕上げ。非河内胎土。鉢55・56は、９層出土。55は、砂粒を微量含む精良胎土で、外面はナデ仕上げるが成形時の指頭痕が残る。内面は横ナデの後、放射状暗文を巡らせる。不定方向ハケメ、内面ナデの後、口縁部ヨコナデ仕上げ。56は、細砂を多く含む通常胎土で、外面は不定方向ハケメ、内面ナデの後、口縁部ヨコナデ仕上げ。須恵器57・58は、８層出土。ヘラケズリを施す際のロクロ回転は57が左方向、58が右方向である。叩き石59は扁平な自然礫の側面の３ヵ所に稿打痕が残る。一方を欠損するが、欠損後にも若干使用している。426.8g。大型刃器？60は、９層出土。刃部以外の３面は大きく破損し、本来の形態は不明。左図表面に砥石状の条痕が部分的に残存する以外は、刃部周辺と右図下半の表面は使用によると考えられる磨耗でにぶく光っており、大型石庖丁の使用状況に類似する。515.8ｇ。安山岩製。

第8章　まとめ

第1節　木の本遺跡の遺構群について

1．木の本遺跡とは

木の本遺跡周辺は遺跡の密集地帯である。田井中遺跡、志紀遺跡、老原遺跡、八尾南遺跡などの諸遺跡が集中しており、弥生時代から古墳時代にかけての中河内地域を特徴づける遺跡がならんでいる。

木の本遺跡として包括されている範囲は、行政区画上で西は八尾市南木の本３丁目から、東は空港１丁目にまでおよび、東西幅約2,000m、南北幅約1,650mにもおよぶ。広い範囲が包括されていることもあって、木の本遺跡内でも、東側と西側とでは様相が異なっている。西方にあたる南木の本３丁目を中心とする地域では,過去に古墳時代前期を主体にした遺構群が発見されているほか、弥生時代中期などの遺構、遺物も発見されている。

それに対して、今回報告する調査区は、木の本遺跡でも東方にあたる部分である。時期的には弥生時代前期を主体にしながら、弥生時代中期の遺構群も含んでおり、西方で確認されている遺構群とは性格の異なるものである。むしろ隣接する田井中遺跡の遺構群との関係性が深いものである。まずは今回の調査区の成果を中心に記述したい。

今回の調査では、Ａ調査区第４遺構面の流路0183から出土した弥生時代前期の土器や木器をはじめとして、弥生時代から近世にいたるまでの多量で多様な遺構・遺物を検出している。これらは必ずしも時代的に切れ目なく続いているというわけではなく、間では時期的な断絶もあるものと思われる。弥生時代前期を主体にしながら、弥生時代中期の遺構もあり、さらには古墳時代の遺構がそれに続くのであるが、弥生時代前期の遺物が質的にも量的にも圧倒的であり、他の時代の産物をはるかに凌駕している。以下、各時代毎に今回の調査区の概要を述べる。

2．弥生時代前期の遺構、遺物のひろがり

弥生時代前期は、木の本遺跡において時期的に最も古い段階である。今回の調査では、弥生時代前期集落域の南端部分を調査することができた。今までは、当時の包含層や遺構のひろがりの範囲についても、西側と南側ははっきりしていなかったが、近年の調査の進展で、西側と南側についても、ほぼ範囲を限定できるようになった。

まずＡ調査区では全域で包含層、遺構、遺物が確認されている。Ａ調査区の西隣のＢ－３調査区、東隣のＢ－４調査区でも包含層、遺構、遺物ともに発見されている。しかし、それよりさらに西北のＢ－１、２調査区では希薄であり、集落のはずれの様相であった。

また、南側、西側の様相については調節池予定地の調査（第５図　ＫＭ21地点）結果が参考になる。黒い粘土層は確認されているものの、はっきりした遺構・遺物は全く確認できなかった。

過去に行われた空港北濠や平野川改修に伴う田井中遺跡の調査においても、Ｂ－１、２調査区より西方では、弥生時代に属する遺構、遺物の顕著なひろがりは確認されていない。これらの事実を総合すると、弥生時代の遺構、包含層の分布については、南方はせいぜいＡ調査区の南端周辺までで、西限についてはＢ－１、２調査区より東方でとどまるものと考えられる。この範囲は、ちょうど砂堆の存在から地形が微高地状に高くなっている地帯であり、集落自体が微高地の上に形成されていることをしめしている。

３．時期別遺構分布について

第４遺構面を基盤として形成されている遺構群は、弥生時代前期を主体にしながら、弥生時代中期、古墳時代の遺構群も含んでいる。以下、第４遺構面を中心にしながら今回報告の調査区における時期的な遺構の変遷をみてみよう。

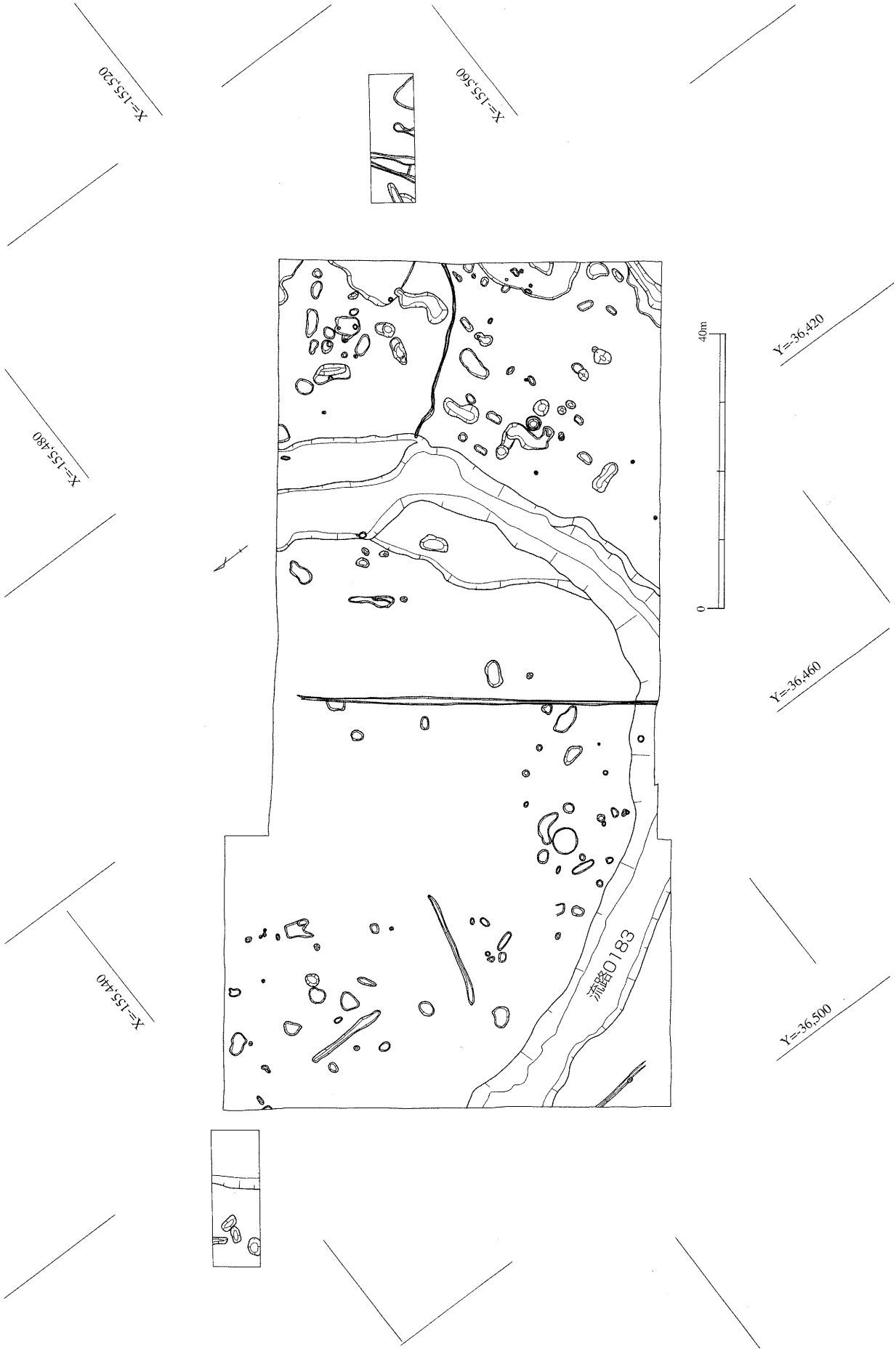
弥生時代前期

弥生時代前期はＡ調査区の主体となる時代である。溝、土坑、竪穴状遺構など様々な遺構が発見されているが、中心となるのは流路0183であり、Ａ調査区を北東から南西を貫くように流下している。

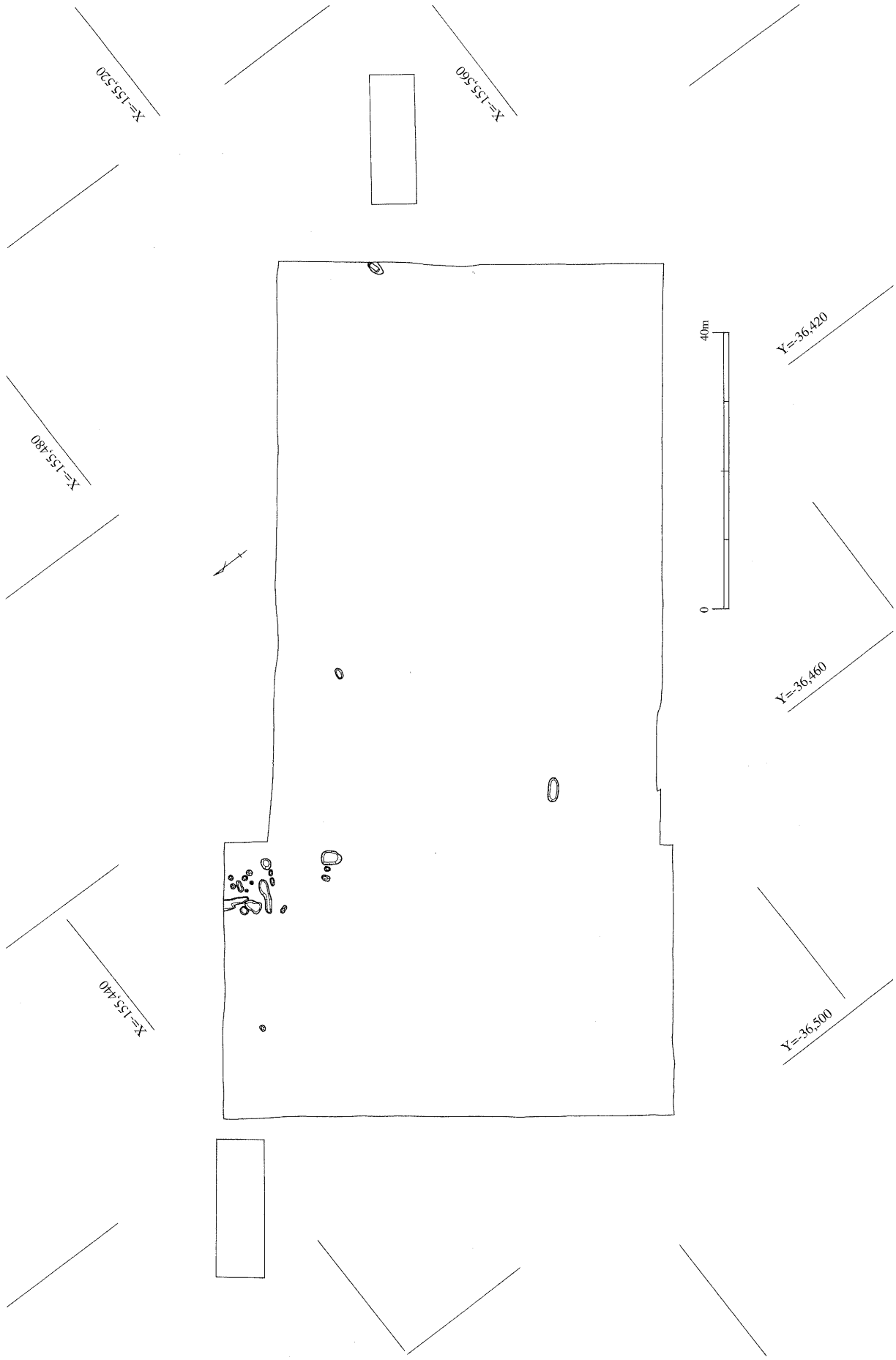
流路0183は、Ａ調査区の北端中央から発して、南西の方向へ進むが、調査区南端付近で方向を変えるや、西北の方向へとすすみ、調査区の外へと続いていく。広くなっているところでは幅20ｍ以上をはかり、深さは深いところで1ｍ以上にも及んでいる。この流路はＡ調査区の北東方向から進入し、そしてＡ調査区の外へ伸び出て行くものであるが、Ａ調査区の北側には大阪府教育委員会が平野川改修や空港北濠改修事業の関連で実施した田井中遺跡の調査地点がある。これら田井中遺跡の一連の調査においても、大きな流路状のような落ち込み地形の存在が報告されている。全て東北から南西の方向に流れるものであり、流路0183と堆積状況などでも類似した状況が見られる。

さらにはＡ調査区においては、流路0183以外にも多くの遺構が確認されており、流路0183がＡ調査区の中央部にあることから、流路0183をはさんで東西に遺構群がひろがっているようにも見える。Ａ調査区で検出されている遺構は基本的に土坑が主体であるが、流路0183をはさんで東側と西側では遺構の様相が異なっているように思われる。

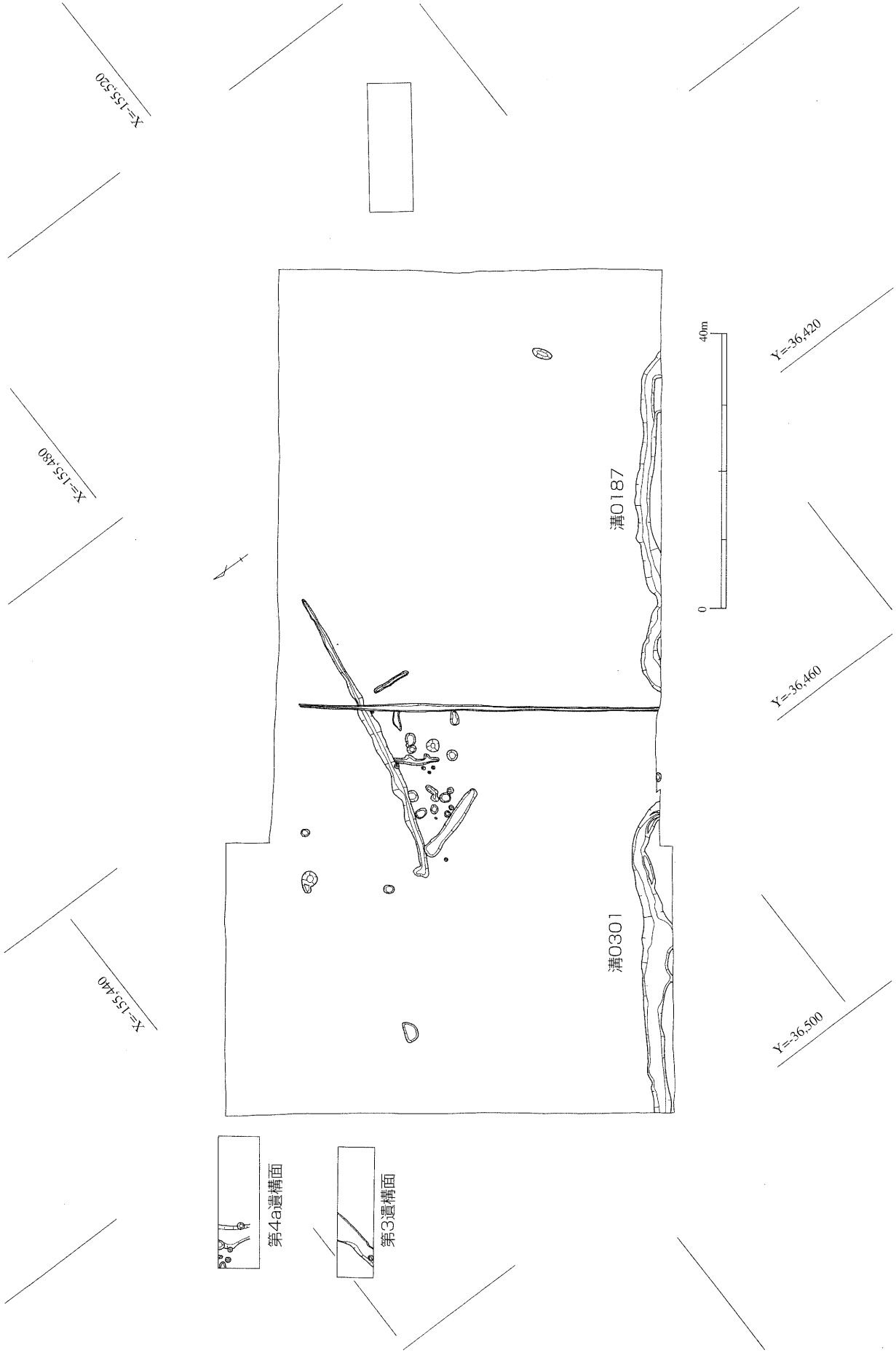
まず流路0183よりも東側の部分であるが、外見上、不定形で複雑な形の土坑が多い。例えば、土坑0228などは、延長８ｍにもなるような大きな遺構であるが、外形ラインも入り組んでいて、底面も凸凹しており整った形状ではないいくつも複数の土坑が重複しあっているようにも見える遺構である。土坑0133も同様の細長い土坑で、蛇行しながら延びている。計画的にというよりも、無規格に幾度も掘り返された結果、不定形状態になったように見える。居住域周辺に展開するゴミ捨て場のような状況である。このように計画的に考えてではなく、不規則に掘り返された印象のものが多い。



第153図　木の本遺跡第４遺構面弥生時代前期遺構配置図



第154図　木の本遺跡第４遺構面弥生時代中期遺構配置図



第155図　木の本遺跡第４遺構面古墳時代遺構配置図

対して流路0183よりも西側に展開する遺構群であるが、方形や円形などの整った形になる遺構は少なく、底面も不揃いの整わないものであった。こちらも不定形遺構が中心にはなるものの、東側と比べてみると、小さいながらもまとまった遺構が多い。その中でも注目すべきは、円形竪穴状遺構0348番である。A調査区でも西側の１－M９地区に所在する遺構であり、平面は円形で東西3.6m、南北3.9m、深さは５ｃm内外の浅いものであった。床面は平坦に整えられているが、土坑や柱跡などの施設は確認できず、一応竪穴状遺構という表記にした。しかしながら、竪穴住居と考えても、今回報告の調査区では、１基のみの発見となる。田井中遺跡の平野川・北濠調査区では、比較的まとまって竪穴住居の発見されている地域（後述の３群）がある。それに比べると１基だけ孤立して存在するような印象は否めない。北側の遺構群とは性格の異なる小さな別のまとまりなのかもしれない。

また、遺構内からの土器の出土状況をみても東側と西側で状況に違いがある。東側の遺構群から出土する土器は、小さな破片が目立ち、遺構内堆積土にいくらかの土器破片が混じっているという状況である。それに対して、西側は残存状況のよい土器が多く、あきらかに遺構底面に置かれていた可能性のあるものもある。いくつか例を揚げると、土坑0339はA調査区でも中央南部にある土坑であるが、完形の壷が横に寝かせたような状態で出土しており、さらにはその周囲からは、破片ながら、土器が土坑全体に広がるように出土している（第22図）。

そして、１－D11地点に所在する土坑0427は、幅50～60ｃmの小さな土坑であるが、壷が上からの土圧で壊れたような形で出土している。また土坑0319からは石包丁４本分が出土しており、土坑内部に貯蔵されていたものであろうと思われる。土坑0450からは打製石斧が出土している。流路0183よりも西側の土坑群は不定形ながらも、貯蔵穴や、あるいは祭祀などの性格を考えうる遺構が含まれているのである。これら遺構の性格の差は流路0183を境として、一定、遺構の性格や空間の利用方法において差があったものと推察されるのである

それ以外にも、土器棺0179や0345が存在するように集落縁辺部が埋葬地として利用されている様子もうかがえる。

また、遺構密度からみると、A調査区中央北側は遺構密度が希薄であるが、標高的には一番高いところであり、12層の砂層が露出しているところである。弥生前期の遺構は削平されたり流出したりで、消滅している可能性が濃厚である。

縄文晩期の突帯文土器については、田井中遺跡の調査区で当該時期の遺構群があったことが報告されているものの、今回の調査では、突帯文土器だけで単独で出土しているものはない。しかも流路0183の遺物に限定してみても、その割合は１％に満たないくらいである。

弥生時代中期

この時代についても、明確に住居跡として指摘できる遺構は検出されていない。しかしA区を中心にしながら、遺構がいくつか発見されている。その中にはNo.0295の遺構のように木棺の痕跡と思われる遺構も存在する。この遺構が木棺の痕跡だとすると、小口板だけが残存しているこ

とになる。土器が共伴していないのではっきりした時期はわからないが、田井中遺跡で今まで発見された木棺例などを考えると、中期に属するものと思われる。それでここでも中期に含めることとする。0295以外では、やはりＡ調査区の西側にみられるものとして、いくつかの埋甕が検出されている。中期の集落の中心部は当調査地よりも東に偏在しており、中期段階の当調査区は集落の縁辺にひろがる墓域などの雑多な空間であったと理解される。

古墳時代

古墳時代においても前期や後期に属する遺構が発見されている。Ａ区では布留式に属する遺物を出土する遺構が確認されている。Ａ区の溝0187、溝0301、土坑0420、土坑0431などである。溝0187、溝0301はＡ区の南端で、東西に長くのびている溝状遺構である。両方とも調査区外にのびていくので、全容がどのようであったのかは不明であるが、古墳などの周溝の一部であった可能性もある。溝0420からはほぼ完形の布留式の甕が2点出土している。

またＢ―３調査区の溝1002からは馬鍬が出土している。溝1002のあるＢ―３調査区の第３遺構面は布留式の包含層を基盤に形成されており、溝1002からも布留式期の土器が出土している。しかしながら、この遺構面の被覆層は有機質を多く含む湿地堆積状の土（A調査区の８層相当）であり、Ｂ―３区では遺物の出土量が少ないものの、A調査区では平安時代遺物の含まれることが確認されている。それに馬鍬自体も安定した形態を示しているように見える。古い時期の馬鍬の編年自体が確定していないこと、遺構面の被覆層の問題などを考慮すると、もっと時代的に下がる可能性も否定できない。

４．田井中遺跡の調査経過

次に今回の調査成果と密接な関係を有する田井中遺跡の調査成果について述べる。

田井中遺跡は、弥生時代前期に集落として発展した遺跡で、一部、縄文時代晩期にまでさかのぼる。1975年、自衛隊駐屯地構内で、下水道工事が実施された折りに発見されている。さらに1982年、自衛隊敷地内の建築工事に伴って発掘調査が行われ、弥生時代前期から古墳時代にいたる遺構群の存在が周知された。以後、八尾市教育委員会や、（財）八尾市文化財調査研究会などによって調査が進められている。もっとも、自衛隊駐屯地地域で確認されているのは、今回調査の集落よりも新しい段階の集落である。

また、1990年以降、八尾空港北濠や、平野川改修工事の関連でも、相次いで発掘調査が実施され、縄文時代晩期から弥生時代中期に至るさまざまな遺構が発見されている。その中でも弥生時代前期を中心とする遺構群は注目すべきものである。弥生時代前期でも中段階に属する集落であり、今回の調査成果と直接関連するものである。そしてさらに、それより東方に位置する自衛隊構内を中心に広がる遺構群は、前期新段階以降が主体となっており、北濠や平野川で発見された前述の遺構群に後続するものである。これらの事実から、従前より、縄文時代晩期から弥生時代前期中段階にまで存在した集落が、前期新段階の頃に、自衛隊駐屯地を中心とする東側へ移動し

たと考えられているのである。

5．田井中遺跡の弥生前期集落

従来の調査成果をもとにした田井中遺跡の変遷については、岩瀬透氏や亀島重則氏の整理がある。亀島重則氏「弥生時代前期遺構群の性格と変遷」『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅷ』では、集落の群構成や時期的な変遷について整理されている。以下、これをもとにしながら、田井中遺跡の特徴について簡単に述べたい。

田井中遺跡は砂～礫、粘土の盛り上がりの上に形成された集落遺跡である。谷と平地、微高地が交互に連続する地形となっており、遺跡内部でも場所によって標高に高低差がある。谷にはさまれた各々の微高地を、１群～５群と群にわけて捉えている。流路１までの一番西端の遺構群を１群、流路２と３の間を２群、そして流路３と４の間の一番中心となる部分を３群、流路４と５の間を４群、流路５より東を５群としている。

一番西端の１群であるが、これは突帯文土器を主体とする遺構群である。遺構の種類は溝、土坑、小穴、落ち込みなどであり、石棒や凹石、石皿などを出土する土坑もある。遺構の分布密度からさらに西側の遺構群（１―ａ群）と東側（１―ｂ群）に分けられるが、どちらも明らかにⅠ様式期に先行する遺構群である。

２群は１群の東方にある遺構群であり、微高地上に所在している。遺構の種類は、土坑、小穴、落ち込みなどで、土坑から金山産サヌカイトの大型剥片が出土している。おおむね弥生時代前期古～中段階前半に相当する。

３群は田井中遺跡でも一番中心となるまとまりである。調査区域のうち、中央付近の微高地上の最も遺構の密集している地点である。遺構としては、竪穴式住居、掘立柱建物以外に、溝、土坑、柱穴などがある。その中でも上流部のより標高の高いところには突帯文土器主体の地域（３―ａ群）と、下流側の遺構の密な地域（３―ｂ群）とに分けられる。３－ｂ群については、大きく下位面と上位面の２面にわかれる。

下位面は大溝４・５、柵列、住居などからなり、地形の変換点を選んで大溝が掘られている。石棒など古い要素の遺物が出土するのも特徴である。上位面では３群の西端の大溝１、２、３と東端の大溝６・７、竪穴式住居、掘立柱建物、土坑、溝などが出土している。延長は約130mである。内部は住居区と推定される密度の非常に大きい空間と、その外側の希薄な部分があり、一番高所の立地のいいところに住居域を設定し、その周囲にその他の関連施設を設けている様子が観察できる。時期的には突帯文期～弥生時代前期古・中前半段階に相当する。

４群も谷にはさまれた微高地にある。土坑墓や突帯文を含んだ土坑などがあるが、中期のものと思われる木棺墓などがある。

一番東にあたる５群は、Ⅱ様式以降の遺構が中心となり、むしろ自衛隊駐屯地地区にある新しい段階のムラと深い関連性を有するものである。

以上のように、弥生時代前期の田井中遺跡、そして木の本遺跡は、集落域内部を何本もの流路が通過し、流路と流路の間の微高地を利用して、生活域が営まれていたのである。いいかえれば、間に大きな流路が介在することにより、生活域が限定されていたともいえる。

6．木の本・田井中弥生時代前期集落の構造

従来の田井中遺跡の成果に、今回の木の本遺跡の成果をあわせて図面に表示したのが、付図２である。以下、木の本遺跡との関連から、集落の中枢部にあたる２～３群を中心に若干の検討をしたい。

Ａ調査区では調査区を横切るように流路0183が流れている。断面図をみても流路0183の西側は顕著な微高地状になっており、流路0183の東側についても若干微高地状になっているのが看取される。実際、流路0183の西側は12層の砂層が隆起するように第４面上に露出している。微高地の間に流路が流れる傾向は、前述のように田井中遺跡調査区でも確認されており、やはり同様の傾向として指摘できる。

流路0183は田井中遺跡の流路３との関連性が大きい。流路３は２群と３群とを隔てる役割もしている。平面的な位置関係から推測されるだけではない。流路３の両側は標高が高く微高地状態になっており、流路0183でも同様の傾向がみられ、流路３と流路0183は上流と下流の関係にあたるものとできる。

それらのことを手がかりに模式的に弥生時代前期の集落の様相を復元したものが第156図である。流路0183をはさんでＡ調査区西側の遺構群は２群、東側の遺構群は３群の南側の続き部分として考えた。

以後、付図２および第156図をもとに木の本遺跡・田井中遺跡弥生前期集落中枢部の様相を概括する。群呼称については亀島氏による整理を踏襲しながら、今回の報告部分について付け加えるという方法をとった。

（２群）

まず２群についてであるが、流路２および流路３（流路0183）によって区分けされた地区である。このうち田井中遺跡部分を２―ａ群、Ａ調査区の西側部分を２―ｂ群とする。２―ａ群では遺構密度は比較的まばらであり、不定形落ち込みや小穴などさほど明瞭ではない遺構が多く見られる。それに対して２―ｂ群はそれよりははっきりした形態の遺構が多いように思われる。円形竪穴状遺構や、低部に土器を安置しているような遺構、石包丁埋納遺構、土器棺などである。同じ２群の領域でも、南側の２―ｂ区が主要な生活領域であるのに対して、北側の２―ａ区は縁辺部にあたるような様相を示している。

さらに２―ｂ区には円形竪穴状遺構があるのみならず、南端部分に遺構が集中すること、時期的には前期古・中段階でも古い様相の土器を多く出土することなどを考慮しても、２群内でも南側に生活の中心的な領域があったものと考えられる。

（3群）

流路3と流路4にはさまれて遺構が最も集中している部分である。小区分の呼称として、前述の3―a、3―b群以外に、A調査区の東側部分を3―c群とする。特に3―a、b調査区は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑などの遺構群が密集しており、集落内でも最も中心的な居住区域である。それに比べると南側は遺構の密度も低く、性格の不明瞭なものが多く、周縁部の様相を示している。

（大溝）

また、考えなければならない問題として大溝の問題がある。ここで大溝というのは3群の範囲内で検出され、集落域を断ち割るように南北方向に流れている大溝のことである。7本あるので大溝1～7と呼称することにする。このうち大溝1と2および6と7は環濠とも位置づけられている遺構である（『田井中遺跡発掘調査概要Ⅷ』大阪府教育委員会など）。ここでは遺跡を再評価するという意味から、大溝という一歩引いた表現にとどめることとする。

また流路1～5と表記しているのは『田井中遺跡概報・Ⅷ』で谷と表記されていたものである。こちらは断面形も不統一で、深さも地点によってまちまち、明らかに自然発生的なものである。しかしながら一部人工的な利用も考えられることもあり、流路0183との関連も考えねばならないことから流路と呼称する。

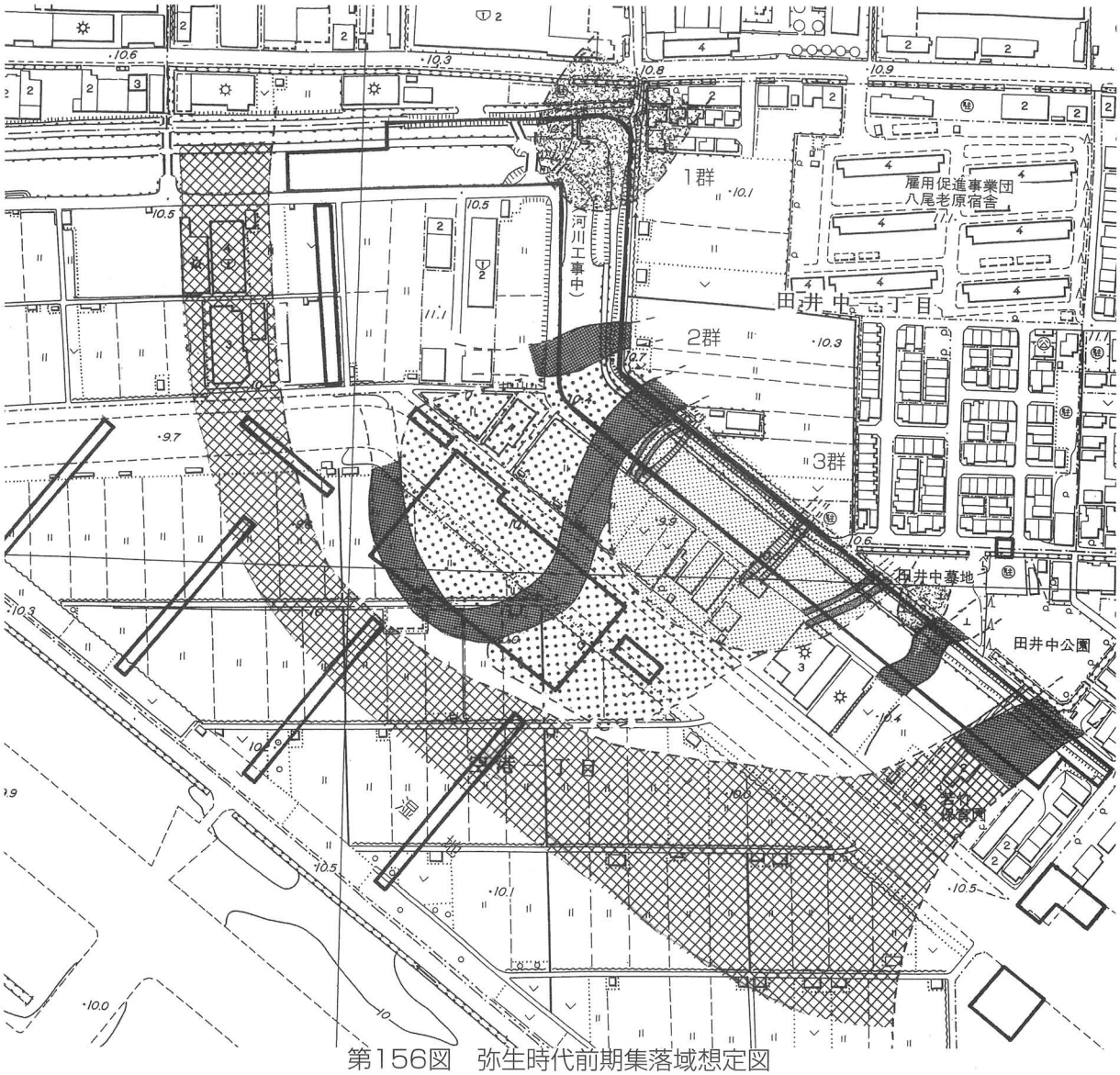
まず大溝1～7であるが、微高地上の平坦な面上にある。幅は広いものやや狭いものと差があるが、どれも一定の深さがあり、人為的に掘削されたであろうことに疑問の余地はない。大溝1～3及び6・7は、流路3や4に続いて落ち込んでいく傾斜の変換点にある。また大溝3と4は微高地の中央部分にあるという点に立地の差があり、層位的にみてそれ以外の大溝に先行する。まず大溝4・5が先行し、その後に大溝1・2・3・6・7が掘削されるのである。しかしながら、集落でも比較的標高の高い所を選んでこのような大溝が築かれている点は、この遺跡群を考える上でのひとつの特徴といえる。

低湿地の集落の場合、生活上で一番大きな問題は、排水であろう。流路と名づけた自然地形があり、排水は最終的にはここに流れ込むとしても、居住域での湧水などの排除も必要であったはずであり、排水のための役割などももっと考慮されていいのではないかと思う。

（流路）

集落のある微高地と微高地の間を流下する自然の流路である。流路3（流路0183）はA調査区では単一の流路のような形態にみえるが、A調査区では流路0183で、底に何本か稜線が走るような起伏のある部分があり、いくつかの小河川が合流した結果、流路0183ができたのではないかと思われる。

田井中遺跡調査区でも、流路0183の上流にあたる流路3ではこのような痕跡が顕著で、明らかにいくつもの小河川が合流した結果が流路3なのである。北方から流れるいくつもの小河川が合流し、集落付近では大きな谷状にも見える流路になっているのである。このような現象は流路3



第156図　弥生時代前期集落域想定図

（流路0183）だけのものではない。流路４や流路５などほかの流路でも小河川が合流しているような形跡がみられる。

しかしながら、これら流路は、単に集落を横切る流路であったのではない。この集落を特徴づける役割を果たしていたのである。

ひとつは流路によって集落での生活活動が限定され、その限定の中で人々が生活しなければならなかったことである。流路があることによって生活領域の広がりが一定制約をうけるようになったことと表裏の関係になるものであるが、このような条件により、群毎に遺構のあり方に若干の差異が発生することになるのである。集落でも中央部が主たる居住区になり、その周囲に生活関連領域がひろがる様相が看取されるのである

また流路とは言っても、単に雨水、湧水が流されたのではなく、集落機能の一部として利用されていた形跡も見られる。それは流路0183からの木器の出土状況をみても、未完成品が圧倒的に多い。木器を貯留したと断定できる施設は確認できなかったが、第12図に見られるように、流路内でも特定の深みに製作途上の木器を保管していたことが推定されるのである。

そのようないろんな機能を果たした流路は、木の本、田井中の集落を規定する要素のひとつであっただけではなく、集落の移動とともに、流路としての役割を終えるのである。

終焉の様相を生々しく伝えるのが、まさに流路から出土した土器などの遺物群である。膨大な分量の土器が出土しているが、これは状況から判断するにきわめて短い時間に一括して投棄されたものである。土器の様相もほぼ前期中段階におさまる状況で、木の本遺跡の弥生時代前期遺構群のしめす時期とも符合するものである。集落が東へ移動するのと前後して、それまでの古い時期の集落で使用していた生活用品などを流路に投棄したと考えられる。実際、これらが投棄された段階で流路も流路としての機能を喪失する。流路群は、集落の存立に重要な機能を果たしながら、集落の移動とともに、機能を喪失したと評価できる。

7．木の本遺跡・田井中弥生前期集落の時間的変遷

田井中遺跡での時間的な変遷を考察している亀島氏の説（前述）では、弥生時代での田井中の集落のあり方を５期にわけて論述している。基本的な枠組みを踏襲しながら、今回得られた成果を加えて簡単に整理する。

（１期）

木の本・田井中遺跡群において、活動の痕跡が確認できる一番古い時期である。１群や４群そして３―ａ群において、溝、土坑などの遺構が検出されている。しかしながら全体的に遺構密度はまばらであり、はっきりしない遺構が多い。

（２・３期）

本格的にムラが形成される時期である。３―ａ群が１期から引き続く以外に、２―ａ、２―ｂ、３―ｂ、３―ｃ、４群などで活動の痕跡がみられる。３―ａ、３―ｂ区で住居跡が見られるだけでなく、３群にある大溝群なども形成される。層位的には大溝の内でも４、５が先行して設けられるようである。土坑や落ち込みなどが主たる遺構であるが、２―ａ、２―ｂ群などでは石包丁の埋納遺構の他、打製石斧や土偶、石棒を出土する遺構もあり、若干古い要素をひきずる遺構も存在する。

そして流路をはさんだまとまりで見ると、３―ｂ群に対して３―ｃ群が周縁的な様相を示しているように、２―ｂ群に対しては２―ａ群が周縁的な様相を示している。

２群や３群などの古い段階の集落は４期を迎える前に解体する。古い時期の集落の廃絶を象徴するのが、流路３（流路0183）から出土した遺物群である。土器や木器など多量の遺物が出土しており、全て前期古・中段階におさまるものである。遺物は摩滅したものはなく、非常に真新しいような印象のものが多い。

これらは出土状況からみて、極めて短期間に投棄されており、投棄された段階で、流路としての役割を終えている。２群・３群を主体とする古い段階のムラが解体し、東へ移動する際に、一括して処理されたものであろう。

第４表　遺構群の変遷

		1期	2期	3期	4期	5期
1群	a	溝・土坑等				
	b	流路1 溝・土坑等	移動			
流路2						
2群	a		土坑・小穴			
	b		土坑・小穴・竪穴・土器棺			
流路3				遺物大量投棄		
3群	a	土坑・小穴・竪穴				
	b		大溝・柵・竪穴・土坑・掘立柱			
	c		土坑・溝・土器棺			
流路4						
4群		土坑	溝・アゼ	アゼ	木棺墓・土坑	大溝
流路5						
5群					新しいムラ	

（４期以降）

西方にあった古い集落が解体した後、東方に移動し、新しい集落として吸収統合される時期である。集落の本体は移動したものの、今回調査区においても木棺墓が営まれたり、土器を安置した土坑が営まれるなどの事象が認められる。しかしながら散発的な様相で、明らかに集落周辺の様相を示すにとどまっている。

第2節　弥生前期の遺物から

今回の調査で判明したことは多岐にわたる。中でも多量の弥生時代前期の遺物は、近畿地域における前期中頃の文化内容を示す貴重な資料群である。調査地における弥生時代の時期は、前期中頃と中期中頃である。前者には数点の前期新段階が混入するにすぎず、後者は第Ⅲ様式古相が主体であり、その前後の第Ⅱ様式は流路0183上層から壷1点、中期後半段階の資料は皆無である。つまり弥生前期に限定すれば、所属時期は短期間で、一部に後世の遺構が重複し遺物が混入するも、じゅうぶんにその状況が抽出できる。

河内平野部において、弥生前期のより古い段階に位置付けられる若江北遺跡での文化内容は不明瞭である。木の本遺跡と同時期を含む山賀遺跡の状況と合わせ考えれば、従来の弥生時代前期中段階以降、急速に近畿地域における弥生文化が整備・確立されたことは確実で、基準資料になると考えられる。ここでは思いつくままに列記して、木の本遺跡での弥生前期段階の状況とを明確にするとともに、問題点を示しておきたい。

縄文晩期突帯文系土器について　一定量の縄文時代晩期後半の土器が出土している。まとまりのあるのは流路0183であり、図化し得るものはそのほとんどを報告した。報文中でも述べたように、遠賀川系に占める割合は1%程度である。また縄文系の伴出するあり方は一般的で、他にも土坑0297・0344・0412で確認できる。これが混入であるのか、共伴であるのかは様々の意見がある。

流路183の資料は、一部に時期不明品（第37図1）と滋賀里Ⅳ式の資料（第37図2、第39図66）がみられるものの、多くが長原式古相の範疇で理解できる。殊に長原式はすべてが生駒西麓産胎土である。このような状況は濱田延充氏[1]が述べるように、旧河内潟周辺の遺跡のあり方と同じである。つまり、若干の非生駒西麓産胎土の滋賀里式と船橋式、生駒西麓産胎土の長原式からなる。濱田氏は、編年の問題としてとらえて滋賀里Ⅳ～長原式が同時に存在した時期を想定し、長原式を生駒西麓地域、それ以外を淀川流域等の他地域との交流の結果と考える。氏の言う編年の問題は課題であるが、本遺跡の様々の遺物にみられる縄文的要素の残存から、混入とするよりも縄文集団との交流の結果と考えたい。

第37図12・14・15、第38図36・47・55・56などは長原式にみられない形態であり、大型鉢（第38図59、第89図883）も特異である。大型鉢の類例は、香川県龍川五条遺跡[2] ＳＤ50下層にあり、報告者は弥生土器としている。両地域のつながりを示す資料の可能性がある。なお非生駒の壷（第39図63）は、二条突帯深鉢の影響で成立した甕の可能性もある。

ところで今回の前期弥生土器には、生駒西麓産胎土は極めて少ない。先行する若江北遺跡や同時期を含む山賀遺跡では生駒西麓産胎土が主体的であり、河内平野という狭い地域にあっても一様でなかったことを示している。なお、本遺跡でも中期には生駒西麓産胎土主体になる。

土錘について　多数の土錘が出土した。数量的なまとまりは、他の大阪湾岸における資料にみられないものである。一遺構の一括品ではないものの極めて良好な資料群と認識したい。報告のように、1～3類は形態、重量分布において非常にまとまりがある。2・3類を主体にし、少数の1類

がみられる。山賀遺跡でも1類は1点が出土しており、他は2・3類であって同様の組成が確認できる。土錘が大阪湾沿岸地域に伝播した当初のありかたを示している、と考えられる。

下條信行氏[3]は、初期稲作出現期の朝鮮半島中・南部から弥生時代前期における西日本諸地域の土錘の形態と組成のありかたをまとめ、その東伝のありかたを明らかにしている。すなわち、玄海灘沿岸地域では朝鮮半島南岸の多くを継承しつつも日本型土錘を形成し、東北九州・西瀬戸内地域では日本型土錘が確立し、中部瀬戸内・大阪湾岸地域を日本型土錘受容地と規定しており、土錘が各地域で変容、付加、創出を繰り返しながら順次東伝したことを明らかにした。それによって、稲作文化自体の伝播も当初から一気加勢に広域に拡散したと考えることに再考を促している。今回の資料によって、大阪湾岸地域は下條氏が明らかにしたとおりⅡc類を主体とした日本型土錘の地域であることを数量的に再認識できる。

なお、5類（第90図24）は、両端有孔棒状土錘との関連も含めて類例を待ちたい。また、4類（下條分類の細管状土錘Ⅰa類）は8層出土で時期不明であることも明記しておきたい。

土製紡錘車について　多数の土製紡錘車が出土している。やはり、数量的なまとまりは他の大阪湾岸の資料にみられない。すべてが手ずくねとナデ仕上げによっており、厚さ1cm程度の円盤を作り、一方向から穿孔した扁平な円盤状のものが主体である。１点のみに「＋」の線刻を施す以外は無文。他に山形を呈するもの（第91図48）が1点ある。上記二者からなる組成が大阪湾岸地域の一般的なあり方と確認できる。なお、土器片の再利用品は皆無である。また穿孔を有しない土製円盤（第91図49）は図示した以外にも数点を確認した。しかし、木の本資料はすべてが非生駒であるが、若江北は報告されたすべてが生駒西麓産胎土であることは特徴的である。今後の広範な地域での分析が望まれる。

石器について　多数の石器が出土した。大陸系磨製石器の他に、縄文的な石器や西日本諸地域との関連で理解できそうな打製石器とその石材が目に付く。

縄文的と推定できる石器に、刃部が大きく湾曲する石斧（第105図39）、独鈷石（同44）、敲打のみの石斧（同45）、打製石匙（第119図161・162）等がある。他にも第101図24は泥質点紋片岩であり、報文中でも述べたように石棒の砕片の可能性も強い。これも縄文文化要素の残存と理解できるが、河内平野部においては長原遺跡の他、田井中、八尾南、亀井、城山、久宝寺遺跡など類例は多く、本段階の特徴である。

石庖丁は安山岩、流紋岩からなる白色系が前期と考えられる。刃部、背部ともに若干の外湾傾向を示す形態が優勢で、極端な外湾刃を示さない ことが地域性である。弥生文化の伝播経路に関わるものと考えられている[4]。石庖丁（第99図2～5）は土坑0319内に重ね置かれていたもので、すべて白色系の輝石安山岩である。河内平野においては、若江北遺跡と池島・福万寺遺跡に同様の出土状況を示す事例がある。

伐採斧では、蛤刃石斧と考えられる資料（第105図38、第106図48）は扁平なもので、厚みがない。第105図46、第106図47も斧の可能性があるが、断面形態が前記の蛤刃石斧と全く異なり、系

譜を含め将来の課題である。奈良県唐古・鍵遺跡、兵庫県七日市遺跡に類例がある。

本地域における「サヌカイト」は、前期の中で金山産から二上山産石材に移行する。同一遺跡で時期がやや新しい田井中遺跡落込み848出土の「サヌカイト」には金山産は皆無で、二上山産で占められる[5]。一方、今回の調査地点では報告した90点中、10点程度が金山産であった。中期も若干含むので、前期において金山産サヌカイトは10数%を占めたようである。しかし、若干新しい時期を含む山賀遺跡では、二上山と金山産サヌカイトの比率が61%：36%ともされており、同一地域でも単純な時期差のみではなく、遺跡によっても異なっていたようで、今後の課題としたい。なお、今回の資料は肉眼観察によるものであることも明記しておきたい。

金山産サヌカイト素材の打製石庖丁（第101図19）の出土は異例である。素材の端部に両面から二次加工を施して刃部を形成し、上側縁に敲打や研磨を施す技法は讃岐等の中部瀬戸内地域と同様である。製品そのものが持ち込まれた可能性を想定したい。素材ばかりでなく製品として持ち込まれる場合があることを示している。

なお、報告した削器類の他にも多くの不定形な二次加工のある剥片、使用痕のある剥片の類がある。これらは収穫具として使用された可能性もあり、石器組成にも大きくかかわる問題であるにも関わらず、使用痕分析はもとより全く未報告になったことは明記しておきたい。

打製石鏃について　大阪湾岸地域の弥生時代において、打製石鏃は極めて稀な存在であり、石器組成の中で意識されることは少ない。弥生時代前期の本地域において、打製石鏃は初出である。第103図30・31、第104図33・34は、形態から打製石鏃と認定できる。殊に30の刃部には使用による縦方向の顕著な条痕が認められ、他地域の石鏃の使用痕と全く同様[6]である。また、第103図32、第104図35・36も石鏃破損品の可能性が考えられ、そうであるならば当初から大型、小型の別[7]があったことがわかる。今回の資料において注目できるのは、打製石鏃と打製大型石庖丁、石庖丁、一部の削器との石材の共通性である。これらは、形態ばかりでなく石材においても西日本諸地域との共通性が強く、伝播経路とも深く関わると考えられる。今後は、大阪湾岸地域における打製石鏃の実態解明が急務と考える。

打製大型石庖丁について　近畿地方でいう大型石庖丁は通常、磨製で穿孔のある場合が大部分であるが、本例は流紋岩製の打製品で穿孔がない。また、磨製石庖丁、大型石庖丁にはみない形態であることも特徴的である。ここでは磨製大型石庖丁と同様の使用を示す光沢面（コーン・グロス）が認められ、未製品ではない事の二点から「打製大型石庖丁」と呼称した。

斎野裕彦氏[8]は大型直縁刃石器と呼称し、凡日本的に資料を集積して形態分類、および地域・時期的分布を明らかにするとともに、その地域性、機能と用途について述べている。機能と用途については、刃部に光沢面が認められることから穂摘具とセットをなし、「イネ科植物の切断」を機能として、残稈処理や除草など多様な用途をもった石製農具と考える。それを考える上で、第102図27の背部に施された「背潰れ痕」に注目したい。この調整は通常の磨製石庖丁の背部に認められ、本打製大型石庖丁と磨製石庖丁の関連性の強さを示すものと考えたい。このことは斎

野氏が大型直縁刃石器は穂摘具とセットをなす石製農具とする想定と合致すると考えられる。

石神幸子氏[9]は、使用痕の共通性から剥片石器から大型石庖丁への移行があったと想定する。河内平野において、剥片石器は弥生前期新段階前半から末葉に認められ、一方大型石庖丁は弥生前期新段階から中期への過渡期に出現することが現状で、すべてが緑色片岩製である。今回の第102図26・27は、出土状況からの時期の決め手は欠くものの、白色系の石材であることから弥生前期と考えられるもので最古級の資料になる。しかも単なる剥片素材ではなく、上側縁に肩部を造り出しており、定型的である。同じく白色系の石材である石庖丁や打製石鍬、第116図125等の削器と共に伝播してきたと考えたい。類例は未確認で、系譜を含め将来の課題である。

木器について　流路0183中・下層から木器が出土している。農具では狭鍬、広鍬の他、又鍬、組合せ鋤の他、泥除けが確認できた。さらに又鍬以外には未製品、製品、破損品が確認できるとともに、樹種、木取りにおいても確立しており、集落内で完成された木器製作が行われたことがわかる。形態から注目できるのは、隆起の両脇に穿たれた三角形の孔（第94図9・10）であり、第93図7もその可能性がある。この孔は泥除けを装着するためと理解でき、九州、山陰、中部瀬戸内の前期末から中期初頭にかけては一般的ながら、近畿では少なく、それが地域性と考えられてきた。木の本例は、中部瀬戸内地域からの導入時の姿を示すのではないだろうか。

柱状片刃石斧柄（第95図18）には、三角形の穿孔とその直下に突帯を削出している。同様のものは弥生前期後半の寝屋川市高宮八丁遺跡でもみられ、これも中部瀬戸内地域からの伝播要素と考えられている。ところで、斧柄には伐採斧と加工斧の二者がある。中でも加工斧柄（第95図16・17）は、いずれも斧台先端を二股に削り出した特殊な形態である。類例は未確認で、系譜を含め将来の課題である。

匙（第96図26）は河内平野では希少である。山田昌久氏[10]は「匙やフォークを使用する集落はその地域の中心的な集落」と考えており、わずかに1点であるが木の本遺跡の性格を示す可能性がある遺物と考えたい。

ガラス滓について　流路0183中層から、塊状を呈する不明品（第67図538）が出土した。微細～1mm未満の白色粒を多量に巻き込んだ多孔質なもので、表面はガラス化して緑灰色を呈する。ガラス化した表面は図化した上面がより滑らかで、例えば鉄精錬時に生成される碗形滓と同様に、上下の関係がある。図の右側が若干破損するが、本来の形状（埋没時）をほぼ残す。成分分析によって「ガラス滓」とする結果になった。

いわゆる「ガラス滓」は、弥生前期に遡るものが最も古く、岡山県百間川原尾島遺跡三ノ坪調査区出土品に事例がある。ただし、藤田　等氏[11]は「現状では偶然の所産と考えざるを得ないが、今後の大きな課題としなければならない」としている。他遺跡の事例について全く実見していないため発言の能力はないが、「ガラス滓」候補の追加事例として報告した。

その他　内面朱付着土器[12]（第50図300）が、流路0183中下層において確認されている。肉眼観察ながら赤橙色（10R 5/8）を呈する朱と考えられ、外面に煤が付着することから、朱の精製に

関わる資料と考えられる。河内平野部においては、亀井遺跡にも弥生前期の事例[13]がある。

他地域との関連を伺わせる資料が多い。土器棺として使用された突出した台形突帯の壷（第74図687）や、特異な貼付け突帯を有する壷（第89図891・892）は東日本との関連を想定したい。後者は豆谷和之氏[14]が想定する浮線文系土器の眼鏡状浮文との関連で考えられないだろうか。氏の取上げる資料が大阪府若江北遺跡、山賀遺跡、高宮八丁遺跡、他に京都府雲宮遺跡にみられるが、突帯を切断しつつ巡らせる本例は異色ではある。しかし似ているのである。ちなみに、浮線文系土器は出土していない。いずれも系譜関係等は今後の課題である。

異型土製品（第89図909）は、いわゆる「鳥形土製品」である。報文中でも述べたように皮袋等の模倣と想定している。生駒西麓産胎土であることは重要で、縄文系以外の生駒西麓産胎土は稀少でである本遺跡では、縄文からの系譜も想定できるからである。いずれにしても最古級の資料であって、奈良県橿原遺跡[15]の資料等をその候補と想定できないであろうか。

以上のように、木の本遺跡は判明したことが多い反面、今後に残された課題もまたあまりに多い弥生時代前期の文化要素を示す資料群である。今後の研究の進展に期待したい。

註

1）濱田延充「弥生集落遺跡から出土する突帯文土器の意味　―高宮八丁遺跡出土の突帯文土器―」『立命館大学考古学論集」』立命館大学考古学論集刊行会　2003。
2）森下英治編『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第29冊　香川県教育委員会　1998。
3）下條信行「わが国初期稲作期における土錘の伝来と東伝」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会　1993。
4）石神　怡「弥生ことはじめ事情」『弥生創世記』大阪府立弥生文化博物館　2003。
5）駒井正明・本間元樹「第12章第4節　田井中遺跡95－2区出土の石器」『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）』財団法人大阪府文化財調査研究センター　1997。
6）石材も同じく安山岩を使用する香川県鴨部・川田遺跡出土資料を実見した。資料の見学については、香川県埋蔵文化財センターの信里芳紀氏、蔵本晋司氏のお世話になった。
7）松井氏は大型品（長さ20cm以上）、やや大型品（19～15cm）、中型品（14～11cm）、小型品（10cm以下）に分類しており、木の本例は中型品と大型～やや大型品に属する。松井一明「弥生時代の石鏃について　―中・四国地域を中心として―」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会　2002。
8）斎野裕彦「弥生時代の大型直縁刃石器（上）」『弥生文化博物館研究報告』第2集　弥生文化博物館　1993。同「同（下）」『同』第３集　同　1994。
9）石神幸子「第6節「剥片石器から大型石庖丁へ」の予察」『河内平野遺跡群の動態・』財）大阪文化財センター　1992。石神氏は弥生時代前期の資料として美園遺跡4点、久宝寺遺跡1点をあげている。また、和泉市池上・曽根遺跡でも前期新段階に3点あることを述べている。
10）山田昌久『考古資料大観』第8巻　弥生・古墳時代　木・繊維製品　小学館　2003。
11）藤田　等「第5節　原料ガラスとガラス滓」『弥生時代ガラスの研究』名著出版　1994。
12）本田光子「内面朱付着土器」『庄内式土器研究』ィ　庄内式土器研究会　1994。
13）大阪府教育委員会による平成14年度調査で出土しており、科学分析も実施されている。近刊。
14）豆谷和之「眼鏡状浮文から指づくね貼付凸帯へ」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会　2002。
15）奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『橿原遺跡』2002の28p小型土器。

第９章　自然科学的分析の結果

第１節　木の本遺跡発掘調査に伴う花粉珪藻分析

川崎地質株式会社　関西支社

１．分析試料

試料採集地点（第157図に示す）

試料採取層準　地点毎に分析した試料採集の層準を示す。

No. 1 地点

試料No. 6　６層　暗オリーブ色粘土　　試料No. 7　８層　オリーブ黒色粘土

試料No. 8　８層　オリーブ黒色粘土　　試料No. 9　９層　オリーブ黒色粘土

No. 2 地点

試料No. 1　８層　オリーブ黒色粘土　　試料No. 2　８層　オリーブ色粘土

試料No. 3　中世谷地形上層　暗オリーブ灰色粘土

試料No. 4　中世谷地形下層　暗オリーブ灰色粘土

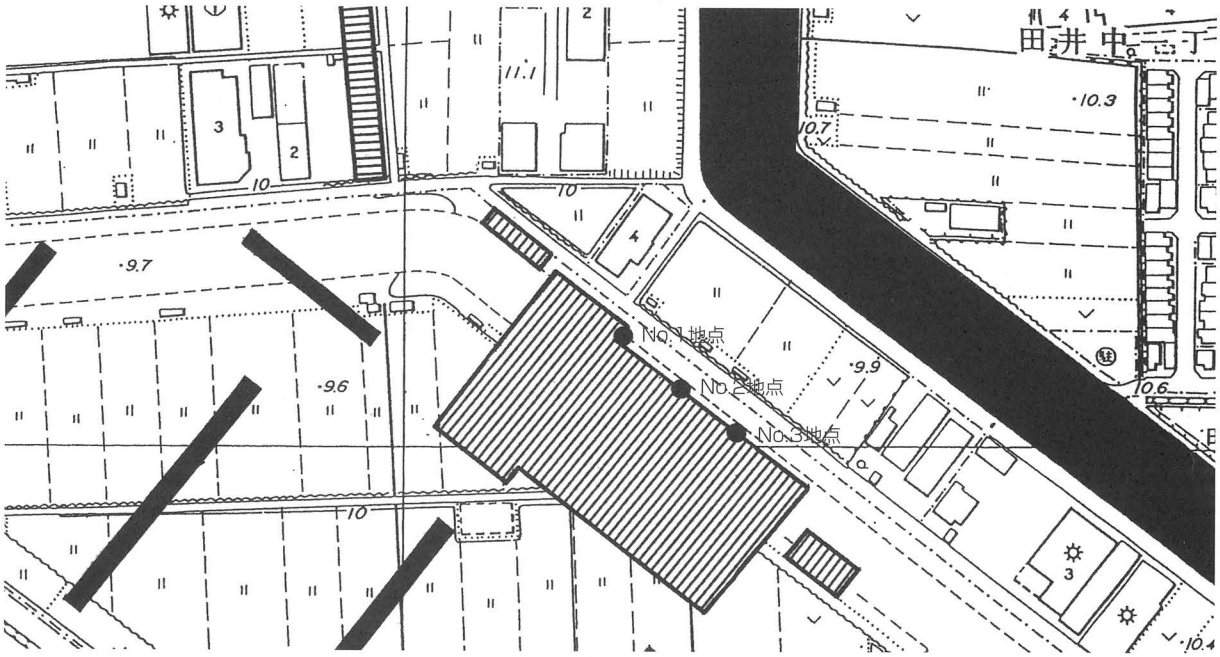
No. 3 地点

試料No. 1　流路0183埋土上層　オリーブ黒色粘質土（上）

試料No. 2　流路0183埋土上層　オリーブ黒色粘質土（下）

試料No. 3　流路0183埋土下層　暗オリーブ灰色粘質土（上）

試料No. 4　流路0183埋土下層　暗オリーブ灰色粘質土（下）



第157図　資料採集地点

2．分析結果

2－1　花粉化石の含有状況

14試料の花粉分析を行った結果、全ての試料から花粉化石が検出された。しかし、No. 2 地点試料No. 1 ～ 4 、No. 3 地点試料No. 1 、 2 では木本花粉化石の含有量が少なく、統計処理に充分な量の木本花粉化石が検出できなかった。

検出された花粉化石は59種類であった。これらのうち全試料を通じて花粉組成を特徴づける種類はいかに示すようなものであった。

（1）卓越木本花粉

マツ属（複維管束亜属）、スギ属、シイノキ属－マテバシイ属、アカガシ亜属、コナラ亜属

（2）卓越草本花粉（栽培種と推定される種類を除く）

カヤツリ草科、イネ科（40ミクロン未満）、アブラナ科、ヨモギ属

（3）栽培種花粉（栽培種を含む分類群も含む）

イネ科（40ミクロン以上）、ソバ属

2－2　花粉組成の特徴

（1）No. 1 地点

試料No. 4 ～ 8 では、木本花粉、草本花粉ともに含有量が多く、胞子の量が少ない。木本花粉ではアカガシ亜属が20～30％の出現率を示す他、マツ属（複維管束亜属）、スギ属が10％程度、シイノキ属－マテバシイ属、コナラ亜属が数％の出現率を示す。草本花粉では特にイネ科（40ミクロン以上）が100％程度以上の出現率を示す。また試料No. 2 ではソバ属も検出される。

試料No. 9 では、木本花粉の含有量がやや少なく、草本花粉、胞子の検出量が相対的に多い。木本花粉ではスギ属が41％の出現率を示すほか、マツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属が10％程度、モミ属、シイノキ属－マテバシイ属、コナラ亜属が数％の出現率を示す。草本花粉ではヨモギ属が324％、イネ科（40ミクロン未満）が47％、イネ科（40ミクロン以上）が61％の出現率を示す。

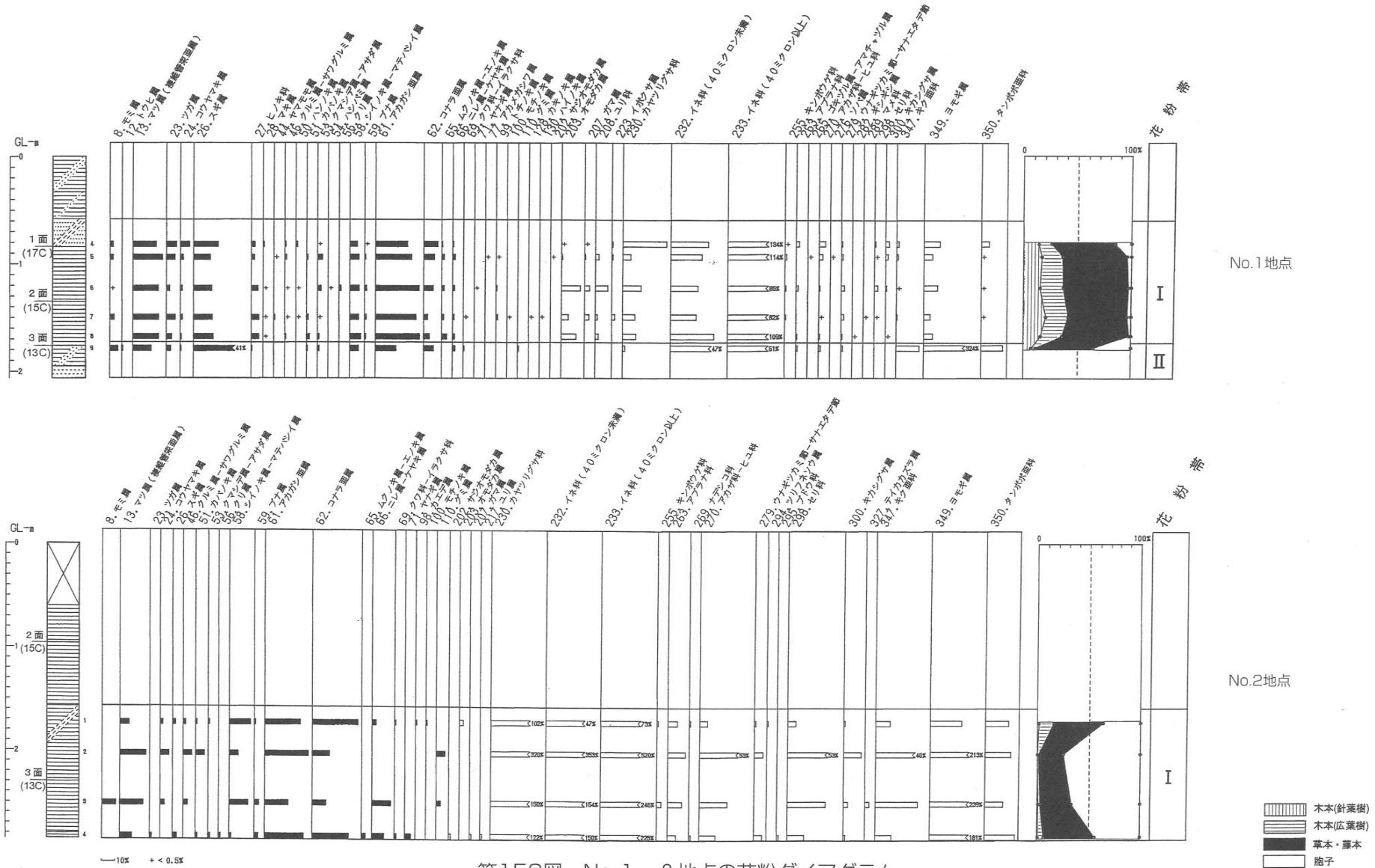
（2）No. 2 地点

ほとんどの試料で木本花粉の含有量が少なく、草本花粉、胞子の含有量が多い。

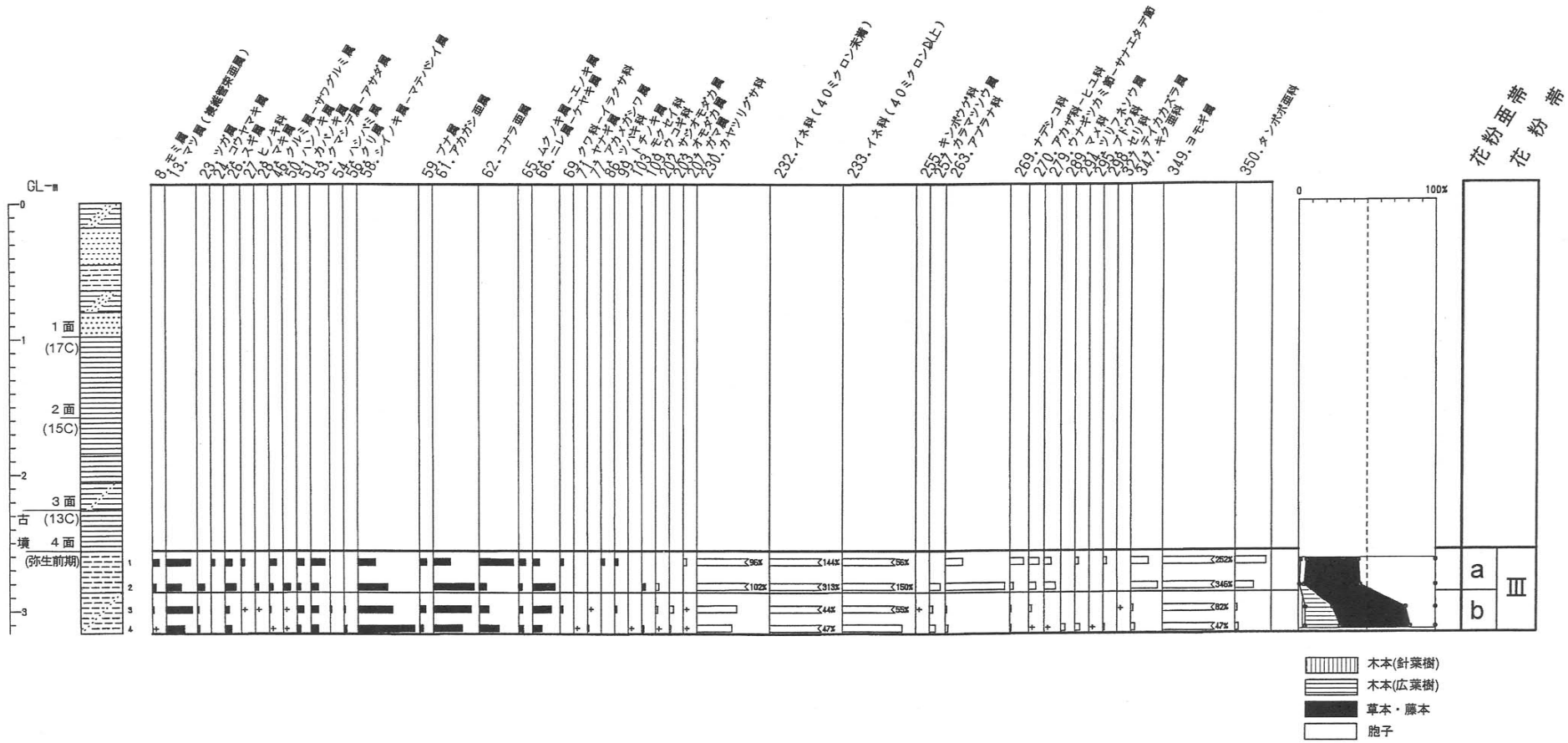
試料No. 2 ～ 4 では、統計処理に充分な量の木本花粉が検出できなかったが、十分な量の検出できた試料No. 1 と同様にアカガシ亜属、コナラ亜属が卓越し、マツ属（複維管束亜属）、シイノキ属－マテバシイ属を伴う傾向を示す。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）、イネ科（40ミクロン以上）、ヨモギ属が効率を示す。

（2）No. 3 地点

試料No. 1 ， 2 では、花本花粉の含有量が少なく、草本花粉、胞子の検出量が相対的に多い。木本花粉は統計処理に充分な量が検出されていないが、マツ属（複維管束亜属）、シイノキ属－



第158図　No.1、2地点の花粉ダイアグラム



第159図　No. 3 地点の花粉ダイアグラム

マテバシイ属、アカガシ亜属、コナラ亜属が高い出現率を示す傾向にある。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）、イネ科（40ミクロン以上）、アブラナ科、ヨモギ属が効率を示す。

試料No.３、４では木本花粉、草本花粉、胞子ともに含有量が多く、統計処理に充分な量の木本花粉が検出できた。木本花粉ではシイノキ属－マテバシイ属、アカガシ亜属やや高い出現率を示すほか、マツ属（複維管束亜属）、コナラ属もほかの種類に比べ高率を示す。草本花粉ではイネ科（40ミクロン未満）、イネ科（40ミクロン以上）、ヨモギ属が高率を示す。

２－３　珪藻分析結果

14試料を分析し、すべての試料から統計処理に充分な量の珪藻化石が検出できた。

２－４　珪藻組成の特徴

（１）No.１地点　分析した全ての試料で淡水種がほとんどを占める。試料No.４ではMelosira crenulataが63％と卓越する。試料No.５～８では特に卓越する種類はないが、アルカリ種、底生種の割合が高い。試料No.９では陸生種のhantzchia asphioxysが70％と卓越する。

（２）No.２地点　分析した全ての試料で淡水種がほとんどを占める。

特に卓越する種類はないがアルカリ・底生種のcymbella属、Navicula属が高率になる。

（３）No.３地点　分析した全ての試料で淡水種がほとんどを占める。

試料No.１、２では底生種のGomphonema truncatum、アルカリ・浮遊種のMelosira variansが10～20％程度の出現率を示すほか、アルカリ種のNavicula viridula、Synedra ulnaが数～10％程度の出現率を示す。試料No.３、４では、底生種のPinnularia属が40％程度と卓越するほか、底生種のStauroneis phoenicenteron、アルカリ・浮遊種のSynedra ulnaが10～20％程度の出現率を示す。

３、考察

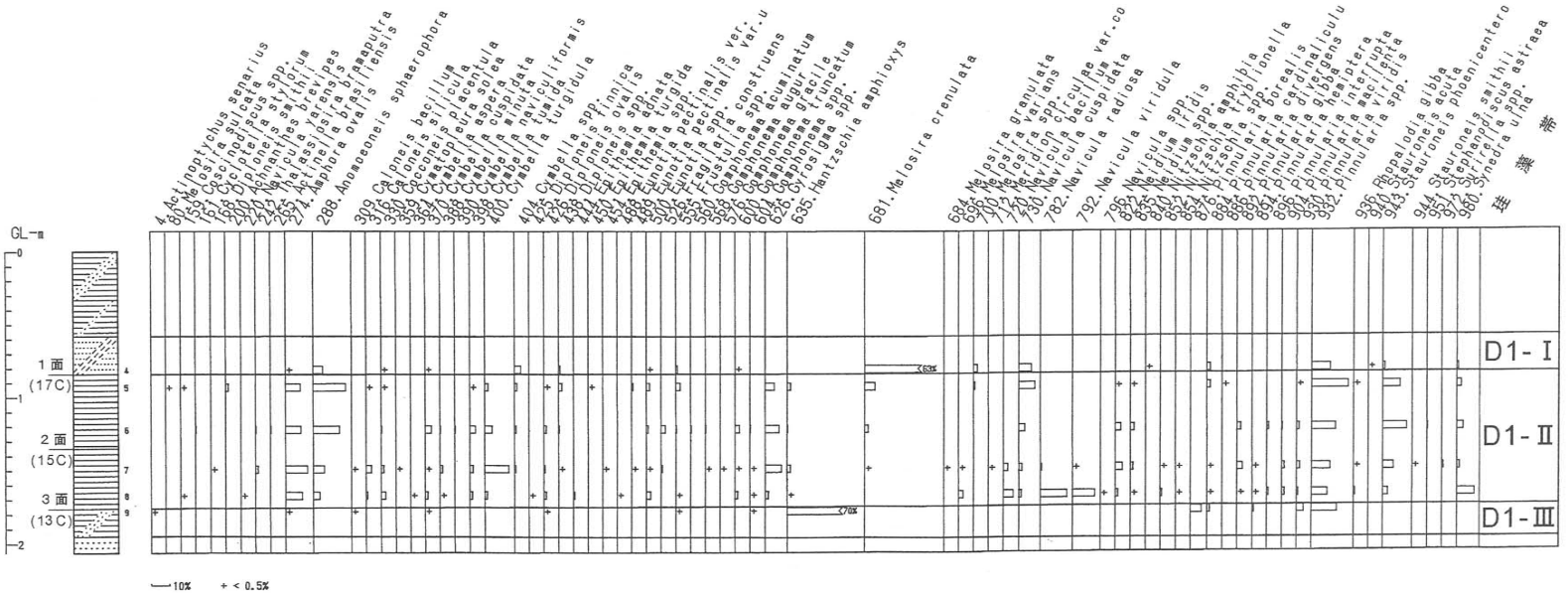
３－１　花粉分帯

花粉組成の特徴から以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、会から上位に向けて記載し、試料No.も下位から上位に向かって記した。

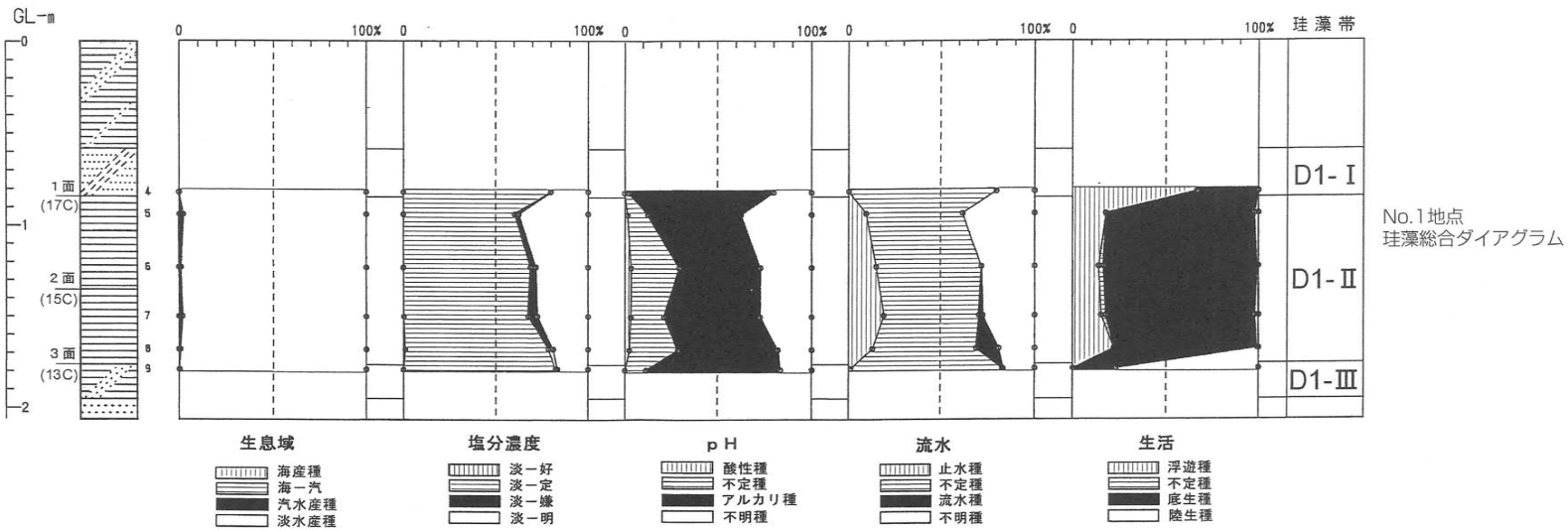
（１）III帯（No.３地点試料No.４～１）　卓越する試料はないが、マツ属（複維管束亜属）、シイノキ属－マテバシイ属、アカガシ亜属、コナラ亜属がほかの種類に比べ、高い出現率を示す傾向にある。こちらの中では、シイノキ属－マテバシイ属、アカガシ亜属の出現率が特に高い傾向にある。また、シイノキ属－マテバシイ属は減少傾向にある。

（２）II帯（No.１地点試料No.９）　スギ属が卓越し、モミ属、マツ属（複維管束亜属）、シイノキ属－マテバシイ属、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。

（３）I帯（No.２地点試料No.４～１、No.１地点試料No.８～４）　卓越する種類はないが、マツ

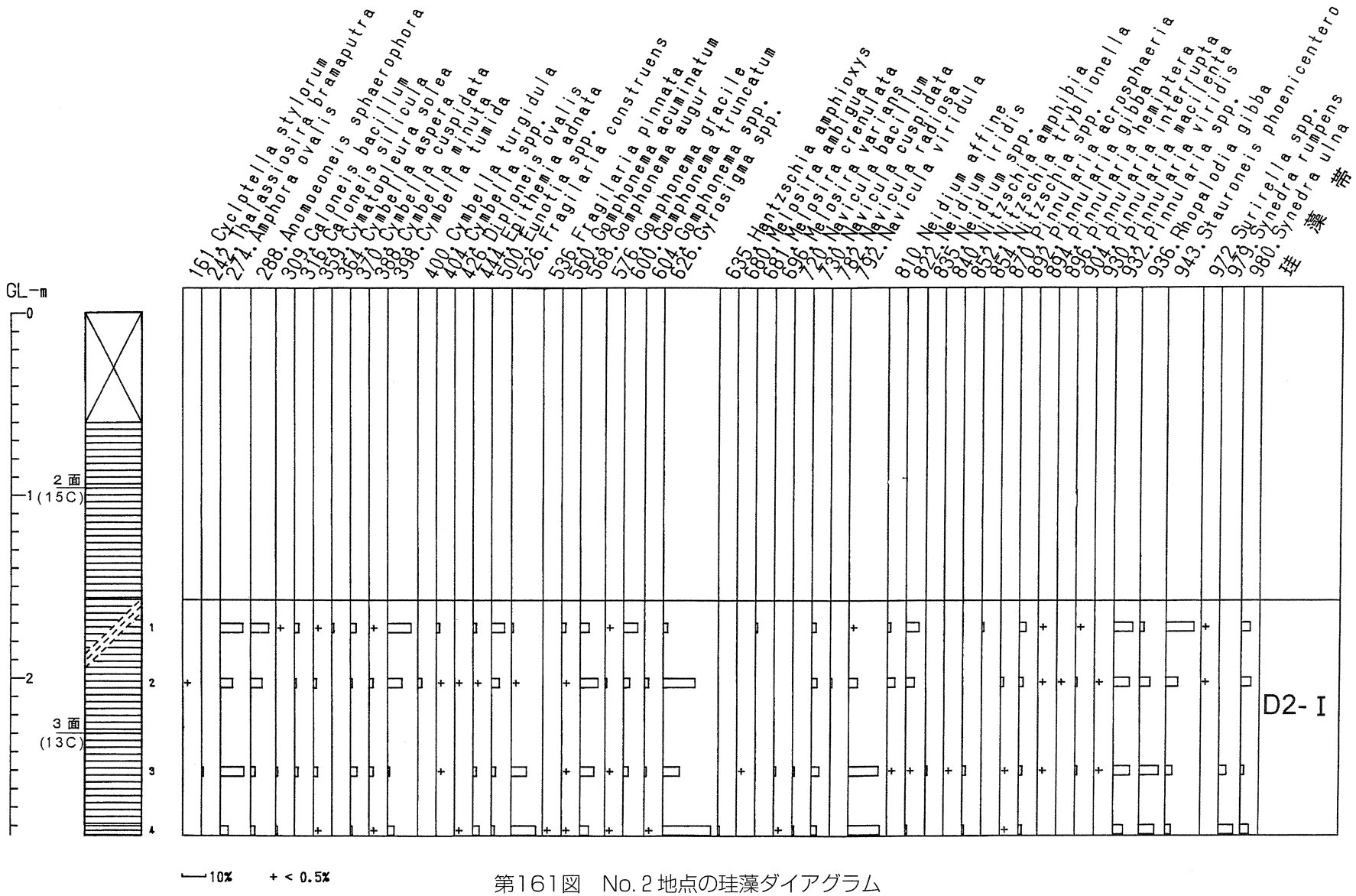


No.1地点
珪藻ダイアグラム



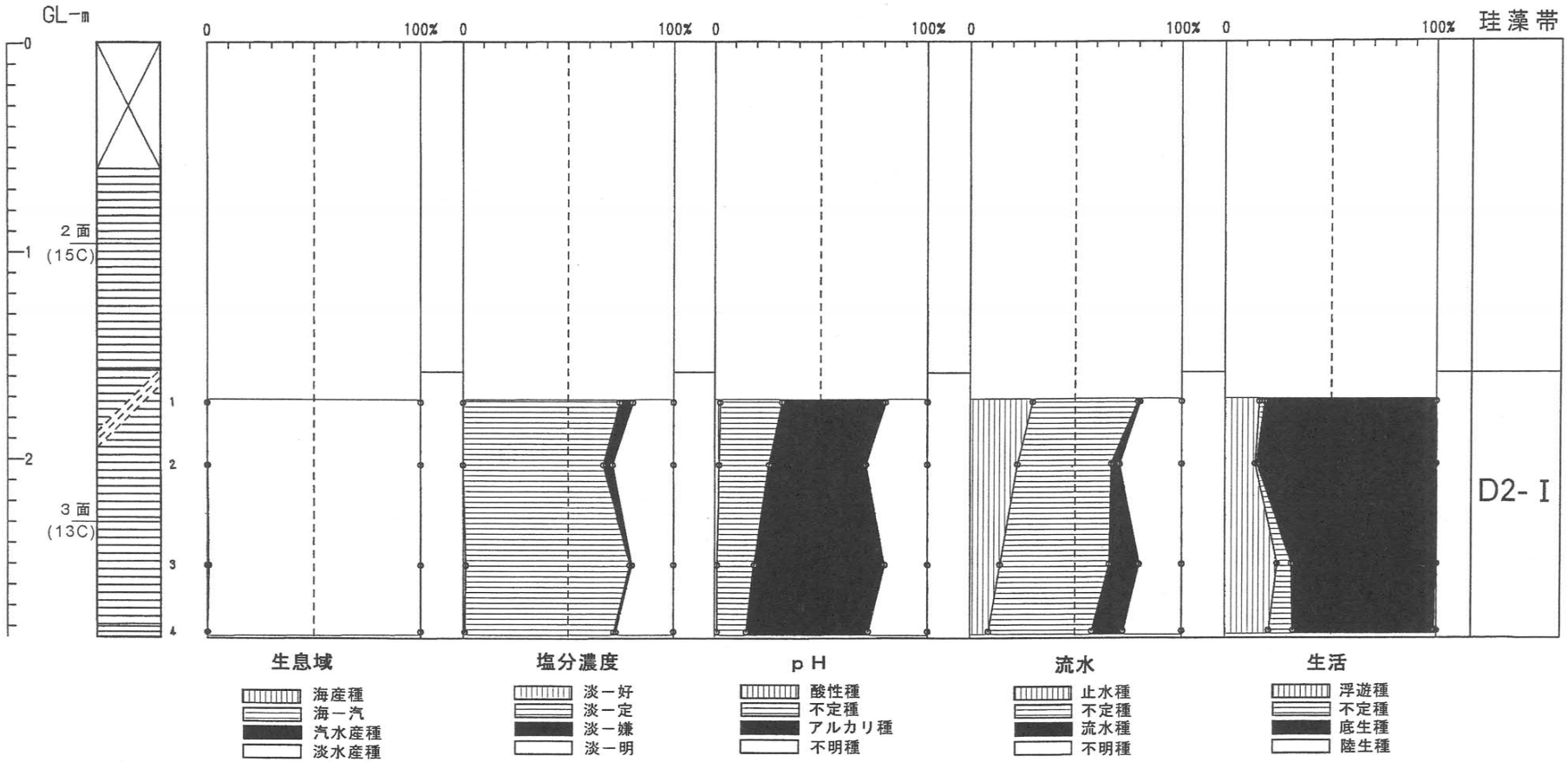
No.1地点
珪藻総合ダイアグラム

第160図　No.1地点の珪藻ダイアグラム・珪藻総合ダイアグラム

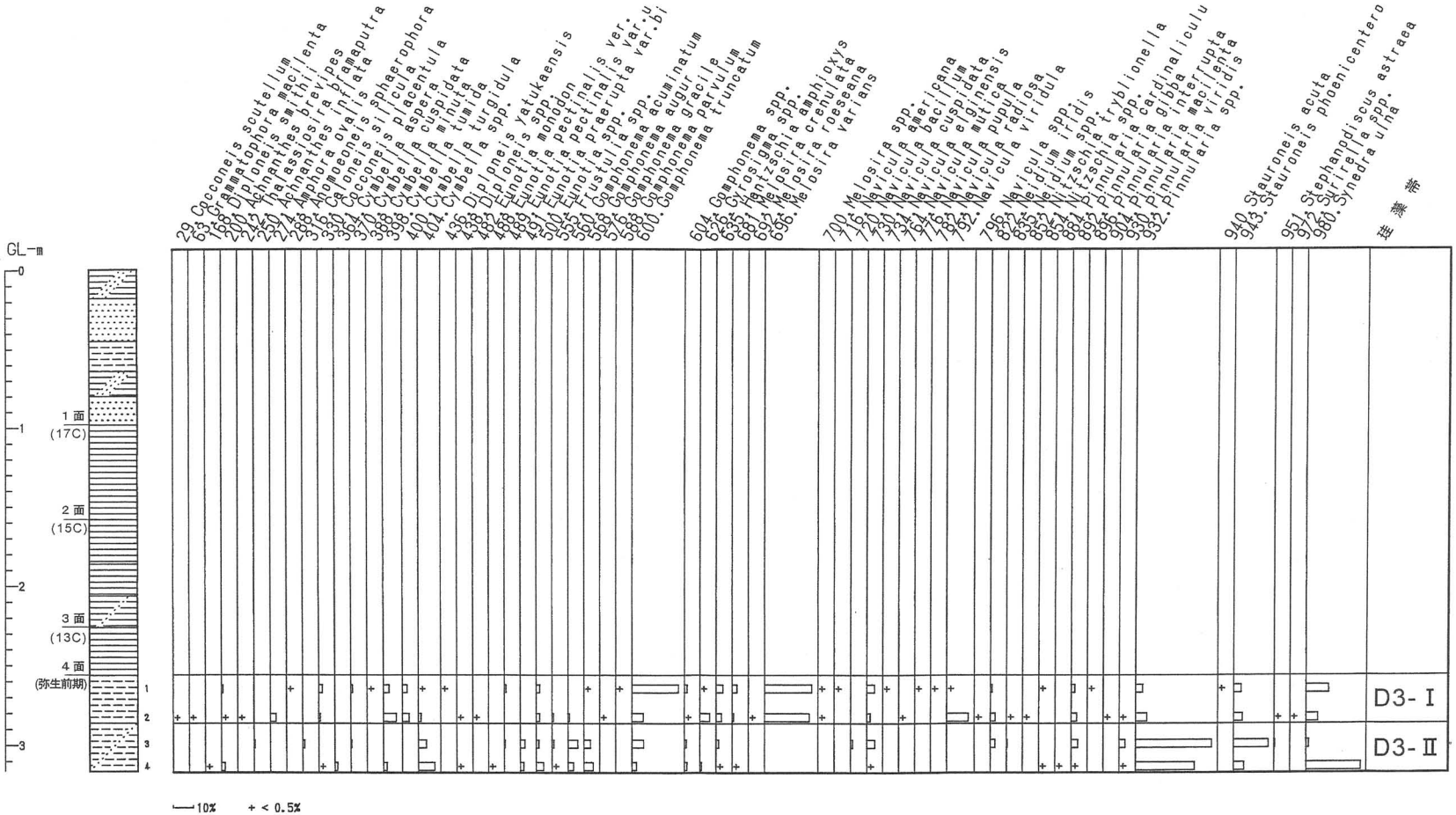


第161図　No. 2 地点の珪藻ダイアグラム

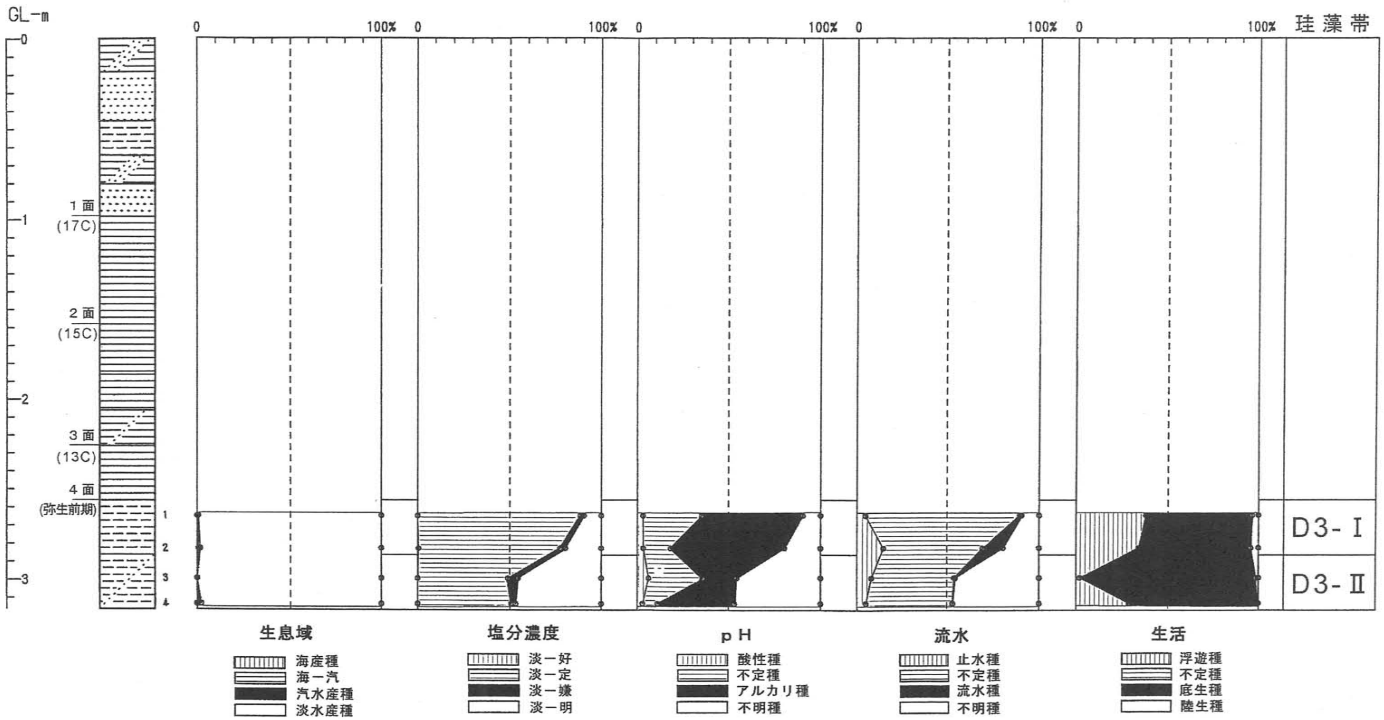
木の本遺跡Ｈ１２年度　No.２地点



第162図　No. 2 地点の珪藻総合ダイアグラム



第163図　No. 3 地点の珪藻ダイアグラム



第164図　No. 3 地点の珪藻総合ダイアグラム

属（複維管束亜属）、シイノキ属－マテバシイ属、アカガシ亜属、コナラ亜属が他の種類に比べ高い出現率を示す傾向にある。こちらの中ではアカガシ亜属の出現率が特に高い傾向にある。

３－２　珪藻分帯

珪藻分析結果をもとに地域珪藻帯を設定し、珪藻組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向かって記載した。また試料No.も下位から上位に向かって記した。

（１）No.１地点

１、Ｄ１－III帯（試料No.９）　陸生種のHantzchia asphioxysが卓越する。

２、Ｄ１－II帯（試料No.８～５）　卓越する種はないが、Amphora ovalisi、Anomoeoneis、sphaaerophora、Cymbella turgidulaのほか、Pinnularia属などが他の種類に比べやや高率で出現する。

３、Ｄ１－I帯（試料No.４）　アルカリ・浮遊種のMelosira crenulataが卓越する。

（２）No.２地点（中央の谷）

１，Ｄ２－I帯（試料No.４～１）　アルカリ種、底生種が高率になる。

（３）No.３地点（流路0183）

１、Ｄ３－II帯（試料No.４、３）　Pinnularia属で代表される底生種が卓越する。

２、１、Ｄ３－I帯（試料No.２、１）　Melosira crenulataなどのアルカリ・浮遊種をはじめとする、アルカリ種が卓越する。

３－３、既知の資料との比較

今回の調査地点近辺では、田井中遺跡（川崎地質（株）、1996、1997年）、志紀遺跡（川崎地質（株）、1995年）の報告がある。また木の本遺跡内でも大阪府教育委員会・川崎地質（株）（1998、1999）の報告がある。

木の本遺跡内での２回の報告ではマツ属（複維管束亜属）が卓越する中世後期以降の植生を示すI帯と、特に高率になる種類のない古墳時代以降の植生を示すII帯に分帯されていた。志紀遺跡、田井中遺跡の報告も、基本的には同様の木本花粉組成変遷を示していた。

一方、今回の分析結果でI帯とした時期は15～17世紀（中世後半～近世）であり、既知の花粉組成ではマツ属（複維管束亜属）の卓越する時期に相当する。またII帯とした時期は13世紀以前、III帯とした時期は弥生前期以前であるが、既知の花粉組成と一致する要素が少ない。

既知の結果は八尾市南部のいくつかの地点で認められた結果であり、広域的な植生を示している可能性が高い。一方、今回得られた花粉組成の異質な部分は、この地点での局地的な植生を反映したものと考えることができる。

３－４　古環境変遷

今回設定した花粉帯の時期毎に、花粉および珪藻分析の結果より遺跡周辺の古環境を推定する。

（1）III帯期（弥生時代前期以前）

1）堆積環境

アルカリ性珪藻が多く検出されることから、流路0183内には水の流れがあったものと推定されるが、底生種珪藻が多いことから水深はさほど深くなく、沼沢湿地状を呈していたと考えられる。また上位に向かいアルカリ性珪藻が増加する傾向にあり、水の流れは後半のD3－I帯の方が顕著であったと考えられる。

2）流路0183沿いの植生

b、a亜帯共に検出できた花粉の種類に大きな差はないものの、a亜帯では木本花粉の含有量が少なく、草本花粉、胞子の含有量が多かった。また、花粉化石の劣化も認められ、堆積物上面が土壌化を受けていたことが示唆される。

流路0183内部にはオモダカ類や、ガマ、ヨシなどの水生植物が繁茂し、流路の周囲にはヨモギ類やススキ類が繁茂していたと考えられる。また流路0183が埋没し、土壌化が進む段階でアブラナ科の植物も多く見られるようになったと考えられる。

一方、イネ科花粉のうち、イネを含むイネ科（40ミクロン以上）花粉も高率になることから流路周辺には水田の存在も示唆される。

3）周辺の森林植生

既知の周辺地域の花粉分析結果では、弥生時代以降の木本花粉組成に変化が乏しかった。このことから、弥生時代以降、八尾市南部には草地（あるいは水田）が広がっており、広い範囲から花粉がもたれされていたものと考えられていた。今回の分析結果が既知の分析結果と一致しない点が多いことから、今回の調査地点近辺に小規模な林が存在した可能性が示唆される。林の様相は、シイ類、カシ類を種とする照葉樹林であったと考えられるが、アカマツやナラ類を混成していた可能性もある。ただし、アカマツ、ナラ、類は別の場所にいわゆる二次林として存在していた可能性もある。

（2）II帯期（13世紀頃）

1）堆積環境

陸生種珪藻が卓越することから、水がほとんどなくジメジメした環境であったと考えられる。花粉組成では草本花粉、胞子の割合が高く、花粉化石の劣化も認められることから、堆積物上面が土壌化を受けていたことが示唆される。

2）周辺の植生

スギ属が高率になることを除けば、III帯と大差ない花粉組成を示す。No. 1 地点の近隣にスギが生育していた可能性が高い。調査地近辺にはヨモギ類をはじめとするキク科の草や、ススキなどが生育する草原が広がっていたと考えられる。また、イネ科（40ミクロン以上）花粉も高率になることから近くで水田耕作が行われていた可能性がある。しかし、イネ科（40ミクロン以上）

花粉の出現傾向から検出されたイネ科（40ミクロン以上）花粉の多くが上位から生物擾乱により上位から混入した可能性もある。したがって、近隣での水田の存在については、遺構の検出や、プラント・オパール分析などによる検討が必要である。

（３）I帯期（13～17世紀）

１）堆積環境

No.１地点の中部（Ｄ１－II帯）、No.２地点の谷地形、No.３地点の流路0183同様にアルカリ種珪藻、底生種珪藻が多いことから、水の流れのあるさほど深くない沼沢湿地の状況が考えられる。

No.１地点の上部（Ｄ１－I帯）では、浮遊種で湖沼沼沢湿地指標種群のMelosira cenulataが卓越し、水深が深くなったと考えられる。

２）谷地形沿いの植生

水草に由来する花粉の検出量は多くなく、谷内にはヨシやせいぜいカヤツリグサ科の草が生育していた程度であろう。谷の周囲にはヨモギ類やススキなどが繁茂していたと考えられる。

３）No.１地点近辺の植生

イネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率が極めて高く、調査地点が水田だった可能性が高い。

４）周辺の森林植生

薪炭林としてのアカマツ林がこの時期の広範な植生として推定されている。しかし、今回得られた花粉組成との違いから、III帯同様に調査地近辺での局所的な森林の存在が示唆される。林の様相はカシ類を主としてシイ類を伴う照葉樹林であったとかんがえられるが、スギやナラ類を混成していた可能性もある。ただしナラ類は別の場所にいわゆる二次林として存在していた可能性がある。

一方、前述のように本層準が水田耕作土であった可能性が高い。したがって花粉組成が周辺他地域と異なる原因として、本層準が弥生時代以前の堆積物を客土したものである可能性もわずかながら指摘できる。

４、まとめ

今回の分析の成果は以下の事柄である。

（１）花粉分析から、弥生時代前期頃から近世にかけての本地域における地域花粉帯（III～I帯）を設定した。これらのうちIII帯をb、a亜帯に細分した。

（２）珪藻分析結果から、本地域の地域珪藻帯をD1－III～I帯、Ｄ２－I帯、Ｄ３－II、I帯に分帯した。

（３）花粉分析結果、珪藻分析結果を基に、調査地周辺での古環境変遷を推定した。

特筆すべき点は以下の事柄である。

１）得られた花粉組成の多くは、既知の分析結果と異なるものであった。弥生時代以降、八尾市

南部には草地（あるいは水田）が広がっていたと考えられていたが、調査地近辺に林が残っていた可能性が指摘できた。

２）No.１地点のI帯に対応する堆積物は、水田耕作土であったと考えられ、客土された可能性もある。

（４）今回の調査により得られた花粉組成の多くは、従来の結果と異なるものであった。追証のため、近隣地点で再度花粉分析を実施する必要がある。

５，引用文献

大阪府教育委員会・川崎地質株式会社（1998）『木の本遺跡発掘調査に伴う花粉分析』Ｐ36

大阪府教育委員会・川崎地質株式会社（1999）『木の本遺跡発掘調査に伴う花粉分析』Ｐ28

川崎地質（1995）「志紀遺跡（93－西工区）における花粉・珪藻分析」『財団法人大阪府埋蔵文化財協会報告書91』Ｐ67～76所収

川崎地質株式会社（1996）「田井中遺跡発掘調査における花粉分析」『田井中遺跡発掘調査概要・Ｖ』Ｐ72～77　大阪府教育委員会

川崎地質株式会社（1997）「田井中遺跡発掘調査における花粉分析（その２）」『田井中遺跡発掘調査概要・VI』Ｐ28～42　大阪府教育委員会

中村純「イネ科花粉について、とくにイネを中心として」『第四紀研究』13　Ｐ187～197

６、備考

『木の本遺跡発掘調査に伴う花粉・珪藻分析委託報告書』（大阪府教育委員会・川崎地質株式会社　平成13年３月）をもとに編集したものである。

第２節　木の本遺跡における弥生時代前期前半の溶滓状遺物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、木の本遺跡の弥生時代前期後半の溝から出土した溶滓状遺物の由来に関する情報を得ることを目的として、溶滓状遺物の薄片を作製し、偏光顕微鏡下において、その性状や構成物の観察を行い、また、本遺物の化学組成を非破壊蛍光Ｘ線分析（多点測定）により検討した。

１．試料

調査番号00003、木の本遺跡西調査地区の0.8地区183号遺構中層より出土した溶滓状遺物（ｽﾞS72）１点である（図版１）。多孔質な外観を示し、試料重量は38.0gである。

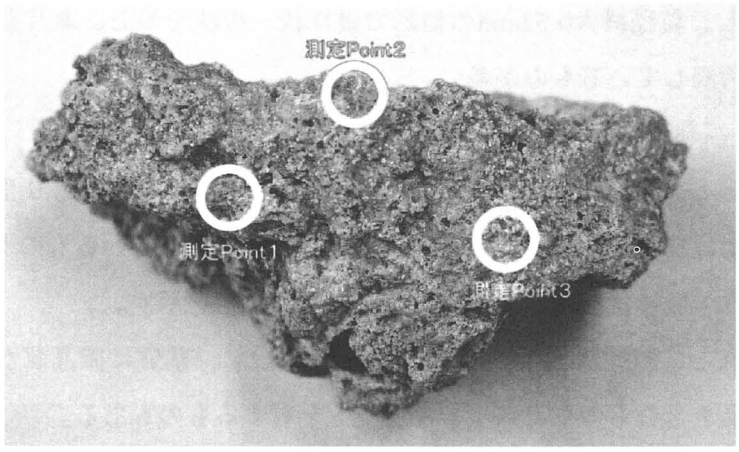
２．分析方法

（１）薄片作製

ダイヤモンドカッターにより試料を20×315mm大に切断して薄片用のチップとした。そのチップをスライドガラスに貼り付け、＃180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨した。さらに、メノウ板上で＃2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整した。スライドガラス上で薄くなった岩石薄片の上にカバーガラスを貼り付け完成とした。

（２）蛍光Ｘ線分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（SEA2120L）による非破壊分析を行った。測定点はPoint１～３の３箇所（図版１）とし、装置及び測定条件、並びに化学組成を求めるための定量条件については下表に掲げた。なお、本装置における定量可能元素はNa^{11}～U^{92}までの元素に限られ、硼素（Ｂ）、弗素（Ｆ）などの成分は本法による対象元素と成り得ないことに留意しておかなければならない。



第165図　木の本遺跡出土溶滓状遺物の分析測定point位置（point１～３）

第5表　測定条件・定量条件

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
管球ターゲット元素	Rh

	測定条件1	測定条件2	測定条件3
測定時間（秒）	300	300	300
コリメータ	φ10.0mm	φ10.0mm	φ10.0mm
励起電圧（kV）	15	15	50
管電流（μA）	自動設定	自動設定	自動設定
フィルター	なし	1次	なし
マイラー	OFF	OFF	OFF
雰囲気	真空	真空	真空

［定量条件］

分析手法	バルクＦＰ

３．結果

（１）顕微鏡観察

溶滓の性状や構成物を明らかにするために、偏光顕微鏡下において観察した。顕微鏡観察に際しては下方ポーラーおよび直交ポーラー下で撮影した写真を図版2に示した。以下に鏡下観察結果を述べる。

鉱物片

石英：少量存在し、粒径最大0.58mmの他形で粒状～破片状を呈し、中粒砂サイズのものが卓越する。円磨度は中程度を示す。結晶内部には、被熱によるマイクロクラックがきわめて弱く発達している。

カリ長石：少量存在し、粒径最大0.80mmの他形で破片状～板状を呈し、マイクロパーサイト組織が発達する。

斜長石：微量存在し、粒径最大0.52mmの他形で破片状～板状を呈し、集片双晶が発達する。変質してダスト状に汚濁しているものが多い。

岩片

花崗岩：微量存在し、粒径最大1.15mmで亜角礫状を呈する。石英、カリ長石および斜長石からなり、苦鉄質鉱物は認められない。各鉱物は破片状に細片化しているものや、片状組織の発達するものなどがあり、破砕状花崗岩または片状花崗岩の岩相を示す。

流紋岩：微量存在し、粒径最大0.63mmで亜角礫状を呈し、基質は微晶質な珪長質鉱物からなる。稀に石英の斑晶を含むものや、スフェルライトを有するものもある。

孔隙

少～中量存在し、孔径0.05～8mmで餅状～球状を呈して散在する。餅状孔には弱い配向性が認められる。

基質

中～多量存在し、溶融ガラスおよび土壌からなる。

溶融ガラス：中量存在し、無色～淡褐色を示して基質を構成する。均質塊状で、組成縞等は認められない。溶融ガラス中には、微晶質なマイクロライトが晶出している。

土壌：少量存在し、褐色の粘土、セリサイトおよび緑泥石を基質に有する。鉱物片として、石英、カリ長石、斜長石および角閃石を含む。径1～2mm程度の不規則な固まりとなって試料表面部に取り込まれている。

マイクロライト：微量存在し、粒径最大0.10mmで針状～放射針状を呈し、溶融ガラス中に点在する。

（2）蛍光X線分析

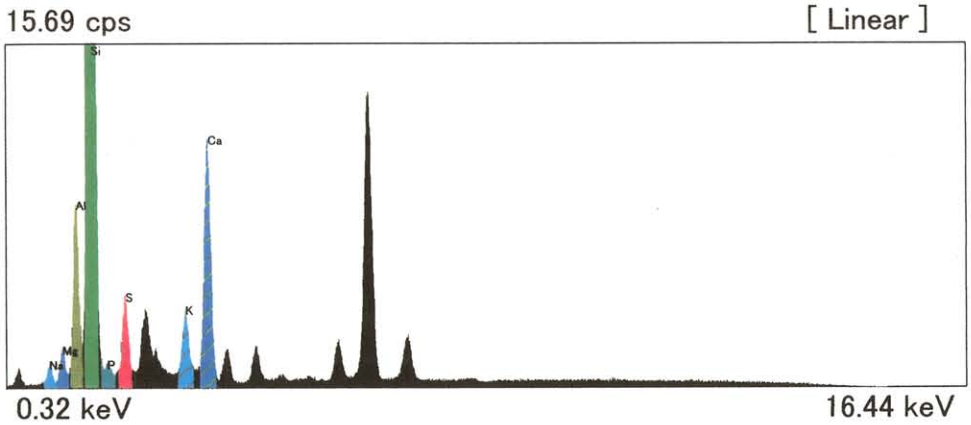
結果は、3測点における検出元素のX線定性スペクトルを図1～図3に、そのスペクトル強度から導かれる各元素の化学組成を表1に示した。なお、表1には3測点の平均化学組成も並記した。

第6表　木の本遺跡出土溶滓状遺物の測定Point1～3の化学組成及び平均値

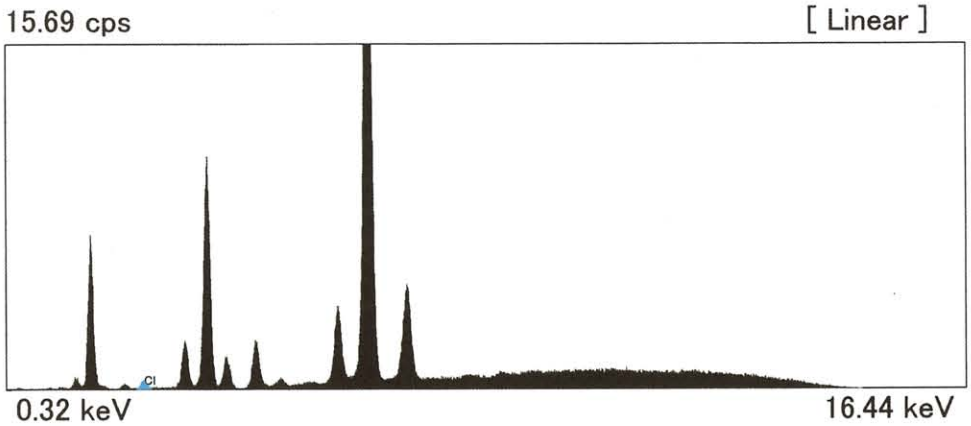
元素名	Point1 wt%	Point2 wt%	Point3 wt%	平均値 wt%
SiO_2	69.57	70.63	65.97	68.73
TiO_2	0.74	0.41	0.82	0.65
Al_2O_3	10.03	11.43	9.93	10.46
Fe_2O_3	3.70	3.43	4.06	3.73
MnO	0.48	0.44	0.54	0.49
MgO	3.02	4.25	3.77	3.68
CaO	4.29	1.90	6.12	4.10
Na_2O	3.40	3.81	1.40	2.87
K_2O	1.38	1.42	0.93	1.24
P_2O_5	0.49	0.68	1.07	0.75
Cl	0.51	0.44	0.34	0.43
Cr_2O_3	0.03	0.02	0.00	0.02
CuO	0.015	0.005	0.009	0.010
Ni_2O_3	0.006	0.002	0.001	0.003
Rb_2O	0.007	0.006	0.006	0.006
SO_3	2.27	1.05	4.93	2.75
SrO	0.046	0.043	0.059	0.049
ZnO	0.015	0.010	0.024	0.016
ZrO_2	0.021	0.017	0.019	0.019

［X線スペクトル］

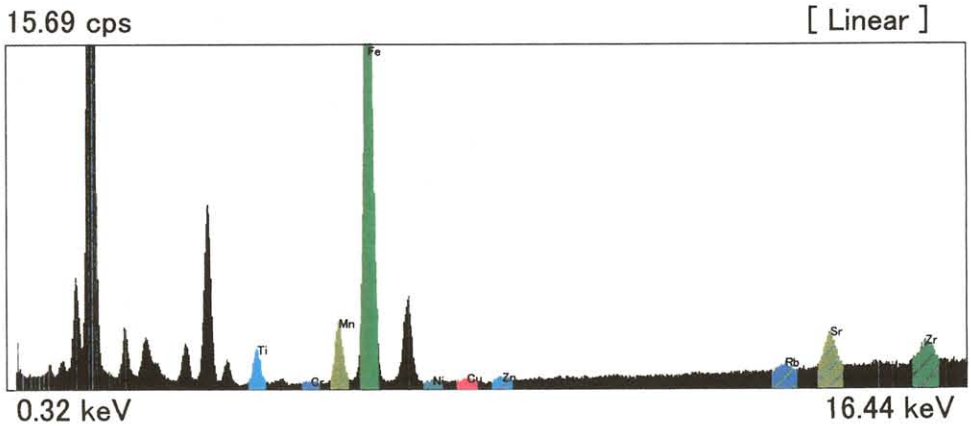
〈測定条件 1 〉



〈測定条件 2 〉



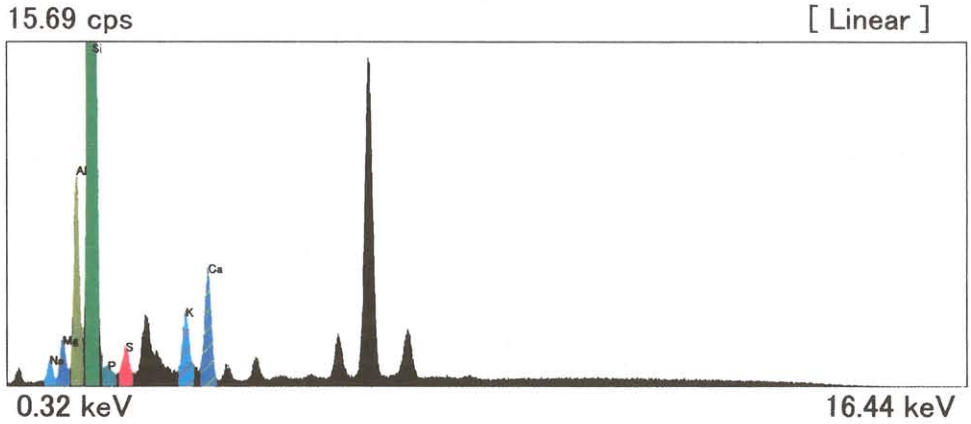
〈測定条件 3 〉



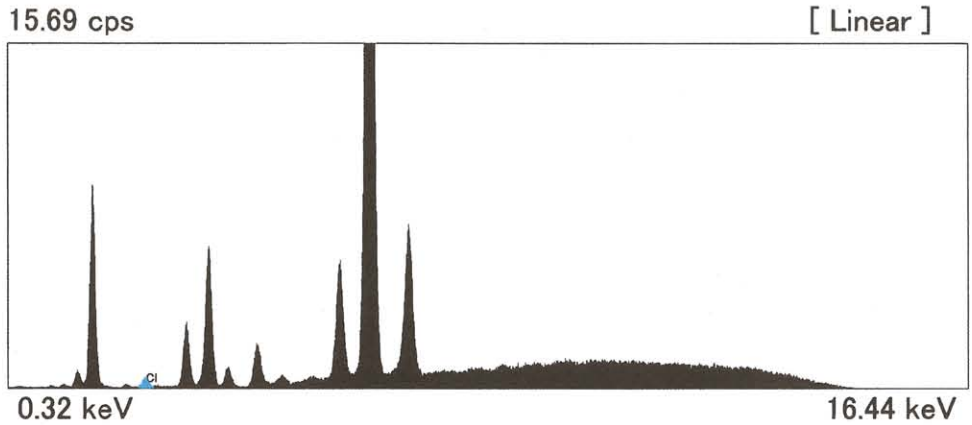
第166図　木の本遺跡出土溶滓状遺物測定Point 1のX線定性スペクトル

［X線スペクトル］

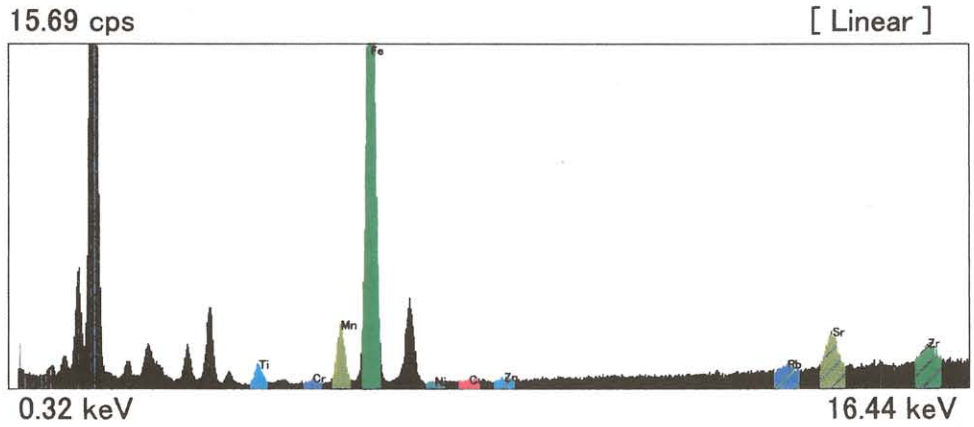
〈測定条件 1 〉



〈測定条件 2 〉



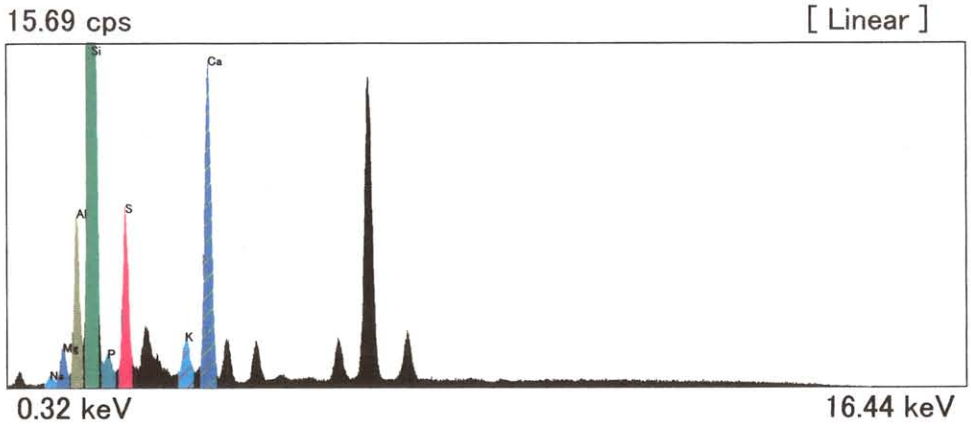
〈測定条件 3 〉



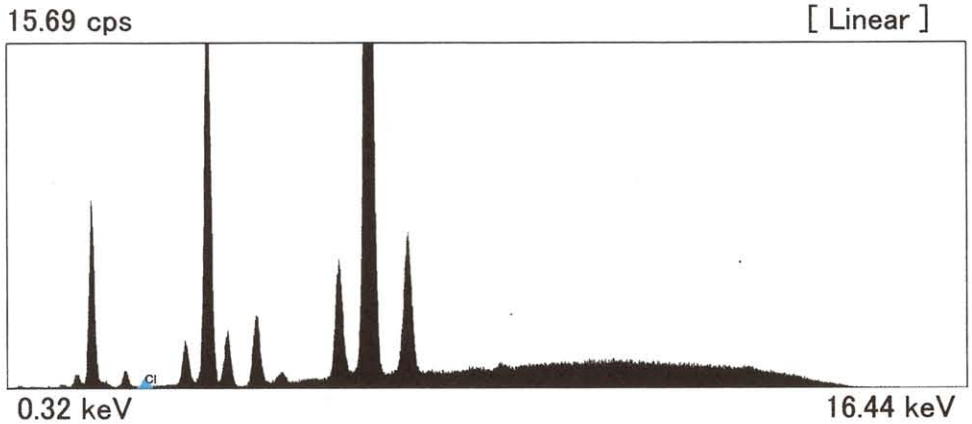
第167図　木の本遺跡出土溶滓状遺物測定Point 2 のX線定性スペクトル

［X線スペクトル］

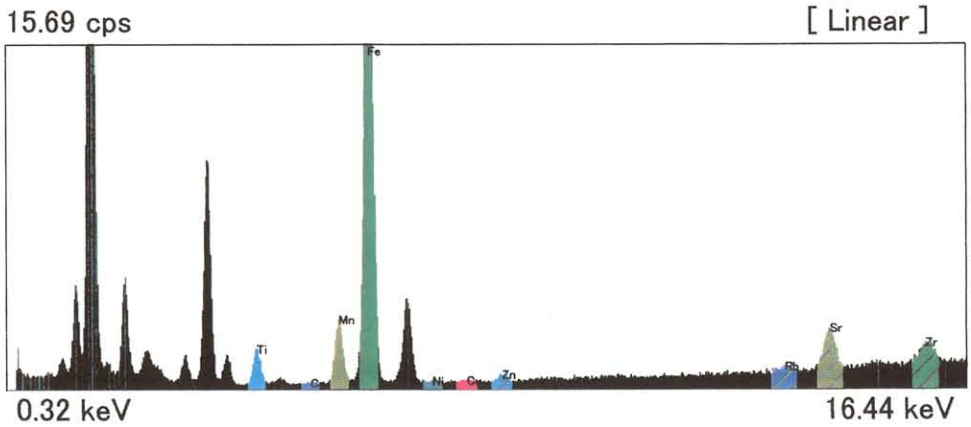
〈測定条件 1 〉



〈測定条件 2 〉



〈測定条件 3 〉



第168図　木の本遺跡出土溶滓状遺物測定Point 3のX線定性スペクトル

4．考察

今回調査を行った溶滓状遺物は、薄片観察の結果、基質の構成において溶融ガラスが多量を占めることからガラス滓であることが推定される。このガラス滓に含まれている砕屑物については、以下のような面白い特徴が認められる。上記したように薄片で観察された砕屑片は花崗岩質な組成を示し、長石類も多く含んでいた。長石類は一般に、1100℃～1200℃程度で溶融が始まるとされているが、観察試料における長石類には溶融組織が全く認められなかった。このことは、溶融ガラスはその場で生じたものではなく、溶融後に砕屑片を取り込んだということを意味している。すなわち、炉内を流れ出た後、砕屑片を取り込んだ可能性、溶融状態のガラスを人為的に取り出し、砂と混ぜ合わせたなどの可能性が考えられる。この検証には、ガラス滓が溶融した地点における土壌の砂粒組成との比較による検討が重要と考えられる。次に蛍光X線分析結果からみた成分組成について述べる。

蛍光X線分析による非破壊分析ではX線の照射される範囲がϕ10.0mmであり、本試料のように物が大きい場合には1測点の分析では分析試料中の元素に偏在がある場合問題となる。そこで、今回は3測点の分析を行い、元素の偏在をまずは確認した。その結果、多少の数値ばらつきはあるものの、3測点の組成はほぼ同一組成とみなすことができ、3測点の平均値で本試料の化学組成を代表することができるものと判断した。

ガラス滓の調査は、藤田(1994)によれば百間川原尾島遺跡、百間川今谷遺跡、鹿田遺跡など岡山県での報告例が多く、ガラス滓の化学組成も紹介されている。そこで、今回のガラス滓の化学組成と鹿田遺跡、百間川遺跡の既存化学組成について主要成分の比較を行った（表2）。

その結果では、ほとんどの元素で近似した値が認められるものの、Na_2O（酸化ナトリウム）が今回のガラス滓様物質では低く、化学組成が近似しているとは言えない。一方、百間川原尾島三の坪土坑262（弥生時代前期後半）のガラス滓の分析例では（藤田、1994）、Na_2O（酸化ナトリウム）が少なく、微量元素が検出される点で今回のガラス滓様物質と似ているが、SiO_2（二酸化珪素）が著しく異なり（$SiO_2$47.86wt%）、これもまた化学組成は異なる。

以上のことから、ガラス滓の化学組成は必ずしも近似するものではなく、その原料によってかなりのばらつきがあるものと考えられる。また、ガラスの表面は風化によってNa_2O（酸化ナトリウム）、K_2O（酸化カリウム）が著しく減少するとの報告があり（肥塚、1995）、ガラス滓においても同様な現象があるものと思われる。したがって、ガラス滓を化学組成から評価するには外観観察はもちろん、表面風化についても綿密な調査が必要で

第7表　木の本遺跡出土溶滓の既存化学組成との比較表

元素名	本試料の平均値 wt%	No. 1 wt%	No. 2 wt%
SiO_2	68.7	60.7	62.6
Al_2O_3	10.5	9.7	9.5
Fe_2O_3	3.7	5.1	4.2
MgO	3.7	5.7	4.9
CaO	4.1	3.6	2.6
Na_2O	2.9	9.4	11.5
K_2O	1.2	2.0	1.3

注）No. 1、No. 2の値は、藤田(1994)の鹿田遺跡、百間川遺跡出土ガラス滓の主成分比較データを記載したものである（鹿田遺跡がNo. 1、百間川遺跡がNo. 2）。

ある。

なお、今回のガラス滓が弥生時代のガラス滓だとすると、肥塚(1995）による弥生時代に出現するガラスの鉛珪酸塩ガラス（PbO-SiO_2系）とは全く異なり、当時最も流通していたとされるカリガラスSiO_2ともK_2O（酸化カリウム）組成が異なる。但し、表面風化によってK_2O（酸化カリウム）が著しく減少したならば、カリガラス（K_2O-SiO_2系）滓の可能性もあるが、今回の結果だけで何とも言えない。今後は、表面風化を考慮した測定解析による分析事例を増やすことが必要であろう。

引用文献

藤田　等(1994)第５節　原料ガラスとガラス滓．弥生時代ガラスの研究，p.215-225.

肥塚隆保(1995)古代ガラスの材質．古代に挑戦する自然科学，p.94-108.

第３節　木の本遺跡出土土器内付着の炭化種実

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告は、八尾市木の本遺跡より出土した弥生時代前期（Ⅰ様式中段階）の土器内に付着している炭化種実の同定を行う。

１．試料

試料は、西区 P9 4面 183 中層より出土した炭化米付着土器（1906 ズ-866）１点の内底部に付着した炭化物とされる黒色物質と、土器から検出された炭化種実とされる黒色物質１点である。土器は、底面と胴下部が検出されており、口縁部は欠損する。

２．方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）と比較し、種類の同定と写真撮影を行う。分析後の土器は、乾燥剤と共に密閉容器に入れて保存する。

３．結果

土器内面の胴下部から底部にかけて、厚さ2～3mm程度の黒色物質が一様に付着している。黒色物質は遺存が極めて悪く、殆どが形を留めていない状態であるが、一部に長楕円形の粒状痕跡が認められる。これらの痕跡には、イネ（Oryza sativa L.；イネ科イネ属）の胚乳の表面模様が確認される。イネの胚乳は長楕円形でやや偏平で、長さ4-6mm、幅2.5mm、厚さ1.5mm程度。胚乳表面はやや平滑で、両面には各2～3本の縦溝がある。遺存が良好であれば、一端に胚が脱落した凹部がある。黒色物質から脱落した炭化種実とされる黒色物質１点も、遺存が悪く表面模様を欠損するが、イネの胚乳の形状に類似する。

４．考察

木の本遺跡より出土した弥生時代前期（Ⅰ様式中段階）の土器内面に付着した黒色物質の鏡下観察の結果、栽培植物のイネが確認された。検出されたイネは、黒色を呈することや、発泡して脆くなっているなどの形態的特徴から、イネを含む食材の有機物が何らかの火熱を受け炭化したもの(いわゆるコゲ)で、器壁に吸着したと考えられる。イネの胚乳は大部分が炭水化物であるので、物理的、化学的にも弱く、微生物等により容易に分解されるので、炭化したことにより保存

されたものと判断される。

柳瀬（1988）や小林（1995）は、上東遺跡（岡山県倉敷市）の井戸出土の炊飯に使われたことが明らかな甕（弥生時代後期末）をはじめ、遺跡出土土器の炭化物痕などの使用痕跡分析を行っている。今回の土器内面の胴下部にバンド状に付着していた炭化物も使用痕と判断されるものであり、小林（1995）の調理最終段階までに水分が少なくなる煮込み調理や炊飯が行われた場合に生じる「水面下のコゲ」に類似するものであった。これらの点については、今回の土器に関する情報を含めて、小林（1999）が検討している調理法推定のための使用痕跡分析などを応用し、考古学的に検討する必要がある。

引用文献

石川茂雄（1994）原色日本植物種子写真図鑑，328p.，石川茂雄図鑑刊行委員会.

小林正史（1995）煮炊き用土器の作り分けと使い分け―「道具としての土器」の分析―.「食の復元　―遺跡・遺物から何を読みとるか」，櫛原功一編，帝京大学山梨文化財研究所　研究集会報告書２，　p.1-59，岩田書院.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000）日本植物種子図鑑，642p.，東北大学出版会.

柳瀬　昭彦（1988）米の調理法と食べ方.「弥生時代の研究２　生業」，金関　恕・佐原　真編，p.8　4-95，雄山閣.